

北区

道合遺跡 赤羽上ノ台遺跡

—赤羽台団地(第Ⅳ期)建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

第1分冊



2024・3

東京都埋蔵文化財センター

北区

道合遺跡 赤羽上ノ台遺跡

—赤羽台団地(第Ⅳ期)建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

第1分冊



2024・3

東京都埋蔵文化財センター

道台遺跡・赤羽上ノ台遺跡の調査

道台遺跡・赤羽上ノ台遺跡は、東京都の北東部の北区赤羽台に位置します。令和元年度(平成31年度)から令和3年度にかけて、独立行政法人都市再生機構による赤羽台団地(第IV期)建替事業に伴う埋蔵文化財調査を実施しました。

1 遺跡の環境

道台遺跡・赤羽上ノ台遺跡は、武蔵野台地北東端の赤羽台と通称される台地上に隣り合って立地する遺跡です。遺跡の東側には東京低地が広がり、南北は谷に刻まれます。北側の谷を挟んで北東側には赤羽台遺跡が、西側には大六天遺跡が、そしてその北西には桐ヶ丘遺跡が広がっているのをはじめとして、赤羽台を含む荒川の右岸の台地上には数多くの遺跡が分布し、古くから人間活動の舞台となっていたことがわかっています。

本遺跡を含む赤羽台地域には、明治から第二次世界大戦中にかけて旧日本陸軍の施設が集中し、「軍都赤羽」と呼ばれていました。なかでも赤羽台団地一帯には明治年間に倉庫が建設されたのを端緒として、大正年間に旧日本陸軍被服本廠の本部・工場の敷地となりました。これまでの調査でも、被服本廠の倉庫や建物などの施設や、そこで生産されていた製品、使われていた日用品などが多く発見されています。



写真 道台遺跡 弥生時代後期の竪穴住居跡の調査 レンガ基礎は近代の被服本廠の羊毛倉庫

2 遺構と遺物

今回の調査では、道合遺跡（北区遺跡 No.49）の南東側と赤羽上ノ台遺跡（同 No.9）の東側が対象となりました。調査の結果、2つの遺跡から、旧石器時代の遺物と、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代・中世・近世の各時代の遺構と遺物が発見されました。

旧石器時代

ナイフ形石器や尖頭器、削器、剥片が散点的に出土しました。調査地で実施されたボーリング調査では、過去20万年以上にわたる赤羽台地域の地形の変遷が明らかとされた他、24万年前に南九州で噴火した阿多烏浜テフラ（火山砕屑物）が武蔵野台地東端では初めて検出されています。

縄文時代

赤羽上ノ台遺跡では、早期前葉の平坂式の土器や同時期の炉穴が発見されました。これらは崖線付近に分布しており、赤羽台に人々が居住を開始した頃の様相が明らかとなりました。道合・赤羽上ノ台遺跡ではこの他に、早期後葉を中心とした多数の炉穴や前期後葉の住居跡、同時期の土器が発見されました。

弥生時代

赤羽上ノ台遺跡で中期後半の住居跡が1軒検出されました。2つの遺跡でこれまでに見つかっているこの時期の住居跡はごくわずかであるなか、当時の様相を知るうえで貴重な発見となりました。また、後期後葉の住居跡が、道合遺跡では17軒、赤羽上ノ台遺跡では2軒が検出され、これによって



写真 道合遺跡南端より東京低地を遠望

両遺跡に広がる集落の南端と東端の様相が明らかとなりました。これまでに発見された竪穴住居跡は200軒を数え、その北東側に分布が想定される墓域とともに、遺跡地帯には大きな集落が形成されたことがわかります。

住居跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定や、土器内に付着した炭化物の残存脂質分析によって、住居の構築された年代や、当時の人々の食物を知る新たな手掛かりが得られました。「ウィグルマッチング」という手法で放射性炭素年代測定値の誤差範囲を絞り込むことで、今回検出された住居跡のうち3軒は西暦140～220年頃に構築された可能性がきわめて高いことが判明しました。

土器の内面に付着したまま見つかった炭化物と、土器内面の胎土に含まれる脂肪酸の内容を調べることで、どのような食物が調理されたのかがわかります。分析の結果、C₃植物（米なども含まれる）を主体として、陸棲、海棲動物なども煮炊きされたことが判明しました。

古墳時代

前期～中期に比定される土坑1基が検出されました。本遺跡内ではこの時期の居住の確実な証拠は乏しかったなか、貴重な例となりました。また、後期の住居跡は道合遺跡で15軒、赤羽上ノ台遺跡で9軒が発見されており、台地南東側の縁辺に多く分布していることが明らかとなりました。

奈良・平安時代

道合遺跡では21軒、赤羽上ノ台遺跡では6軒の住居跡が検出されました。住居跡は奈良時代に先立つ6世紀前半から、9世紀中葉～後葉までのものがあり、遺跡地における集落の変遷が明らかとなりました。また、東金子窯（現在の埼玉県入間郡）、南比企窯（埼玉県比企郡）や湖西地域（静岡県浜名湖西岸）の窯で焼かれた須恵器が出土し、こうした地域との関わりを知る手掛かりとなったほか、律令時代の役人が身に着けていた石帯と呼ばれるベルトの飾り（巡方）など、貴重な遺物も見られます。

中世

道合遺跡では、墓塚の一種である地下式横穴が4基、検出されました。深さ4mに達する竪坑を掘り、そこから横に掘り進めて、2m四方の地下室を設けたものです。地下式横穴は台地北東側の赤羽台遺跡で発見されていましたが、道合・赤羽上ノ台遺跡では初めての例です。

近世

畑地に伴う溝が調査範囲全域で検出された他、畝跡も発見されました。これまでの調査でも同様の遺構は広範囲にわたって検出されており、近世の遺跡地帯では畑作が盛んにおこなわれていたことがわかります。溝の堆積物に含まれる植物珪酸体化石の分析により、近世にはネザサ節（アズマネザサなど）やササ類が生育する開けた環境で、そこではイネが栽培されていたことも明らかとなりました。植物珪酸体は植物の体内に含まれるガラス質が固化したもので、プラント・オパールとも呼ばれます。その形が植物の種類ごとに異なることから、地中に遺された植物珪酸体化石を調べることで、過去にどのような植物が生育していたのかがわかります。

近代～現代

明治24年（1891）の倉庫建設を端緒とする旧日本陸軍被服本廠に関わる遺構や、ここで生産された軍用品、使用された日用品類などが数多く発見されました。皮革製品のの一部や、防毒マスクの部品、兵士が身に着ける認識票の未製品など、被服本廠内での軍用品生産の様子を物語るものもあります。

本廠敷地の南側にあたる道合遺跡の今回の調査範囲では、廠内に引き込まれた鉄道線路の跡も良好な状態で遺存していました。ここで倉庫内の品物が積み込まれ、遠く戦地に向けて運ばれていったことでしょう。

さらに、被服廠の倉庫建設に先立つ明治7年（1874）9月に明治天皇の臨席のもと赤羽で行われた、旧陸軍の天覧演習に伴う塹壕跡が検出されたのも大きな成果です。道合遺跡の調査範囲で発見されたこの塹壕跡は調査当初、近代の所産であることは明らかなものの、倉庫建物の下から検出された溝状の掘り込みとして、その性格は明らかではありませんでした。広範囲に及ぶ掘り込みの分布や形態と、防衛省防衛研究所やアジア歴史資料センター、宮内庁書陵部に収蔵されている近代史料とを照らし合わせることで、この掘り込みが陸軍の演習のために構築された塹壕で、さらにその演習は明治7年9月に赤羽台の一带で実施された天覧演習であることが突き止められました。



写真 道合遺跡 弥生時代後期の住居跡から土製勾玉が出土

Survey on the Michiai and Akabane Uenodai Sites

In connection with the Akabanedai housing complex rebuilding project, we excavated the Michiai site (1- and 2-chome, Akabanedai, Kita Ward No. 49), 30,912m², and the Akabane Uenodai site (Kita Ward No. 9), 6,435m², from 2019 to 2021. This survey was the 9th for the Michiai site and the 6th for the Akabane Uenodai site. The two sites are next to each other on the Akabanedai Plateau at the northeastern end of the Musashino Plateau.

This investigation revealed the following remains and relics:

The finds at the Michiai site were: [1] stone tools from the late Paleolithic period; [2] 16 furnace pits from the initial Jomon period; [3] three pit dwelling ruins from the initial to early Jomon period; [4] earthenware from the initial, early, middle, and late Jomon periods; [5] stone tools from the Jomon period; [6] 17 pit dwelling ruins, two pile building ruins, and three earthen pits, with earthenware, clay objects, and stone products from the late Yayoi period; [7] 15 pit dwelling ruins with earthenware, clay objects, and stone products from the late Tumulus period; [8] 21 pit dwelling ruins and nine earthen pits, with earthenware, clay objects, and stone products from the Nara and the Heian periods; [9] basement-type tombs with porcelain, pottery, and earthenware from the Middle Ages; and [10] ditch ruins, ridge ruins, porcelain, with pottery, earthenware, stone products, and metal products from the Early Modern period.

The finds at the Akabane Uenodai site were: [1] stone tools from the late Paleolithic period; [2] 38 furnace pits and 11 earthen pits from the initial Jomon period; [3] earthenware from the initial, early, and late Jomon periods; [4] clay objects from the Jomon period; [5] one pit dwelling ruin and earthenware from the middle Yayoi period; [6] four pit dwelling ruins with earthenware, clay objects, and stone products from the late Yayoi period; [7] one earthen pit with earthenware from the early to the middle Tumulus period; [8] 15 pit dwelling ruins with earthenware, clay objects, and stone products from the late Tumulus period to the Heian period; and [9] ditch ruins from the Early Modern period.

At the Michiai site, we discovered the ruins of trenches made during military exercises conducted by the Japanese Army in 1874. Emperor Meiji is known to have inspected these exercises. After that, Akabanedai became the site for the headquarters of the Japanese Army's clothing factory. At these two sites, we then discovered the ruins of related brick buildings and railroad tracks, with numerous military supplies produced in the clothing factory, along with used daily necessities.

We also conducted the following analyses: [1] radiocarbon dating of carbides from the late Yayoi period; [2] a lipid residue analysis of earthenware from the late Yayoi period; and [3] a plant opal analysis of ditch deposits from the Early Modern period. Each of these analyses revealed new findings.

序言

北区の北部に所在する道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡は、広大な武蔵野台地の北東端、赤羽台に立地します。北側と東側の崖下には東京低地が一望されます。

今回の調査は、独立行政法人都市再生機構による赤羽台団地建替事業に伴う事前調査として実施されました。当該団地建替に先立つ調査は今回で最後となり、道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡のほぼ全域に調査が及んだこととなります。

発掘調査の結果、旧石器時代の遺物や、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世の遺構や遺物が発見されました。また、近代の赤羽台一帯に存在した旧陸軍被服本廠の遺構・遺物や、それに先立つ近代初期の陸軍による天覧演習に関わる遺構が調査されたことも大きな成果です。

これらの成果をまとめた本報告書が、学術研究の一助となり、地域史を解明する資料となることを期待します。また、北区民をはじめ多くの方々に活用され、東京都民の皆様の埋蔵文化財に対するご関心とご理解を深めて頂くことができれば幸いです。

本報告書の刊行にあたり、ご協力とご指導を頂きました独立行政法人都市再生機構、東京都教育庁地域教育支援部管理課、北区教育委員会事務局生涯学習推進課に厚く御礼を申し上げるとともに、お力添えとご協力を賜りました地域の皆様、研究者の皆様方に心より感謝を致します。

令和6年3月

公益財団法人 東京都教育支援機構

理事長 坂東 眞理子

例 言

- 1 本書は、赤羽台団地（第Ⅳ期）建替事業に伴う道合遺跡（北区 No.49 遺跡）・赤羽上ノ台遺跡（北区 No.9 遺跡）の発掘調査報告（東京都埋蔵文化財センター調査報告第 381 集）である。
- 2 発掘調査事業は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団（令和 5 年 3 月 31 日まで）公益財団法人東京学校支援機構（令和 5 年 6 月 30 日まで）公益財団法人東京教育支援機構 東京都埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 試掘調査は、平成 13 年 2 月から 7 月にかけて、北区教育委員会・都市基盤整備公団（当時。現：独立行政法人都市再生機構）の立ち会いのもと、国際航業株式会社がおこなった。
- 4 道合遺跡は、北区教育委員会によって平成 6 年に第 1 次調査が、平成 18～20 年に第 2 次調査、平成 23～24 年に第 3 次調査、平成 24～25 年に第 4 次調査、平成 26～27 年に第 5 次調査、平成 28 年 2 月～8 月に第 6 次調査、同年 7 月～12 月に第 7 次調査、平成 29～30 年に第 8 次調査が、いずれも東京都埋蔵文化財センターによっておこなわれ、今回の調査が第 9 次となる。赤羽上ノ台遺跡は、北区教育委員会によって平成元年に第 1 次調査が、東京都埋蔵文化財センターによって平成 24 年～25 年に第 2 次調査、平成 28 年に第 4 次調査が、武蔵文化財研究所によって平成 27 年に第 3 次調査、令和 2 年に第 5 次調査がおこなわれ、今回の調査が第 6 次となる。
- 5 遺跡所在地：東京都北区赤羽台 1・2 丁目
- 6 調査面積：37,347㎡
- 7 調査および一次整理期間：令和元年 5 月 1 日～令和 3 年 10 月 8 日
二次整理・報告書作成期間：令和 3 年 10 月 11 日～令和 5 年 10 月 31 日
- 8 本事業における事業者との事業調整等は、東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。
埋蔵文化財担当統括課長代理 伊藤 敏行（～令和 2 年 3 月 31 日）
鈴木 徳子（令和 2 年 4 月 1 日～）
埋蔵文化財担当 相原正人（～令和元年 9 月 30 日）
尾田識好（令和元年 10 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日）
野口 舞（令和 2 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日、令和 4 年 4 月 1 日～
令和 5 年 3 月 31 日）
山田和史（令和 3 年 4 月 1 日～5 月 31 日）
石井香代子（令和 3 年 6 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日）
大谷 薫（令和 5 年 4 月 1 日～）
- 9 調査担当者
東京都埋蔵文化財センター赤羽台その 6 分室
調査課課長 福岡 宗人 調査調整担当（～令和 3 年 3 月）
大西 雅也 事業推進担当（令和 3 年 4 月～）
副主任調査研究員（令和 4 年 4 月より主任調査研究員）
鈴木 伸哉（令和元年 5 月～）

調査研究主任	丹野 雅人 (令和2年11月～令和5年9月)
調査研究員	沖元 道 (令和元年5月～8月)
	島崎 瑛美 (令和元年9月～令和2年11月)
	齋藤 葵 (令和2年4月～令和3年3月)
	両角 まり (令和3年4月～令和4年6月)

調査協力

株式会社浅沼組
 テイクイトレード株式会社
 生田建設株式会社

- 10 本報告書の執筆は、IV-I 道合遺跡 遺構と遺物のうちの5 奈良・平安時代1) 遺構の345・346・347号住居跡と、6 中世2) 遺物と7 近世2) 遺物(石製品以外)を両角が、IV-I 道合遺跡 遺構と遺物のうちの2 縄文時代と、IV-II 赤羽上ノ台遺跡 遺構と遺物、VI 調査の成果と課題のうちの1 縄文時代、第3分冊VI 付編―旧日本陸軍被服本廠および近代遺構に関して―を丹野が、それ以外を鈴木が担当した。旧石器時代の遺物に関しては塚田清啓(東京都埋蔵文化財センター)、弥生時代の遺物に関しては及川良彦(同)、飯塚武司(同)、近世・近代の遺物に関しては長佐古真也(同)の協力を得た。また、地質層序やテフラに関して、遠藤邦彦氏(日本大学名誉教授)に現地指導を依頼し、ご指導を賜った。近世の溝の堆積物に関して、江口誠一氏(日本大学)に現地指導を依頼し、堆積物中の植物珪酸体から推定される古植生についてのご指導を賜り、同氏と鬼崎 華氏(東京大学大学院新領域創成科学研究科)・渡邊稜也氏(日本大学)・小野綾子氏(元・日本大学)に玉稿を賜った。古墳時代・奈良～平安時代の土器に関して、鶴間正昭氏(元・東京都埋蔵文化財センター)に現地指導を依頼し、年代観・産地についてのご指導を賜った。道合遺跡の弥生土器の残存脂質分析に関して、宮田佳樹氏・宮内信雄氏(東京大学総合研究博物館)・堀内晶子氏(国際基督教大学)に分析を依頼し、玉稿を賜った。
- 11 本報告書の編集は、鈴木・丹野がおこなった。
- 12 出土遺物・堆積物の分析について、下記の機関にご協力をお願いした。
- (1) 出土炭化材の放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ
 - (2) 土器付着炭化物の同位体分析・脂質分析：東京大学総合研究博物館
- 13 本調査の概要については、令和元年度～4年度「東京都埋蔵文化財センター年報」において報告されているが、本書をもって正式報告とする。
- 14 出土遺物および発掘調査・整理に関わる図面・写真等の記録類は、北区教育委員会によって保管されている。
- なお、近代の鉄扉の補強には日本特殊塗料株式会社 FRP 手積用ポリエステル樹脂(不飽和ポリエステル・スチレンモノマー)を用いた。
- 近代の鉄兜等の金属製遺物の補強には株式会社アサヒペン 鉄部用クリヤコートを用いた。
- 皮革製品の補強には株式会社テムボ化学 保革油を用いた。
- 15 本文用例等
- ・本書掲載・参照の地形図等は以下のとおりである。

国土地理院 1/25,000「赤羽」平成13年

『明治前期測量2万分1フランス式彩色地図』(財)日本地図センター

『東京都市地図2 東京北部』柏書房

大日本帝国参謀本部測量局 明治13年「下谷区・駅敷・川口町・板橋駅合成図」

大日本帝国陸地測量部 明治42年「王子」 大正6年「赤羽」 昭和12年「赤羽」

日本地形社 昭和20年「赤羽」

地理調査所 昭和32年「赤羽」

市町村全国発行社 昭和2年「東京府北豊島郡岩淵町全図」

・土色および土器類の表記には、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版 標準土色帳』を用い、土色・マンセル表記法で表した。

・出土遺物の注記記号(遺跡略号)は、道合遺跡は「MC9」とし、赤羽上ノ台遺跡は「AU4」とした。

- 16 発掘調査および整理において、下記の方々と機関にご指導・ご協力を賜った。記して深謝致します(順不同・敬称略)。

井畝良太・岩浪雛子・牛山英昭・遠藤邦彦・岡本直久・小川英一・梶木理央・河合君近・川田壽文・工藤晴佳・黒尾和久・高坂勇祐・小山侑里子・近藤玲介・酒石凡平・櫻井健二郎・櫻井準也・實川順一・渋谷葉子・須貝俊彦・杉中佑輔・杉山宗悦・鈴木正章・田中淳・千葉まい子・鶴間正昭・中島広顕・中村新之助・中山なな・野口真利江・長谷川涉・水口由紀子・宮入陽介・山口隆太郎・独立行政法人都市再生機構東日本賃貸住宅本部・東京都教育庁地域教育支援部管理課・赤羽台団地自治会・北区教育委員会事務局生涯学習推進課・北区飛鳥山博物館・宮内庁書陵部・防衛研究所戦史研究センター・石塚硝子・大堀相馬焼協同組合・烏津創業記念資料館・公益財団法人日本陶磁器意匠センター

17 挿図凡例

・各挿図中で用いたおもなスクリーントーンは次のとおりで、これら以外は各挿図に凡例を示し

遺構	 炉跡	 炉跡火床面	 カマド・袖	 焼土範囲
	 炭化材	 白色粘土範囲	 ローム	
遺物	 赤彩・漆	 黒色	 円形朱紋	 石器磨面
	 繊維			








た。

・各挿図中で用いたおもなドットは次のとおりである。





- 土器 ○別時代遺物 ▲石器・礫 ▲石製品 ◆金属製品 □炭化物 ◇土製品

二次利用土器片 B (土製円板) 分類

平面形態

- A  円形
- B  楕円形
- C  木葉形
- D  半円形
半楕円形
- E  正方形
- F  長方形
- G  多角形
- H 不定形・不明

研磨状態 (側縁部)

- 1  敲打・剥離のみ
- 2  a 以下
部分剥離 1/2
b 以上
- 3  全面研磨
(分割単位・稜残存)
- 4  全面研磨
(全周 1 単位)

研磨度 (側縁部)









- I 若干 剥離痕残存
- II 表面平滑 (稜残存)
- III 表面平滑

遺存度

- A 完形
- B 残存 1/2 以上
- C 残存 1/2 以下

二次利用土器片 A (土鍾) 分類



平面形態

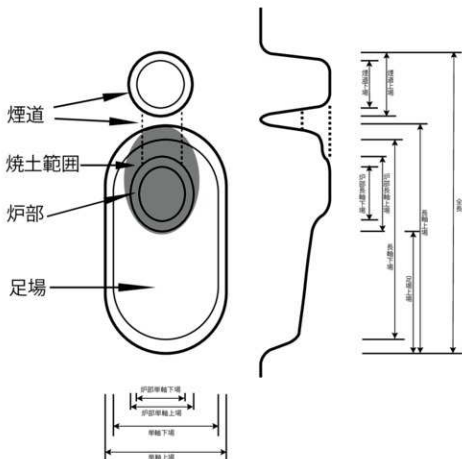
- A  円形
- B  楕円形
- B₁  B₂ 
- C  正方形
- D  長方形
- D₁  D₂ 

研磨 (側縁部)

- I 無
- II 有 全面部分 II

抉り

- a 二ヶ所 
- b 四ヶ所 
- c その他

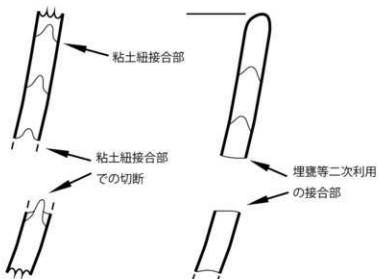


規模

全長・長軸上場 × 単軸上場 × 深さ / 長軸下場・足場下場 × 単軸下場

炉規模

長軸上場 × 単軸上場 × 深さ / 長軸下場・単軸下場



目次

(第1分冊)

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の調査

序言

例言・凡例

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯	1
1) 道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の発見	1
2) 今回の調査に至る経緯	2
2 調査の方法と経過	4
1) 調査の方法	4
2) 調査の経過	4

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	10
2 歴史的環境	11
1) 周辺の遺跡	11
2) 赤羽台の歴史の変遷	22

III 層序

40

IV 遺構と遺物

45

道合遺跡

1 旧石器時代	46
1) 遺物	47
2 縄文器時代	47
1) 遺構	47
2) 遺物	75
3 弥生時代	88
1) 遺構	88
2) 遺物	142
4 古墳時代	157
1) 遺構	157
2) 遺物	210
5 奈良・平安時代	219
1) 遺構	219
2) 遺物	279

6	中世	295
	1) 遺構	295
	2) 遺物	304
7	近世	309
	1) 遺構	309
	2) 遺物	317
赤羽上ノ台遺跡		
1	旧石器時代	322
	1) 遺物	323
2	縄文器時代	323
	1) 遺構	323
	2) 遺物	395
3	弥生時代	421
	1) 遺構	421
	2) 遺物	435
4	古墳時代前期～中期	440
	1) 遺構	440
	2) 遺物	443
5	古墳時代後期～平安時代	444
	1) 遺構	444
	2) 遺物	493
6	近世	506
	1) 遺構	506
V 自然科学分析		
1	放射性炭素年代測定	509
2	北区道合遺跡出土土器の残存脂質分析	517
3	道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材の樹種（概報）	525
4	道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡における植物珪酸体化石群	533
VI 調査の成果と課題		
1	縄文時代	535
2	弥生時代	551
3	古墳時代	559
4	古代	564
5	中世	570
6	近世	570

挿図目次

第1図	遺跡の位置 (1/25,000) 国土地理院 1/25,000「赤羽」をもとに作図	1	第44図	299号住居跡 (1) (1/60)	109
第2図	グリッド設定図 (1/4,000)	3	第45図	299号住居跡 (2) (1/60)	110
第3図	調査区割り (当初工程)	6	第46図	312号住居跡 (1) (1/60)	111
第4図	道合遺跡 年度別調査区	7	第47図	312号住居跡 (2) (1/30・1/60)	112
第5図	赤羽上ノ台遺跡 年度別調査区	8	第48図	312号住居跡 (3) (1/60)	113
第6図	武蔵野台地の地形区分と道合遺跡・赤羽 上ノ台遺跡 (遠藤他, 2019を拡大・遺 跡位置を加筆)	25	第49図	313号住居跡 (1) (1/60)	114
第7図	赤羽台の地質層序 (遠藤他, 2023)	26	第50図	313号住居跡 (2) (1/20・1/30)	115
第8図	周辺の遺跡 (1/40,000)	27	第51図	315号住居跡 (1) (1/30・1/60)	116
第9図	道合遺跡 各地点の堆積物観察位置と基 本層序 (1/80・1/2,000)	41	第52図	315号住居跡 (2) (1/20・1/60)	117
第10図	赤羽台トレンチの柱状図とルミネッセ ンス年代 (遠藤他, 2023)	41	第53図	316号住居跡 (1) (1/30・1/60)	118
第11図	道合遺跡 全体図 (1/1,000)	43	第54図	316号住居跡 (2) (1/60)	119
第12図	旧石器時代の石器 (2/3)	46	第55図	319号住居跡 (1) (1/60)	120
第13図	道合遺跡 時代別遺構配置図 (1) 縄 文時代 (1/1,000)	57	第56図	323号住居跡 (1) (1/30・1/60)	121
第14図	297号住居跡 (1/60・1/30)	59	第57図	323号住居跡 (2) (1/20)	122
第15図	325号住居跡 (1/60・1/30)	60	第58図	324号住居跡 (1) (1/60)	123
第16図	333号住居跡 (1/60)	61	第59図	324号住居跡 (2) (1/30)	124
第17図	炉穴 (1) (1/30)	62	第60図	324号住居跡 (3) (1/60)	125
第18図	炉穴 (2) (1/30)	63	第61図	324号住居跡 (4) (1/20)	126
第19図	炉穴 (3) (1/30)	64	第62図	324号住居跡 (5) (1/20)	127
第20図	炉穴 (4) (1/30)	65	第63図	331号住居跡 (1) (1/60)	128
第21図	炉穴 (5) (1/30)	66	第64図	331号住居跡 (2) (1/30・1/60)	129
第22図	炉穴 (6) (1/30)	67	第65図	332号住居跡 (1/30・1/60)	130
第23図	炉穴 (7) (1/30)	68	第66図	334号住居跡 (1) (1/30・1/60)	131
第24図	炉穴 (8) (1/30)	69	第67図	334号住居跡 (2) (1/60)	132
第25図	土坑 (1) (1/40)	70	第68図	335号住居跡 (1) (1/30・1/60)	133
第26図	土坑 (2) (1/40)	71	第69図	335号住居跡 (2) (1/60)	134
第27図	土坑 (3) (1/40)	72	第70図	344号住居跡 (1/20・1/60)	135
第28図	ピット (1) (1/40)	73	第71図	20号掘立柱建物跡 (1/60)	136
第29図	ピット (2) (1/40)	74	第72図	21号掘立柱建物跡 (1/60)	137
第30図	遺構出土石器 (1/3)	80	第73図	306号土坑・314号土坑 (1/40)	138
第31図	遺構外出土石器 (1) (1/3)	81	第74図	317号土坑 (1/40)	139
第32図	遺構外出土石器 (2) (1/3)	82	第75図	4号焼土・P1698～P1700・P1702 (1/30・1/60)	140
第33図	遺構外出土石器 (3) (1/3)	83	第76図	9号焼土・P1939～P1942 (1/30・ 1/60)	141
第34図	遺構外出土石器 (4) (1/3)	84	第77図	283・288・292号住居跡出土石器 (1/3・1/4)	147
第35図	遺構外出土石器 (5) (1/3)	85	第78図	298号住居跡出土石器 1 (1/3・1/4)	148
第36図	遺構外出土石器 (1) (2/3・1/3)	86	第79図	298号住居跡出土石器 2 (1/3・1/4)	149
第37図	遺構外出土石器 (2) (1/3)	87	第80図	312号住居跡出土石器 1 (1/3・1/4)	150
第38図	道合遺跡 時代別遺構配置図 (2) 弥 生時代 (1/1,000)	89	第81図	312号住居跡出土石器 2・315・316・ 323号住居跡出土石器 (1/3・1/4)	151
第39図	283号住居跡 (1/30・1/60)	104	第82図	324号・334・335号住居跡出土石器 (1/3・1/4)	152
第40図	288号住居跡 (1/60)	105	第83図	344号住居跡・5号焼土・20・21号 掘立柱建物跡・306号土坑出土石器 (1/3・1/4)	153
第41図	292号住居跡 (1/30・1/60)	106	第84図	遺構外出土石器 1 (1/3・1/4)	154
第42図	298号住居跡 (1) (1/60)	107	第85図	遺構外出土石器 2 (1/3・1/4)	155
第43図	298号住居跡 (2) (1/30・1/60)	108	第86図	弥生時代の土製品・石製品 (1/2)	156

第 87 图	道合遺跡 時代別遺構配置圖 (3) 古墳時代 (1/1,000)	171	第 129 图	314・326・337 号住居跡出土土器 (1/4)	217
第 88 图	285 号住居跡 (1) (1/60)	173	第 130 图	338 号住居跡・298・299・301 号土坑・遺構外出土土器 (1/4)	218
第 89 图	285 号住居跡 (2) (1/60)	174	第 131 图	道合遺跡 時代別遺構配置圖 (4) 奈良・平安時代 (1/1,000)	237
第 90 图	289 号住居跡 (1/60)	175	第 132 图	284 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	239
第 91 图	290 号住居跡 (1) (1/60)	176	第 133 图	284 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	240
第 92 图	290 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	177	第 134 图	287 号住居跡 (1/30・1/60)	241
第 93 图	294 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	178	第 135 图	296 号住居跡 (1/60)	242
第 94 图	294 号住居跡 (2) (1/20・1/60) ...	179	第 136 图	303 号住居跡 (1) (1/60)	243
第 95 图	295 号住居跡 (1/60)	180	第 137 图	303 号住居跡 (2) (1/60)	244
第 96 图	300 号住居跡 (1) (1/20・1/60) ...	181	第 138 图	307 号住居跡 (1/30・1/60)	245
第 97 图	300 号住居跡 (2) (1/60)	182	第 139 图	308 号住居跡 (1) (1/60)	246
第 98 图	301 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	183	第 140 图	308 号住居跡 (2) (1/60)	247
第 99 图	301 号住居跡 (2) (1/60)	184	第 141 图	310 号住居跡 (1/60)	248
第 100 图	302 号住居跡 (1) (1/60)	185	第 142 图	311 号住居跡 (1) (1/60)	249
第 101 图	302 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	186	第 143 图	311 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	250
第 102 图	302 号住居跡 (3) (1/60)	187	第 144 图	317 号住居跡 (1/30・1/60) ...	251
第 103 图	304 号住居跡 (1/30・1/60)	188	第 145 图	318 号住居跡 (1) (1/60)	252
第 104 图	305 号住居跡 (1/60)	189	第 146 图	318 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	253
第 105 图	306 号住居跡 (1) (1/60)	190	第 147 图	318 号住居跡 (3) (1/60)	254
第 106 图	306 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	191	第 148 图	320 号住居跡 (1) (1/20・1/30・1/60)	255
第 107 图	309 号住居跡 (1) (1/60)	192	第 149 图	320 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	256
第 108 图	309 号住居跡 (2) (1/20・1/30・1/60)	193	第 150 图	321 号住居跡 (1/20・1/60)	257
第 109 图	309 号住居跡 (3) (1/30・1/60) ...	194	第 151 图	322 号住居跡 (1/20・1/60)	258
第 110 图	314 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	195	第 152 图	328 号住居跡 (1) (1/60)	259
第 111 图	314 号住居跡 (2) (1/60)	196	第 153 图	328 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	260
第 112 图	326 号住居跡 (1) (1/60)	197	第 154 图	329 号住居跡 (1/60)	261
第 113 图	326 号住居跡 (2) (1/60 (1/30) ...	198	第 155 图	330 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	262
第 114 图	326 号住居跡 (3) (1/60 (1/20) ...	199	第 156 图	330 号住居跡 (2) (1/20・1/60) ...	263
第 115 图	337 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	200	第 157 图	336 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	264
第 116 图	337 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	201	第 158 图	336 号住居跡 (2) (1/60)	265
第 117 图	337 号住居跡 (3) (1/30・1/60) ...	202	第 159 图	339 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	266
第 118 图	338 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	203	第 160 图	339 号住居跡 (2) (1/60)	267
第 119 图	338 号住居跡 (2) (1/60)	204	第 161 图	345 号住居跡 (1/30・1/60)	268
第 120 图	273 号土坑・298 号土坑・299 号土坑 (1/20・1/40)	205	第 162 图	346 号住居跡 (1) (1/60)	269
第 121 图	300 号土坑・301 号土坑 (1/40) ...	206	第 163 图	346 号住居跡 (2) (1/20・1/30・1/60)	270
第 122 图	7 号焼土範圍・P1769・P1784・P1787~P1789・P1792・P1793 (1/30・1/60)	207	第 164 图	346 号住居跡 (3) (1/20・1/30) ...	271
第 123 图	P1805・P1806・P1827 (1/60) ...	208	第 165 图	347 号住居跡 (1) (1/30・1/60) ...	272
第 124 图	P1812~P1814・P1819・P1820 (1/60)	209	第 166 图	347 号住居跡 (2) (1/30・1/60) ...	273
第 125 图	285・289・290 号住居跡出土土器 (1/4)	213	第 167 图	345・346・347 号住居跡 (1/60) ...	274
第 126 图	294 号住居跡出土土器 (1/4)	214	第 168 图	270 号土坑 (1/40)	275
第 127 图	295・300・301・302・304 号住居跡出土土器 (1/4)	215	第 169 图	281・286・287・302 号土坑 (1/40) ...	276
第 128 图	305・306・309 号住居跡出土土器 (1/4)	216	第 170 图	303・304・305・308 号土坑 (1/40) ...	277
			第 171 图	P1743~P1745・P1748・P1749・P1822・P1823・P1828 (1/60)	278
			第 172 图	284・287・296 号住居跡出土土器 (1/4)	285

第173図	303・308・310・311号住居跡出土 土器(1/4)……………	286	第210図	炬穴(4)(1/30)……………	358
第174図	318号住居跡出土土器(1/4)……………	287	第211図	炬穴(5)(1/30)……………	359
第175図	320・321・322号住居跡出土土器 (1/4)……………	288	第212図	炬穴(6)(1/30)……………	360
第176図	328・330号住居跡出土土器(1/4)……………	289	第213図	炬穴(7)(1/30)……………	361
第177図	336・339号住居跡出土土器(1/4)……………	290	第214図	炬穴(8)(1/30)……………	362
第178図	345・346・347号住居跡出土土器 (1/4)……………	291	第215図	炬穴(9)(1/30)……………	363
第179図	270号土坑・302号土坑・P1828・ 遺構外出土土器(1/4)……………	292	第216図	炬穴(10)(1/30)……………	364
第180図	遺構外出土土器(1/4)……………	293	第217図	炬穴(11)(1/30)……………	365
第181図	古墳～奈良・平安時代の土製品・ 石製品・金属製品(1/2)……………	294	第218図	炬穴(12)(1/30)……………	366
第182図	道合遺跡 時代別遺構配置図(5) 中世(1/1,000)……………	297	第219図	炬穴(13)(1/30)……………	367
第183図	280号土坑(1/40)……………	299	第220図	炬穴(14)(1/30)……………	368
第184図	282号土坑(1/40)……………	300	第221図	炬穴(15)(1/30)……………	369
第185図	283号土坑(1)(1/40)……………	301	第222図	炬穴(16)(1/30)……………	370
第186図	283号土坑(2)(1/40)……………	302	第223図	炬穴(17)(1/30)……………	371
第187図	320号土坑(1/40)……………	303	第224図	炬穴(18)(1/6)……………	372
第188図	道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡 中世の 磁器・陶器・土器(1/3)……………	306	第225図	炬穴(19)(1/30)……………	373
第189図	道合遺跡 時代別遺構配置図(6) 近世(1/1,000)……………	307	第226図	炬穴(20)(1/30)……………	374
第190図	溝・畝全体図(1)(1/1,000)……………	310	第227図	炬穴(21)(1/30)……………	375
第191図	溝・畝全体図(2)(1/1,000)……………	311	第228図	炬穴(22)(1/30)……………	376
第192図	溝(1)(1/60)……………	312	第229図	炬穴(23)(1/30)……………	377
第193図	溝(2)(1/60)……………	313	第230図	炬穴(24)(1/30)……………	378
第194図	溝(3)(1/60)……………	314	第231図	炬穴(25)(1/30)……………	379
第195図	溝(4)(1/60)……………	315	第232図	炬穴(26)(1/30)……………	380
第196図	溝(5)・畝(1/60)……………	316	第233図	炬穴(27)(1/30)……………	381
第197図	道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡 近世の 磁器・陶器・土器・金属製品(1/3)……………	320	第234図	炬穴(28)(1/30)……………	382
第198図	道合遺跡 近世の石製品(1/2)……………	321	第235図	炬穴(29)(1/30)……………	383
第199図	赤羽上ノ台遺跡 全体図(1/1,000)……………	341	第236図	炬穴(30)(1/30)……………	384
第200図	赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図 (1)縄文時代(1/1,000)……………	343	第237図	炬穴(31)(1/30)……………	385
第201図	赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図 (2)弥生時代(1/1,000)……………	345	第238図	炬穴(32)(1/30)……………	386
第202図	赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図 (3)古墳時代前～後期(1/1,000)……………	347	第239図	土坑(1)(1/40)……………	387
第203図	赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図 (4)奈良・平安時代(1/1,000)……………	349	第240図	土坑(2)(1/40)……………	388
第204図	赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図 (5)近世(1/1,000)……………	351	第241図	土坑(3)(1/40)……………	389
第205図	赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 全体図 (1/500)……………	353	第242図	土坑(4)(1/40)……………	390
第206図	赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 時代別 遺構配置図(1)縄文時代(1/500)……………	354	第243図	ピット(1)(1/40)……………	391
第207図	炬穴(1)(1/30)……………	455	第244図	ピット(2)(1/40)……………	392
第208図	炬穴(2)(1/30)……………	456	第245図	ピット(3)(1/40)……………	393
第209図	炬穴(3)(1/30)……………	457	第246図	ピット(4)(1/40)……………	394
			第247図	炬穴出土土器(1)(1/3)……………	403
			第248図	炬穴出土土器(2)(1/3)……………	404
			第249図	炬穴出土土器(3)(1/3)……………	405
			第250図	炬穴出土土器(4)(1/3・1/4)……………	406
			第251図	炬穴出土土器(5)(1/3)……………	407
			第252図	炬穴出土土器(6)(1/3・1/4)……………	408
			第253図	炬穴出土土器(7)土坑出土土器(1) (1/3)……………	409
			第254図	土坑出土土器(2)ピット出土土器 (1/3)……………	410
			第255図	遺構外出土土器(1)(1/3)……………	411
			第256図	遺構外出土土器(2)(1/3)……………	412
			第257図	遺構外出土土器(3)(1/3)……………	413
			第258図	遺構外出土土器(4)(1/3)……………	414
			第259図	遺構外出土土器(5)(1/3)……………	415

第260図	土製品 (1) (1/2) ……………	416	第306図	21号住居跡 (1/60・1/30) ……………	481
第261図	土製品 (2) (1/2) ……………	417	第307図	22号住居跡 (1/60・1/30) ……………	482
第262図	旧石器時代の石器、縄文時代の石器 (1) (2/3・1/3) ……………	418	第308図	23・27・28号住居跡 (1) (1/60) ……	483
第263図	縄文時代の石器 (2) (2/3) ……………	419	第309図	23・27・28号住居跡 (2) (1/60) ……	484
第264図	縄文時代の石器 (3) (1/3) ……………	420	第310図	27号住居跡 (3) (1/60・1/30) ……	485
第265図	赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 時代別 遺構配置図 (2) 弥生時代 (1/500) ……	425	第311図	28号住居跡 (4) (1/60・1/30) ……	486
第266図	8号住居跡 (1)・31号土坑 (1/60・ 1/40) ……………	426	第312図	23・27・28号住居跡 (3) (1/60) ……	487
第267図	8号住居跡 (2) (1/60・1/30) ……	427	第313図	25号住居跡 (1/60) ……………	488
第268図	8号住居跡 (3) (1/60) ……………	428	第314図	26号住居跡 (1) (1/60) ……………	489
第269図	8号住居跡 (4) (1/60・1/20) ……	429	第315図	26号住居跡 (2) (1/60・1/30) ……	490
第270図	8号住居跡 (5) (1/20) ……………	430	第316図	26号住居跡 (3) (1/60) ……………	491
第271図	9号住居跡 (1) (1/60・1/30) ……	431	第317図	26号住居跡 (4) (1/60・1/20) ……	492
第272図	9号住居跡 (2)・11号住居跡 (1/60・1/20) ……………	432	第318図	13号住居跡出土土器 (1/4) ……………	498
第273図	12号住居跡 (1) (1/60) ……………	433	第319図	14・15・16号住居跡出土土器 (1/4) ……	499
第274図	12号住居跡 (2) (1/30・1/60) ……	434	第320図	17号住居跡出土土器 (1) (1/4) ……	500
第275図	8・9号住居跡出土土器 (1/4) ……	437	第321図	17号住居跡出土土器 (2) (1/4) ……	501
第276図	8・9・12号住居跡出土土器 (1/3) ……	438	第322図	17号住居跡出土土器 (3) (1/4) ……	502
第277図	弥生時代の土製品、石器 (1/2・1/3) ……	439	第323図	18・19・21・23号住居跡出土土器 (1/4) ……………	503
第278図	赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 時代別遺 構配置図 (3) 古墳～平安時代 (1/500) ……	441	第324図	23・25・26号住居跡出土、遺構外 出土土器 (1/4) ……………	504
第279図	40号土坑 (1/40・1/20) ……………	442	第325図	古墳～平安時代土製品・石製品 (1/4・1/2) ……………	505
第280図	古墳時代前～中期の土器 (40号 土坑・遺構外) (1/4) ……………	443	第326図	赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 時代別 遺構配置図 (4) 近世 (1/500) ……	507
第281図	10号住居跡 (1/60) ……………	456	第327図	近世溝 土層断面図 (1/60) ……	508
第282図	13号住居跡 (1) (1/60・1/30) ……	457	第328図	単体測定試料の暦年較正結果 ……	514
第283図	13号住居跡 (2) (1/60・1/20) ……	458	第329図	ウィグルマッピングを行なった試料 ……	515
第284図	13号住居跡 (3) (1/20) ……………	459	第330図	ウィグルマッピングの結果 ……	516
第285図	13号住居跡 (4) (1/20) ……………	460	第331図	土器附着炭化物の炭素・窒素安定同位 体組成とC/N比を現生日本産生物デー タと比較 ……………	520
第286図	14号住居跡 (1) (1/60) ……………	461	第332図	パルミチン酸、ステアリン酸の分子 レベル炭素同位体組成と現生日本産 物データとの比較 ……………	522
第287図	14号住居跡 (2) (1/60) ……………	462	第333図	道合遺跡312号住居跡から出土した 炭化材の位置 ……………	527
第288図	15号住居跡 (1) (1/60) ……………	463	第334図	道合遺跡324号住居跡から出土した 炭化材の位置 ……………	528
第289図	15号住居跡 (2) (1/60・1/30) ……	464	第335図	道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡出土炭化 材の走査型電子顕微鏡画像 ……	532
第290図	15号住居跡 (3) (1/60) ……………	465	第336図	産出した植物珪酸体化石の写真 ……	534
第291図	15号住居跡 (4) (1/60・1/20) ……	466	第337図	縄文時代遺構配置図 (1) 早期前葉 (1/2500) ……………	541
第292図	16号住居跡 (1) (1/60) ……………	467	第338図	縄文時代遺構配置図 (2) 早期後葉 (1/2500) ……………	543
第293図	16号住居跡 (2) (1/60・1/30) ……	468	第339図	縄文時代遺構配置図 (3) 前期初頭 (1/2500) ……………	545
第294図	16号住居跡 (3) (1/60) ……………	469	第340図	縄文時代遺構配置図 (4) 前期中葉 (1/2500) ……………	547
第295図	17号住居跡 (1) (1/60・1/30) ……	470	第341図	縄文時代遺構配置図 (5) 後期中葉 (1/2500) ……………	549
第296図	17号住居跡 (2) (1/60・1/30) ……	471			
第297図	17号住居跡 (3) (1/8) ……………	472			
第298図	17号住居跡 (4) (1/20) ……………	473			
第299図	17号住居跡 (5) (1/20) ……………	474			
第300図	18号住居跡 (1) (1/60) ……………	475			
第301図	18号住居跡 (2) (1/60) ……………	476			
第302図	18号住居跡 (3) (1/60) ……………	477			
第303図	18号住居跡 (4) (1/60・1/20) ……	478			
第304図	19号住居跡 (1) (1/60) ……………	479			
第305図	19号住居跡 (2) (1/60) ……………	480			

第342図	弥生時代遺構配置図(1)	(1/2500)……	555	第347図	古代遺構配置図(1)	(1/2500)……	567
第343図	弥生時代遺構配置図(2)	中期後半 (1/4000) ……………	557	第348図	古代遺構配置図(2)	(1/5000)……	569
第344図	弥生時代遺構配置図(3)	後期後葉 (1/4000) ……………	558	第349図	近世遺構配置図	(1/2500) ……………	573
第345図	古墳時代遺構配置図(1)	(1/2500)……	561				
第346図	古墳時代遺構配置図(2)	(1/5000)……	563				

表目次

第1表	発掘調査工程表 ……………	9	第41表	炭素・窒素安定同位体組成と炭素・ 窒素含有量、C/N比 ……………	519
第2表	整理作業工程表 ……………	9	第42表	脂質組成 ……………	521
第3表	周辺の遺跡 ……………	29	第43表	パルミチン酸、ステアリン酸の分子 レベル炭素同位体組成 ……………	522
第4表	基本順序 ……………	42	第44表	道合遺跡から出土した炭化材の樹種 ……	529
第34表	単体測定試料および処理 ……………	511	第45表	赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材 の樹種 ……………	530
第35表	ウィグルマッチング測定試料および 処理 ……………	511	第46表	道合遺跡から出土した炭化材の樹種 組成 ……………	531
第36表	単体測定試料の放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果 ……………	512	第47表	赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材 の樹種組成 ……………	531
第37表	312号・315号・324号住居跡出土炭 化材の放射性炭素年代測定、暦年較正、 ウィグルマッチングの結果 ……………	512	第48表	各地点における植物珪酸体化石の産 出量評価 ……………	534
第38表	化学処理取率 ……………	513			
第39表	分析試料一覧 ……………	517			
第40表	分析装置と標準試料 ……………	519			

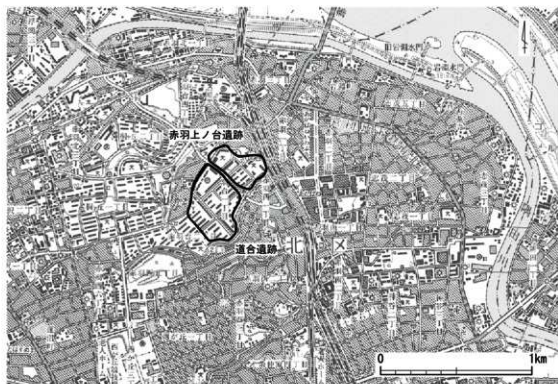
I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

1) 道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の発見

A 道合遺跡

道合遺跡は、北区赤羽台一・二丁目、独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構）赤羽台団地内にあり、平成に入って新たに発見された遺跡である（第1図）。平成5年6月に赤羽消防署赤羽台出張所庁舎建設に先立ち、北区教育委員会に埋蔵文化財の有無についての照会があり、「周知の埋蔵文化財包蔵地」には該当しないが、発見される可能性が高いため、試掘調査を実施することとなった。同年7月の試掘調査の結果、溝と縄文土器の発見により遺跡と確認された。この遺跡発見に伴い、法的手続きが執られ、文化庁より事前調査実施の通知がなされた。これにより調査団が組織され、平成6年1月に110mを対象に第1次発掘調査が実施された。その結果は、縄文時代の土坑群（墓塚）・ピット、近世の溝、近現代の建物跡（旧日本陸軍被服本廠関連）などが検出された。遺跡地図等にも登録されたが、その範囲は赤羽台出張所を中心とした限られた範囲に止まる。なお、本遺跡が登録された当時の赤羽台団地内に存在する遺跡（北区史—通史編—原始古代 平成8年）は、赤羽上ノ台（新修北区史 昭和46年での赤羽東小学校遺跡）・ミタマ古墳（新修北区史未登録）・天王塚古墳（新修北区史未登録）・大六天（新修北区史での赤羽台二丁目遺跡）がある。「道合」の名称は、大正年間までの岩淵町大字赤羽根字道合（赤羽台団地西～北西部の道路に沿った一帯）から採っている。団地南東～南側は字大六天、中央部は字池ノ上、北部は字上ノ台である。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000) 国土地理院 1/25,000「赤羽」をもとに作図

平成12年に入り、UR都市機構による赤羽台団地の建替事業計画が具体化し、それに伴い団地内の埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査が平成13年に実施された(国際航空(株)2001)。団地各号棟の間の芝地を中心にトレンチを設定して遺構確認調査が行われた。対象面積は160,000㎡、調査面積は2,722㎡とある。その結果、弥生時代を中心とした住居跡35軒、土坑53基、ピット206基、溝44条、道路跡1か所、畝跡3か所が検出され、遺物は549点出土した(同報告による一遺構名筆者変更)。遺構の分布は団地中央～北側の2/3ほどの範囲に広がりを見せるが、南西側には旧日本陸軍被服本廠関連施設以外の遺構は確認されなかった。これらの結果、道合遺跡としての範囲を大幅に拡大して登録されることとなったが、南西側は範囲からは除外され、建替事業が着手された。

赤羽台団地建替事業に伴う道合遺跡の発掘調査は、第1期を道合遺跡第Ⅱ次調査として平成19年1月9日から平成20年6月30日まで、27,788㎡を対象としておこなわれた。道合遺跡の調査はこれまでにⅧ次を数える(Ⅳ-Ⅰ 道合遺跡 参照)。

B 赤羽上ノ台遺跡

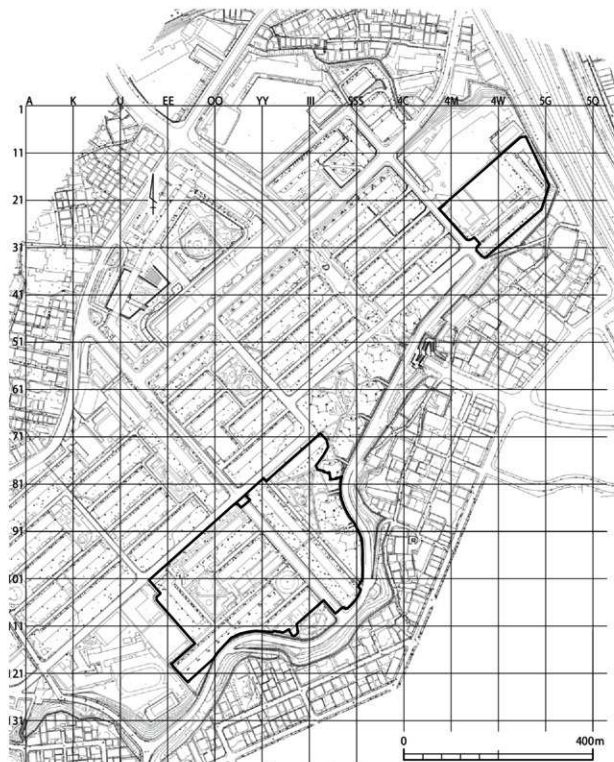
赤羽上ノ台遺跡は、道合遺跡の北東側、赤羽台団地の東側に位置する。従前より包蔵地として知られており、新修北区史(昭和46年)では、赤羽台1-1・赤羽台東小学校内遺跡として記載され、縄文時代・弥生時代の土器が採集された包含地となっている。平成8年の北区史では、登録番号9の赤羽上ノ台遺跡として記載され、面積42,000㎡、縄文・弥生時代、奈良・平安時代の集落となっている。それに先がけ、昭和62年には、本遺跡内東側に位置する赤羽台中学校校庭の配管工事立会いの際に、土坑状の遺構が検出された。さらに、平成元年に赤羽台団地を横断する都市計画道路補助157号線の敷設工事に伴い試掘調査が行われ、古代の住居跡が確認された。この遺構発見に伴い、法的手続きがとられ、文化庁より事前調査実施の通知がなされた。これにより調査団が組織され、平成元年2月に400㎡を対象に、同年7～8月に650㎡を対象に発掘調査が実施された。その結果は、縄文時代の炉穴5基、土坑16基、古代の住居跡4軒、近世の溝2条、その他陸軍被服本廠関連施設などが検出された。この時の調査を第Ⅰ次として、今回の調査を第Ⅵ次としており、遺構番号もこの調査成果を受けて設定している。現在では、この調査範囲(開削トンネル道路)の北東側団地内はほぼ全域が遺跡として登録され、面積は70,000㎡となっている。赤羽上ノ台遺跡の調査はこれまでにⅤ次を数える(Ⅳ 赤羽上ノ台遺跡 参照)。

2) 今回の調査に至る経緯

今回の第Ⅳ期建替事業の工区については、平成30年9月25日にUR都市機構東日本賃貸住宅本部から東京都教育庁へ赤羽台団地(第Ⅳ期)建替事業に伴う埋蔵文化財調査の実施についての照会が提出され、平成30年10月10日に東京都教育庁からUR都市機構東日本賃貸住宅本部へ、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センターと協議するよう回答された(30教地管第1417号)。平成31年3月29日、独立行政法人都市再生機構と東京都教育委員会、公益財団法人東京都スポーツ文化事業団との3者で発掘調査に関する協定を締結した。平成31年4月26日に、独立行政法人都市再生機構と公益財団法人東京都スポーツ文化事業団との間で発掘調査の実施に関する業務委託契約が締結された。

発掘調査の届出は令和元年5月27日に東京都埋蔵文化財センターより北区教育委員会と東京都教育委員会に提出され(31ス文事理文第2141号)、同年6月5日に東京都教育委員会より発掘調査

の通知（31 教地管理第 675 号）が出された。



第 2 図 グリッド設定図 (1/4,000)

2 調査の方法と経過

1) 調査の方法

調査対象範囲は、赤羽台団地南側・東側の 37,100㎡（当初：追加範囲を含めて 37,347㎡）である。調査範囲の区画（グリッド）は第 2 次調査の際に設定した、道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡を網羅したものを踏襲した（第 2 図）。原点の座標は X=-24,345、Y=-10,900（世界測地系）である。そこから東西・南北方向に 5×5m の方形区画を設定し、北西端を原点として北から南に 1～128、西から東に A～Z、AA～ZZ、AAA～OOO を付した。標高は東京湾中等潮位（T.P.）に基づいた。

今回の調査対象範囲は赤羽台団地第 IV 期建替工事の F 街区・G 街区と仮称され、それぞれが道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡に該当する。建替工事のスケジュールにしたがって F 街区は 1・2・3・4 区に分け、G 街区は 5 区と呼称した。各街区は既存建造物の解体・撤去が終了した状態で引き渡され、調査終了とともに順次、後続する工事に引き渡した。なお、赤羽台団地 41～44 号棟は解体せず UR 都市機構により保存・活用される計画であり、これらの建物の範囲は調査対象からは除かれている。

調査範囲は旧日本陸軍被服本廠や赤羽台団地の造成などにより削平されており、遺物包含層の遺存は不良であった。堆積物層序の観察・記載は遺存の比較的良好な個所を選んでおこなった。このうち、F 街区 1 区北側（1B 区）において地下 5m に達する土坑（地下式横穴）の調査にともない、この掘方を利用して武蔵野ローム最下層に達する堆積物層序と挟在するテフラの観察・記載をおこなった。

遺構調査・記録の方法は第 8 次調査までのものを踏襲し、検出遺構の名称や番号も引き継いで用いた。調査・整理の途上で遺構種別の認識を変更したものや、誤認であると判別したものもある。遺構図のうち、竪穴住居跡は平面・断面ともに手書きによって作成した。これ以外のものは断面図のみ手書きによって作成し、平面形の記録や標高の測量はトータルステーションによっておこなった。記録形式は（株）CUBIC 遺構くんに則り、.aik および .dxf 形式の CAD データである。

竪穴住居跡は調査時の各段階（床面検出、カマド検出、完掘等）の状況と、それ以外の遺構および調査範囲は完掘状況を 3D フォトグラメトリーによって記録した。作業は（有）リッケイが Agisoft Metashape を使用しておこない、PDF 形式で保存した。

遺物のうち、中世以前の遺構内から出土したものはトータルステーションによって位置を記録して回収し、一部は微細図を作成した。それ以外のものは原則として各遺構、調査区またはグリッド単位で一括して回収した。

調査写真は 35mm のモノクロ・リバーサルフィルムカメラとデジタル一眼レフカメラを併用して撮影した。各調査区の全景写真は高所作業車や、UR 都市機構の許可を得てヌーヴェル赤羽台の既存住棟屋上や赤羽台団地の保存住棟内から撮影した。一部範囲については警視庁赤羽警察署の許可を得て、UR 都市機構や赤羽台団地自治会はじめ周辺住戸・施設の了解のもと、ドローンにより高所からデジタル写真を撮影した。

2) 調査の経過

発掘調査は赤羽台団地の旧住棟の解体・撤去工事とヌーヴェル赤羽台の建設工事の工程に沿い、F 街区（道合遺跡）、G 街区（赤羽上ノ台遺跡）とに区分し、それぞれを 1～4 区と 5 区に細分した。

このうちF街区は2区から1、3、4区の順に調査をおこなった。F街区の調査は令和元年5月13日より準備工をおこない、16日より開始した。F街区は令和3年10月8日に4区の埋め戻し終了をもって完了した。G街区は令和2年12月1日より開始し、令和3年9月27日に完了した。各調査区の工程を第1表に示した。

発掘調査期間中は東京都教育委員会が主催する月例の定例会議に、UR都市機構と、北区教育委員会、東京都埋蔵文化財センターが参加し、調査の進捗や終了部分の確認、今後の調査工程に関する協議をおこなった。この会議において、当初は予定されていなかった次の範囲について、今回の事業において調査することが決定された。

- (1) 団地旧42号棟西側・南側の範囲 1,166㎡ (2D区と仮称)
- (2) 団地旧44号棟西側・南側の範囲 392㎡ (2B区追加と仮称)
- (3) F街区南側に隣接する梅公園の一部 40㎡ (梅公園と仮称)

併せて、建物の保存が決定した旧41～44号棟の範囲に加え、43号棟西側の植栽範囲 127㎡と、F街区1区南端のクロマツ植栽範囲 75㎡、4区南西端の、あかいとり幼稚園に隣接する範囲 402㎡については、その下に遺構や遺物の存在が想定されるものの、今回の事業では掘削が予定されていないことから、未調査範囲として残置することが決定された。F街区2区に残置されていたムクロジ植栽と、藤棚とそれに付随する遊具の範囲は、藤棚の移植(令和2年1月26日)、ムクロジの移植(令和2年1月22日)にあわせて調査を実施した。

現地での発掘調査期間中、第IV期建替事業を含む赤羽台団地において実施中の各工事関係者による月例の連絡調整会議に埋蔵文化財センター・浅沼組の当事者が参加し、工程等の情報共有や調整をおこなった。

2区の旧団地41号棟南側の被服本廠9号倉庫跡南壁の南側より、太平洋戦争時に投下された焼夷弾が発見された。埋蔵文化財センターより警視庁赤羽警察署に通報し、自衛隊朝霞駐屯地第102不発弾処理隊が処理した(令和元年8月19日)。

各調査区の調査終了にあわせ、ドローンによる全景撮影を実施した。撮影に先立ち、警視庁赤羽警察署の許可と、UR都市機構や赤羽台団地自治会、赤羽保育園、あかいとり幼稚園の了解を得た(令和元年12月5日、令和2年3月6日、9月2日)。

F街区東側1区内において、日大・遠藤名誉教授らによる研究グループが、赤羽台の地質層序の観察と記載と(令和2年5月20日・27日)、オールコアボーリング調査を実施した(令和2年7月27～31日)。その成果は第III章に示した。

赤羽台西小学校6年生児童と引率教諭が道合遺跡の発掘調査を見学した(令和2年11月13日)。

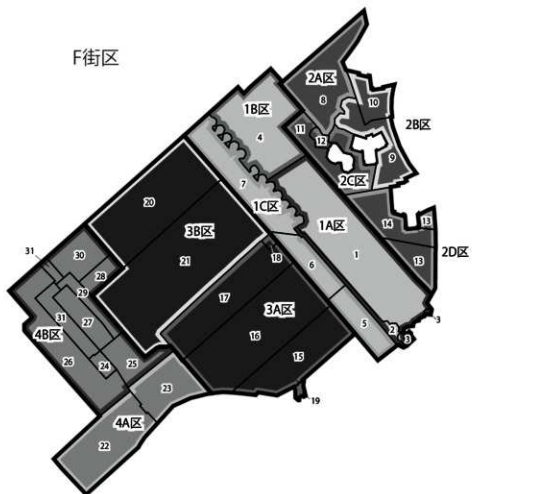
赤羽台団地自治会からの要望を受け、UR都市機構と東京都埋蔵文化財センターが遺跡の現地見学会を開催した。F街区(道合遺跡)での発掘の現況を中心とした検出遺構や出土遺物等の展示をおこなった(令和3年2月13日)。

F街区3区で出土した近代の被服本廠の陶製土管と、9号倉庫・5号倉庫の基礎を構成したレンガ、引き込み線の側溝を構成した凝灰岩製部材は、UR都市機構によって回収され、当該地区のモニュメントの一部として活用された。

1次整理作業は発掘調査と並行して実施し、令和元年12月2日より同3年9月30日まで現地に

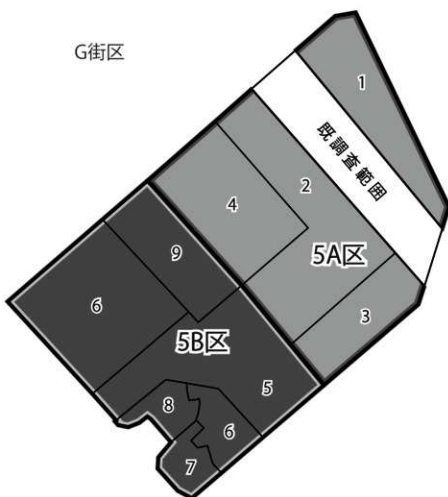
ておこなった。期間内に遺物の水洗いと注記、粗分類を完了した。

2次整理作業は令和3年10月11日より令和5年9月30日まで、東京都埋蔵文化財センター大塚分室（豊島区北大塚1-15-10）においておこなった。工程を第1表に示した。整理作業の期間中、北区飛鳥山博物館ジュニア考古学クラブが出土遺物と二次整理作業の様子を見学した（令和4年8月26日）。出土遺物および図面類、写真等のデータと、ボーリングコア試料を北区教育委員会文化財収蔵庫（北区王子6-2 王子サンハイツ内）に移管した（令和5年9月27日）。報告書の編集は令和5年10月31日までおこなった。



第4図 道台遺跡 年度別調査区

今回の発掘調査・整理作業期間中、令和元年12月の中国武漢市における原因不明のウィルス性肺炎の発生に端を発する新型コロナウイルス感染症が日本国内において拡大した。令和2年4月7日には東京はじめ7都府県に緊急事態宣言が発出される（同年5月25日に全面解除、令和3年1月8日に再度発出、同年3月21日に全面解除）など、複数次にわたる感染症の拡大は調査事業に大きな影響を与えた。こうしたなか、マスクの着用や手指の消毒、出勤時の検温、密閉・密集・密接の「3つの密」の回避、調査研究員の在宅勤務の実施、会議の书面開催（メールによる審議）等の対策をとりつつ調査を継続した。発掘・整理期間中に感染者は発生したものの、事業所内における集団感染には至らなかった。



第5図 赤羽上ノ台遺跡 年度別調査区

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡は、北区赤羽台一・二丁目、UR 都市機構ヌーヴェル赤羽台内に所在する。遺跡の一角は武蔵野台地の北東端にあたり、北側と東側は東京低地に面する。武蔵野台地は古多摩川によって形成された、青梅付近を扇頂として東京 23 区西部まで広がる武蔵野扇状地と、その東側に断片的に残存する、高海水準期に形成された海岸段丘からなる。武蔵野台地の北東端は本郷台として区分される。本郷台は現在の JR 王子駅付近を東に流れる石神井川によって南北に分断され、北側の赤羽台と十条台、南側の上野台とに分けられている。

赤羽台は複数の小河川によって樹枝状に解析された小支谷より、半島状の地形を形成している。北から八幡谷、亀ヶ池谷、稲付谷と呼ばれる谷が西に向かって下刻し、稲付谷により南側の十条台と区分され、八幡谷と亀ヶ池谷に挟まれた部分に遺跡が立地する。

本郷台は従来、武蔵野面の M2 面に位置付けられていたが、地形区分と地質に関する近年の研究の進展（遠藤他，2019 など）により、一部に S 面が認められる他、M2a 面と M2b 面、M3 面に細分されている（第 6 図）。M2 面上にある板橋付近と赤羽台との間には明瞭な高低差があり、板橋付近に向けて緩やかに下降している。この低位の面は、かつての多摩川が東～東北東方向に形成した扇状地性段丘面の東端部に、荒川ないし入間川の水系が北西から南東方向に形成した段丘面が接することによって生じた浸食崖とされる。道合遺跡と赤羽上ノ台遺跡の位置は北東側の M2a 面と南西側の M2b 面に分かれ、道合遺跡の中央部に東西方向に境界が位置する。赤羽上ノ台遺跡は M2a 面、道合遺跡の今次調査地点は M2b 面上に位置付けられる。地表面の標高は赤羽上ノ台遺跡で 19～20m、道合遺跡の今次調査地点で 20～22m で、南東側に向かって低くなる。それぞれが離水した時期は、M2a 面が最終間氷期海洋同位体（MIS）ステージ 5a で 9 万～8 万 5,000 年前、M2 b 面がステージ 5a～4 にかけての期間で 8～7 万年前、M3 面はステージ 4～3 で 6 万年前にあたる。人類の活動の痕跡が確認できるのはこれらの面が離水してから数万年後のことであるが、赤羽台上の遺跡の立地を見ると M3 面には少ない一方、M2a・b 面に多く認められる傾向がある。

道合遺跡の調査地でおこなわれたオールコアボーリングに基づき、中期～後期更新世の赤羽台の古環境変遷が明らかにされている（第 7 図 遠藤他，2023）。当該地において採取された、地表下 55.0m に達するコア（NU-AKD-1：第 10 図）には、少なくとも 32 万年以前にさかのぼる堆積物が含まれていた。ここには B 層（東京層）と C 層（赤羽台層と新たに命名）、D 層（文京層）の複数回の海進時堆積物が認められ、ルミネッセンス年代測定法によりそれぞれは海洋同位体ステージ（MIS）5.5（13 万～11 万 5,000 年前）と 7（24 万年前）、9（32 万年前）の 3 回の海進に比定された。さらに、これらの堆積物に含まれる有孔虫化石と珪藻化石が調べられた結果、B 層と C 層の堆積時には海が侵入していたこと、D 層の堆積時には内湾環境が存在した可能性が高いことが明らかとなっている。また、堆積物中で確認されたテフラ（火山砕屑物）のうち、阿多一鳥浜（Ata-Th）テフラは約 24 万年前に阿多カルデラの噴火によってもたらされたもので、武蔵野台地の北東端では初めて確認された。

2 歴史的環境

1) 周辺の遺跡

道合・赤羽上ノ台遺跡が立地する赤羽台<本郷台<武蔵野台地北～東端部は、その縁辺部において旧石器時代～中・近世に至る各時代の遺跡が密集して分布する。さらには崖線下の東京低地・荒川低地の遺跡調査例も増加しており、北区および周辺域の様相は複雑化している。ここでは両遺跡の位置する赤羽台を中心に、本郷台（十条台―北区、上野台―北区・荒川・台東・文京区）、豊島台東端部（淀橋台北端部を含む豊島・新宿・中野区）、成増台北東部（板橋区）、石神井川流域を含めて時代別に概観したい。なお、第Ⅱ次調査報告（丹野 2010）と重複する内容ではあるが、それ以降の調査成果を含めた形で再掲載した。

旧石器時代

道合・赤羽上ノ台遺跡周辺（赤羽台）では、西に隣接する大六天（北12―第8図・第3表 以下同じ）、八幡谷を挟んだ北側台地縁辺には赤羽台（北5）がある。赤羽台は数次にわたる調査が行われているが、八幡神社地区は第Ⅲ～Ⅴ層、Ⅸ・Ⅹ層の文化層が検出された。星学学園地区はⅣ・Ⅸ層、国立王子病院地区はⅦ～Ⅸ層のブロック7ヶ所が検出された。

赤羽台から西に続く成増台では北側の低地に向かい、鋸歯状に開析された小支谷の縁辺部に遺跡が林立する。東から、桐ヶ丘（北8）、小豆沢東原・宮ノ前（板105）、出井川右岸域の志村坂上（板99）、志村城山（板101）、前野日暮久保・兎谷（板94）、中台町東谷・中ノ谷の中台三丁目東丘陵・高中（板79）、中台東谷（板76）、中台三丁目南・南の丘（板83）、徳丸谷東側の西台後藤田（板58）、五段田（板63）、上台（板61）、徳丸・四葉地区には徳丸高山（板53）、徳丸東（板54）、徳丸森木（板51）、四葉地区（板40・42）、松月院境内・大門・赤塚下寺家番匠免（板33）、出口谷西側には赤塚水川神社北方（板22）、前谷津川最深部の赤塚大塚原（板9）、白子川右岸域の成増天神脇（板8）、菅原神社台地上（板7）、成増との山（板3）、成増百向・新田原（板2）などが挙げられる。

石神井川下流左岸の十条台では宿（北19）、加賀一丁目（板112―北39下十条）がある。右岸域では、逆川との合流地点付近から南東に広がる上野台北半部にある西ヶ原遺跡群（北27）内の飛鳥山・御殿前・西ヶ原貝塚、田端町（北31）などが挙げられる。石神井川を遡ると、西原（板171）と久保田（板172）が兩岸にあり、さらに上流の田柄川（北）・石神井川（南）の合流域には、学史上著名な茂呂（板122）、栗原（板106・練129）、小山台・小茂根小山（板118）、茂呂山東方（板119）、根ノ上（板113）、向原（板124）、小竹（練116）、小竹町二丁目（練118）などがある。その上流域は、石神井川本流域（練馬区）に集中し、北を流れる田柄川流域には遺跡が見られない。東早淵（練143）、高稲荷（練114）、栗山（練108）、さらに上流の尾崎（練98）、中村橋（練89）、貫井二丁目（練91）、田島（練94）と続く。最上流部には鈴木遺跡（小平市）が存在する。

上野台中～南部域では谷田川流域に上流から道灌山（荒4）、上野忍岡（台4―1・5・8）、千駄木三丁目南（文108）、千駄木貝塚（文25）、本郷台遺跡群（文47）、真砂町（文51）、弓町（文33）、本郷一丁目南（文103）などが挙げられる。

豊島台とその南の淀橋台を画する神田川・妙正寺川流域では、前者（新宿区）に穴八幡神社（新

60)、下戸塚(新49)、西早稲田三丁目(新80)、No3(新3)、高田馬場三丁目(新65)、後者(新宿・中野・練馬区)に上落合二丁目(新77)、落合(新2)、妙正寺川No1(新35)、新井三丁目(中53)、南於林(練152)、中村南(練120)などが挙げられる。

総じてみると、台地崖線際に分布は集中し、河川中～上流域には希薄となる。本遺跡の旧石器時代はナイフ形石器が中心であり、成増～赤羽台に続く遺跡群の中での位置付けが重要である。

縄文時代

草創期～晩期に至るまで多数の遺跡が存在する。その多くが複数時期にわたって活動の痕跡がみられるもので、これは前後の時代にも共通することでもある。以下、時期別に概観する。

・草創期

遺跡数は全般的に少ない。赤羽台周辺では赤羽台(北5)、出井川右岸の前野田向(板98)の二ヶ所で、赤羽台では有茎尖頭器、田向では隆起線文土器が出土している。本郷台では、十条久保(北47)、西ヶ原貝塚(北27)から有舌尖頭器が出土した。石神井川流域をみると、久保田(板172)があり、向原(板124)では隆起線文土器が出土している。さらに上流の栗山(練108)、尾崎(練98)、田島(練94)、武蔵関北(練42)などが点在する。上野台南部では本郷台遺跡群(文47)、神田川流域では上流部の妙正寺川No1(新35)がある。第8図からは外れるが、百人町三丁目西(新79)では隆起線文土器が個体で検出されている。

・早期

赤羽台周辺では、赤羽台(北5 前半～後半)、島下(北13)、桐ヶ丘(北8)、北側崖線下の袋低地(北4 前・後半)などが挙げられる。赤羽台では後半期の住居跡が検出されている。西側の成増台にかけては、桐ヶ丘に続く小豆沢東原・宮ノ前(板105 前半)、小豆沢貝塚(板104)、出井川右岸の志村・志村坂上・四枚畑(板99 前半)、前野田向(板98 前半住居跡21軒)、志村城山(板101 前半)、中台町東谷域の前野日暮久保・兎谷(板94 前・後半)、中台三丁目東丘陵・島中(板79 前～後半)、中台東谷(板76 前・後半)、中台町西ノ谷の中台三丁目南・南の丘(板83)、西台東谷域の中台馬場崎貝塚(板71 前・後半)、西台後藤田(板58 後半)、徳丸谷域の五段田(板63 前～後半)、西台(板62 中葉・後半)、徳丸・四葉地区の徳丸高山(板53 前・後半)、徳丸東・北野神社(板54 前・後半)、徳丸石川・三ツ和(板52 前・後半)、徳丸森木(板51 前・後半)、四葉地区(板39～42 前～後半)、松月院境内・大門・赤塚下寺家番匠免(板33 前半、後半住居跡)、赤塚東谷の赤塚城址(板28)、赤塚原(板14)、白子川右岸域の成増天神脇(板8 後半)、成増との山(板3 中葉・後半)、成増百向・新田原(板2 前・後半)、成増一丁目(板1 後半)が並ぶ。また、荒川低地の早瀬前・徳丸大橋(板133)でも土器が出土している。

十条台では、清水坂(北18 末葉)、上野台北部では飛鳥山(北27 前・後半)、東谷戸(北44 後半)、田端西台通(北41 前半)、やや台地奥の染井(豊5)、崖線下微高地に中里(北30 前・後半)、南部では上野忍岡(台4 前・後半)、千駄木三丁目南(文108 後半)、千駄木貝塚(文25 前・後半)、弥生町遺跡群(文28 前・後半)、湯島(切通し北)貝塚(台10・文40)、真砂町(文51 後半)、弓町(文33 後半)などがある。

石神井川流域では、下流より加賀一丁目(板112 前半)、「稲荷台式土器」の標識遺跡である稲荷台(板111 前半)、仲宿(板170 後半)、西原(板171 中葉・後半)が続き、間隔をあけた

上流に、向原(板124 後半)、根ノ上(板113 前～後半)、小山台・小茂根小山(板118 前・後半)、茂呂(板122 前半)、栗原(板106・練129 前・後半)がまとまる。その上流では、東早淵(練143 前・後半)、高稲荷(練114 前・後半)、中宮(練101 前半)、栗山(練108 後半)、練馬城跡(練130 前～後半)、尾崎(練98 前・後半)、田島(練94)、武蔵関北(練42)が存在する。中宮では住居跡が検出されている。

神田川流域では、左岸に雑司が谷(豊12)、右岸に下戸塚(新49 前・後半)、西早稲田三丁目(新80 前・後半)、上流に高田馬場三丁目(新65 前半)があり、上流の妙正寺川流域では落合(新2 後半)、妙正寺No1(新35 前～後半)、遠藤山(中57)、光徳院(中58)、松が丘(中99 前～後半)、片山(中44 前・後半)、新井三丁目(中53 前～後半)、野方小学校(中52)、江古田(中27 前半)、南於林(練152 前～後半)などが分布する。片山・新井三丁目では住居跡が検出されている。

・前期

台地縁辺部を中心に大規模集落・貝塚などが展開している。赤羽台周辺では、大六天(北12 初頭)、赤羽台(北5 前～後半)、袋低地(北4 前・後半)、小豆沢宮ノ前(板105 後半)、小豆沢貝塚(板104)などがある。

赤羽台から続く西側では、出井川谷域に志村城山(板101 初～後半)、志村(板99 初～後半、関山・諸磯式期住居跡)・志村坂上(同 前・後半、黒浜式期住居跡)、四枚畑貝塚(同 後半、諸磯式期住居跡)、前野田向(板98 初～後半、下吉井式・諸磯式期住居跡)、出井北(板97)、出井南(板96)、中台町東谷・中ノ谷には前野日暮久保(板94 初～後半)、中台三丁目東丘陵・畠中(板79 後半)、中台東谷(板76 初頭・前半)、中台三丁目南(板83 後半)、西台東谷には中台馬場崎貝塚(板71 前・後半、諸磯式期住居跡)、西台後藤田(板58)、五段田(板63 前半、黒浜式期住居跡)、徳丸谷域には西台(板62 後半)、徳丸・四葉地区には徳丸高山(板53 前・後半)、徳丸北野神社(板54 初頭・前半)、徳丸三ツ和(板52 初頭・後半)、徳丸石川(同 前・後半)、徳丸森木(板51 前・後半)、四葉地区(板38～42 初～後半 諸磯式期住居跡)、大門(板33 前・後半)・赤塚下寺家番匠免(同 前・後半、黒浜式期住居跡)・松月院境内(同 前・後半)、赤塚東谷の赤塚城址(板28 前半・後半)、赤塚城址貝塚(板26 前・後半)、菅原神社台地上(板7 前・後半、黒浜式期住居跡)、成増との山(板3 初～後半)、成増百向(板2 初～後半)、成増一丁目(板1 初頭・前半)とほぼ全域で検出されている。

十条台では、清水坂(北18 花積下層式期貝塚)、十条台遺跡群(北19)の宿(二ツ木式・関山式期住居跡)・亀山(関山式期住居跡)がある。石神井川流域をみると、十条台奥に下十条(北39 前半)、加賀一丁目(板112 前・後半)、久保田(板172 前・後半)・西原(板171 前・後半、黒浜式期住居跡)、向原(板124 前半)・根ノ上(板113 前・後半)・小山台(板118 初～後半)・茂呂山東方(板119 前・後半)・茂呂(板122)・栗原(板106・練129 前・後半)、東早淵(練143 前・後半)、栗山(練108 前・後半、諸磯式期住居跡)、練馬城跡(練130 前・後半)、尾崎(練98 前半)、田島(練94)などが並ぶ。

上野台北部では、西ヶ原遺跡群(北27)の飛鳥山(前半期集落)・御殿前(関山式期集落)・七社神社前(黒浜～諸磯式期集落)・西ヶ原貝塚(黒浜式期集落・後半)、中里(北30 初～後半)、中里

峡上(北40 前・後半)、田端町(北31 前半)、田端西台通(北41 黒浜式期住居跡)、田端不動坂(北32 前・後半)、道灌山(荒4 前・後半)、延命院貝塚(荒1 前・後半)、谷田川対岸の染井(豊5 後半)、駒込一丁目(豊8 初～後半)、動坂(文14 前半)などが林立する。特に七社神社は諸磯式期の環状住居跡群と墓域が検出され、この時期の拠点集落と目される。中里では初頭期の集石がある。上野台南部では、千駄木三丁目(文108 初頭・前半)、千駄木貝塚(文25 前・後半)、上野忍岡遺跡群(台4 前・後半)、上野桜木町(台41)、弥生町遺跡群(文28 後半)、本郷台遺跡群(文47 前・後半)、湯島(切通し北)貝塚(台10・文40 初頭)、龍岡町(文74 後半)などがある。

谷端川流域では、下流域に、お茶の水貝塚(文38 前・後半 地図外)・本郷元町(文58 初～後半 地図外)、弓町(文33 初～後半)、真砂町(文51 前・後半)、上流には氷川神社裏貝塚(豊1)・池袋東貝塚(豊2 前・後半)がある。

神田川流域では、左岸の武蔵関北(練42)、右岸の下戸塚(新49 初～後半)・西早稲田三丁目(新80 初～後半)、高田馬場三丁目(新65 前・後半)・上落合二丁目(新77)、上流の妙正寺川では、落合(新2 初～後半)、妙正寺川№1(新35 前・後半)、松が丘(中99 前・後半)、片山(中44 前・後半)、御嶽(中25)、北江古田(中27 前・後半)、南於林(練152 前・後半)、新井三丁目(中53 前・後半)などがある。

前期前半期(関山式期)に至り、明確な集落としての存在が確認し得るようになる。後半期(諸磯式期)には環状を呈し、墓域をもつ集落も出現する。

・中期

台地縁辺で貝塚の形成はみられるが大規模な集落は検出されていない。赤羽台周辺では、赤羽台(北5 前・後半)・袋低地(北4 初頭～後半 貝塚)・袋西浦(北48 前・後半)、大六天(北12 初頭)、桐ヶ丘(北8)、小豆沢宮ノ前(板105 後半)、小豆沢貝塚(板104)と続く。

出井川谷右岸域では、志村城山(板101 初～後半)・志村坂上(板99 初～後半 加曾利E式期住居跡)・四枚畑(同)・志村坂上西方(板100)・前野田向(板98 初頭・後半 加曾利E式期住居跡)・出井北(板97)、中台町東谷では前野日暮久保・兎谷(北94 後半)、中台三丁目東丘陵(板79 後半)、中台東谷(板76 初頭・後半)、中台町中ノ谷では、中台三丁目南・南の丘(板83)、西台東谷では中台馬場崎貝塚(板71 後半)、西台後藤田(板58 初頭・後半)、徳丸谷域では五段田(板63 後半)、西台(板62 前・後半)、上台(板61)などがある。徳丸・四葉地区では、徳丸高山(板53 前・後半)、徳丸東・北野神社(板54 前・後半)、徳丸石川・三ツ和(板52 後半)、徳丸森木(板51 初頭・後半)、四葉地区(板39～42 後半)、松月院境内・大門・瀧の上(板33 初頭・後半)、白子川右岸域では成増天神脇(板8 後半)、成増との山(板3 初～後半)などがみられる。

十条台では南橋(北19 初頭・後半)、十条久保(北47 前半)がある。

石神井川流域では、加賀一丁目(板112 初頭)、山之上(板174 後半)、やや間隔を空けて西原(板171 初頭・後半)、久保田(板172 後半)、また間隔を置いて、小山台・小茂根小山(板118 初頭)、根の上(板113 後半)、茂呂山東方(板119 後半)、向原(板124 初頭)、小竹東(練153 後半)、小竹町二丁目(練118 初～後半)がまとまる。その上流では、東早瀬(練143 後半)、高稲荷(練114 後半)、栗山(練108 初～後半)、練馬城跡(練130 前・後半)、中村橋(練89 前・後半)、

貫井二丁目(練91 初～後半)と並ぶ。

上野台北部では、西ヶ原遺跡群(北27)の飛鳥山(初～後半)・御殿前(初～後半)・七社神社前(初～後半)・七社神社裏(初～後半)・西ヶ原貝塚(後半)・大蔵省印刷局内(後半)・南北線西ヶ原駅(後半)などがある。勝坂式・加曾利E式期の住居跡、貝塚が分布する。中里貝塚(北30 初～後半)では最大4.5mの厚さを測る貝層が検出され、この時期の貝塚として傑出した存在となっている。丸木舟(前半期)も出土した。さらに東谷戸(北44 前半、後半住居跡)、中里峽上(北40 後半住居跡)、田端町(北31 後半)、田端西台通(北41 後半)と続いている。

上野台南部では、日暮里延命院貝塚(荒1 初～後半)、領玄寺貝塚(台1 前～後半)、上野忍岡遺跡群(台4 初～後半)がある。谷田川を挟んだ対岸には染井(豊5 後半)、駒込一丁目(豊8 前～後半)、上富士前町(文16 後半)、駒込富士前町(文68 初頭)、動坂(文14 前～後半住居跡)、団子坂上、千駄木三丁目南(文97・108 初～後半)、千駄木貝塚(文25 前半、後半住居跡)、弥生町遺跡群(文28 後半)、本郷台遺跡群(文47 後半)、駒込迫分町南(文55 後半)、湯島(切通し北)貝塚(台10・文40 後半)が並ぶ。

谷端川下流域ではお茶の水貝塚(文38 前～後半 地図外)、弓町(文33 初～後半)、真砂町(文51 初～後半)、小石川植物園内貝塚・原町(文21 前～後半住居跡)がある。

神田川流域では左岸の武蔵関北(練42)、右岸の下戸塚(新49 初～後半)、西早稲田三丁目(新80 初頭住居跡、前～後半)、学習院大学周辺(豊3 初～後半)、高田馬場三丁目(新65 後半)、上流の妙正寺川流域では落合(新2 初～後半)、妙正寺川№1(新35 初～後半)、松が丘(中99 初～後半)、片山(中44 前～後半)、江古田(中27 初～後半)、南於林(練152 初～後半)、新井三丁目(中53 初～後半、前半期住居跡)などが挙げられる。落合遺跡は住居跡群が環状配置を呈する。

最後に荒川低地をみると、海退の進行により形成された崖線から離れた低地帯に遺跡が検出される。板橋区早瀬前(板133 後半)、舟渡(板134 初頭～後半)、北区宮堀北(北43 後半)などで、現河川際に立地している。

台地縁辺に沿って貝塚の形成が顕著にみられるが、いわゆる大規模拠点集落の形成は各河川中～上流域の河岸段丘沿いとなる。

・後期

台地縁辺における貝塚の形成は中期に引き続き活発であり、場所によってはそれを凌駕するところもある。赤羽台周辺では、赤羽台(北5 初頭～後半)、袋低地(北4 初～後半)、鳥下(北13)、桐ヶ丘(北8)、小豆沢東原(板105 初頭～後半)、小豆沢貝塚(板104 前～後半)などがある。

出井川谷域では志村(板99 前～後半)、志村坂上(同 初頭期住居跡、前～後半)、前野田向(板98 初頭)、志村城山(板101 前半)、前野熊野北(板88 前～後半)、前野日暮久保(板94)がある。中台町東谷域では前野兎谷(板94 前半)、中台町中ノ谷域では中台三丁目東丘陵(板79 初頭)、中台台中(同 前～後半)、西台東谷域では中台馬場崎貝塚(板71 前～後半)、西台後藤田(板58 前～後半)、徳丸谷域では五段田(板63 初～後半)、徳丸高山(板53 初～前半)、徳丸東・北野神社(板54 前～後半)、徳丸石川・三ツ和(板52 前～後半)、徳丸森木(板51 前半)、赤塚大塚原(板9 初～前半)などがある。徳丸・四葉地区では四葉地区(板39～42 前～後半)、

松月院境内(板33 後半)・大門(同 前半期住居跡・後半)・赤塚下地家番匠免(同 前半)・瀧の上(同 前半期住居跡)がある。

白子川右岸域では成増天神脇(板8 初・前半)、成増との山(板3 初・前半)、成増百向(板2 前半)などが挙げられる。

十条台では、南橋(北19 後半)、十条久保(北47 初～後半)程度で他の時期に比べ密度は薄い。

石神井川流域では加賀一丁目(板112 後半)、久保田(板172 初～後半)、西原(板171 初頭)、根の上(板113 初・前半)、向原(板124 前半)、栗原(板106 前半)、小竹町二丁目(練118 初頭)、東早淵(練143 前半)、栗山(練108 初～後半)、練馬城跡(練130 初・前半)、中村橋(練89 初・前半)、貫井二丁目(練91 初・前半)などがある。久保田・貫井二丁目で初頭期の住居跡が検出されている。

上野台北部では西ヶ原遺跡群(北27)において飛鳥山(初・前半)・御殿前(初・前半住居跡、後半)・七社神社前(初～後半)・七社神社裏(初・前半貝塚、後半)、東谷戸(北44 前半住居跡)、中里峠上(北40 前半貝塚)、中里(北30 初～後半)、田端不動坂(北32 前半)、道灌山(荒4 初頭)が密集するが、その中心となるのは西ヶ原貝塚(北27 初～後半貝塚)である。学史上著名な貝塚であり、ブロック状の貝塚が環状に分布する。住居跡は30軒を越え、当該期の一大拠点集落となっている。

上野台南部では日暮里延命院貝塚(荒1 初～後半)、領玄寺貝塚(台1 初頭)、天王寺貝塚(台2 前・後半)、上野忍岡遺跡群(台4 前・後半)新坂貝塚(台6 後半)などが並ぶ。谷田川右岸域をみると下流からお茶の水貝塚(文38 前・後半)、本郷元町(文58 初～後半)、湯島(切通し北)貝塚(台10・文40 前・後半)、茅町(台35 後半)、本郷台遺跡群(文47 後半)、駒込追分町南(文55 前半)、弥生町遺跡群(文28 初～後半)、千駄木貝塚(文25 初～後半)、駒込神明町貝塚(文27 前・後半)、駒込一丁目(豊8 前・後半)などが河岸段丘縁辺に並ぶ。

谷端川流域では真砂町(文51 初～後半)、小石川植物園内貝塚(文21 前・後半)があり、上流部に氷川神社裏貝塚(豊1 前・後半)がある。

神田川流域では下戸塚(新49 前半)、西早稲田三丁目(新80 前・後半)、高田馬場三丁目(新65 前・後半)、上流の妙正寺川流域では落合(新2 初～後半)、妙正寺川No.1(新35 初～後半)、松が丘(中99 初・前半)、片山(中44 初・前半)、江古田(中27 初～後半)、新井三丁目(中53)、南於林(練152 前・後半)などがある。

上野台北部及び南部に貝塚が集中し、成増台北部を中心とした台地縁辺部に密集する。中期に比較して河川中・上流域での分布がやや希薄という前期と同様の傾向を示す。

・晩期

前代までに比べ、遺跡数は減少する。ほぼ台地縁辺に限定される。赤羽台周辺では赤羽台(北5 前・後半)、袋低地(北4 前・後半)、袋西浦(北48 前・後半)がある。西側では小沢沢貝塚(板104 前半)が著名である。

出井川谷では志村・志村坂上(板99 前半)、前野田向(板98 後半)がある。中台町東谷には中台島中(板79 前半)、中台東谷(板76 前半)、西台東谷には中台馬崎貝塚(板71 前半)、西台後藤田(板58 前半)がある。徳丸谷では五段田(板63 前半)、徳丸東(板54 前半)、徳丸石川(板52 前半)、徳丸森木(板51 前・後半)、徳丸・四葉地区では大門(板33 前半)、四

葉地区(板39～42 前半)がある。各支谷などに2～3遺跡がみられるのみで、安行3a～dまでの前半期がほとんどである。

十条台から石神井川流域では加賀一丁目(板112 前半)があるのみである。上野台北部では西ヶ原遺跡群(北27)の飛鳥山・御殿前・西ヶ原貝塚、中里(北30)がある。いずれも前半期である。上野台南部では確認されていない。谷田川流域にはお茶の水貝塚(文38 前半)、湯島(切通し北)貝塚(文40 前半)、茅町(台35 前半)、本郷台遺跡群(文47 前半)、弥生町遺跡群(文28 前半)、千駄木貝塚(文25 前半)、駒込神明町貝塚(文27 前半)、駒込一丁目(豊8 前・後半)がある。大半が前半期のものである。谷端川流域では小石川植物園内貝塚(文21 前半)、上流に氷川神社裏貝塚(豊1 前半)があるのみである。神田川流域では上流の妙正寺川に上落合二丁目(新77 後半)、南於林(練152 前半)のみである。

本時期から弥生時代前期にかけて本地域での土地利用の痕跡は僅少と言わざるを得ない。

弥生時代

赤羽台を含む本郷台・成増台・上野台には中期後半～後期の遺跡が密集し、大規模集落が出現する。環濠を伴うものも多い。以下、時期別に概観する。

・前期

本地域ではほとんどみられない。赤羽台周辺では袋低地(北4)で条痕文系の甕が出土している。扶桑動熱内(北2)では有角石斧が出土した。他には小豆沢宮ノ前(板105)と石神井川流域の久保田(板172)のみである。

・中期

中期においても中葉段階までは遺跡数はごく僅かであるが後半期に至り台地縁辺部を中心に集落形成が開始される。河川中・上流域には分布はみられない。

赤羽台周辺では赤羽台(北5)の星美学園地区で集落と墓塚が検出されている。出井川谷の志村城山(板101)、中台町東谷の中台富中(板79)は蓮根川を挟んだ両岸にある。四葉地区の沖山(板41)は中期前半の土器も出土している。出口谷の赤塚氷川神社北方(板22)は後半期から奈良時代まで続く集落である。白子川右岸域では菅原神社台地上(板7)、成増との山(板3)も後半期より集落形成が始まる。

十条台では十条台遺跡群(北19)の南橋・亀山で集落が展開する。亀山は環濠を伴う。宿では方形周溝墓が検出されている。上野台北部の西ヶ原遺跡群(北27)では飛鳥山で環濠集落、御殿前で方形周溝墓が検出された。中里(北30)からは土器が出土している。田端不動坂(北32)では集落が展開する。上野台南部では道灌山(荒4)で環濠集落、谷田川を挟んだ対岸の団子坂上・千駄木三丁目(文97・108)でも環濠集落が確認されている。下流の本郷台遺跡群(文47)では土器が出土している。

赤羽台・十条台・上野台北部・同南部、出井川流域・四葉地区・白子川右岸域などには集落が1～2単位存在し、環濠を伴うものとそうでないものがある。それらの多くが後期へと継続していく。

・後期

中期の集落が継続・発展していく中、周囲にも広がりを見せる。また河川中・上流域にも広がる。赤羽台周辺では赤羽台(北5)で環濠集落とその外縁にも集落が展開する。道台遺跡(北49)・大六

天(北12)では環濠を伴わない集落が展開する。西側では小豆沢宮ノ前(板105)で方形周溝墓が検出されている。出井川谷では志村坂上(板99)、志村坂上西方(板100)、志村城山(板101)で集落が展開する。中台町東谷～中ノ谷では学史上著名な前野町(板94)、中台島中(板79)、中台三丁目南(板83)がある。西台東谷と徳丸谷開口部に挟まれた台地には西台後藤田(板58)、五段田(板63)、西台(板62)がある。徳丸谷北方の徳丸・四葉地区では徳丸高山(板53)、徳丸東・北野神社(板54)、徳丸石川・三ツ和(板52)、徳丸森木(板51)、四葉宮前(板38)が谷北側に並ぶ。四葉地区(板39～42)では環濠集落が展開される。松月院境内・赤塚下寺家番匠免(板33)も集落が検出された。赤塚東谷を挟んで西側対岸には赤塚城址(板28)がある。白子川右岸域では赤塚氷川神社北方(板22)、成増天神脇(板8)、菅原神社台地上(板7)、成増百向・新田原(板2)、成増との山(板3)、成増一丁目(板1)で集落が展開される。北部荒川低地でも早瀬前(板133)、高島平北(板168)、舟渡(板134)などで、住居跡・土器が検出されている。

十条台では十条台遺跡群(北19)の南橋・宿、十条久保(北47)で集落がある。荒川沿いの低地にも遺跡が点在し、志茂(北35)、豊島馬場(北42)、都民ゴルフ場(北36)などがみられる。豊島馬場は方形周溝墓が検出されている。石神井川流域では下十条で土器が出土している。中流域の西原(板171)では集落、久保田(板172)では土器が検出されている。さらに上流の田柄川との合流地域では小山台・小茂根小山(板118)、栗原(板106)でも集落が展開する。上野台北部では西ヶ原遺跡群(北27)の飛鳥山・御殿前・七社神社前・七社神社裏、中里峠上(北40)、田端町(北31)、田端西台通(北41)、田端不動坂(北32)と集落が林立する。御殿前は環濠を伴う。また、田端西台通では方形周溝墓から鉄剣・ガラス小玉などが出土した。南部では新坂貝塚(台6)で土器が出土しているが北部に比べ希薄であり、対岸の谷田川右岸域に遺跡が集中する。下流から湯島(切通し北)(台10)、本郷台遺跡群(文47)、学史上著名な弥生町遺跡群(文28)、千駄木貝塚(文25)などが並ぶ。上流には上富士前町(文16)、駒込一丁目(豊8)がある。

谷端川流域は伝通院裏貝塚(文11)がある。神田川流域では下戸塚(新49)で環濠集落、穴八幡神社(新60)で集落、西早稲田三丁目(新80)で集落と方形周溝墓、高田馬場三丁目(新65)で集落が展開する。上流の妙正寺川流域では、落合(新2)で集落、新井三丁目(中53)で集落と方形周溝墓が検出されている。中期から継続する集落に加え、新たに後期から成立する集落が多数存在する。特に台地縁辺部での密集度は高い。

古墳時代

・弥生時代終末～古墳時代初頭

上述した弥生時代後期から継続する集落が存在する。

赤羽台周辺では、赤羽台(北5)は各(八幡神社・星美学園・国立王子病院)地区で継続して営まれる。袋低地(北4)では土器が出土している。西側の出井川谷では志村(板99)で集落と方形周溝墓が新たに展開し、志村坂上(同)・志村城山(板101)では継続した集落が展開する。中台町東谷では前野塚谷(板94)に集落がある。徳丸谷の五段田(板63)も継続集落である。同谷北岸の徳丸高山(板53)、徳丸東・徳丸北野神社(板54)、徳丸石川・三ツ和(板52)、四葉宮前(板38)、松月院境内・赤塚下寺家番匠免(板33)なども継続集落である。赤塚東谷では赤塚城址(板28)、白子川右岸域の赤塚氷川神社北方(板22)、成増天神脇(板8)、成増一丁目(板1)なども継続して集落が営ま

れる。荒川低地では早瀬前（板 133）、舟渡（板 134）がある。

十条台では十条台遺跡群（北 19）の南橋・亀山、十条久保（北 47）で集落が継続する。石神井川流域では加賀一丁目（板 112）がみられるのみで、上流域に分布はみられない。低地内自然堤防上には志茂（北 35）で円形周溝墓、豊島馬場（北 42）で集落・方形周溝墓が展開している。上野台北部では西ヶ原遺跡群（北 27）の飛鳥山・御殿前・七社神社前・七社神社裏など継続した集落が並ぶ。その南には田端西台通（北 41）、田端不動坂（北 32）が続く。上野台南部では天王寺貝塚（台 2）で土器が出土している。谷田川流域では本郷台遺跡群（文 47）が継続集落である。谷端川流域では伝通院裏貝塚（文 11）も継続集落である。神田川流域では下戸塚（新 49）、六八幡神社（新 60）、西早稲田三丁目（新 80）が継続している。各河川上流域には分布がみられない。

・中期

概ね集落形成は規模も小さく、分布も希薄である。

赤羽台周辺では赤羽台（北 5）、稲付公園（北 16）で小規模な集落があり、袋低地（北 4）で土器が出土している。成増台では、出井川谷の志村城山（板 101）、赤塚東谷の松月院境内（板 33）で土器がみられ、赤塚氷川神社北方（板 22）で集落が営まれる程度である。荒川低地では早瀬前（板 133）、高島平北（板 168）、舟渡（板 134）で土器がみられる。十条台では十条台遺跡群（北 19）の南橋に集落がある。低地においては宮堀北（北 43）、都民ゴルフ場（北 36）で土器が出土している。その他は希薄であり、神田川流域の下戸塚（新 49）がみられる程度である。

・後期

台地上に小規模な円墳を主体とする古墳群が形成される。赤羽台周辺では赤羽台古墳群（北 6）、ミタマ古墳（北 10）、天王塚古墳（北 11）、大塚古墳（北 14）、小豆沢観音塚古墳（板 163）、お伊勢塚（板 158）などがあるが、時期や単独か否かなど不明な点もある。成増台では徳丸谷の五段田（板 63）、四葉地区（板 42）、松月院境内（板 33）、菅原神社台地上（板 7）で古墳がみられる。十条台では十条台古墳群（北 45）、富士塚古墳（北 20）、王子稲荷裏古墳（北 22）がある。上野台北部では飛鳥山古墳群（北 46）、甲冑塚古墳（北 28）、田端西台通古墳群（北 41）などがあり、石神井川右岸には四本木稲荷古墳（北 24）、滝野川古墳（北 26）がある。上野台南部では摺鉢山古墳（台 3）、蛇塚古墳（台 13）、桜雲台古墳（台 14）などがある。谷田川と谷端川に挟まれた台地上に駒込古墳（豊 9）、富士神社古墳（文 15）、曙町古墳（文 13）、白山神社古墳（文 23）、がまとまる。やや下流には椿山古墳（文 37）がある。神田川流域では大塚古墳（文 2）、下戸塚（新 49）、上流の妙正寺川流域では氷川神社付近古墳（中 102）がある。

集落をみると、赤羽台周辺では赤羽台（北 5）、道合遺跡（北 49）がある。袋低地（北 4）、袋西浦（北 48）でも遺構が検出されている。成増台にかけては、小豆沢宮ノ前（板 105）で土器が出土している。出井川谷の志村城山（板 101）、前野田向（板 98）、中台町東谷の中台島中（板 79）、西台東谷の西台後藤田（板 58）、徳丸谷の徳丸東（板 54）、四葉地区（板 40）、松月院境内（板 33）、白子川右岸の赤塚氷川神社北方（板 22）など、小支谷に 1 遺跡前後が点在する。十条台では南橋（北 19）がある程度である。荒川低地では宮堀北（北 43）がある。石神井川流域では下流の下十条（北 39）、中流の小山台・小茂根小山（板 118）に集落があるが、分布は希薄である。上野台北部では、西ヶ原遺跡群（北 27）の御殿前・七社神社裏・西ヶ原貝塚、中里峽上（北 40）、田端町（北 31）、田端不

動坂(北32)などが並ぶ。南部では上野忍岡遺跡群(台4)がある。谷端川流域では伝通院裏貝塚(文11)がみられる。神田川流域では下戸塚(新49)、西早稲田三丁目(新80)、学習院大学周辺(豊3)、高田馬場三丁目(新65)、上落合二丁目(新77)、上落合二丁目西(新8)などが並ぶ。妙正寺川から井草川では平和の森公園北・新井三丁目(中53)がある。

古代

道合・赤羽上ノ台遺跡を含む赤羽台・十条台・上野台などは、古代において武蔵国豊島郡に含まれる地域である。豊島郡衙は、7世紀後半の評制下から御殿前(北29)に置かれ、10世紀前半まで存続する。近年の調査において、評制下の正倉域、8世紀以降の正倉院内建物・区画大溝などが相次いで検出され、郡衙全体の構造や変遷を考える上での貴重な資料が蓄積されつつある。また、この豊島郡衙に密接な関連をもつとされる中里峡上(北40)では、竪穴建物から扉が出土している。

・奈良時代

赤羽台周辺では袋低地(北4)で土器が出土している。赤羽台(北5)国立王子病院地区では竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝などが検出されている。隣接する大六天(北12)では土器が検出された。桐ヶ丘(北8)は学史的にも著名な遺跡である。さらに隣接する小豆沢東原(板105)で集落、小豆沢宮ノ前(同)で土器がある。出井川谷では前野田向(板98)、志村坂上(板99)、志村城山(板101)などが並ぶ。中台町東谷には前野兎谷(板94)、中台台中(板79)がある。西台東谷～徳丸谷には隣接して西台後藤田(板58)、五段田(板63)がある。徳丸谷北岸には徳丸東(板54)、徳丸(板57)、四葉地区(板39～42)四葉宮前(板38)、赤塚城址(板28)が並ぶ。白子川右岸域には赤塚氷川神社北方(板22)、成増天神脇(板8)がある。

十条台では十条台遺跡群(北19)の南橋・宿、十条久保(北47)、その西側の下十条(北39)・加賀一丁目(板112)で集落が展開する。荒川低地には宮堀北(北43)、豊島馬場(北42)がある。石神井川流域では久保田(板172)で土器が出土し、上流の小山台・小茂根小山(板118)で集落が展開する。上野台北部では郡衙周囲の西ヶ原遺跡群(北27)の飛鳥山・御殿前・七社神社前に集落が展開する。さらに中里峡上(北40)、田端町(北31)、田端西台通(北41)、田端不動坂(北32)と集落が林立する。中里峡上は上述のとおり、郡衙と関連が深いとされ、古墳時代後期から平安時代まで集落が連綿と続く。近年の調査で、ガラス小玉の鍍型が出土している。中里(北30)でも遺構が検出された。南部では上野忍岡遺跡群(台4)で集落が展開する。谷田川流域では湯島(切通し北)(台10)、本郷台遺跡群(文47)、団子坂上(文97)、上富士前町(文16)などがある。谷端川流域では弓町(文33)、真砂町(文51)がある。神田川流域では下戸塚(新49)、上流の妙正寺川では上落合二丁目(新77)、落合(新2)で集落が展開する。

集落以外に横穴墓が知られている。赤羽台周辺では堂山横穴墓(北3)、赤羽台横穴墓群(北7)、十条台には十条台小学校横穴墓(北21)がある。その他、妙正寺川流域に落合横穴墓群(新6)、貞源寺付近横穴墓群(中98)、江原二丁目横穴墓群(中97)がある。

・平安時代

奈良時代から継続する集落が多い。赤羽台周辺では赤羽台星美学園地区・国立王子病院地区(北5)で集落がある。北側の荒川低地には袋低地(北4)、浮間(北1)、舟渡(板134)がある。隣接する大六天(北12)では住居跡がある。桐ヶ丘(北8)、小豆沢東原・宮ノ前(板105)も継続している。

桐ヶ丘は、近年の調査で、寺院跡とみられる掘立柱建物跡が検出され、螺髪が出土した。出井川谷の前野田向(板98)、志村(板99)、志村城山(板101)、中台町東谷の前野兎谷(板94)、中台高中(板79)、西台東谷～徳丸谷の西台後藤田(板58)、五段田(板63)、徳丸谷北岸城の徳丸(板57)、四葉宮前(板38)、四葉地区(板39～42)、赤塚城址(板28)なども奈良時代からの継続である。徳丸北野神社(板54)は平安時代のみであるが、同一番号の徳丸東に奈良時代の集落がある。また、荒川低地の早瀬前(板133)でも遺構が検出されている。白子川右岸域には分布がみられない。

十条台では南橋・宿(北19)、十条久保(北47)などで集落が継続する。石神井川流域の下十条(北39)、久保田(板172)も同様である。上野台北部では西ヶ原遺跡群(北27)の飛鳥山・御殿前・七社神社前でも集落が継続する。さらに中里(北30)、中里峽上(北40)、田端町(北31)、田端西台通(北41)、田端不動坂(北32)、道灌山(荒4)と集落が続く。南部では上野忍岡(台4)が継続する。谷田川流域では湯島(切通し北)貝塚(台10・文40 後半)、龍岡町(文74)、本郷台遺跡群(文47)、団子坂上、千駄木三丁目南(文97・108)、上富士前町(文16)などがある。谷端川流域では弓町(文33)、真砂町(文51)がある。神田川流域では下戸塚(新49)、妙正寺川流域では上落合二丁目(新77)、落合(新2)などがある。

奈良・平安時代を通して、本郷台・成増台縁辺域に分布が密集している。

中世

北区は豊島氏の拠点地域であり、その本拠とされる平塚城跡(北27)が上野台北部に存在する。それに関連する豊島清光館跡(北37)、滝野川城跡(北38)が周囲にある。また、太田道灌に関連する稲付城跡(北15)が赤羽台亀ヶ池谷の南側先端部にある。板橋区内には志村城址(板102)、赤塚城址(板28)などがある。十条台の十条久保(北47)では南から北へ延びる鎌倉街道中ツ道が検出されている。荒川低地の舟渡(板134)では寺院か館に伴う大溝・井戸が検出され、袋西浦(北48)には井戸・溝等とともに居館跡の一部とそれを区画する方形の掘跡が検出されている。これは軍事・水運に関連する施設と考えられている。寺院・墓制関連のものとして、赤羽台(北5)から地下式横穴や骨蔵器が検出されている。御殿前(北27)でも無量寺に関わる土壇墓や地下式横穴を中心とした墓地在検出された。

その他、中世の遺構・遺物が検出された遺跡は以下のとおりである。赤羽台周辺では荒川低地の浮間(北1)がある。成増台に向かっては小豆沢東原(板105)、出井川谷では前野田向(板98)、志村城址周辺の志村・志村坂上(板99)、志村城山(板101)がある。徳丸谷北岸域には徳丸(板57)、四葉地区(板39～42)、赤塚城址東方の松月院境内・赤塚下地家番匠免(板33)がある。

十条台では宿(北19)があり、十条久保(北47)、加賀一丁目(板112)と続く。石神井川流域には久保田(板172)、小山台・小茂根小山(板118)がある。上野台北部では平塚城跡周辺の西ヶ原遺跡群(北27)の飛鳥山・御殿前、東谷戸(北44)から中里峽上(北40)、田端町(北31)、田端西台通(北41)、田端不動坂(北32)、道灌山(荒4)と続く。南部では上野忍岡(台4)がある。谷田川流域では上流部に偏り、駒込一丁目(豊8)、染井(豊5)、巢鴨(豊6)等となる。神田川流域では下戸塚(新49)、妙正寺川で江古田(中27)がみられる程度である。

近世

江戸時代の遺構・遺物は各遺跡でその量の多寡は別としてほぼみられる。台地上の遺跡では主に溝・

畑・道路跡が検出される。畑地としての土地利用が多い場所ではこれらの遺構が確認される。また、道路跡は近代～現代に続くものがみられ、戦後～高度成長期以前の土地利用（耕地区画、道路など）は江戸期まで遡れるものと言える。北・板橋区での主な当該期の遺跡としては、中山道の下板橋宿との関連が指摘される仲宿（板 170）があり、加賀一丁目（板 112）は加賀藩前田家下屋敷の一角に当たる。

また、上記中山道などの街道筋に当たる場所では宿駅などの施設・道路などが考えられる。上野台南部～谷田川・谷端川下流域は上野寛永寺や江戸府内の諸寺・神社、大名屋敷地、町家などが密集する地域になる。御府内の外縁部に当たる本郷台・成増台などの遺跡群においては、当該期の土地利用という視点での在り方を求めていく事が肝要と思われる。

2) 赤羽台の歴史的変遷

ここでは、道合・赤羽上ノ台遺跡が立地する赤羽台について、その土地利用の変遷（近世～現代）を概観する。また、赤羽台団地域の、前項にて触れ得なかった遺跡に関して述べていく。

赤羽台を含む赤羽地区は、江戸時代は武蔵国豊島郡岩淵郷に属していた。岩淵郷は岩淵宿（元禄年間～正保年間には岩淵町）・袋村・下村・赤羽根村・稲付村があり（小田原役帳に江戸岩淵五ヶ村と記載）、この赤羽根村が現在の赤羽台地区を含む一帯である。新編武蔵風土記稿によれば、家数 81、東西八町・南北六町半の広さであった。また、「…石神井用水を引沃けとも不足なれば別に溜井を設て助水とす、…村内日光御成道六町二十間餘掛れり、」とある（蘆田伊人 1981）。台地の上に集落はなく、その大半が畑地として利用されていたと思われる。御成道というのは、赤羽台の西側を走る国道 17 号線（旧中山道）の志村署前から北東に走る福寿通り（JR 線を潜り岩淵で国道 122 号線～旧岩淵街道～に合流する都道）の事と思われる。明治 13 年の地図（第 2 分冊第 2 図）をみるとこの道（板橋街道）は赤羽台団地北側を走る現在の通りより南側（赤羽台団地商店街通り）を走り、八幡坂に合流している。

また、集落は岩淵街道沿いと現赤羽西一丁目（静勝寺付近）に集中し、台地上にはみられない。江戸期の様相が明治初年間までは続いていたものと思われる。

明治に入り、赤羽の様相は一変する。後に軍都赤羽と呼ばれるように、相次いで軍事施設が現在の北区内一帯に建設されていった。明治 5 年に袋村に武蔵司の火薬庫、同 9 年に滝野川に板橋火薬製造所の分工場ができたのを皮切りに、王子地区では王子・十条・豊島、岩淵地区では袋・赤羽・稲付に兵舎・軍需工場・倉庫などが建設され、北区の面積の主要部分を占めることとなる。赤羽台においては、台地上に旧日本陸軍被服本廠が設置されることになるが、当初は被服倉庫として明治 24 年に設けられた。その後、本廠庁舎（本所横綱）と倉庫の分置の不便さからこれを赤羽に集中する事となり、大正 8 年に本廠・工場など全ての機関が移転した。これに伴い倉庫時代より敷地を拡張し、板橋街道を北西側に押し上げ（現在の位置）、南西側は火薬庫に隣接するほどになった。約 9 万坪といわれた面積は現在の赤羽台団地の範囲にほぼ相当する。貨物輸送のために板橋兵器庫から赤羽の北に続く軍用引き込み線（現在の緑道公園）からさらに分岐線が敷設され、現在の赤羽台西小学校～あかいとり幼稚園の敷地にかけてプラットフォームが設けられた。この時期（大正年間）の地図をみると、赤羽台周辺は、星美学園の地に工兵第一大隊兵営、王子病院の地は近衛工兵隊兵営、その南西側に射撃場・作業場がある。桐ヶ丘団地の一帯は火薬庫があり、西が丘には兵器庫があった。台地の上はほぼ軍事施

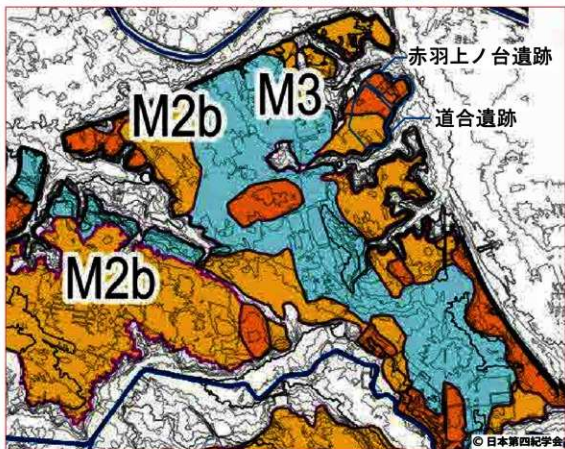
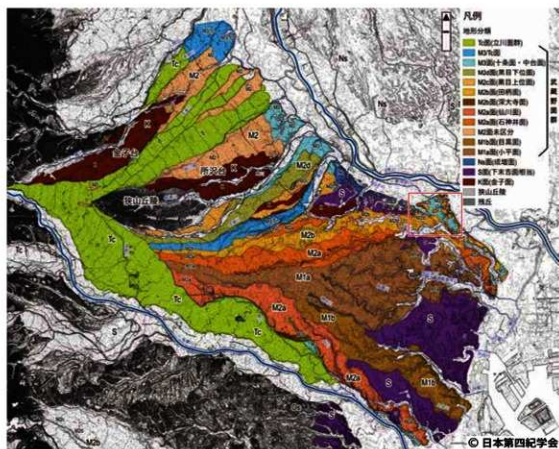
設で占められていたと言える。

昭和に入り、戦争の激化と共に、北区の軍事工場群も空襲の被害にさらされる。被服本廠も例外ではなく、昭和20年4月の赤羽空襲で焼失被害があった。同年8月の終戦を迎え、被服本廠は米軍に接収された。東京兵器補給廠(Tokyo Ordnance Depot - TOD)第3地区(赤羽ハイツ)として戦車などの修理工場として使用されていた。その後、昭和33年に接収解除となって大蔵省所管となり、団地建設が決定して34年に日本住宅公団への払い下げとなった。38年に完成した赤羽台団地は当時随一のマンモス団地として産声を上げ、現在に至っている。

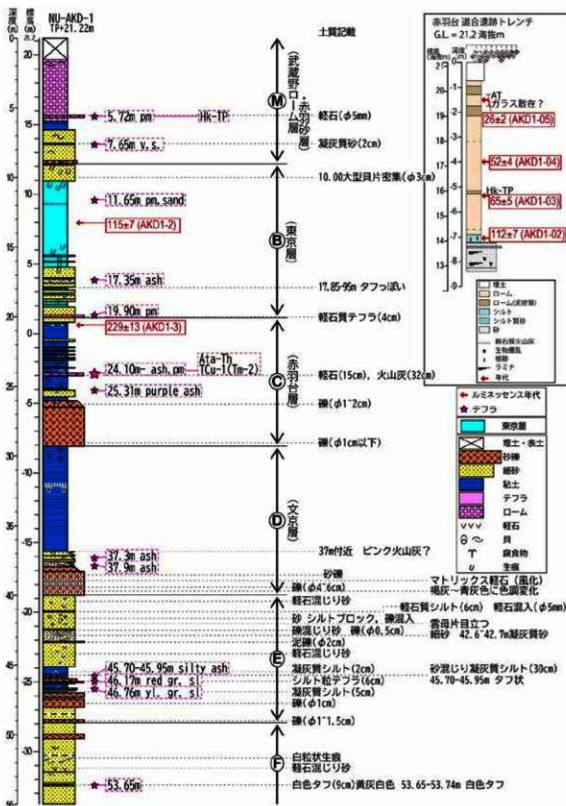
次に明治～昭和年間における当該地の考古学的知見を概観する。道合・赤羽上ノ台遺跡が位置する赤羽台団地には現在登録されている遺跡が5ヶ所存在する。東から赤羽上ノ台(70,000㎡ 旧団地1～11号棟、桐ヶ丘中学校-旧赤羽台中学校、旧赤羽台東小学校など)、道合(125,000㎡ 旧団地11～25・33～48号棟、商店街、公務員宿舎、消防署出張所など)、ミタマ古墳(団地商店街中庭)、天王塚古墳(団地じゃぶじゃぶ池公園内)、大六天(23,000㎡ ヌーヴェル赤羽台、公務員宿舎赤羽住宅など)が登録されている。団地範囲とほぼ同様に南東～北東側崖線と北西側都道445号線(旧板橋街道)に画された平坦面に立地する。これら遺跡の登録(現在の名称・範囲)は何度かの改定があり、道合遺跡は平成に入ってからの登録である。

上ノ台遺跡は「北区史」(昭和46年)が発行された段階では赤羽東小学校内遺跡(赤羽台か)となっている。この小学校校庭より縄文・弥生土器が採集されたことにより登録されたと思われる。また、明治末期に現在の駅前から団地に通じる坂道付近で山崩れがあり、深さ6mの横穴墓が発見され、素焼きの土器が少し出土したとある。さらに大正5・6年頃に赤羽台東小学校の北側崖線が崩れ、横穴墓と貝塚が偶然発見された事が伝えられている。上ノ台遺跡は平成2年(1990年)に試掘・発掘調査が行われ、縄文時代早期の炉穴、古代の住居跡が検出された。その成果を基に遺跡範囲が改定された。ミタマ・天王塚古墳に関しては、明治年間の記録が残る。その前提として、本遺跡西方にある大塚古墳(北区No14)について若干触れる。登録されている位置は赤羽西五丁目の公務員宿舎10号棟部分であるが、昭和22年の米軍による航空写真にはそれと思しきものはやや南側の6～8号棟部分に存在する。同古墳は、「岩淵町郷土誌」(平野・桜井 1979)によれば、「周囲約百七十尺、高さ約十五尺程」(高さ4.5m、直径約20m)で、墳頂部には「明治天皇駐蹕之跡」(明治7年の機動演習の際に行幸された記念)の碑が建っていた。昭和38年の航空写真には宿舎建物が完成している。同31年の写真には同地が更地となっており、宿舎建設に伴う造成により消滅したものと思われる。その規模からして古墳と同定されていた。この大塚古墳の周辺に13の「塚」が点在しており、「十三坊塚」と呼ばれていた。ミタマ・天王塚古墳はその中の一つとされた。上記岩淵町郷土誌の中には、明治14年の記録で「…今は被服本廠の敷地内になって第九号倉庫のあたりであるが、前記十三坊塚の一にサンオウ塚と云ふのがあって、当時これは赤羽の大久保萬右衛門の地所になっていた。同字の木村三次郎、齊藤李太郎の二人が、無断で夜中発掘したので、地主が憤慨して悶着が起り村内の者が間に立ってやうやく伸直りをしたと云ふ。其の時直刀も出たと云ふが判然しない。人頭骨は木村が大久保に見せに行った帰途崩れて了ひ、発掘数日後には二人の家族が皆瘧を病んだので、塚の主の祟りと怖れて、赤羽御嶽社の碑を建てて祀ったと云ふ。これは明治四十四年四月十四日のことで、…」とある。また一方、上記の出来事をミタマ古墳の事としている記述もある。天王塚古墳に関しては、大

正3・4年頃の被服本廠拡張工事に際し、石棺が発見され三体分の人骨が出土したことを伝えている。これらの記事から、ミタマ・天王塚古墳いずれにせよ石棺をもつ古墳が存在したこととなる。しかしながら、現在その記事の古墳を特定することはできない。ミタマ古墳の登録位置は1章で述べた赤羽台団地内試掘調査の際に、放射状にトレンチを入れた部分であるが、古墳の施設は検出されなかった。その地点より西側の都道にかかる半円状のエントランス部分のトレンチにおいて溝が検出され、報告ではミタマ古墳の周溝の可能性があるとしている。天王塚古墳の登録位置は、第Ⅱ次調査区内にあり、3区（じゃぶじゃぶ池公園）となっていた。調査の結果、周溝など古墳の施設は検出されなかった。大六天遺跡は上記「北区史」において赤羽台二丁目遺跡として登録されていたもので、縄文時代の包含地となっていた。平成15年に本センターで調査を行い（飯塚 2003）、旧石器・縄文時代前期・平安時代・近世・近代などの遺構・遺物が検出されている。



第6図 武蔵野台地の地形区分と道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡(遠藤他, 2019を拡大・遺跡位置等を追記)



第7図 赤羽台の地質層序 (遠藤他, 2023)



第8図 周辺の遺跡 (1/40,000)

第3表 周辺の遺跡(1)

区	地	遺跡名	所在地	種別	時代
北	1	浮羅	浮羅1~5	包蔵地	弥生/平家/中世
北	2	石橋神社		墳墓	弥生/奈良
北	3	石橋公園	赤羽台1	包蔵地・墳墓	縄文・弥生/弥生/古墳/奈良/平家/中世/近世
北	4	成田寺	赤羽台1・2	古墳等・墳墓	弥生/古墳
北	5	八幡社	赤羽台4	墳墓	弥生/古墳
北	6	藤原神社	赤羽台4	包蔵地	弥生/古墳
北	7	赤羽台古墳群(6-1~15)	赤羽台4	古墳群	古墳
北	8	赤羽台6古墳群	赤羽台4	古墳群	古墳
北	9	柳ヶ丘	赤羽台3, 柳ヶ丘1・2	墳墓	弥生/古墳/中世/弥生/奈良/平家
北	10	赤羽上/台	赤羽台1	墳墓	縄文/弥生/奈良/平家
北	11	ミヤ古墳	赤羽台1	古墳	古墳
北	12	天王塚古墳	赤羽台1	古墳	古墳
北	13	大六天	赤羽台2	包蔵地	弥生/古墳
北	14	藤下	赤羽台5~藤下公園	包蔵地	縄文・弥生/弥生/新/弥生/奈良/平家/近世
北	15	大塚古墳	赤羽台5	古墳	古墳
北	16	柳行跡跡	赤羽台1跡跡等付近	墳墓・古墳	古墳/弥生
北	17	柳行公園	赤羽台3跡跡公園	包蔵地	古墳
北	18	柳ヶ丘	赤羽台1・2地/木小学校	包蔵地	古墳
北	19	赤羽台跡跡群	中十番4, 十番中番4	墳墓・貝塚	縄文・弥生/弥生
北	20	嵐山	中十番1~3, 五子本町1~3	墳墓	縄文
北	21	嵐山塚古墳	中十番2	古墳	古墳
北	22	十番台小学校遺跡	中十番2	古墳	古墳
北	23	王子稲荷古墳	本町2王子第二小学校	古墳	古墳
北	24	西本稲荷古墳	王子本町3	古墳	古墳
北	25	滝野山八幡社遺跡	滝野川3	貝塚・墳墓	古墳
北	26	滝野川古墳	滝野川3王子工業高校	古墳	古墳/古墳
北	27	嵐山	西十番1~3, 六中番1, 五子1 嵐山公園	墳墓・貝塚	弥生/古墳/中世/弥生/奈良/平家/中世/近世
北	28	嵐山	嵐山中学校 滝野川公園	古墳	弥生/古墳/奈良/平家/中世/近世
北	29	大塚古墳群跡	上中番1	古墳	古墳
北	30	浮羅古墳群跡	浮羅2, 上中番1	古墳	古墳
北	31	浮羅古墳群跡	浮羅2, 上中番1	古墳	古墳
北	32	田塚古墳	田塚1~3, 田塚3・4	古墳	古墳
北	33	田塚古墳	田塚1	古墳	古墳
北	34	嵐野神社	嵐野5新清水神社	包蔵地	弥生/古墳/奈良/平家/中世/近世
北	35	志茂	志茂3	包蔵地	弥生
北	36	鹿民川P溝	鹿民川5嵐山取水場内	包蔵地	弥生
北	37	鹿民川古跡跡	鹿民川7清水寺	包蔵地	弥生

第3表 周辺の遺跡(2)

区	名	遺跡名	所在地	種類	年代
北	38	湯川(3)遺跡等	湯川3	古墳	古墳
北	39	下木	湯川3	古墳	古墳
北	40	中津上	湯川4	古墳	古墳
北	41	田原台通(1)2～5)	田原1, 田原6, 上中里1, 西ヶ原1	古墳・古墳群	古墳・古墳群
北	41-2	田原台通1号古墳	田原2～6	古墳	古墳
北	41-3	田原台通2号古墳	田原3	古墳	古墳
北	41-4	田原台通3号古墳	田原3	古墳	古墳
北	41-5	田原台通4号古墳	田原3	古墳	古墳
北	42	宮原北	宮原・宮原南遺跡	古墳	古墳
北	43	宮原南	神野3, 宮野3	古墳	古墳
北	44	西ヶ原1	西ヶ原1	古墳	古墳
北	45	十ヶ台古墳群(45-1～3)	西ヶ原2, 王子1, 根島山公園内	古墳群	古墳
北	46	西ヶ原2	西ヶ原2	古墳	古墳
北	47	十ヶ原	十ヶ台1号・10号跡10条地帯内	古墳	古墳
北	48	深谷西	赤井北2	古墳	古墳
北	49	深谷合	赤井北1-2	古墳	古墳
北	50	神野3	神野3	古墳	古墳
北	51	宮野3	宮野3	古墳	古墳
北	52	宮野合	宮野合	古墳	古墳
荒川	1	都立コノノ遺跡	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	2	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	3	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	4	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	5	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	6	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	7	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	8	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	9	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	10	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	11	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	12	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	13	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	14	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	15	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	16	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	17	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	18	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	19	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	20	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	21	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	22	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	23	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	24	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	25	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	26	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	27	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	28	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	29	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	30	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	31	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳
荒川	32	湯川	江立2立地備北	古墳	古墳

第3表 周辺の遺跡(3)

区	No	遺跡名	所在地	種別	時代
新橋	33	松川陣地跡 千原下寺家跡石巻 石巻の上	希崎5～8大門	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/後/奈良/平安/中・近世 伊石厩/縄文前期/弥生前期/古墳前期/後/奈良/平安/中・近世 縄文前期/弥生前期/古墳前期/後/奈良/平安/古世
新橋	34	No.34	希崎8	包蔵跡	弥生前期/弥生後/古墳前期/後/奈良/平安/中・近世
新橋	35	No.35	本門	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/後/奈良/平安/中・近世
新橋	36	No.36	四蔵1	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/後/奈良/平安/古世
新橋	37	No.37	四蔵1	包蔵跡	古墳
新橋	38	四蔵塚跡	四蔵1	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生後/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	39	四蔵塚跡	四蔵2	墓溝	縄文前期/弥生後/古墳前期/奈良/平安/中・近世
新橋	40	四蔵塚跡	四蔵2	包蔵跡/縄文前期/弥生中・後/古墳前期/奈良/平安/中・近世	
新橋	41	四蔵塚跡・沖山	四蔵2	包蔵跡・墓溝	伊石厩/縄文前期/弥生中・後/古墳前期/奈良/平安/中・近世
新橋	42	四蔵塚跡	四蔵2、徳丸8	包蔵跡・墓溝	伊石厩/縄文前期/弥生中・後/古墳前期/奈良/平安/中・近世
新橋	43	No.43	徳丸1	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/中・近世
新橋	44	No.44	徳丸1	包蔵跡	縄文前期
新橋	45	No.45	徳丸1	包蔵跡	弥生前期/弥生後/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	46	No.46	徳丸2	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	47	No.47	徳丸2・3	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	48	No.48	徳丸4	包蔵跡	伊石厩
新橋	49	徳丸3跡	徳丸4	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	50	No.50	徳丸3・4	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	51	徳丸3跡	徳丸3、四蔵1	包蔵跡/縄文前期/弥生後/古墳前期/奈良/平安/古世	
新橋	52	徳丸3跡	徳丸5	包蔵跡・墓溝・竪溝	伊石厩/縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	53	徳丸3跡	徳丸6	包蔵跡・墓溝	伊石厩/縄文前期/弥生後/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	54	徳丸3跡	徳丸6	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	55	No.55	徳丸6・7	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	56	辻山跡	徳丸7	包蔵跡・墓溝・円溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/中・近世
新橋	57	徳丸	徳丸7-8	包蔵跡・墓溝	伊石厩/縄文前期/弥生中・後/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	58	西台塚跡田	西台1・3-4、若木2	包蔵跡・墓溝・円溝	伊石厩/縄文前期/弥生中・後/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	59	No.59	西台1	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	60	No.60	西台2	包蔵跡	時代不明
新橋	61	上台	西台2	包蔵跡	伊石厩/縄文前期/弥生
新橋	62	西台	西台2・3	包蔵跡・墓溝	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	63	五井田	西台3	包蔵跡・墓溝・竪溝	縄文前期/弥生前期/弥生後/古墳前期/後/奈良/平安/中・近世
新橋	64	No.64	西台4	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	65	No.65	若木1	包蔵跡	時代不明
新橋	66	No.66	若木2	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	67	No.67	若木1・2	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	68	No.68	若木1・2	包蔵跡	縄文前期
新橋	69	No.69	若木1・2	包蔵跡	縄文前期
新橋	70	No.70	若木2・3	包蔵跡	縄文前期
新橋	71	中台塚跡田跡	若木3	包蔵跡・墓溝・円溝	縄文前期/弥生前期/奈良
新橋	72	No.72	若木3	包蔵跡	時代不明
新橋	73	No.73	若木3	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	74	No.74	中台1	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/中・近世
新橋	75	No.75	若木1、中台1	包蔵跡	伊石厩/縄文前期/弥生中・後/奈良/平安/中・近世
新橋	76	中台塚跡	中台1・2	包蔵跡・墓溝	伊石厩/弥生前期/弥生後/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	77	No.77	中台2	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/古墳前期/奈良/平安/古世
新橋	78	No.78	中台2・3	包蔵跡	縄文前期/弥生前期/弥生後/古墳前期/奈良/平安/古世

第3表 周辺の遺跡(5)

区	名	遺跡名	所在地	種別	時期	年代
板橋	124	尚徳	尚徳1, 大谷口2	包蔵地・墓溝	旧石器/縄文世-海/弥生前/近世	
板橋	125	No.175	尚徳1	包蔵地・墓溝	縄文世-海/弥生前/近世	
板橋	126	No.176	尚徳1	包蔵地・墓溝	縄文世-海/弥生前/近世	
板橋	127	No.177	尚徳1・2	包蔵地・墓溝	縄文世-海/弥生前/近世	
板橋	128	No.128	尚徳3	包蔵地・墓溝	縄文世-海/弥生前/近世	
板橋	129	No.129	大谷口2	包蔵地・墓溝	縄文世-海/弥生前/近世	
板橋	130	No.130	大谷口上町	包蔵地・墓溝	縄文世-海/弥生前/近世	
板橋	131	No.131	弥生町	包蔵地・墓溝	弥生前/中世/弥生後/古墳前・中/弥生後/中世/近世	
板橋	132	No.132	高島平4	包蔵地・墓溝	弥生前/中世/弥生後/古墳前・中/弥生後/中世/近世	
板橋	133	穿堀1	高島平6, 新河原3	包蔵地・墓溝	弥生前/中世/弥生後/古墳前・中/弥生後/中世/近世	
板橋	134	舟渡	舟渡1・2・3	包蔵地・墓溝	弥生前/中世/弥生後/古墳前・中/弥生後/中世/近世	
板橋	135	No.135	舟渡4	包蔵地・墓溝	弥生前/中世/弥生後/古墳前・中/弥生後/中世/近世	
板橋	139	No.139	舟渡6	その他(塚)	中世/古墳	
板橋	140	No.140	舟渡7	塚	中世/古墳	
板橋	141	No.141	舟渡8	塚	中世/古墳	
板橋	142	No.142	大門	塚	中世/古墳	
板橋	143	No.143	大門	塚	中世/古墳	
板橋	144	No.144	西丸6	塚	中世/古墳	
板橋	145	西丸塚	西丸1	塚	中世/古墳	
板橋	146	No.146	西丸2	塚	中世/古墳	
板橋	148	No.148	西丸2	塚	中世/古墳	
板橋	149	No.149	志村2	塚	中世/古墳	
板橋	160	No.160	伊谷2	台地もしくは塚	中世/古墳	
板橋	151	No.151	中谷3	古墳	中世/古墳	
板橋	152	No.152	中谷3	古墳	中世/古墳	
板橋	153	No.153	中谷3	古墳	中世/古墳	
板橋	154	No.154	前野野4	古墳	中世/古墳	
板橋	155	No.155	前野野5	古墳	中世/古墳	
板橋	157	No.157	志村2	古墳	中世/古墳	
板橋	158	志伊塚塚	志村2	古墳	中世/古墳	
板橋	159	No.159	志村2	古墳	中世/古墳	
板橋	161	No.161	小豆沢3	塚	中世/古墳	
板橋	162	ひく塚	小豆沢4	塚	中世/古墳	
板橋	163	小豆沢新田等古墳	小豆沢4	古墳	中世/古墳	
板橋	164	No.164	小豆沢4	古墳	中世/古墳	
板橋	165	No.165	茶山野	古墳	中世/古墳	
板橋	166	No.166	仲田	古墳	中世/古墳	
板橋	169	彌生	地下式溝	塚	中世	
板橋	167	No.167	小豆沢4	古墳	中世/古墳	
板橋	168	No.168	小豆沢5	古墳	中世/古墳	
板橋	169	高島平北	高島平北	古墳	中世/古墳	
板橋	170	高島平東	高島平東	古墳	中世/古墳	
板橋	171	西野	西野	古墳	中世/古墳	
板橋	172	久保田	久保田	古墳	中世/古墳	
板橋	173	藤原	藤原	古墳	中世/古墳	
板橋	174	山之上	山之上	古墳	中世/古墳	
板橋	175	坂下三丁目	坂下3	包蔵地・墓溝	古墳前・海/弥生前/古墳前/弥生前/中世/近世	
板橋	176	蓮根三丁目	蓮根3	包蔵地・墓溝	古墳前・海/弥生前/古墳前/弥生前/中世/近世	
板橋	178	大谷口1・2	大谷口1・2	その他(野原地・畑跡)	古墳前・海/弥生前/古墳前/弥生前/中世/近世	
練馬	16	No.16	大谷2	包蔵地	縄文世	
練馬	42	沢渡南北	野町北4 東京女子学院	墓溝	旧石器/縄文世-中世-中	

第3表 周辺の遺跡(7)

区	No	遺跡名	所在地	種別	時代
文京	16	上郷土館跡	本郷込5-6	包地跡・墓場・百穂地	縄文中・晩/弥生中/古墳前/古墳後/平安/近世
文京	17	高島町跡	白土1	包地跡・墓場	縄文/近世
文京	18	高島町跡	白土1	包地跡・墓場	縄文/近世
文京	19	伊勢町跡	白土2	包地跡・墓場	縄文/近世
文京	20	小石川橋跡(旧員等)	白土3-4	貝塚・武庫跡	縄文/古墳前/古墳後/平安/近世
文京	21	藤町	白土4	貝塚・墓場	縄文/古墳前
文京	22	白山神社	白土4	古墳	古墳
文京	23	白山神社本陣	白土5	包地跡・墓場	縄文/古墳
文京	24	白山及び目黒	白土5	包地跡・墓場	縄文/古墳
文京	25	千駄木員等	千駄木1	集落・貝塚・墓場・その他の遺	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	26	林町	千駄木2	包地跡・墓場	縄文/古墳
文京	27	駒込神明院員等	本郷込3~5	集落・墓場	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	28	弥生町遺跡群	弥生2, 船場1	包地跡・貝塚	縄文中・晩/弥生中/古墳後
文京	-A	弥生町員等	船場1	貝塚	縄文中・晩/弥生中/古墳後
文京	-B	弥生町遺跡群員等	弥生2	貝塚	縄文中・晩/弥生中/古墳後
文京	-C	弥生2丁目	弥生2	包地跡	縄文/近世
文京	-D	文京区No.28-D	弥生2	包地跡・墓場・墓場	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	31	西三丁目	西三2	包地跡	縄文
文京	33	町町	本郷1	包地跡	縄文
文京	35	No.35	本郷6	包地跡	縄文
文京	37	神田遺跡	本郷7	古墳	古墳
文京	38	神田遺跡	本郷7	貝塚	縄文中・晩
文京	39	神田遺跡(北)	本郷7	貝塚	縄文中・晩
文京	46	白土4丁目	白土4	古墳	古墳
文京	47	本郷6遺跡群	本郷6, 弥生2	包地跡・墓場・貝塚・社寺・墓場・貯蔵・その他の遺	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	48	春日町(小石川橋本園)	後楽1, 春日1	包地跡・墓場・墓場	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	50	No.50	春日1	貝塚	縄文/古墳
文京	51	高井町	本郷4	集落・墓場	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	52	橋本町	船口2	社寺	古墳
文京	53	渡島門町	渡島4	社寺	古墳
文京	54	渡島新花町	渡島2	包地跡	古墳
文京	55	駒込道分枝南	向土1-2	集落・武庫跡・貯蔵・遺跡跡	縄文中・晩/近世
文京	56	駒込丸根町	本郷込1-3	包地跡・墓場・その他の(貯蔵・遺跡跡)	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	58	本郷分町	本郷1	包地跡・墓場	縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	59	尾根町	本郷込2	包地跡・墓場・墓場	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	60	後楽一・二丁目	後楽1-2	墓場	縄文/古墳
文京	62	若原分町	小石川4	社寺?	縄文/古墳
文京	63	藤町	西三1, 本郷5-6	社寺? 墓場・その他の(貯蔵)	古墳
文京	64	駒込道分町	向土1	貯蔵	古墳
文京	65	大塚成下町	本郷5	包地跡・社寺	縄文/古墳/近世
文京	66	本郷分町	本郷5-6	包地跡・社寺・墓場・その他(貯蔵)	縄文/近世
文京	67	本郷分町	本郷5-6	包地跡・社寺・墓場・その他(貯蔵)	縄文/近世
文京	68	駒込富士塚町	本郷込2-3	包地跡・社寺・墓場・貯蔵	縄文/古墳/平安/近世
文京	69	小石川分町	小石川3	包地跡・墓場・社寺	縄文/古墳/古墳後/平安/近世
文京	71	駒込丸根町	後楽1	包地跡・墓場・墓場	古墳
文京	73	小石川谷町南	小石川5	包地跡・墓場・墓場	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	74	藤町	後楽4, 本郷7	集落・墓場	縄文/古墳/縄文中・晩/弥生中/古墳後/平安/近世
文京	75	島村院跡	小石川3	社寺	古墳
文京	76	無量院跡	小石川15	社寺・その他の(遺)	古墳
文京	77	智恵寺跡・光島寺跡	小石川15	社寺	古墳

第3表 周辺の遺跡(8)

区	地	種別名	所在地	種別	時代
文京	78	三軒町	小白向4	包埋地・竪穴	縄文/近世
文京	79	三軒町・日北		近世	近世
文京	80	三軒町・日北		竪穴・その他遺構	縄文/近世
文京	81	小石川(西本町跡)	白13-4	竪穴・その他遺構	縄文/近世
文京	82	森山(南本町)	西本2	包埋地・竪穴	包埋地/縄文/近世
文京	83	森山(町)	本郷6	竪穴・その他(井戸・竪穴)	近世
文京	86	一軒塚跡	千石1	竪穴・社寺・竪穴	縄文/近世
文京	89	大塚窪跡	大塚3	包埋地・竪穴	縄文/近世
文京	90	丸山(南町北)	白山1	包埋地	縄文/近世
文京	91	原町東	白山5	包埋地・竪穴	弥生/古墳/近世
文京	92	原町南	本郷込2	包埋地	縄文/近世
文京	93-1	藤島岡地帯第1地点	大塚5	包埋地	縄文/近世
文京	93-2	藤島岡地帯第2地点	大塚5	包埋地・竪穴	近世
文京	94	水邊二丁目	水邊2	包埋地・竪穴	近世
文京	95	富家野北	豊日2	竪穴	平安/近世
文京	97	富家野北	千石木1-3-5	包埋地・竪穴・社寺・竪穴・町屋	縄文/近世/弥生/弥生/古墳/奈良/平安/近世
文京	98	目白松二丁目	目白松2	社寺	近世
文京	99	小石川二丁目	小石川2	社寺	近世
文京	103	本郷一丁目東	本郷1	包埋地・竪穴・竪穴	包埋地/縄文/弥生/平安/古墳/奈良/平安/近世
文京	107	小白向三丁目東	小白向3	包埋地・竪穴・竪穴	縄文/古墳/奈良/近世
文京	110	春日町東	本郷1	竪穴	近世
文京	112	大塚二丁目	豊日2	その他(竪穴)	近世
文京	114	春日町西	豊日1	包埋地/縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世	包埋地/縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
文京	115	春日二丁目	春日2	包埋地・竪穴・竪穴	包埋地/縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
文京	116	西本町	本郷6	社寺	近世
文京	117	千石木五丁目	千石木5	その他(竪穴)	縄文/弥生/近世
文京	118	小白向一丁目二丁目	小白向1+2	包埋地・竪穴・社寺・竪穴・町屋・その他の遺構	縄文/古墳/奈良/平安/近世
文京	119	千石一丁目	千石1	包埋地・竪穴	縄文/近世
文京	120	千石四丁目	千石4	竪穴	縄文/近世
文京	121	正志寺跡	本郷込1	その他遺構	近世
文京	122	春日二丁目	春日2	その他(竪穴)	近世
文京	128	本郷六丁目	本郷6	竪穴	近世
文京	129	小白向二丁目	小白向1	包埋地・竪穴・その他遺構・竪穴	縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
文京	131	小石川三丁目	小石川3	包埋地・竪穴・その他遺構・社寺・町屋	縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
文京	134	小白向一丁目北	小白向1	包埋地・竪穴	縄文/古墳/奈良/平安/近世
文京	136	家塚地下	春日1	包埋地・竪穴	縄文/古墳/奈良/平安/近世
文京	137	目白松三丁目	目白松3	包埋地・竪穴	近世
文京	138	小石川一丁目	小石川1	竪穴・その他(小田跡)	包埋地/縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
文京	139	春日二丁目	春日2	竪穴	近世
文京	140	小石川四丁目東	小石川4	竪穴	近世
文京	142	林田跡	小石1	竪穴	近世
文京	143	春日町	春日1	包埋地・竪穴	縄文/近世
文京	145	春日二丁目	春日2	包埋地・竪穴	縄文/近世
墨田	1	成田神社跡	酒谷本町2-3	包埋地・竪穴	縄文/弥生/弥生/平安/近世
墨田	2	成田神社跡	酒谷本町2-3	包埋地・竪穴	縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
墨田	3	深井	白11-2	包埋地	包埋地/縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
墨田	5	空堀跡(大塚周辺)	本郷1+2	竪穴・目録・大名屋敷・町屋	包埋地/縄文/弥生/古墳/奈良/平安/近世
墨田	6	龍橋	本郷1+2	包埋地・竪穴・竪穴	縄文/弥生/弥生/平安/近世
墨田	7	北大塚	北大塚1	包埋地・竪穴	縄文/古墳/近世

第3表 周辺の遺跡(9)

区	No	遺跡名	所在地	種別	時期	年代
遺跡	6	駒込1丁目(区中・上野公園)	駒込1	集落・屋敷・貯蔵	縄文・弥生/弥生後/平安/近世	縄文・弥生/弥生後/平安/近世
遺跡	8	駒込公園	駒込3	古墳	古墳	古墳
遺跡	10	駒込1丁目(区中・上野公園)	駒込3	古墳	古墳	古墳
遺跡	11	高松	駒込2・3	古墳	古墳	古墳
遺跡	12	駒込台	駒込台・駒込	古墳	古墳	古墳
遺跡	13	駒込台	駒込台	古墳	古墳	古墳
遺跡	14	日曜公園	目黒3・4・駒込線2	社寺・屋敷	社寺	社寺
遺跡	15	日曜公園	目黒4・5	社寺	社寺	社寺
遺跡	16	千早	千早4	古墳	古墳	古墳
遺跡	17	南谷塚	南谷塚	古墳	古墳	古墳
社屋	1	額王寺自庫	南谷塚・野敷	古墳	古墳	古墳
社屋	2	天玉寺自庫	谷中4・額王寺内	古墳	古墳	古墳
社屋	3	額王山西塔	谷中7	古墳	古墳	古墳
社屋	4-1	上野公園通神跡	上野公園	古墳	古墳	古墳
社屋	4-2	上野公園通神跡	上野公園	古墳	古墳	古墳
社屋	4-3	上野公園通神跡	谷中7	古墳	古墳	古墳
社屋	4-4	上野公園通神跡	谷中7	古墳	古墳	古墳
社屋	4-5	上野公園通神跡	上野橋水1	古墳	古墳	古墳
社屋	4-6	上野公園通神跡	上野橋水2	古墳	古墳	古墳
社屋	4-7	上野公園通神跡	谷中7	古墳	古墳	古墳
社屋	4-8	上野公園通神跡	上野橋水1	古墳	古墳	古墳
社屋	4-9	上野公園通神跡	上野橋水2	古墳	古墳	古墳
社屋	4-10	上野公園通神跡	上野橋水1	古墳	古墳	古墳
社屋	4-11	上野公園通神跡	上野橋水2	古墳	古墳	古墳
社屋	4-12	上野公園通神跡	谷中7	古墳	古墳	古墳
社屋	4-13	上野公園通神跡	上野橋水2	古墳	古墳	古墳
社屋	4-14	上野公園通神跡	上野橋水2	古墳	古墳	古墳
社屋	5	No.5	上野公園	古墳	古墳	古墳
社屋	6	新沼自庫	上野橋水1	古墳	古墳	古墳
社屋	10	渡島(切通し北)	池之端1	古墳	古墳	古墳
社屋	13	飯塚古墳	上野公園	古墳	古墳	古墳
社屋	14	飯塚台古墳	上野公園	古墳	古墳	古墳
社屋	15	天玉寺門前町	上野公園	古墳	古墳	古墳
社屋	30-1	谷中島原町	谷中6・7	古墳	古墳	古墳
社屋	30-2	谷中島原町	谷中2	古墳	古墳	古墳
社屋	30-3	谷中島原町	谷中2	古墳	古墳	古墳
社屋	31	谷中清水町	池之端4	古墳	古墳	古墳
社屋	32-1	天玉寺	谷中7	古墳	古墳	古墳
社屋	32-2	天玉寺	谷中7	古墳	古墳	古墳
社屋	35	津町	池之端1	古墳	古墳	古墳
社屋	39	谷中三蔵町	池之端2	古墳	古墳	古墳
社屋	40	上野橋水町	池之端2	古墳	古墳	古墳
社屋	41	No.9	池之端2	古墳	古墳	古墳
社屋	72	No.10	池之端2	古墳	古墳	古墳
社屋	107	池之端七科町南	池之端2	古墳	古墳	古墳
中野	1	No.1	白鷺1	古墳	古墳	古墳
中野	2	彌の堂八幡神社	白鷺1	古墳	古墳	古墳
中野	3	彌の堂四丁目	白鷺3・4	古墳	古墳	古墳
中野	4	No.4	白鷺2	古墳	古墳	古墳
中野	5	No.5	白鷺2	古墳	古墳	古墳
中野	6	No.6	白鷺2	古墳	古墳	古墳

第3表 周辺の遺跡(10)

区	№	遺跡名	所在地	種別	時代
中野	7	№7	白鷺3	包蔵地	縄文後
中野	8	野方野丁日磨方		包蔵地	縄文・後
中野	9	№10	野方2	包蔵地	弥生中
中野	10	№10	野方2	包蔵地	弥生中
中野	11	野方2・3	野方2・3	包蔵地	縄文前
中野	12	太郎八幡神社	太郎2	包蔵地	縄文前
中野	13	太郎4	太郎4	包蔵地	古墳
中野	14	太郎	野方2	包蔵地	縄文前・中
中野	15	野方清原出張所南	野方3	包蔵地	縄文前
中野	16	№16	野方3	包蔵地	縄文後
中野	17	北原	野方3	包蔵地	弥生
中野	18	№18	野方5	包蔵地	縄文前/弥生
中野	19	№19	野方5	包蔵地	縄文前
中野	20	№20	丸山1	包蔵地	縄文前・後
中野	21	№21	丸山2	包蔵地	奈良平家
中野	22	№22	江石田1	包蔵地	平安
中野	23	№23	江石田1	包蔵地	縄文前
中野	24	№24	江石田1	包蔵地	縄文
中野	25	御前	江石田1	集落	縄文前・後/弥生/近世
中野	26	寺山塚交差	江石田3	包蔵地	縄文前・後/弥生/中・近世
中野	27	江石田(寺山・泰山部・北江吉田)	江石田3	集落	縄文前・後/弥生/中・近世
中野	28	野方野丁日磨方	江石田4	包蔵地	縄文前
中野	29	野方野丁日磨方	江石田4	包蔵地	縄文前
中野	30	野方野丁日磨方	江石田4	包蔵地	縄文前
中野	31	野方野丁日磨方	江石田4	包蔵地	縄文前
中野	32	江石田原	江石田1	包蔵地	縄文前
中野	33	江石田原	江石田1	包蔵地	縄文前
中野	34	江石田原	江石田1	包蔵地	縄文前
中野	35	№35	江石田2	包蔵地	縄文前
中野	36	№36	江石田2	包蔵地	縄文前
中野	37	№37	江石田2	包蔵地	縄文前
中野	38	江石田井天	江石田2	集落	縄文前
中野	39	野方野丁日磨方	江石田2	包蔵地	縄文前
中野	40	NO.38	江石田2	包蔵地	縄文前
中野	41	天徳山	江石田2	包蔵地	縄文前
中野	42	片山西	松平丘1	包蔵地	古墳/近世
中野	43	野方家公園内	松平丘1	包蔵地	縄文前/弥生
中野	44	片山	集落	縄文前・後/弥生/中・近世	
中野	45	№45	松平丘2	包蔵地	縄文前・後
中野	46	№46	沼隈1	包蔵地	縄文前・後
中野	47	沼隈町永山神社行成	沼隈1	包蔵地	縄文前・後/弥生/奈良
中野	48	貞清寺行成跡穴蔵跡	沼隈2	包蔵地	縄文前
中野	49	神宮	沼隈2	包蔵地	縄文前
中野	50	№50	沼隈3	包蔵地	縄文前
中野	51	美郷池畔付近	沼隈4	包蔵地	縄文前
中野	52	野方野丁日磨方	野方2	包蔵地	縄文前
中野	53	野方野丁日磨方	野方2	包蔵地	縄文前
中野	54	新井井原神社内	新井井原神社	包蔵地	弥生/縄文前・後/弥生/古墳前/近世
中野	55	新井井原神社内	新井井原神社	包蔵地	弥生/奈良
中野	56	NO.56	上島田4	包蔵地	縄文前
中野	57	遠徳山	上島田5	包蔵地	縄文前/弥生/古墳/近世
中野	58	興徳院	上島田5	包蔵地	縄文前・後
中野	64	NO.64	東中野5	包蔵地	田石橋
中野	97	江野二丁目穴蔵跡	江野町2	包蔵地	古墳/奈良

第3表 周辺の遺跡(11)

区	地	遺跡名	所在地	種別	時代
中野	96	貴志町村立御穴遺跡	江田田2	竪穴遺跡	古墳/古墳
中野	97	山形町山形町遺跡	山形田1	古墳	古墳/古墳/近世
中野	101	山形町山形町神社跡(香取県歴史資料館)	山形田1	古墳	古墳?/古墳?
中野	102	水戸市神社(古墳遺跡)	山形田1	古墳	古墳
新郷	1	黒ヶ谷新郷神社	西宮合2	包圍地・墓	包圍地/墓/古墳/奈良/平安/近世
新郷	2	黒ヶ谷	西宮合4, 中井1・2	包圍地・墓	包圍地/古墳/奈良/平安
新郷	3	No.3	中井2	墓	古墳/平安
新郷	4	No.4	下宮合4	包圍地	古墳
新郷	5	No.5	西宮合1	包圍地	古墳
新郷	6	黒合柳六郎殿	下宮合4	柳六郎殿	奈良
新郷	7	No.7	上宮合2	塚	古墳
新郷	8	上宮合二丁目西	西人町4, 北新郷4	集落	古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安
新郷	10	山ノ内屋上ノ台	包圍地	包圍地	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/中・近世
新郷	35	砂正合川No.1	西宮合2砂正寺川公園	包圍地・柳敷	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	43	西人町三丁目	西人町2～4, 本久保3	包圍地・柳敷	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	44	長崎院跡	山形町	社寺・墓	近世
新郷	49	下戸屋	西新郷田1・3	包圍地・墓落・柳敷	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	60	戸八信神社	西新郷田1・2	包圍地・墓落・社寺	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	65	黒田城遺跡三丁目	黒田城遺跡3	包圍地・墓落	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	68	北新郷三丁目	北新郷3	包圍地・墓落	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	71	早稲田柳敷御所	早稲田柳敷御所, 早稲田町	包圍地	包圍地
新郷	72	上宮合二丁目	上宮合1・2	包圍地・墓落	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	77	上宮合二丁目	上宮合1・2	包圍地・墓落	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	79	上宮合三丁目西	上宮合3, 北新郷4	包圍地・墓落・柳敷	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	80	黒田城三丁目	黒田城田3, 黒田城遺跡2	包圍地・墓落・柳敷	包圍地/古墳/中・奈良/古墳/奈良/平安/近世
新郷	85	尾崎山ノ内下柳敷	戸山1～3	包圍地・柳敷	包圍地/古墳/中・奈良/平安/近世
新郷	90	西宮合二丁目	西宮合1	包圍地	包圍地/古墳/中・奈良/平安/近世
新郷	98	黒新郷田二丁目	黒新郷田1	包圍地	包圍地/古墳/中・奈良/平安/近世
新郷	116	中宮合二丁目	西宮合2	包圍地	包圍地/古墳/中・奈良/平安/近世
新郷	147	山形町	その他(西側)	古墳	古墳
新郷	158	下宮合二丁目	下宮合2	包圍地	包圍地/古墳/奈良/古墳
杉並	7	No.7	包圍地	包圍地	包圍地/古墳/奈良/古墳
杉並	8	No.8	下井舞2	包圍地	包圍地/奈良
杉並	9	No.9	下井舞2	包圍地	包圍地・墓
杉並	10	No.10	下井舞3	包圍地	包圍地
杉並	11	No.11	下井舞4	包圍地	包圍地/古墳
杉並	18	No.18	清水3	包圍地	包圍地
杉並	21	No.21	包圍地	包圍地	包圍地
杉並	22	No.22	本久保2	包圍地	包圍地/奈良
杉並	24	向拝町	集落	包圍地/奈良	包圍地/奈良
杉並	150	No.150	本久保3	包圍地	包圍地/古墳
杉並	151	No.151	井舞2	包圍地	包圍地/古墳
杉並	152	No.152	井舞1	包圍地	包圍地/古墳
杉並	153	No.153	井舞1	包圍地	包圍地/古墳

Ⅲ 層序

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡は武蔵野台地の北東端、赤羽台と呼ばれる標高 20～25m の台地上に位置する。赤羽台一帯は、上位から順に立川ロームと武蔵野ローム、そして砂層（赤羽砂層）が堆積する構造で、基本的には武蔵野ロームの堆積した時期に離水した M（武蔵野）面に区分される。古多摩川の影響のもと形成された M2a、M2b に加え、古荒川の影響を受けて北西～南東方向に形成された M3 面に細分される。赤羽上ノ台遺跡は M2a 面、道合遺跡は北側が M2a 面、南側が M2ab 面上に位置付けられる（第Ⅱ章）。

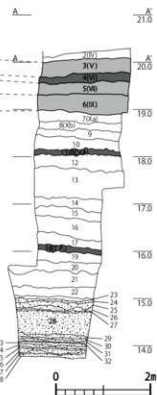
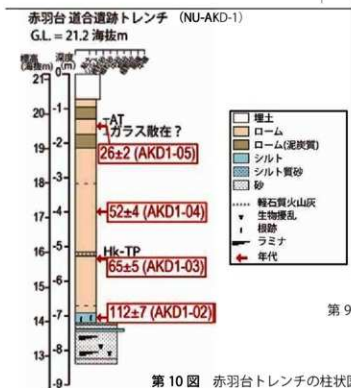
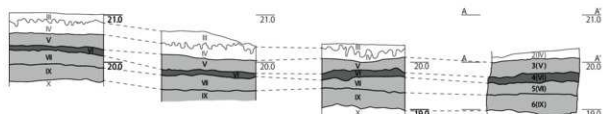
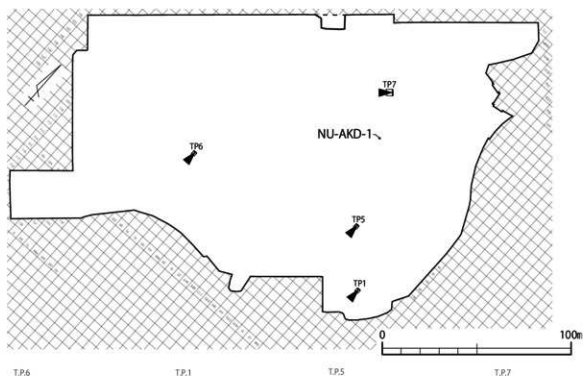
近代の旧日本陸軍被服本廠や、後続する東京兵器補給廠、赤羽台団地の造成による削平のため、地形は著しく改変されており、縄文時代以降の遺物包含層はほとんど残存しない。表土下の標高 20～21m で、直ちに立川ロームⅢ層が検出される。わずかにローム上部の高低差から近世以前の地形をうかがい知ることができる。赤羽上ノ台遺跡は調査範囲の北側が 20.0m、南側が 19.0m 前後で、南に向かって低くなる。道合遺跡は調査範囲中央西寄り が 21.5 m、東寄りが 20.5m で、東に向かって低くなり、南東側の崖線付近は 19.5 となる。道合・赤羽上ノ台の両遺跡とも、崖線側に傾斜している傾向がある。

道合遺跡の調査時に、2×2m のテストピット（T.P.）を 6 箇所設定して堆積物の観察をおこなった。また、調査範囲の北東寄り で検出された中世の地下式横穴（283 号土坑）の掘削を利用し、ローム下部から海成層までの観察を目的として T.P.7 を設定した。これらのうち T.P. 1 と 5 と 6、7 の断面を第 10 図に示す。

各テストピットにおける立川ローム層の堆積状態を見ると、Ⅲ層（ソフトローム）の遺存は箇所によって異なる。Ⅳ層（ハードローム）下部～Ⅸ層（第 2 黒色帯）上部までは層厚は概ね一定している。これらの層の標高は調査範囲中央西寄り（T.P.6）でやや高く、Ⅳ層下部が 20.6m、Ⅵ層（始良 Tn テフラを含む）は 20.2m 程度に位置する一方、東側（T.P.1・5・7）ではそれぞれ 20.0m、19.6～19.8m に位置する。立川ローム堆積時の調査範囲の地形は東から西に向かって約 0.5m 程度低下し、南北方向は概ね平坦であったものと推定される。

T.P.7 では立川・武蔵野ローム中に挟む複数のテフラが確認された。19.6m 付近の 4 層では始良 Tn テフラ（AT）に由来する火山ガラス片が散在する。18.2m 付近の 11 層では青色粗粒火山灰層（BCVA）と見られる赤色スコリア・青色スコリアがわずかに散在する。16.0m 付近の 17・18 層では箱根東京軽石層（TP）の黄褐色粒子が不明瞭な帯状に散在する。

T.P.7 の露頭ではルミネッセンス年代測定がおこなわれている（遠藤他 2023）。これによると、立川ロームⅥ層に比定される 4 層（標高 19.6m）では 26 ± 2 ka、標高 17m 付近では 52 ± 4 ka、Hk-TP（箱根東京軽石層）直下で 65 ± 5 ka、赤羽砂層最上部で 112 ± 7 ka（ka : kilo annum 1,000 年前）の年代が得られている。



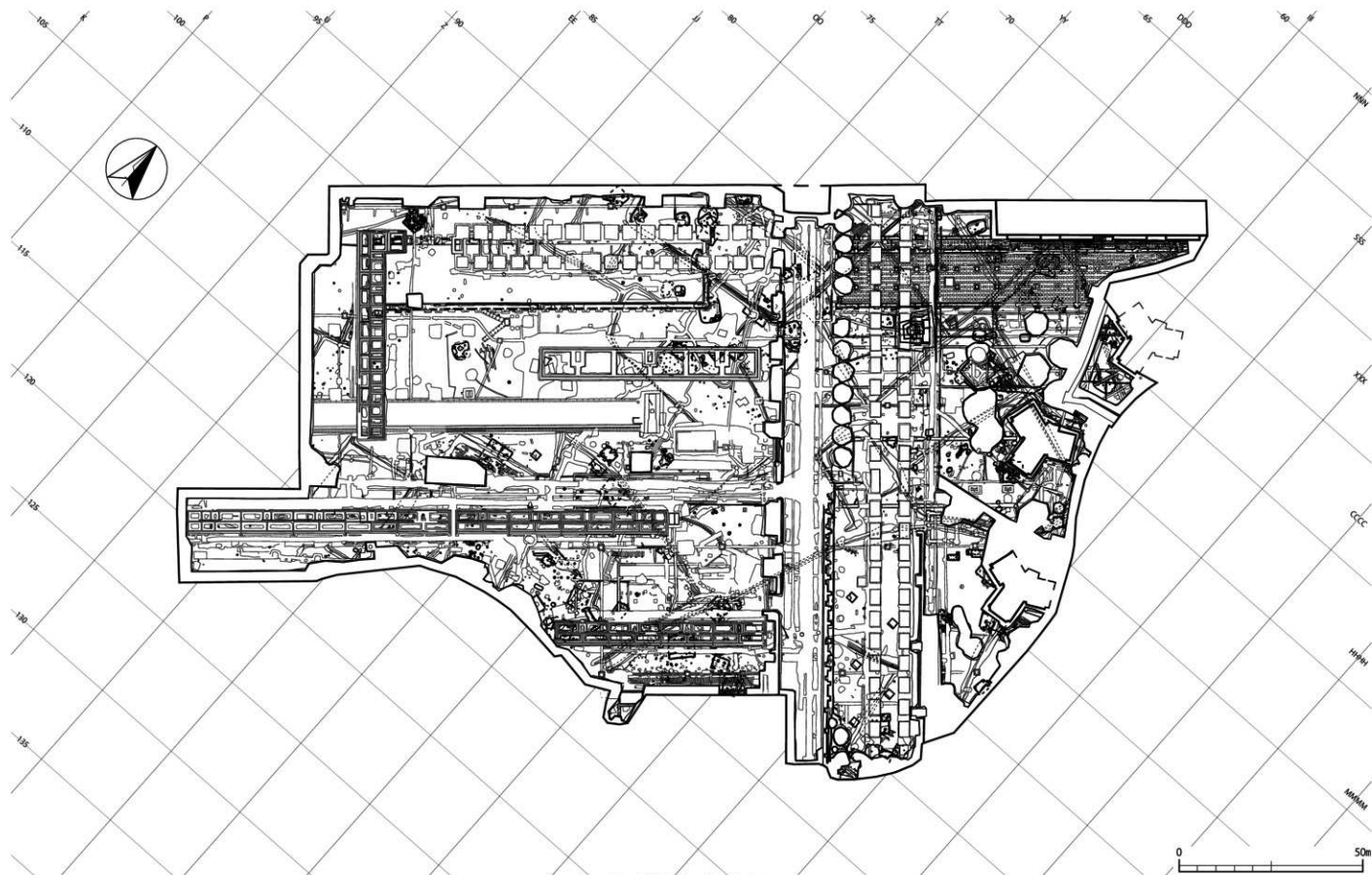
第9図 道合遺跡 各地点の堆積物観察位置と基本層序 (1/80, 1/2,000)

第10図 赤羽台トレンチの柱状図とルミネッセンス年代 (遠藤他, 2023)

第4表 基本層序土層一覧表

層番号	色調	マンセル	含有物
1(Ⅰ)	暗褐色シルト	10YR3/4	φ1~2mmの赤色スコリア3~5%含む。φ1~2mmの黒色スコリア3~5%含む。締まりやや強い。粘付やや強い。ソフトローム層。
2(Ⅱ)	褐色シルト	10YR4/6	φ1~2mmの赤色スコリア7~10%含む。φ1~2mmの黒色スコリア7~10%含む。締まり強い。粘付強い。ハードローム層。
3(Ⅲ)	暗褐色シルト	10YR3/4	第1黒色帯、V層。
4(Ⅳ)	褐色シルト	10YR4/6	AV層。
5(Ⅴ)	暗褐色シルト	10YR3/4	第2黒色帯上部、V層。φ1~2mmの赤色スコリア7~10%含む。φ1~2mmの黒色スコリア10~15%含む。φ1~2mmの青色スコリア1~7%含む。φ1~2mmの黄色スコリア1~2%含む。締まり強い。粘付強い。
6(Ⅵ)	暗褐色シルト	10YR3/4	第2黒色帯下部、IX層。φ1~2mmの赤色スコリア7~10%含む。φ1~2mmの青色スコリア1~2%含む。φ1~2mmの黄色スコリア1~2%含む。締まり強い。粘付強い。
7(X)	褐色シルト	10YR4/6	締まり強い。粘付強い。硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~15%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを3~5%含む。
8(XI)	褐色シルト	10YR4/4	締まり強い。粘付強い。硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを5~7%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを5~7%含む。φ1~2mmの白色スコリアを1~2%含む。XA層より粘子がやや弱くなる。立川ローム最下層。
9	明褐色シルト	7.5YR5/5	締まり強い。粘付とても強い。やや軟質。φ1~2mmの赤色スコリアを3~5%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを1~2%含む。
10	褐色シルト	7.5YR4/6	締まり強い。粘付強い。やや軟質。φ1~2mmの赤色スコリアを10~15%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを1~2%含む。
11	暗褐色シルト	10YR3/4	締まり強い。粘付強い。やや軟質。φ1~2mmの赤色スコリアを2~3%含む。φ1~5mmの青色スコリアを3~5%含む。青色スコリアは明瞭に現存しておらず。肉眼ではあまり認識できない。BCVA/青色粗粒火山灰層。
12	褐色シルト	10YR4/4	締まりとても強い。粘付強い。硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを1~2%含む。スコリアの密度が低く、不導電。
13	暗褐色シルト	10YR3/4	締まりとても強い。粘付強い。硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを2~3%含む。
14	褐色シルト	7.5YR4/4	締り強い。粘付強い。やや硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを2~3%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを1~2%含む。φ1~2mmの白色スコリアを1~2%含む。
15	暗褐色シルト	7.5YR3/4	締まり強い。粘付強い。やや軟質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。
16	褐色シルト	10YR4/6	締まり強い。粘付強い。やや硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを1~2%含む。下部は粘りが弱くなる。
17	褐色シルト	10YR4/4	締まり強い。粘付強い。硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを2~3%含む。φ1~2mmの白色スコリアを2~3%含む。下部に、φ1~2mmの黄褐色粘子(TP粘)が3~5%程度混入。X層層より粘子が弱くなる。
18	黄褐色シルト	10YR5/5	締まり強い。粘付強い。やや軟質。φ1~2mmの黄褐色粘子を10~15%含む。φ1~2mmの白色砂粒を5~7%含む。粘子が粗く、砂質である。TP/粗粒相対白層。
19	褐色シルト	10YR4/4	締まり強い。粘付強い。硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。
20	暗褐色シルト	7.5YR5/6	締まり強い。粘付強い。硬質。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。φ1~2mmの黒色スコリアを5~7%含む。粘子がやや弱い。武蔵野ローム最下層。
21	褐色シルト	7.5YR4/4	締まりやや強い。粘付とても強い。軟質。φ1~2mmの赤色スコリアを7~10%含む。φ1~10mmの黒色スコリアを10~15%含む。ト木吉ローム最上層。
22	黄褐色砂質粘土	2.5Y5/4	締まり強い。粘付とても強い。極軟質。砂質粘土の粘付は0.5~0.25mm(中粒砂)で強い。分級が良い。φ1~2mmの赤色スコリアを1~2%含む。φ1~2mm以下の黒色スコリアを1~2%含む。φ1mm以下の白色スコリアを10~15%含む。焼成した土木材料(コシ?)の痕跡がいくつか残る。
23	こげい黄色砂質粘土	2.5Y6/4	締まり強い。粘付強い。軟質。粘土層だが、わずかに砂質(砂質粘土)。砂質粘土の粘付は0.5~0.25mm(中粒砂)で強い。分級が良い。φ1~2mmの黒色スコリアを5~7%含む。φ1mm以下の白色スコリアを10~15%含む。ト木吉ローム最下層。
24	明褐色色砂	2.5Y6/6	締まり強い。粘付やや強い。やや硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ10mm以上の粘土ブロック(明赤褐色:5YR5/6)を3~5%含む。赤砂層。
25	暗赤褐色色砂	5YR3/6	締まり強い。粘付強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ10mm以上の粘土ブロック(黄褐色:2.5Y7/4)を5~7%含む。φ10~30mm程度の円形を生痕が層全体にまばらに残る(生痕の構成物は粘土)。層序は砂層のH2層より強い。赤砂層。
26	黄褐色粘土	2.5Y5/6	締まりやや強い。粘付とても強い。軟質。粘土の粘付は63~0.24μm(粘)で強い。分級が良い。赤砂層。
27	赤褐色砂	5YR4/6	締まり強い。粘付強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ5~10mmの黄褐色粘土粒子(2.5Y5/6)を2~3%含む。赤砂層。
28	褐色砂	7.5YR4/4	締まり強い。粘付とても強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ2~10mmの粘土粒子(黄褐色:2.5Y7/4)を5~7%含む。φ10~30mm程度の円形を生痕が層全体にまばらに残る(生痕の構成物は粘土)。層序は砂層のH2層より強い。赤砂層。
29	暗赤褐色砂	5YR5/5	締まりやや強い。粘付とても強い。やや硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。赤砂層。
30	オリーブ褐色砂	2.5Y4/6	締まり強い。粘付とても強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。赤砂層。
31	褐色砂	7.5YR4/4	締まり強い。粘付とても強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ2~5mmの粘土粒子(黄褐色:2.5Y5/6)を3~5%含む。赤砂層。
32	赤褐色粘土質砂	5YR4/6	締まり強い。粘付やや強い。やや硬質。粘土質砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ5~10mmの黄褐色粘土粒子(2.5Y5/4)を5~7%含む。赤砂層。
33	暗赤褐色砂	5YR3/6	締まり強い。粘付とても強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ1~2mmの黒色粘粒子を5~7%含む。赤砂層。
34	黄褐色砂	2.5Y5/4	締まり強い。粘付とても強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ1~2mmの黒色粘粒子を7~10%含む。赤砂層。
35	褐色砂	7.5YR4/4	締まり強い。粘付とても強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ1~2mmの黒色粘粒子を3~5%含む。赤砂層。
36	オリーブ褐色砂	2.5Y4/3	締まり強い。粘付とても強い。硬質。砂の粘付は0.125mm~63μm(極細粒砂)で強い。分級が良い。φ1~2mmの黒色粘粒子を5~7%含む。赤砂層。
37	黒色砂	7.5YR2/1	締まりとても強い。粘付とても強い。砂の粘付は0.25mm~0.125mm(細粒砂)で強い。分級が良い。上層の砂層に比べ、粘子が粗くなる。赤砂層。
38	暗褐色色砂	7.5YR2/3	締まりとても強い。粘付とても強い。砂の粘付は0.25mm~0.125mm(細粒砂)で強い。分級が良い。上層の砂層に比べ、粘子が粗くなる。赤砂層。

35層や38層に円形を生痕が残る。砂に空いた丸い穴に、上下から粘土が入り込んでいる。



第11図 道合遺跡 全体図 (1/1,000)

IV 遺構と遺物

道合遺跡

今回の調査範囲は、平成18～20年におこなわれた第II次調査の南側で、遺跡の南端にあたる。これまでに8回の調査がおこなわれており、今回は9次調査となる。各調査の年次等は次のとおりである。

第I次調査	平成6年	北区教育委員会（袋低地遺跡・道合遺跡	1995)
第II次調査	平成19～22年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡	2010)
第III次調査	平成23～24年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡	2013)
第IV次調査	平成24～25年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡	赤羽上ノ台遺跡 2015)
第V次調査	平成26～27年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡	2016)
第VI次調査	平成28年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡	2017)
第VII次調査	平成28年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡	2017)
第VIII次調査	平成29～30年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡	2019)

遺跡番号は、本センターで実施したII次調査で付与した遺構番号を継承した。調査時に遺構として認定したものの、その後の検討で除外したものは欠番とした。

検出遺構と出土遺物

《旧石器時代》

遺物 ナイフ形石器、削器、二次加工剥片

《縄文時代》

遺構 住居跡-3軒 炉穴-16基 土坑-12基 ビット群-3 ビット-4基

遺物 土器 早期前葉・中葉・後葉、前期初頭・中葉・後葉、中期後葉、後期前葉

《弥生時代》

遺構 住居跡-17軒 掘立柱建物跡-2軒 土坑-3基 焼土範囲-2

遺物 土器 高坏・壺・広口壺・甕・台付甕・二次利用土器片

土製品 勾玉

石製品 台石

《古墳時代後期～平安時代》

遺構 住居跡36 土坑14 焼土範囲1 ビット42基

遺物 土器 土師器高坏・坏・皿・埴・鉢・手づくね土器・壺・甕・台付甕・瓶、須恵器蓋・坏・埴・皿・鉢・瓶・横瓶・長頸瓶

土製品 支脚、管状土錘

石製品 白玉、管玉、石帯（巡方）

鉄製品 鉄鏃

〈中世〉

遺構 土坑（地下式横穴）4基

遺物 磁器、陶器、土器、石製遺物

〈近世〉

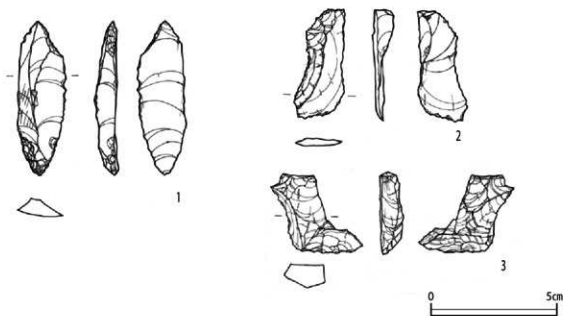
遺構 溝、畝、土坑、ピット

遺物 磁器、陶器、土器、土製品、石製品、金属製品

1 旧石器時代

1) 遺物

今回の調査で検出された旧石器時代の遺物は、石器3点である。いずれも2次の埋没を経たもので、攪乱や表土、後代の住居跡から出土しており、原位置からは遊離している。1はナイフ形石器で、縦長の剥片を素材としている。基部と先端部に刃潰し加工がなされ、先端部は折損している。黒曜石製で、雲状の斑文が認められることから信州系の産地と推定される。2はチャート製の削器で、微小な剝離が滑らかになっている。使用頻度は高かったものと見られる。3はチャート製の二次加工剥片である。



第12図 旧石器時代の石器 (2/3)

2 縄文時代

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、住居跡3軒、炉穴16基、土坑12基、ピット群3、ピット4基である。住居跡は、上部削平により柱穴のみのものが主体で、所属時期が明確ではないが、柱穴覆土・配列などから、早期後葉～前期初頭期と思われる。炉穴はIV次調査区（本報告地区の北東側）で検出された炉穴群に連なるものであろう。総じて遺構の密度は薄く、出土遺物も少ない。

1) 遺構

A 住居跡

総数3軒が検出された。被服本廠並びに団地造成に伴う削平を受け、遺存状態は不良である。

297号住居跡（第14図、図版19～22-4）

グリッド	105 - PPP	平面形態	円形？
規模	(400) × (200) × ? cm	床面積	？
主軸方向	？	構築回数	1回？

検出状況 1A区で検出された。南側は調査範囲外となっている。表土掘削後、集中する柱穴が検出され、焼土も確認されたため、住居跡と認定した。焼土部分が炉、柱穴は壁を巡る壁柱穴と判断した。

覆土 遺存していない。

柱穴 10基のピットが検出されている。径20～30×深さ20～50cm前後を測る。主柱穴と思しきものは明確ではなく、おそらくは壁柱穴と思われる。概ね円形に配されている。削平が床面下まで及んだものと考えられ、本来の深度はさらにあったものと思われる。

炉 楕円形を呈す地床炉である。50×40×10cmを測る。底面中央部は被熱が認められる。

床 遺存していない。削平が掘方まで及んでいたものと判断する。

周溝 検出されず。

遺物出土状態 総点数は18点で、内訳は土器16点（縄文15点・弥生1点）、石器1点、礫1点である。縄文土器の内訳は、早期後葉1点、前期中葉1点、前期後葉6点、時期不詳細片7点となる。すべて柱穴内からの出土である。

所属時期 出土土器の主体は前期後葉である。本住居跡もこの時期（諸磯式期）の所産と思われる。

325号住居跡（第15図、図版22-5～25-4）

グリッド	92・93 - RR	平面形態	楕円形？
規模	推490×推320×? cm	床面積	？
主軸方向	N25° W	構築回数	1回？

検出状況 3B区で検出された。被服本廠羊毛倉庫（5号倉庫）の床下にあたり、地均しなどの影響で壁・覆土・床などが消失し、柱穴のみ遺存している。

ローム層上面にて遺構確認精査を行ったところ、ピットが楕円形に巡って検出された。本遺跡IV次調査においても楕円形に巡るピットを住居跡と認定した経緯もあり、本遺構も住居跡と判断した。

覆土 遺存していない。

柱 穴 10 基のピットが検出されている。径 20 ～ 30 × 深さ 20cm 前後を測る。P2・8 には柱痕が認められた。主柱穴と思しきものはなく、おそらくは壁柱穴と思われる。概ね楕円形に配されている。削平が床面下まで及んだものと考えられ、本来の深度はさらにあったものと思われる。

炉 検出されず。削平されたものと思われる。

床 遺存していない。削平が掘方まで及んでいたものと判断する。

周 溝 検出されず。

遺物出土状態 出土遺物なし。

所属時期 柱穴の覆土にはぶい黄褐色土を主体とする。第Ⅱ・Ⅳ次調査において得られた知見では、早期後葉（末葉）～前期初頭期の覆土としており、本住居も同様の時期の所産と考える。

333 号住居跡（第 16 図、図版 25-5）

グリッド 95・96 - T T ~ V V 平面形態 楕円形？

規 模 推 700 × 推 450 × ? cm 床 面 積 ?

主軸方向 N87° W 構築回数 1 回？

検出状況 3 B 区で検出された。団地住棟の床下にあたり、地均しなどの影響で壁・覆土・床などが消失し、柱穴のみ遺存している。

ローム層上面にて遺構確認精査を行ったところ、ピットが楕円形に巡って検出された。325 号と同様に、本遺構も住居跡と判断した。

覆 土 遺存していない。

柱 穴 19 基のピットが検出されている。径 15 ～ 25 × 深さ 10 ～ 25cm を測る。主柱穴と思しきものはなく、おそらくは壁柱穴と思われる。概ね楕円形に配されている。削平が床面下まで及んだものと考えられ、本来の深度はさらにあったものと思われる。

炉 検出されず。削平されたものと思われる。

床 遺存していない。削平が掘方まで及んでいたものと判断する。

周 溝 検出されず。

遺物出土状態 出土遺物なし。

所属時期 柱穴の覆土にはぶい黄褐色土を主体とする。325 号住居跡と同様であり、早期後葉（末葉）～前期初頭期の所産と考える。

B 炉穴

3 群 - 16 基および単独の 3 基が検出された。1・2 群は 2 C 区、3 群は 3 B 区で確認された。第Ⅳ次調査で検出された炉穴群は 1・2 群の東側で近接しており、それらに連なるものと思われる。3 群はやや西側の離れた位置にある。以下、個別に略述するが、遺構番号は重複・連接した炉穴もそれぞれに付与している。なお 87 号は整理作業において精査した結果、遺構とは認定せず欠番とした。

第 1 群（71 ～ 76 号炉穴）（第 17・18 図、図版 26 ～ 30）

2 C 区、88・89 - J J 区で検出された。連接・重複した炉穴が 5 基、近接して単独の炉穴が 1 基である。被服本廠梱包場の床下にあたり、上部は削平されて下半部が遺存したものと思われる。

新旧関係は、74 → 73 → 72 を確認したが、71・75 との関係は明確ではない。

遺物は土器8点（早期後葉4・末葉1、前期中葉3点）、礫が1点出土した。1は71ないしは75号の足場、2は72号の足場と思われる位置であるが、共通の覆土中であり、帰属先は特定し得ない。

71号炉穴（第17・18図、図版26-7～27-3）

グリッド 88・89-JJJ 平面形態 楕円形
 規模 推150×推84×30／60×60cm 炉規模 85×60×35／43×30cm
 検出状況 連接・重複炉穴の北端に位置する。平坦な足場から炉部へと緩やかに傾斜する。煙道部は急傾斜となる。

時期 早期後葉と思われる。

72号炉穴（第17・18図、図版27-4～8）

グリッド 89-JJJ 平面形態 楕円形
 規模 160×114×45／70×70cm 炉規模 65×65×50／50×45cm
 検出状況 連接・重複炉穴の中央に位置する。足場はやや窪んでいる。炉部は南側で、煙道部は約45°の傾斜である。74→73→72号と南から北側に向かって、古い炉穴の足場を削平して炉部を構築している。75号とは足場が重複するが、新旧関係は不明である。

時期 早期後葉と思われる。

73号炉穴（第17・18図、図版28-1～5）

グリッド 89-JJJ 平面形態 楕円形？
 規模 ? 炉規模 (60)×(60)×35／35×33cm
 検出状況 72号の南側に位置する。74号足場を切って構築されているが、72号によって足場を切られる。全体規模は72号と同等なものと思われる。煙道部はやや急傾斜である。

時期 早期後葉と思われる。

74号炉穴（第17・18図、図版28-6～29-2）

グリッド 89-JJJ 平面形態 楕円形？
 規模 ? 炉規模 (75)×80×25／40×35cm
 検出状況 73号の南側に位置する。73号によって足場を切られる。全体規模は72号と同等と思われる。

時期 早期後葉と思われる。

75号炉穴（第17・18図、図版29-3～8）

グリッド 88・89-JJJ 平面形態 楕円形
 規模 推160×推80×25／推80×推60cm 炉規模 74×60×30／35×30cm
 検出状況 連接・重複炉穴の北側に位置し、71・72号と重複する。72～74号とは主軸が相違し、炉部を西側に持つ。煙道部は急傾斜である。

時期 早期後葉と思われる。

76号炉穴（第17・18図、図版30-1～6）

グリッド 88・89-JJJ 平面形態 楕円形
 規模 150×80×20／65×60cm 炉規模 55×45×25／35×35cm
 検出状況 71～75号の連接・重複炉穴の南東側に近接して構築された単独の炉穴である。規模・

形態などは71号以下の炉穴と同等である。北側に足場、南側に炉部を有す。足場から炉部にかけて緩やかに傾斜する。煙道部は緩やかに傾斜する。

遺物出土状態 遺物は出土していない。

時期 71～75号と同様に早期後葉の所産と思われる。

第2群(77～82号炉穴)(第19～21図、図版30-7～32)

2C区、88-L L L・MMM区で検出された。総計6基を数える。団地に伴う埋設管により南北に分断され、また北側は住棟により削平されている。連接・重複する炉穴と思われるが、81号は明確ではない。第1群と同様に被服本廠梱包場の床下にあたり、地均しがなされている。さらに290号住居跡が上部に構築されており、上半部は消失し下半部が遺存したものである。新旧関係は、77→80←79→78、80・79・78←82が確認された。

遺物は総点数145点で、内訳は縄文土器18点(早期後葉16、前期中葉2)、礫124点(焼礫)、炭化物1点、他時代土器2点となる。1～4は77号、5・7が80号、6が81号に帰属すると思われるが、覆土中でもあり、明確ではなく、ここに一括した。

77号炉穴

グリッド	88-MMM	平面形態	楕円形
規模	(200)×140×25/120×60cm	炉規模	60×50×30/50×40cm
検出状況	連接・重複炉穴の中央南側に位置する。埋設管により南北に寸断され、足場の一部を消失する。北側に足場、南側に炉部を有す。煙道部は約45°の傾斜となる。北側足場先端は79・80号に切られる。		

時期 出土した土器は野鳥式に比定される。炉穴の使用時期もその時期と思われる。

78号炉穴

グリッド	88-MMM	平面形態	楕円形?
規模	?	炉規模	90×105×40/60×40cm
検出状況	連接・重複炉穴の東側に位置する。東側に炉部があり、足場は西側ないしは北西側になるものと思われる。西側の79号の上部に本炉穴帰属の焼土層が伸びている事から本炉穴が新しいと判断したが、上部削平のため、足場部分は遺存しておらず、明確な軸方向・規模などは不明である。煙道部は急傾斜である。		

時期 77号と同時期であろう。

79号炉穴

グリッド	88-MMM	平面形態	楕円形?
規模	?	炉規模	85×80×25/40×40cm
検出状況	連接・重複炉穴の中央東側に位置する。東側煙道部を78号に、西側足場を80号に切られている。煙道部は緩やかな傾斜である。		

時期 77号と同時期であろう。

80号炉穴

グリッド	88-L L L・MMM	平面形態	楕円形
規模	(160)×90×25/48×42cm	炉規模	?

85号炉穴（第22・23図、図版33-8～34-2）

グリッド 94・95-T T・U U

平面形態 ?

規模 ?

炉規模 (54) × (78) × 25 / (40) × (53)cm

検出状況 83・84号からやや離れた西側に位置する。北西側は埋設管により削平され、南東側の炉部のみが検出された。焼失した部分が足場と思われる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 86号と同時期と思われる。

86号炉穴（第22・23図、図版34-3～8）

グリッド 95-T T

平面形態 楕円形?

規模 (135) × (80) × 30 / (52) × (60)cm

炉規模 (60) × (50) × 35 / (38) × (30)cm

検出状況 85号の西側に隣接する。南西側は332号住居跡、北西側は埋設管により消失する。南側に炉部、北側に足場を有す・煙道部は有段となり緩やかに傾斜する。

遺物出土状態 出土遺物は土器が10点である。いずれも縄文土器で、早期前葉2点、早期後葉一子母口式5点、時期不詳細片3点である。

時期 出土土器から、子母口式期の所産と思われる。

単独炉穴

2B・D区で計3基が検出された。調査範囲が狭く、複数基ないしは連接形態の存在は確認し得なかった。以下、個別に掲載する。

88号炉穴（第24図、図版35-1～3）

グリッド 89-Q Q Q

平面形態 ?

規模 ?

炉規模 (65) × 60 × 13 / (55) × 40cm

検出状況 2B区東端部で検出された。西側は団地関連施設により削平されている。遺存する部分は炉部である。足場は消失した西側にあると思われる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期後葉の所産であろう。

89号炉穴（第24図、図版35-4～8）

グリッド 84-K K K

平面形態 楕円形?

規模 (80) × 85 × 15 / 72 × (40)cm

炉規模 (30) × 55 × 20 / (20) × 42cm

検出状況 2B区北端部で検出された。団地関連施設に囲まれた狭い範囲であり、北側足場先端・南側炉部先端・煙道部はそれぞれ欠失する。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期後葉の所産であろう。

90号炉穴（第24図、図版36）

グリッド 95-Q Q Q

平面形態 ?

規模 ?

炉規模 a₁ : 25 × 18 × 10cm

a₂ : (14) × 15 × 5cm

b : 20 × 20 × 5cm

検出状況 2D区中央部で検出された。古墳時代の337号住居跡南側壁の貯蔵穴脇に焼土分布が確認された。掘り込みは二ヶ所3基あり、炉穴の炉部であると判断した。北側の重複する2基はa₁・a₂炉、南西側1基はb炉とした。確認面の焼土分布はこれら3基を繋ぐようにL字形に広がっている。各炉底面は被熱度が高い。上面は337号住居跡並びに団地造成などの削平により消失し、各炉に対応する足場などは残存していない。複数炉の状況から、連接した炉穴であったと考えられる。

遺物出土状態 総点数9点で、土器7点（早期後葉3、前期後葉3、土師器1）、礫2点である。

時期 小片ではあるが、出土土器から早期後葉の所産と思われる。

C 土坑

今回の調査で検出された縄文時代の土坑は12基である。この中で、陥穴土坑が1基、その他が11基である。以下、形態別に概観する。

《陥穴土坑》

307号土坑（第27図、図版38-5～8）

グリッド 94・95-VV

平面形態 略円形（長方形）

規模 208×(95)×80 / 150×62cm

検出状況 3B区で検出された。団地住棟内に位置する。西側の長辺部分は塹壕により消失する。310・311号土坑と重複する。本土坑の上部にこれら土坑が構築されたと思われるが、断面観察では確認し得なかった。

底部施設 打ち込みタイプ。小ビット1本が確認された。その他は確認し得なかった。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 土坑の形態から早期の所産と思われる。

《その他の土坑》

機能・用途が不明な土坑を一括した。総じて円形・楕円形を呈し、掘り込みは深くない。皿・盥状のものは墓塚の可能性もあるが確証はない。出土遺物も僅少であり、時期比定の材料としては、覆土に抱える所が多い。

254号土坑（第25図、図版37-1・2）

グリッド 75-JJJ

平面形態 楕円形

規模 128×80×15 / 145×40cm

検出状況 2A区で検出された。被服本廠9号倉庫の床下にあたり、東基礎により分断されている。掘り込みは浅い。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期～前期と思われる。

255号土坑（第25図、図版37-3・4）

グリッド 84-HHH

平面形態 楕円形？

規模 (190)×(66)×55 / (118)×(30)cm

検出状況 2C区で検出された。西半部は団地公園遊具基礎により削平されている。底面は南側が一段深く掘り込まれている。

遺物出土状態 出土遺物は縄文時代早期の土器2点である。

時期 早期～前期と思われる。

257号土坑(第25図、図版37・5・6)

グリッド 90-JJJ 平面形態 不整楕円形

規模 165×118×25 / 145×85cm

検出状況 2C区で検出された。浅い掘り込みで底面は凹凸がみられる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期～前期と思われる。

271・272・275・276号土坑(図版37・7・8)

2C区、90-JJJ区で検出された。第2炉穴群の西側、81号炉穴に近接した位置にある。2本の埋設管により分断され、基数、平面形態など不明瞭な点も多いが、一応4基とした。炉穴群に連なるように分布しており、炉穴とも考えられたが、明確な焼土等は確認されず、土坑と判断した。

271号土坑(第26図)

グリッド 90-JJJ 平面形態 略円形

規模 180×175×15 / 130×130cm

検出状況 埋設管により南北に分断される。南側は当初2基の重複としたが、北側の様相などから1基と判断した。275号に一部を切られる。

遺物出土状態 出土遺物は、土器2点(早期後葉)、石器1点(敲石)、礫1点である。

時期 早期～前期と思われる。

272号土坑(第26図)

グリッド 90-JJJ 平面形態 楕円形?

規模 (255)×(95)×20 / (230)×(68)cm

検出状況 271号の西側に位置する。2本の埋設管により南北に分断される。271・275号と重複していると思われるが、削平されているため明確ではない。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期～前期と思われる。

275号土坑(第26図)

グリッド 90-JJJ 平面形態 ?

規模 (110)×(30)×40 / (80)×(15)cm

検出状況 2本の埋設管が交差する位置にあり、南側の一部が遺存しているのみである。271号を切って構築されている。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期～前期と思われる。

276号土坑(第26図)

グリッド 90-JJJ 平面形態 円形?

規模 (78)×(35)×30 / (50)×(15)cm

検出状況 275号の北側に位置する。北半は団地住棟により削平されており、平面形態など不明な

点が多い。南西側の 272 号と重複している可能性があるが、攪乱による削平のため明確ではない。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期～前期と思われる。

278 号土坑 (第 25 図、図版 38-1・2)

グリッド 94・95 - G G G 平面形態 ?

規模 (180) × (90) × 24 / (135) × (70)cm

検出状況 1 A 区で検出された。被服本廠梱包場基礎などにより東半部・南側を失う。北西側の一部の遺存であり、全体像は不明である。浅い掘り込みで、覆土にローム粒を含む。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 早期～前期と思われる。

284 号土坑 (第 25 図、図版 38-3・4)

グリッド 80 - A A A 平面形態 楕円形

規模 (105) × (100) × 27 / (70) × 65cm

検出状況 2 A 区で検出された。北西側は埋設管等により削平されている。浅い掘り込みである。

遺物出土状態 出土遺物は、土器 2 点 (早期後葉)、礫 1 点である。

時期 早期～前期と思われる。

310 号土坑 (第 27 図、図版 39-1・2)

グリッド 94 - V V 平面形態 略円形

規模 (114) × 62 × 20 / (90) × 40cm

検出状況 3 B 区で検出された。団地住棟内にあり、上部は削平を受けていると思われるが、基本的に浅い掘り込みであろう。307 号 (陥穴土坑) と重複し、本土坑が新しいが、調査過程において 307 号を完掘したため、南側を失う。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から前期の所産と考える。

311 号土坑 (第 27 図、図版 39-3・4)

グリッド 94・95 - V V 平面形態 楕円形

規模 (130) × 102 × 8 / (120) × 80cm

検出状況 3 B 区で検出された。団地住棟内にあり、上部は削平を受けていると思われるが、基本的に浅い掘り込みであろう。310 号とともに 307 号 (陥穴土坑) と重複し、本土坑が新しいが、調査過程において 307 号を完掘したため、南側を失う。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から前期の所産と考える。

D ビット群・ビット

今回の調査で検出された縄文時代のビットは総計 29 基である。被服本廠倉庫・団地造成などによる削平のため、上部が削られ、遺存状態が不良のものが多い。ある程度の纏まり・配列が確認されたものは群として報告する。

1号ピット群 (第28図、図版39-5～42)

3B区、95～97-XX・YY区に16基が検出された。ピットの規模は以下のとおりである。

P 1-18 × 15 × 15cm P 2-20 × 17 × 15cm P 3-18 × 15 × 10cm P 4-18 × 15 × 20cm

P 5-22 × 20 × 20cm P 6-18 × 16 × 10cm P 7-23 × 23 × 20cm P 8-20 × 18 × 20cm

P 9-15 × 15 × 15cm P10-15 × 15 × 20cm P11-18 × 15 × 15cm P12-20 × 17 × 15cm

P13-20 × 15 × 15cm P14-48 × 45 × 25cm P15-40 × 30 × 20cm P16-77 × 35 × 20cm

P14～P16がやや大振りで、他は規模が小さい。これは前者の検出面より後者の検出面が削平により下がっており、深度も含め上部を消失していると思われ、本来の深さではない。

ピットの分布をみるに、20 × 10 mの範囲に16基が検出され、2～3基が近接している例(P 1・2、P 4・5、P 6・7、P 8～10、P 11・12、P 14～16)がみられるが、直線(柵など)・楕円形(住居跡柱穴)などの配列は明確に捉えられない。何らかの施設であることは想定されるが、具体的な回答を得るに至らない。ここでは一応ピット群として掲載する。時期的には出土土器はなく明確ではないが、覆土の様相などからは早期後葉～前期初頭期の所産と思われる。

2号ピット群 (第29図)

3B区、92-XX・YY区で4基が検出された。この周囲はわずかに縄文時代の包含層が遺存しており、その掘削中に確認された。南西側は団地住棟、北東側は植込みのため、ごく狭い範囲内での確認であり、本来的なピットの分布数・配列などは把握し得なかった。時期的には、1号同様、早期後葉～前期初頭期の所産と思われる。以下、ピットの規模である。

P 17-20 × 15 × 25cm P 18-20 × 20 × 20cm P 19-50 × 35 × 40・15 (2基連接)

P 20-20 × 20 × 20cm

3号ピット群 (第29図)

3B区、95-VV区で5基が検出された。団地住棟内に残る地山で確認された。建物の他に明治時代の塹壕があり、本来は周囲にもピットが存在していた可能性は高い。早期後葉～前期初頭期の所産と思われる。以下、ピットの規模である。

P 21-18 × 15 × 15cm P 22-20 × 16 × 25cm P 23-16 × 15 × 15cm

P 24-16 × 14 × 20cm P 25-24 × 22 × 20cm

その他のピット (第29図)

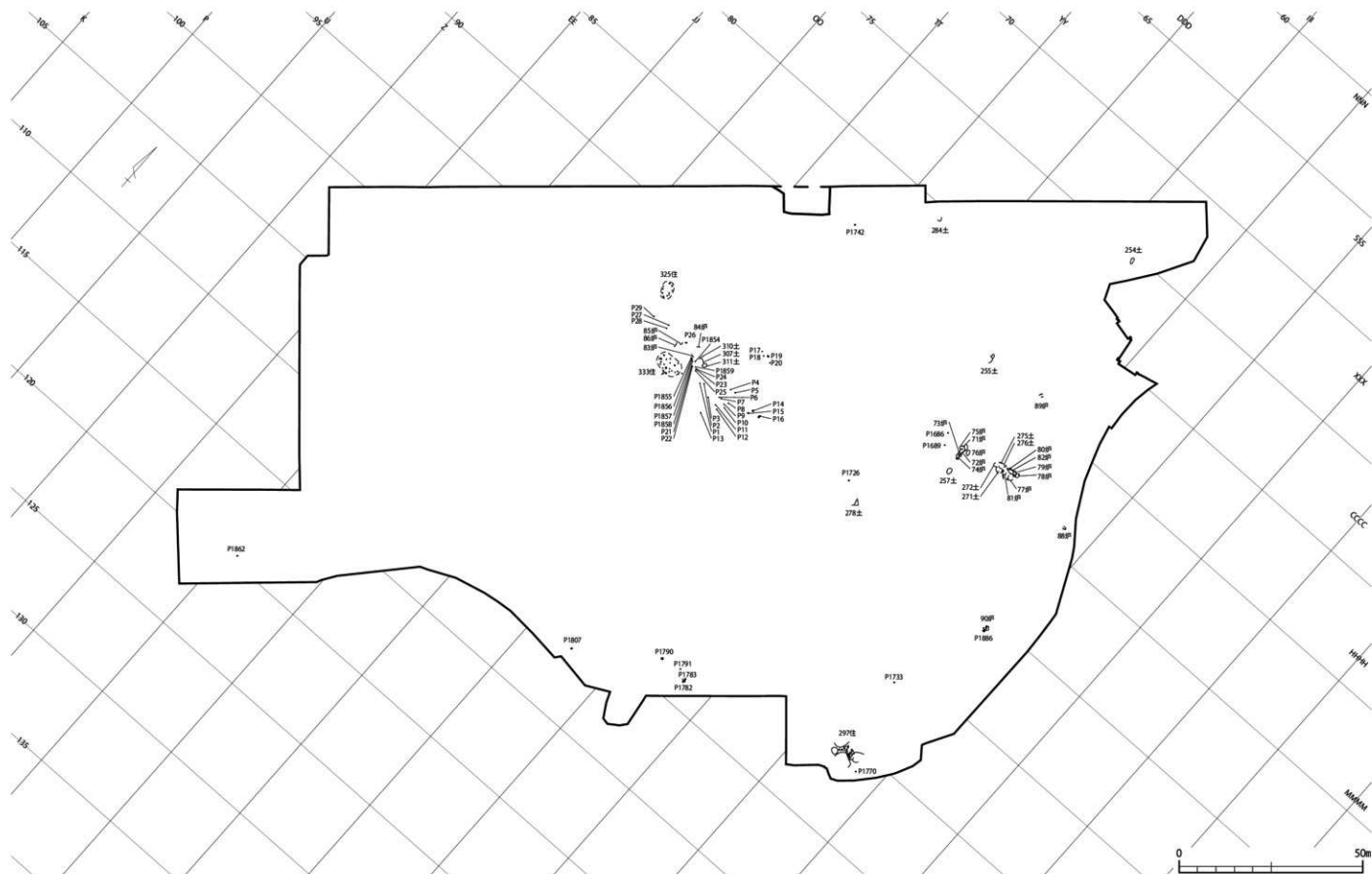
単独で検出されたピットを一括する。柱穴ではあるが、施設の特定には至らない。P 27・28は2基並列するが、それ以上の配列は認められない。いずれも覆土の様相から早期後葉～前期初頭期の所産と思われる。以下、ピットの規模である。

P26: 94-UU区 45 × 35 × 40cm

P27: 94-S S区 20 × 18 × 20cm

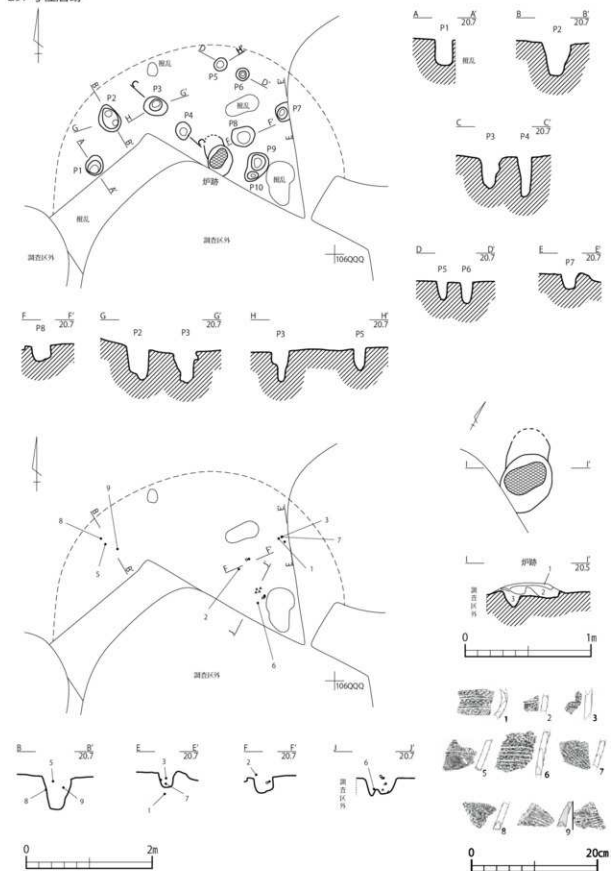
P28: 94-S S区 18 × 14 × 15cm

P29: 94-R R区 25 × 18 × 15cm



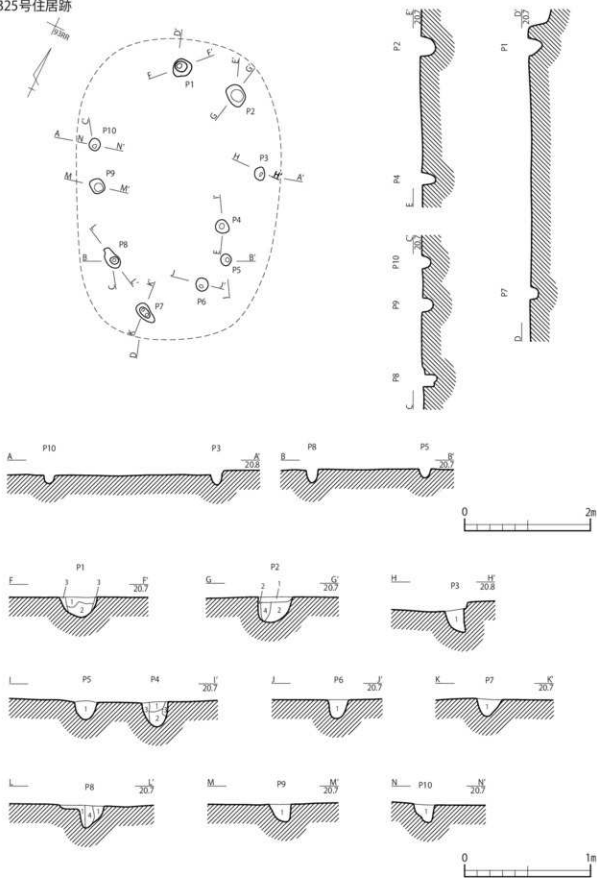
第13図 遺構遺跡 時代別遺構配置図 (1) 縄文時代 (1/1,000)

297号住居跡



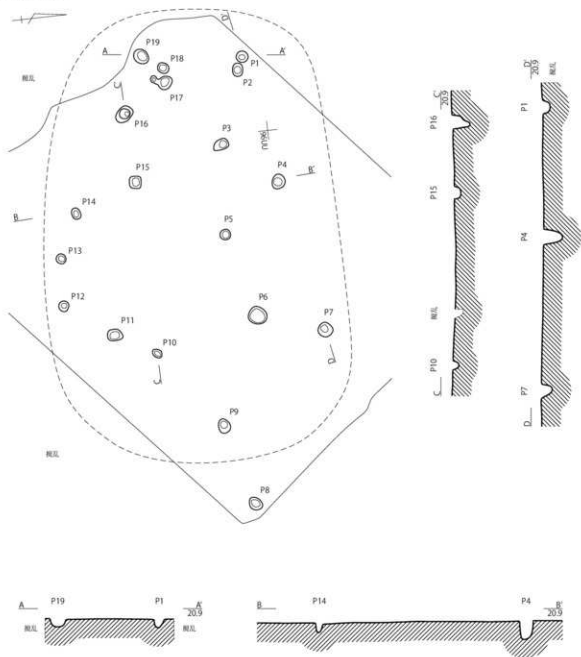
第14図 297号住居跡 (1/60・1/30)

325号住居跡



第15图 325号住居跡 (1/60 · 1/30)

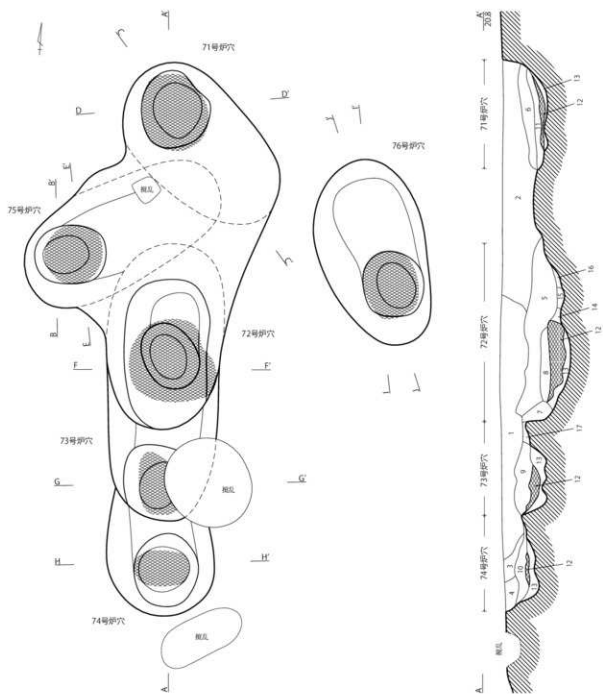
333号住居跡



0 2m

第 16 図 333号住居跡 (1/60)

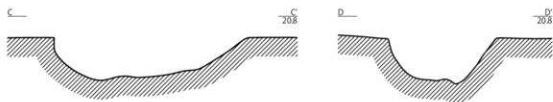
71~76号炉穴



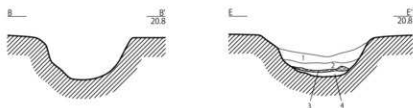
第 17 图 炉穴 (1) (1/30)

71~76号炉穴

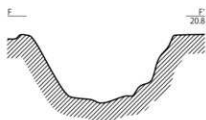
71号炉穴



75号炉穴



72号炉穴



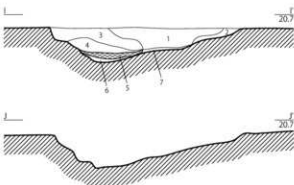
73号炉穴



74号炉穴

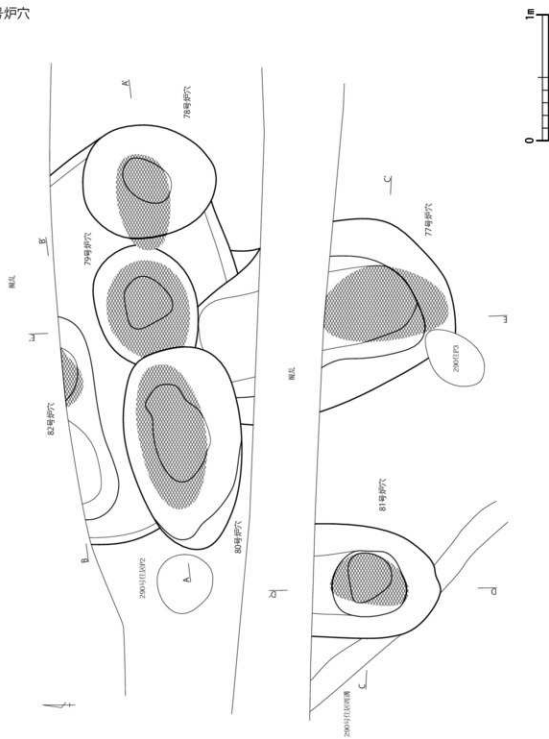


76号炉穴



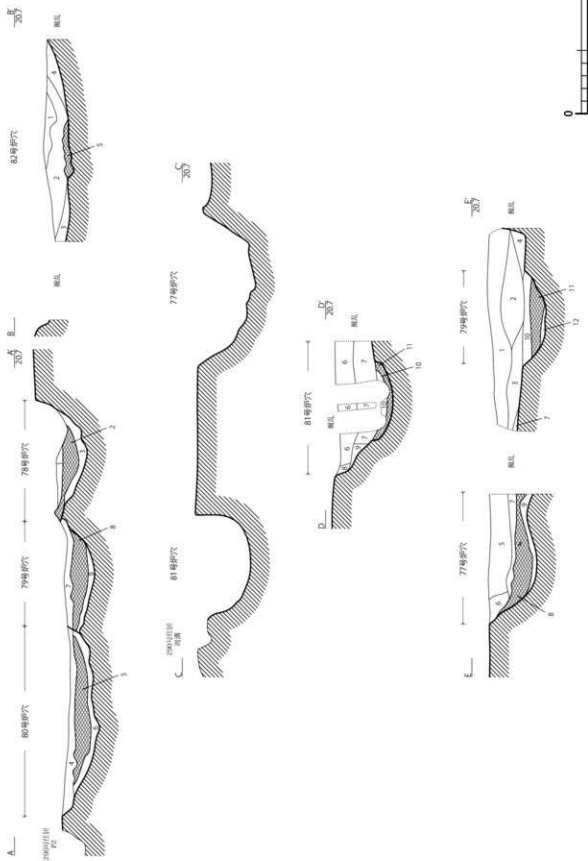
第18图 炉穴 (2) (1/30)





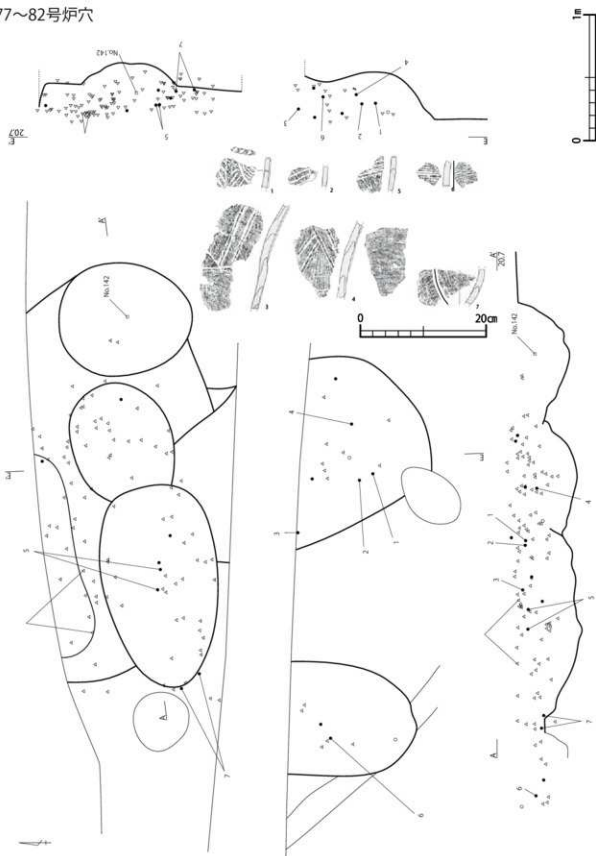
第19图 炉穴 (3) (1/30)

77~82号炉穴

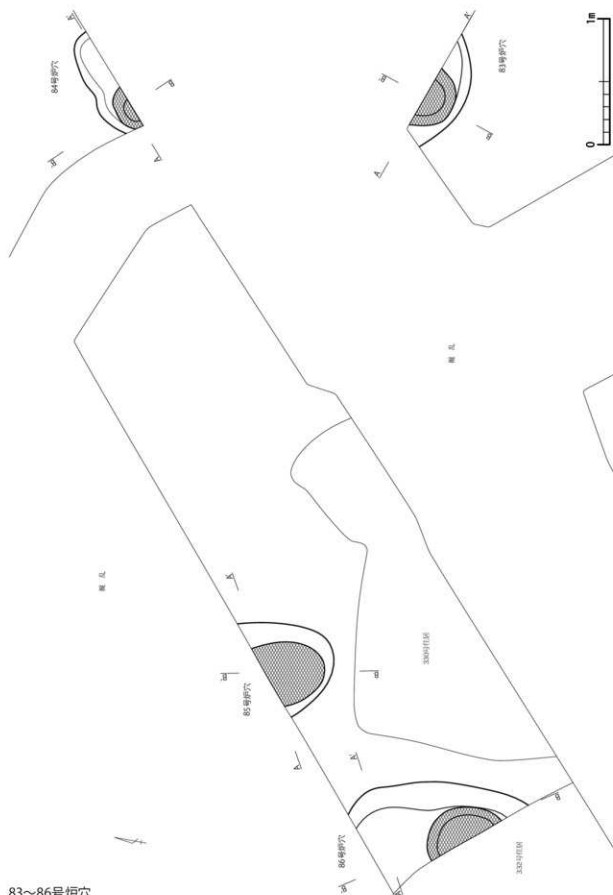


第20図 炉穴(4) (1/30)

77~82号炉穴



第21图 炉穴(5)(1/30)

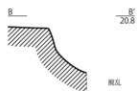
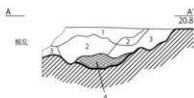


83~86号炉穴

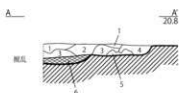
第22図 炉穴 (6) (1/30)

83~86号炉穴

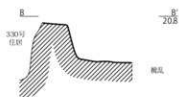
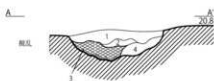
83号炉穴



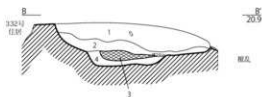
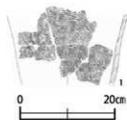
84号炉穴



85号炉穴



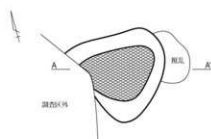
86号炉穴



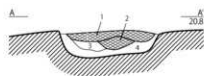
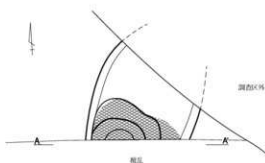
第23图 炉穴(7) (1/30)

88・89・90号炉穴

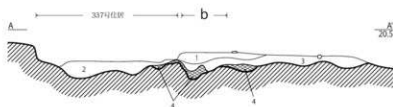
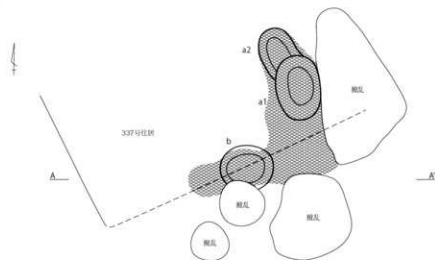
88号炉穴



89号炉穴

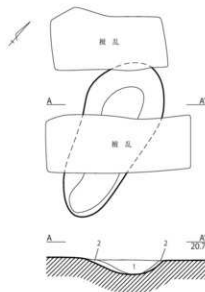


90号炉穴

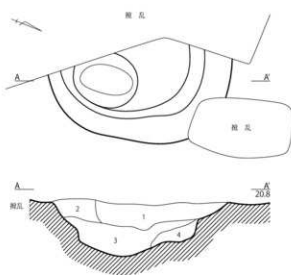


第24图 炉穴(8) (1/30)

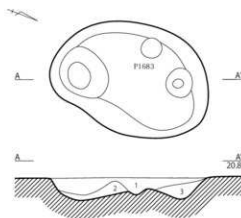
254号土坑



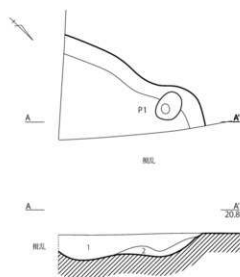
255号土坑



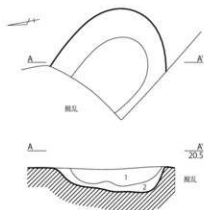
257号土坑



278号土坑

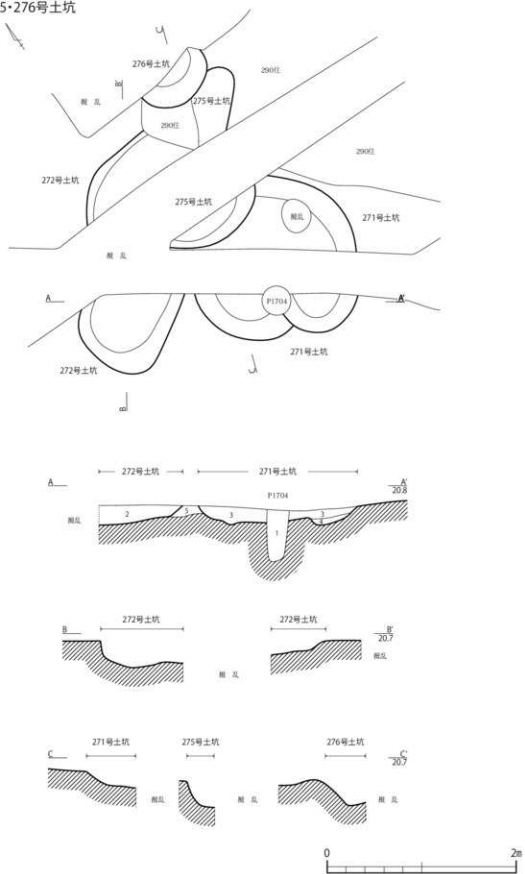


284号土坑



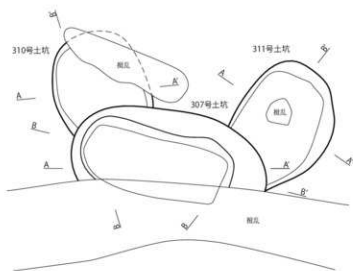
第 25 图 土坑 (1) (1/40)

271・272・275・276号土坑

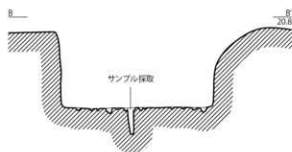
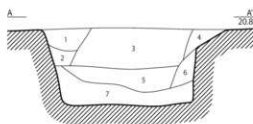


第26图 土坑 (2) (1/40)

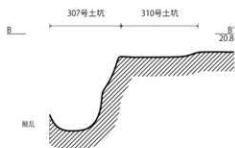
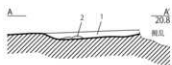
307・310・311号土坑



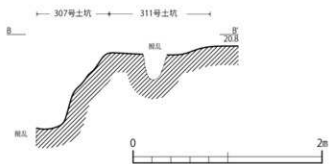
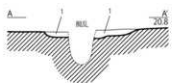
307号土坑



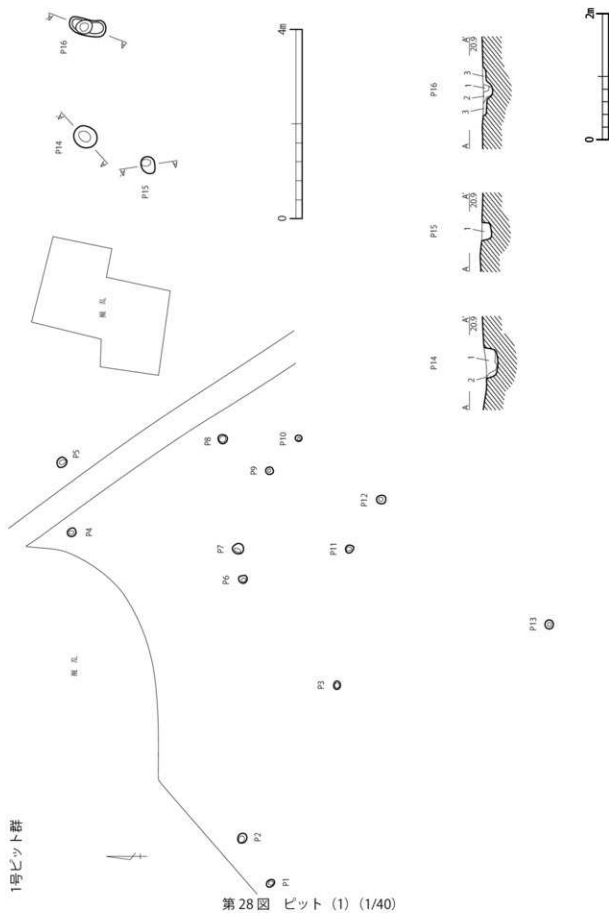
310号土坑



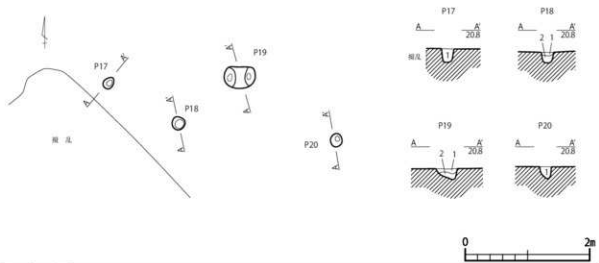
311号土坑



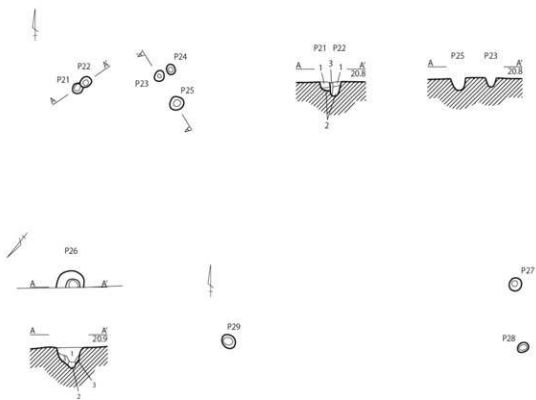
第 27 図 土坑 (3) (1/40)



2号ビット群



3号ビット群



第29図 ビット (2) (1/40)

2) 遺物

今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、土器 734 点（遺構内 55 点、遺構外 679 点）、土製品 1 点（二次利用土器片）、石器 27 点（石鏃 1 点、二次加工剥片 2 点、打製石斧 1 点、磨石 1 点、敲石 1 点、石皿 2 点、剥片 10 点）、礫 580 点を数える。土器の時的期的内訳は、早期前葉 9 点、早期中葉 3 点、早期後葉 50 点、早期細片 10 点、前期初頭 2 点、前期中葉 53 点、前期後葉 114 点、前期細片 128 点、中期後葉 14 点、後期前葉 3 点である。礫は時代の特定・別が困難であり、全体の総数のみ掲載した。

調査区内は、縄文時代の包含層は極めて少なく、ごく部分的に 10～20cm ほどの層厚で遺存している程度であった。調査区全面に陸軍被服本廠および団地造成に伴う削平・建物建設による攪乱が入り、縄文時代を含む遺構の確認面はローム上層（IV 層）以下の層面が多い。本調査区を含む赤羽台の基盤地形では今回の調査区は南側に緩く傾斜していく部分であり、南側には若干の包含層が遺存している状況が第Ⅱ・Ⅳ次調査で確認されたが、今回は削平深度が深く、遺存状態は不良であった。

出土した遺物の多くは後代（弥生～近現代）の遺構内からのものであり、弥生時代以降の度重なる攪乱・削平により二次的移動したものと考えられる。土器の中で、前期後葉の出土量が多いが、当該時期の遺構はほとんど見受けられない。住居跡などの遺構は後代の削平・攪乱で消失した可能性が大きく、遺構の存在は、遺物量からの推測とならざるを得ない。以下、各遺構・遺構外の遺物を概観する。個別の詳細は観察表（第 2 分冊 第 7・8 表）を参照されたい。

A 土器

・遺構内出土土器

住居跡

297 号住居跡（第 30 図 1～9、第 7 表、図版 43）

出土土器総数 15 点の内訳は、早期後葉 1 点、前期中葉 1 点、前期後葉 6 点、時期不詳細片 7 点である。9 点を掲載した。

1～8 は前期後葉の諸礫 b 式である。1・2 は沈線文系で、半截竹管状工具による平行沈線が施される。2 は鋸歯文であろうか。3～5 は爪形文系である。3 は半截竹管による C 字状爪形文＋平行沈線列が多段に配される。4 は文様帯下端区画線で、刻目を有す隆帯の上下に C 字状爪形文を施す。胴下半は縄文施文である。5 も文様帯区画の C 字状爪形文である。6 は浮線文系である。横位に数条巡らせる。地文の縄文は浮線の上にも施す。7・8 は縄文施文で、7 は結節 S 字文が施される。9 は早期後葉一条痕文系で、内外面に条痕が施される。

1～8 は諸礫 b 式、9 は早期後葉の所産と思われる。

71～74 号炉穴（第 30 図 1・2、第 7 表、図版 43）

出土土器 2 点を掲載した。1 は口縁部で、外傾して端部上面は平坦に仕上げる。内外面条痕を施す。2 は胴部で、内外面条痕施文である。2 点とも早期後葉の所産である。

77～82 号炉穴（第 30 図 1～7、第 7 表、図版 43）

出土土器 20 点の内訳は、早期後葉 9 点、早期細片 3 点、前期中葉 2 点、時期不詳細片 5 点、弥生土器 1 点である。7 点を掲載した。

1・2 は同一個体である。山形波状口縁で、端部上面に棒状工具の押捺がなされる。波頂部から隆

帯が垂下し兩脇に棒状工具による矢羽根状沈線が配される。波頂部間は重弧文を配す。3・4も同一個体である。外反しつつ立ち上がる器形で、胴中位緩い屈折部から上位に文様帯を配す。区画は微隆起によるもので、区画内は2本微隆起（内側磨消）による三角形状小区画を配す。その区画内は斜位沈線を充填する。内外面とも擦痕文を施す。5は区画下端に微隆起＋平行沈線を施す。内外面擦痕文である。6・7は条痕のみの資料である。

以上の土器は早期後葉の所産で、1～5は野鳥式に比定されよう。

86号炉穴（第30図1～3、第7表、図版43）

出土土器10点の内訳は、早期前葉2点、早期後葉5点、早期細片3点である。3点を掲載した。

1は図上復元したものである。ほぼ直線的に開く器形で、胴上部はヨコ、以下斜方向の条痕が施される。2は2本の細微隆起による区画文で、内側は磨り消される。区画内も細微隆起が斜位に配される。3は内外面斜方向の条痕が施される。

2は微隆起線を用いた文様を有す。胎土中に繊維は微量で、堅緻な土器である。早期後葉－子母口式に比定されよう。条痕のみの1・3も子母口式と思われる。

90号炉穴（第30図1～3、第7表、図版43）

出土土器8点の内訳は、前期後葉4点、時期不詳細片4点である。2点を掲載した。

1は大きく外反して口縁部は直立する。端部上面は面取りされる。地文縄文に横位の平行沈線＋C字状爪形文を複列に配すものである。2は幅広沈線が巡る。1・2とも前期後葉－諸磯b式に比定されよう。

255号土坑（第30図1、第7表、図版43）

出土土器は2点で早期後葉の所産である。1点を掲載した。1は内外面条痕を施す。

271号土坑（第30図1、第7表、図版43）

出土土器は2点で、早期後葉の所産である。1点を掲載した。1は内外面条痕を施す。

284号土坑（第30図1、第7表、図版43）

出土土器は2点で、早期後葉1点、前期中葉1点である。1点を掲載した。1は摩耗が激しく明瞭ではないが、縄文と思われる。原体は不明である。前期中葉－黒浜式に比定されよう。

・遺構外出土土器

遺構外出土土器総数679点のうち、時期の判明したものは早期前葉（燃糸文系－稲荷台式）3点、早期中葉（沈線文系－三戸式）3点、早期後葉（条痕文系－子母口式～茅山上層式）50点、早期細片3点、前期初頭2点（下吉井式・花積下層式）、前期中葉（黒浜式）53点、前期前半（花積下層式～黒浜式）126点、前期後葉（諸磯式）114点、中期後葉（加曾利E式）14点、中期細片2点、後期前葉（堀ノ内式）3点、後期細片1点となっている。

早期前葉（第31図1～3、第7表、図版44）

3点を掲載した。1・3は燃糸Lがまばらに施文される。2は胴下部で同心円状擦痕が巡る。

1～3は稲荷台式に比定されよう。

早期中葉（第31図4、第7表、図版44）

1点を掲載した。4は半截竹管による横帯区画内の斜行格子目文である。三戸式に比定される。

早期後葉（第31図5～34、第7表、図版44）

30点を掲載した。5は細微隆起による斜行区画文で微隆起線の間は磨り消される。6～8は条痕を施すが、6・7は原体が繊維束と思われる。5～8はいずれも胎土中に繊維は含まれず、金雲母の混入が認められる。9は面取りされた端部上面に刻目が入る。細微隆起による幅狭の区画がなされ、縦位の微隆起を並べる。胴上部は同様の微隆起で斜行梯子状文が施される。繊維束による条痕を施す。10は9と同様に端部に細微隆起による区画がなされるがやや幅が広い。区画内は縦位微隆起が配される。繊維束による条痕である。11も細微隆起による区画文である。繊維束による条痕を施す。12・13は波状口縁で、貝殻復縁文+微隆起が施される。繊維束による条痕を施す。14は端部に摘まみ上げ状の突起を付す。上面には棒状工具による押圧が巡り、口縁部は同一工具による縦位沈線列が配される。繊維束による条痕を施す。胎土中に繊維はみられない。15・16は尖頭状の口縁端部に繊維束による条痕を施す。17・20は胴部で繊維束による条痕を施す。9～13は胎土中に繊維を微量に含む。

18・19・21～32は胴部資料で、胎土中に繊維を含み、内外面に貝殻条痕を施すものである。条痕施文後、ナデを施すものが多い。

33・34は底部で、尖底を呈すが、33は厚手の作りで開き気味になる。34は薄手で直立気味に立ち上がる。

5～13・15～17・20は子母口式、14・22は野鳥式に比定されよう。14は野鳥1式となろう。子母口式では、9の梯子状文や10・11の微隆起区画など同式でも新しい段階の所産と思われる。本遺跡第VI次調査226号土坑出土土器と同様の形態である。

前期初頭（第32図35～37、第7表、図版45）

3点を掲載した。いずれも口縁部である。35は貝殻背圧痕文を施す。地文は縄文LRである。36は横位の燃糸側面圧痕文である。37は端部上面に縄文を施文する。口縁部には附加条縄文LR+R2条が施される。

3点は、いずれも花積下層式に比定される

前期中葉（第32図38～76、第7表、図版45）

42点を掲載した。38～41は口縁部資料である。38はC字状爪形文+平行沈線が巡る。39～41は同一個体である。口縁端部は内湾し、細沈線による格子目文が施される。穿孔を有す。42は半截竹管による沈線文である。43～45は沈線区画文がみられる。46～75は縄文施文のみの資料である。50～52は口縁部で、全面縄文施文のみの個体である。その他は口縁部～胴上部に文様帯を有すものもあろうかと思われる。原体別では、無節R-50～52・60、L-68、R+L羽状-61、単節RL-48・49・53・55・59・63・67・70・71・73、LR-54～57・69・72、RL+LR羽状-65、附加条L+R-46・47となる。単節縄文RLが主体を占める。76は底部で、周縁が張り出す。縄文RLを用いる。

以上の土器は概ね黒浜式に比定されるが、46～49は初頭～前葉段階かとも思われる。黒浜式は文様を有するものなどから2式段階であろう。

前期後葉（第33～35図77～158、第7表、図版46～48）

82点を掲載した。文様系統別に、沈線文系-77～101、爪形文系-102～117、浮線文系-118～130、縄文-131～153となる。154・155は底部、156は突起、157・158は搬入品である。

77・78・80・83は肋骨文である。77は縦位竹管刺突列を基軸に半截竹管平行沈線の弧線文を配す。胴下半は地文縄文のみである。78・80は基軸線が平行沈線である。79は鋸歯文＋円形竹管文を施す。81・84～86・93・94は弧線文・波状文である。82は木葉文で、まばらに地文縄文が施される。87～92は鋸歯文である。88・90～92は多段区画になる。90・91は同一個体である。95～101は文様帯区画の平行沈線で、胴下半は地文のみとなるが、100は波状文が施されている。

102は図上復元した個体である。小波状口縁で、端部上面に竹管側面による押圧が施される。縄文を全面に施文し、上半部に文様帯を設ける。端部・胴中に3列の平行沈線＋C字状爪形文を巡らせて区画し、平行沈線による鋸歯文と変形木葉文を配す。103は口縁部が内傾する。端部・口縁部下に3列の平行沈線＋C字状爪形文を配して文様帯を区画する。区画内は同じく平行沈線＋C字状爪形文で変形木葉文を施文する。104・105は口縁部に平行沈線＋C字状爪形文を複数列巡らせるもので、102などと同様の文様帯構成になろう。106は文様帯下端区画線で、平行沈線＋D字状爪形文を用いる。107～112は平行沈線＋C字状爪形文で変形木葉文を配すものである。108は縦位区画線がみられる。113～117は文様帯区画線で、平行沈線＋C字状爪形文である。

118は波状口縁で、胴部から内湾しつつ立ち上がる。端部上面に梯子状浮線（＋半截竹管押圧）を施す。胴上部湾曲部に浮線を2条巡らせて、文様帯下端区画線としている。区画内は2条1単位の浮線による波状文・曲線文が施される。119は直線的に開く口縁部で、端部内面が三角形に張りだす。上面には浮線による縦位区画・変形木葉文を配す。120・121は端部上面に押圧、口縁部に文様帯上端区画の浮線、区画内は浮線による波状文が施される。122～124は同一個体である。端部は強く内湾し、山形小突起が付く。上面には浮線（＋刻目）の波状文が巡る。口縁部は扁平の浮線2＋連結浮線（＋半截竹管ハの字状押し引き）による区画がなされ、区画内は同様の連結浮線による縦位小区画、波状文などが施される。125も梯子状の連結浮線が巡る。126は押圧が付された浮線、127・128は縄文が付された浮線で、127は波状文と思われる。129・130は文様帯下端区画の浮線である。

131～153は地文の縄文のみの資料であるが、131・132のように口縁部以下全面に縄文のみが施されたもの以外は胴下半の地文のみの部位と思われる、上半部に文様帯を有していた可能性がある。原体は概ね単節RLないしLRであるが、無節縄文もみられる。135は結節である。143は羽状である。

154・155は底部資料で、154は外傾、155は内湾しつつ立ち上がる。

156は獣面突起である。おそらくは口縁端部の突起頂部と思われる。刻目をもつ浮線で縁取られ、先端部は鼻孔が設けられる。目・口などは剥落して遺存していない。猪を表現したものであろう。

157・158は同一個体である。貝殻腹縁による連続波状圧痕文が施される。腹縁に放射筋を持たないハマグリなどのを用いたもので、滑らかな弧状となる。

以上の土器群は77～156が諸磯式、157・158が浮島式に比定される。諸磯式の細別時期は以下のようになるものと思われる。

a式—77～83・85・144～153

a～b式古—88・93

b式古—86・87・89・94～99・102～104・107～111

b式中1—100・105・106・112～121・125～128・156

b式中2—122～124・129・130

b式- 84・90～92・101・131～143・154・155

中期後葉（第35図159～168、第7表、図版48）

10点を掲載した。159～162は口縁部である。159は楕円区画文で、160は渦巻楕円区画文とみられる。161・162は端部に沈線を通らせる。163～168は胴部資料である。163は区画下端沈線が通る。164は磨消縄文でJ字文かと思われる。165は頸部区画隆帯が通る。166は磨消懸垂帯である。167は無文でケズリが顕著に残る。168は連鎖状隆帯が垂下する。

以上の土器は、159・160・163・166・167が加曾利E2式、161・162が加曾利E3式、164が加曾利E4式、168は曾利I式かと思われる。

後期前葉（第35図169・170、第7表、図版48）

2点を掲載した。169・170は同一個体で、太い沈線による懸垂文が配される。堀ノ内1式である。

B 石器（第36・37図、第8表、図版49・50）

縄文時代の石器は出土量が少なく、掲載した資料がほぼすべてであり、未掲載は剥片（細片）が数点のみである。

石鏃（1）

1点のみである。凹基無茎鏃で、基部の一部を欠失する。先端部にかけてやや括れを有す。チャート製である。

剥片（2）

1点を掲載した。石鏃作成過程のものと思われる。黒曜石製である。

打製石斧（3～6）

4点を掲載した。3は小形の短冊形である。刃部・基部を欠失する。板状の素材を使用したもので、加工は主に側縁の調整剥離である。4～6は基部から刃部にかけて扇状に広がる撥形である。4の側縁部は丁寧な調整剥離が入る。5・6は不定形で明確ではないが、刃部調整とみられる剥離から打製石斧とした。石材は、3が粘板岩、4・6が砂岩、5がホルンフェルスである。

磨石（8・11・15）

3点を掲載した。8は略三角形を呈し、図の下面に敲打・磨痕を有す。スタンプ状石器かと思われる。11は小形の円形を呈すると思われるものである。15は不定形で、素材の形状を残したものである。石材は8が凝灰岩、11が砂岩、15が安山岩である。

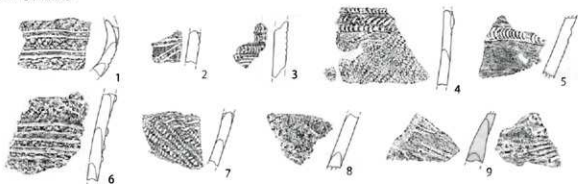
敲石（7・9・10）

3点を掲載した。7・9は端部に若干の敲打痕を有し、9は研磨痕も認められる。10は小形で、使用頻度が高い。石材はいずれも砂岩である。

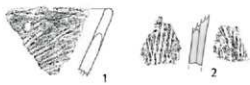
石皿（12～14）

3点を掲載した。12は両面使用で、研磨面に線状の擦痕がみられる。先端が尖るまたは鋭角な部位を研磨した痕跡であろうか。13は研磨面が括れ、使用頻度の高さが伺える。14は大形の石皿の破片である。石材はいずれも砂岩である。

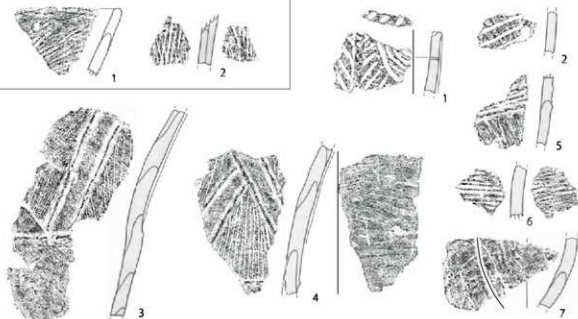
297号住居跡



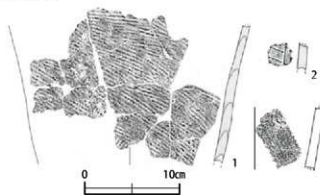
71~74号炉穴



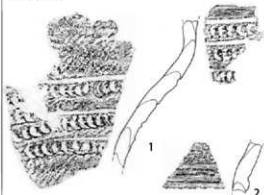
77~82号炉穴



86号炉穴



90号炉穴



255号土坑



271号土坑

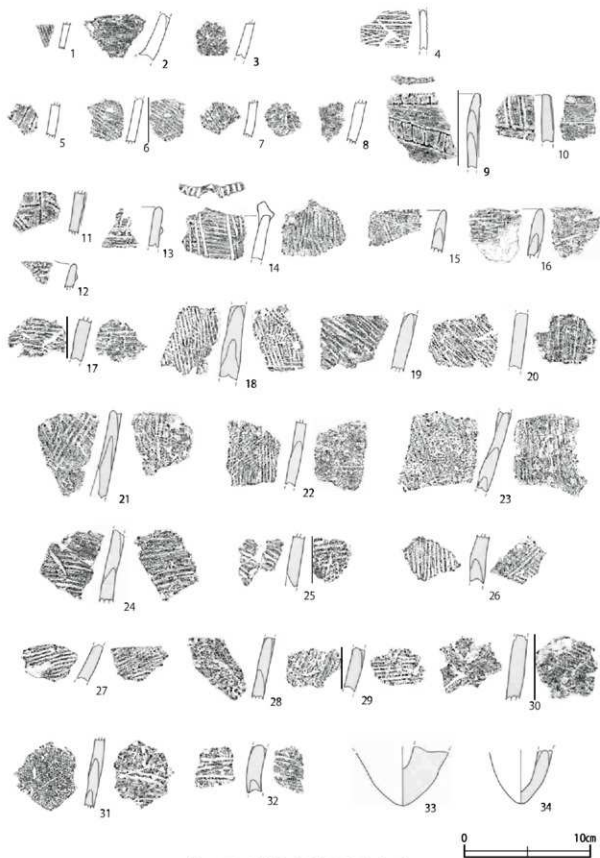


284号土坑

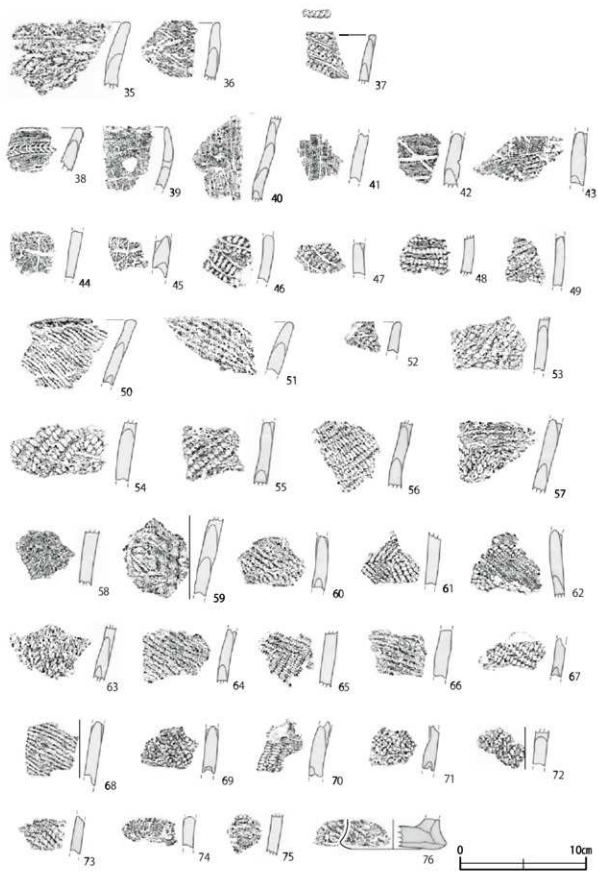


第30图 遺構出土土器 (1/3)

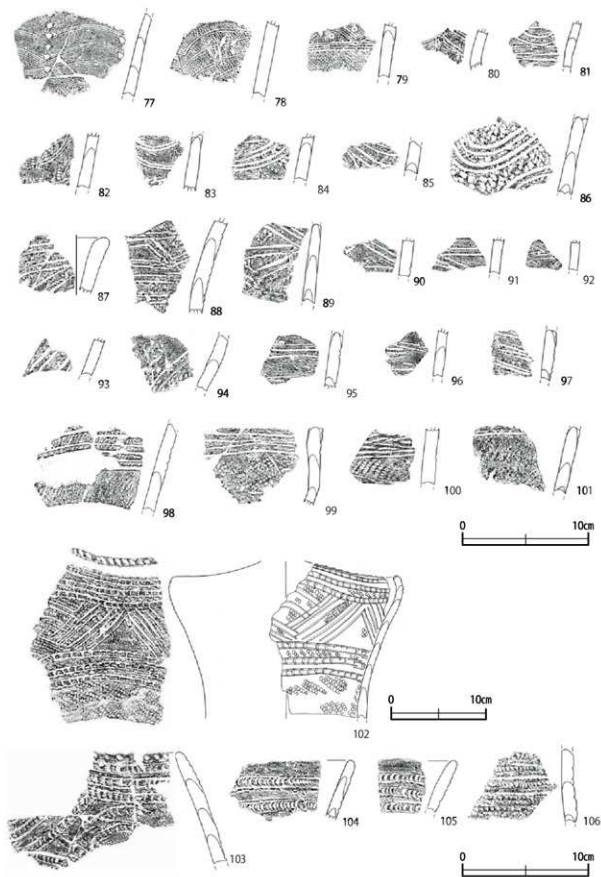
遺構外



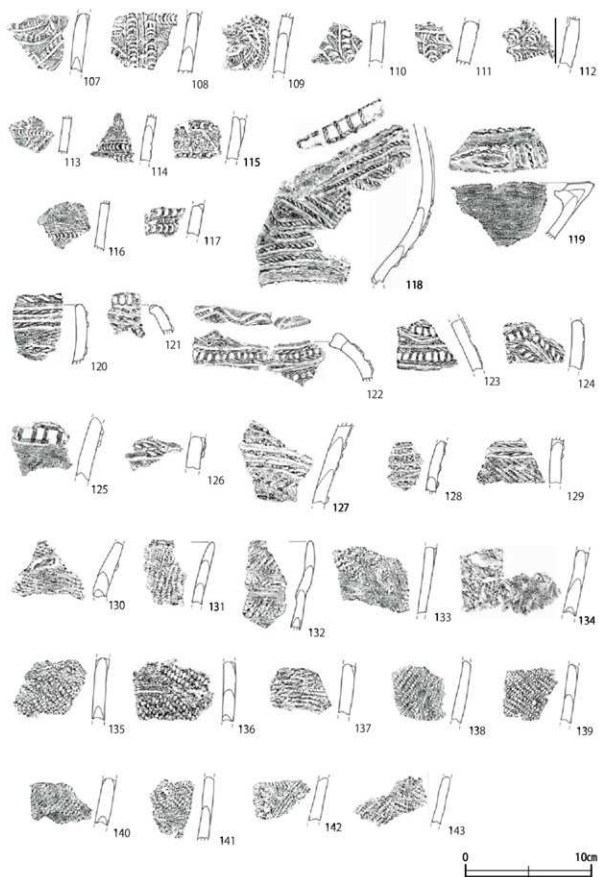
第31図 遺構外出土土器 (1) (1/3)



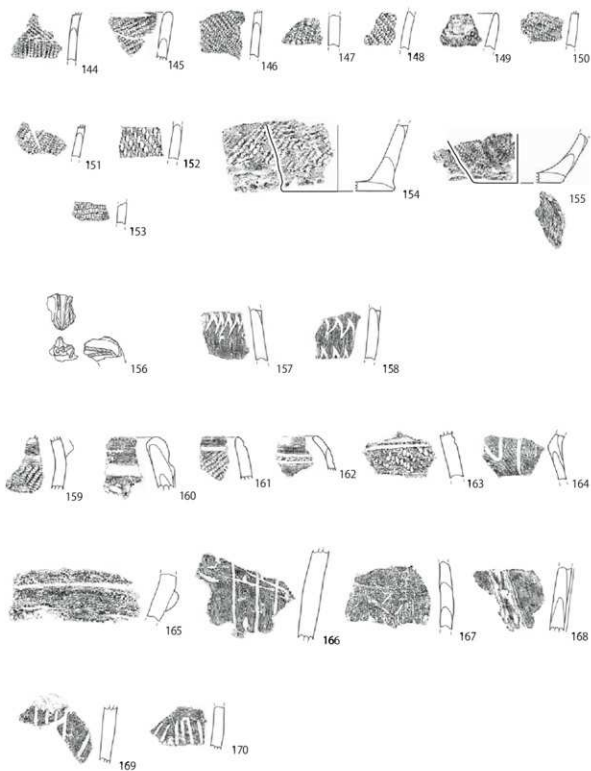
第 32 図 遺構外出土土器 (2) (1/3)



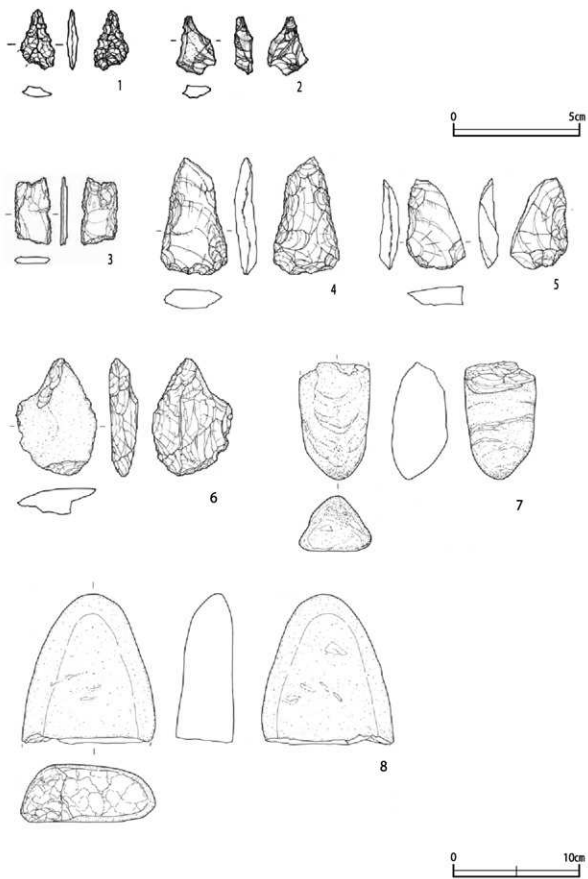
第33図 遺構外出土土器(3)(1/3)



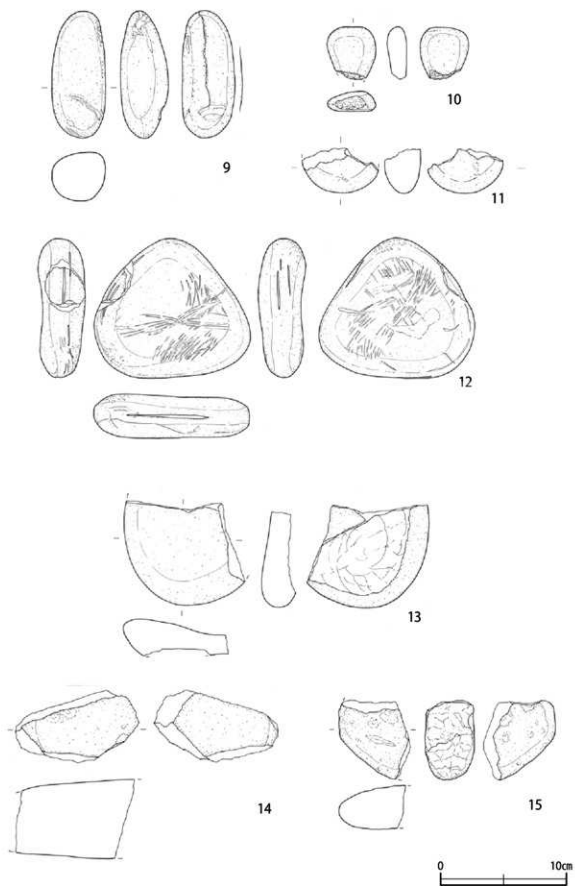
第 34 圖 遺構外出土土器 (4) (1/3)



第35図 遺構外出土土器(5)(1/3)



第36图 遺構外出土石器 (1) (2/3・1/3)



第37図 遺構外出土石器 (2) (1/3)

3 弥生時代

1) 遺構

今回の調査で検出された弥生時代の遺構は、後期後葉の住居跡 17 軒と、掘立柱建物跡 2 軒、土坑 3 基、焼土範囲 2 か所、ピット 8 基である。

A 住居跡

283 号住居跡 (第 39 図、図版 51・52)

グリッド 75・76HHH 平面形態 隅丸方形か

規模 南北—×東西—× 12cm

主軸方向 N26° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区北東端に位置する。被服本廠 9 号倉庫内にあたり、遺構の上部の大半が削平され、倉庫の束柱基礎によって床面以下まで失われていた。遺存していたのは柱穴と北東側の周溝にとどまり、西側・南側は範囲が不明である。南西側に奈良・平安時代の住居跡 (284 号住居跡) が位置し、これによって遺構の南西部が損なわれた可能性もある。柱穴と見られるピット (P1) と炉跡の位置から、住居のおおよその規模を推定した。

覆土 住居覆土は大半が削平され、ほとんど残っていない。

柱穴 周柱との位置関係から主柱穴と想定される位置に P1 が検出された。覆土には抜き取り痕が認められる。

P1 - 32 × 33 × 61cm

炉 形態 地床炉 規模 南北残 49 × 東西残 40 × 11cm

浅い掘り込みに焼土が 10cm 程度堆積している。北東側を除いた大半が失われている。

床 削平により、床面は北東側を中心にわずかに遺存するにとどまる。掘方はごく浅く平坦で、掘削痕は遺存していない。

周溝 北東側にわずかに遺存する。幅 15 ~ 18 × 深さ 11cm 程度である。

貯蔵穴 検出されなかった。

梯子穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器 14 点と礫 1 点が出土した。これらはいずれも床面の残存する南東側に分布する。土器の内訳は弥生土器 3 点の他、縄文土器 8 点、土師器 3 点である。高環または器台 1 の脚部は遺構北側の床面上から、甕 2 の破片は P1 の付近から、それぞれ出土した。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

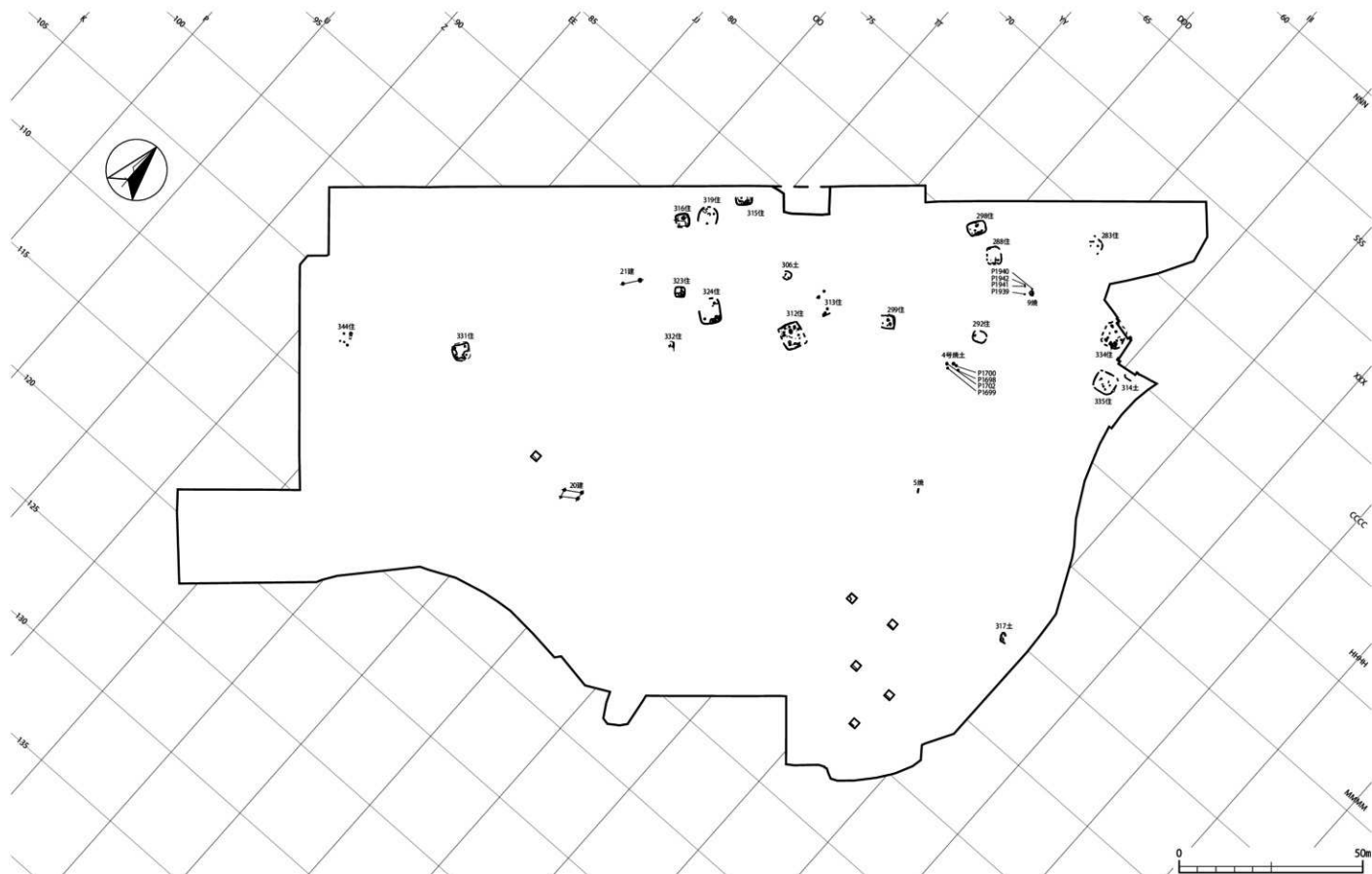
288 号住居跡 (第 40 図、図版 53・54)

グリッド 79・80DDD・EEE 平面形態 隅丸方形か

規模 北西—南東推 478 × 北東—南西 399 × 20cm

主軸方向 N44° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区北側に位置する。被服本廠 9 号倉庫内にあたり、倉庫基礎によって遺構北西側と、南東側の大半が床面以下まで失われていた。北西側と南東側の周溝が遺存しており、これらをもとに遺構のおおよその規模とプランを推定した。



第38図 遺合遺跡 時代別遺構配置図(2) 弥生時代(1/1,000)

- 覆土 遺構上部は大半が削平され、床面付近の黒褐色シルトを主体とする覆土がわずかに遺存する。
- 柱穴 遺構南東側で P1～3 が認められたが、いずれも浅く、断面形も鉢状で、柱穴として機能したかは不明である。掘方にとまう P4・P5 も同様である。
 P1 - 32 × 33 × 17cm P2 - 36 × 35 × 12cm
 P3 - 39 × - × 12cm P4 - 35 × 32 × 19cm P5 - 40 × 32 × 26cm
- 炉 検出されなかった。
- 床 削平により、床面は北東側を中心にわずかに遺存するにとどまる。掘方はごく浅く平坦で、掘削痕は遺存していない。
- 周溝 北東側にわずかに遺存する。幅 15～18 × 深さ 11cm 程度である。
- 貯蔵穴 検出されなかった。
- 梯子穴 P3 は遺構南東辺の短軸中央に位置するが、梯子穴としては浅い。
- 遺物出土状態 土器 34 点と礫 2 点が出土した。これらの大半は床面の残存する南東側に分布する。土器の内訳は弥生土器の甕が 23 点、台付甕が 1 点、高坏が 1 点の他、縄文土器 9 点である。甕 (1) は破片が南東側床面上の広範囲に散在する。この他の遺物は小破片で、接合しない。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

292 号住居跡 (第 41 図、図版 55・56)

- グリッド 83・84FFF・GGG 平面形態 隅丸方形
- 規模 東西 366 × 南北 310 × 20cm
- 主軸方向 N68° E 構築回数 1 回
- 検出状況 調査区北東側に位置する。被服本廠に伴う埋設管が北東-南西方向に走り、これによって遺構北西側と中央部が失われ、近世の 268 号土坑によって北東辺が破壊される。
- 覆土 遺構上部は大半が削平され、床面付近の黒褐色～暗褐色シルトを主体とする覆土が厚さ 20cm 程度遺存する。
- 柱穴 遺構南西側で P1 が認められた。梯子穴の可能性はあるが、浅い。
 P1 - 20 × 19 × 15cm
- 炉 遺構中央東寄りに設置されていた。北西半は攪乱により失われる。残存長 74cm、深さ 23cm で、本来は北東-南西方向に長い楕円形であったと推定される。
- 床 床面は顕著な貼床で、均質な暗褐色シルトからなる。掘方はごく浅く平坦で、掘削痕は遺存していない。
- 周溝 本来は全周したものと見られるが、北西辺は削平されて遺存せず、それ以外の範囲においても断続している。幅 10 × 深さ 10cm 程度である。
- 貯蔵穴 検出されなかった。
- 梯子穴 P1 は遺構南西辺の短軸中央に位置するが、梯子穴としては浅い。
- 遺物出土状態 土器 25 点が出土した。これらの大半は遺存状態のいい南西側に分布する。土器の内訳は弥生土器の甕が 3 点、台付甕が 15 点、壺が 3 点と、縄文土器 1 点である。壺 (1)

は遺構南辺の、台付甕(2)は南西側の、それぞれ床面直上に破片が散在する。この他の壺(3)、甕(4)も同様に床面の直上から出土したが、いずれも小破片で、接合しない。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

298号住居跡(第42・43図、図版57～60)

グリッド 79・80BBB・CCC

平面形態 隅丸方形

規模 北東-南西 504×北西-南東 369×28cm

主軸方向 N60°W

構築回数 1回

検出状況 調査区北側に位置する。南東側は被服本廠9号倉庫に接して一部が失われ、これに付随する埋設管が北東-南西方向に走り、これによって遺構北西側が失われる。南側を近世の296号溝が東西方向に走る。

覆土 遺構上部は大半が削平され、床面付近の黒褐色シルトを主体とする覆土が厚さ20cm程度遺存する。

柱穴 遺構東側でP1～4が認められたが、これらはいずれも浅く、また柱痕も認められないため、柱穴とは認め難い。

P1-36×34×11cm

P2-34×31×8cm

P3-33×32×7cm

P4-29×29×11cm

P5-24×23×15cm

炉 遺構中央西寄りに設置されていた。北西側は擾乱により失われる。残存長98cm×65cm、深さ15cmで、南北方向に長い楕円形を呈する。

床 床面は顕著な貼床で、均質な黒褐色シルトからなる。掘方はごく浅く平坦で、掘削痕と見られる小穴が散在する。P5は覆土の内容から掘方構築時に帰属するものと見られる。

周溝 周溝は遺構南東部と北側の一部以外の範囲で確認された。幅20×深さ20cm程度である。

貯蔵穴 遺構東辺に接する位置(貯蔵穴1)と西辺に接する位置(貯蔵穴2)の2か所に構築されていた。貯蔵穴1は74×69cmの、東側が壁に接する不整形形を呈し、深さは最大33cmで壁際が窪む。覆土上部は締まりに乏しく、流入して埋没したものと見られる。貯蔵穴2は45×32cmの、西側が壁に接する不整形形を呈し、深さは24cmで碗状に窪む。覆土は均質で締まりに乏しい黒褐色シルトからなる。

梯子穴 いずれのピットも梯子穴としては浅い。

遺物出土状態 土器569点と礫205点、炭化材7点が出土した。これらは炉跡を中心とした広範囲の覆土中に散在している。土器の破片は接合するものが多く、互いに大きく離れた位置の個体が接合するものもある。土器の内訳は弥生土器の甕が168点、台付甕が116点、壺が186点と、これらが大半を占め、鉢23点、高環10点、小壺1点と器種に富む。他に土師器3点と、縄文土器が61点とやや多く出土している。高環(1)・壺(7・10)は炉の覆土中、壺(11)・台付甕(15・18・22)は炉周辺を中心とした広範囲に破片が散在する他、鉢(2)・壺(9)は遺構南東隅、壺(8)・台付甕(16)は遺構北側、台付甕(17・19・20・21・24)は遺構中央やや南寄り、壺(6)は床面の広範囲に破片が分布する。表土が床面近くまで達しているため、後世の擾乱が影

響したものと見られる。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉、道合遺跡新段階の所産と推定される。

299号住居跡(第44図、図版61～63)

- グリッド 86BBB・CCC・87BBB 平面形態 隅丸方形
- 規模 北東-南西推 390×北西-南東 370×20cm
- 主軸方向 N38°W 構築回数 1回
- 検出状況 調査区中央北寄りに位置する。南西側は団地建物基礎によって失われる。
- 覆土 遺構上部は大半が削平され、床面付近の黒褐色シルトを主体とする均質な覆土が厚さ10cm程度遺存する。
- 柱穴 遺構南東側でP1が認められたが、浅く、断面形は皿形を呈しており、柱穴とは認め難い。他のピットは掘方に伴う。
- P1-75×58×15cm P2-34×31×31cm P3-23×19×19cm
 P4-20×17×21cm P5-18×15×15cm P6-18×13×26cm
 P7-17×16×18cm P8-24×23×15cm P9-24×23×15cm
- 炉 遺構中央北西寄りに設置されていた。北西側は攪乱により失われる。65cm×45cm、深12cmで、南北方向に長い楕円形を呈する。
- 床 床面はやや不完全な貼床で、暗褐色～黒褐色シルトからなる。掘方はごく浅く平坦で、掘削痕は認められなかった。P2～P9は覆土の内容から掘方構築時に帰属するものと見られる。
- 周溝 周溝は遺構東辺で確認された。幅10×深さ15cm程度である。他の部分では削平が著しく、有無は明らかではない。
- 貯蔵穴 確認されなかった。
- 梯子穴 確認されなかった。

遺物出土状態 土器26点と礫7点、炭化材18点が出土した。土器は遺構覆土内の広範囲に、炭化材は遺構北側を中心に散在する。土器の内訳は弥生土器の壺が7点で、他に土師器1点と、縄文土器が17点とやや多く出土している。土器は大半が小片で、接合しない。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期の所産と推定される。

312号住居跡(第46～48図、図版63～66)

- グリッド 89YY・90XX・YY・91YY 平面形態 隅丸方形
- 規模 東西690×南北推 600×60cm
- 主軸方向 N67°W 構築回数 1回
- 検出状況 調査区中央北寄りに位置する。北東側をはじめ広範囲にわたり地下埋設物によって失われる。
- 覆土 覆土は比較的良好に遺存しており、黒色～黒褐色シルトを主体とする均質な覆土が厚さ40cm程度堆積する。覆土は床面直上のものと、それ以外のものに大別される。
- 柱穴 多数のピットが認められたが、P3・12・13・14が主柱穴を構成していたものと見られる。この他は浅く、掘方も不明瞭であり、柱穴とは考え難い。柱間はP3-12間とP13-

- 14 間が 328cm、P3 - 14 間が 365cm、P12 - 13 間が 370cm で、東西方向にやや長い。
 P3 - 73 × 55 × cm P12 - 34 × 31 × 53cm P13 - 39 × 37 × 68cm
 P14 - 51 × 47 × 63cm
- 炉 遺構中央北西寄りに設置されていた。炉の北西側は P15 に切られるが、両者の境界は不明瞭で、一連のものであった可能性が高い。P15 を含む平面 118cm × 72cm、深さ 18cm で、断面は皿状を呈する。
- 床 床面は不完全な貼床で、締まりに粗密がある。掘方は浅く平坦で、掘削痕は認められなかった。
- 周溝 周溝は遺構縁辺の残存範囲で確認された。本来は全周したものと推定される。幅 15 × 深さ 10cm 程度である。
- 貯蔵穴 遺構南東辺の壁際やや北寄りで検出された (P1)。北東側は攪乱により失われるが、本来は円形～長楕円形であったと推定される。底面は平坦で上部は鉢形に開く。覆土は流れ込んで堆積した模様で、上部からは土製勾玉が出土した。
- 梯子穴 P2 は位置的にはふさわしいが、浅く、柱痕も確認されなかったため、梯子穴とは考え難い。
- 遺物出土状態 土器 296 点と土製品 1 点、礫 5 点、炭化材 39 点が出土した。他に縄文時代の石皿の破片 1 点が認められる。土器は遺構覆土内の広範囲に、炭化材は床面直上を中心に散在する。土器の内訳は弥生土器の壺が 138 点、甕 69 点、台付甕 13 点で、他に土師器 68 点、須恵器 1 点と、縄文土器 6 点が認められた。壺 (1・2・4) は遺構南東辺の壁付近から、壺 (3) は北東辺の壁際から、壺 (6・7) は P9 周辺から、壺 (8)・台付甕 (16) は遺構北西辺の壁際から、一程度のまとまりをもって出土している。壺 (9) は遺構北西辺の壁際と南東辺の貯蔵穴付近の覆土中に分かれて出土した。土製勾玉 (3) は貯蔵穴 (P1) の覆土上部から出土した。
- 所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉、道合遺跡新段階の所産と推定される。
- 313 号住居跡 (第 49 ~ 50 図、図版 66 ~ 68)
- グリッド 87YY・88XX・YY・ZZ 平面形態 不明
- 規模 - × - × 35cm
- 主軸方向 N64° W 構築回数 1 回
- 検出状況 調査区中央北寄りに位置する。大半を地下埋設物によって失われる。柱穴と見られるピットと炉、遺構東辺の壁からおおよその規模を推定した。
- 覆土 黒色・黒褐色シルトを主体とする均質な覆土が厚さ 20cm 程度堆積する。
- 柱穴 P4・5 が柱穴を構成していたものと見られる。P4 - 5 間の柱間は 495cm で、この軸は 64°西に振れる。
 P4 - 52 × 52 × 78cm P5 - 53 × 48 × 78cm
- 炉 P4 - 5 間の南東側で検出された。75 × 69cm の不整形で、深さ 25cm 程度の浅い皿形を呈する。
- 床 床面は顕著な貼床だが、平面的な広がり是不明瞭である。掘方は不規則な凹凸に富み、深さ 15cm 程度である。

- 周 溝 周溝は確認されなかった。
- 貯 蔵 穴 遺構南東辺の壁付近で検出された (P6)。50 × 48cm の不整形円で、深さ 33cm で底面は平坦である。覆土上部から碗状の炭化材が出土した。
- 梯 子 穴 遺構南東辺の壁際で検出された (P3)。南西側は失われているが不整形形のプランと見られ、73 × 55cm、深さ 45cm で、東側は遺構の壁に接する。

遺物出土状態 土器 54 点と炭化材 1 点が出土した。遺物は大半が貯蔵穴 (P6) 内およびその周辺から出土したものである。土器の内訳は弥生土器の壺が 12 点、甕 30 点、台付甕 5 点、鉢 4 点で、他に縄文土器 3 点が認められた。大半が小片で、図示には至らなかった。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期の所産と推定される。

315 号住居跡 (第 51・52 図、図版 69～71)

- グリッド 86・87RR 平面形態 隅丸方形
- 規 模 東西 450 × 南北残 210 × 50cm
- 主軸方向 N43.5° W 構築回数 1 回
- 検出状況 調査区中央北端に位置する。北西半は調査範囲外に至る。遺構南東側と柱穴、貯蔵穴、梯子穴の位置関係から遺構の規模とプランが判明した。
- 覆 土 黒色・黒褐色シルトを主体とする均質な覆土が厚さ 20cm 程度、レンズ状または水平堆積する。
- 柱 穴 P1・3 が柱穴を構成していたものと見られる。柱間は 245cm である。
P1 - 40 × 37 × 48cm P3 - 40 × 35 × 61cm
- 炉 検出されなかった。柱穴と貯蔵穴、梯子穴の位置関係から、北西側の調査範囲外に位置するものと推定される。
- 床 床面は顕著な貼床で、全域に広がる。掘方は深さ 10～20cm 程度で中央が盛り上がる。小規模な掘削痕が散在する。
- 周 溝 周溝は貯蔵穴および P4 の範囲を除いて全体に巡る。幅 10～20cm、深さ 15cm 程度である。遺構の縁辺部に周溝を覆うかたちで焼土層が認められた。焼土は遺構外周から中央に向かって徐々に厚さを減じて流れ込むように堆積する。
- 貯 蔵 穴 遺構南東辺の壁付近で検出された。掘り込みは 64 × 58cm の不整形円で、壁際を除く外周に高さ 5cm 程度の周堤が巡る。
- 梯 子 穴 遺構南東辺の壁付近で検出された (P2)。25 × 19cm の楕円形で、深さ 40cm まで垂直に掘り込まれる。底面は碗状を呈する。
- 遺物出土状態 土器 43 点と炭化材 40 点、礫 3 点が出土した。土器と炭化材のいずれも床面の直上に分布する。炭化材は焼土層のなかか、その下位から出土した。炭化材 No.41 は柱穴の覆土 (抜き取り痕) 上に認められた。土器の内訳は弥生土器の甕が 18 点、台付甕が 21 点、鉢が 1 点で、鉢 4 点で、他に土師器と須恵器、縄文土器が各 1 点認められた。土器は床面の広範囲に散在するが大半が小片で、台付甕 (1) は遺構北辺の壁際にまとまって出土した。
- 所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

316号住居跡（第53・54図、図版72・73）

グリッド	89・90PP・QQ	平面形態	隅丸方形
規模	北東-南西 378 × 北西-南東 371 × 35cm		
主軸方向	N46.5° W	構築回数	1回
検出状況	調査区中央北側に位置し319号住居南西側に隣接する。南東側は団地建物基礎とそれに付随する掘り込みによって失われる。これ以外の部分で遺構壁面と床面、炉跡が遺存していた。		
覆土	黒色・黒褐色土を主体とする均質な覆土が厚さ20cm程度遺存する。		
柱穴	掘り込みは認められなかったが、主柱穴に相当する位置で床面の硬化が見られた。これらの中心間の距離は北東-南西方向に200～230cm、北西-南東方向に180cm前後である。		
炉	遺構中央北西寄りに構築されていた。195 × 162cmの範囲に焼土が広がり、中央部に甕3の口縁部の破片が設置される。		
床	床面は顕著な貼床で凹凸がある。掘方は平坦で深さ10～20cm程度である。		
周溝	周溝は北東部で一部途切れる。幅20cm、深さ10cm程度である。		
貯蔵穴	検出されなかった。		
梯子穴	検出されなかった。		

遺物出土状態 土器66点と焼成粘土塊1点、石器1点、炭化材2点、礫3点が出土した。石器は黒曜石の破片で、縄文時代のものが混入したものと見られる。土器の内訳は弥生土器の甕が17点、台付甕が1点、壺が6点で、他に土師器24点と須恵器3点、縄文土器が2点認められた。甕(3)の口縁部が逆位で炉に埋設されていた他、壺(1)も炉跡内と覆土中に分かれて出土している。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

319号住居跡（第55図、図版74・75）

グリッド	88QQ・RR・89QQ	平面形態	楕円形？
規模	東西 518 × - × 25cm		
主軸方向	N27° W	構築回数	1回
検出状況	調査区中央北側に位置し316号住居北東側に隣接する。北側は近代以降の埋設管により失われる。南東側には奈良・平安時代の318号住居跡が位置し、これにより床面の大半が削平される。これ以外の部分で遺構壁面と床面、炉跡が遺存していた。		
覆土	暗褐色シルトを主体とする均質な覆土が厚さ15cm程度遺存する。		
柱穴	P1～P3が認められた。これらのうちP3は上部を318号住居に伴う掘り込みによって失われ、底部付近のみ遺存した。柱間はP1-P2間で230cm、P1-P3間で320cmで、南北方向に長い。 P1-35 × 32 × 59cm P2-26 × 21 × 40cm P3-40 × 32 × 40cm		
炉	遺構中央北西寄りに構築されていた。東西74 × 南北52cm、深さ16cmの不整楕円形の掘り込みの中央部に焼土が広がる。		
床	顕著な貼床が床面の全体に広がる。掘方は平坦で深さ10～20cm程度である。		

周 溝 周溝は幅 15 × 20cm、深さ 10cm 程度で、全周したものと見られる。

貯 蔵 穴 検出されなかった。

梯 子 穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器 6 点と礫 28 点が出土した。土器の内訳は弥生土器の壺が 5 点で、他に須恵器 1 点が認められた。須恵器は隣接する 318 号住居跡からもたらされた可能性が高い。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

323 号住居跡 (第 56・57 図、図版 76 ~ 80)

グリッド 92・93RR・SS 平面形態 隅丸方形

規 模 北西-南東 273 × 北東-南西 270 × 13cm

主軸方向 N42° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区中央北側に位置し、324 号住居跡西側に隣接する。覆土上部を削平されるが、方形プランの遺構壁面と床面、炉跡が遺存していた。

覆 土 黒褐色・褐色土からなる覆土が厚さ 15cm 程度遺存する。

柱 穴 検出されなかった。

炉 遺構中央北東寄りに構築されていた。45 × 37cm、深さ 7cm の不整楕円形の掘り込みの広範囲に焼土が広がる。底面は凹凸があり、窪みに壺 (3) が据えられた状態で出土した。

床 貼床が床面の全体に広がる。掘方は凹凸に富み、深さ 10 ~ 20cm 程度で、掘削痕が散在する。

周 溝 検出されなかった。

貯 蔵 穴 検出されなかった。

梯 子 穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器 71 点と礫 2 点、炭化材 13 点が出土した。土器の内訳は弥生土器の壺が 47 点、甕が 23 点で、壺 (3) は炉内中央部の窪みに据えられた状態で出土した他、壺 (1) は遺構北西辺の壁沿いに、壺 (2) は東側に散在する。炭化材は床面からやや浮いた状態で散在する。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

324 号住居跡 (第 58 ~ 62 図、図版 80 ~ 85)

グリッド 91・92・93TT・UU 平面形態 隅丸長方形

規 模 北西-南東 686 × 北東-南西 573 × 35cm

主軸方向 N49° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区中央北側に位置し、323 号住居跡東側に隣接する。近代の塹壕跡と、被服本廠 5 号倉庫の南東隅によって遺構の東角を広範囲に破壊されるが、長方形プランの遺構壁面と床面、炉跡、柱穴が遺存していた。

覆 土 極暗褐色・暗褐色土からなる均質な覆土が厚さ 23cm 程度遺存する。

柱 穴 主柱穴にあたる位置で P1 ~ P3 が検出された。これらのうち P2 は覆土断面に柱痕と柱の裏込めが顕著に認められた。土南東隅の壁際に並ぶ P5・P6 は浅い碗形を呈し、位置づけは不明である。

梯子穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器66点と炭化材1点、礫2点が出土した。他に近世以降の陶磁器3点が認められた。土器の内訳は弥生土器の甕が30点、壺9点、高坏2点で、P6の覆土中にややまとまる他は床面上に散在する。いずれも小破片で接合しない。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

332号住居跡（第65図、図版89～91）

グリッド 95TT 平面形態 隅丸方形？

規模 $- \times - \times 51\text{cm}$

主軸方向 N43° W 構築回数 1回

検出状況 調査区中央に位置する。団地建物基礎と近代以降の埋設物により遺構の大半が失われる。炉跡と遺構北東隅が遺存しており、これらから遺構のおおよその規模とプランを推定した。遺構は縄文時代早期の86号炉穴の西側を破壊する。

覆土 黒色・黒褐色土からなる均質な覆土で、厚さ27cm程度である。

柱穴 検出されなかった。

炉 $150 \times 94\text{cm}$ の範囲に焼土混じりの覆土を伴う浅い掘り込みが確認された。掘り込みは不整形で覆土の厚さは5cm程度であるが、位置関係から炉跡とした。

床 削平が著しくほとんど残っていない。遺構残存範囲の床面は貼床で、掘方は深さ14cm程度である。

周溝 検出されなかったが、壁際に沿って貼床が途切れ、地山が露出している。

貯蔵穴 検出されなかった。

梯子穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器4点と炭化材2点が出土した。土器の内訳は弥生土器の甕が3点、縄文土器が1点である。縄文土器は86号炉穴から出土した個体と接合する。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

334号住居跡（第66図、図版91～96）

グリッド 78・79KKK・LLL・79MMM 平面形態 隅丸方形？

規模 南北推 $683 \times$ 東西 $588 \times 32\text{cm}$

主軸方向 N16.5° W 構築回数 2回

検出状況 調査区北東端に位置し、北側は調査範囲外に至る。近代以降の埋設物により遺構は広範囲にわたって寸断される。南東側は近世の353号溝により北西-南東方向に削られる。遺構壁が断続的に遺存しており、これらと炉跡、柱穴の位置関係から南北方向にやや長い隅丸方形のプランが判明した。

覆土 黒褐色シルトからなる均質な覆土で、厚さ15cm程度である。

柱穴 床面検出段階でP1～3を、掘方検出段階でP4～12を検出した。完掘状態でこれらのピットの配置から、P4-P1-P11（北東側は調査範囲外）と、ひと回り小さいP5-P7-P3（北東側は調査範囲外）の、2組の柱穴の配置が推定される。P1の土層断面において柱痕（1層）の周囲に貼床と同様の硬化（3層）が認められることから、P4-P1

—P11の配置が遺構廃絶段階での柱穴であり、P5—P7—P3をそれに先立つ段階の柱穴と考えることもできるが、貼床を構成する堆積物（7層）がP4の覆土を覆っており、整合しない。そのため遺構図においては各ピットの帰属は調査時の所見のまま示した。P1とP2、P4の覆土には顕著な柱痕が認められた。柱間はP1—P4間で412cm、P1—11間で290cm、P5—P7間で356cm、P7—P3間で230cmである。

P1—65×55×69cm	P2—49×42×34cm	P3—41×34×48cm
P4—55×48×58cm	P5—26×26×25cm	P6—40×34×9cm
P7—31×30×32cm	P8—36×35×33cm	P9—61×56×41cm
P10—50×38×43cm	P11—60×55×55cm	P12—41×32×21cm

- 炉 遺構中央北寄りに45×42cmの円形の掘り込みが構築されていた。炉の北側に壺（3）の頸部～口縁部が設置されていた。
- 床 床面の残存範囲には顕著な貼床が認められた。掘方は平坦で覆土は厚さ19cm程度。柱穴の配置から推定される遺構の作り替えは、床面覆土の断面には認められなかった。
- 周溝 遺構の壁の遺存範囲で確認された。幅10～15cm、深さ10cm程度である。南西辺～西辺では削平が著しく検出されなかった。
- 貯蔵穴 遺構南辺の壁際に設置されていた。60×48cmの東西に長い不整楕円形で深さ24cm、底面は平坦で、浅い窪みが散在する。貯蔵穴の周辺と覆土上層から炭化材が出土した。
- 梯子穴 位置関係からP8またはP9が梯子穴として機能した可能性がある。住居の建替えに伴いP8からP9に作り替えられたことも考えられる。

遺物出土状態 土器128点と礫8点、炭化材8点が出土した。この他に近世以降の陶磁器1点が認められた。土器の内訳は弥生土器の甕が71点、台付甕が2点、壺が27点、高環が10点、縄文土器が10点、土師器8点である。壺（3）の頸部～口縁部が炉内に設置された状態で出土した他、高環（1・3）と壺（2）・甕（5）が遺構の南東隅の床面上に散在する。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

335号住居跡（第68図、図版96～98）

- グリッド 80・81MMM・NNN 平面形態 隅丸方形
- 規模 南北推683×東西588×32cm
- 主軸方向 N16.5°W 構築回数 2回
- 検出状況 調査区北東部に位置する。近代以降の防空壕や埋設物により遺構は広範囲にわたり寸断される。北東側は近世の353号溝により北西—南東方向に削られる。遺構壁が断続的に遺存しており、これらと跡跡の位置関係から隅丸方形のプランが判明した。
- 覆土 上部を削平されており覆土はほとんど遺存していない。黒褐色シルトからなる均質な堆積物で、厚さ5cm程度である。
- 柱穴 床面検出段階では認められず、掘方確認段階でP1～5を検出した。いずれも小規模で浅く、柱穴として機能したかは不明である。

P1—35×32×46cm	P2—28×25×32cm	P3—23×20×13cm
---------------	---------------	---------------

P4 - 33 × 33 × 22cm P5 - 37 × 28 × 22cm

- 炉 遺構中央北寄りに 72 × 48cm の焼土のまとまりを伴う浅い炉が認められた。焼土の厚さは 5cm 程度である。
- 床 床面の残存範囲には顕著な貼床が認められた。掘方は平坦で覆土は厚さ 10cm 程度。
- 周溝 遺構の壁の遺存範囲で断続的に確認された。幅 10 ~ 20cm、深さ 10cm 程度である。南東側では削平が著しく検出されなかった。
- 貯蔵穴 検出されなかった。
- 梯子穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器 34 点と礫 18 点、炭化材 2 点が出土した。遺物は床面上の広範囲に散在する。土器の内訳は弥生土器の甕が 18 点、台付甕が 1 点、壺が 10 点、縄文土器が 5 点である。壺 (1・2) はいずれも小破片が床面直上から出土した。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

344 号住居跡 (第 70 図、図版 98 ~ 99)

- グリッド 106・107FF・GG 平面形態 不明
- 規模 - × - × 10cm 床面積 不明
- 主軸方向 不明 構築回数 1 回

検出状況 調査区西側に位置する。遺構周辺は削平が著しく、床面の一部と炉跡、ピットが部分的に遺存した。遺構東側は団地建物基礎により失われる。遺構床面の残存範囲とピット、炉の位置関係から遺構のおおよその規模を推定した。

覆土 上部を削平されており覆土はほとんど遺存していない。

柱穴 炉の周辺から P1 ~ P3 を検出した。これらのうち P1 は断面に柱痕が確認された。

P1 - 37 × 36 × 68cm P2 - 32 × 31 × 16cm P3 - 42 × 33 × 37cm

炉 89 × 71cm、深さ 20cm の不整楕円形の掘り込みに焼土のまとまりを伴う炉が認められた。焼土の厚さは 10cm 程度である。北側に壺 (1) の口縁~頸部が逆位に設置された状態で出土した。

床 床面はほとんど残っておらず、南北 192 × 東西 73cm の範囲にわずかに硬化が認められた。

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

梯子穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器 22 点と焼成粘土塊 2 点、炭化物 5 点が出土した。土器の内訳は弥生土器の壺が 18 点、台付甕が 2 点、縄文土器が 1 点、不明 1 点である。このうち 17 点は壺 (3) の頸部で、壺 (1・2) および土製品 (1) とともに炉内から出土した。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から弥生時代後期後葉の所産と推定される。

20 号掘立柱建物跡 (第 71 図、図版 100 ~ 101)

調査区中央南寄り、グリッド 104VV・105UU・VV に位置する。断片的に検出された柱穴をもとに掘立柱建物跡としたが、周辺は近代遺構の削平や埋設物による攪乱が著しく、柱穴の配置の全体像は明らかではない。

柱穴はP1～P4の4基が確認された。このうち北東側の大半が失われたP4以外は底面の深さが一定していることから一連の遺構と捉えられ、梁行1間、桁行2間（以上）の建物である。P1～P2間は柱間が430cmでN83°E、P1～P3間は198cm、P2～4間は210cmである。P1～P3は平面形が不整形長方形の掘方で、長軸は南北方向に揃う。覆土はP1～P4のいずれも黒褐色土を主体とし、内容も共通性が高い。P3の断面には柱痕と見られる堆積物が確認された。

P1 - 72 × 46 × 48cm

P2 - 60 × 47 × 52cm

P3 - 67 × 63 × 45cm

P4 - 残 41 × - × 20cm

P1の底面付近から甕(1)の破片が出土した。

21号掘立柱建物跡(第72図、図版101)

調査区中央北寄り、グリッド93QQ・94PPに位置する。断片的に検出された柱穴をもとに掘立柱建物跡としたが、周辺は近代遺構の削平や埋設物による攪乱が著しく、柱穴の配置の全体像は明らかではない。

柱穴はP1～P2の2基が確認された。両者は底面の深さが一致し、覆土の内容も共通していることから一連の遺構と捉えた。P1～P2間は柱間が460cmでN38°Eである。P1～P3は平面形が不整形長方形の掘方で、長軸は南北方向に揃う。覆土はP1～P4のいずれも黒褐色土を主体とし、内容も共通性が高い。P3の断面には柱痕と見られる堆積物が確認された。

P1 - 61 × 56 × 32cm

P2 - 93 × 78 × 38cm

P1の覆土上層から甕(1)の破片が出土した。

306号土坑(第73図、図版102)

調査区北側、88VV・WWグリッドに位置する。南西側は調査範囲外に至る。東西231×南北218cmの不整形円形で、深さは約27cmと浅い。覆土は均質な黒褐色土からなる。遺物は弥生土器の壺16点、鉢3点、甕5点、台付甕1点からなり、覆土上～中層の広範囲に散在する。

314号土坑(第73図、図版102)

調査区北東端、80NNNグリッドに位置し、北側は調査範囲外に至る。確認範囲では東西247×南北89cmで隅は丸く、深さは約24cmと浅く、底面に凹凸がある。南西側に隣接する335号住居跡(弥生時代後期)と東西軸が一致する。覆土は暗褐色シルトからなり、上部に近世の黒褐色シルトが堆積する。中央に近世のP1869が位置する。遺物は弥生土器の壺2点、甕1点の他、縄文土器1点が覆土中に散在する。

317号土坑(第74図、図版102)

調査区東端、95RRR・SSSグリッドに位置する。東側は近代以降の掘り込みによって失われ、北西側の一部は古墳時代後期の337号住居跡によって損なわれる。確認範囲では南北300cmの不整形で、深さは25cmと浅く、底面に凹凸がある。遺構中央南寄りに小穴P1を伴う。覆土は黒褐色～暗褐色シルトからなり、P1の覆土はこれらとは異なる。遺物は弥生土器の壺17点と縄文土器1点が南西隅の底面付近に散在する。

4号焼土範囲・P1698～1700・P1702(第75図、図版102・103)

調査区北東側、グリッド85・86FFに位置する。60×60cmのほぼ円形の浅い掘り込みの中央に焼土の集中が認められた。周辺にはP1698～1700・1702があり、これらとの関わりが推定される。

遺物は出土しなかった。

P1698 40 × 40 × 30cm P1699 38 × 34 × 26cm

P1700 43 × 43 × 26cm P1702 63 × 39 × 12cm

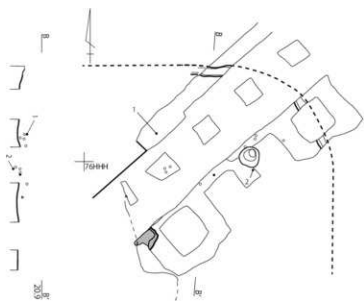
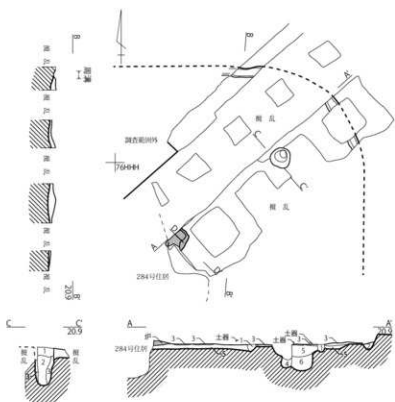
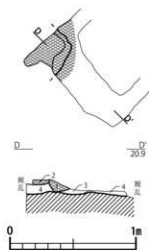
9号焼土範囲・P1939～1942（第76図、図版104）

調査区北東側、グリッド 80GGGに位置する。遺構は被服本廠9号倉庫内にあたり、この基礎によって寸断される。113 × 113cmの不整円形の浅い掘り込みの北側に焼土の集中が認められた。周辺にはP1939～1942があり、これらとの関わりが推定される。遺物は出土しなかった。

P1939 26 × 23 × 17cm P1940 25 × 25 × 16cm

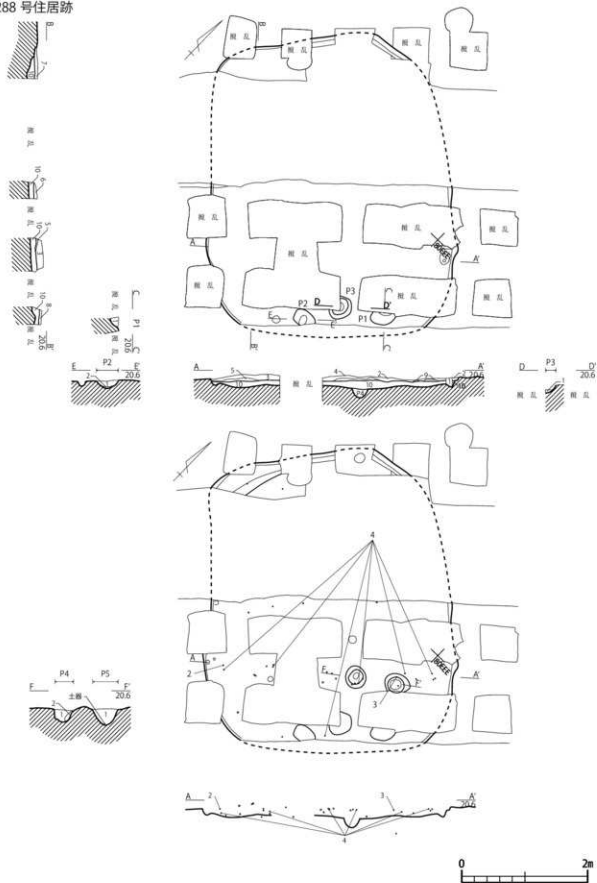
P1941 19 × 18 × 12cm P1942 17 × 15 × 10cm

283号住居跡



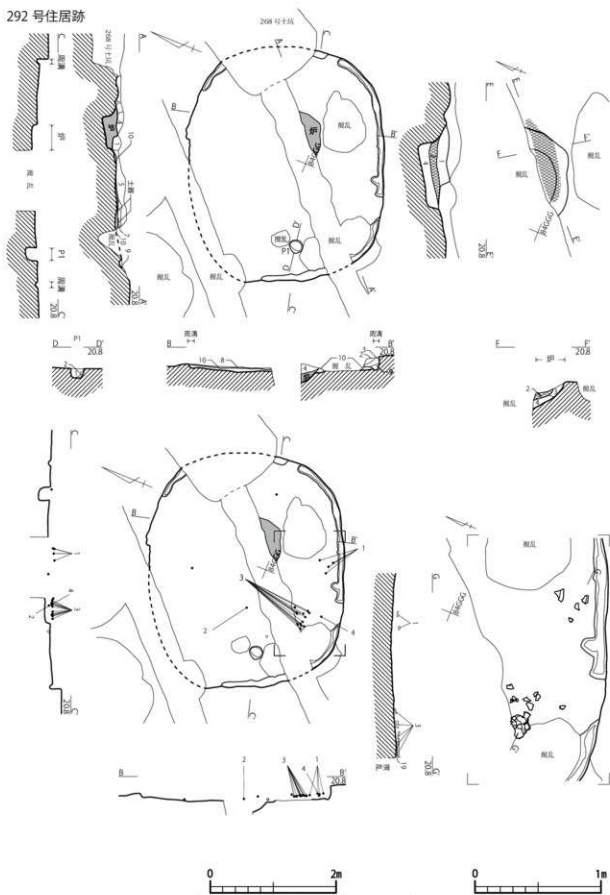
第39图 283号住居跡 (1/30・1/60)

288号住居跡



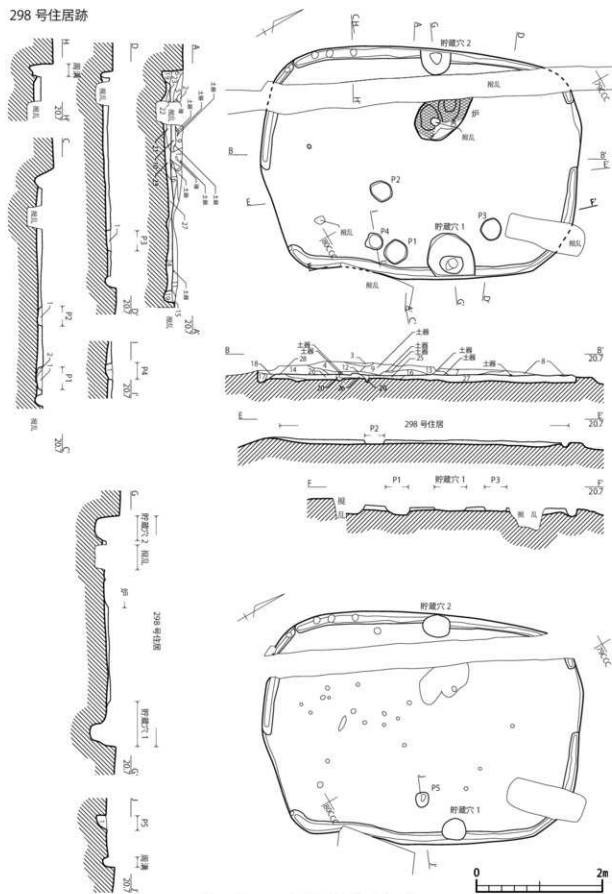
第40図 288号住居跡 (1/60)

292号住居跡



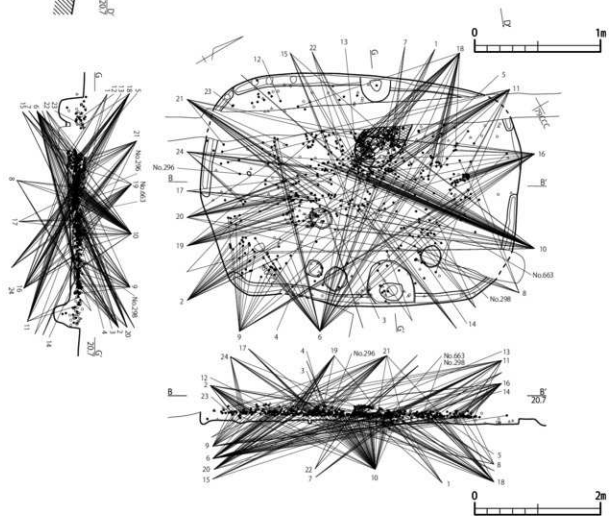
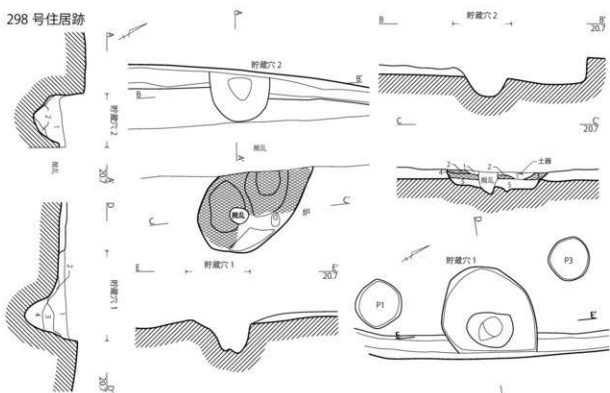
第41图 292号住居跡 (1/30 · 1/60)

298号住居跡



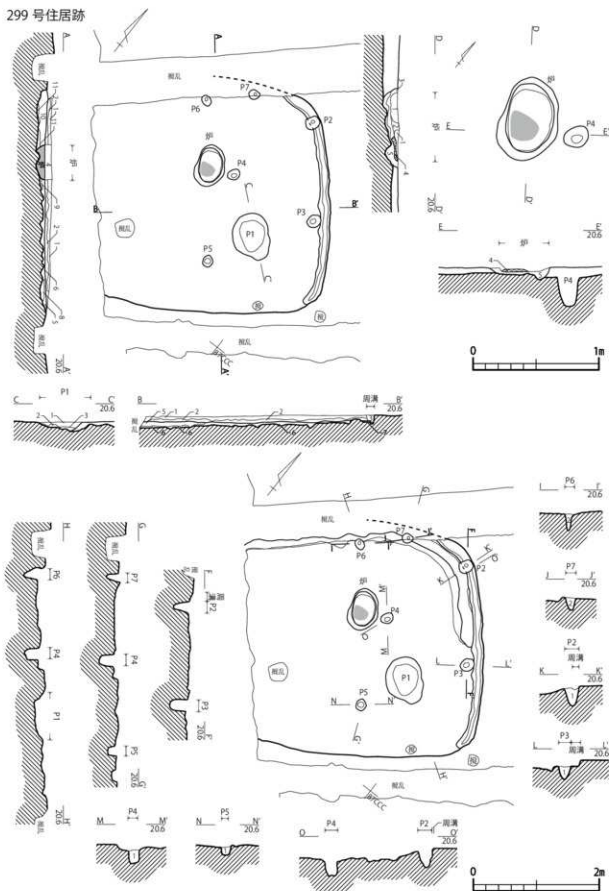
第42図 298号住居跡 (1) (1/60)

298号住居跡



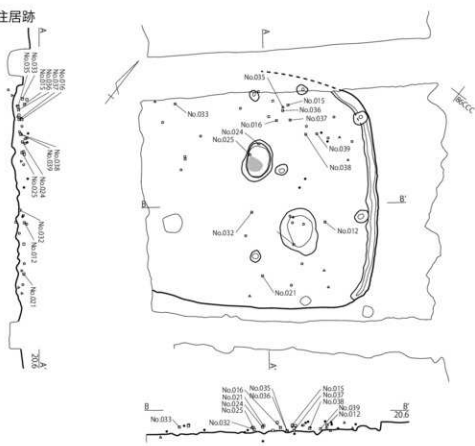
第43図 298号住居跡 (2) (1/30・1/60)

299号住居跡



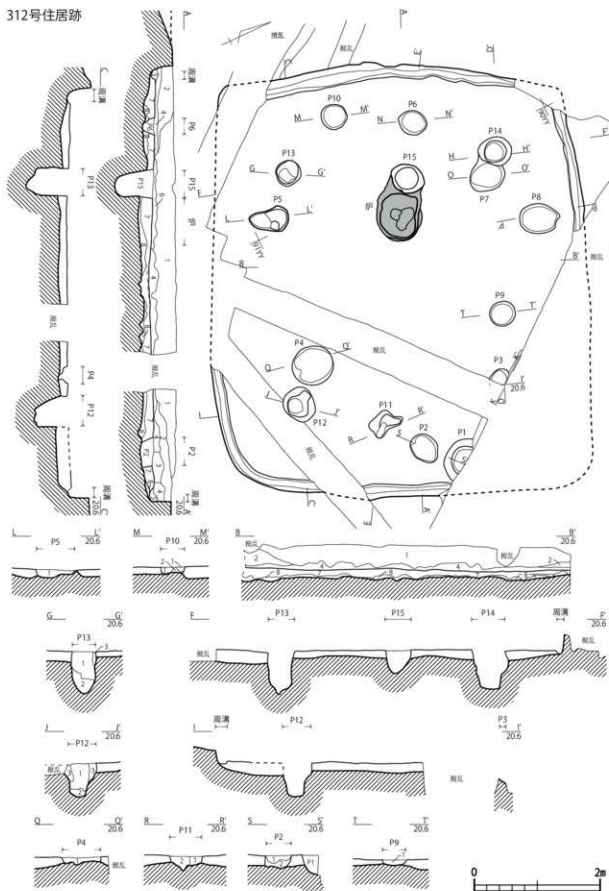
第44図 299号住居跡 (1) (1/60)

299号住居跡



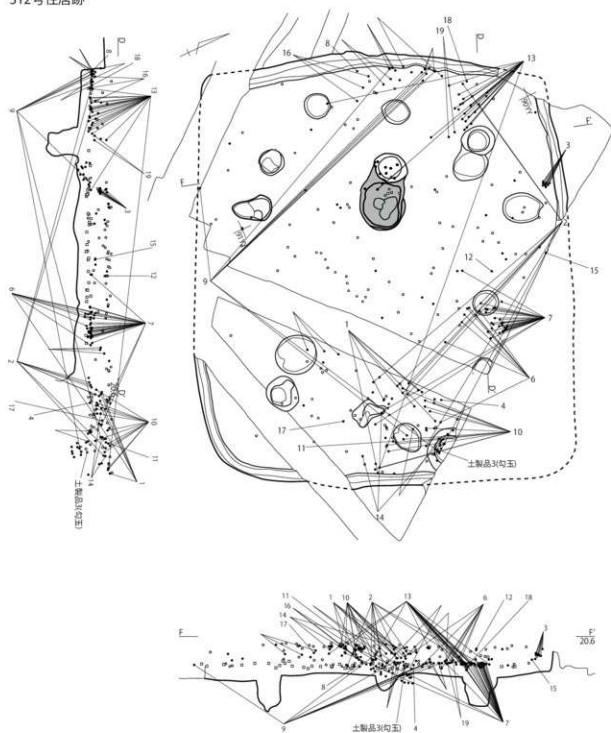
第45图 299号住居跡 (2) (1/60)

312号住居跡



第46図 312号住居跡 (1) (1/60)

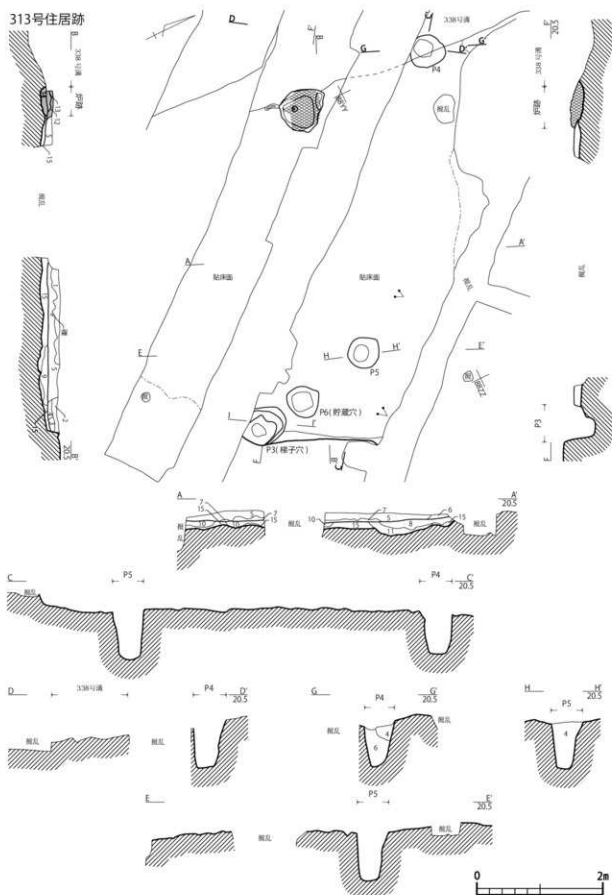
312号住居跡



第48図 312号住居跡 (3) (1/60)

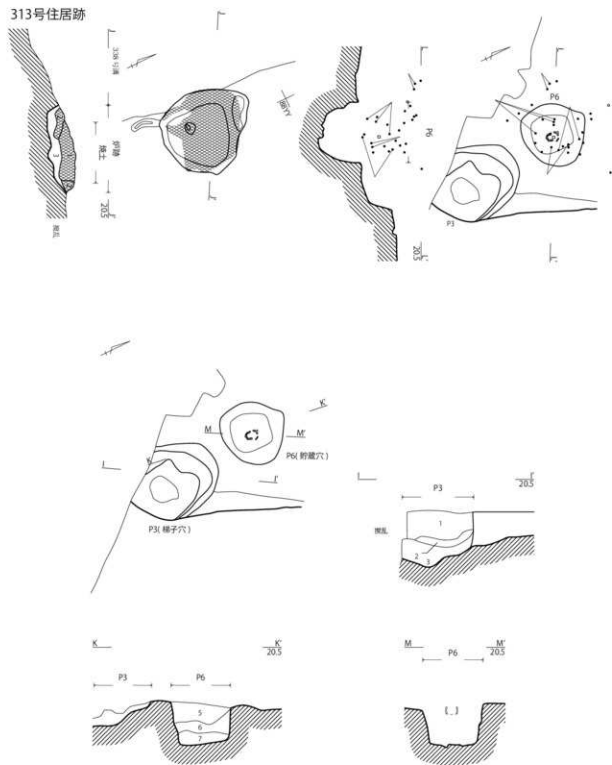


313号住居跡



第49图 313号住居跡 (1) (1/60)

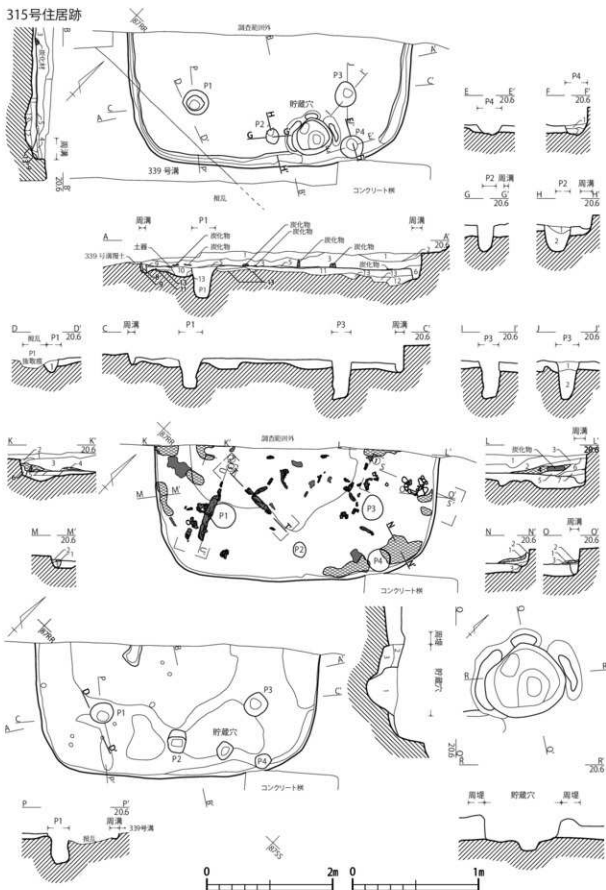
313号住居跡



第50図 313号住居跡 (2) (1/20・1/30)

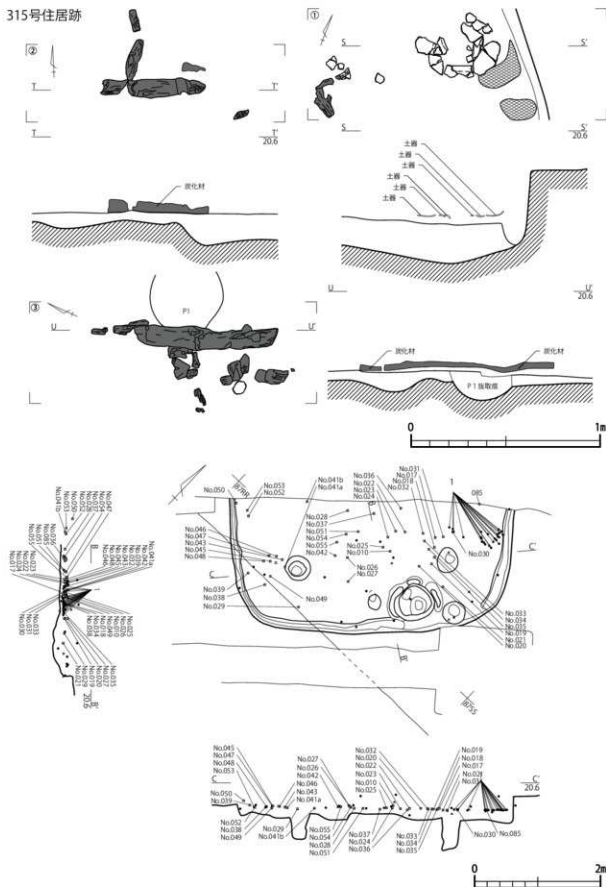


315号住居跡



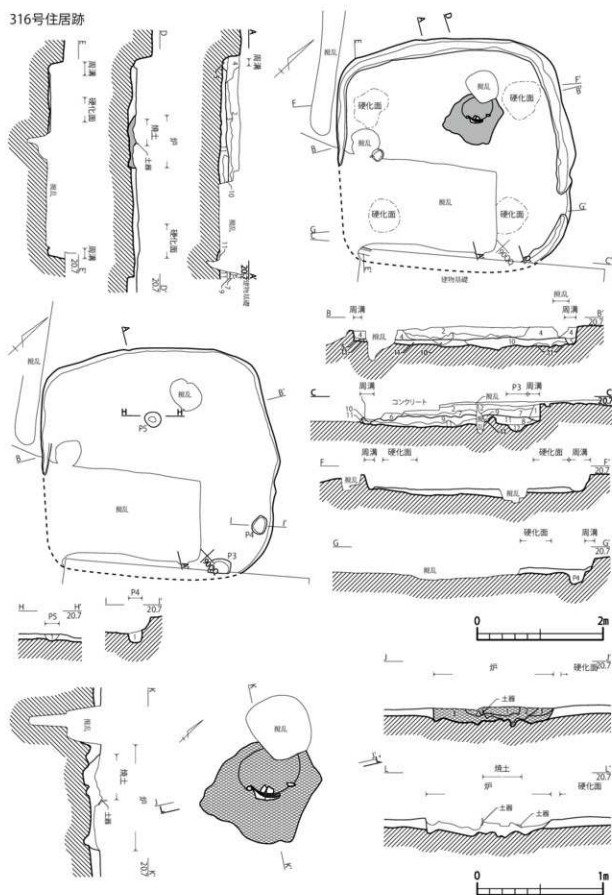
第51図 315号住居跡 (1) (1/30・1/60)

315号住居跡



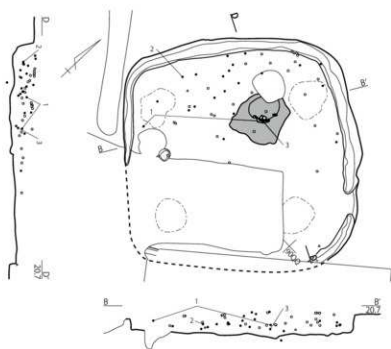
第52図 315号住居跡 (2) (1/20・1/60)

316号住居跡



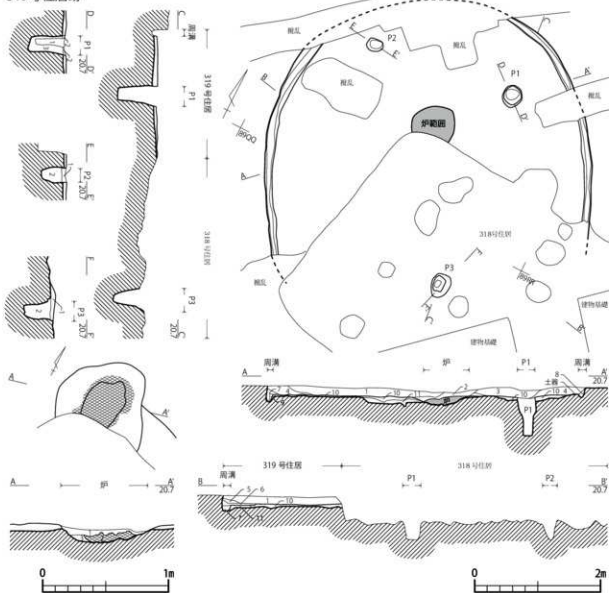
第53図 316号住居跡 (1) (1/30・1/60)

316号住居跡



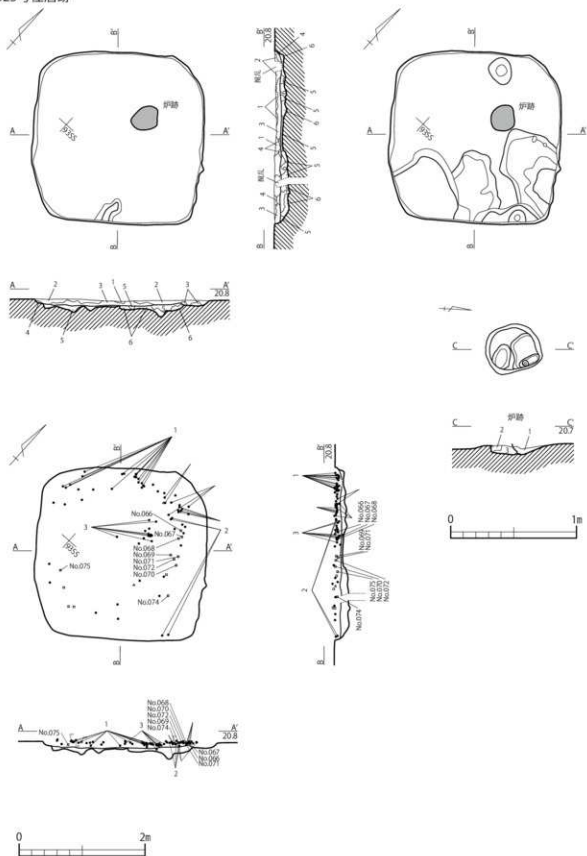
第 54 図 316 号住居跡 (2) (1/60)

319号住居跡



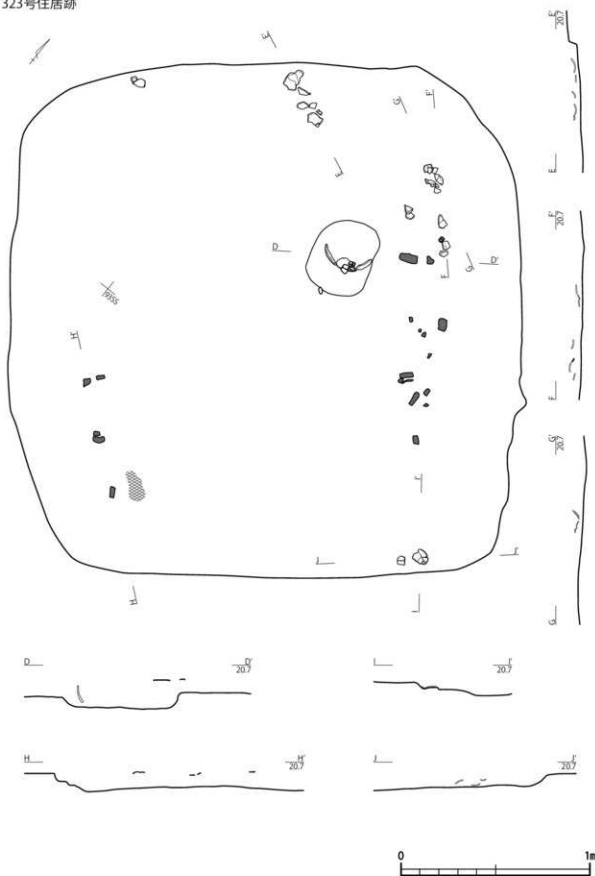
第55图 319号住居跡 (1) (1/60)

323号住居跡



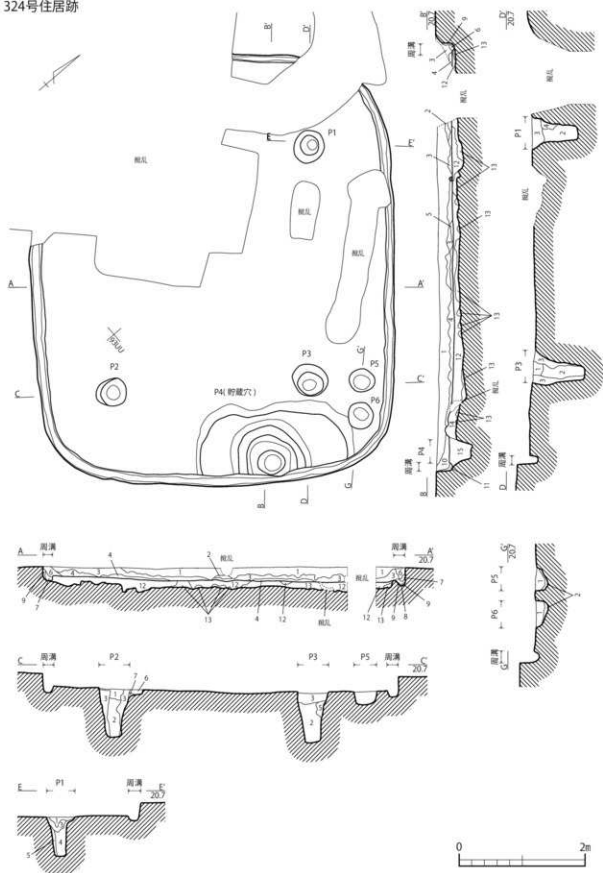
第56図 323号住居跡 (1) (1/30・1/60)

323号住居跡



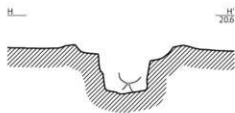
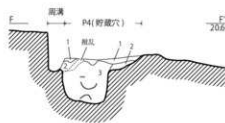
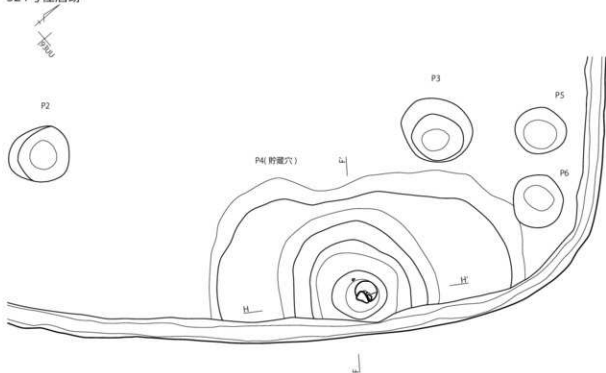
第 57 图 323号住居跡 (2) (1/20)

324号住居跡



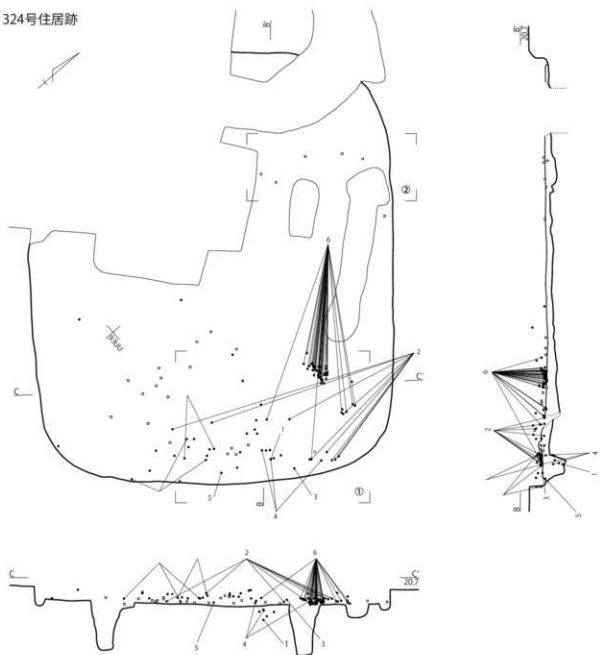
第58図 324号住居跡 (1) (1/60)

324号住居跡



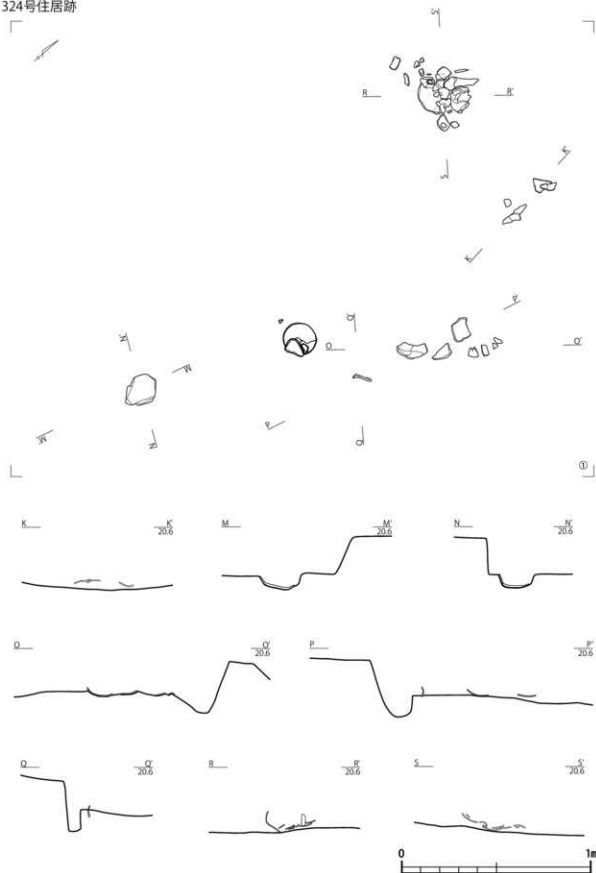
第 59 図 324号住居跡 (2) (1/30)

324号住居跡



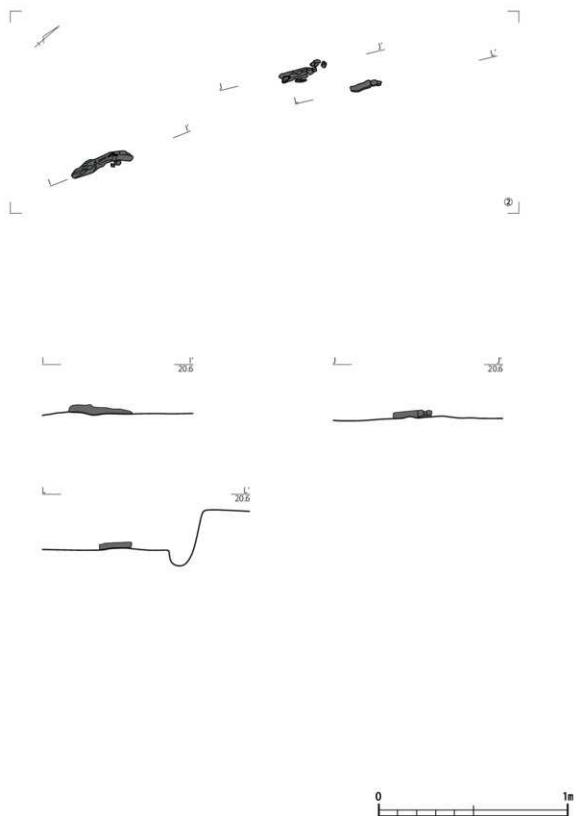
第60図 324号住居跡 (3) (1/60)

324号住居跡



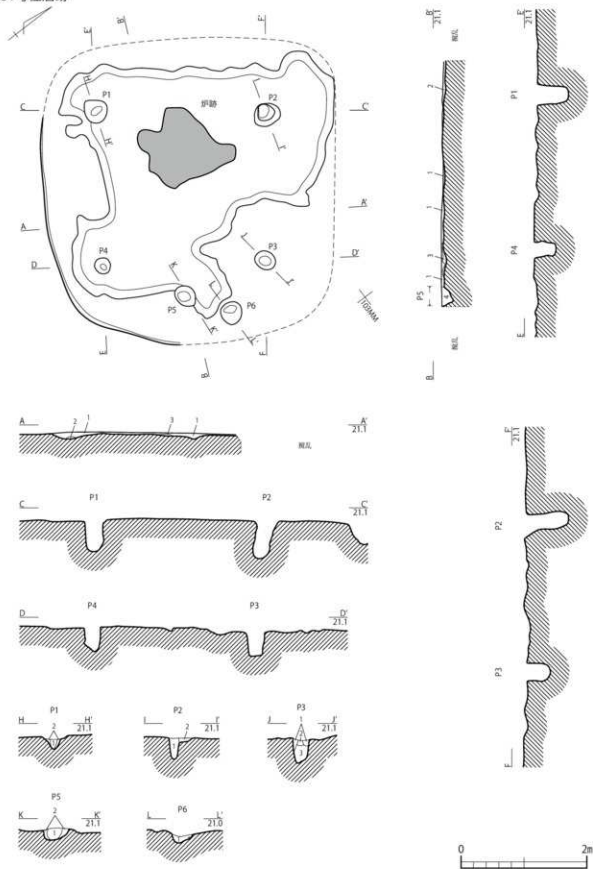
第61图 324号住居跡 (4) (1/20)

324号住居跡



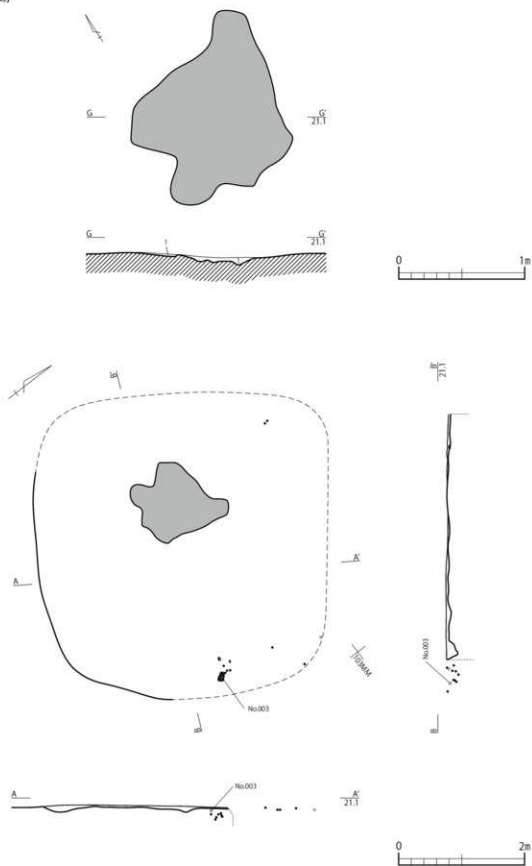
第62図 324号住居跡 (5) (1/20)

331号住居跡



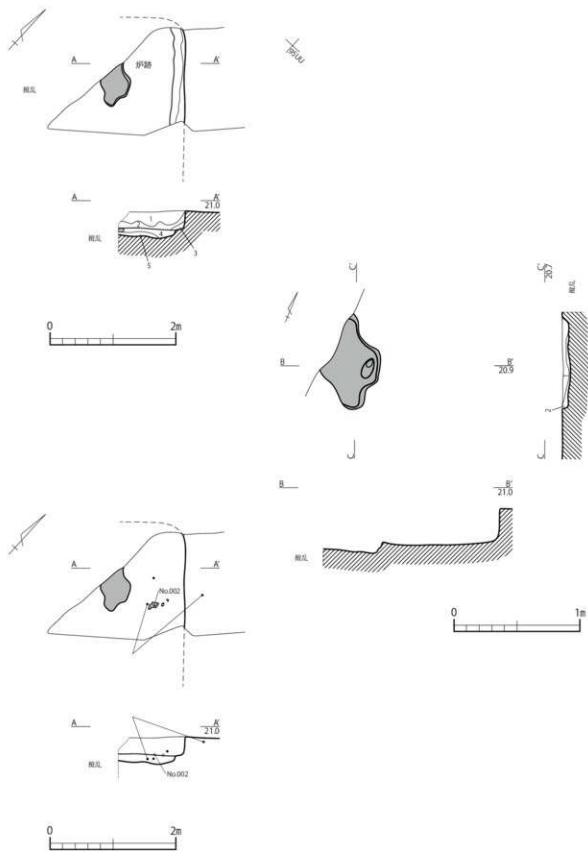
第63图 331号住居跡 (1) (1/60)

331号住居跡



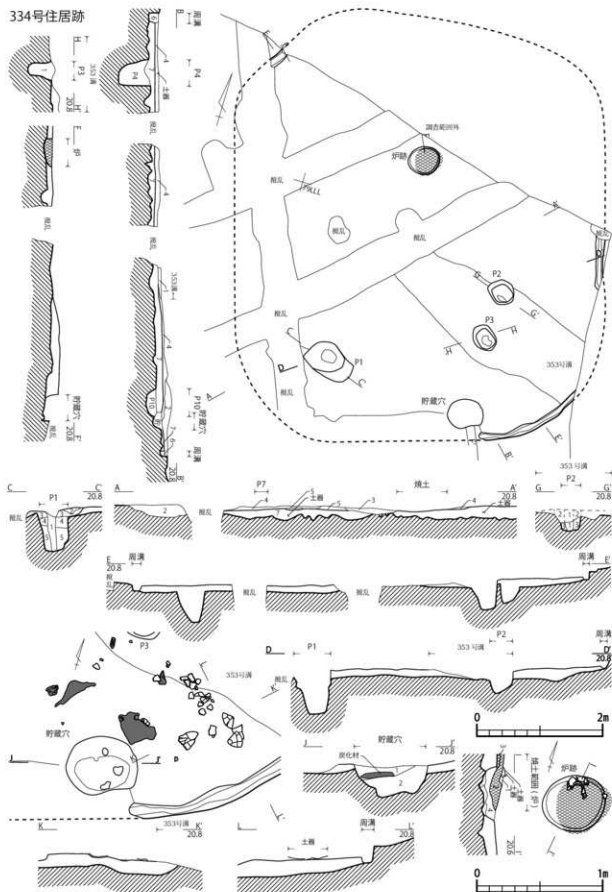
第64図 331号住居跡 (2) (1/30・1/60)

332号住居跡



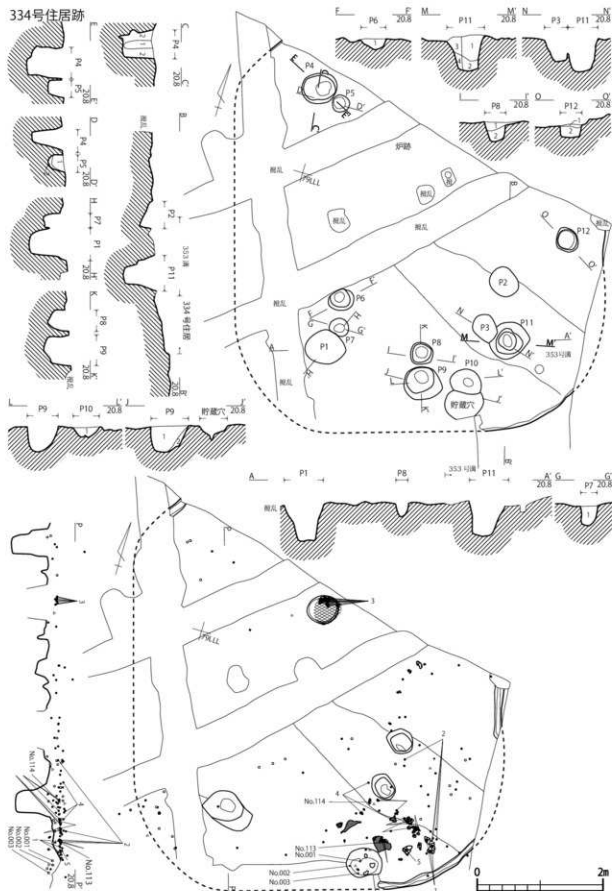
第65图 332号住居跡 (1/30・1/60)

334号住居跡



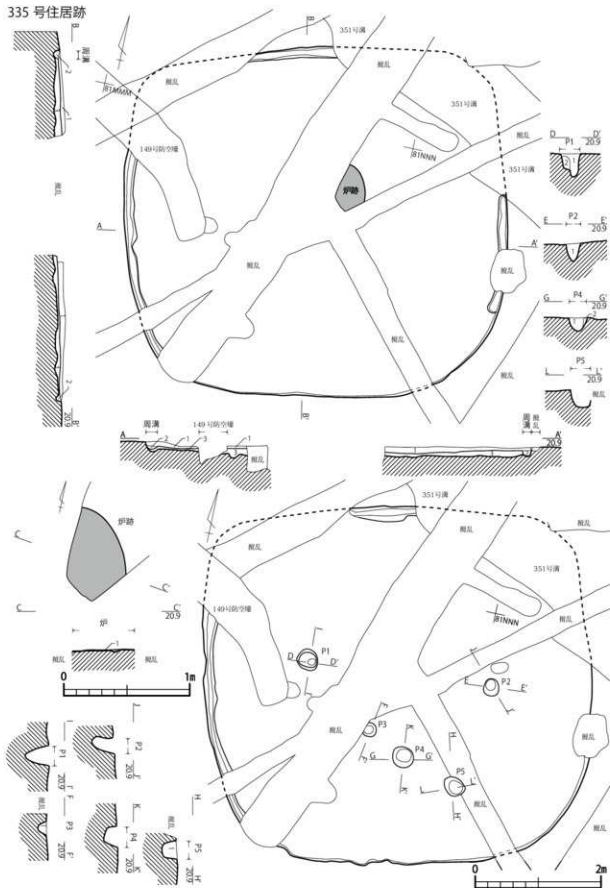
第66図 334号住居跡 (1) (1/30・1/60)

334号住居跡



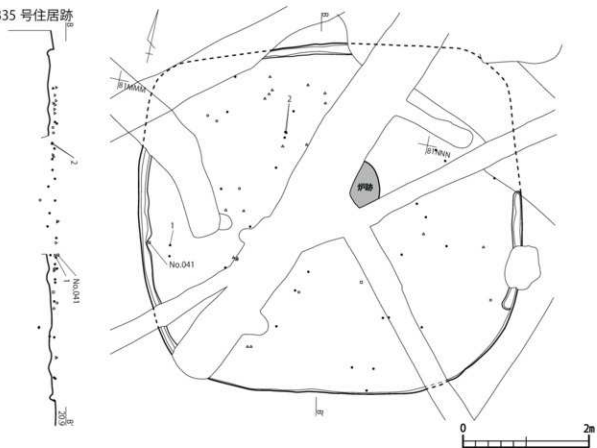
第 67 图 334号住居跡 (2) (1/60)

335号住居跡



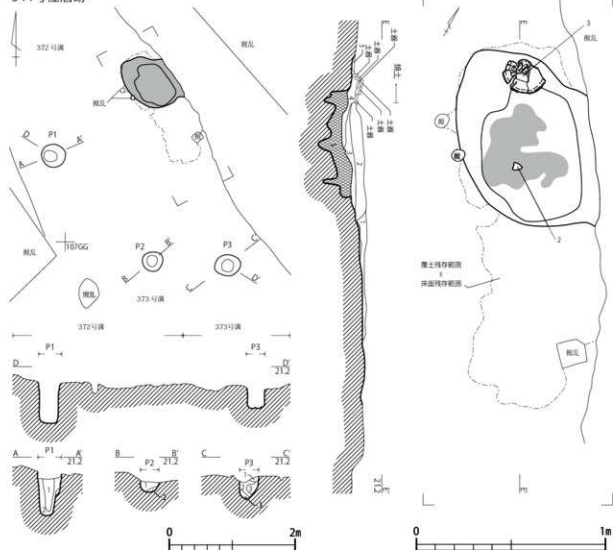
第68図 335号住居跡 (1) (1/30・1/60)

335号住居跡



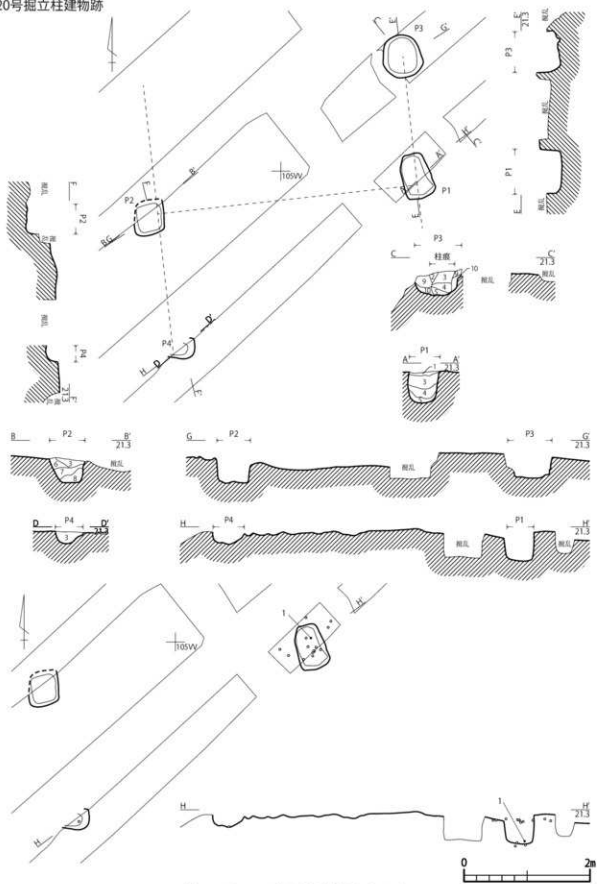
第 69 図 335号住居跡 (2) (1/60)

344号住居跡



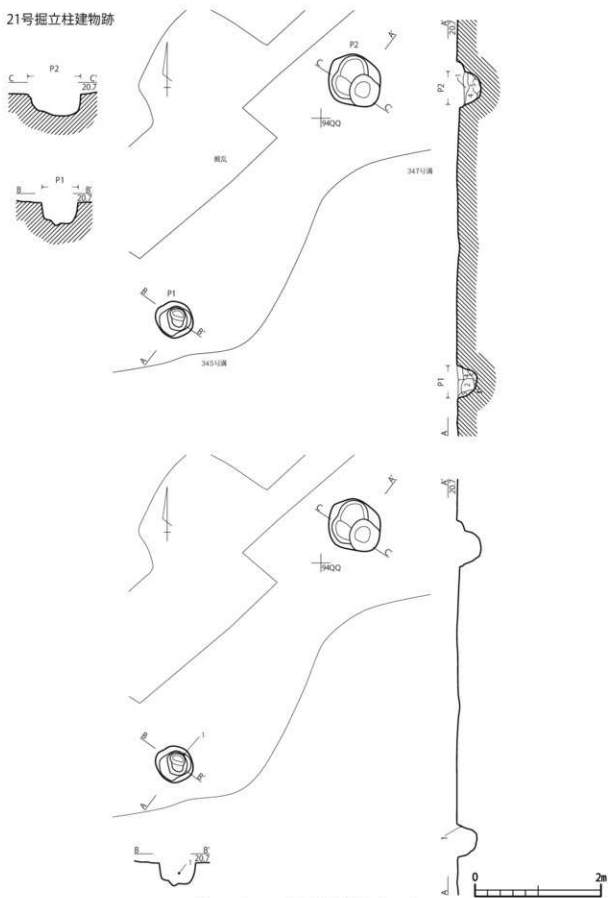
第70図 344号住居跡 (1/20・1/60)

20号掘立柱建物跡



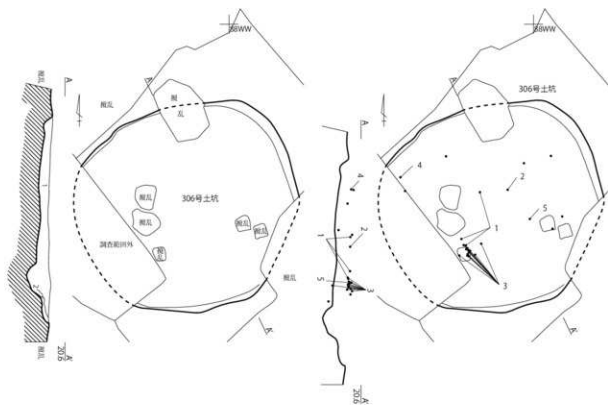
第71图 20号掘立柱建物跡 (1/60)

21号掘立柱建物跡

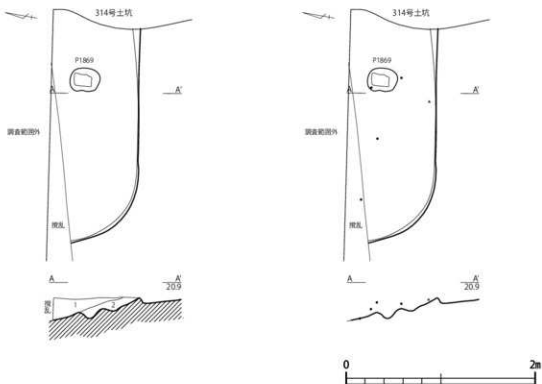


第 72 図 21号掘立柱建物跡 (1/60)

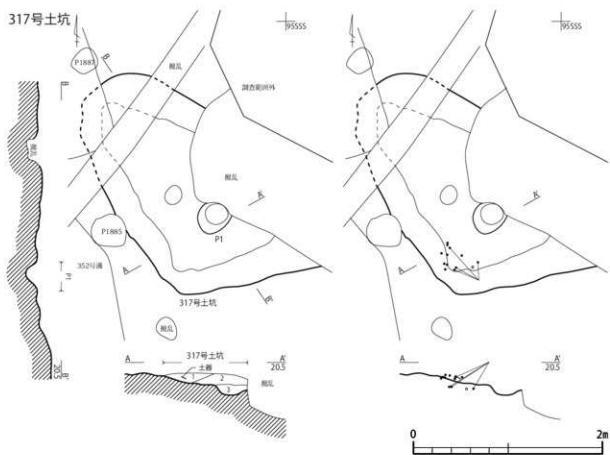
306号土坑



314号土坑

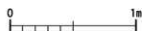
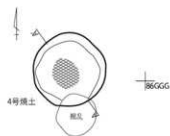


第73图 306号土坑·314号土坑 (1/40)

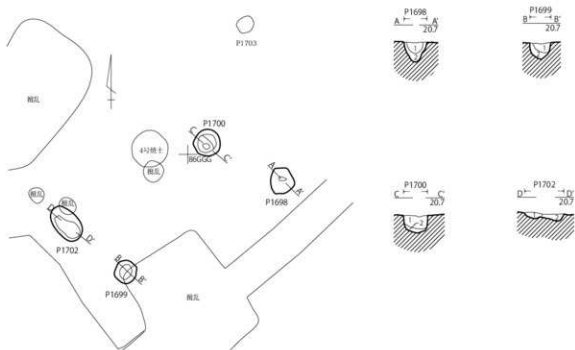


第74図 317号土坑 (1/40)

4号烧土

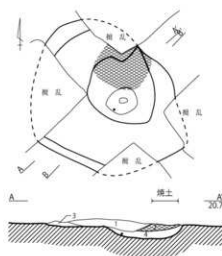


P1698 · P1699 · P1700 · P1702

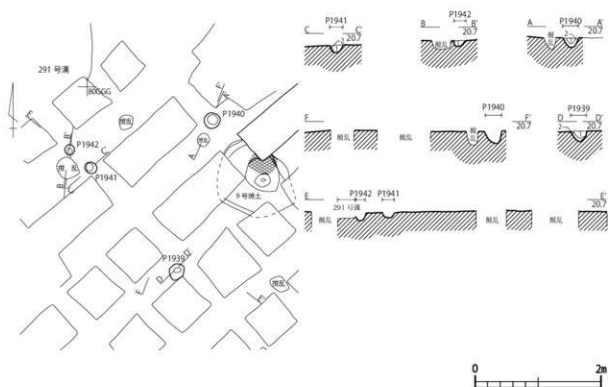


第75图 4号烧土 · P1698 ~ P1700 · P1702 (1/30 · 1/60)

9号焼土



P1939・P1940・P1941・P1942



第76図 9号焼土・P1939～P1942 (1/30・1/60)

2) 遺物

今回の調査で検出された弥生時代の遺物は、後期の土器 2,602 点と土製品 3 点（焼粘土塊、土製円盤、勾玉）、石製品 1 点（台石破片）である。土器はほとんどが後期後葉で、わずかに後期中葉のものが認められた。それ以前に遡る明確な例は見出せなかった。

A 住居跡

弥生時代後期の土器のうち、住居跡から出土したものは 1,158 点である。器種は壺、広口壺、高環、埴、鉢、甕、台付甕が認められた。

283 号住居跡（第 77 図、図版 105）

土器 3 点が出土し、このうち 2 個体を図示した。1 は高環または器台の脚部で、八の字状に開き、赤採が施される。2 は甕の胴部下半で、横方向の刷毛目調整が施される。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

288 号住居跡（第 77 図、図版 105）

甕 23 点と台付甕 1 点、高環 1 点が出土し、このうち 4 個体を図示した。1 は高環の口縁部で、内湾しつつ立ち上がる。2 は壺の口縁で、内湾しつつ立ち上がる。端部上面と口縁部に網目状燃系文が施される。3 は台付甕の脚部で、端部内面にはわずかに粘土折り返し認められる。4 は甕の胴部中位～下半で、やや直線的に開く。外面はヘラナデ、磨きによる調整で、外面から内面に向けて穿孔が 1 か所、貫通していないものが 2 箇所認められる。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

292 号住居跡（第 77 図、図版 105）

甕 3 点と台付甕 15 点、壺 3 点が出土し、4 個体を図示した。1 は壺の口縁部で、外反し、端部は折り返して複合口縁をなす。2 は壺の肩部で、横位に羽状縄文が施される。3 は台付甕の口縁～頸部と胴部の 2 片からなる。口縁部は外反し、端部外面に刻みをもつ。胴部は中～上部に最大径をもち、内外面はヘラナデによる調整が施される。4 は甕の口縁で、端部外面に刻みをもつ。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

298 号住居跡（第 78・79 図、図版 107・114）

甕 168 点と台付甕 116 点、壺 186 点、鉢 23 点、高環 10 点、小壺 1 点が出土し、24 個体を図示した。1 は高環の口縁部で、中位は屈曲してくびれ、そこから口縁部にかけて外反し、端部は内湾しつつ立ち上がる。中位の屈曲部から端部にかけて網目状燃系文が施され、屈曲部と口縁端部外面に刻みをもつ。わずかに残る下半部と、内面に赤彩が施される。2 は鉢で、体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は短く直立する。3・4 は高環の脚部で、3 は八の字状に開く。外面に赤彩が施され、内面には偶発的に付着した指頭状の赤彩が残る。中央上寄りに 4 か所の透し孔がある。4 は八の字状に開き、下端部は折り返して帯状を呈する。5 は広口壺で、端部を折り返して複合口縁をなし、面取りの後に縄文と刻みが入る。6～11 は壺で、6 は口縁部は外反し、端部は折り返して複合口縁をなす。胴部は張り、最大径は下位にあり、そこから屈曲気味にすぼまる。7・8 は胴部中位に最大径がある。9 は胴部下位で屈曲気味に立ち上がる。10 は胴部下位に最大径があり、やや張りを持つ。肩部に横方向の網目状燃系文が施される。11 は胴部下位が張り、そこ最大径がある。肩部に沈線による連続山形文が 2 段入り、区画内に網目状燃系文と、区画外に赤彩が施される。施文は燃系、沈線、山形沈線

上下の磨り消しと赤彩の順におこなわれている。12は小壺の底部で、叩き目状の荒い刷毛目が横方向に入る。13・14、20～22はナデ調整による台付甕、ナデ甕である。13・14は口縁部で、いずれも横方向のヘラナデと端部に棒状工具による刻みが入る。20・22は胴部最大径が上位に位置する。21は胴部は球形で最大径が中位に位置する。20は口縁端部に刻みが施され、21・22は平滑である。15～19は刷毛目調整による台付甕、刷毛甕である。16～18は口縁端部に刻みが施され、19は平滑である。17・18は胴部は球形で、最大径は胴部上位に位置する。23・24は台付甕の脚部で、いずれも八の字状に開く。

これらの土器は後期後葉、道合遺跡新段階に位置づけられる。

312号住居跡（第80・81図、図版108・109・114）

壺138点と甕69点、台付甕13点が出土し、19個体を図示した。

1～10は壺で、同部最大径が20cmを超える大型のもの、15cm前後の中型のものがある。1は肩部～胴部で、肩部には網目状燃糸文による文様帯をもつ。最上段の燃糸文のみ縦方向で、その他は横方向である。2は口縁部～肩部で、頸部～口縁部が外反し、口縁端部は複合口縁をなす。3はほぼ完形の中型の壺で、口縁部は外傾し、胴部は中～下位が張り、ここに最大径がある。口縁部と頸部に横位の燃糸文による文様帯をもつ。4は口縁～頸部で、外反し、端部はわずかに内湾する。5は底部～胴下部で、短く直立して外反する。6は頸部～口縁部で、口縁部は外反し、端部は肥厚し内湾しつつ立ち上がり、複合口縁をなす。複合口縁の外面と端部に網目状燃糸文が施される。7～9は頸部～胴部下半で、7は胴部中位に、8は胴部下位に、9は胴部中～下位に最大径をもつ。10は胴部下位が張り、上げ底気味の底部には不明瞭な木葉痕が認められる。11～19は甕・台付甕である。11は口縁部で、3段の粘土紐の輪積痕を顕著に残す。東京湾岸系の範疇に入る。12はナデ甕で、肩が張り、口縁は外反する。端部に刻みが入る。13・14は小型の甕または台付甕で、胴部は球形を呈する。15は胴部下半で、横方向の刷毛目による調整が入る。16～18は脚部で、刷毛目による調整とナデによる調整のものがあるが、いずれも脚部が直線的に八の字に開く。19は胴部～脚部で、胴部は内湾しつつ、中位で直立気味に立ち上がる。脚部は八の字状に開く。

これらの土器は後期後葉、道合遺跡新段階に位置づけられる。

315号住居跡（第81図、図版109）

甕18点と台付甕21点、鉢が1点、鉢4点出土した。これらのうち甕1個体を図示した。

1は甕の口縁部～胴部で、胴部は球形を呈し、中位に最大径をもつ。口縁は外反し、端部に刷毛状工具による刻み目が入る。外面と口縁部内面は刷毛により調整される。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

316号住居跡（第81図、図版109）

甕17点と台付甕1点、壺6点が出土し、これらのうち3個体を図示した。

1は壺の頸～肩部にかけての小片で、胴部には縄文が施され、わずかに残る頸部に赤彩が認められる。2は壺の肩～胴部で、横方向のヘラによる磨きと赤彩が施される。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

323号住居跡（第81図、図版109）

壺47点と甕23点が出土し、これらのうち壺3個体を図示した。

1は肩～底部で、胴部は球形を呈し、中位に最大径をもつ。肩部には縄文とS字結節文からなる文様帯がある。外面はヘラミガキによる調整が施され、底部のミガキは同一方向におこなわれている。2は無頸壺の口縁～胴部で、緩く内湾して胴部は球形を呈する。口縁端部は薄く折り返した後に下端を沈線状になぞり、段を作っている。3は頸部～胴部で、胴部はなだらかに膨らみ、中位に最大径をもつ。肩部には網目状断糸文による2区画の文様帯がある。調整は刷毛、ヘラミガキ、撚糸文、赤彩の順におこなわれている。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

324号住居跡（第82図、図版110・115）

台付甕55点と甕29点、壺30点、高坏1点が出土し、これらのうち6個体を図示した。

1は完形の高坏である。坏部は内湾気味になだらかに立ち上がり、脚部はハの字状に開く。胎土は明黄褐色～にぶい黄橙色で褐色粒を多く含み、焼成は良好である。このような胎土は334号住居跡出土の高坏1とよく似る。2～5はいずれも大型の壺である。2は広口壺の口縁～胴部下半で、口縁部は外反し、端部を折り返して段をなす。胴部は球形を呈する。外面と内面口縁～頸部に赤彩が施される。3は口縁～頸部で、外反し、口縁端部は折り返して段を形成する。4は口縁～頸部で、外反する。口縁端部上面は面取りの後に縄文が施され、口縁外面は横位にLR・RLの縄文が交互に施され、羽状を呈する。5は底～胴部下半で、横方向のヘラミガキと赤彩が施される。底部には顕著な木炭痕が残る。6は台付甕の口縁～胴部下半である。口縁部は外反し、端部に刷毛状工具先端による刻みが入る。胴部は球形を呈し、中位に最大径をもつ。横方向を主体としたナデによって調整される。

これらの土器は後期後葉、道合遺跡新段階に位置づけられる。

334号住居跡（第82図、図版110）

甕71点と台付甕2点、壺27点、高坏10点が出土した。これらのうち5点を図示した。

1～2は高坏である。1は坏部で、直線的に開きいて口縁部でわずかに内湾する。胎土は黄橙色で褐色粒を多く含み、焼成は良好である。このような胎土は324号住居後出土の高坏1とよく似る。2は脚部で、細長く、裾の部分で大きく開く。3・4は壺である。3は口縁～頸部で、外反し、頸部に断面三角形の突帯が巡る。内面には赤彩が施されており、外面も赤彩されていた可能性もあるが、風化が著しく明瞭ではない。4は胴部下半で、器壁は厚く、赤彩されている。5は甕の頸部～胴部で、球形を呈する。内面頸部と外面の調整は刷毛によっておこなわれている。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

335号住居跡（第82図、図版110）

甕18点と台付甕1点、壺10点が出土した。これらのうち壺2個体を図示した。1・2とも広口壺の口縁～頸部で、いずれも短く外反し、端部を折り返して段をなす。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

344号住居跡（第83図、図版111）

壺18点と台付甕2点が出土した。壺17点は1個体に復元され、これと台付甕2個体とを図示した。

1は壺の胴部下半で、外面は刷毛とヘラミガキの後に赤彩される。2は壺の口縁～頸部で、大きく外反し、口縁端部は折り返して複合口縁をなす。口縁内面には羽状縄文とS字（Z字）状結節文と、端部には縄文と、円形朱文（8箇所が残存）が施され、ここに短い棒状浮文が6本ずつを1単位と

して2箇所（本来は4箇所か）に認められた。1箇所の浮文の下に、つまみ出しによる把手が付き、横方向に貫通する穿孔が入る。頸部は刷毛の後、ヘラミガキにより調整される。頸部の下半にはS字（Z字）状結節文2条と羽状縄文2段による文様帯があり、ここに円形浮文が6個認められた。本来は13～14箇所か。3は台付甕の脚部で、直線的に八の字に開き、下端部は面取りされる。

これらの土器は後期後葉に位置づけられる。

20号掘立柱建物跡（第83図、図版111）

P1から甕2点が出土し、これらを図示した。

1・2は胴部下半で、1は目の広い刷毛による調整がなされる。2は外面はヘラ、内面は刷毛により調整される。

21号掘立柱建物跡（第83図、図版111）

甕1点が出土した。1は口縁部で、短く外反しており、粘土紐の輪積みの後、指オサエによって成形される。東京湾岸系の範疇に入る。

5号焼土範囲（第83図、図版）

甕1点が出土した。1は胴部下半で、横方向の刷毛によって調整される。

306号土坑（第83図、図版111）

壺16点と鉢3点、甕5点、台付甕1点が出土した。これらのうち、5個体を図示した。

1は鉢の口縁～胴部で、口縁は外反し、胴部が張る。2～5は壺である。2・4は口縁で、2は直線的に外傾し、端部は折り返してわずかに肥厚する。内外面とも赤彩される。4は複合口縁の下端部で、内湾しつつ立ち上がる。3は底部～胴部下半で、底部から直立し、内湾しつつ立ち上がる。5は甕の胴部下半で、外面は刷毛により調整される。

遺構外（第84・85図、図版112・113）

遺構に伴わない土器のうち38点を図示した。

1・2は高坏で、いずれも脚部である。1は八の字状に開く。2は八の字状にやや大きく開く。

3・4は鉢で、いずれも口縁部である。3は内湾しつつ立ち上がる。4は直立し、端部は折り返した後に指オサエによって成形される。

5～16は壺である。5は口縁～頸部で、端部は折り返して肥厚し、内外面に赤彩が施される。6は口縁部で、折り返して複合口縁をなす。縄文3段の上に円形浮文が施され、下端に刷毛状工具の先端による刻み目が入る。内面は赤彩される。7は頸部で、外反する。2状のS字状結節文と縄文による頸部文様帯と、その上位のヘラミガキが施された部分である。8は肩部で、沈線と縄文からなる連続山形文による文様帯と、その下位のヘラミガキの部分である。ヘラミガキ部分には赤彩が施される。9は頸部で、外反する。内面の上部と外面には赤彩が施される。10は肩～頸部で、外反し、くびれの上部は刷毛、下部はその上からヘラミガキによって調整される。11は広口壺の底部で、外反する。12は口縁部で、大きく開き、端部は折り返して肥厚し、縄文と、短い棒状浮文がなされる。内面は赤彩されている。13は広口壺の口縁～胴部下半で、口縁は外反し、折り返して肥厚する。胴部は球形に膨らみ、中位に最大径をもつ。内面の口縁～頸部と、外面の胴中位以上が赤彩される。14～16は底部で、14には不明瞭な木葉痕が残る。15は同心円状のヘラナデにより調整されている。16は大きく開き、外面は赤彩される。

17～37は甕・台付甕である。17～20は口縁部で、17は端部が欠損している。4段の輪積み痕が残り、その上から指オサエによって成形されている。東京湾岸系の範疇に入る。18は大きく開き、端部には指頭押圧による刻みが入る。19・20はいずれも外反し、端部には刻みが入る。21・22は頸～肩部で、いずれも口縁に向かって外反する。23～26は胴部で、23・24・26はいずれも球形を呈し、25は中位がやや張り出し、内面に輪積み痕を残す。27は底部で、木葉痕が残る。28～37は台付甕の脚部である。ほとんど(28・29・31～32・34～37)がハの字状に開くが、やや内湾気味に立つもの(30)もある。28は脚部が打ち欠かれて摩滅しており、転用されたものとみられる。身と脚の接合部に粘土紐の帯をもつもの(32・33)がわずかに認められた。38は甕の底部で、底面中央が凹む。

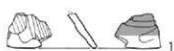
土製品・石製品(第86図、図版115)

不整形の焼成粘土塊は数多く認められたが、これを除くと土製品はごくわずかであり、全3点をここに示した。

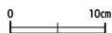
1は帯状の焼成粘土塊で、やや湾曲する。東京湾岸系の甕の口縁に用いられるような粘土紐の一部とみられる。2は甕の胴部を転用した土製円盤である。3は土製勾玉で、上部中央に焼成前の穿孔が1箇所開く。両側面はやや平坦で、断面はやや角張る。

石製品は1点が認められた。1は砂岩製の台石の破片で、平坦面は平滑である。

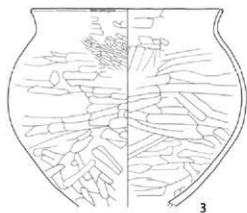
283号住居跡



288号住居跡

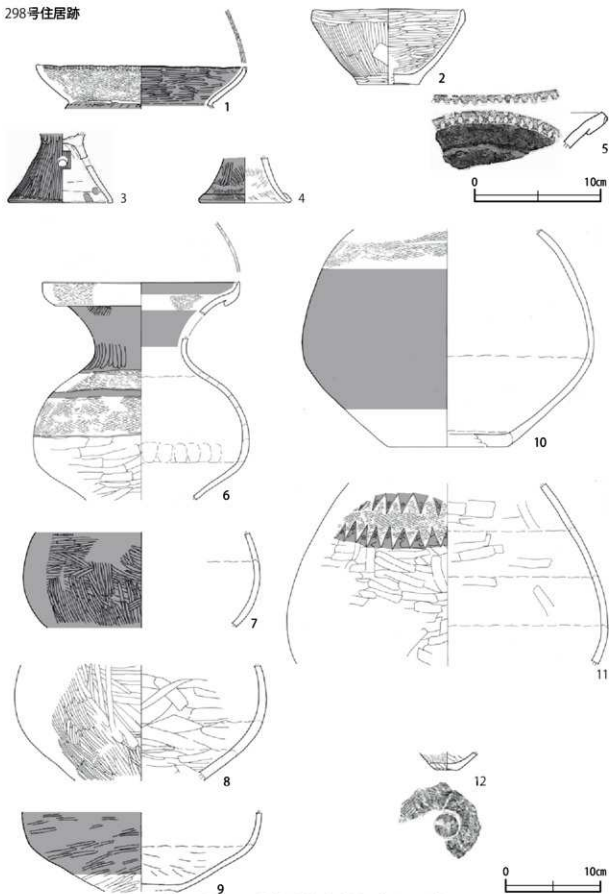


292号住居跡



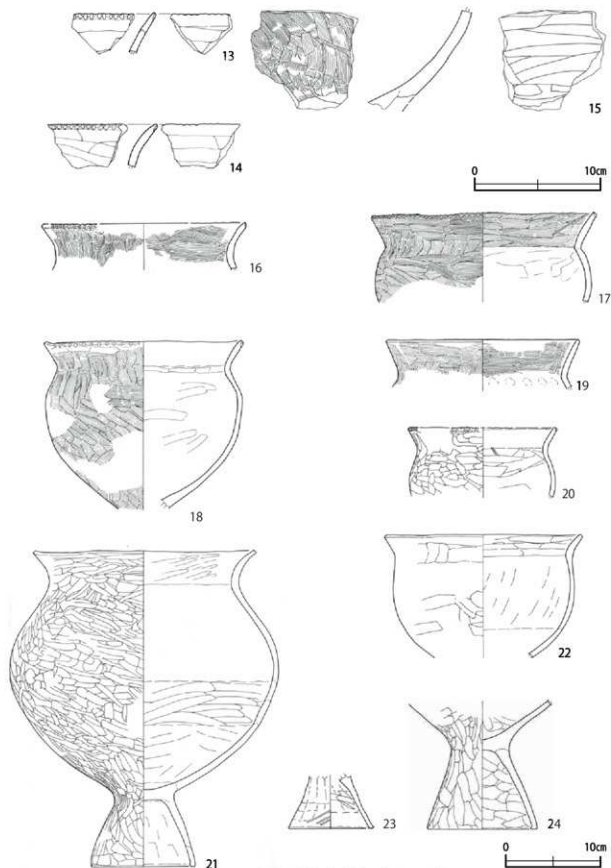
第77図 283・288・292号住居跡出土土器(1/3・1/4)

298号住居跡



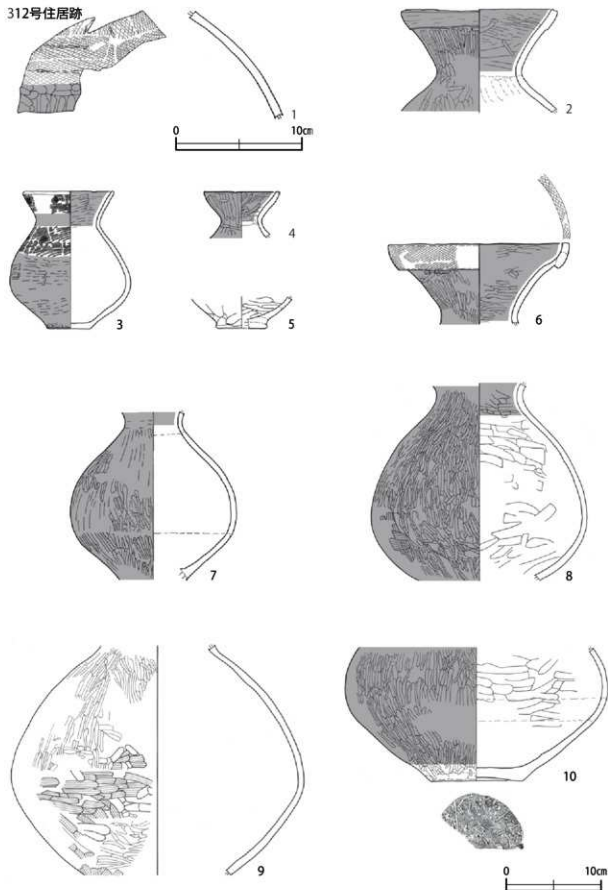
第78图 298号住居跡出土土器1 (1/3·1/4)

298号住居跡



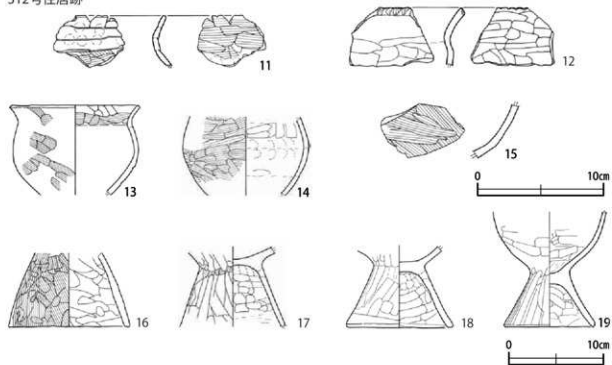
第79図 298号住居跡出土土器2 (1/3・1/4)

312号住居跡

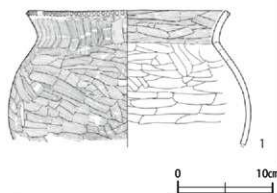


第80图 312号住居跡出土土器1 (1/3·1/4)

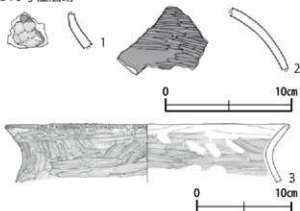
312号住居跡



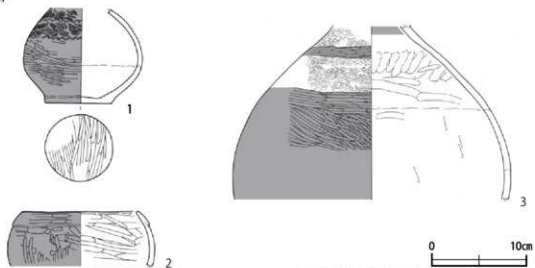
315号住居跡



316号住居跡

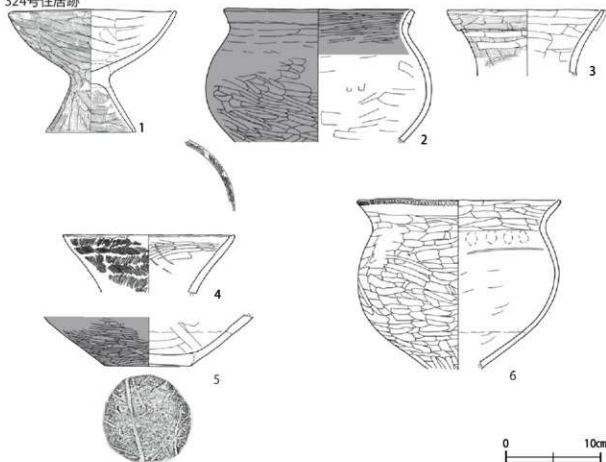


323号住居跡

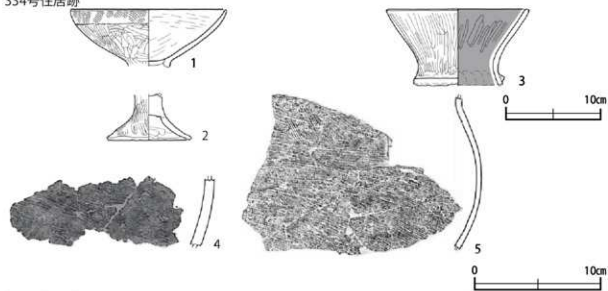


第 81 図 312 号住居跡出土土器 2・315・316・323 号住居跡出土土器 (1/3・1/4)

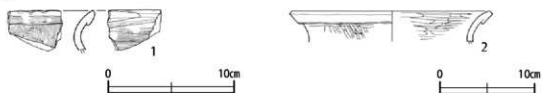
324号住居跡



334号住居跡

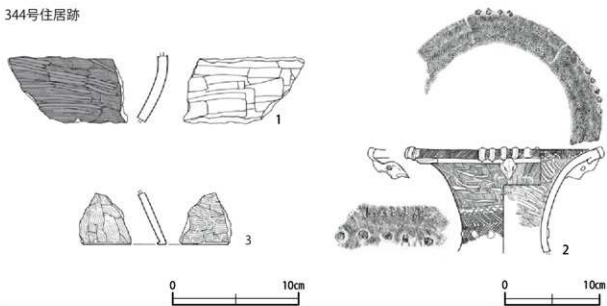


335号住居跡

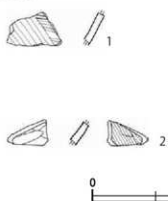


第82图 324号・334・335号住居跡出土土器 (1/3・1/4)

344号住居跡



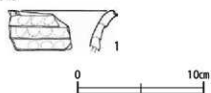
20号掘立柱建物跡



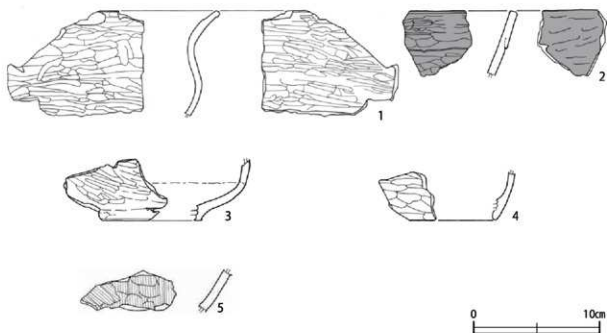
5号焼土



21号掘立柱建物跡

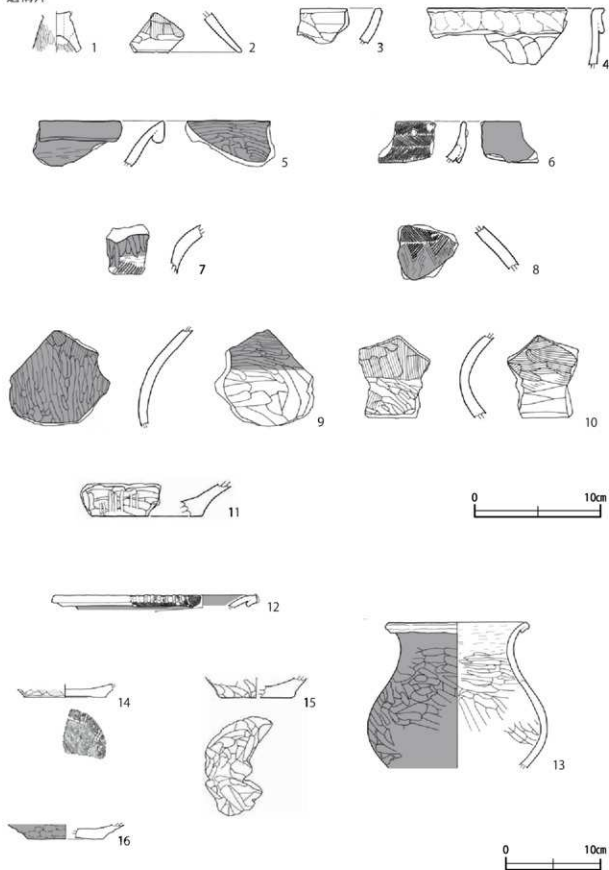


306号土坑



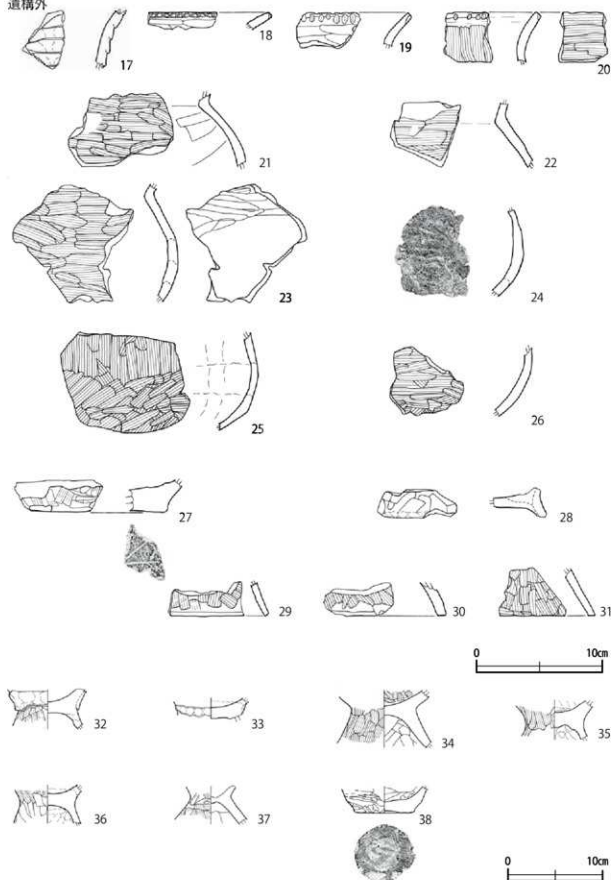
第 83 図 344号住居跡・5号焼土・20・21号掘立柱建物跡・306号土坑出土土器 (1/3・1/4)

遺構外



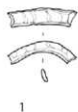
第84図 遺構外出土土器1 (1/3・1/4)

遺構外

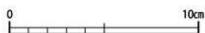
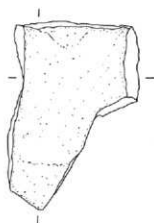


第 85 図 遺構外出土土器 2 (1/3・1/4)

土製品



石製品



第 86 図 弥生時代の土製品・石製品 (1/2)

4 古墳時代

1) 遺構

今回の調査で検出された古墳時代の遺構は、後期の住居跡 15 軒、土坑 5 基、焼土範囲 1 か所、ピット 15 基である（第 87 図）。

A 住居跡

285 号住居跡（第 88 図、図版 116～118）

グリッド 78・79FFF・GGG 平面形態 方形
 規模 南北 555 × 東西推 554 × 12cm
 主軸方向 N26° W 構築回数 1 回
 検出状況 調査区北東側に位置する。被服本廠 9 号倉庫内にあたり、遺構の上部の大半が削平され、倉庫の束柱基礎によって床面以下まで失われていた。遺存していたのは柱穴と南東側の周溝にとどまり、北西側は範囲が不明瞭である。カマドの位置と推定される北辺は束柱基礎により著しく損なわれていた。

覆土 住居覆土は大半が削平され、ピット覆土も底面付近の堆積物が残るのみである。

柱穴 主柱穴と想定される位置に P1・2・4・5 の 4 基が検出された。P3 は浅い掘り込みで性格は不明である。柱間 245cm で、方形プランで構築されたと推定される。

P1 - 77 × 67 × 43cm P2 - 56 × 55 × 46cm

P4 - 残 28 × 残 24 × 44cm P5 - 67 × 残 42 × 40cm

カマド 検出されなかった。北壁または西壁の削平された部分に設置されたと推定される。

床 削平により、床面は東側を中心にわずかに遺存するとどまる。掘方はごく浅く、掘削痕は遺存していない。

周溝 南西側にわずかに遺存する。幅 10 × 深さ 8cm 程度である。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器 39 点（土師器 30 点、須恵器 1 点、縄文土器 6 点、弥生土器 2 点）、礫 2 点が出土した。これらはいずれも床面の残存する南東側に分布する。

所属時期 住居跡の形態と出土遺物から、7 世紀前半～中葉の所産と推定される。

289 号住居跡（第 89 図、図版 119）

グリッド 83MMM・NNN 平面形態 方形

規模 南北残 366 × 東西残 225 × 12cm

主軸方向 N30.5° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区北東端に位置する。北側と東側は調査範囲外に至る。遺構西辺と南辺の一部が遺存しており、この範囲内に床面と見られる硬化が認められたことから住居跡とした。方形プランと推定される。

覆土 住居覆土はほとんど失われており、貼床を構成する掘方の覆土が 12cm 程度遺存する。局部的に炭化物と粘土を含む。

柱穴 床面の大半が失われており、柱穴が設置されたかは明らかでない。

カマド 掘方の覆土に炭化物や粘土を含むことから、カマドが設置されていた可能性が高い。遺構の南側に焼土を伴う掘り込みがあり、覆土の様相も類似することから、掘り込みは住居に伴うものと見られる。

床 貼床は顕著で、掘方は深さ12cm程度である。

周溝 遺構の西辺では周溝は検出されなかった。

遺物出土状態 土器17点と炭化物4点が出土した。土器は土師器の坏が7点と弥生時代後期の甕が10点で、床面上に散在する。弥生時代後期のものは混入と考えられる。

所属時期 出土土器は7世紀前半～中葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

290号住居跡（第90・91図、図版120～121）

グリッド 88LLL・MMM・89MMM **平面形態** 方形

規模 北西-南東推548×北東-南西推548×0cm

主軸方向 N42.5°W **構築回数** 1回

検出状況 調査区東側に位置する。北側と東側は調査範囲外に至る。遺構西辺と、柱穴などのピット、南辺の貯蔵穴（P4）が遺存しており、これらの位置から遺構のプランが判明した。北東側は未調査だが、貯蔵穴との位置関係から北辺にカマドを設置した張り出しの方形プランと推定される。遺構の下位に縄文時代早期の炬穴（77～88号炬穴）が位置する。

覆土 住居覆土はほぼ失われており、表土直下で床面が検出された。

柱穴 主柱穴と想定される位置にP1・2・3の3基が検出された。柱間はP2-P3間が286cm、P1-P3間が325cmで、方形プランで構築されたと推定される。
P1-50×43×35cm P2-46×40×40cm P3-60×42×43cm
覆土の様相から、P1・2・3のいずれも柱を抜き取った後に埋め戻したものと見られ、P1・3から出土した土器は埋め戻し土に混入したものである。

ピット 遺構の中央部に、55×50×58cmの不整形円の掘り込みが設けられていた（P5）。底面には5cm程度の厚さの褐色粘土が複数の塊状をなしており、これを均質な黒褐色シルトが覆う。覆土最上部には厚さ6cm程度の粘土混じりのロームが、中央がくぼんだ状態で乗る。さらにこの上から甕（5）の破片がまとまって出土した。これらの破片は平面状に分布しており、口縁～胴部の一部に還元された。

カマド 検出されなかった。北辺は調査範囲外だが、貯蔵穴の対辺にあたるため、この位置にカマドが設置されていた可能性が高い。

床 貼床は顕著ではない。床面の所々に下位の炬穴に由来する焼土が散る。

周溝 遺構の北西角-西辺で確認された。幅16×深さ8cm前後である。

貯蔵穴 遺構の南辺の中央部から検出された。北西側は埋設管により破壊されている。北東-南西方向95cmを長軸とする不整形長方形と見られ、深さは54cmで、底部付近の壁面がくぼんでオーバーハングする。南側の底部付近からほぼ完形の坏（4）が出土した。

遺物出土状態 土器73点と土製品（支脚）2点、石製品（縄文時代の敲石破片）1点が出土した。土器は土師器が65点、縄文土器が7点、弥生土器が1点で、土師器は上述のP5から出土した甕と、貯蔵穴（P4）から出土した坏（2・3・4）、柱穴P2から出土した坏（1）

がおもなものである。

所属時期 出土土器は6世紀後半～7世紀初頭を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

294号住居跡(第93・94図、図版122・123)

グリッド 104QQQ・RRR・105QQQ 平面形態 方形か

規模 東西推732×南北残330×80cm

主軸方向 N30°W 構築回数 1回

検出状況 調査区南東端に位置し、南側は調査範囲外に至る。北東側の大半は団地建物基礎によって、東辺の隅は296号住居跡によって、それぞれ破壊されている。カマドと柱穴の配置から北辺にカマドを設置した方形プランと推定される。

覆土 住居覆土は比較的良好に遺存する。黒褐色シルトを主体とする自然堆積によって埋没したと見られる。

柱穴 北側の主柱穴と想定される位置にP7・10の2基が検出された。P11はこれらより浅い掘り込みで、性格は不明である。柱間はP7-P10間が414cmで、南側にはこれらに対応する柱穴の存在が推定される。

P7-43×残30×50cm P10-34×33×42cm

カマドの東側の北壁沿いに小穴P1～3が認められた。これらの覆土中には焼土粒が含まれ、またP1は周溝内の焼土と粘土を切って構築されていることから、壁柱穴ではないものと見られる。

カマド 遺構の北辺の中央に位置する。攪乱によって燃焼部の西半と西側の袖が失われている。焚口～燃焼部は長楕円形で80×48×18cm程度、中央部から土師器の甕(126図-9)が横倒しの状態で出土した。東側の袖は煙道側から細長く伸びる。カマドの構成材や焼土からなる堆積物が袖の東側に広がる。この範囲から甕や甔、環がまとまって出土した。これらはいずれもカマドに由来する堆積物の上位、住居跡の覆土の下位から出土しており、住居の廃絶にともなって廃棄されたものと推定される。

床 床面は凹凸が大きい。貼床は厚さ12cm程度で締まりに乏しく、顕著ではない。

周溝 遺構の北東辺で確認された。幅24cm×深さ15cm前後である。西側では東西断面C-C'で確認されたのにとどまるが、本来はカマド範囲を除いて全周していたものと推定される。

貯蔵穴 遺構の南辺が調査範囲外に達しており、確認できなかった。

遺物出土状態 土器596点と土製品(焼成粘土塊)16点、石製品(縄文時代)1点、礫22点、鉄滓1点が出土した。土器は土師器が554点、須恵器が22点、縄文土器が22点で、縄文土器と須恵器は混入と見られる。土師器は甕と台付甕、環からなり、カマドの焚き口～燃焼部から上述の甕(9)の他、高環(7)が、東側の袖付近から甕(10・11)と甔(12)、環(3～6、8)が出土している。環(2)はカマドの燃焼部と柱穴P7付近の、やや離れた位置から出土している。

所属時期 出土土器は6世紀後半を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

295号住居跡(第95図、図版124・125)

グリッド 102・103PPP・QQQ 平面形態 方形か

規 模 推 490 × - × 20cm

主軸方向 N42° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区南東部に位置する。西側～南側は団地建物基礎によって破壊されている。北側は270号土坑(奈良・平安時代)によって上部が失われている。柱穴の配置から、北辺または西辺にカマドを設置した方形プランと推定される。

覆 土 住居覆土はほとんど遺存していない。

柱 穴 主柱穴と想定される位置にP1、P2・3、P4が検出された。P1は上部を削平されているが、下端の深さはP2・3と近似するため柱穴とした。P2とP3は個別に付番したが一連の柱穴である。P5はP4と同等の規模をもち、覆土も類似するが、柱穴として機能したかは不明である。P6とP7、P8は浅い掘り込みである。柱間はP1 - P2・3間で235cm、P2・3 - P4間で240cmで、南側の柱穴は削平により失われている。

P1 - 64 × 38 × 24cm P2・3 - 64 × 38 × 37cm P4 - 63 × 58 × 77cm

カマド 遺構の北辺または西辺に位置したものと推定されるが、削平によって失われている。

床 床面は平坦で、貼床は厚さ20cm程度で顕著に硬化している。

周 溝 遺構の東角で確認された。幅30cm×深さ20cm前後である。

貯 蔵 穴 遺構の南辺が調査範囲外に達しており、確認できなかった。

遺物出土状態 土器49点と礫3点が出土した。土器は土師器が25点、須恵器が5点、縄文土器と弥生土器が各1点、小片が17点であった。いずれも一括して回収しており出土位置は不明だが、古墳時代後期の甕および坏が主体をなしており、須恵器は後代の混入と見られる。

所属時期 出土土器は7世紀中葉頃を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

300号住居跡(第96・97図、図版125～127)

グリッド 106・107HHH・III 平面形態 長方形

規 模 南北推524×東西480×25cm

主軸方向 N19° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区南端に位置し、遺構の南東隅は調査範囲外に至る。北側は線路が東西方向に走り、この枕木の掘方によって短冊状に攪乱される。これをはじめとして被服本廠当時の削平や埋設物によって地山付近まで失われている。北側～北西側は調査範囲外に至る。主柱穴と周溝が部分的に遺存しており、これらをもとに、南北方向に長い、北壁側にカマドを設置した長方形のプランと推定した。

P1 - 57 × 57 × 31cm P2 - 63 × 43 × 47cm

P4 - 55 × 41 × 55cm P5 - 56 × - × 41cm P6 - 20 × 20 × 48cm

覆 土 ローム粒や焼土粒、炭化物を含む黒褐色土が10cm程度の厚さで堆積する。表土の影響を受けて固く締まっている。

柱 穴 東P2とP4、P6の3基は遺構の東西・南北軸に揃っており、主柱穴と見られる。P2は下端が段状になっており(P2A、P2B)、このうち南側(P2A)が柱の基底部と見られる。柱間はP4 - P6で210cm、P2A - P6間で225cm。本来はこれらを含む4本の主柱穴

によって上屋を支えたものと推定され、南東側の柱穴は地下埋設管によって破壊されている。P1、P5はこれらより浅く、また断面形も碗形を呈しており、柱穴として機能したかは不明である。

カマド 検出されなかった。東西辺の中央は周溝が巡っていることから、カマドは北辺に設置された可能性が高い。

床 遺構中央～南側を中心に貼床が顕著である。掘方は浅く、10～20cm程度である。

周溝 東辺と西辺、南辺で確認された。幅15～23cm、深さ10cm程度である。

遺物出土状態 土器120点と礫2点、炭化材3点が出土した。土器は古墳時代後期の土師器甕が43点、壺が26点、甕が6点、坏が4点、鉢が1点で主体をなす。P4の覆土上層から甕(5)と甕(4)がいずれも側面を横にした状態でまとまって出土した。P5の北側からは坏(2)が破片の状態で出土した。この他に縄文土器20点、弥生土器3点が出土している。

所属時期 出土土器は7世紀中葉～後葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

301号住居跡(第98・99図、図版128～130)

グリッド 106・107GGG・HHH 平面形態 方形

規模 北西-南東推450×北東-南西435×21cm

主軸方向 W21°S 構築回数 1回

検出状況 調査区南側に位置する。300号住居跡(古墳時代後期)の北西側に隣接し、両者の南北軸はほぼ一致する。周辺は近代以降の削平が著しく、遺構南側は床面まで失われている他、埋設物によって損なわれている部分が多い。主柱穴と周溝、カマドが部分的に遺存しており、これらをもとに、西壁側にカマドを設置した方形のプランと推定した。

P1-70×63×40cm P2-66×58×39cm P3-52×45×24cm

P4-68×52×41cm P5-25×25×28cm P6-17×14×29cm

P7-15×14×15cm P8-18×15×14cm

覆土 ローム粒や焼土粒、炭化物を含む黒褐色土が10cm程度の厚さで堆積する。南側は削平が著しく、覆土はほとんど残っていない。

柱穴 P1～P4は主柱穴で、柱間はP1-P2間が207cm、P3-P4間が211cm、P1-P3間が220cm、P2-P4間が227cmと、北西-南東方向にやや長い。P2は底部に2か所の窪みが認められるが、覆土に抜き取り痕は認められないことから柱の据え替えの可能性は低い。P6・P7は壁際に設けられた小穴で、壁柱穴と見られる。

カマド 遺構西壁中央に設置されていた。上部は削平されており、掘り込みと、粘土・焼土が一定のまとまりをもって検出された。燃焼部は西側に張り出し、55×32cmの範囲に焼土の集中が認められた。両袖の掘り込みがわずかに遺存しており、これらを含むカマドの規模は102×78cmである。

床 床面の残存範囲は貼床が顕著である。掘方は浅く、10～20cm程度である。

周溝 北辺と、東西辺の北側で確認された。幅15cm、深さ18cm程度である。

遺物出土状態 土器75点と礫1点が出土した。土器は土師器甕が44点、坏が6点、壺が1点で主

体をなす。この他に混入と見られる須恵器環が1点と、縄文土器12点、弥生土器2点が出土している。土器は大半が遺構北側の床面上に散在しており、土師器の甕(2)の底部がカマドの袖付近から、環(1)がカマド正面の床面から出土した。

所属時期 出土土器は7世紀中葉～後葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

302号住居跡(第100～102図、図版131～133)

グリッド 106・107・108EEE・FFF 平面形態 方形

規模 北東-南西711×北西-南東推654×20cm

主軸方向 N47°W 構築回数 1回

検出状況 調査区中央南側に位置する。団地建物基礎によって遺構の中央部と北側の大半が損なわれる。主柱穴と周溝、貯蔵穴が部分的に遺存しており、これらをもとに方形のプランと推定した。

P1-42×推40×63cm P2-60×推42×75cm P4-52×37×17cm

P5-35×26×35cm P6-30×28×22cm P7-×××33cm

P8-×××73cm P9-18×15×40cm

覆土 ローム粒や焼土粒、炭化物を含む均質な黒褐色土が20～25cm程度の厚さで堆積する。南東側の壁沿いには焼土が塊状に集中する。

柱穴 P1とP2、P7の3基は遺構の東西・南北軸に概ね一致しており、主柱穴と見られる。P4は南東辺の中央に位置する浅い掘り込みで、P8は遺構の北西-南東方向の中軸上に位置するが、機能は不明である。南東側の柱穴にあたる位置は地下埋設管によって破壊されており、本来はP1・P2・P7を含む4本の主柱穴によって上屋を支えたものと推定される。柱間はP1-P2間で366cm、P1-P7間で396cm。P5・P6・P9は掘方に伴う。

カマド 検出されなかった。貯蔵穴(P3)がカマド脇に配置されたものと考えるなら、カマドは北壁中央部に設置された可能性が高い。

床 床面の残存部は概ね顕著な貼床である。掘方は10～16cm程度である。掘方の確認時に、遺構の北東と南西の壁に直交する溝状の掘り込みを検出した。いずれも幅20cm、深さ10cm程度で、南西側のものは長さ123cmである。住居内の間仕切り(壁)の基部の可能性はあるが、床面の検出時には確認できなかったため掘方に伴うものとした。P5・P6は掘方に伴う

周溝 南辺は完存し、東辺と西辺は断片的に確認された。幅20cm以上、深さ20cm程度のしっかりした作りである。

貯蔵穴 遺構の北西側の、おそらく北壁に沿うと推定される位置で検出された。南半部のみ遺存しており、長軸は100cm、短軸は残存部が20cmの長楕円形で、深さは70cm程度。覆土はロームブロックを多く含み、出土遺物の位置や方向も一定しないことから、短時間で埋没したものと見られる。

遺物出土状態 土器404点と管玉(白玉)1点、礫80点、焼成粘土塊2点、炭化材6点が出土した。

この他に近代以降の遺物の混入も若干認められた。土器は古墳時代後期の土師器甕が255点、環が84点と大半を占めた他、甕や高環、鉢や壺が認められた。遺物は遺構覆土の広範囲に散在しており、環(2)は接合した破片の出土位置が南側の周溝付近

と北側の貯蔵穴付近にわたる。甕または鉢(3)は破片が貯蔵穴内とその付近の床面上に、坏(1)は破片が貯蔵穴付近の覆土中に、それぞれ散在する。甕または鉢(4)は破片が南壁のP4内にまとまる。手捏ね土器(6)は南西側の柱穴P1の底面から出土した。管玉(白玉:第181図-1)は遺構南東側の床面直上から出土した。

所属時期 出土土器は7世紀前葉~中葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

304号住居跡(第103図、図版134・135)

- グリッド 107・108AAA・BBB 平面形態 長方形?
- 規模 南北残342×東西339×45cm
- 主軸方向 N5°W 構築回数 1回
- 検出状況 調査区中央南側に位置する。遺構の東辺から南辺にかけての南東半と、北西隅から中央にかけての範囲が、団地建物基礎と被服本廠建物基礎によって破壊されている他、北辺の中央東寄りのカマド付近は避雷針の基部によって失われている。北辺中央部のカマドと、西壁と北壁、北東隅が部分的に残存しており、これらをもとに、南北方向に長い、北壁側にカマドを設置した長方形のプランと推定した。
- 覆土 ローム粒や焼土粒、炭化物を含む黒褐色シルトが20cm程度の厚さで堆積する。
- 柱穴 検出されなかった。遺構西側の掘方に47×30c×27cmのピット(P2)が設置されていたが、覆土上面を貼床が覆っており(G-G'1層)、柱穴としては機能していない。
- カマド 遺構北壁の中央部に設置されていた。カマドの東側は80×37×5cmの範囲に地山を掘り窪めて棚状の張り出しを設けている。燃焼部は23×19×30cmで、北側が立ち上がっている。袖は西側のみ確認された。地山を半島状に残して袖の芯とし、その上から外側にかけて粘土とシルト、ロームからなる構成材を載せている。袖の構成材の下位からピット(P1)が検出された。この覆土はロームを主体とし、砂質に富む。
- 床 貼床は均質なロームを主体とする。掘方は浅く、10cmに満たない。底面に掘削痕が散在する。
- 周溝 西辺と北辺で部分的に確認された。幅15~20cm、深さ10cm程度で、北側はカマドの範囲で途切れ、全周しない。
- 遺物出土状態 土器14点と土製品(支脚)2点、礫7点が出土した。土器は古墳時代後期の土師器坏が7点、甕が3点で主体をなし、この他に縄文土器3点と、近代以降の銭貨や土製品が出土している。支脚(1)はカマドの中央部の燃焼部から正位で出土した。

所属時期 出土土器は古墳時代後期を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

305号住居跡(第104図、図版136・137)

- グリッド 108・109YYY・ZZZ 平面形態 方形
- 規模 南北505×東西505×6cm
- 主軸方向 N13°W 構築回数 1回
- 検出状況 調査区中央南側に位置する。遺構の外周が断片的に遺存し、東側に床面と見られる硬化面と、北東を除く主柱穴3基が検出された。遺構の大半は被服本廠の埋設物によって失われており、覆土は削平によりほとんど残っていない。ほぼ方形を呈する。

P1 - 63 × 43 × 14cm P2 - 42 × 40 × 59cm

P3 - 36 × 28 × 73cm P4 - 27 × 26 × 82cm

覆土 全体に著しく削平されており、南側の一部を除いてほとんど残っていない。ローム粒・焼土粒をわずかに含む黒褐色シルトである。

柱穴 P2～4の3基が検出された。北東側は攪乱によって失われている。P3・P4は地下埋設物によって上部の大半が失われ、底面付近がわずかに遺存していた。柱間はP2 - P3間が294cm、P3 - P4間が245cmである。P1は浅い碗形の掘り込みで、東辺の中央部の、東壁に接する位置に構築されている。カマドの一部の可能性もあるが、覆土は遺構覆土と共通しており、粘土や砂などのカマドの構成材に由来する堆積物は見当たらない。

カマド 検出されなかった。西辺は周溝が中央部まで及ぶため、設置された場合はこれ以外の位置となる。

床 貼床は均質なロームを主体とする。掘方は浅く、10cmに満たない。

周溝 西辺から南西隅にかけて部分的に確認された。幅15～20cm、深さ8cm程度である。

遺物出土状態 土器201点と礫1点が出土した。土器は古墳時代後期の土師器甕が147点、甕が29点、坏が16点と大半を占め、この他に弥生土器7点と、近代以降の植木鉢1点が出土している。土師器甕(2)は遺構南西側の床面直上から、甕(3)は南西隅の床面直上と、この付近の覆土に由来するとみられる近代の埋設管の掘方内から出土した。坏(1)は同じ埋設管の掘方内から出土した。甕と甕は遺構の南西隅に並べて遺棄されたものと見られる。

所属時期 出土土器は古墳時代後期、6世紀後半を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

306号住居跡(第105・106図、図版138・139)

グリッド 110・111YY・ZZ・AAA **平面形態** 方形

規模 南西-北東 567 × 北西-南東 547 × 28cm

主軸方向 N23.5° W **構築回数** 1回

検出状況 調査区中央南端に位置する。遺構は直上に位置する団地建物の南西端によって大半が失われている。遺構の西辺と東辺が断片的に遺存し、これらに囲まれた範囲内から貯蔵穴と、東側の主柱穴P1・P2が検出された。これらの位置から推定されるプランはほぼ方形となる。

P1 - 63 × 43 × 67cm P2 - 62 × 54 × 54cm

貯蔵穴-76 × 残 33 × 40cm

覆土 ローム粒をわずかに含む均質な黒褐色土である。

柱穴 P1～2の2基の主柱穴が検出された。西側にもこれらに対応する柱穴があったと推定されるが、広く攪乱されており不明である。P1は北側の大半が失われる。P1・P2のいずれも覆土中に細砂粒が多く含まれる。柱間はP1 - P2間が280cmである。

カマド 検出されなかった。南辺中央部に貯蔵穴が位置するため、カマドは対辺の北壁中央に設置された可能性が高いが、当該範囲は広く攪乱されており存否は不明である。

床 貼床は均質なロームを主体とする。掘方は浅く、10cm程度である。

周溝 東辺に部分的に確認された。幅 15～20cm、深さ 8cm 程度である。

貯蔵穴 南辺の中央に設置されている。西半は破壊されており規模や平面形は明らかでない。

遺物出土状態 土器 34 点と焼成粘土塊 1 点、礫 20 点が出土した。この他に近代以降の陶磁器 2 点が認められている。土器は古墳時代後期の土師器甕が 16 点、高環が 7 点、坏が 3 点で、これらが主体をなし、この他に縄文土器 7 点と弥生土器 1 点が出土している。高環(3)は貯蔵穴の覆土上層から出土した。高環(2)は貯蔵穴内と、その南側の攪乱の堆積物中から出土したものが接合した。高環(1)も同じ攪乱の堆積物から出土している。貯蔵穴内に高環を納めていた可能性が考えられる。

所属時期 出土土器は古墳時代後期、6 世紀前半を主体とする。遺構もこの時期のものとして推定される。

309 号住居跡 (第 107～109 図、図版 140～142)

グリッド 105・106PP・QQ・RR・107PP・QQ 平面形態 方形

規模 南北 720×東西 690×10cm

主軸方向 N7°W 構築回数 1 回

検出状況 調査区中央南側に位置する。近代以降の削平により覆土はほとんど遺存しておらず、遺構中央部と南側は東西方向に走る近世の溝(337 号溝)と畝によって損なわれている。

P1-51×50×75cm P2-64×57×72cm P3-94×64×62cm

P4-75×69×67cm P6-33×29×18cm P7-45×45×14cm

貯蔵穴(P5)-127×126×62cm

覆土 削平が床面直上まで及んでおり、ほとんど残っていない。

柱穴 P1～4 の 4 基の主柱穴が検出された。柱間は P1-P2 間が 301cm、P3-P4 間が 318cm、P1-P3 間が 350cm、P2-P4 間が 340cm である。この他に P6・P7 が検出されたが、浅い掘り込みで機能は不明である。

カマド 北辺の中央に設置されていた。地山の高さまで削平が及んでおり、袖は確認されなかった。焼土の集中を伴う掘り込みが南北方向に 2 か所並び、それぞれ南側が焚き部、北側が燃焼部と見られる。焚口部は 53×49×4cm、燃焼部は 76×52×8cm の範囲が残存する。

床 貼床は均質なロームを主体とする。掘方は浅く平らで、10～15cm 程度である。

周溝 遺構北側と、南辺に部分的に確認された。本来はカマドの範囲を除いて全周していたものと推定される。幅 15～20cm、深さ 10cm 程度である。

貯蔵穴 南辺の中央やや東寄りに設置されている。不整形円で壁は緩やかに開く。

遺物出土状態 土器 124 点と管玉 1 点、焼成粘土塊 2 点、礫 4 点が出土した。この他に近世の陶磁器等が混入している。土器は古墳時代後期の土師器甕が 41 点、高環が 14 点、坏が 64 点で、これらが主体をなし、この他に須恵器 2 点と弥生土器 1 点、縄文土器 2 点が出土している。覆土が削平されており、出土範囲はほとんどが北壁付近かピット、貯蔵穴内に限られる。貯蔵穴内には多数の土器が認められ、土師器坏(1・3・4)、高環(7)、甕(8)が、いずれも破片の状態で覆土上～下層に散在する。高環(7)は底～脚部が底部直上から出土している。P3 の南側の縁部から高環(5)が、P6 内から管玉(第 181 図-2)が出土している。

所属時期 出土土器は古墳時代後期、6世紀前半を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

314号住居跡(第110・111図、図版143～145)

グリッド 86WW・XX・87VV・WW 平面形態 方形?

規模 南北539×東西×40cm

主軸方向 N15°E 構築回数 1回

検出状況 調査区中央北側に位置する。近代以降の埋設物により遺構の大半が北西-南東方向に寸断される。北辺と東辺、南辺がわずかに遺存しており、これらをもとに方形のプランと推定した。西側の縁辺は不明である。

P1-59×××66cm P2-20×××29cm P10-16×××32cm

P11-14×××28cm

覆土 覆土は均質な黒色土からなる。

柱穴 P1・2・10・11の4基のビットが検出された。P1は南西側の柱穴の可能性があるが、これ以外はいずれも小規模で、機能は不明である。

カマド 検出されなかった。

床 遺構南側の残存部で硬化面を検出した。この周辺以外では床面は不明瞭である。掘方は浅く平らで、覆土は20cm程度である。南側では床面の直上に焼土の集中が認められ、この付近から土器がまとまって出土した。この部分の掘方は東西方向に長い楕円形の浅い掘り込みとなっていた。

周溝 遺構南側の残存部で検出した。幅15～20cm、深さ10cm程度である。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物出土状態 出土遺物はほとんどが遺構南側の残存部からのものである。土器52点と土製支脚2点が出土した。この他に近代のガラス製品や煉瓦等が混入している。土器は古墳時代後期の土師器甕が25点、甕が5点、高環が1点、環が7点で、これらが主体をなし、この他に弥生土器7点、縄文土器1点が出土している。甕(5)は南側の床面の直上からP1の東縁に向けて流れ込むようなかたちで分布する。環(1・2)と高環(3)、甕(4)は南側の床面の焼土範囲の上に平面的に分布する。

所属時期 出土土器は古墳時代後期、6世紀前半を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

326号住居跡(第112～114図、図版145～149)

グリッド 90・91WW・WW 平面形態 方形

規模 南北702×東西700×28cm

主軸方向 N5.5°W 構築回数 1回

検出状況 調査区中央北側に位置する。遺構の北西隅から南辺にかけてを近代の掘り込み(塹壕)によって失われ、中央部を東西方向に近世の溝(341・348号溝)によって削られている。主柱穴のうち3基と、北辺と南東・南西隅の周溝が遺存しており、これらの配置から遺構の方形プランが判明した。

P1-51×××54cm P2-70×52×34cm P3-66×50×70cm

覆土 覆土は厚さ20cm程度の褐色～黒褐色土からなり、スコリアやロームブロックを含む。

柱 穴 P1～3が認められた。P1は上部を削平されており、底部付近のみ遺存していた。南西側にも対応する主柱穴があったものと見られるが、当該範囲は削平されている。柱間はP1－P2間で364cm、P2－P3間で384cmと、わずかに南北方向に長い。

カマド 遺構北辺中央の壁際に設置されていた。袖を含む東西179cm、南北109cmで、焚口側49×47cmの範囲に焼土が薄く広がる。地山のロームを掘り残して基礎とし、その上にシルトと粘土、砂からなる袖を構築している。

床 貼床は床面の全域に認められた。掘方は深さ15cm弱で平坦である。

周 溝 幅15～20cm程度、深さ14cm程度である。カマド範囲には及ばない。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物出土状態 土器112点と土製支脚1点、焼成粘土塊1点、石器(剥片)1点、近世以降の陶磁器2点、礫2点が出土した。石器は前時代のものとの混入と見られる。土器は遺構範囲内の覆土中の広い範囲に散在する。土師器甕が73点の他、高坏が3点、坏が24点と、これらが大半を占める。須恵器は坏が23点、蓋が1点の他、甕が15点と多いのが特徴的である。この他に縄文土器が4点、弥生土器7点、近世の焙烙1点が出土した。甕1は破片が北辺のカマド左袖周辺に散在する。カマドの西側の壁際の床面直上から土師器坏(1)が2片に割れた状態で出土した。

所属時期 出土土器は7世紀前半～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

337号住居跡(第115～117図、図版150・151)

グリッド 94・95QQQ・RRR 平面形態 方形?

規 模 東西697×南北—×20cm

主軸方向 N26.5° W 構築回数 1回

検出状況 調査区東端の、338号住居跡の南東側に位置する。遺構の北半は調査範囲外に至る。遺構の中央部を南北方向に近世の溝(352号溝)が走り、これによって床面の一部と貯蔵穴の上部が削られている。主柱穴のうち2基と、遺構の西辺と南東隅が遺存しており、これらの配置から遺構の規模とプランを推定した。

P1－73×63×94cm P2－39×38×94cm 貯蔵穴－106×81×59cm

覆 土 覆土は厚さ15cm程度の黒褐色シルトからなり、ローム粒や焼土をわずかに含む。

柱 穴 P1～2が認められた。いずれも深さ90cmを超え、P2は東側の上部を削平されている。柱間はP1－P2間で402cmである。

カマド 貯蔵穴の位置から、遺構北辺に設置されたものと推定されるが、当該範囲は調査範囲外にあたる。

床 貼床は床面の全域に認められたが硬化は顕著ではない。掘方は深さ15cm弱で平坦である。掘方の底面で、遺構西辺に直交するかたちで東西方向に浅い掘り込みが認められた。間仕切りの可能性があるが、床面検出時には確認できなかった。

周 溝 幅15～20cm程度、深さ10cm程度である。南辺の西側は地山まで削平されており、溝の痕跡は確認できなかった。

貯蔵穴 遺構南辺中央部に、張り出して設置されている。南北方向に長い不整形長方形で深さ約

60cm、底面に段があり中央北側がやや窪む。

遺物出土状態 土器 157点と焼成粘土塊1点、石器(剥片)1点、近世以降の陶磁器2点、礫27点が出土した。石器は前時代のものの混入と見られる。土器は土師器甕が41点の他、坏が37点、鉢が1点と、これらが多くを占める。須恵器は坏が3点出土したが、これは後代の混入と見られる。この他には縄文土器が74点とやや多く、弥生土器1点も認められた。土師器と別時代の土器とがほぼ同じ層位に混在している。貯蔵穴内の覆土中層から土師器坏(1)がほぼ完形で出土した他、坏(2・4・6)と鉢(5)など多数の土器が出土した。

所属時期 出土土器は古墳時代後期の6世紀前半を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

338号住居跡(第118・119図、図版152・153)

グリッド 96・97000・PPP 平面形態 方形?

規模 東西658×南北-×25cm

主軸方向 N1.5°W 構築回数 1回

検出状況 調査区東側の、337号住居跡の北西側に位置する。遺構の北側の大部分は調査範囲外に至る。遺構上部と覆土の大半は近代以降の削平により失われ、床面と、遺構の西辺と南辺が遺存しており、これらの配置から遺構の規模とプランを推定した。

P1-47×27×82cm P2-37×33×47cm P3-55×-×28cm

貯蔵穴-118×90×47cm

覆土 覆土は厚さ10cm程度の黒褐色シルトからなり、ローム粒およびロームブロックを含む。

柱穴 P1~3が認められた。このうちP2は床面レベルで確認されたもので、位置と規模から南西側の主柱穴と見られる。P1・P3は掘方に伴うもので、位置づけは不明である。

カマド 貯蔵穴の位置から、遺構北辺に設置されたものと推定されるが、当該範囲は調査範囲外にあたる。

床 貼床は残片が認められたが硬化は顕著ではない。南側は削平が著しく、床面はほとんど残っていない。掘方は深さ15cm弱で平坦である。

周溝 遺構西辺では幅18cm程度、南辺では10cm程度で、深さは10cmに満たない。

貯蔵穴 遺構南辺中央部に、張り出して設置されている。南北方向に長い不整長方形で深さ約50cm、底面は平坦である。

遺物出土状態 土器37点と礫2点、近世以降の陶磁器類2点が出土した。土器は土師器甕が7点の他、坏が9点、高坏が18点と、これらが大半を占める。床面上からは散点的に出土したのにとどまる一方、貯蔵穴内からは坏(1・2・3)と高坏(4)が東側にまとまって出土した。

所属時期 出土土器は古墳時代後期の6世紀前半を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

273号土坑(第120図、図版154)

調査区南東側、99LLLグリッドに位置する。周辺には同時期の遺構は認められない。北東側を団地建物に伴う掘り込みによって破壊されているが、北東方向に長い推定57×47cmの楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面付近に古墳時代後期の土師器甕の破片が散在し、遺構もこの時期のもの

と推定される。

298号土坑・299号土坑（第120図、図版154）

調査区中央南寄り、100BBBグリッドに位置する。周辺は削平が著しいが、古墳時代後期～奈良・平安時代のピットP1812～1814、1819・1820があり、これらと関連する可能性がある。

298号土坑は西側を近代遺構によって破壊されており、南北の残存長は47cm、深さ5cm程度の不整形の掘り込みである。底面付近から土師器の坏（1）が破片の状態で出土した。この坏は6世紀後半～7世紀中葉の所産と見られる。

299号土坑は東西に長軸をもつ79×67cmの不整楕円形を呈し、深さは50cm程度で底部は平坦な円形である。覆土上～中層の西寄りから土師器甕（1）が破片の状態でまとも出土した。この甕は6世紀後半～7世紀中葉の所産と見られる。

298号土坑と299号土坑は遺物の帰属時期もほぼ同じであり、遺構も同時期のものと推定される。

300号土坑（第121図、図版154・155）

調査区中央南寄り、104AAAグリッドに位置し、301号土坑の西側に隣接する。周辺は削平が著しく、また遺構の北側と西側の大半を被服本廠に伴う地下埋設物によって破壊される。遺構は南東隅が直角を呈しており、方形または長方形プランが想定される。南辺は81°東に偏る。覆土中には貼床状の硬化面が認められ、浅い掘り込みが遺構外周を周溝状に巡るとともに、南辺に直交する方向に枝分かかれする。硬化面上の覆土は焼土に富む。掘方には凹凸があり、北側が低くなる。覆土中から古墳時代後期の土師器甕の破片がわずかに認められた。

301号土坑（第121図、図版155・156）

調査区中央南寄り、104BBBグリッドに位置し、300号土坑の東側に隣接する。周辺は削平が著しく、また遺構の北側は近代遺構の掘削によって破壊される。残存部は70cm四方の不整形の掘り込みで、上端は東側が北に向けて広がる。覆土は水平方向に堆積し、最上部はカマドの火床状を呈する。覆土中には土師器甕や坏、高坏の破片が散在し、坏（1・2）と甕（3）は覆土上層～中層に、南から北に流れ込むように分布していた。

焼土範囲・ピット群（第122図、図版156～159）

調査区の複数個所で、ピット群が認められた。柱穴として他のピットや住居跡などの多種の遺構との関わりが推定されるものもある。

P1769は調査区南側、107GGG・HHHグリッドに位置し、301号住居跡（古墳時代後期）の遺構内、カマドの南東側で検出された。南北に長い不整形長方形で、深さは35cmで底面は平坦である。ピット内から古墳時代後期の土器が出土している。

P1769 47×33×35cm

7号焼土範囲は調査区南側、108FFFグリッドに位置する。東西99×南北92cmの不整形形の掘り込みで、底面には3か所の浅い窪みがある。覆土は焼土に富んだ暗褐色土からなり、北東に隣接する302号住居跡（古墳時代後期）や、周辺のピット群との関連が想定される。

P1784・1787・1788・1789・1792・1793は調査区南側、107GGG・108EEE・FFF・GGGに分布する。北東側に隣接する302号住居跡（古墳時代後期）との関わりが想定される。P1789からは同時期の土器が出土した。

P1784 39 × 33 × 51cm P1787 30 × 25 × 44cm P1788 32 × 30 × 25cm

P1789 51 × 40 × 43cm P1792 20 × 18 × 32cm P1793 19 × 19 × 43cm

P1805・1806は調査区南端、110AAAグリッドに分布する。306号住居跡(古墳時代後期)の東
辺に隣接する。いずれも浅い小穴である。

P1805 45 × — × 16cm P1806 32 × — × 10cm

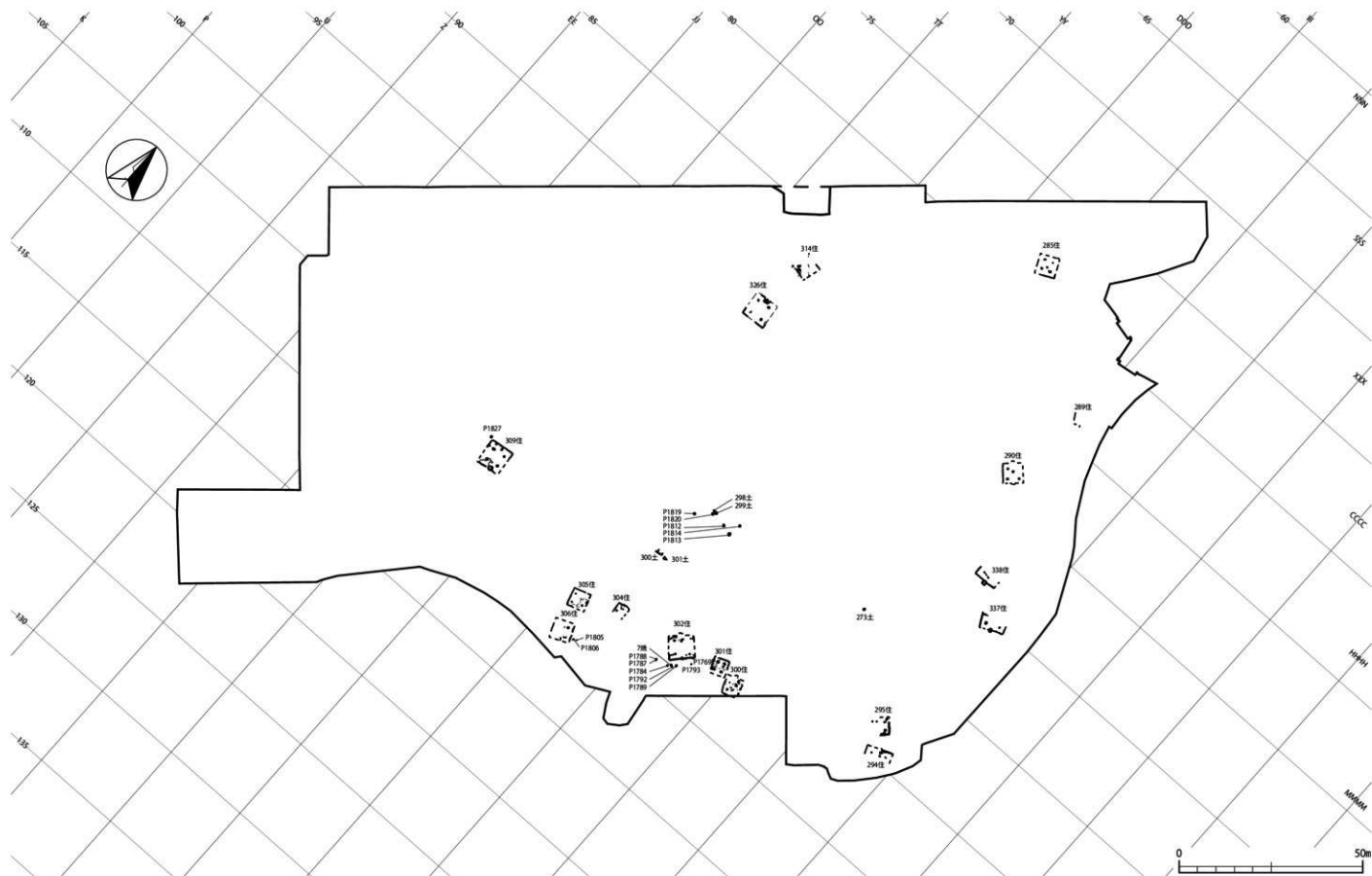
P1812・1813・1814・1819・1820は調査区中央南寄り、100BBB・CCC・DDD・101AAA・
CCCに分布する。298号土坑・299号土坑(古墳時代後期)の周辺にあたり、これらとの関わりが
想定される。

P1812 65 × 45 × 9cm P1813 90 × 70 × 35cm P1814 51 × 40 × 10cm

P1819 56 × 49 × 30cm P1820 65 × 58 × 14cm

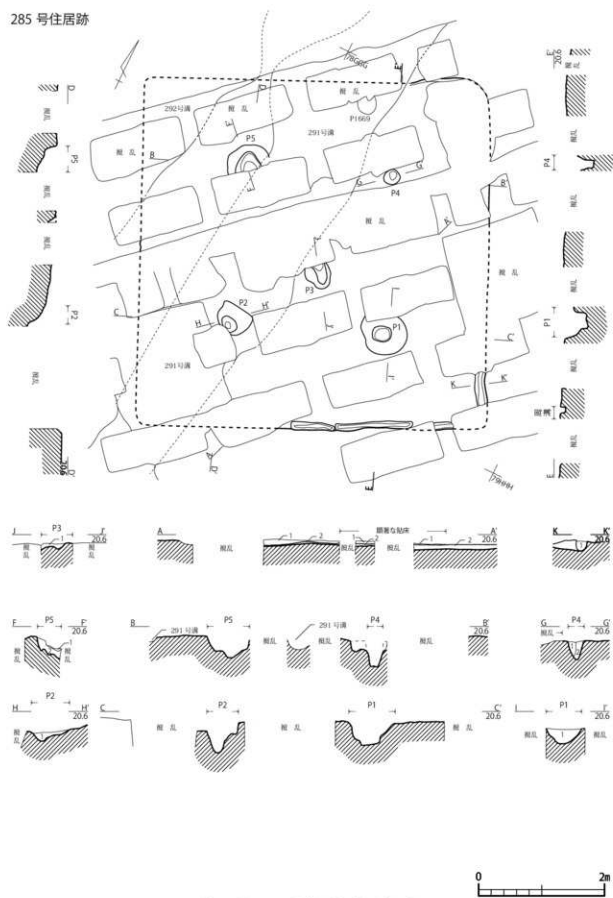
P1827は調査区南側、105PPグリッドに位置し、309号住居跡(古墳時代後期)の北西隅に隣接する。
平面形は円形を呈する、柱穴状のピットである。覆土上層から土師器片が若干出土した。

P1827 52 × 50 × 60cm



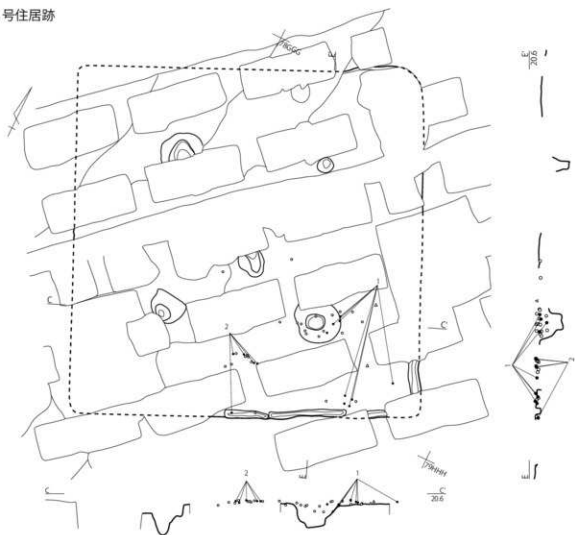
第 87 図 遺合遺跡 時代別遺構配置図 (3) 古墳時代 (1/1,000)

285号住居跡



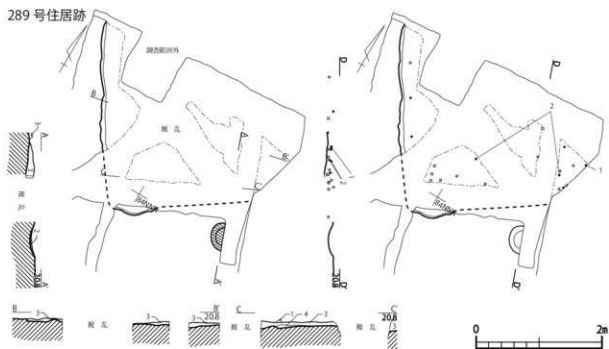
第 88 図 285号住居跡 (1) (1/60)

285号住居跡



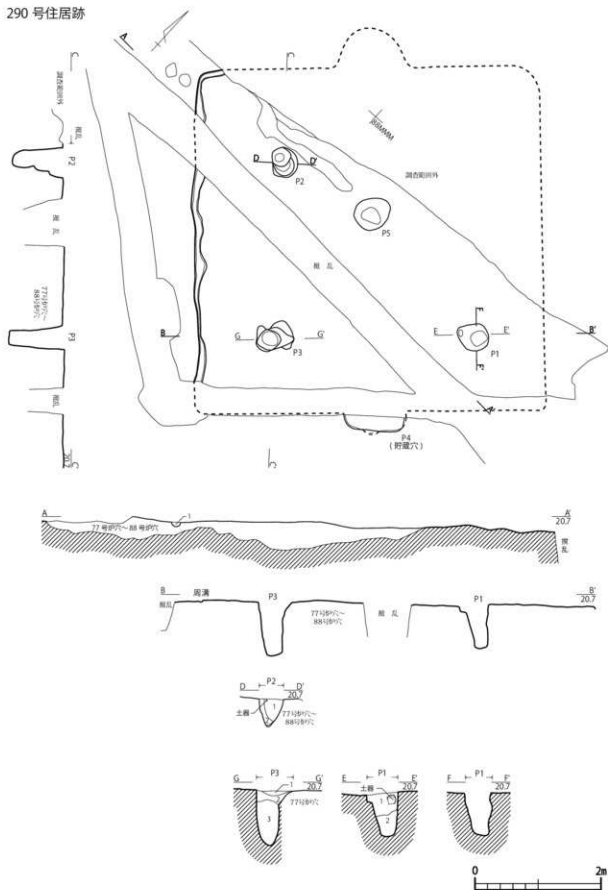
第 89 图 285号住居跡 (2) (1/60)

289号住居跡



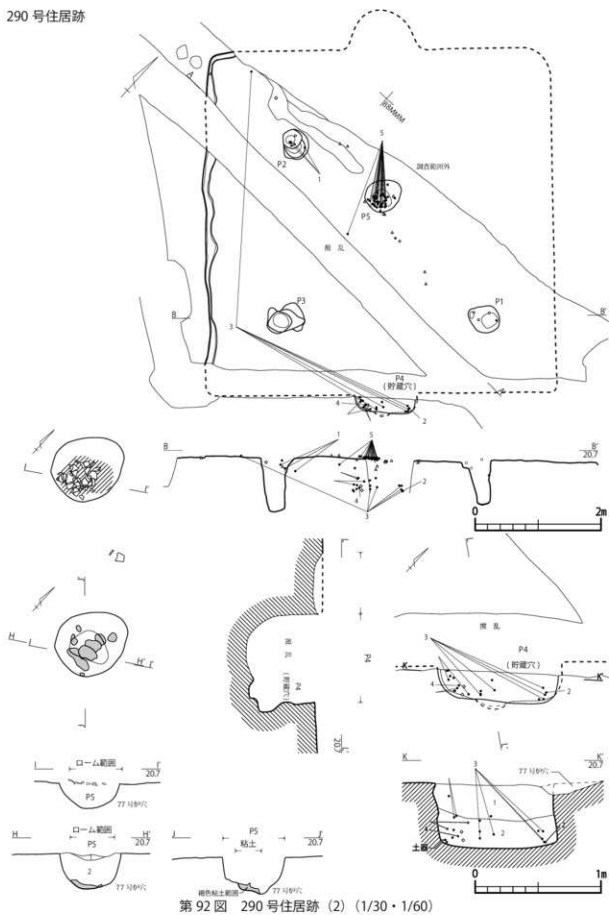
第90図 289号住居跡 (1/60)

290号住居跡



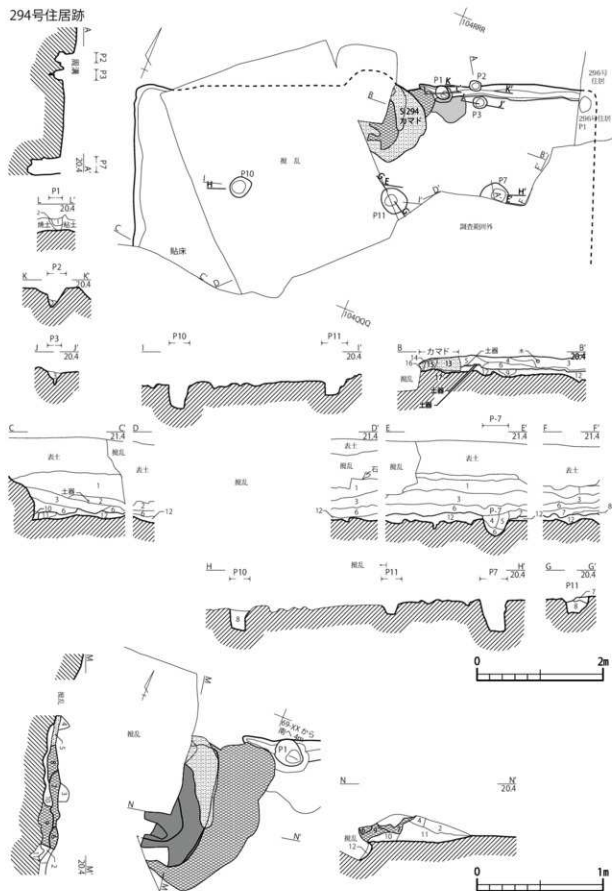
第91图 290号住居跡 (1) (1/60)

290号住居跡



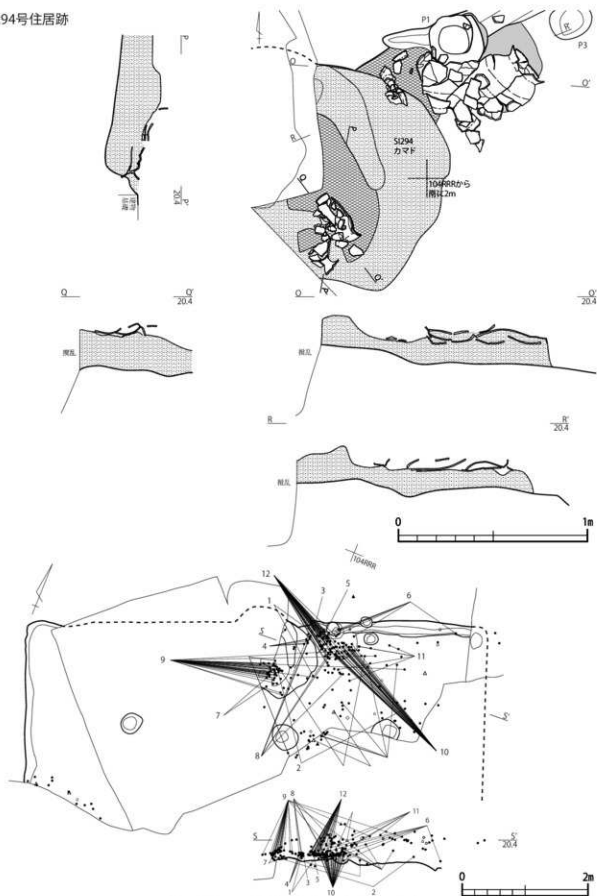
第92図 290号住居跡 (2) (1/30・1/60)

294号住居跡



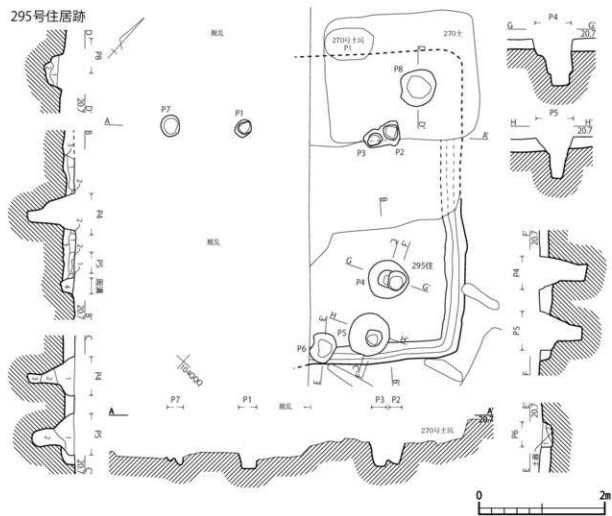
第93図 294号住居跡 (1) (1/30・1/60)

294号住居跡



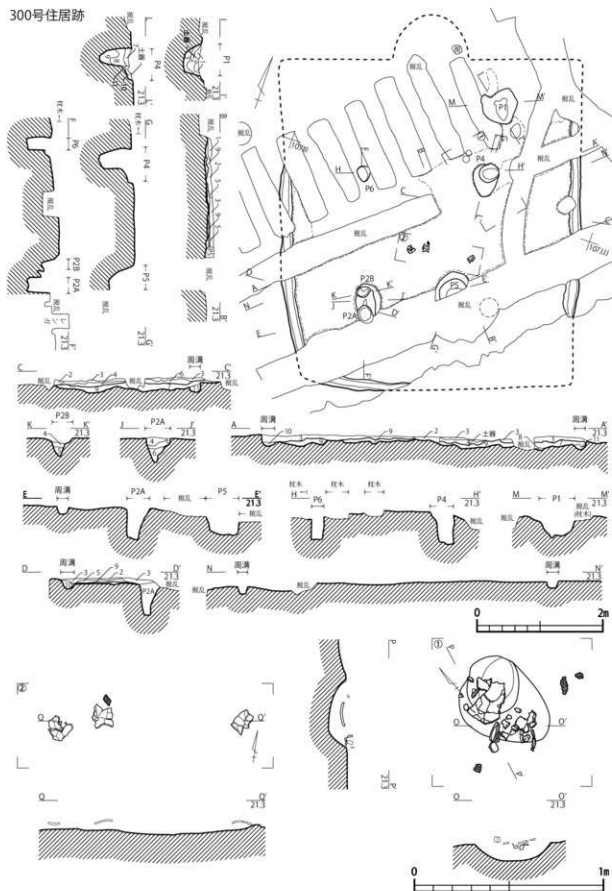
第94図 294号住居跡 (2) (1/20・1/60)

295号住居跡



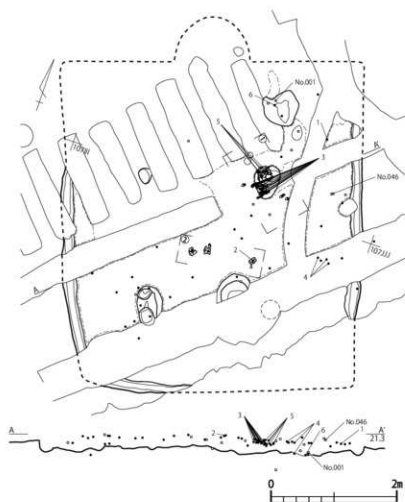
第95图 295号住居跡 (1/60)

300号住居跡



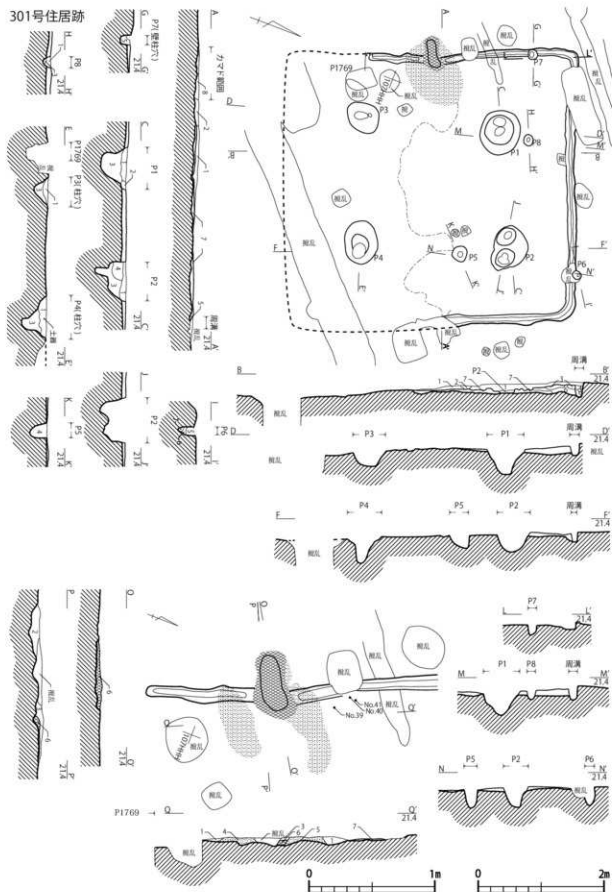
第96図 300号住居跡 (1) (1/20・1/60)

300号住居跡



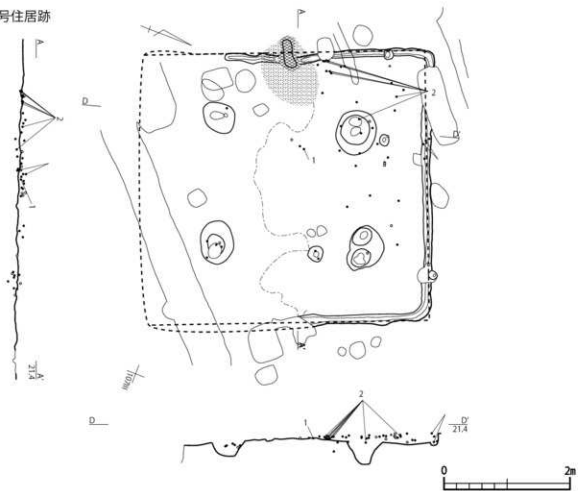
第 97 图 300 号住居跡 (2) (1/60)

301号住居跡



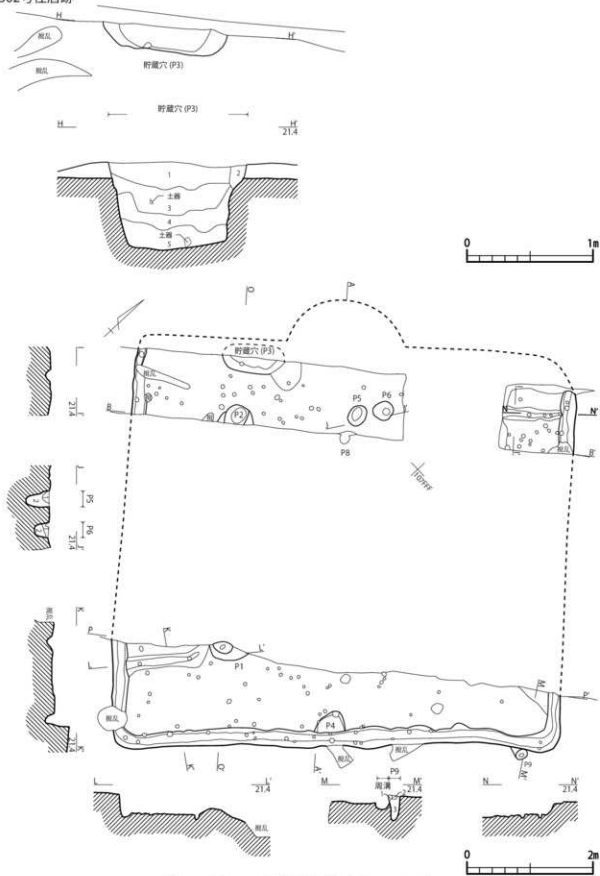
第98図 301号住居跡 (1) (1/30・1/60)

301号住居跡



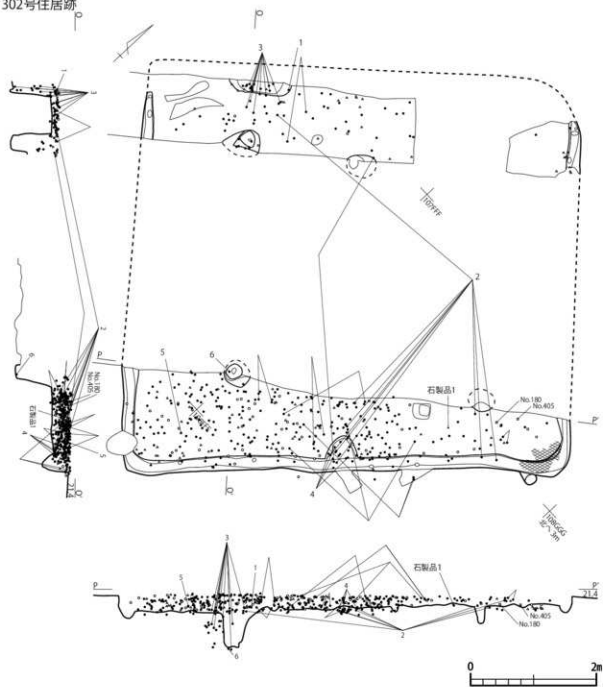
第 99 図 301 号住居跡 (2) (1/60)

302号住居跡



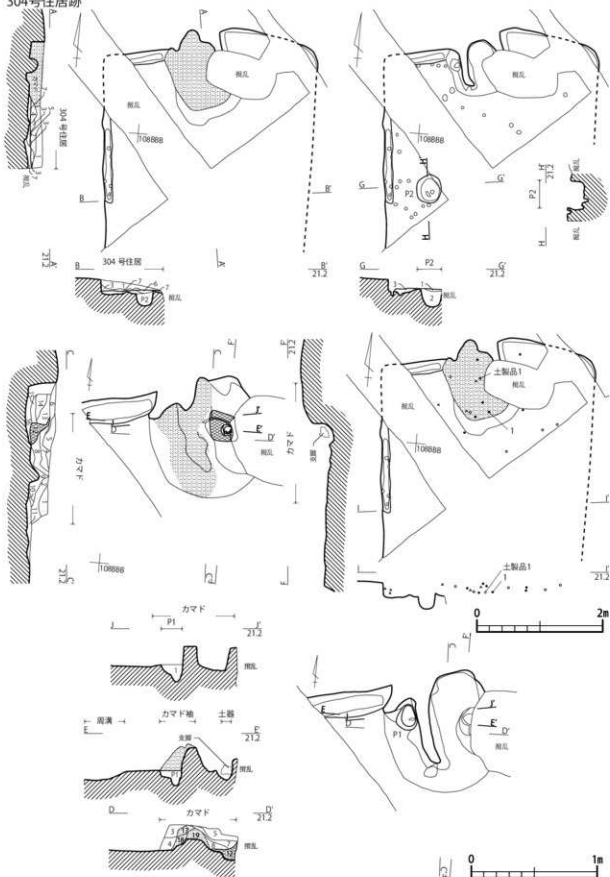
第 101 图 302 号住居跡 (2) (1/30 · 1/60)

302号住居跡



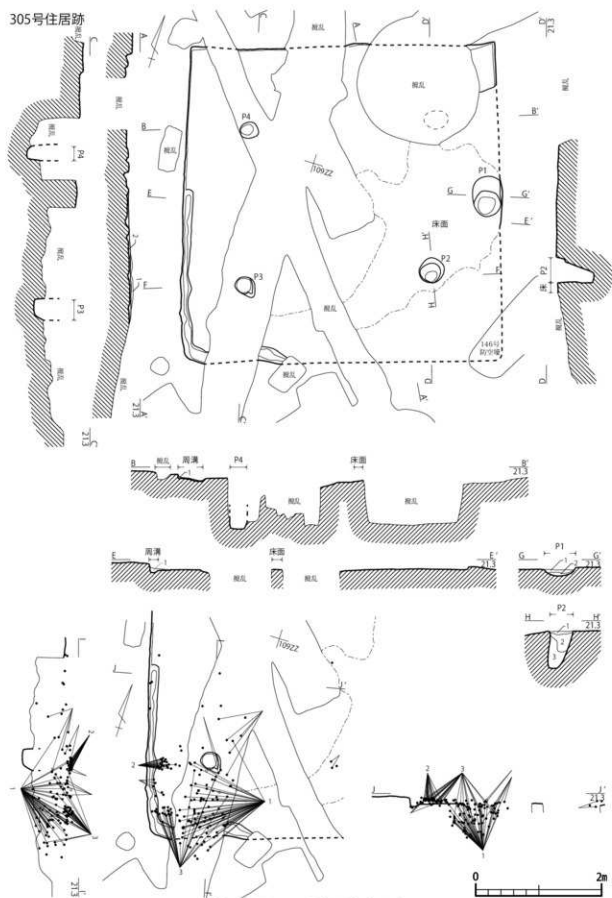
第 102 図 302 号住居跡 (3) (1/60)

304号住居跡



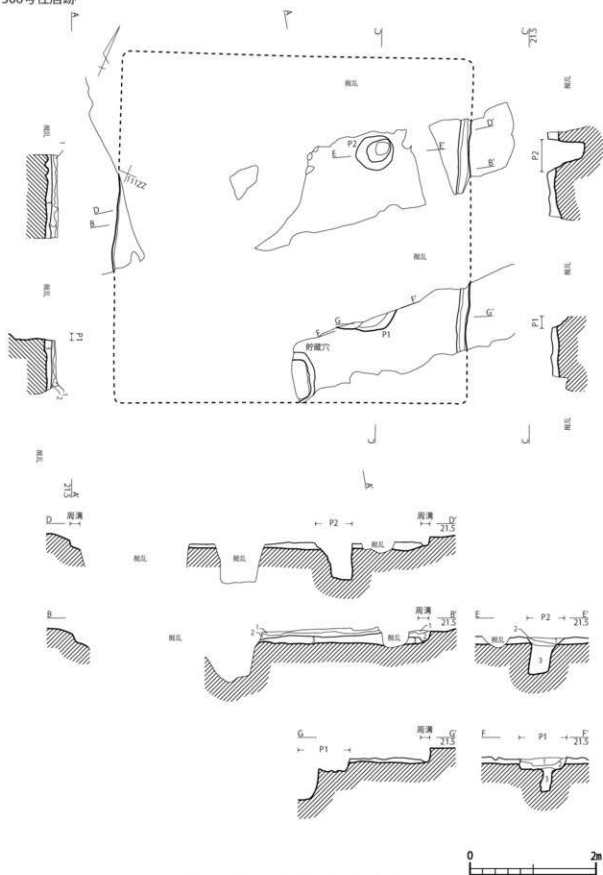
第 103 図 304 号住居跡 (1/30・1/60)

305号住居跡



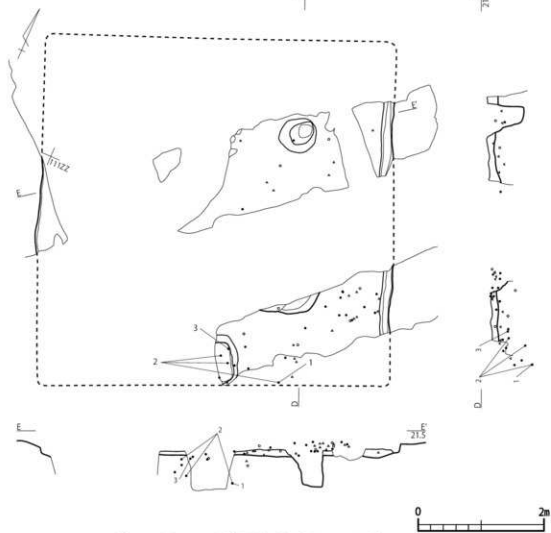
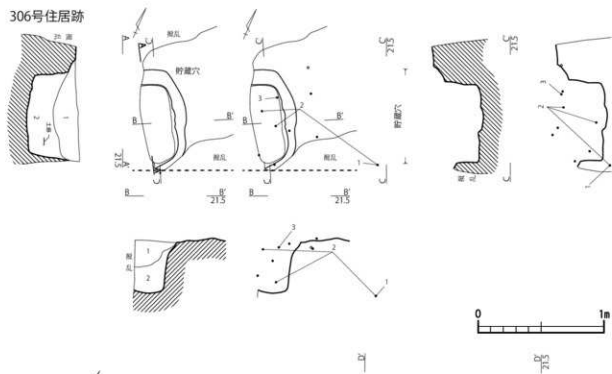
第104図 305号住居跡 (1/60)

306号住居跡



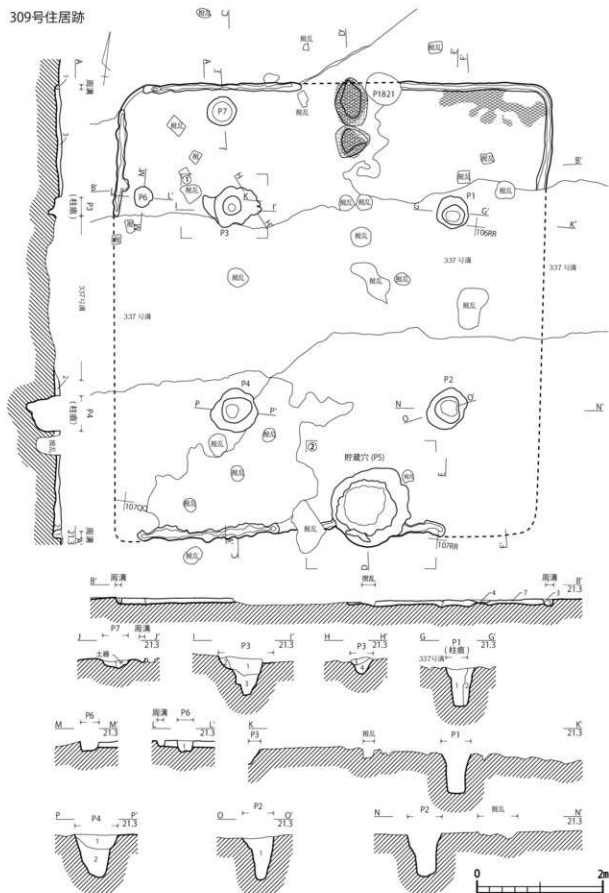
第 105 图 306 号住居跡 (1) (1/60)

306号住居跡



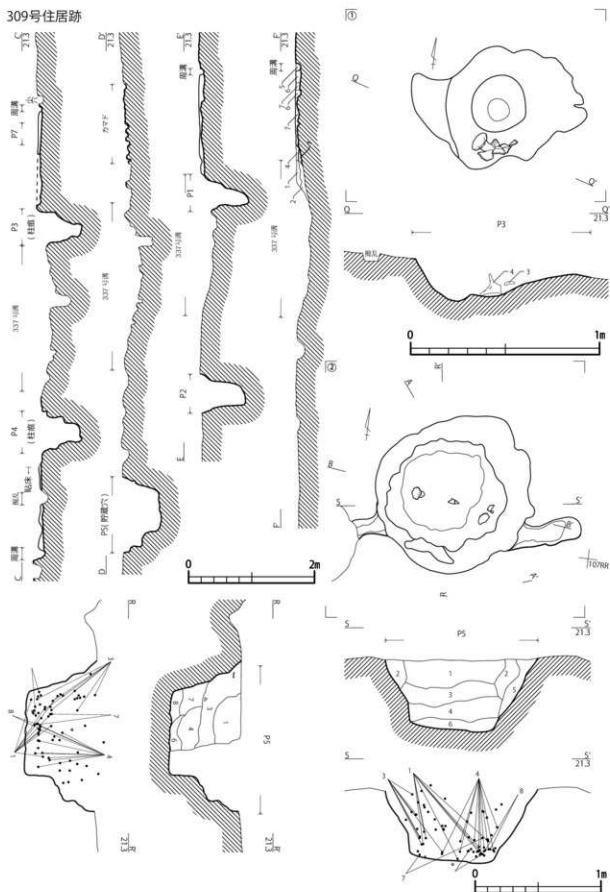
第 106 図 306 号住居跡 (2) (1/30・1/60)

309号住居跡



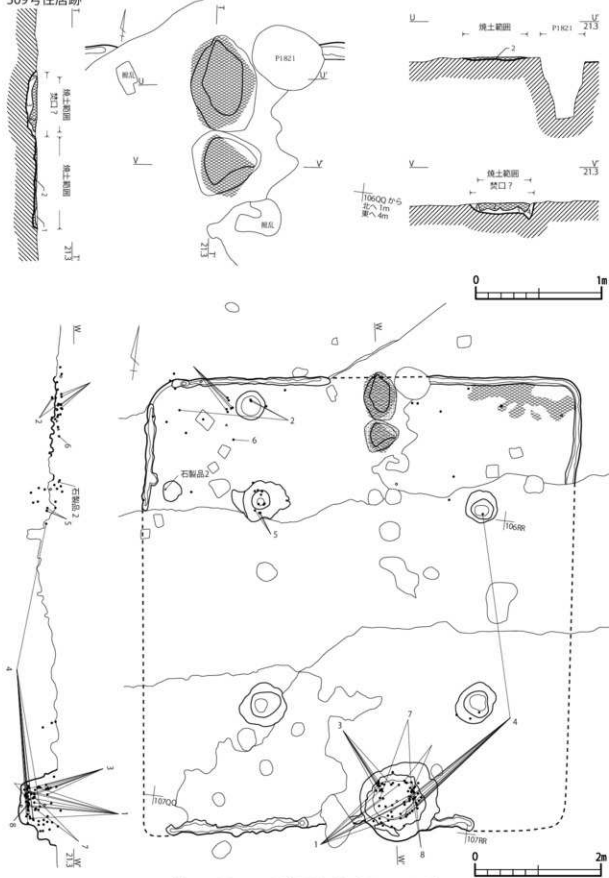
第 107 图 309 号住居跡 (1) (1/60)

309号住居跡



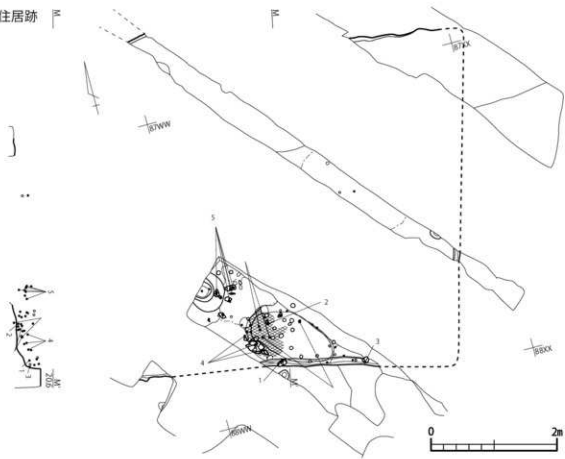
第108図 309号住居跡(2) (1/20・1/30・1/60)

309号住居跡



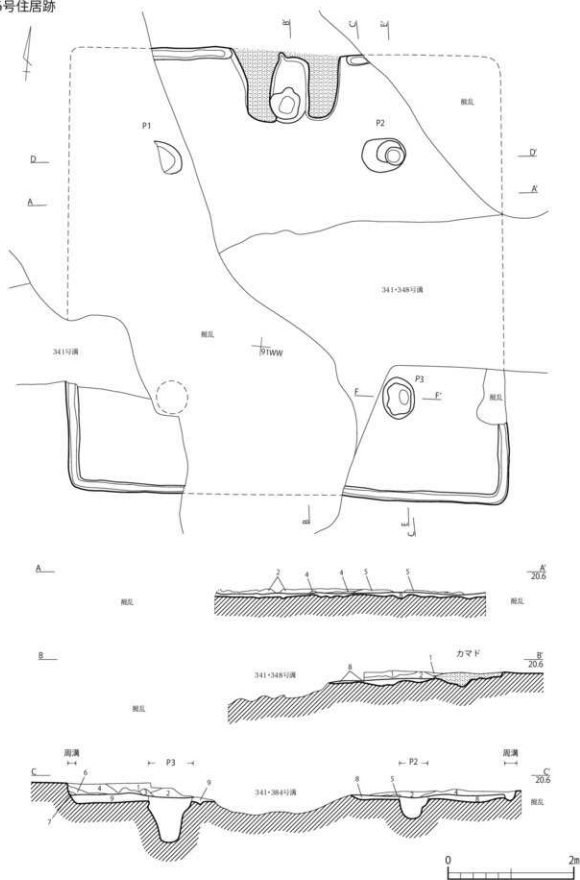
第109図 309号住居跡 (3) (1/30・1/60)

314号住居跡



第111图 314号住居跡(2) (1/60)

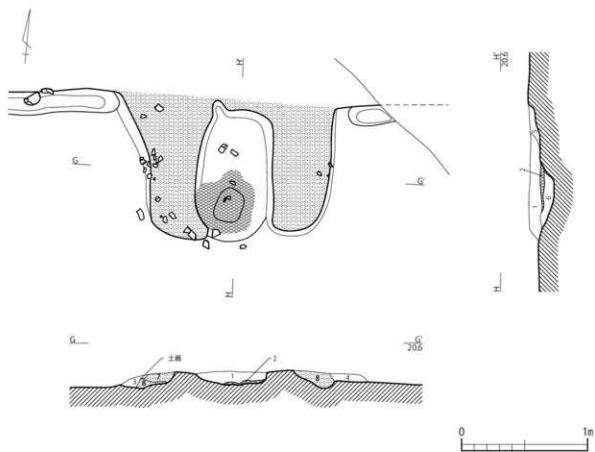
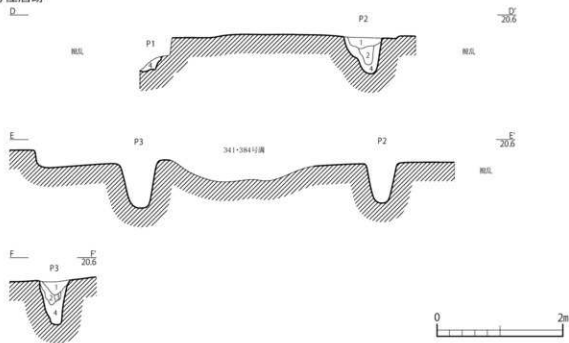
326号住居跡



第 112 図 326 号住居跡 (1) (1/60)

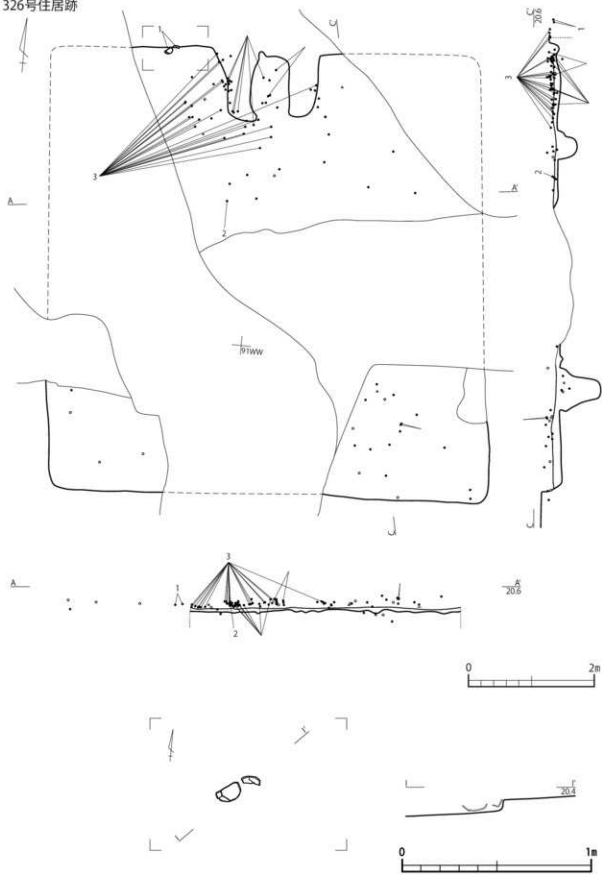
326号住居跡

D—



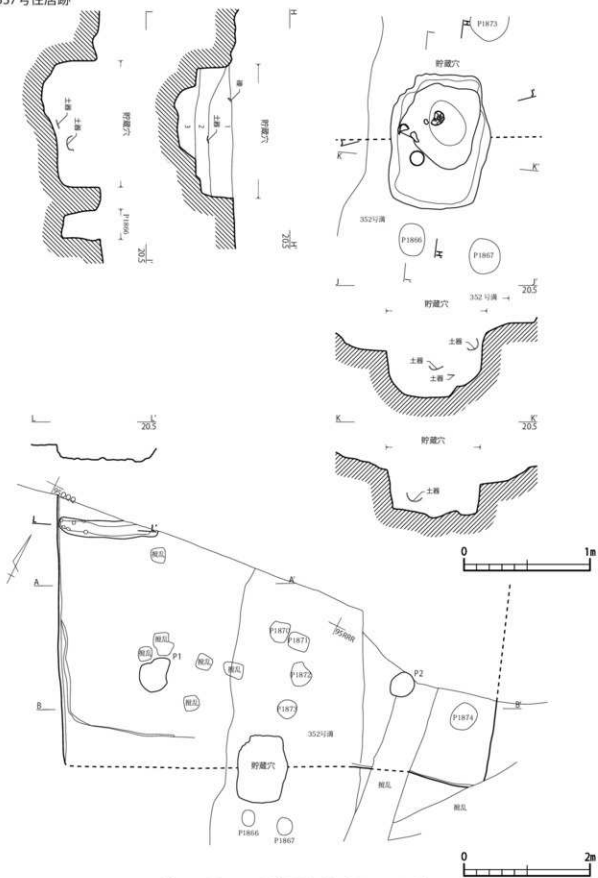
第113图 326号住居跡(2) (1/30·1/60)

326号住居跡



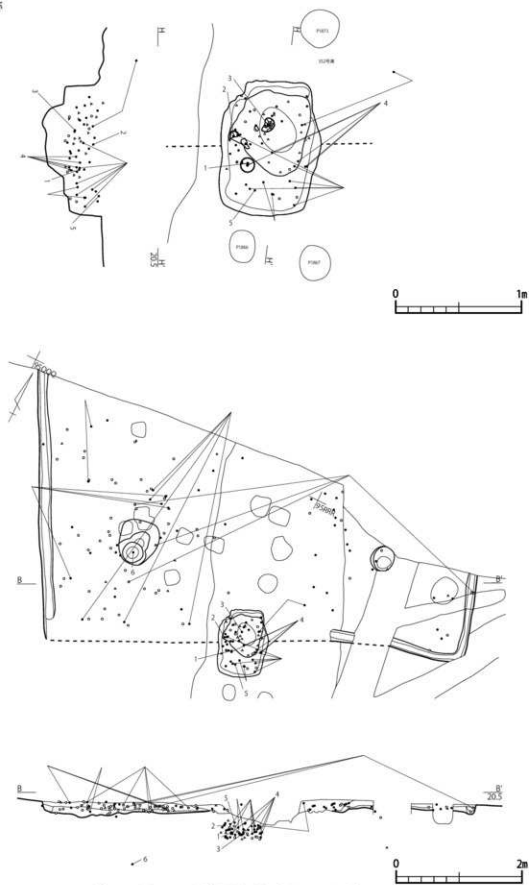
第114図 326号住居跡 (3) (1/20・1/60)

337号住居跡

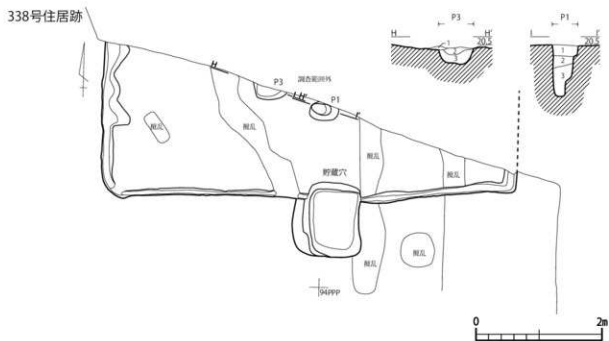


第116図 337号住居跡 (2) (1/30・1/60)

337号住居跡

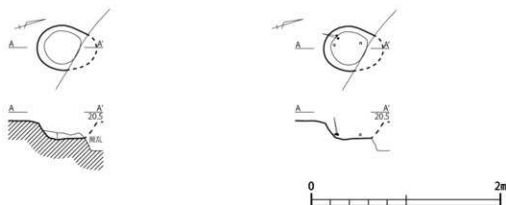


第117图 337号住居跡 (3) (1/30 · 1/60)

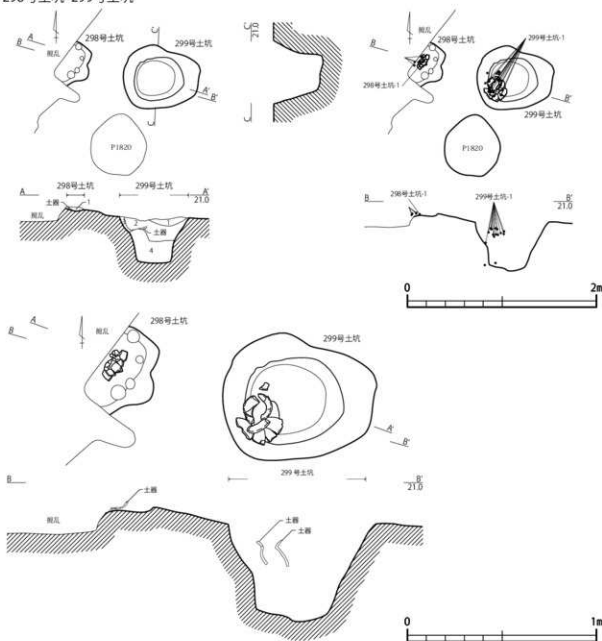


第119图 338号住居跡 (2) (1/60)

273号土坑

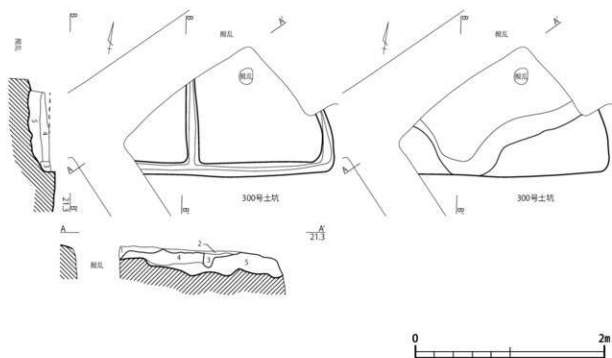


298号土坑・299号土坑

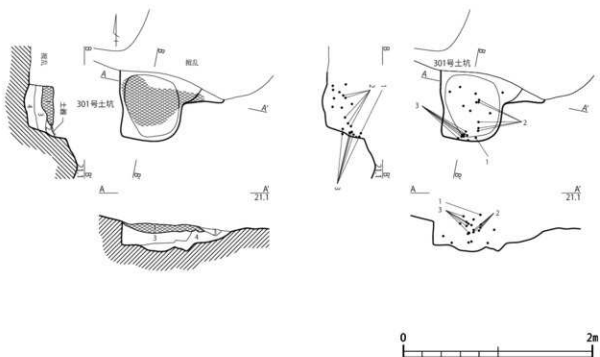


第120图 273号土坑・298号土坑・299号土坑 (1/20・1/40)

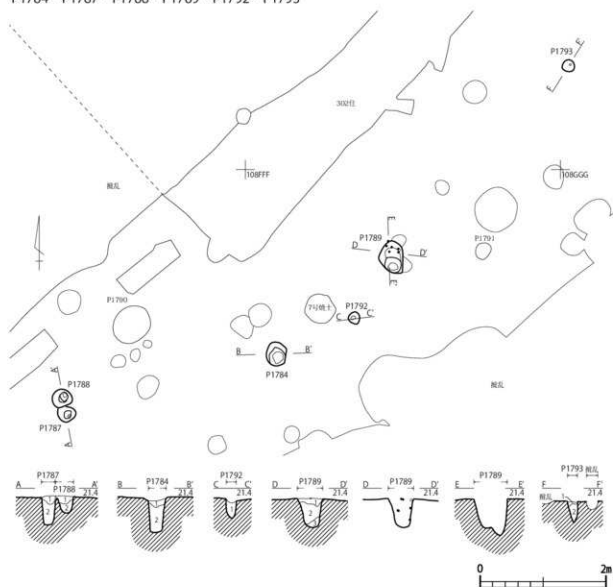
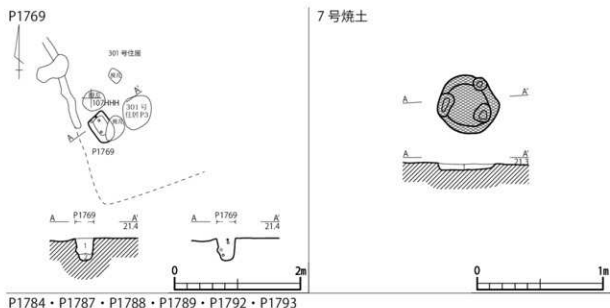
300号土坑



301号土坑

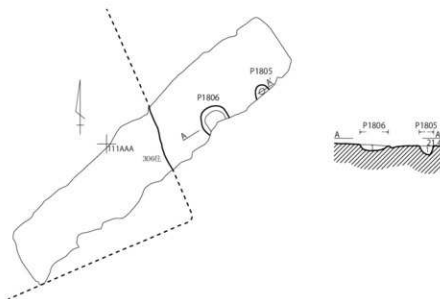


第 121 图 300 号土坑·301 号土坑 (1/40)

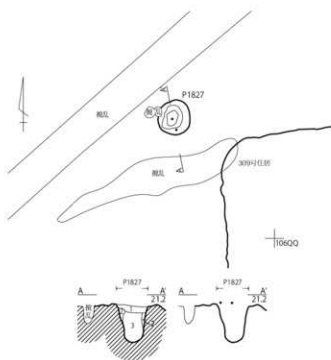


第122図 7号焼土範囲・P1769・P1784・P1787～P1789・P1792・P1793 (1/30・1/60)

P1805・P1806

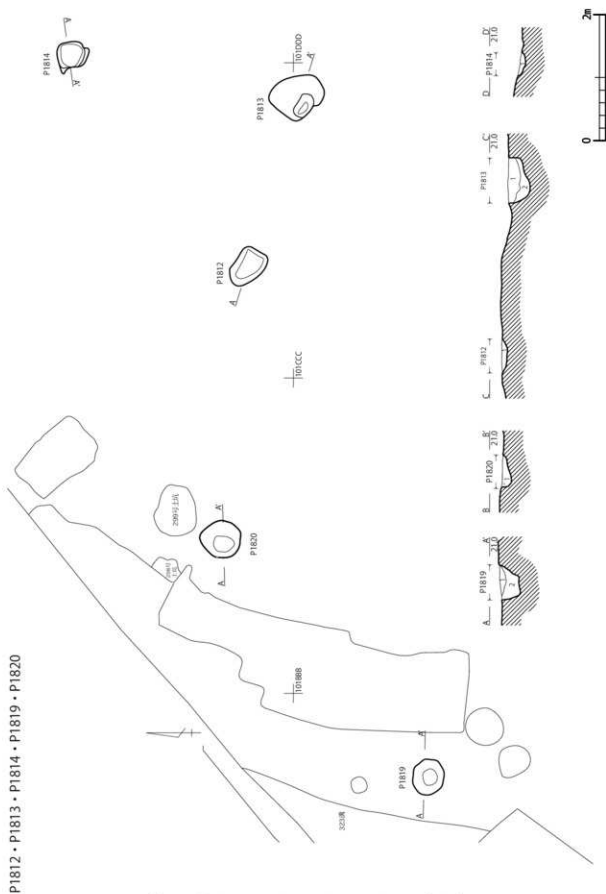


P1827



第 123 図 P1805・P1806・P1827 (1/60)





第 124 図 P1812 ~ P1814・P1819・P1820 (1/60)

2) 遺物

今回の調査で出土した古墳時代後期～平安時代の遺物は、土器 8,566 点（土師器 7,450 点、須恵器 1,116 点）、土製品 28 点（支脚 25 点、土錘 3 点）、石製品 3 点（白玉、管玉、巡方各 1 点）、金属製品 1 点（鉄鏃）である。土器のうち遺構に伴うものは 3,303 点、遺構外のもの 5,263 点である。

285 号住居跡（第 125 図、図版 160）

土師器 30 点、須恵器 1 点が出土した。須恵器環は後世の混入と見られる。これらのうち土師器環 2 個体を図示した。1 は体部は丸く、口縁部は直立する。体部～底部は反時計回り方向のヘラ削りによって成型される。内面には暗文状のミガキが放射状に入る。内面から外面口縁部に漆状の黒色物が付着する。2 は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁と体部の境界は浅い稜をなす。内面には暗文状のミガキが放射状に入る。内面から外面口縁部にかけて漆状の黒色物が付着する。

これらの遺物は 7 世紀前半～中葉の所産と推定される。

289 号住居跡（第 125 図、図版 160）

土師器環 7 点が出土し、これらのうち環 2 点を図示した。1 は比企型環で、口縁部が外傾し、端部は外反する。内面から外面口縁部が赤彩される。2 は北武蔵型環で、丸底の底部から内湾しながら立ち上がる。

これらの遺物は 7 世紀前半～中葉を主体とする。

290 号住居跡（第 125 図、図版 160）

土師器 65 点が出土した。これらのうち環 4 点と甕 1 点を図示した。1 北武蔵型の須恵器模倣環で、浅い丸底の底部から口縁部が直立する。口縁と体部の境界は浅い稜をなす。2・3 は比企型の環で、口縁部は S 字状に屈曲して外反する。4 は口縁の一部が失われており、半球状を呈し、口縁部は赤彩される。底部内面は煤の付着が顕著である。5 は甕で、口縁部は短く外反する。胴部外面は縦方向の刷毛により調整される。

これらの遺物は 6 世紀後半～7 世紀初頭を主体とする。

294 号住居跡（第 126 図、図版 161）

土師器 554 点、須恵器 22 点が出土した。須恵器は混入と見られる。これらのうち 12 個体を図示した。1～6 は環で、このうち 1～5 は丸底で口縁と体部との境に稜をもつ。6 は口縁部が短く S 字状に屈曲する比企型環である。7・8 は高環で、7 は環部の口縁と体部との境に稜をもち、端部に向けてやや外反する。脚部は短く裾が広がる。8 は環部が内湾しつつ立ち上がり、口縁に向けてやや外反する。脚部は短く裾が広がる。9～11 は甕で、9・10 は口縁部がくの字状に外反し、胴部は中位～下位に最大径をもつ。10・11 とも、底部から胴部に向けて内湾しつつ立ち上がる。12 は甕の底～胴部で、やや内湾しつつ胴部は直線的に立ち上がる。

これらの遺物は古墳時代後期の 6 世紀後半を主体とする。

295 号住居跡（第 127 図、図版 162）

土師器 25 点、須恵器が 5 点出土した。土師器は甕および環が主体をなしており、須恵器は後代の混入と見られる。これらのうち土師器の環 1 点を図示した。1 は底部を欠くが浅い丸底とみられ、口縁は内湾しつつ立ち上がる。口縁と体部との境に稜をもつ。体部に不明瞭な赤彩が認められる。

これらの遺物は 7 世紀中葉～後半を主体とする。

300号住居跡(第127図、図版162)

土師器甕43点、壺26点、甗6点、坏4点、鉢1点が出土した。これらのうち6個体を図示した。1は坏で、浅い丸底の体部から口縁部は直立する。2~4は甕で、2は胴部が筒形、口縁は短く外反する。3は胴部がわずかに張り、最大径を中位にもつ。口縁はくの字形をなす。5・6は甗で、5は底部に向かってすばまる。6はやや内湾しつつ直線的に立ち上がり、端部はわずかに内湾する。

これらの遺物は7世紀中葉~後葉を主体とする。

301号住居跡(第127図、図版162)

土師器甕44点、坏6点、壺1点が出土した。この他に混入と見られる須恵器坏が1点出土している。1は坏で、口縁と体部の境に稜をもち、口縁は外反気味に直立する。2は甕の底部で、内湾しつつ立ち上がる。

これらの遺物は7世紀中葉~後葉を主体とする。

302号住居跡(第127図、図版162)

土師器甕が255点、坏が84点と大半を占めた他、甗や高坏、鉢や壺が認められた。これらのうち6点を図示した。

1~2は坏で、1は体部と口縁との境が顕著な稜をなす。漆状の黒色物が付着する。2は丸底で、口縁は直立してわずかに外反する。底部は暗赤褐色を呈する。3・4は甕または鉢の胴~口縁部で、3は口縁部がくの字状に屈曲し、胴部はやや張る。4は口縁が外反し、胴部は筒状を呈する。5は壺の底部で、開き気味に立ち上がる。6は手づくね土器で、内外面に指頭圧痕が残る。

これらの遺物は7世紀前葉~中葉を主体とする。

304号住居跡(第127図、図版162)

土師器坏7点、甕3点が出土した。これらのうち坏1点を図示した。1は口縁部でほぼ垂直に立ち上がる。体部との境は稜をなす。

これらの遺物は古墳時代後期を主体とする。

305号住居跡(第128図、図版163)

土師器甕147点、甗29点、坏16点が出土した。これらのうち3点を図示した。1は坏の底~口縁部で、浅い丸底で口縁部は外傾する。口縁と体部との境は顕著な稜をなす。2は甕の口縁~胴部で、口縁は緩く外反し、胴部は中位に最大径をもつ。3は甗の口縁~底部で、口縁は緩く外反し、胴部は直線的にすばまる。

これらの遺物は古墳時代後期、6世紀後半を主体とする。

306号住居跡(第128図、図版163)

土師器甕16点と高坏7点、坏3点が出土した。これらのうち3点を図示した。いずれも高坏の坏部で、1は直線的に開く。2・3は直線的に開き、端部が外反する。

これらの遺物は古墳時代後期、6世紀前半を主体とする。

309号住居跡(第128図、図版163)

土師器甕41点と高坏14点、坏64点と、この他に須恵器2点が出土した。須恵器は混入と見られる。これらのうち8点を図示した。1~3は坏で、1は口縁がわずかに内湾する。2・4は口縁がやや外傾しつつ立ち上がる。2は底部外面が黒褐色を呈する。3は口縁が外傾する。5~7は高坏で、5は

坏部が屈曲して上位は外傾して屈曲部は稜をなす。口縁端部は大きく開く。脚部は柱状で、裾は大きく開く。6は坏部で緩く外傾する。7は脚部で裾が開く。8は甕の口縁部で外反する。

これらの遺物は古墳時代後期、6世紀前半を主体とする。

314号住居跡（第129図、図版164）

土師器甕25点と甕5点、高坏1点、坏7点が出土した。これらのうち5点を図示した。1・2は坏で、1は丸底で口縁は直立する。口縁と体部の境は稜をなす。2は口縁部で、内径して屈曲し、端部は外反する。3は高坏の脚部で、裾は外反する。4は甕で、口縁部は外反し、胴部は緩やかに張り、中位に最大径をもつ。5は甕で、頸部は外反する。

これらの遺物は古墳時代後期、6世紀前半を主体とする。

326号住居跡（第129図、図版164）

土師器甕73点と高坏3点、坏24点が出土した。これらのうち3点を図示した。1は浅い丸底の坏で、口縁はやや外径しつつ直立する。2は高坏の坏部で、直線的に開く。3は甕で、口縁はくの字状に外反する。胴部は中位に最大径をもつ。

これらの遺物は7世紀前半～中葉を主体とする。

337号住居跡（第129図、図版164）

土師器甕41点と坏37点、鉢1点が出土した。須恵器は坏が3点出土したが、これは後代の混入と見られる。これらのうち6点を図示した。1～4は坏で、1～3はいずれも丸底で口縁がS字状に屈曲する。4は浅い丸底で、口縁は直立して端部がわずかに外反する。5は鉢で、赤彩される。6は小型の甕で、口縁部はくの字状に外反する。

これらの遺物は古墳時代後期の6世紀前半を主体とする。

338号住居跡（第130図、図版165）

土師器甕7点と坏9点、高坏18点が出土した。これらのうち4点を図示した。1～3は坏で、いずれも丸底で口縁はやや外傾しつつ直立する。4は高坏で、坏部は直線的に開き、脚部は裾が開く。

これらの遺物は古墳時代後期の6世紀前半を主体とする。

298号土坑・299号土坑（第130図、図版165）

298号土坑から土師器の坏1点が破片の状態で出土した。口縁部は外傾し、体部との境に緩い稜をなす。この坏は6世紀後半～7世紀前・中葉の所産と見られる。

299号土坑から土師器甕1点が破片の状態でまとも出土し、口縁～胴部に復元された。口縁部は外形し、端部がわずかに開く。胴部は中位に最大径をもつ。

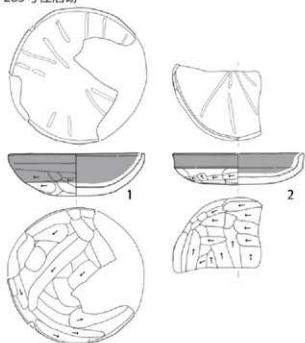
301号土坑（第130図、図版165）

土坑覆土中から土師器甕や坏、高坏の破片が出土した。これらのうち3点を図示した。1・2は坏で、口縁はわずかに外形しつつ立ち上がる。3は甕の胴部で、中位に最大径をもつ。

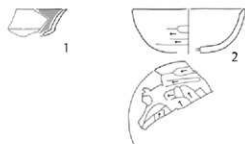
遺構外（第130図、図版165）

遺構外から出土した土器のうち7点を図示した。1～4は高坏の脚部で、1は細長く、裾は開くと見られる。この個体のみ時期が遡り、古墳時代前～中期に比定される。2・3は直線的に開き、裾はやや開く。4は八の字状に開く。5は坏で、口縁は外傾する。6は鉢で、直線的に開く。7は甕で、直線的に開く。

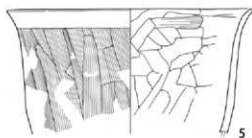
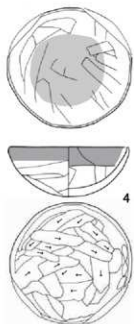
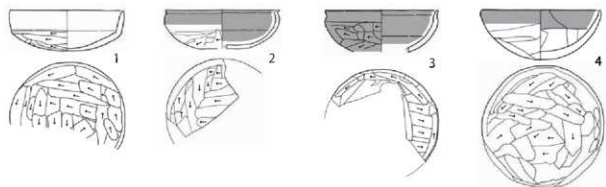
285号住居跡



289号住居跡

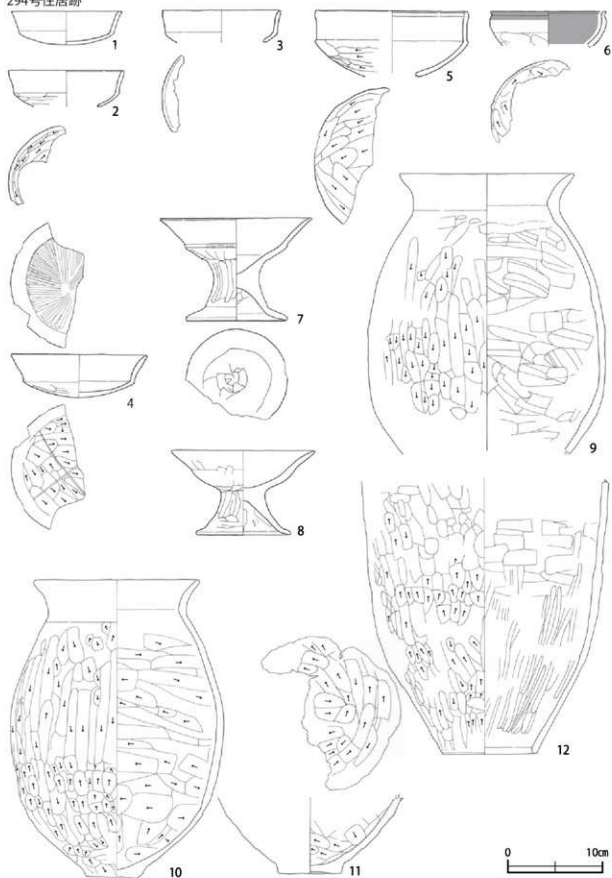


290号住居跡



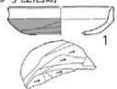
第 125 図 285・289・290 号住居跡出土土器 (1/4)

294号住居跡

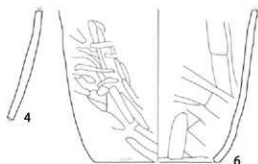
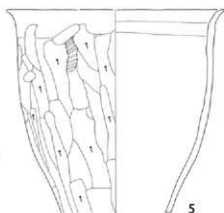
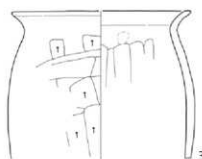
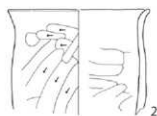
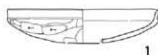


第 126 图 294 号住居跡出土土器 (1/4)

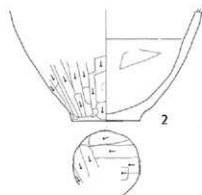
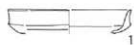
295号住居跡



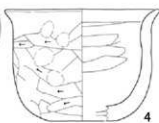
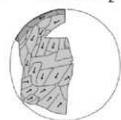
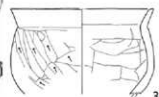
300号住居跡



301号住居跡



302号住居跡

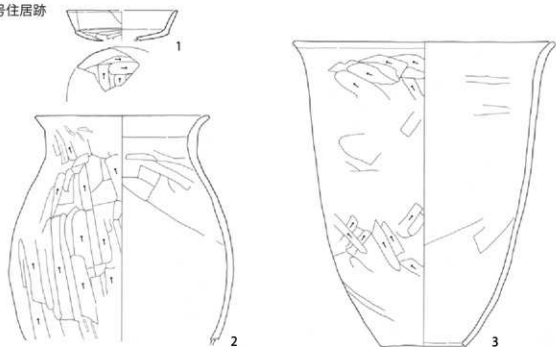


304号住居跡



第 127 図 295・300・301・302・304 号住居跡出土土器 (1/4)

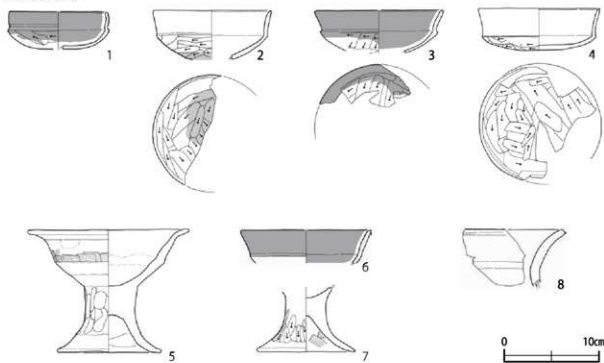
305号住居跡



306号住居跡

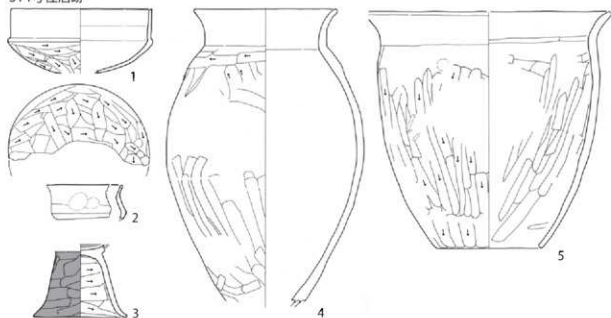


309号住居跡

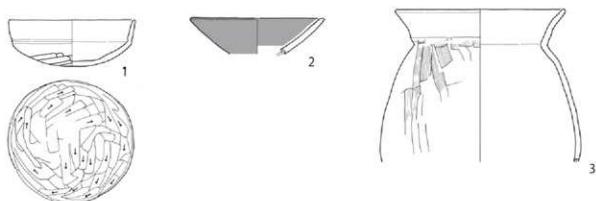


第 128 图 305・306・309号住居跡出土土器 (1/4)

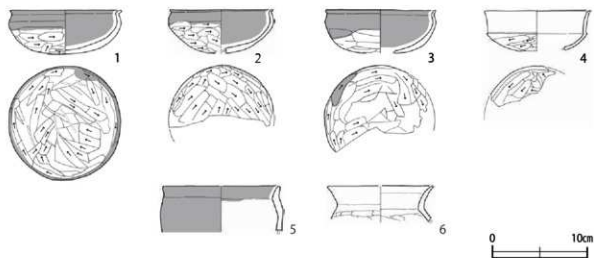
314号住居跡



326号住居跡

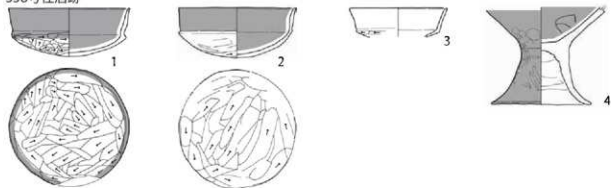


337号住居跡

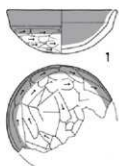


第 129 図 314・326・337号住居跡出土土器 (1/4)

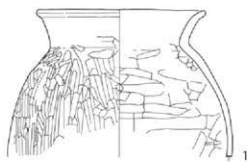
338号住居跡



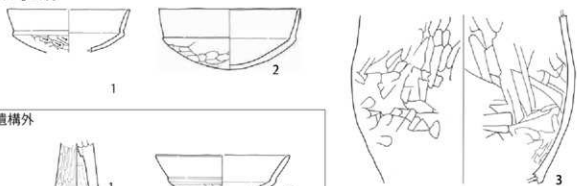
298号土坑



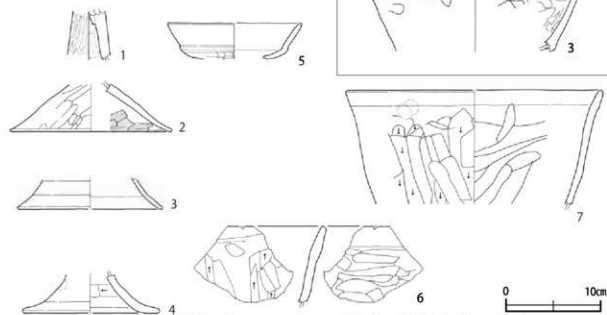
299号土坑



301号土坑



遺構外



第130图 338号住居跡・298・299・301号土坑・遺構外出土土器 (1/4)

5 奈良・平安時代

1) 遺構

今回の調査で検出された奈良・平安時代の遺構は、住居跡 21 軒と、土坑 9 基、ピット 27 基である。

A 住居跡

284 号住居跡 (第 132・133 図、図版 166～168)

グリッド 76GGG・HHH 平面形態 方形

規模 南北推 426 × 東西推 418 × 58cm

主軸方向 N70.5° E 構築回数 1 回

検出状況 調査区北東端に位置し、北側～北西側は調査範囲外に至る。被服本廠 9 号倉庫内にあたり、煉瓦基礎と埋設管によって遺構の大半が北東～南西方向に失われている。西側は近世の溝 (295 号溝) によって破壊されている。東壁とカマド、柱穴 2 基が遺存しており、これらをもとに、東壁の中央にカマドを設置した方形のプランと推定した。

P1 - 96 × - × 74cm P2 - 52 × - × - cm

覆土 住居の中央部では覆土が 58cm 程度遺存する。黒褐色シルトを主体とし、ローム粒や焼土、カマドの構成材と見られる砂が混じる。

柱穴 東側に 2 基 (P1・P2) が確認された。本来はこれらを含む 4 本の支柱穴によって上屋を支えたものと推定される。P1 は底部に段があり、中央部がくぼむ。

カマド 東壁の中央部に設置されている。南東側が損なわれているが、燃焼部と北側の袖は比較的良好に遺存し、これらから推定される規模は東西 118 × 南北残 102cm で、掘り込みは床面から 37cm に達する。焚口部は不明瞭で、中央部は複数の掘り込みにより掘方に凹凸がある。燃焼部はカマドの中央の 58 × 34 × 8cm の範囲に広がり、顕著に被熱している。袖は北側のみ遺存しており、粘土とシルト、砂からなる。覆土はカマドの構成材と見られる堆積物を多く含む。

床 床面はカマド全面～住居中央を中心に遺存するにとどまる。貼床は顕著で、掘方は 20cm 程度である。

周溝 東辺と南東隅で確認された。幅 20 × 深さ 10cm 程度である。

遺物出土状態 土器 119 点、礫 2 点が出土した。土器は土師器甕が 80 点、坏が 3 点、高坏が 1 点、須恵器坏が 7 点と、弥生土器 16 点が覆土の広範囲に散在する。

所属時期 出土土器は 8 世紀中葉～後葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

287 号住居跡 (第 134 図、図版 169～171)

グリッド 79・80HHH・III 平面形態 長方形

規模 東西 366 × 南北 277 × 33cm

主軸方向 N85.5° E 構築回数 1 回

検出状況 調査区北東側に位置する。被服本廠 9 号倉庫南壁の下にあたり、倉庫基礎とそれに付随する埋設管によって遺構中央部と南東側が北東～南西方向に大きく損なわれている。遺構北西側と南辺・東辺の一部、カマドが遺存しており、これらによって遺構の規模が判明し

た。東西方向に長辺をもつ長方形である。

覆 土 住居覆土は大半が削平され、東側のカマド付近で約 20cm、西側で 10cm程度が遺存する。ローム粒の多寡はあるが均質な黒褐色シルトである。

柱 穴 床面の大半が失われており全容は明らかでないが、比較的良好に遺存する北西隅でもピットは検出されなかったため、当初から柱穴はなかった可能性が高い。

カマド 東壁の中央部に設置されている。南東側が損なわれているが、燃焼部と北側の袖は比較的良好に遺存し、これらから推定される規模は東西約 200 × 南北 104cmで、掘り込みは床面から 30cmに達する。焚口部は不明瞭で、燃焼部はカマドの中央の 42 × 40 × 8cmの範囲に広がるが被熱は顕著ではない。袖は粘土とシルト、砂からなる。覆土はカマドの構成材と見られる堆積物を多く含む。

床 床面は北西隅とカマド周辺を中心にわずかに遺存するにとどまる。貼床は顕著で、掘方は 5 ~ 10cm程度である。

周 溝 北西隅と南辺で確認された。幅 20 × 深さ 10cm程度である。

遺物出土状態 土器 58 点、礫 2 点と、近代のレンガ片 2 点が出土した。土器は平安時代の甕が 52 点と大半を占め、弥生土器 3 点、縄文土器 3 点が混在する。甕 (1) は口縁~胴部、(2) は口縁部で、カマドの覆土の上~中層に散在しており、カマドに伴うものと見られる。

所属時期 出土土器は 9 世紀代を主体とする。遺構もこの時期のものとして推定される。

296 号住居跡 (第 135 図、図版 172)

グリッド 103・104RRR 平面形態 長方形

規 模 東西 366 × 南北 277 × 50cm

主軸方向 N5°W 構築回数 1 回

検出状況 調査区南東端に位置する。南側は調査範囲外に至る。東側は 308 号溝によって破壊され、西側は 294 号住居跡の上部を破壊する。遺構西辺~北西隅と壁柱穴が遺存しており、これらをもとに遺構の規模を推定した。方形または長方形と見られる。

覆 土 住居覆土は南西側で良好に遺存する他は大半が削平されている。調査範囲南壁で確認された遺構覆土 (2~4 層) は厚さ 50cm で、遺構壁側から中央部に向かって堆積する。

柱 穴 西壁際に壁柱穴 P1~3 が南北方向に並ぶ。いずれも深さ 20cm程度、直径 25 ~ 40cm程度の不整形を呈する浅い掘り込みみである。P5 は P1~3 と覆土が共通するが、柱穴として機能したかは不明である。P7 はこれらのピットより 20cm以上深くまで及んでいるが、覆土が失われており性格は不明である。

カマド 検出されなかった。

床 床面は西側で部分的に検出されたのにとどまる。厚さ 10 ~ 20cm程度で、やや波うつ。

周 溝 調査範囲南壁で住居跡断面に幅 20cm、深さ 14cmの掘り込みが確認されたが、平面的には確認できなかった。

遺物出土状態 土器 239 点と焼成粘土塊 3 点、陶磁器 2 点、礫 3 点、炭化材 4 点が出土した。大半が調査範囲南壁付近からのもので、土器はほとんどが破片で、接合したものはごくわずかである。奈良・平安時代の土師器が 173 点、須恵器が 21 点と主体をなす。

所属時期 出土土器は9世紀中葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

303号住居跡(第136・137図、図版173～175)

グリッド 103・104・105・EEE・FFF 平面形態 長方形

規模 南北推585×東西516×23cm

主軸方向 N2°E 構築回数 1回

検出状況 調査区中央南側に位置する。北東-南西方向に近世の322号溝が走り、これにより遺構北側のカマド付近から南西側にかけて削られている。遺構の東辺から南辺にかけて地下埋設物によって大きく失われる。4基の主柱穴と壁面・周溝の一部、カマドが遺存しており、これらをもとに、南北方向に長い、北壁側にカマドを設置した長方形のプランと判明した。
P1-58×48×88cm P2-75×42×67cm
P3-70×43×97cm P5-90×74×92cm

覆土 ローム粒や焼土粒、炭化物を含む黒褐色土が14～20cm程度の厚さで堆積する。近世の溝によってカマド構成材が剝削され、覆土の広範囲に焼土粒や粘土が混入する。

柱穴 南側のP1・P2は地下埋設物により上部が失われ、下端付近のみ残存する。いずれも覆土に柱の抜き取りの痕跡が認められた。柱間はP1-P2間で222cm、P2-P3間で280cm、P3-P5間で240cm、P1-P5間で262cmと、東西方向に對し南北方向が長い。

カマド 遺構北壁の中央部に設置されている。南北178cm、東西約90cm、深さ35cmの長楕円形の掘方で、覆土は近世の322号溝によって攪乱された二次堆積が主体となる。袖や燃焼部は検出されなかった。

床 床面は不明瞭で、掘方覆土は20cm程度の厚さである。掘方は凹凸に富み、壁際がくぼんで中央部が盛り上がる。掘方の確認時にP4とP6～10を検出した。このうちP8～10は遺構の東辺に沿って配列するが、上部を床面に覆われており、壁柱穴とは考え難い。遺物もほとんどが床面上から出土しており、掘方の覆土中にはごく少ないため、作り替えの可能性は低い。

周溝 遺構の西・東・南辺と北東隅で断片的に確認された。幅20～25cm、深さ15cm程度である。

遺物出土状態 土器237点と礫5点が出土した。土器は奈良・平安時代の土師器甕が149点、坏が23点、鉢が4点、須恵器坏が49点、蓋が4点、埴が1点で、これらが主体をなす。床面が遺存する北西部、北東隅、南東部のいずれも床面付近に散在し、北西部から土師器坏(7)が、北東隅から須恵器坏(2・3・6)と埴(5)、土師器坏(16)と鉢(9)が、南東部から須恵器坏(4・8)と土師器坏(12・14)が出土している。

所属時期 出土土器には年代幅があるが、奈良・平安時代を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

307号住居跡(第138図、図版176～178)

グリッド 108WW 平面形態 方形

規模 東西285×南北283×15cm

主軸方向 N6.5°E 構築回数 1回

検出状況 調査区中央南側に位置する。近代以降の掘り込みにより遺構中央部と北東隅が失われてい

る。北西隅の周溝は近代の296号土坑により破壊される。これら以外の周溝はほぼ全周しており、北壁側にカマドを設置した方形で小型の住居跡と判明した。

P1 - 70 × 52 × 27cm P2 - 42 × 30 × 32cm P3 - 37 × 33 × 16cm
P4 - 22 × 20 × 10cm P5 - 45 × 35 × 43cm P6 - 36 × 22 × 24cm

覆土 住居の床面付近まで削平が及んでおり、覆土はほとんど残っていない。

柱穴 複数のピットが認められたが、平面・断面形や規模は規模は様でなく、また柱痕と見られる覆土や、底面平坦部の硬化が認められず、柱穴として機能したかは不明である。

カマド 遺構北壁の中央東寄りに設置されている。上部は地山の高さまで削平されており、残存部は南北115 × 東西86cm、深さ26cmである。燃焼部は中央北東寄りにわずかに残り、袖は確認できなかった。掘方は両袖側をやや掘り窪めている。

床 床面は全体に貼床がなされている。掘方は平坦で、覆土は15cm程度の厚さである。

周溝 周溝はカマド部分を除き全周する。幅10 ~ 18cm、深さ8cm程度である。

遺物出土状態 土器8点と焼成粘土塊1点が出土した。土器は土師器坏や鉢、甕が8点で、弥生土器2点と近世の灯明皿1点が混入する。いずれも小片で床面付近に散在する。

所属時期 出土土器は奈良・平安時代を主体とする。遺構もこの時期のものとして推定される。

308号住居跡(第139・140図、図版178 ~ 180)

グリッド 102WW・103・104WW・XX 平面形態 方形

規模 南北580 × 東西532 × 20cm

主軸方向 N1°E 構築回数 2回?

検出状況 調査区中央南側に位置する。団地建物に伴う地下埋設物により遺構の大半が失われている。北西・北東・南東隅と柱穴3基の位置関係から、方形の住居跡と判明した。

P1 - 79 × 45 × 54cm P2 - 68 × 36 × 34cm P3 - 63 × 40 × 23cm
P4 - 25 × 20 × 28cm P5 - 23 × 19 × 51cm

覆土 住居の床面付近まで削平が及んでおり、覆土はほとんど残っていない。

柱穴 P1・P2・P3が、南北・東西方向に配列する。P1とP3は上部を地下埋設物によって失われており、本来はP2と同程度の規模であったものと推定される。対応する北西側の範囲は地下埋設物によって失われており、これらが主柱穴をなしていたものと見られる。P1・P2・P3のいずれも、東西方向に2つの円を重ねた平面形をなしており、底面も東西に段差がある。柱の立て替えがおこなわれたものと推定されるが、柱穴の覆土は失われており、新旧は不明である。柱間はP1の西側とP2の東側の間で855cm、P1の東側とP2の西側の間で652cm、P2の東側とP3の東側の間で745cm、P2の西側とP3の西側の間で780cmである。

カマド 遺構の大半が失われており、カマドは検出されなかったが、住居の掘方覆土に粘土や焼土、炭化物が含まれることから、その存在が示唆される。

床 遺構南辺中央部に貼床が顕著に認められた。この範囲の掘方に、南北方向にピット(P4・P5)が配列しているのが確認された。このうち南側のP5は51cmの深さで、円筒形に近い断面形をなしていることから、柱穴として機能した可能性がある。上部を掘方覆土に覆

われていることから、建て替え前のものであろうか。

周 溝 南西隅と北東隅で確認された。幅 15cm 程度、深さ 8cm 程度である。

遺物出土状態 土器 57 点と炭化物 8 点が確認された。土器は土師器甕が 36 点、坏が 12 点、台付甕が 3 点、鉢が 2 点と主体をなし、須恵器は坏が 4 点でこれに次ぐ。南辺中央の掘方内から甕 (1) が、北東の周溝付近の覆土中から須恵器の坏 (1) が出土している。

所属時期 出土土器は 9 世紀中葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

310 号住居跡 (第 141 図、図版 180～183)

グリッド 102・103UU・VV 平面形態 方形?

規模 東西 435 × 南北残 248 × 30cm

主軸方向 N0° 構築回数 1 回

検出状況 調査区中央南側に位置する。311 号住居跡の南側に隣接し、主軸は南北軸に揃う。北側と南西隅、南東側を近世の 335 号溝と近代の塹壕跡、被服本廠建物基礎により破壊されている。東西と南辺に残存する周溝の位置関係から、方形の住居跡と判明した。

P1 - 37 × 35 × 22cm P2 - 29 × 25 × 16cm P3 - 20 × 20 × 29cm

P4 - 30 × 25 × 27cm

覆土 覆土は均質な黒褐色シルトで、ローム粒・ロームブロックや焼土を含む。

柱 穴 床面検出時に P1・P2 が確認されたが、いずれも配置は不規則で浅く、底面が掘方の底部と大きくは異ならない。柱穴として機能したかは不明である。

カマド 遺構北側の大半が失われており、カマドは検出されなかった。

床 検出された床面は硬化しており、明瞭な貼床が認められた。掘方は平坦で、厚さ 20cm 程度である。掘方検出時に P3・P4 をはじめとした小規模な円形の掘り込みを複数確認した。これらは北西-南東方向と北東-南西方向に配列するようにも見えるが、いずれも住居の軸とは一致せず、位置づけは不明である。

周 溝 南西隅と北東隅で確認された。幅 20cm 程度、深さ 15cm 程度である。

遺物出土状態 土器 93 点と焼成粘土塊 1 点、礫 5 点が確認された。土器は土師器甕が 51 点、坏が 20 点、台付甕・高坏が 1 点と、須恵器坏 18 点が主体となる。この他に縄文土器 2 点が出土している。これらの遺物は床面上の広範囲に散在する。P1 の南東の床面直上から完形の須恵器の坏 (2) が正位で出土した。

所属時期 出土土器は 9 世紀前葉～中葉を主体とする。遺構もこの時期のものと推定される。

311 号住居跡 (第 142 図、図版 182～184)

グリッド 101・102UU・VV 平面形態 方形

規模 東西 384 × 南北残 327 × 20cm

主軸方向 N7° E 構築回数 1 回

検出状況 調査区中央南側に位置する。310 号住居の北側に隣接し、主軸は南北軸にほぼ揃う。南壁の東側が近世の 335 号溝に部分的に破壊される。周溝とカマドの位置関係から、方形の住居跡のプランが判明した。

P1 - 35 × 35 × 8cm P2 - 36 × 34 × 10cm P3 - 36 × 33 × 25cm

	P4 - 33 × 27 × 13cm	P5 - 37 × 36 × 17cm	P6 - 24 × 20 × 24cm
	P7 - 18 × 16 × 22cm	P8 - 33 × 32 × 19cm	P9 - 40 × 33 × 8cm
覆土	覆土は均質な暗褐色・黒褐色シルトで、ローム粒や粘土を含む。		
柱穴	P1～P9が検出された。南東側のP3と南壁中央のP6はやや深いが、これら以外は浅く、底面は掘方底部とほとんど変わらない。柱穴として機能したかは不明である。		
カマド	遺構北辺の中央に設置されている。南北109×東西100cmで、焚口は東西47×南北25cm、燃烧部は東西39×南北22cmの範囲に広がる。両軸は床面付近が残存している。北壁のカマド東側には周溝は巡っていない。		
床	検出された床面は硬化しており、明瞭な貼床が認められた。掘方は平坦で、厚さ20cm程度である。		
周溝	カマド範囲とその東側の北壁を除き全周する。幅15～20cm程度、深さ15cm程度である。		
遺物出土状態	土器82点と土製支脚2点、礫6点が確認された。土器は土師器甕が50点、坏が9点と、須恵器坏18点が主体となる。この他に縄文土器4点と弥生土器1点が出土している。これらの遺物は遺構内の広範囲に散在する。土師器の甕(5)はカマドの左軸上に平面的に散らばるのに加え、遺構東側～南側の広範囲に散っていた。須恵器の坏(2)は遺構の東側～西側、南側の破片が接合する。		
所属時期	出土土器は9世紀前葉を主体とする。南側の310号住居と隣接し、軸方向も揃うため、遺構も同時期のものと推定される。		
	317号住居跡(第144図、図版184～186)		
グリッド	89RR	平面形態 方形?	
規模	東西推定491×南北推371×13cm		
主軸方向	N10°W	構築回数 1回	
検出状況	調査区中央北側に位置する。団地建物基礎の直下に位置し、西側の大半はこれによって失われている。320号住居跡の北側に位置し、主軸もほぼ揃う。318号住居跡の南東側に隣接し、北西側の覆土上部は318号住居に破壊される。北壁に設置されたカマドと、南東隅が遺存しており、これをもとに遺構の規模を推定した。		
	P1 - 28 × 23 × 34cm	P4 - 30 × 22 × 45cm	
覆土	覆土は均質な黒褐色土で、ローム粒や焼土粒を含む。		
柱穴	P1とP4が検出された。いずれも周溝沿いに構築されており、壁柱穴として機能した可能性がある。P1はほぼ垂直に立ち上がり、P4は北側に傾いている。		
カマド	遺構北辺に設置されている。上部は318号によって削られており、残存部は南北132×東西99cmで、深さは16cm程度である。軸や燃烧部等の構造は確認できなかった。		
床	検出された床面は硬化しており、明瞭な貼床が認められた。掘方は浅く平坦で、厚さ5cm程度である。		
周溝	南東隅で確認された。幅15cm程度、深さ10cm程度である。		
遺物出土状態	土器38点と土製支脚2点、炭化材5点が確認された。土器は土師器甕が25点、坏		

が2点と、須恵器環1点が主体となる。この他に縄文土器と弥生土器が各1点出土している。これらの遺物は遺構中央から東壁にかけての範囲に散在する。いずれも小破片で、接合しなかった。

所属時期 出土土器は奈良・平安時代を主体とする。北西側の318号住居跡に一部を破壊されていることから、これよりも古い。

318号住居跡(第145～147図、図版186～190)

グリッド 88・89QQ・RR **平面形態** 長方形

規模 東西500×南北390×55cm

主軸方向 N10°W **構築回数** 2回

検出状況 調査区中央北側に位置する。遺構の東側から南側にかけての範囲を団地建物基礎に破壊される。南東側が317号住居跡の、北西側が319号住居跡の、それぞれ上位に位置する。遺構北辺～西辺、南辺の周溝と、周溝主柱穴のうち3基、北辺のカマドが遺存しており、これらによって東西にやや長い長方形のプランが判明した。

P1-55×35×40cm P2-38×33×51cm P3-37×36×49cm

P4-41×38×59cm P5-55×35×40cm P6-25×24×30cm

P7-33×33×8cm P8-23×22×28cm

覆土 覆土は均質な黒褐色シルトで、ローム粒や焼土粒、粘土を含む。

柱穴 P1～8が検出された。このうちP4～8は掘方に伴う。P1～3は主柱穴を構成し、南東側は建物基礎により失われている。柱間はP1～P2間が220cm、P1～P3間が218cmで、両者はほぼ直交する。掘方で確認されたピットのうち、P4とP5は東西軸が住居のそれとほぼ一致し、カマドの左右に位置する。これらは下端の深さも揃い、柱穴として機能した可能性もある。

カマド 遺構北辺に設置されている。比較的良好に遺存しており、両袖を含め東西183cm、南北87cm、深さ55cm。燃焼部は中央に位置し、53×44cmで、厚さ15～20cm程度の層をなす。両袖は地山のローム上に暗褐色シルトや粘土、砂を構成材としてつくられている。

床 2面の硬化面が認められた。上位のものは厚さ5～10cmで、下位のものは厚さ14cm程度で底面には凹凸がある。住居の規模の変更を伴わない小規模な建て替えがおこなわれた可能性がある。掘方は中央に島状の高まりをもつ。

周溝 遺構の西半と、北辺の東側で確認された。幅20～25cm程度、深さ10cm程度である。遺構の南東隅の、317号住居跡の上に位置する範囲では周溝は認められなかった。この部分のみ周溝が不要であったか、あるいは設置することができなかったのであろうか。

遺物出土状態 土器625点と礫5点、近世の陶磁器4点が確認された。土器は土師器甕が492点とほとんどを占め、台付甕が5点、環が7点、壺が1点と、須恵器は環が78点が主体となる。この他に縄文土器が5点と弥生土器が39点出土している。弥生土器は隣接する319号住居跡に由来するものであろう。遺物は遺構覆土の広範囲に散在する。いずれも破片で、原位置を保っていると見られるものはなく、接合するものは少ない。

所属時期 出土土器は9世紀中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

320号住居跡(第148・149図、図版190～193)

グリッド 90・91RR 平面形態 方形?

規模 東西推326×南北-×30cm

主軸方向 N12°W 構築回数 1回

検出状況 調査区中央北側に位置する。317号住居跡の南側に位置し、主軸もほぼ揃う。遺構の東側と南西側を団地建物基礎に、南側を近世の溝(341号溝)に破壊される。遺構西辺～北西隅と、北辺のカマドが遺存しており、これらをもとに遺構のおおよその規模とプランを推定した。

P1-20×19×16cm P2-18×17×42cm P3-45×35×30cm

覆土 覆土は均質な黒褐色土で、ローム粒や焼土粒、炭化物を含む。カマドの南側の約1m四方に焼土・粘土が集中する。

柱穴 P1～3が検出された。このうちP2は西辺の壁際に位置し、壁柱穴と見られる。P1は小規模な浅い掘り込みである。P3はカマドの南北軸に揃うが、遺構の規模から見ると柱穴または梯子穴としては大き過ぎる。

カマド 遺構北辺に設置されている。比較的良好に遺存しており、両袖を含め東西210cm、南北190cm、深さ32cm。両袖は地山のローム上に暗褐色シルトや粘土、砂を構成材としてつくられている。左袖はロームを掘り残して基礎としており、北壁の周溝から25cm程度張り出す。燃焼部は軸方向に長い楕円形を呈し、中央に径10cm程度の小穴が認められる。焼土が中央やや手前の20×11cmの範囲に3cm程度の層をなす。

床 貼床は床面の全体にわたるが、締まりは顕著ではない。掘方は深さ10～20cm程度で、中央に鳥状の高まりをもつ。

周溝 遺構の西辺と、北辺の西側で確認された。カマドの袖の手前で止まり、全周しない。幅15cm程度、深さ10cm程度である。

遺物出土状態 土器227点と焼成粘土塊49点、礫6点、炭化材4点が出土した。土器は土師器甕が208点の他、台付甕が5点、坏が3点と、これらが大半を占める。須恵器は坏が8点の他、甕と瓶が1点ずつ出土した。土師器の甕(8)はカマドの中央部から潰れた状態で出土し、これは原位置を保っているものと見られる。カマドの手前側には土師器甕(6・7)が散在する。カマドの左袖の床面直上から台付甕(5)が出土した。炭化材はほとんどがカマド内から出土したもので、燃料に由来するものと見られる。焼成粘土塊は広範囲に散在する。

所属時期 出土土器は9世紀中葉～後葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

321号住居跡(第150図、図版193～195)

グリッド 90・91NN・OO 平面形態 方形?

規模 南北300×東西-×10cm

主軸方向 N3°E 構築回数 1回

検出状況 調査区中央西寄り北側に位置する。322号住居跡の東側に位置し、南北軸は揃う。遺構の西側を近世の溝(341号溝)に破壊される。遺構北辺と東辺、南辺が遺存しており、

これらをもとに遺構のおおよその規模とプランを推定した。

P1 - 32 × 32 × 15cm P2 - 45 × 25 × 10cm P3 - 32 × 25 × 26cm

P4 - 46 × 42 × 77cm

- 覆土** 覆土は均質な黒褐色シルトで、ローム粒や焼土粒、粘土粒を含む。
- 柱穴** P1～4が検出された。このうちP1は北東隅に位置する浅い掘り込みである。P2は南辺の東側の壁際に位置し、東西方向に長い不整形を呈する。P3は南壁中央付近に位置する不整形の掘り込みである。これらは柱穴や梯子穴として機能したかは明確ではない。
- カマド** 検出されなかった。遺構覆土に粘土が認められることから、設置されていた可能性が高い。
- 床** 貼床は遺構の中央部を中心に認められ、隅では顕著ではない。締まりは顕著ではない。掘方は中央に島状の高まりをもつ。P4は掘方で確認された。大型の円筒形を呈し、底部付近で西側にわずかにオーバーハングする。
- 周溝** 遺構の残存する北辺と東辺、南辺で確認された。幅20cm程度、深さ14cm程度である。
- 遺物出土状態** 土器17点と土製品(土錘)3点が出土した。土器は土師器2点と須恵器8点、弥生土器6点が遺構床面上と周溝内に散在する。土錘(第181図4・5・6)はP2の覆土中層から出土した。

所属時期 出土土器は9世紀前半～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

322号住居跡(第151図、図版195～198)

- グリッド** 90MM・91LL・MM 平面形態 方形?
- 規模** 南北一×東西一×35cm
- 主軸方向** N7°E 構築回数 1回?
- 検出状況** 調査区中央北端に位置する。遺構の北西側は調査範囲外に至る。321号住居跡の西側に位置し、南北軸は揃う。南側は削平により遺構壁面や覆土のほとんどが失われており、範囲は不明瞭である。遺構東辺と北東隅が遺存しており、これらとピットの配置をもとに遺構のおおよその規模とプランを推定した。遺構南側に北東-南西方向に浅い周溝状の掘り込みが入るが、覆土がほとんど残っておらず、位置づけは難しい。
- P1 - 52 × 41 × 62cm P2 - 70 × 52 × 72cm P3 - 45 × 37 × 56cm
- P4 - 46 × 42 × 77cm P5 - 33 × 27 × 77cm P6 - 36 × 33 × 17cm
- P7 - 62 × 47 × 56cm
- 覆土** 覆土は暗褐色・黒褐色シルトで全体に混入物が多いが、箇所により様相が異なる。
- 柱穴** P1～7が認められた。このうちP1・P2・P7は規模や形態が類似しており、主柱穴の可能性が高い。柱間はP1-P2間で233cm、P2-P7間213cmでほぼ揃う。これらは柱穴や梯子穴として機能したかは明確ではない。
- カマド** 検出されなかった。遺構覆土に粘土が認められることから、設置されていた可能性が高い。
- 床** 硬化面は複数認められたが、平面的な広がりには限定的で、床面として捉えることはできなかった。調査区壁で確認した土層断面A-A'ではピットが掘り込まれる層が一定していないことから、柱の据え直しを含む住居の立て替えがおこなわれた可能性がある。
- 周溝** 遺構の北東隅でわずかに確認された。局所的に深さ25cm程度に達するが、それ以外では

幅 20cm程度、深さ 10cm 程度である。

遺物出土状態 土器 386 点と石製品（石帯）1 点が出土した。土器は遺構範囲内の覆土中の広い範囲に散在する。土師器甕が 271 点の他、台付甕が 2 点、坏が 46 点と、これらが大半を占める。須恵器は坏が 23 点、蓋が 1 点の他、甕が 15 点と多いのが特徴的である。この他に縄文土器が 4 点、弥生土器 20 点が出土した。P2 では覆土上部からほぼ定形の須恵器坏（9）の他、平面的に集中した状態で甕（8）の破片が出土した。石帯（第 181 図 3）は、これらとは離れた覆土下層中から、ビット中心に向かってやや傾斜した状態で出土した。

所属時期 出土土器は 9 世紀前半～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

328 号住居跡（第 152 ～ 153 図、図版 198 ～ 201）

グリッド 90MM・91LL・MM **平面形態** 方形？

規模 東西推 464 × 南北推 426 × 58cm

主軸方向 N38° E **構築回数** 1 回

検出状況 調査区中央北寄りに位置する。329 号住居跡の北東側に隣接する。団地建物基礎の直下にあたり、これによって遺構の大半が失われる。カマドを含む東辺と南辺が部分的に残存しており、これらの配置をもとに遺構のおおよその規模とプランを推定した。

覆土 覆土は暗褐色・黒褐色土でロームブロックやスコリアを含む。

柱穴 確認されなかった。

カマド 遺構東辺の壁際に設置されていた。東西 90cm、袖を含む南北 92cm、深さ 33cm で煙道側は張り出す。袖はロームと砂を含む黒褐色土からなる。

床 貼床は床面の残存範囲で広範囲に認められたが、顕著ではない。掘方は平坦で深さ 18cm 程度。

周溝 遺構の東辺と南辺で部分的に確認された。幅 20cm、深さ 5cm 程度で、溝内に径 5 ～ 10cm 程度の小穴が散在する。

遺物出土状態 土器 105 点と土製支脚？ 1 点、礫 3 点が出土した。土器は遺構範囲内の覆土中の広い範囲に散在する。土師器甕が 56 点の他、台付甕が 3 点、坏が 2 点と、これらが多くを占める。須恵器は坏が 16 点、蓋と甕が各 4 点である。この他に縄文土器・弥生土器が各 10 点出土した。

所属時期 出土土器は 9 世紀前半～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

329 号住居跡（第 154 図、図版 201 ～ 203）

グリッド 93・94VV・WW **平面形態** 方形

規模 東西 340 × 南北 303 × 57cm

主軸方向 N10° E **構築回数** 1 回

検出状況 調査区中央北寄りに位置する。328 号住居跡の南西側に隣接する。団地建物基礎の直下にあたり、これによって遺構の大半が失われる。遺構外周が断片的に残存しており、これをもとに遺構のおおよその規模とプランを推定した。

覆土 覆土は暗褐色・褐色土でロームブロックやスコリアを含む。

柱 穴 確認されなかった。

カ マ ド 確認されなかった。遺構北辺の中央部が近代以降の建物基礎によって失われており、この位置に存在した可能性が高い。

床 貼床は床面の残存範囲で広範囲に認められたが、顕著ではない。掘方は平坦で深さ 20cm 程度。

周 溝 遺構の東辺と南辺で部分的に確認された。幅 20cm、深さ 5cm 程度で、溝内に径 5～10cm 程度の小穴が散在する。

遺物出土状態 土器 30 点と礫 1 点が出土した。土器は遺構東側・南側に散在する。土師器甕が 19 点の他、高環が 1 点、環が 2 点と、これらが多くを占める。須恵器は環が 4 点である。

所属時期 出土土器は 9 世紀後半を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

330 号住居跡 (第 155・156 図、図版 204～208)

グリッド 94UU・95TT・UU 平面形態 方形

規 模 東西 405 × 南北 355 × 63cm

主軸方向 N5° W 構築回数 1 回

検出状況 調査区中央北寄りの、329 号住居跡の南西側に位置する。団地建物基礎の直下にあたり、これによって遺構の大半が失われる。遺構外周が断片的に残存しており、これをもとに遺構のおおよその規模とプランを推定した。

P1 - 32 × 29 × 11cm P2 - 26 × 25 × 12cm P3 - 37 × 31 × 10cm

覆 土 覆土は厚さ 50cm 程度の均質な黒褐色土でローム粒を含む。

柱 穴 P1・P3 がそれぞれ南東と北西側の柱穴として、P2 は梯子穴として機能した可能性があるが、いずれも浅い。

カ マ ド 南北 93cm、袖を含む東西 93cm、深さ 47cm で、煙道側に張り出す。掘方で地山のロームを掘り上げた後、黒褐色土や粘土、ロームからなる構成材によって袖と煙道を作り出している。煙道は垂直に近い立ち上がりで径 13cm。

床 貼床は床面の残存範囲で広範囲に認められた。掘方は平坦で深さ 18cm 程度。

周 溝 遺構の北西隅と南辺～南東隅で確認された。幅 20～25cm、深さ 5cm 程度。

遺物出土状態 土器 306 点と焼成粘土塊 5 点、礫 2 点が出土した。土器は遺構範囲内の覆土中の広い範囲に散在する。土師器は甕が 171 点と多くを占め、台付甕が 24 点、環が 12 点、壺が 1 点とこれに次ぐ。須恵器は環が 55 点と大半を占めた他、甕が 2 点、瓶が 1 点である。台付甕 (1) は脚部と底部の一部がカマドの燃焼部のほぼ中央から正位で出土し、カマド手前側の破片と接合した。須恵器甕 (10) は大型の破片が遺構南側中央部の床面直上から出土した。この他に近世以降の瓦 1 点や陶磁器 2 点が出土した。

所属時期 出土土器は 9 世紀後半を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

336 号住居跡 (第 157・158 図、図版 209～211)

グリッド 97・98SSS 平面形態 長方形?

規 模 南北 357 × 東西推 287 × 35cm

主軸方向 N8° E 構築回数 1 回

検出状況 調査区東端に位置し、東側は調査範囲外に至る。遺構西半とカマドが遺存しており、これをもとに南北に長い長方形プランと推定した。

P1 - 26 × 23 × 27cm P2 - 26 × 24 × 16cm

覆土 覆土は厚さ 20cm 程度の均質な黒褐色シルトでローム粒・ロームブロックを含む。

柱穴 P1・P2 がそれぞれ南西と北西側の柱穴として機能した可能性があるが、いずれも浅い。

カマド 南北 144cm、袖を含む東西 130cm、深さ 40cm で、煙道側に張り出す。燃焼部を中心に掘り上げた後、シルトや粘土、ロームからなる構成材によって袖を作り出している。煙道はロームを掘り抜いて構築されており、東側に傾く。深さ 30cm、径 28cm。袖は左袖のみ遺存した。

床 貼床は床面の残存範囲で広範囲に認められた。掘方はやや凹凸に富み、深さ 20cm 程度。小穴が散在する。

周溝 遺構の西辺～南辺で確認された。幅 15cm、深さ 5cm 程度。北西隅で途切れ、カマドを含む北辺には巡らない。

遺物出土状態 土器 230 点と焼成粘土塊 2 点、礫 8 点、炭化材 2 点が出土した。土器は遺構範囲内の覆土中の広い範囲に散在する。土師器は甕が 129 点と多くを占め、台付甕が 1 点、坏が 33 点、鉢が 1 点とこれに次ぐ。須恵器は坏が 17 点と大半を占めた他、蓋が 3 点、甕が 3 点、鉢が 1 点である。甕 (9) はカマド内の広範囲に破片が散在する。須恵器蓋 (1) は遺構南辺の壁際の掘方覆土内から出土した。この他に縄文土器が 18 点、弥生土器が 4 点と、近世以降の陶磁器 1 点が出土した。

所属時期 出土土器は 9 世紀前葉～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

339 号住居跡 (第 159・160 図、図版 211～216)

グリッド 96・97000・PPP 平面形態 方形?

規模 東西 512 × 南北 430 × 20cm
建替前東西 414 × 南北 312 × 20cm

主軸方向 N3°E 構築回数 2 回

検出状況 調査区東側に位置する。南西側は団地内道路により削平され、失われている。遺構北側と南東側カマドが遺存しており、これをもとに南北に長い長方形プランと推定した。掘方の検出時に、ひとまわり小さい方形プランと、複数の柱穴を検出した。覆土断面にも旧床面と見られる硬化範囲が認められたことから、住居の作り替え(拡張)がおこなわれていることが明らかとなった。

P1 - 67 × 49 × 73cm P2 - 76 × 69 × 53cm P3 - 48 × 44 × 66cm

P4 - 35 × 30 × 50cm P5 - 33 × 27 × 58cm P6 - 60 × 50 × 47cm

P7 - 59 × 36 × 36cm P8 - 28 × 26 × 33cm P9 - 32 × 27 × 25cm

P10 - 52 × 43 × 67cm P11 - 29 × 28 × 17cm P12 - 66 × 43 × 41cm

覆土 覆土はローム粒をやや多く含む厚さ 20cm 程度の暗褐色シルトを主体とし、カマドに由来する粘土や砂、焼土が広範囲に混入する。

柱穴 貼床の下位から P4～12 のピットを検出した。これらが拡張前の段階に柱穴として機能

していたものと見られるが、支柱穴の位置にあたるもの（P6・12・9）はそれほど深くはない一方、壁柱穴の位置にしっかりした作りのもの（P10やP5）があるなど、正確な位置づけは難しい。拡張後のP1・P2・P3はそれぞれ北東と南東、北西側の柱穴として機能したものと見られる。柱間はP1－P3間で275cm、P1－P2間で227cmと、東西方向がやや長い。

カマド 住居跡の拡張に伴いカマドも作り替えがおこなわれている。旧カマドは南北126cm、袖を含む東西103cm、深さ36cmで、旧住居跡の北辺から煙道側に張り出す。燃焼部を中心に掘り上げた後、シルトや粘土、ロームからなる構成材によって袖を作り出している。袖は左袖のみ遺存した。新カマドは旧カマドの北東側に張り出すかたちで構築されている。南北66cm、東西112cmで、壁面から煙道側に円形に張り出す。中央に浅い燃焼部が63×57cmの範囲に広がる。

床 貼床は新旧の床面の残存範囲で断片的に認められた。掘方はやや凹凸に富み、深さ20cm程度。小穴が散在する。

周溝 作り替え（拡張）前の段階の周溝は断面で確認されたが（A-A'9層）、平面的な広がりには確認されなかった。拡張後の段階のものは北西側と東側～南東隅に断片的に確認された。深さ14cm、幅20～25cm程度で、カマド範囲には巡らない。

遺物出土状態 土器298点と礫26点が出土した。近代のレンガ片の混入も多い。土器は遺構範囲内の覆土中の広い範囲に散在する。土師器は甕が218点と多くを占め、台付甕が1点、坏が5点とこれに次ぐ。須恵器は坏が41点と大半を占めた他、蓋が8点、甕が2点、碗・瓶が各1点である。灰釉陶器は1点、認められた。これらの遺物は覆土内の広範囲に散在しており、住居の新旧との対応は不明瞭である。土師器甕（16）は破片がカマド内と住居北壁付近に散在する。須恵器坏（3）はP2覆土上層から、坏（4）はP3覆土上層から、坏（12）はP4内から、灰釉陶器の長頸瓶（11）は拡張後の住居床面付近から出土した。この他に縄文土器が10点、弥生土器が4点が出土した。

所属時期 出土土器は平安時代の9世紀前葉～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

345号住居跡（第161・167図、図版216～218）

グリッド 99・100EE・FF 平面形態 方形

規模 東西263×南北261×15cm

主軸方向 N21°E

検出状況 集落の最も西側に位置し、厚さ2m程度の表土下で検出された。周囲の地山は、武蔵野IV層相当と考えられるローム層で、上位の自然堆積土層は後世の削平によって失われている。住居跡についても、上位のかなりの部分が削平されており、また、北半に大小の掘乱が集中するため、失われた部分が大きい。345号住居跡は346号住居跡の覆土内に確認された。

覆土 遺存状態は悪く、最大でも15cm程の深さである。北側は南側よりやや低いレベルまで削平されている。

柱穴 検出できなかった。

カマド 「焼土1」「焼土2」の2か所の焼土が確認された。「焼土1」は深さ10cm程、「焼土2」は深さ5cm程で、上位のほとんどが削平されている。「焼土1」が上位で、「焼土2」はわずかに重なって下位に検出された。当初、削平がわずかに少なく、プラン縁辺部の焼土が目立っていた「焼土1」のみを認識したが、完掘後周辺を精査、「焼土2」の1層が顕著に検出されたため、さらに精査範囲を広げ、「焼土2」全体を検出した。両者は一つながりの焼土である可能性もあったが、プランの重なる部分がわずかであったこと、顕著な焼土の位置が重ならなかったことなどから、現場段階では別個のものとして扱うこととした。「焼土1」には、乾いたようなガサガサしたロームブロックが目立つ、極弱い焼け込みのような最下層（4層）が見られることから燃焼痕跡と考えられるが、ソデや粘土の混入といったカマドの痕跡は見られない。「焼土2」は、西側縁辺にソデが捉えられていることから、カマドに伴うものと考えられる。これらの焼土の周辺は、遺構の遺存状態が悪いため断言はできないが、上位の「焼土1」が「焼土2」を伴うカマドを壊した痕跡は確認できず、別個の遺構というよりは、同一のカマドに伴う、異なる焼土層と捉え、ほとんどの部分が削平されてしまったため、別個のものであるようなプランになってしまったものと考えておきたい。

床 東西約260cm、南北約260cm(推定)。北側2/3ほどに厚さ2～3cm程度の貼床を検出した。白色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒を含む暗褐色土で、全体的にあまり強く踏み固められてはいない。北西角の「焼土2」の脇あたりに、局所的に強く踏み固められている箇所がある。北側の縁辺ははっきり捉えられず、同様の状態が下位の346号住居跡の床面へと続く。東西の長さとかマドの位置から推定し、点線で示した。

梯子穴 検出できなかった。

周溝 南半で検出された。東側、北側の縁辺には攪乱がかかっており確認できない。また、北西の縁辺付近はより深く削平されているため、欠損してしまっただけの可能性もある。

その他 柱穴、梯子穴を含め、床面および掘方でピット等は検出できなかった。また、東北の縁辺部周辺で貯蔵穴を検出し、本住居跡に伴うものとして調査したが、最終的に推定した縁辺の外側に位置するため、下位の346号住居跡の伴うものと捉えなおすこととした。

遺物出土状態 土器118点と炭化材3点、焼成粘土塊1点と礫3点が出土した。土器は土師器甕が77点、台付甕が2点、坏が6点で、須恵器坏が23点、甕が2点であった。この他に縄文土器1点、弥生土器7点が出土した。

所属時期 出土土器は平安時代の9世紀前葉～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

346号住居跡(第162・163・164・167図、図版219～223)

グリッド 99・100EE・FF 平面形態 方形

規模 東西500×南北447×10cm

主軸方向 N1°E

検出状況 346号住居跡は347号住居跡の上位に確認された。

覆土 後世の攪乱と削平によって上部のほとんどが失われており、残った部分も345号住居跡によって中央部分の覆土が欠失している。特に、北西角においては削平によって床面・掘

方が失われており、かろうじて残った側柱穴（P11、P12）の位置から、点線で示したように、住居跡コーナー部の縁辺を推定した。

柱 穴 四周の壁に沿って、P5～16の12の壁柱穴が検出された。対応関係はP5－P8、P12－P9、P11－P6、P13－P14、P16－P15、P10－P7である。また、P2とP17は壁柱穴ではないが、規模がしっかりしており相対する位置にあることから、何らかの役割を担っていた可能性が指摘できる。P1－P3、P18－P4は、北東角にピットが検出されていれば、心の間、東西186cm、南北175cmの長方形柱穴配置となるが、その位置にピットは検出されていない。P1以外は浅い。P3、P18、P13、P17の覆土には下位の347号住居跡カマド2由来と考えられる白色粘土が目立つ。P18はP3より新しいが、覆土も規模もP3と類似しており、作り替えかもしれない。また、P13はP17より新しい。

カマド 住居東壁中央に位置する。幅140cm程、奥行き120cm程で、煙道部が壁外側に60cm程張り出す。焚口は床面より20cm程低く、下面は、奥に向かって、幅を狭めながら高くなる。検出面において、北側の縁辺にソデの痕跡が確認された。また、煙道部先端近くに胴部以下を欠く甕の口縁～頸部が逆位で検出された。甕内部の土層は焼土を多量に含み、わずかに手前側が低くなるような角度であった。煙道施設であろうか。焼土の広がり異なる高さの2か所で検出された（4層、13層）。いずれも比較的高い位置で確認されており、先述の甕との位置関係や上位に接する土層にカマド本体の用土と考えられる灰白色粘土ブロックが多く含まれる点などから、天井部内側の焼け込みと考えられる（3～4層、10～13層が天井崩落土）。2か所の焼土層の間には黒褐色・暗褐色の5～9層が挟まれることから、天井崩落のタイミングが2回想定できよう。一方、燃焼面と考えられる焼土面は検出されなかった。なお、最下層（17層）は、ロームブロックを含むやや粘性の強い土層で、焚口手前を中心に、底面に貼りつけられるように広がっていた。

床 東西430cm、南北510cm。北西角部では周溝も含め、床面・掘方が検出できなかった。周溝と床面は削平によって失われたものと考えられるが、掘方は、周りの掘方の深さなどを勘案すると、元々なかった可能性もある。北側に幅50cm、南側に幅70cm程に帯状の掘方がある。

梯子穴 南壁中央の内側10cm程に位置するP19を梯子穴と想定すると、カマドとの位置関係から見ると、右方入口となる。

周 溝 全周に巡る。床面からの深さは10～15cm程。壁柱穴と重なるが、両者の覆土にはほとんど差が見られなかった。ただし、P5周辺では両者の差が認識でき、周溝より壁柱穴が新しいことが確認できた。他の壁柱穴についても同様であろう。

そ の 他 本住居跡は、後述する347号住居跡を南へ90cm、北へ70cm、東へ20cm拡張して構築したものである。

遺物出土状態 土器207点と炭化材2点、土製支脚1点、焼成粘土塊1点、礫1点が出土した。土器は土師器甕が151点、台付甕が10点、鉢が1点、坏が9点で、須恵器は坏が22点であった。この他に縄文土器1点と弥生土器13点が出土した。貯蔵穴内の覆土土層に土師器甕の破片が散在する。遺構北東側のP13の縁辺から支脚が横倒しの状態

で出土した。周溝付近から土師器環(3)が逆位で出土した。台付甕(4)の口縁がカマド内に逆位で埋設された状態で出土した。

所属時期 出土土器は9世紀前葉～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

347号住居跡(第165・166・167図、図版224～226)

グリッド 99・100EE・FF 平面形態 方形

規模 東西418×南北319×25cm

主軸方向 N1°E

検出状況 347号住居跡は346号住居跡の中央部下位に確認された。

覆土 床面直上の堆積層は346号住居跡貼床層にあたり、本住居跡の埋没過程を示す堆積土層は検出できなかった。なお、床下には凹凸の著しい掘方が確認された。

柱穴 P3、P4、P5は、掘方中、P6、P8、P9、P10は掘方底で検出。うち、P3-P5-P6は心間230cmで、346住P17の位置に347号住居跡に属すピットがあれば、正方形の柱穴配置となるが、346住P17の下位にピットは確認されていない。346住P17に壊されてすべて欠損してしまった可能性もあろう。P1、P2は貼床上で検出。心間160cmで、いずれも、深さ10～15cmと浅い。上屋を支えられるだけの柱を支持できるとは思えないが、前述の主柱穴と軸が一致することから、これらに付随する何らかの施設を支えていた可能性もある。なお、P5は上位の346号住居跡のP1とほぼ重複している。

カマド 「カマド1」「カマド2」の2か所が確認された。いずれも、削平と擾乱によって、主体部が著しく欠損している。「カマド1」は住居東壁中央やや南寄りに位置する。幅130cm前後(推定)、奥行き140cm、煙道部が壁外側に35cm程張り出す。焚口は床面より20cm程低く60cm程奥の燃焼面に向かって、さらに10cm程低くなっている。焚口縁辺周辺には貼床が広がっていないため、貼床との戦後関係は不明である。「カマド2」は住居北壁西角に位置する。幅、奥行きともに170cm程で、煙道部が壁外側に50cm程張り出す。燃焼面は、焚口から60～90cm程奥で、床面から30cm程低い。北東角にわずかにソデが残っていた。焚口縁辺は貼床面で認識できたため、「カマド2」は貼床構築以前には遡らないと考えられる。両者の新旧を直接示す床面やピットの切り合い関係は見出せなかった。

床 東西420cm、南北340cm。中央部に厚さ2～7cm程の貼床を検出した。炭化物ブロック、やや大きめのロームブロックが目立つ黒褐色土で、中央付近は強く締まっている。貼床上で、P1、P2を検出した。床下は、環状で深い掘方。凹凸は著しく、最も浅い中央部では、床面から数cm程度、深いところでは床面から25cm程である。掘方中でP3～5、掘方底でP6、8～10を検出した。

梯子穴 やや浅いが、位置的に可能性があるのはP8で、南側縁辺。

周溝 確認することはできなかった。本住居跡の南、北、東、三方を拡張して346号住居跡が構築されているため、周溝がすっかり失われてしまった可能性もある。

その他 床面中央「焼土」は、不整形で底面は凹凸のある形状である。覆土は、焼土と炭化物を多く含むが、壁面・底面には焼け込みもなく、燃焼痕跡は見られなかった。地床炉等ではな

いと考えられる。何らかの意図を以て構築されたものか、偶然の産物か不明である。

遺物出土状態 土器 189点と炭化材 4点、焼成粘土塊 1点、礫 5点が出土した。土器は土師器甕が 129点、台付甕が 7点、坏が 7点、鉢が 1点で、須恵器坏が 25点、蓋が 3点、埴・鉢・高台付鉢が各 1点であった。この他に縄文土器 2点と弥生土器 11点が出土した。

所属時期 出土土器は 9世紀前葉～中葉を主体とする。遺構も同時期のものと推定される。

270号土坑（第168図、図版227）

調査区南東側、102・103PPP・QQQ グリッドに位置し、古墳時代後期の 295号住居跡の北西側を破壊する。長軸が東に 45°傾いた 242×200cm の長方形を呈し、底面は平坦で深さ 20cm 程度である。南西隅に長楕円形の浅いピットが構築されている。このピットの覆土をはじめとして 3か所に焼土の集中が認められた。出土遺物は覆土中の広範囲に散在し、完形の土師器坏（1）は底面付近から出土した。土器は古墳時代後期のものと奈良・平安時代のものが認められるが、前者は 295号住居跡に由来する可能性が高い。後者は 8世紀前半～中葉のものが主体をなし、遺構も同時期のものと推定される。

281号土坑（第169図、図版228）

調査区東側、88FFF グリッドに位置する。近代以降の埋設物により北東側の大半が失われる。残存長 300cm、深さ 65cm の不整楕円形を呈し、底面には凹凸がある。覆土の中～下層から奈良・平安時代の土師器・須恵器片が出土しており、遺構も同時期のものと推定される。

286号土坑（第169図、図版228）

調査区南東側、104HHH グリッドに位置する。団地建物基礎内にあたり、遺構の北西側が失われる。本来は住居等の一部を構成していた可能性もあるが、周囲は攪乱が著しく、関連する遺構は検出されなかった。ほぼ東西方向に長軸をもつ 117×60cm の不整楕円形で、長軸は西側の 303号住居とほぼ一致する。底面は平坦で、深さは 40cm 程度。覆土中から須恵器 1点、土師器 4点と、土製支脚が 4片に分かれて出土した。土器は奈良・平安時代のもので、遺構も同時期のものと推定される。

287号土坑（第169図、図版228）

調査区南側、109FFF グリッドに位置する。被服本廠内の線路に伴う掘り込みによって中央部が削られる。ほぼ南北方向に長軸をもつ 92×60cm の不整楕円形で、深さは 25cm 程度。覆土中から土師器甕や壺、坏が出土した。これらは奈良・平安時代のもので、遺構も同時期のものと推定される。

302号土坑（第169図、図版228・229）

調査区中央南寄り、99・100XX グリッドに位置する。東西に長い 70×40cm の長方形と、その南側に径約 80cm の不整楕円の掘り込みが複合した形状を呈する。覆土の堆積から不整円形の掘り込みが新しい。覆土の中～下層から土師器甕や須恵器坏壺、坏が出土した。このうち円形の掘り込みの南壁際から出土した坏（2）には墨書が認められた。遺物は 9世紀後半のものを主体とし、遺構も同時期のものと推定される。

303号土坑（第170図、図版229）

調査区中央南寄り、100・101XX グリッドに位置する。南北に長い 86×66cm の長方形を呈し、深さ 44cm で底面は平坦、東側に小穴が 2か所認められる。覆土は均質な黒褐色シルトで、土師器坏と甕の小片が出土した。

304号土坑・305号土坑（第170図、図版229）

調査区中央南寄り、99・100XXグリッドに位置する。南北に長い402×323cmの不整形の掘り込みで、北側の140cm前後の不整形部分を305号土坑、それ以外を304号土坑としたが、これらは一連の遺構と見られる。土師器の坏・甕の他、縄文時代前期の土器が比較的多く出土した。

308号土坑（第170図、図版229）

調査区中央北寄り、92PPグリッドに位置する。東西に長い96×82cmの不整形の掘り込みで、深さ24cmの浅い皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

ピット群（第171図、図版230・231）

調査区の複数個所で、ピット群が認められた。柱穴として他のピットや住居跡などの多量の遺構との関わりが推定されるものもある。

P1743・1744・1745は調査区北東側、86CCC・87BBB・CCCに分布する。北東-南西方向に配列する。

P1743 26×25×23cm P1744 31×27×38cm P1745 24×21×21cm

P1748・1749は調査区北東側、85・86BBBに分布する。北東-南西方向に配列する。

P1748 38×35×28cm P1749 28×25×20cm

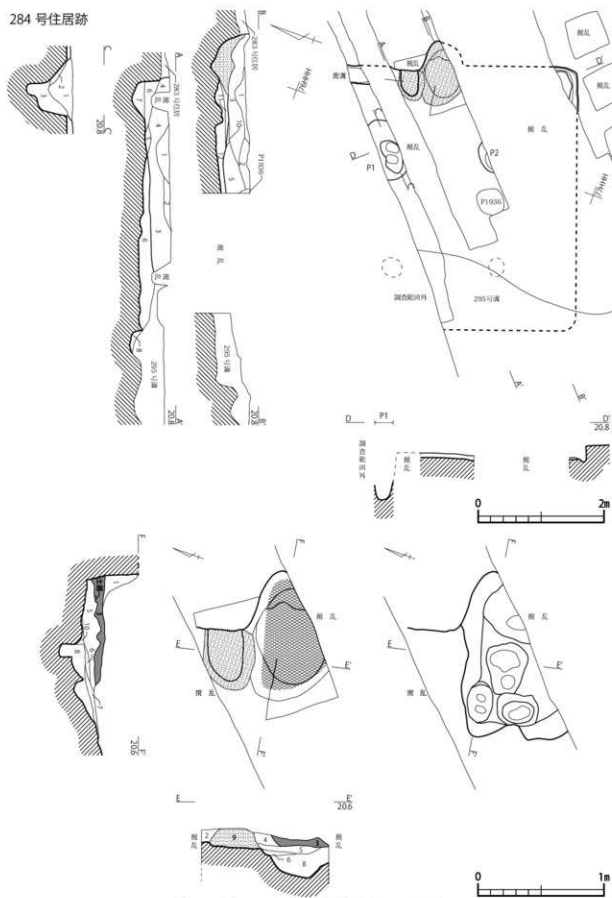
P1822・1823は調査区北側の87SSグリッドに分布する。いずれも円形を呈するピットで、P1822から土師器片が若干出土した。

P1822 42×40×28cm P1823 42×38×20cm

P1828は調査区中央西寄り、10200グリッドに位置する。周囲は削平が著しく、関連する遺構は検出されていない。ピットは不整形で、底面は平坦で小規模な凹凸がある。覆土中層～上層から土師器・須恵器片がやや多く出土した。

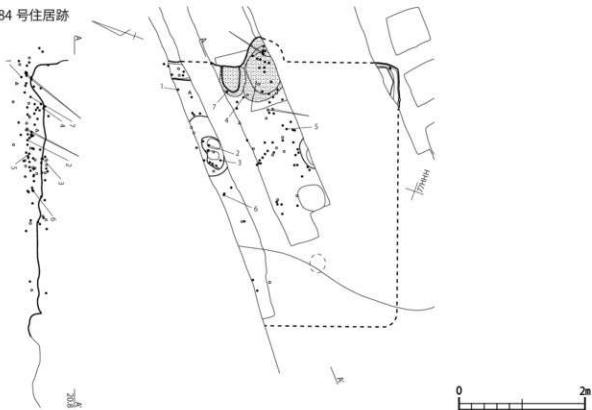
P1828 65×60×35cm

284号住居跡



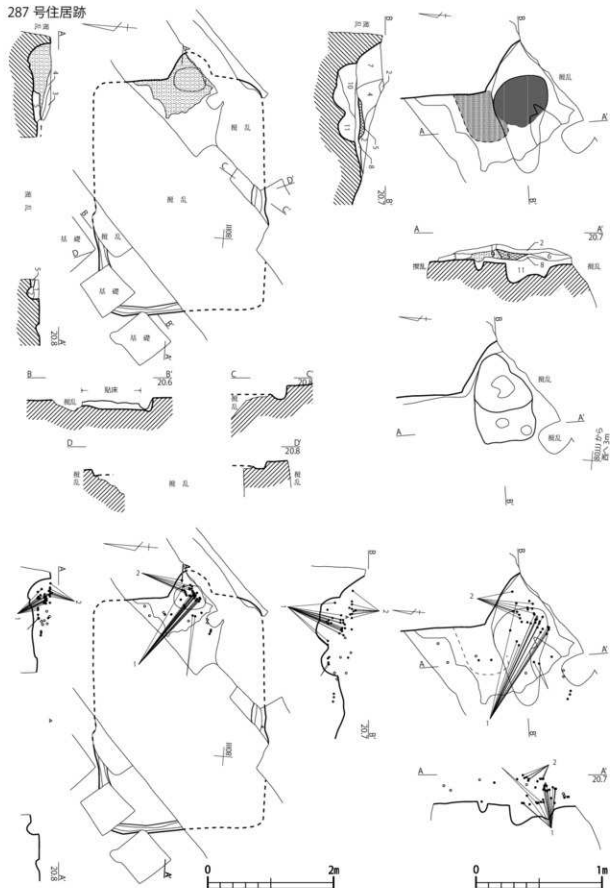
第132図 284号住居跡 (1) (1/30・1/60)

284 号住居跡



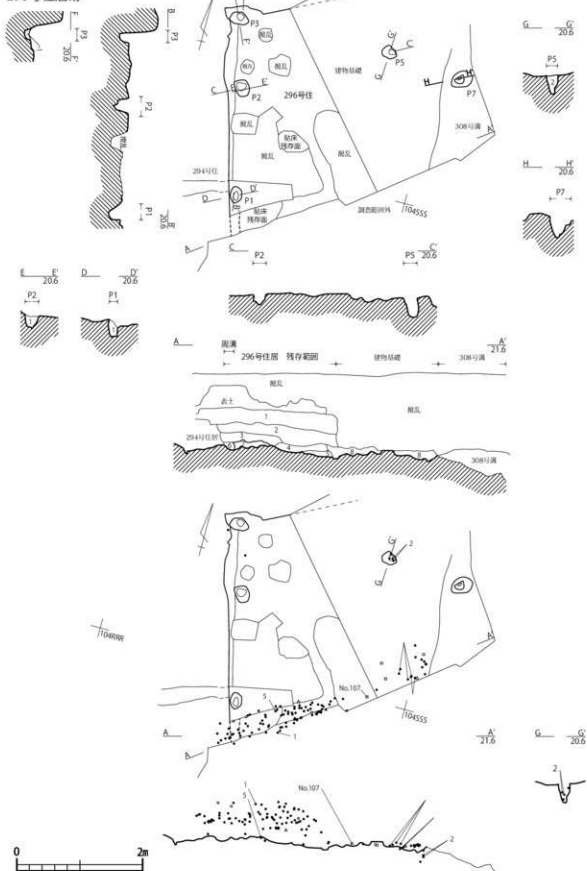
第 133 图 284 号住居跡 (2) (1/30 · 1/60)

287号住居跡



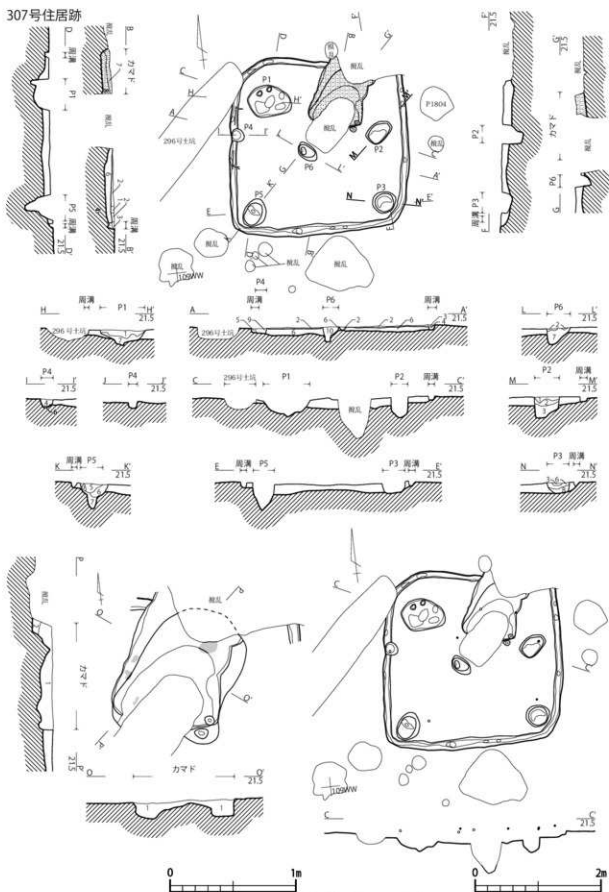
第 134 图 287号住居跡 (1/30・1/60)

296号住居跡



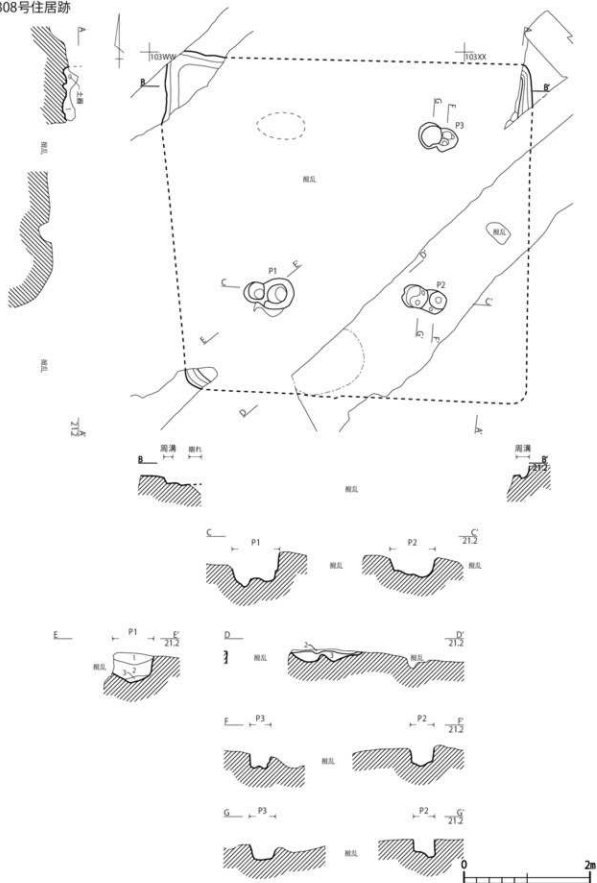
第 135 图 296 号住居跡 (1/60)

307号住居跡



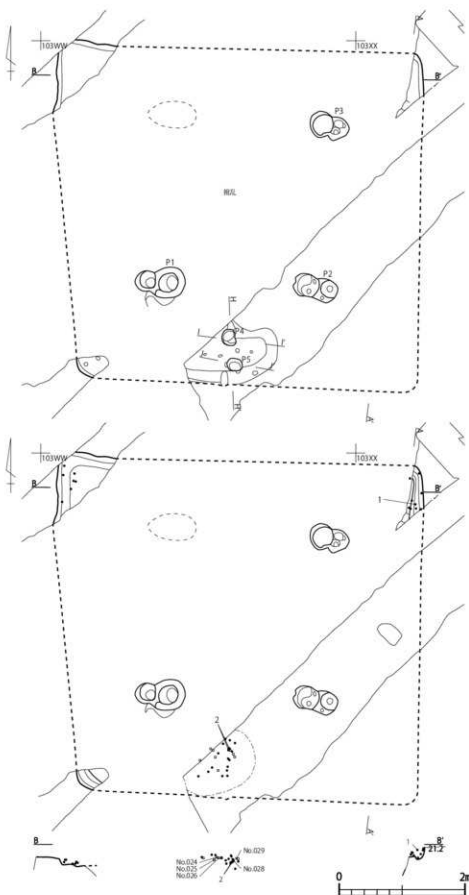
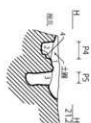
第 138 図 307 号住居跡 (1/30・1/60)

308号住居跡



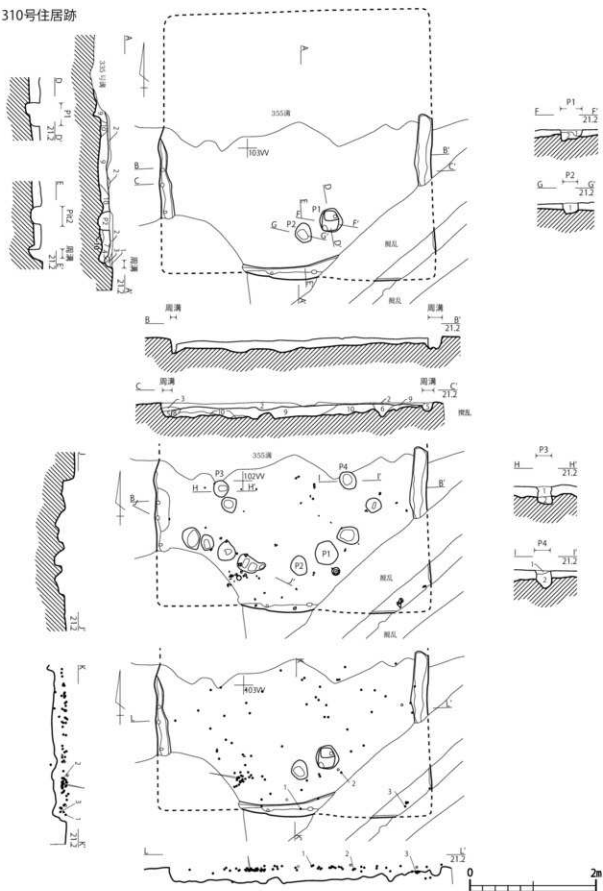
第139图 308号住居跡(1) (1/60)

308号住居跡



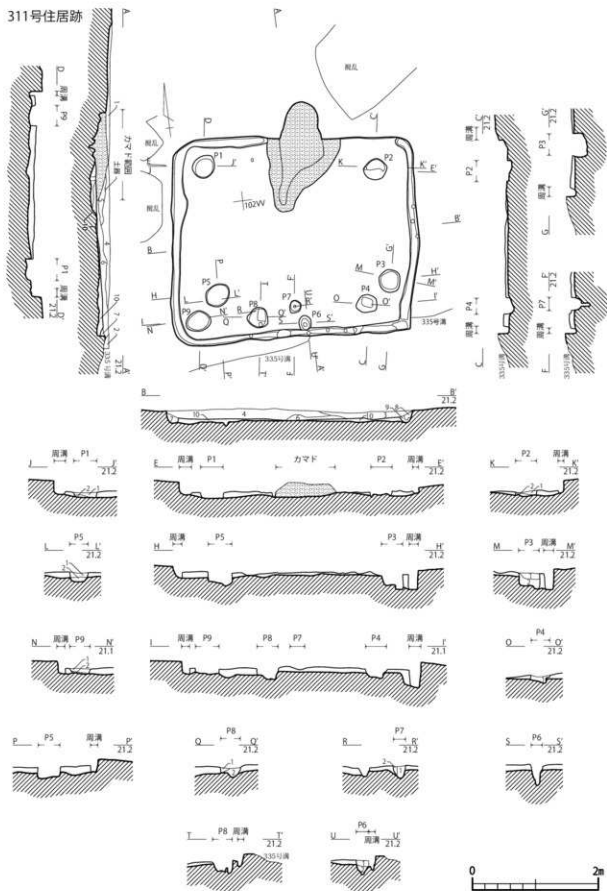
第140图 308号住居跡 (2) (1/60)

310号住居跡



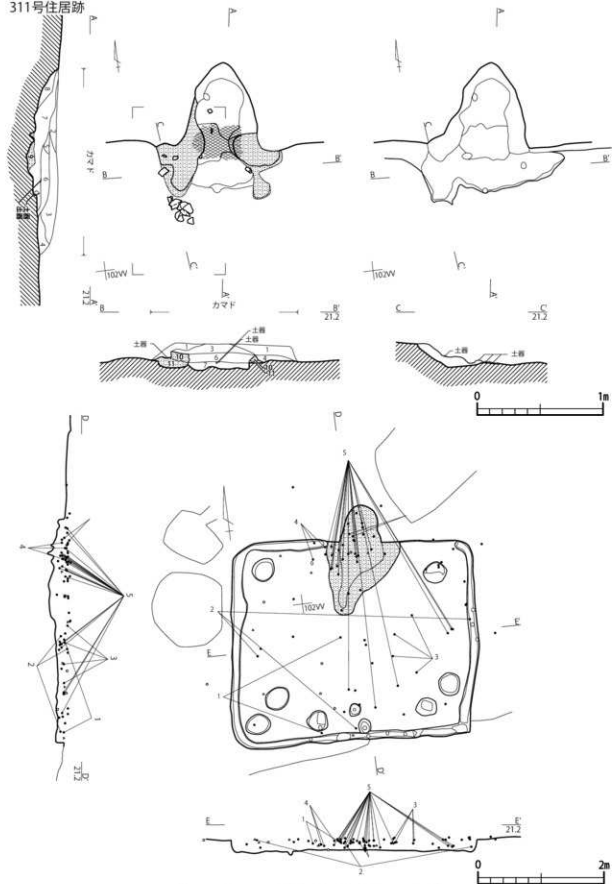
第 141 图 310号住居跡 (1/60)

311号住居跡



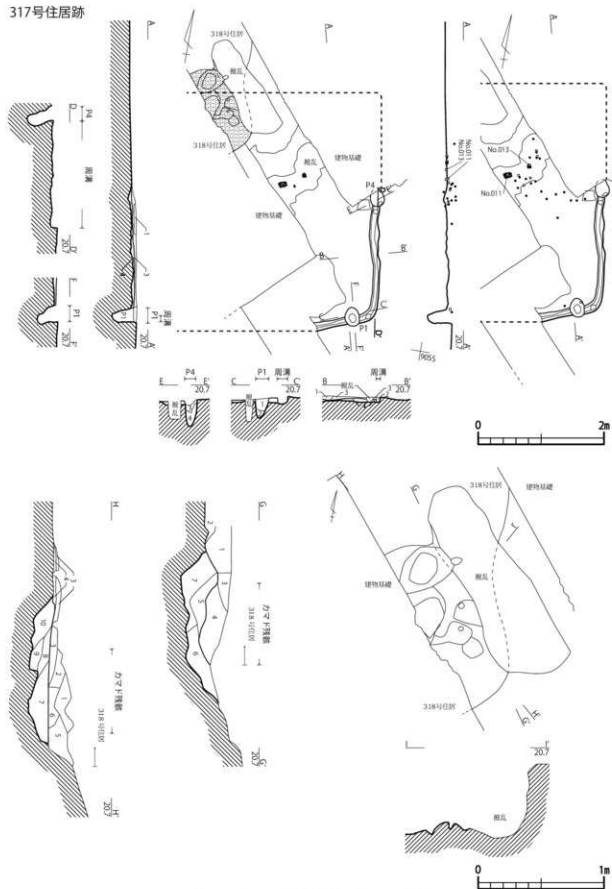
第 142 図 311 号住居跡 (1) (1/60)

311号住居跡

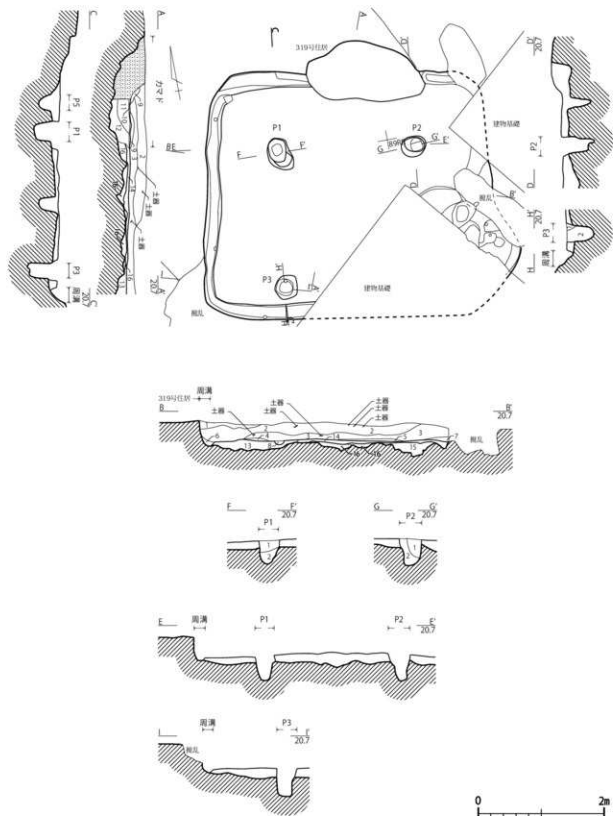


第143図 311号住居跡 (2) (1/30・1/60)

317号住居跡

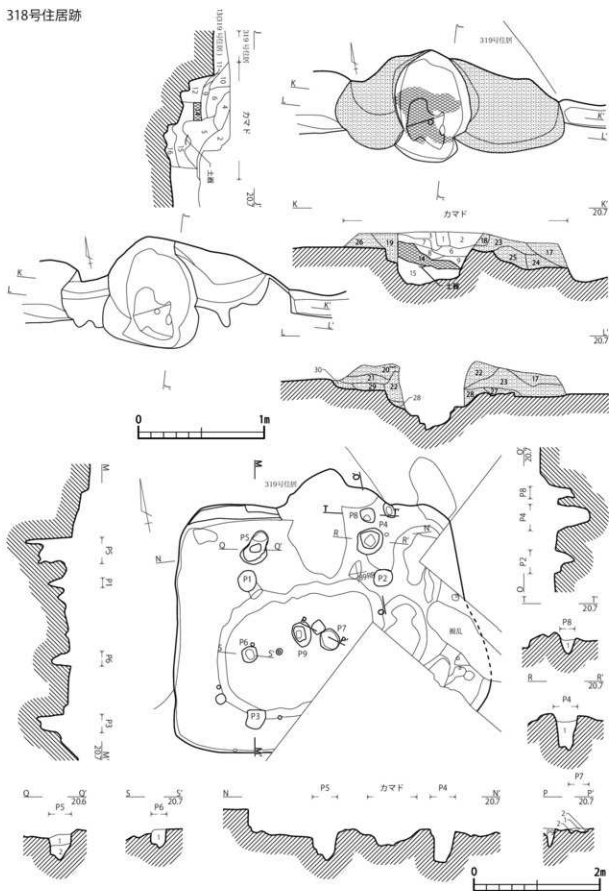


第 144 図 317号住居跡 (1/30・1/60)



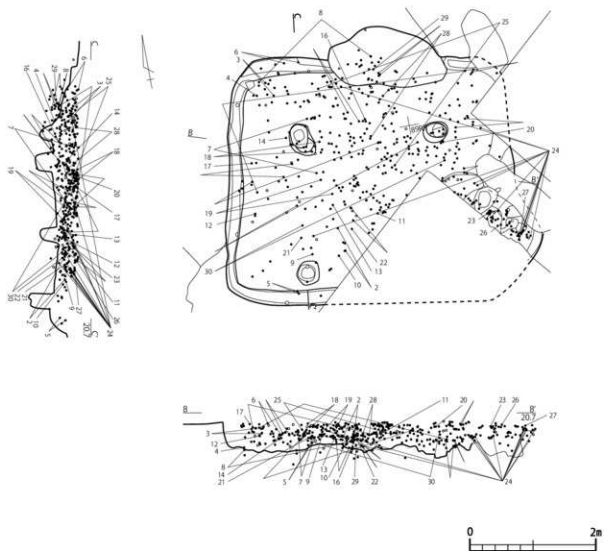
第 145 図 318 号住居跡 (1) (1/60)

318号住居跡



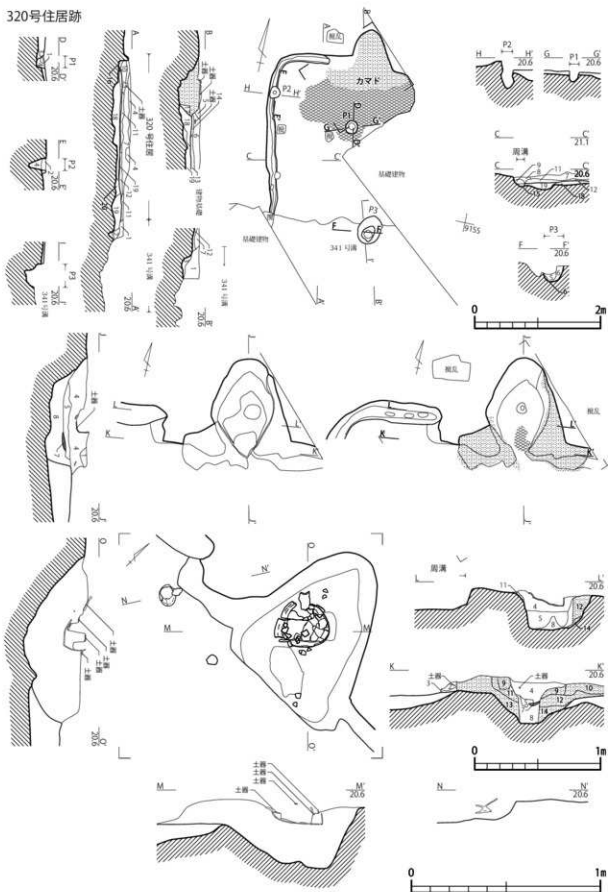
第146図 318号住居跡 (2) (1/30・1/60)

318号住居跡



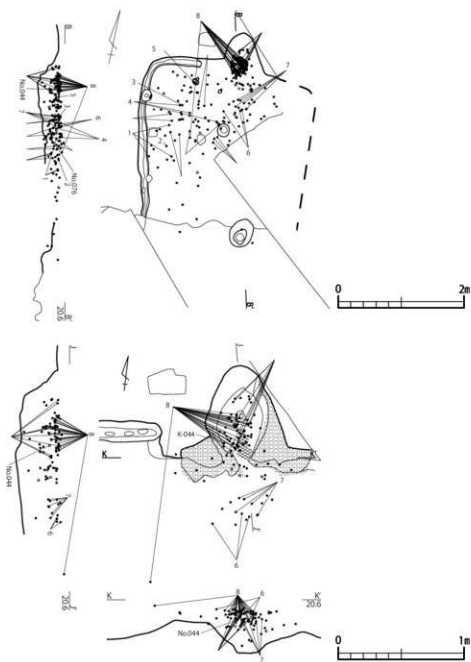
第 147 図 318 号住居跡 (3) (1/60)

320号住居跡



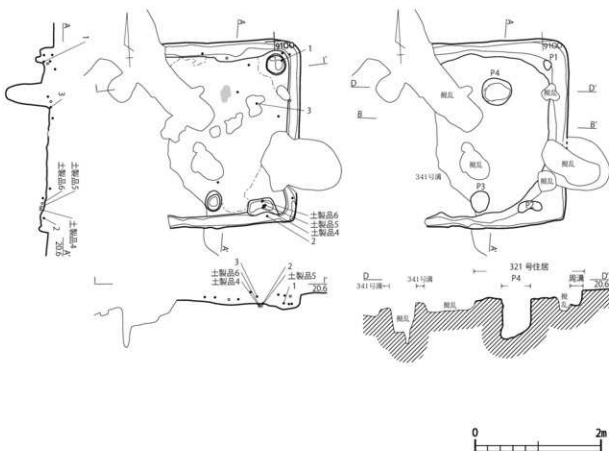
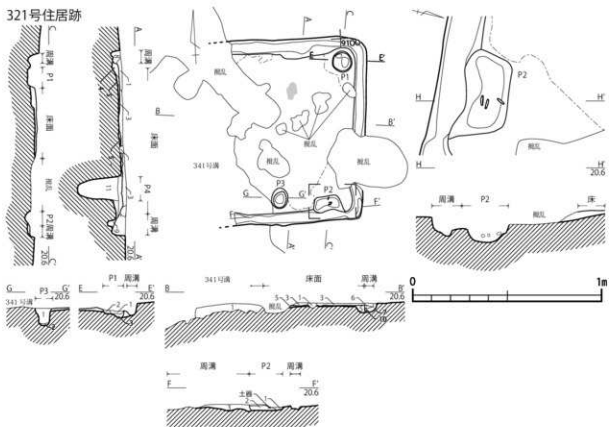
第148図 320号住居跡 (1) (1/20・1/30・1/60)

320号住居跡



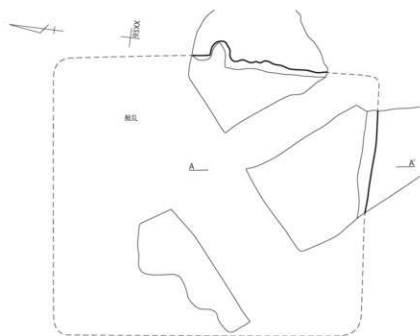
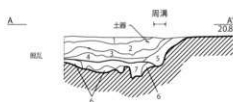
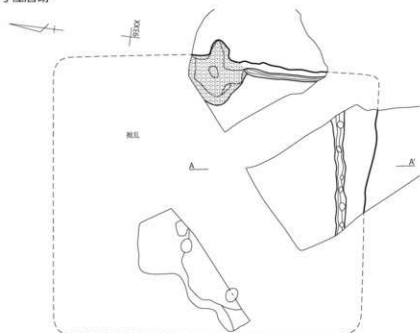
第 149 図 320 号住居跡 (2) (1/60)

321号住居跡



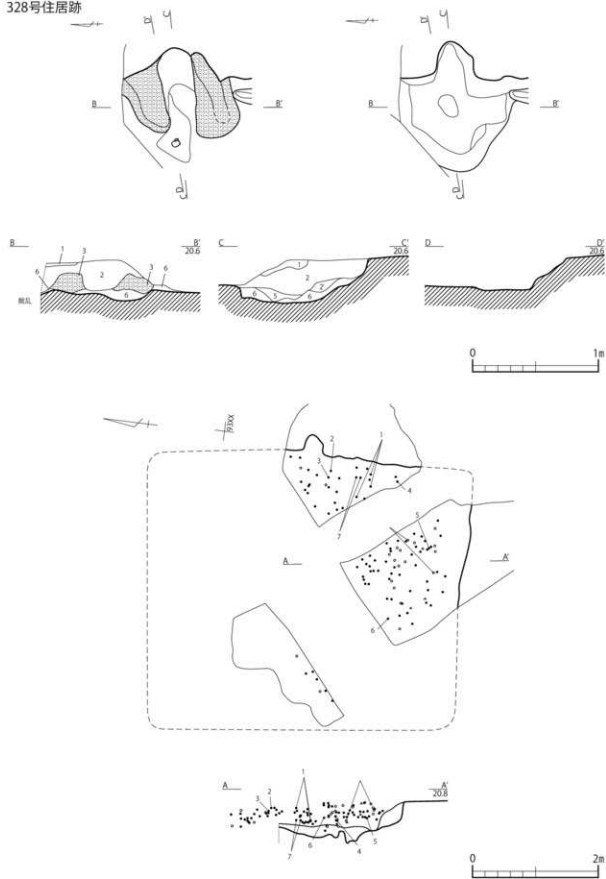
第 150 図 321号住居跡 (1/20・1/60)

328号住居跡



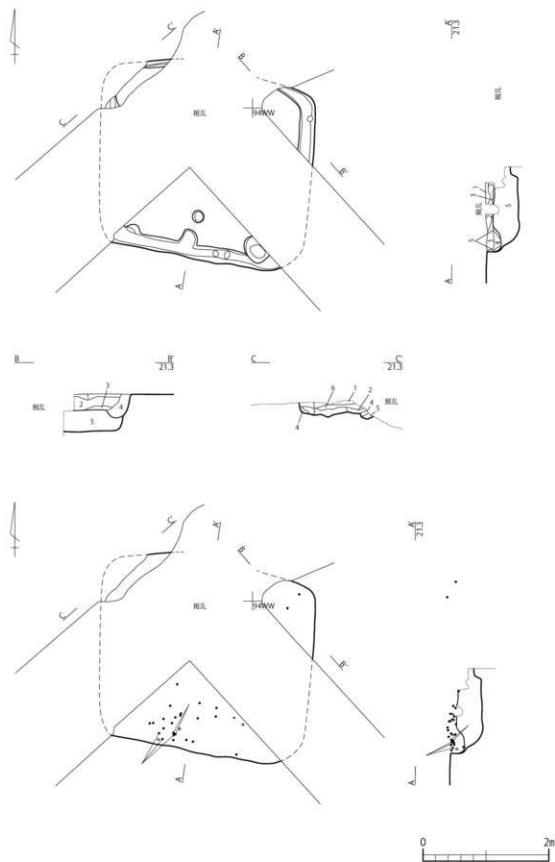
第152図 328号住居跡(1) (1/60)

328号住居跡



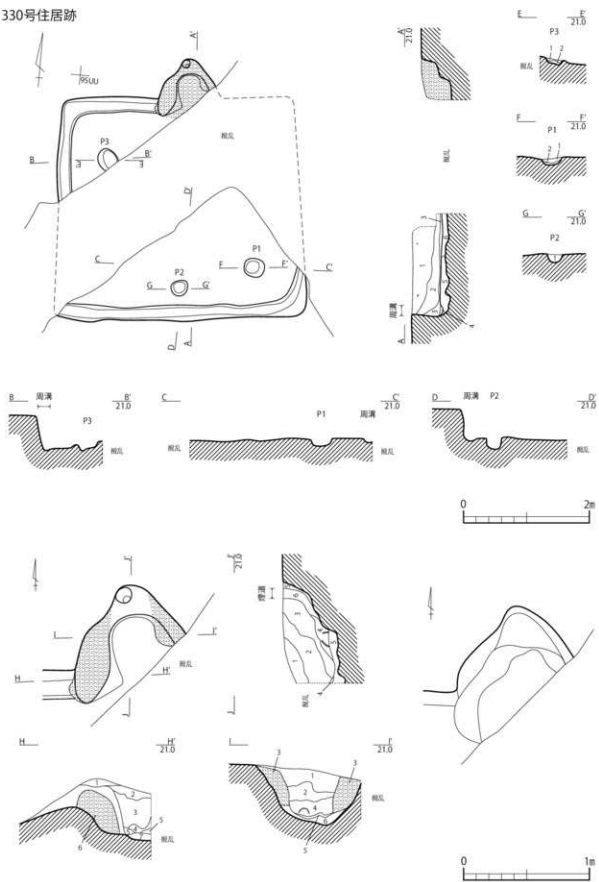
第 153 图 328 号住居跡 (2) (1/30 · 1/60)

329号住居跡



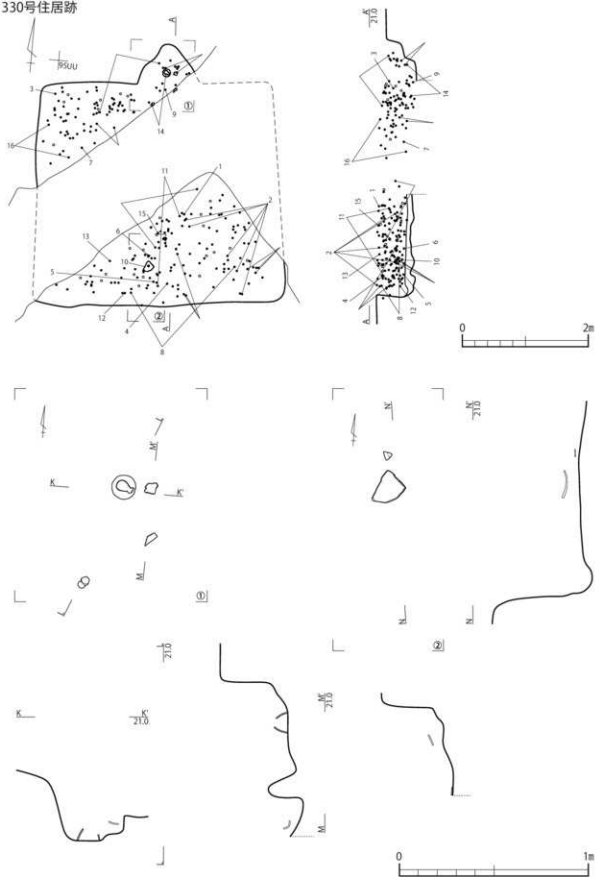
第154図 329号住居跡 (1/60)

330号住居跡



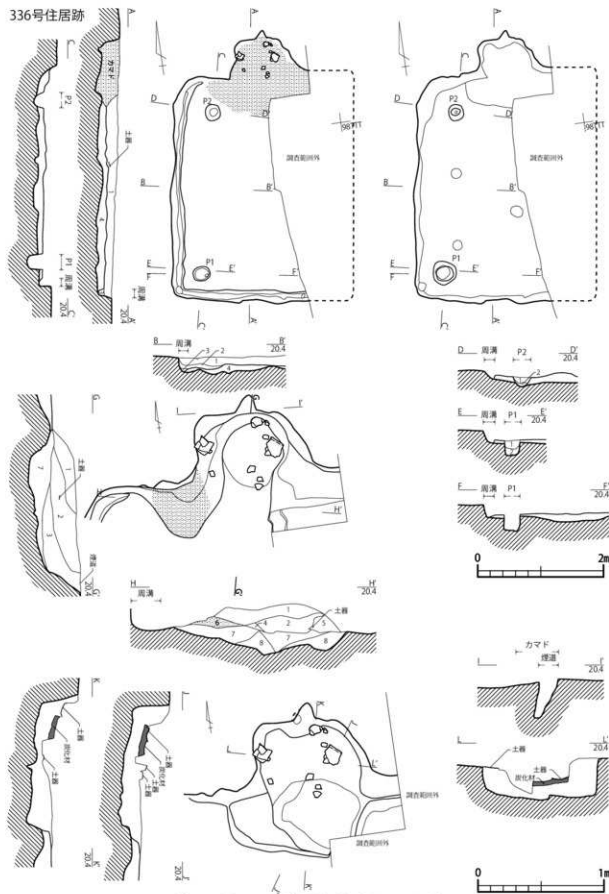
第 155 图 330 号住居跡 (1) (1/30 · 1/60)

330号住居跡



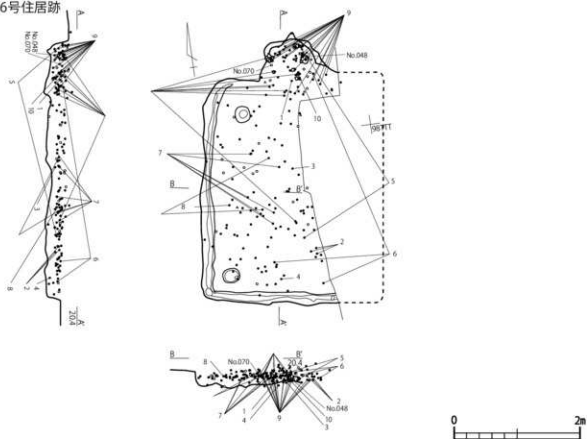
第156図 330号住居跡 (2) (1/20・1/60)

336号住居跡



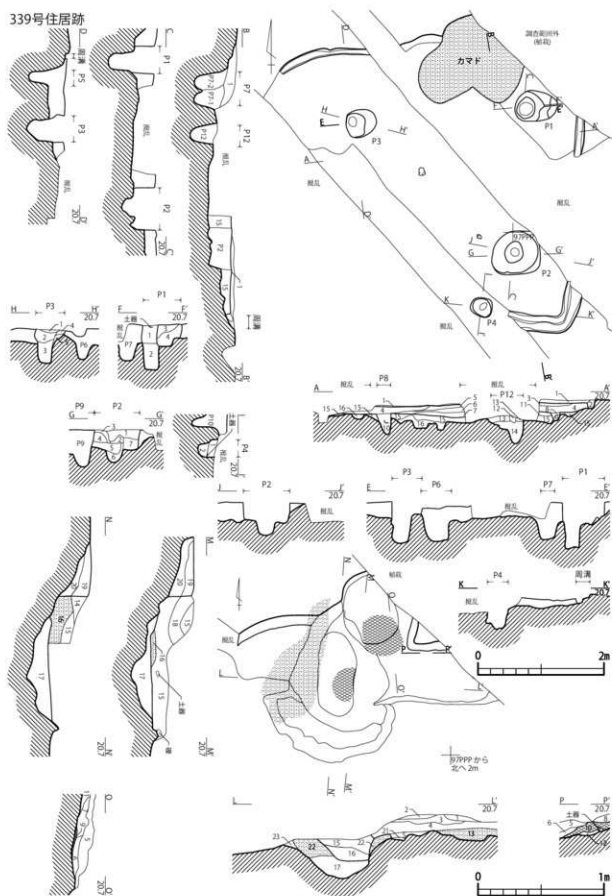
第157図 336号住居跡 (1) (1/30・1/60)

336号住居跡



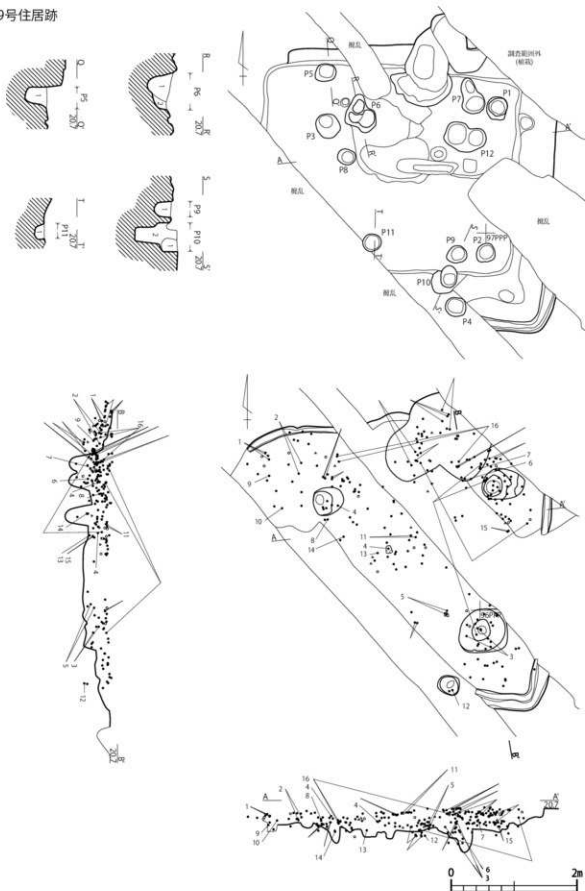
第158図 336号住居跡(2) (1/60)

339号住居跡



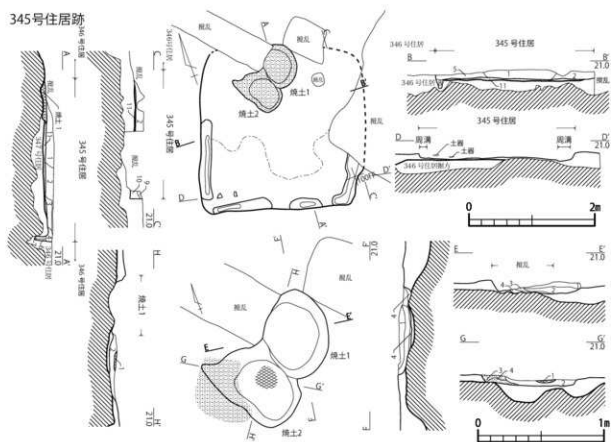
第159図 339号住居跡 (1) (1/30・1/60)

339号住居跡



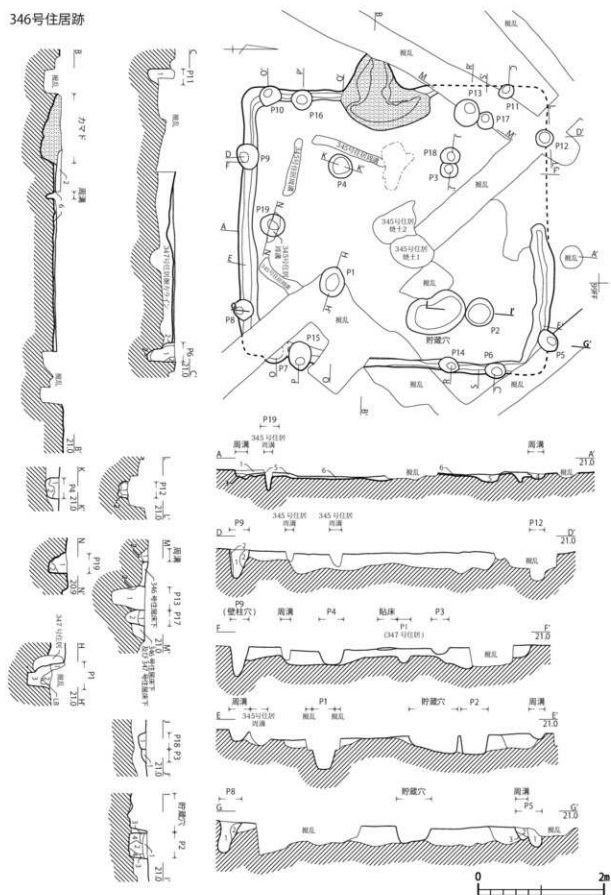
第160図 339号住居跡 (2) (1/60)

345号住居跡



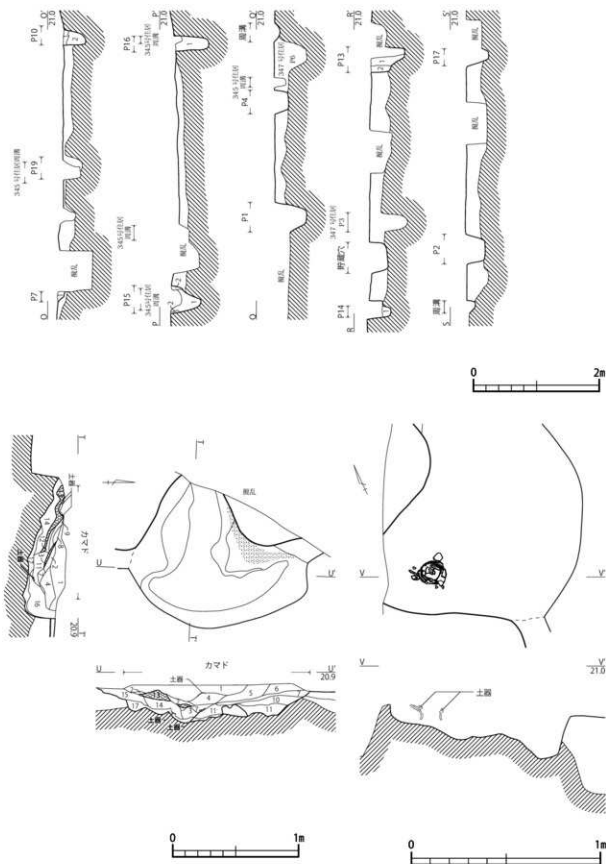
第 161 图 345号住居跡 (1/30 · 1/60)

346号住居跡



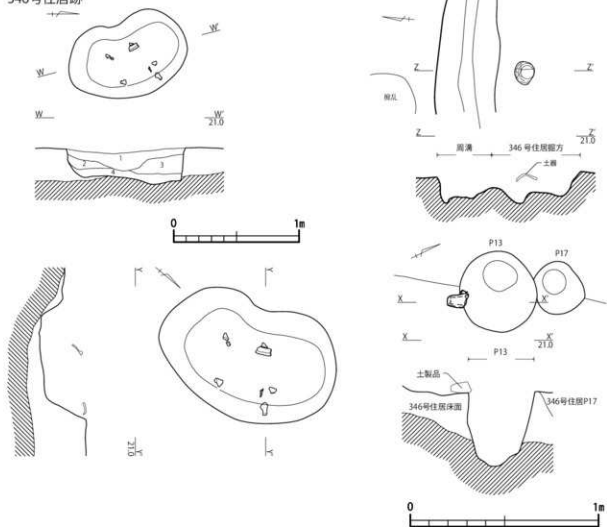
第 162 図 346 号住居跡 (1) (1/60)

346号住居跡



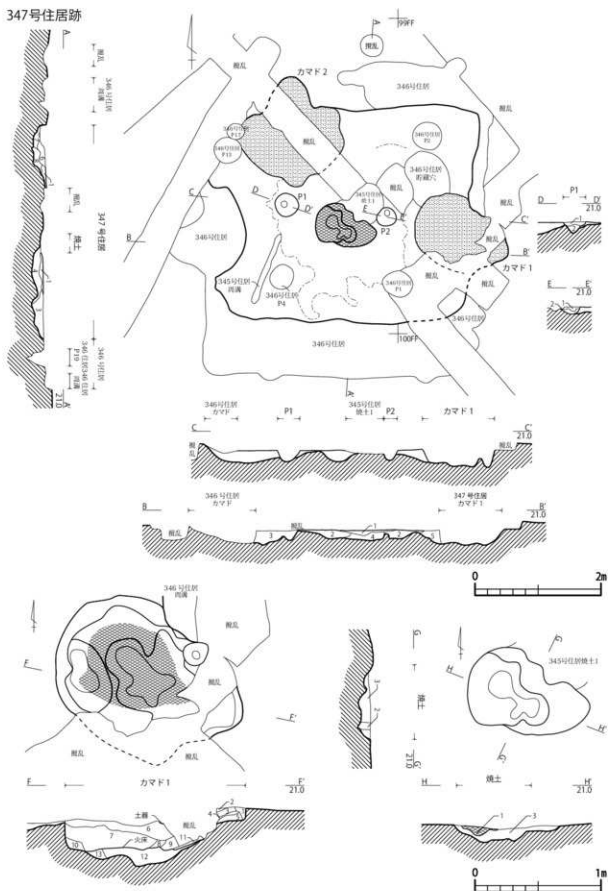
第163図 346号住居跡(2) (1/20・1/30・1/60)

346号住居跡



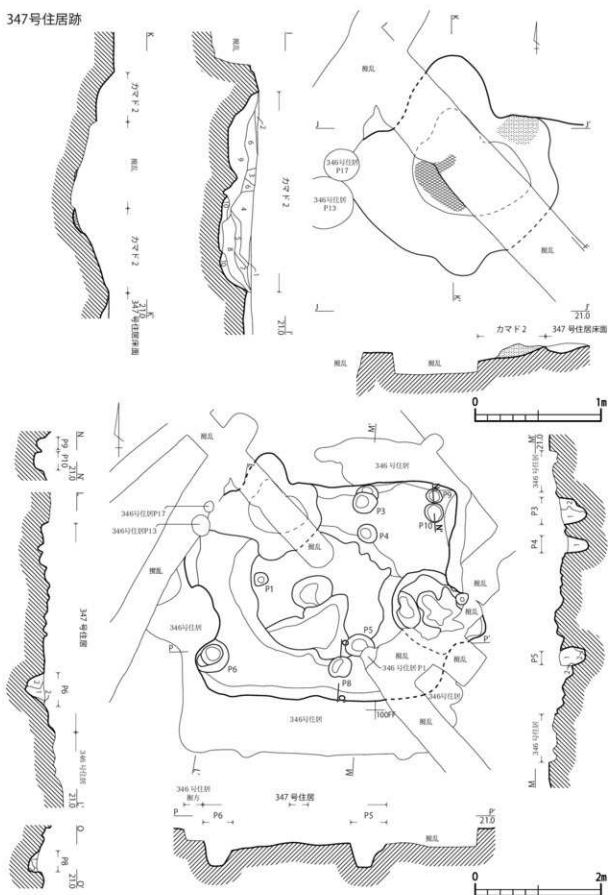
第164図 346号住居跡 (3) (1/20・1/30)

347号住居跡



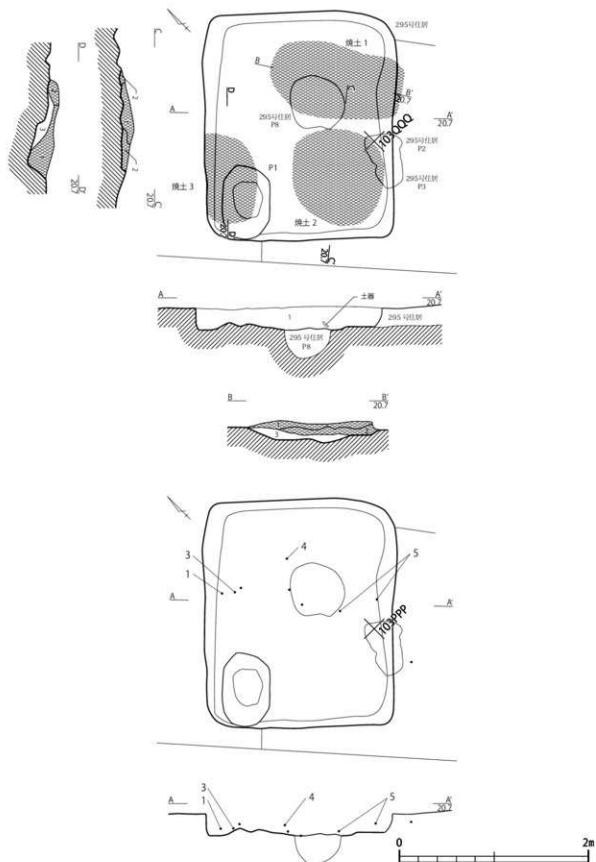
第 165 図 347 号住居跡 (1) (1/30・1/60)

347号住居跡



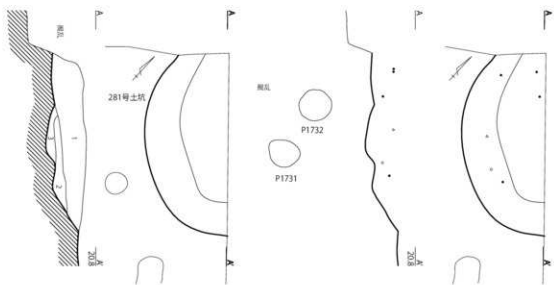
第166図 347号住居跡 (2) (1/30・1/60)

270号土坑

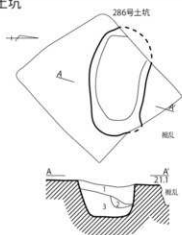


第168図 270号土坑 (1/40)

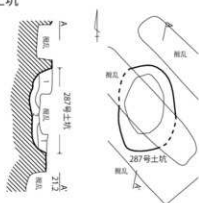
281号土坑



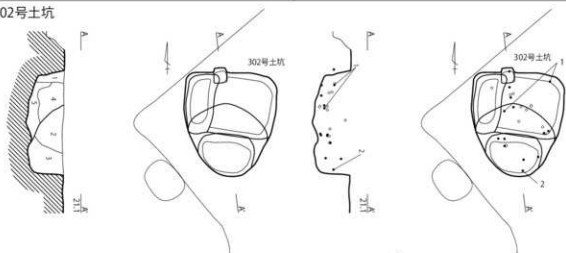
286号土坑



287号土坑

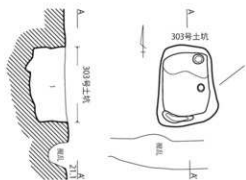


302号土坑

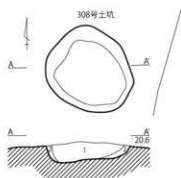


第 169 图 281·286·287·302 号土坑 (1/40)

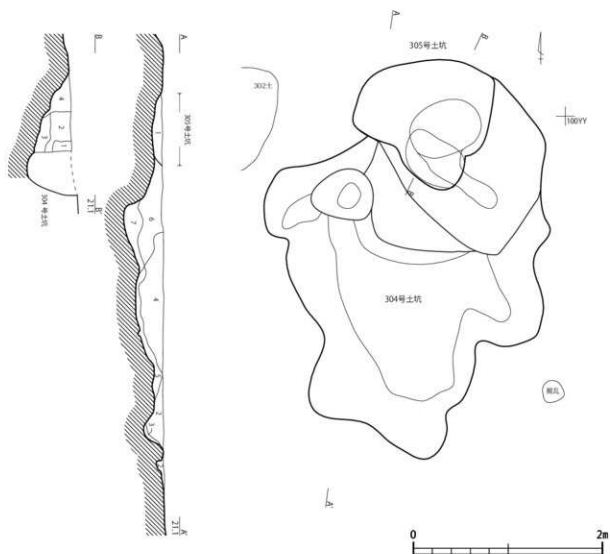
303号土坑



308号土坑

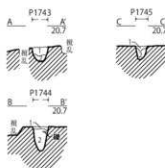
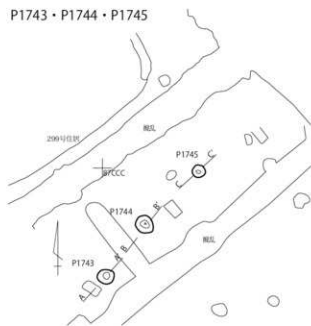


304・305号土坑

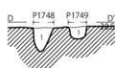
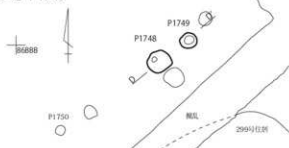


第170图 303・304・305・308号土坑 (1/40)

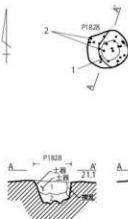
P1743・P1744・P1745



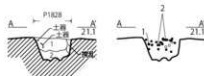
P1748・P1749



P1822・P1823



P1828



第 171 図 P1743～P1745・P1748・P1749・P1822・P1823・P1828 (1/60)

2) 遺物

284号住居跡(第172図、図版232)

土師器甕80点と坏3点、高坏1点、須恵器坏7点が出土した。これらのうち7点を図示した。1・2は須恵器坏で、1は底部が手持ちへら削りによって、2は底部が回転系切りの後、外周へら削りによって成型される。産地は1が新治、2が南比企と推定される。3は土師器坏の口縁部で、丸みを帯びて立ち上がる。4～6は甕の口縁部で、いずれもコの字状に外反する。7は甕の底部で厚手である。

8世紀中葉～後葉を主体とする。

287号住居跡(第172図、図版232)

土師器甕52点が出土した。これらのうち2個体を図示した。1は口縁～胴部で、口縁はくの字状に外反する。胴部上位に最大径をもつ。2は口縁部で、くの字状に外反する。いずれも薄手の武蔵型甕である。

平安時代、9世紀代を主体とする。

296号住居跡(第172図、図版232)

土師器173点、須恵器21点が出土した。これらのうち8点を図示した。1は須恵器蓋で、端部は短く屈曲する。2～8は須恵器坏で、3は底部回転系切りの後に外周へら削りによって成型される。この他は、底部はいずれも回転系切り未調整である。産地は1・4が南比企、2・3・5・7・8が東金子と推定される。

平安時代、9世紀中葉を主体とする。

303号住居跡(第173図、図版233)

土師器甕149点と坏23点、鉢4点、須恵器坏49点と蓋4点、碗1点が出土した。これらのうち15点を図示した。1は須恵器の蓋で、端部は短く屈曲する。2～4・6～8は須恵器坏、5は碗で、底部が残る4・6～8はいずれも回転系切り未調整である。産地は1～3・5～8が南比企で、4は東金子と推定される。10～14は土師器の坏で、体部の指頭押圧痕が顕著な南武蔵型である。15は土師器甕の口縁部で、コの字状に外反する。

出土土器には年代幅があるが、奈良・平安時代を主体とする。

308号住居跡(第173図、図版233)

土師器甕36点と坏12点、台付甕3点、鉢2点、須恵器坏4点が出土した。これらのうち2点を図示した。1は須恵器坏で底部は回転系切り未調整である。みこみに墨書で「井」が書かれる。産地は南多摩と推定される。2は小型の甕で、口縁部は直立した後、端部で短く外傾する。

平安時代の9世紀中葉を主体とする。

310号住居跡(第173図、図版233)

土師器甕51点と坏20点、台付甕・高坏1点、須恵器坏18点が出土している。これらのうち3点を図示した。1・2は須恵器の坏で、このうち2は住居床面直上から完形で出土した。側面2箇所に墨書で「丁」が書かれる。産地は1が東金子、2が南比企と推定される。

9世紀前葉～中葉の平安時代を主体とする。

311号住居跡(第173図、図版233)

土師器甕50点と坏9点、須恵器坏18点が出土した。これらのうち5点を図示した。1～3は須

恵器環で、1の側面には墨書で「丁」が書かれる。底部の残る2・3はいずれも回転糸切りの後、外周へ周削りによって成型される。産地はいずれも東金子と推定される。4は体部に指頭押圧痕が顕著な南武蔵型である。5は土師器甕で、口縁はコの字状に外反し、端部はわずかに内湾する。肩は張り、胴部上位に最大径をもつ。

奈良・平安時代を主体とする。

318号住居跡(第174図、図版234)

土師器甕492点と台付甕5点、坏7点、壺1点、須恵器環78点が出土した。これらのうち30点を図示した。1は須恵器蓋で、端部は短く屈曲する。2～20は須恵器環で、16が推定径15.6cmと大型のを除けば概ね口径11.0～12.8cmに収まる。底部の残存するもののうち、7が糸切り後に外周へ周削りされるのを除いていずれも回転糸切りのみによる調整である。21は瓶と見られる。転用により縁辺全体が著しく摩滅している。22は須恵器の甕の口縁部で、外に折り返される。産地は1～19・22が東金子、16・21は南比企と推定される。23～29は土師器甕で、口縁部は23～25・27～29はコの字状、26はくの字状を呈して強く外反する。30は台付甕の脚部で、八の字状に開く。

平安時代の9世紀前半～中葉を主体とする。

320号住居跡(第175図、図版235)

土師器甕208点と台付甕5点、坏3点、須恵器環8点、甕と瓶が1点ずつ出土した。これらのうち8点を図示した。1～2は須恵器環で、1は小型で口縁部は内湾気味に立ち上がる。2はやや大型で口縁部は直線的に開く。3は須恵器甕の頸部で、外反する。産地は1が東金子、2が東金子または南多摩、3が南比企と推定される。4・5は台付甕のそれぞれ口縁～胴部と胴下部～脚部である。4の口縁部はコの字状に外反する。5の脚部は八の字状に大きく開く。6～8は甕で、6・8の口縁部はコの字状に開く。7は底部で、胴部に向かって直線的に開く。8は肩が張り、最大径を胴部上位にもつ。

平安時代の9世紀中葉～後葉を主体とする。

321号住居跡(第175図、図版235)

土師器2点と須恵器8点が出土した。これらのうち3点を図示した。1・2は須恵器の環で、いずれも推定径12.8cmで、口縁部は外反する。産地はいずれも南比企と推定される。3は甕の口縁～胴部で、口縁部はコの字状に外反する。

平安時代の9世紀前半～中葉を主体とする。

322号住居跡(第175図、図版235)

土師器甕271点と台付甕2点、坏46点、須恵器環23点、蓋1点、甕15点が出土した。これらのうち12点を図示した。1は須恵器の蓋で、端部は短く屈曲する。2・3・5は須恵器の環で、体部は直線的に開く。4・9～11はロクロ土師器の環で、体部は直線的に立ち上がり、9は口縁部がわずかに外反する。6は須恵器の甕の胴部で、やや張る。7は胴下部で直線的に立ち上がる。8は胴中～下部で内湾しつつ立ち上がる。須恵器の産地は1が南比企、2・3が東金子で、5～8は東金子の可能性が高い。

平安時代の9世紀前半～中葉を主体とする。

328号住居跡(第176図、図版236)

土師器甕56点と台付甕3点、坏2点、須恵器环16点、蓋と甕各4点が出土した。これらのうち7点を図示した。1は蓋で、つまみ部は失われている。端部は短くS字状に屈曲する。2～5は坏で、2・4はやや内湾気味に、3・5は直線的に立ち上がる。4・5のいずれも底部は回転系切り未調整である。産地は1・2は南比企、4・5は東金子で、3は千葉地域の可能性がある。

平安時代の9世紀前半～中葉を主体とする。

330号住居跡(第176図、図版236)

土師器甕171点と台付甕24点、坏12点、壺1点、須恵器坏55点、甕2点、瓶1点が出土した。これらのうち16点を図示した。1～9は須恵器坏で、推定径11.2～12.3cmにまとまる。体部が丸みを帯びる1・3・5・7～9と、直線的な2・4・6とがある。底部が遺存するものはいずれも回転系切りによって成型されている。2には火罨が顕著に残る。10は須恵器甕での底～胴部で、内湾しつつ立ち上がる。胴部外面は平行タタキにより調整され、内面には当て具の押さえ痕が残る。産地は1・2・7が南比企、3～6・10が東金子と推定される。11～13はロクロ土師器で、11はわずかに内湾しつつ立ち上がり、ヘラミガキにより調整される。底部の残る12・13はいずれも回転系切り未調整である。14・15は台付甕で、14の胴部は直線的に立ち上がり、胴部上位で内湾する。脚部は八の字状に開く。15は厚手の脚部で、八の字状に開く。16は甕の口縁部で、コの字状に外反する。

平安時代の9世紀後半を主体とする。

336号住居跡(第177図、図版237)

土師器甕129点と台付甕1点、坏33点、鉢1点、須恵器坏17点、蓋3点、甕3点、鉢1点が出土した。これらのうち10点を図示した。1は須恵器蓋で、つまみ部分は失われている。2は須恵器坏で、体部はやや膨らみ、口縁部はわずかに外反する。3は鉢の底部で、回転系切り未調整である。割れ口が円摩しており、転用されたものとみられる。4は甕の胴部で、わずかに内湾しつつ立ち上がる。横方向のヘラナデにより調整され、工具圧痕が残る。産地は1が東金子、2が南比企と推定される。5・6はほぼ同サイズのロクロ土師器で、体部は内湾しつつ立ち上がる。底部はいずれも回転系切り未調整である。5の外面は煤の付着が顕著である。7・8は南武蔵型の土師器坏で、体部は直線的に開く。体部は指頭押圧により調整される。9は土師器甕で、口縁部はコの字状に外反する。胴部は張り、上位に最大径をもつ。10は台付甕の脚部で、八の字状に開く。

平安時代の9世紀前半～中葉を主体とする。

339号住居跡(第177図、図版237)

土師器甕218点と台付甕1点、坏5点、須恵器坏41点、蓋8点、甕2点、埴・瓶各1点が出土した。これらのうち16点を図示した。1は須恵器蓋で、つまみ部は失われている。天井部は回転系切り後に外周ヘラ削りがなされて平坦となり、端部は短く屈曲してわずかに内傾する。2～8・10・12は須恵器坏で、推定径は11.8～13.0cmまで幅がある。2～4・12は体部が直線的に開き、5～8・10はやや丸みを帯びる。底部の残るものうち、4・5・7・8はいずれも回転系切り未調整である。9は須恵器の埴で、体部は丸みを帯びて立ち上がる。底部は外周ヘラ削りによって成型される。11は長頸瓶の口縁～頸部で、直線的に開き、口縁部は外反し、端部は屈曲して直立する。産地は7・8・10・12は東金子で、1は東金子の可能性が高く、3・5・6・9は南比企と推定される。13は口

クロ土師器の坯の底部で、回転糸切り未調整である。14は台付甕の脚部で、八の字状に開く。15・16は土師器の甕で、15は口縁がコの字状に外反する。16は胴部下半で、直線的に立ち上がる。

平安時代の9世紀前葉～中葉を主体とする。

345号住居跡(第178図、図版238)

土師器甕77点と台付甕2点、坯6点、須恵器坯23点、甕2点が出土した。これらのうち10点を図示した。1～7は須恵器の坯で、推定径は12.0～13.4cm、底径は6.2～8.2cmと幅がある。口縁部は外反するもの(1)と内湾しつつ立ち上がるもの(2・3)とがある。底部が残存するもののうち3～7は回転糸切りにより、8は回転糸切り未調整である。4は回転糸切りの後、底部・体部の境界部分に粘土を帯状に貼り付けて補強し、段をなす。3の底部にはヘラにより「+」字が描かれる。産地は1・4・5は東金子、2・3・6・7は南比企と推定される。8はロクロ土師器の底部～体部で、体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後、外周ヘラ削りにより成型される。9・10は土師器甕の口縁部で、9はコの字状に外反し、10は緩く外反してコの字状を呈する。

平安時代の9世紀前葉～中葉を主体とする。

346号住居跡(第178図、図版238)

土師器甕151点と台付甕10点、鉢1点、坯9点、須恵器坯が22点が出土した。これらのうち5点を図示した。1・2は須恵器坯で、1は推定径11.0cm、2は底径5.8cmといずれも小型である。1の体部は丸みを帯び、口縁はわずかに外反する。2は回転糸切り未調整である。底部内面に自然釉が顕著である。産地は1が南比企、2が東金子と推定される。3は土師器の坯で、体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。体部はロクロ成型で、底部は回転糸切り未調整である。内面は暗文状のヘラミガキにより顕著な光沢を帯び、内面から外面口縁にかけて黒色処理がなされる。東関東系の坯である。4・5は台付甕で、4は口縁がコの字状に外反する。胴部は肩が張り、ここに最大径をもつ。5は胴下部～脚部で、脚部は短く、八の字状に大きく開く。6は甕の口縁～胴部で、口縁はコの字状に外反する。胴部上位が張り、最大径をもつ。

平安時代の9世紀前葉～中葉を主体とする。

347号住居跡(第178図、図版238)

土師器甕129点と台付甕7点、坯7点、鉢1点、須恵器坯25点、蓋3点、埴・鉢・高台付鉢各1点が出土した。これらのうち16点を図示した。1・2は須恵器蓋で、1は天井部がヘラ削りにより成型される。2は端部が屈曲し、わずかに外反する。3～9・11は坯で、推定径11.8～13.0cm、底径5.8～6.6cmである。体部が直線的に開くもの(5・8)と、丸みを帯びて立ち上がるもの(3・4・6・7・9・11)があり、底部が残存するものはいずれも回転糸切り未調整である。10は須恵器甕で、体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁はわずかに外反する。体部に不明瞭な墨書が入るが、判読は困難である。12は高台付鉢の底部で、底部は回転糸切りの後に高台を帯状に貼り付けている。高台の端部は八の字状に開く。産地は1・2・4・6・10が南比企、3・5・7・9・11が東金子と推定される。13・14はいずれも口縁部をヨコナデ、体部を指頭押圧により成型した南武蔵型の土師器坯である。15・16は土師器甕の口縁部と底部で、15はコの字状に外反し、指押さへの痕跡が残る。16は底部から胴部に向けて直線的に立ち上がる。

平安時代の9世紀前葉～中葉を主体とする。

270号土坑(第179図、図版239)

古墳時代後期～奈良・平安時代の土器は169点が出土した。これらのうち5点を図示した。1は完形の上師器の盤状環で、体部は平底の底部から直線的に開く。底部は回転ヘラ削りによって調整される。2は環の口縁～体部で、口縁部は外傾し、体部との境は稜をなす。3・4は鉢で、3の口縁部は直線的に開く。4の口縁部は内側が肥厚しながら直立し、体部との境は稜をなす。5は甕の口縁で、くの字状に外反する。

帰属時期は古墳時代後期(3～5)と奈良・平安時代(1・2)に分かれるが、前者は295号住居跡に由来する可能性が高い。後者は8世紀前半～中葉のものが主体をなす。

302号土坑(第179図、図版239)

覆土の中～下層から土師器・須恵器環が14点出土した。このうち2点を図示した。1・2は須恵器の環で、1は推定径13.6cmとやや大型で、体部は丸みを帯びて口縁は外傾する。2は回転系切りにより成型され、内面には「廿」または「井」と見られる墨書が入る。産地は1が東金子である。

平安時代の9世紀後半のものを主体とする。

P1828(第179図、図版239)

覆土中層～上層から土師器・須恵器27点が出土した。ここではこれらのうち2点を図示した。1は須恵器環で、推定径11.8cmと小型である。体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。産地は東金子と推定される。2はロクロ土師器の環で、推定径13.2cmとやや大きい。体部は直線的に大きく開き、口縁部はわずかに膨らむ。底部は回転系切り未調整である。

遺構外(第180図、図版239・240)

遺構に伴わない、あるいは時代の異なる遺構から出土した土器のうち41点を図示した。

1～34は須恵器で、35～41は土師器である。1・2は蓋で、1は外周ヘラ削りした天井部に擬宝珠つまみが付く。体部は緩やかに開く。2は端部がS字状に屈曲して直立する。3は高台付皿の体部～口縁部で、浅く大きく開き、口縁部は外反して水平に近い。4～17は環で、口縁部の遺存するものの推定径は12.0～13.0cmの範囲に、底部の遺存するものは推定底径5.6～7.0cmの範囲にまとまる。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるもの(4・6・9・10・14・15)と、直線的に立ち上がるもの(7・12・13・16)とがある。底部はヘラ削りによるもの(9)と回転系切り後に外周ヘラ削りがなされるもの(11)、回転系切りによるもの(6・7・8・10・12～17)がある。18は碗で、内湾しつつ立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。19は長頸瓶の頸部～口縁部で、外反して立ち上がり、端部は屈曲して直立する。20・21は横瓶で、20は側縁部が回転ヘラ削りにより調整される。21は側縁部に同心円状のかき目が残る。22～34は甕で、口縁部が外反して端部が肥厚し、段をなすもの(22～25)と稜をなすもの(28)がある。胴部はロクロ整形(27・30・31・34)と平行タタキ(26・29・32・33)によって内面に当て具痕の残るものがある。甕には側縁部が円磨したもの(26・28～31)が多く認められ、転用されたものと見られる。産地は東金子(17・10・12・13・17・19・23・24・31・32)と南比企(6・8・9・11・14～16・18・22・25・34)が多くを占め、南多摩(3)がわずかに認められた他、湖西(20・26・33)と推定されるものもある。

35～41は土師器で、35～39はロクロ土師器の坏である。35は推定径11.6cm、底部の残るものの推定底径は6.0～7.0cmである。体部は内湾しつつ立ち上がるもの(35・36)と直線的に開くもの(37・39)がある。38は内面が黒色を呈する。底部はいずれも回転糸切りによる。40は塊で、底部は台状を呈し、端部は開く。41は甕の底部～胴部で、直線的に立ち上がる。

土製品・石製品・金属製品(第181図・図版242)

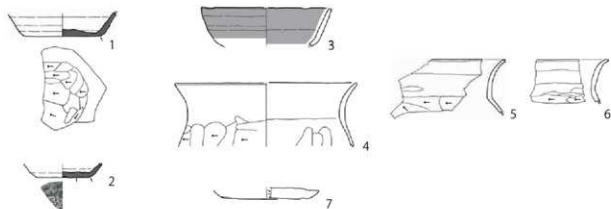
古墳時代後期～奈良・平安時代の土製品6点、石製品3点、金属製品1点を図示した。

土製品には支脚(1～3)と土錘(4～6)がある。支脚はいずれも円柱状を呈し、側面はヘラによる面取りされる。4～6は同一の遺構から出土した管状土錘で、長さ4.9～5.4cmとよく揃う。中央部が膨らみ、側面に指頭押圧痕が残る。

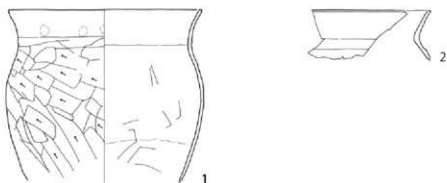
石製品は管玉2点と石帯(巡帯)1点が認められた。1は径1.1cm、長さ(厚さ)4mmの滑石製の管玉(白玉)、2は端部がわずかに失われ、径0.8cm、残存長2.1cmの滑石製の管玉である。3は縦3.5cm、横3.7cm、厚さ0.5cmの蛇紋岩製の石帯で、中央下寄りに長方形の窓が開き、裏面の四隅に縦に2箇所ずつ、糸を通すための孔がつく。断面は台形を呈し、表面・側面ともよく研磨されて平滑になっている。

金属製品は鉄鎌1点が認められた。先端が失われているがほぼ完存状態で、錆を除いた残存長は6.5cm、幅は1.3cmである。鎌身は長三角形で、断面は両面とも丸みを帯び、鋭角の脇伏がつく。茎部は通直で断面はほぼ方形で、端部は尖らない。

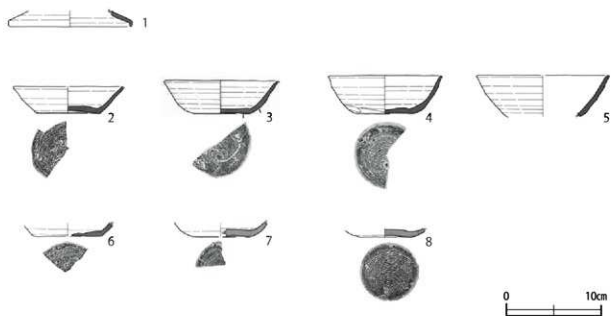
284号住居跡



287号住居跡

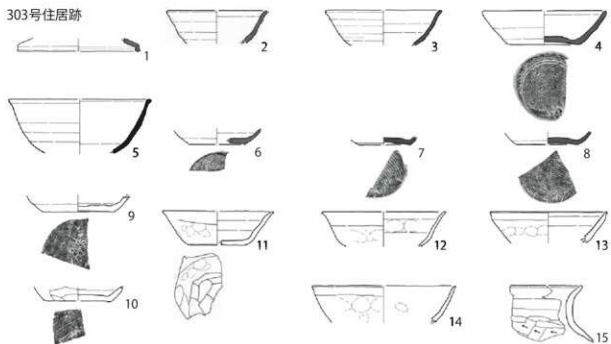


296号住居跡

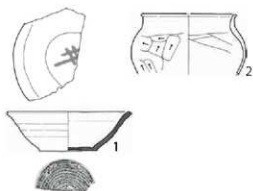


第 172 図 284・287・296号住居跡出土土器 (1/4)

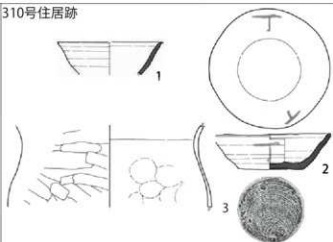
303号住居跡



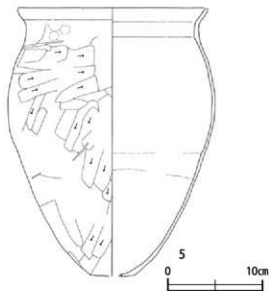
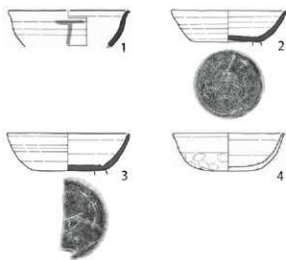
308号住居跡



310号住居跡

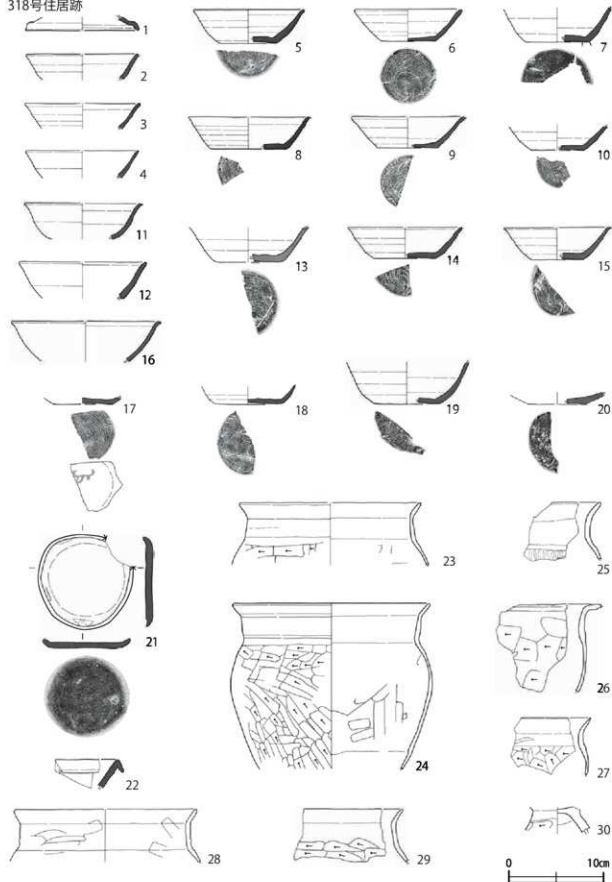


311号住居跡



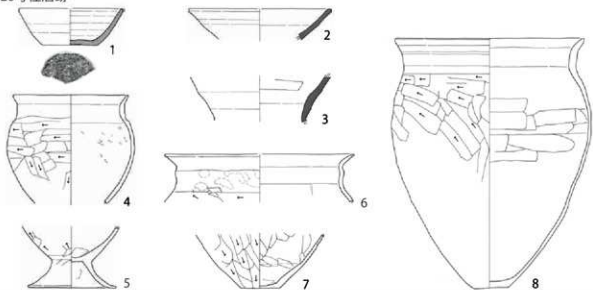
第173图 303・308・310・311号住居跡出土土器 (1/4)

318号住居跡

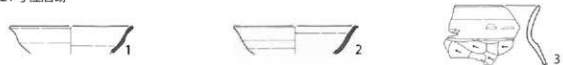


第 174 图 318号住居跡出土土器 (1/4)

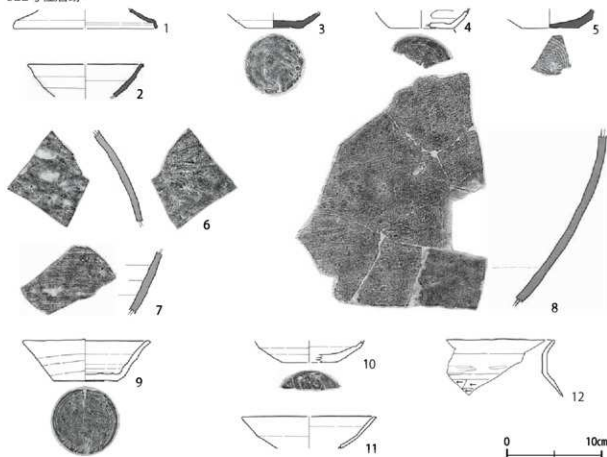
320号住居跡



321号住居跡

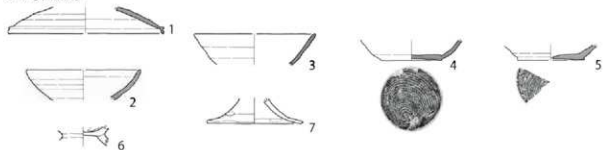


322号住居跡

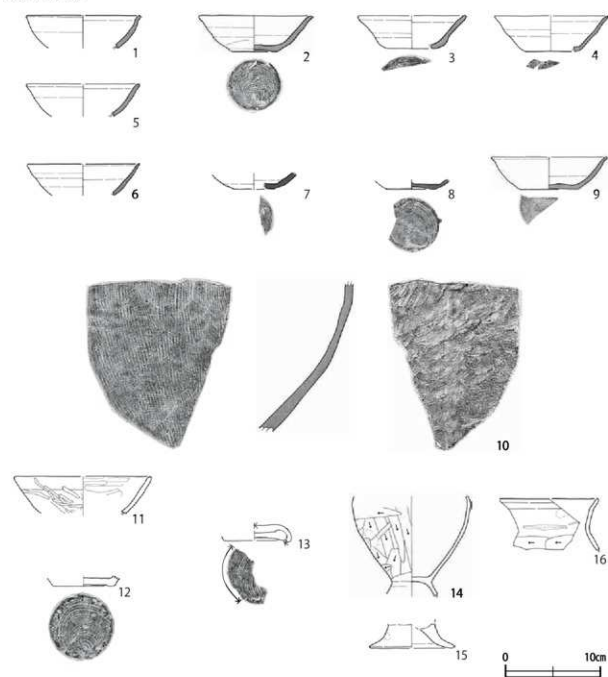


第 175 图 320・321・322 号住居跡出土土器 (1/4)

328号住居跡

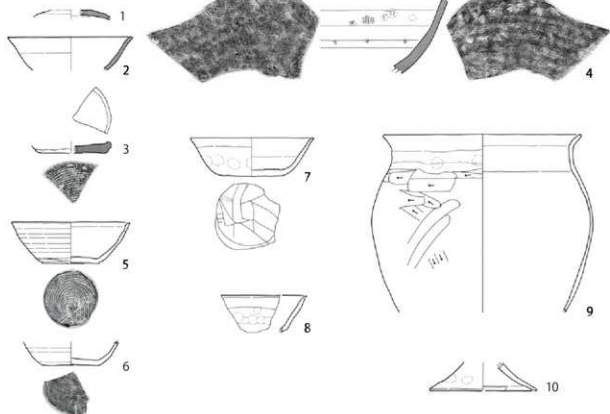


330号住居跡

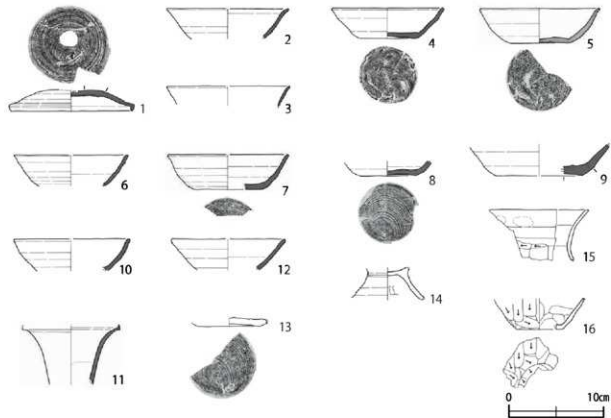


第176図 328・330号住居跡出土土器(1/4)

336号住居跡

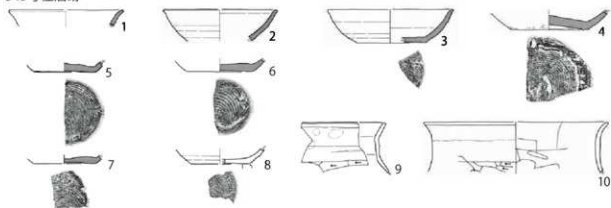


339号住居跡

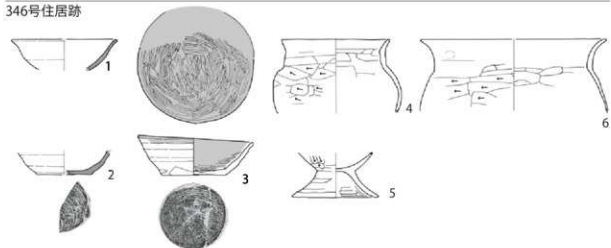


第 177 图 336・339号住居跡出土土器 (1/4)

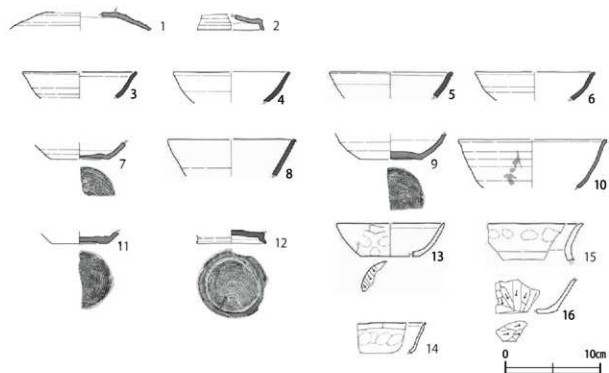
345号住居跡



346号住居跡

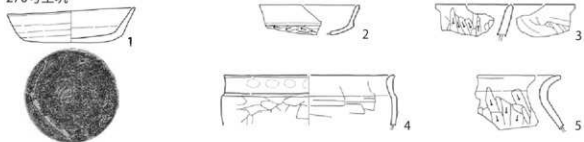


347号住居跡



第 178 図 345・346・347号住居跡出土土器 (1/4)

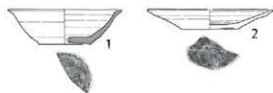
270号土坑



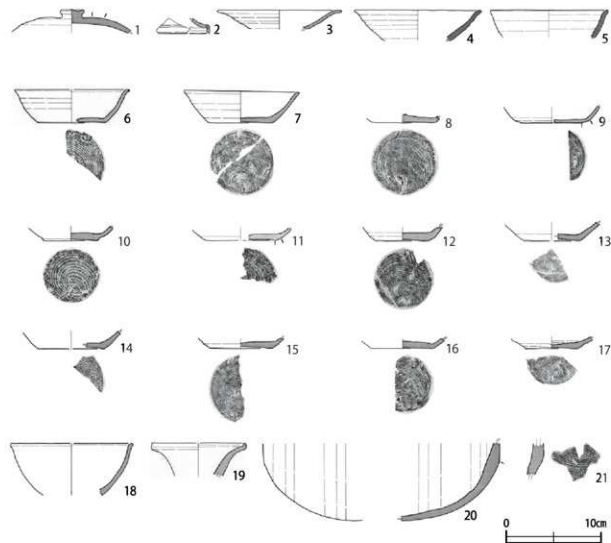
302号土坑



P1828

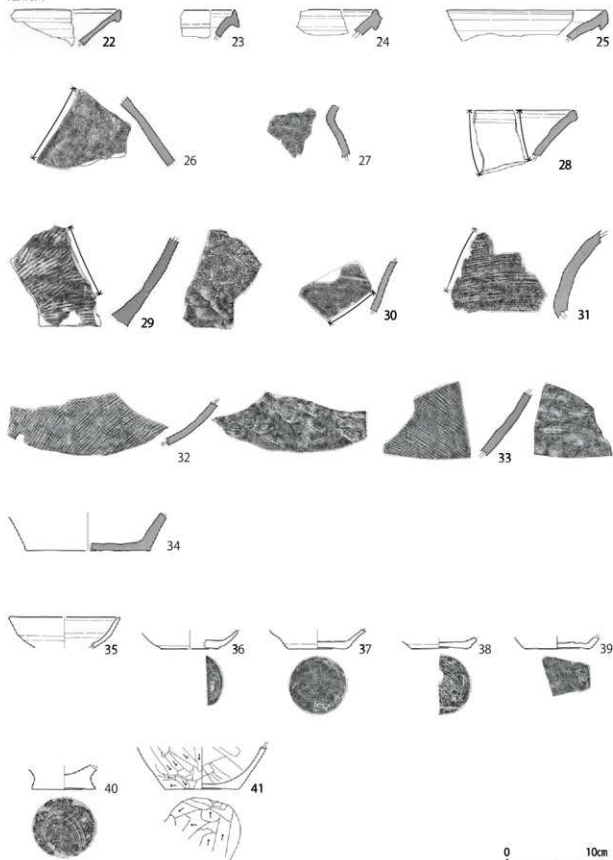


遺構外



第 179 图 270 号土坑·302 号土坑·P1828·遺構外出土土器 (1/4)

遺構外



第180図 遺構外出土土器 (1/4)

土製品

304号住居跡



286号土坑

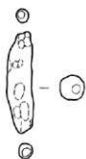


3

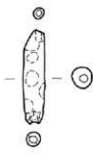
346号住居跡



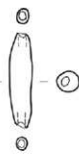
321号住居跡



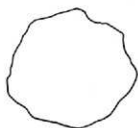
4



5



6



2

石製品

302号住居跡



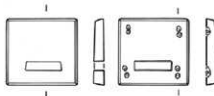
1

309号住居跡



2

322号住居跡



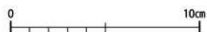
3

金属製品

347号住居跡



1



第181図 古墳～奈良・平安時代の土製品・石製品 (1/2)

6 中世

1) 遺構

今回の調査で検出された中世の遺構は、土坑（地下式横穴）4基である。これらはいずれも調査範囲の東寄りに分布し、互いに7～25mの間隔をもつ。

280号土坑（第183図、図版243）

調査区中央東寄り、91FFF・GGGグリッドに位置する。282号土坑（地下式横穴）の南西約8mの位置にあたる。不整長方形の地下室と円形～不整形の竪坑からなる297×270cm、深さ242cmの地下式横穴である。竪坑と地下室の中央をとる主軸はN62°Wで竪坑は南東側に設けられている。

地下室部分は北西～南東方向に270cm、北東～南西方向に197cmの長方形で、竪坑側がやや狭い。天井までの高さ136cmで、天井は一部が遺存するが、調査時に露天掘りして失われた。壁面はオーバーハンクして立ち上がり、南東隅の壁には窪みが設けられている以外は概ね平滑で、下部は上下・斜め方向に、上部は横方向に工具痕が認められる。覆土は竪坑側から流入するかたちで堆積しており、地下室部では底面からの深さ40cm程度で上部は空洞となっていた。均質な黒褐色シルトからなり、いずれも締まりがほとんどなく、ロームブロックなどの混入物をほとんど含まないことから自然堆積と見られる。

竪坑部分は開口部の径130cm、中～下部の径88cmで、確認面からの深さ188cm程度に平坦面があり、そこから地下室部まで44cmの段差となる。

出土遺物は常滑産の甕の肩部が1点、土師器13点、須恵器4点、縄文土器1点の他、地下室部の覆土下層から砥石が1点と板碑の破片の可能性のある片岩1点、亜円礫30点が認められた。

282号土坑（第184図、図版244）

調査区中央東寄り、89・90HHHグリッドに位置する。280号土坑（地下式横穴）の北東約8m、283号土坑（地下式横穴）の南東約26mの位置にあたる。長方形の地下室と円形の竪坑からなる290×222cm、確認面からの深さ164cmの地下式横穴である。竪坑と地下室の中央をとる主軸はN37.5°Wで竪坑は南東側に設けられている。

地下室部分は北西～南東方向に182cm、北東～南西方向に222cmの長方形で、竪坑側がやや広い。天井までの高さ151cmで、天井は一部が遺存するが、調査時に露天掘りして失われた。壁面はほぼ垂直でややオーバーハンク気味に立ち上がり、概ね平滑で、一部に工具痕と見られる凹凸がある。覆土は竪坑側からの流入（1・4・6層）と天井の崩落に伴うもの（2・3・5層）からなる。竪坑側の覆土の上部（1層）には近代の建物基礎に由来すると見られる砂を多く含む。

竪坑部分は径96cmで、確認面からの深さ116cm程度に平坦面があり、そこから地下室部まで34cmの段差となる。竪坑と地下室の接続部は上下81cm、左右65cmの長方形のトンネル状を呈する。

出土遺物は漆塗膜片1点が認められたが、器種は不明である。他に土師器2点と亜円礫1点が出土した。

283号土坑（第185・186図、図版245～247）

調査区北東寄り、85・86CCC・DDDグリッドに位置する。282号土坑（地下式横穴）の北西約26mの位置にあたる。不整長方形の地下室と円形の竪坑からなる386×283cm、確認面からの深

さ 469cm の地下式横穴である。竪坑と地下室の中央をとおる主軸は N55° W で竪坑は南東側に設けられている。

地下室部分は北西-南東方向に 221cm、北東-南西方向に 283cm の長方形で、竪坑側がやや広い。天井までの高さ 154cm で、天井は遺存するが、調査時に露天掘りして失われた。壁面はほぼ垂直でやや開き気味に立ち上がり、工具痕と見られる凹凸が散在する。覆土はほぼ水平堆積で、水の営力により堆積したとみられる層（15 層）も認められることから、自然堆積により徐々に埋没したものと見られる。

竪坑部分は開口部の径 134cm、で、確認面からの深さ 360cm 程度に緩く傾斜した平坦面があり、そこから地下室部まで 94cm 程度の比高で急傾斜する。竪坑と地下室の接続部は上下 95cm の、上部がアーチ形のトンネル状を呈する。

出土遺物は遺構底部付近に集中する。常滑産の甕（1・2）の他、焙烙（3）が認められた。この他に縄文土器 20 点と弥生土器 69 点、土師器 29 点、須恵器 18 点、土師器 2 点が混入する。砥石などの石製品 10 点の他、垂円礫が 298 点と多数出土したが、このうちには被熱して赤化したものや煤が付着したものも若干認められた。

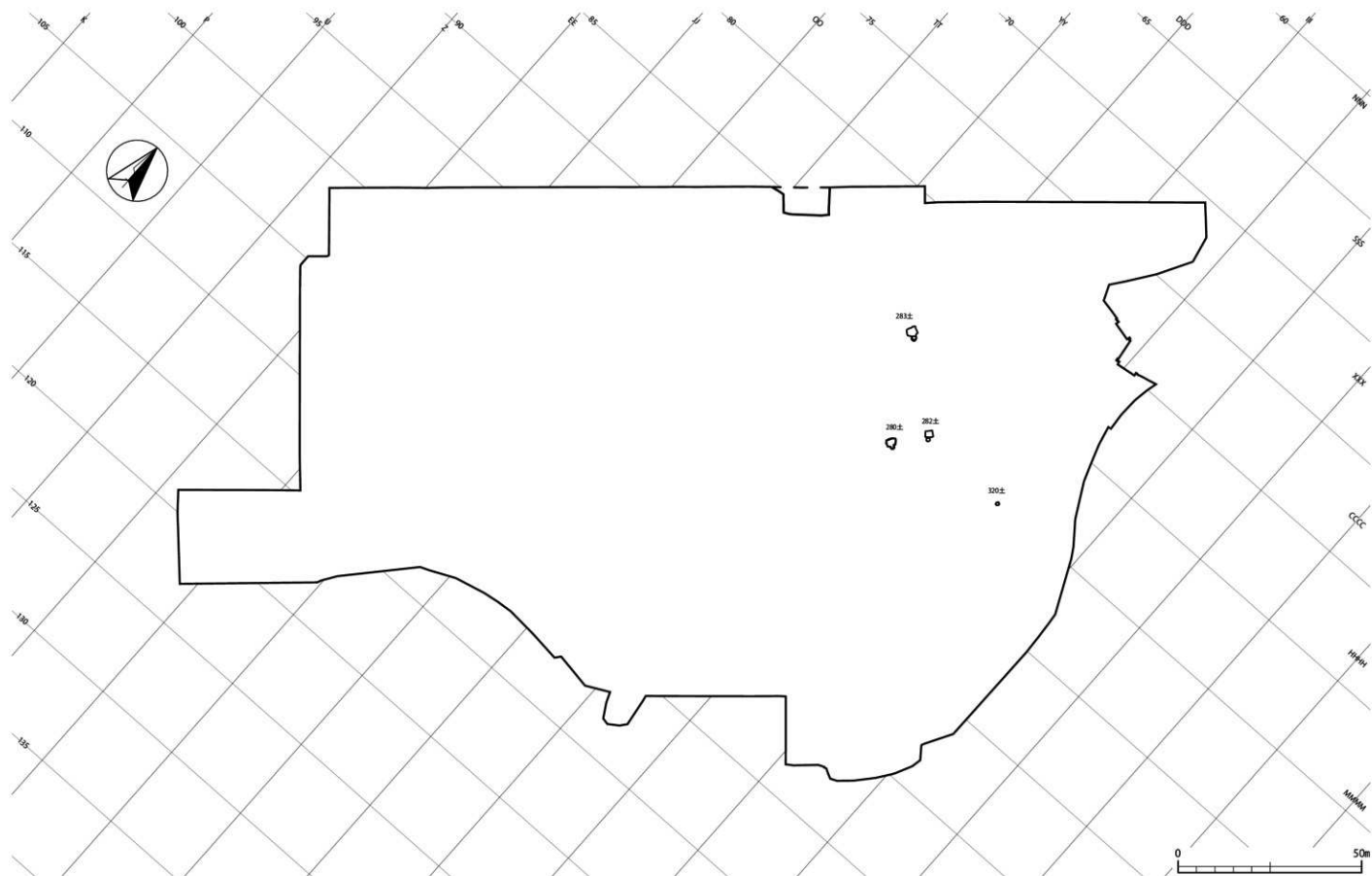
320 号土坑（第 187 図、図版 247）

調査区東側、89・90MMM グリッドに位置する。282 号土坑（地下式横穴）の東約 25m の位置にあたる。地下室と円形の竪坑からなる地下式横穴である。竪坑は南側に設けられている。

地下室部分は近代の建物基礎の下位に位置し、掘削しての調査はできなかった。深さ約 240cm 程度で底面を確認した。

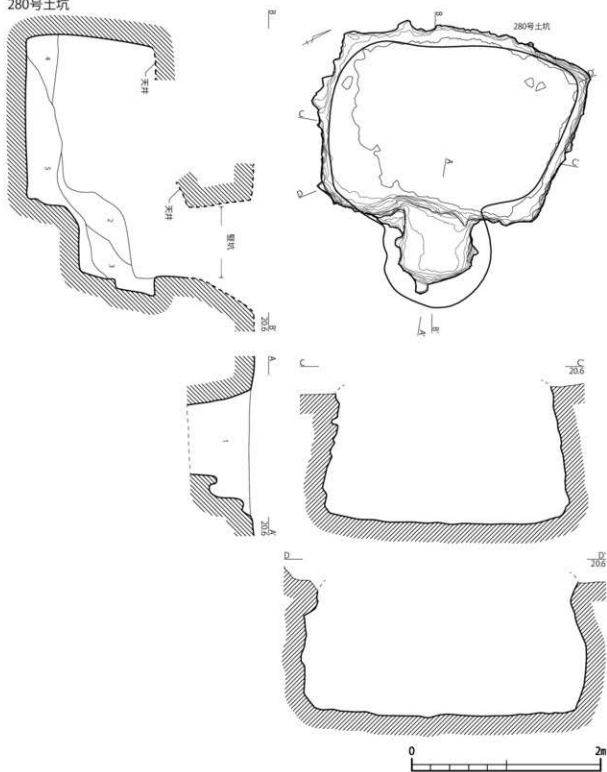
竪坑部分は開口部の径 102cm の円形で、確認面からの深さ 84cm まで掘削したところ、黒褐色シルトを主体とする均質な覆土を確認した。安全を考慮してこれ以深の掘削はおこなわなかったため、詳細は不明である。

出土遺物は縄文土器 4 点と弥生土器 2 点、土師器 1 点からなり、いずれも覆土上部に流入したものである。



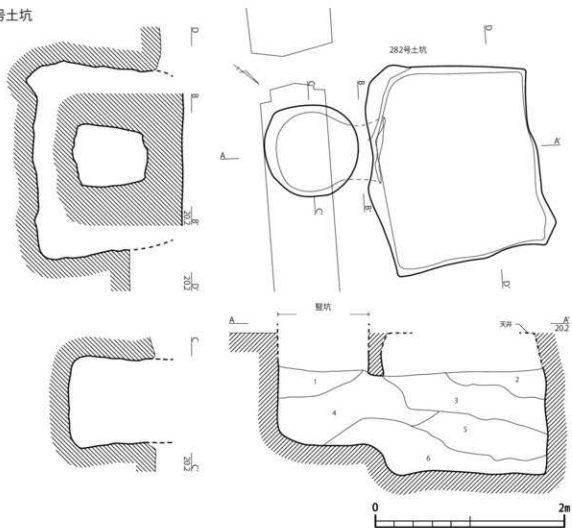
第 182 図 道合遺跡 時代別遺構配置図 (5) 中世 (1/1,000)

280号土坑



第183图 280号土坑 (1/40)

282号土坑



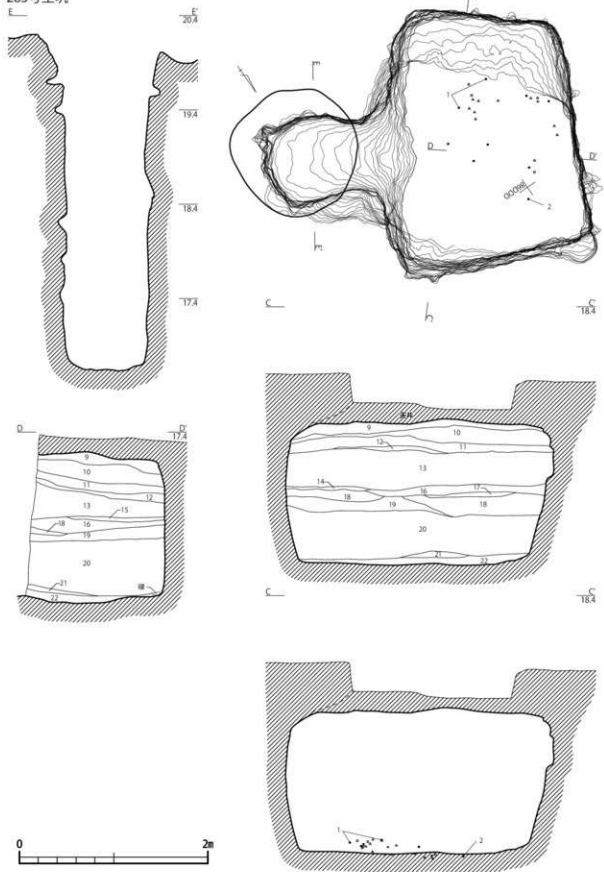
第184图 282号土坑 (1/40)

283号土坑

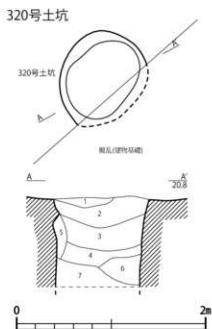


第185図 283号土坑 (1) (1/40)

283号土坑



第186图 283号土坑(2)(1/40)



第187図 320号土坑 (1/40)

2) 遺物

舶載磁器 2 点、国産陶器 28 点、土器 4 点、石製遺物 3 点の計 37 点が出土した。うち、舶載磁器 2 点、国産陶器 15 点、土器 2 点の計 19 点について図化し掲載する。

[中世の遺構から出土したもの]

283 号土坑-1、283 号土坑-2 は陶器の甕。283 号土坑-1 は底部から胴部にかけてで、283 号土坑(地下式坑) 出土の 2 破片の接合資料である。濃淡の灰色の土がマーブル状に練り合わさったような胎土で、径 1mm 以下の白色粒子がわずかに見られるものの、大粒の粒子は見られない。内底面に溜まった釉は、自然釉であろう。胎土の特徴から、常滑の製品ではないと考えられる。283 号土坑-2 は底部。胎土が粗く、大粒の白色粒子がかなり見られることから、常滑の製品と考えられる。内面に自然釉が見られる。

[中世の遺構以外から出土したもの]

2 は青磁緑折皿の口縁部で、外面に鑄連弁文が施されている。中国龍泉窯の製品で、13 世紀から 14 世紀初頭のものと考えられる。1 は青磁碗の底部で、外面は畳付けが半分覆われるまで施釉がされている。高台内は無釉だが、飛び散った釉の付着が見られる。中国龍泉窯の製品で、13 世紀から 14 世紀のものであろう。

5 は陶器灰釉皿の底部である。外面にわずかに釉だれが見られるが、内外両面とも残存部分は無釉である。緑釉皿であろう。底部が厚く、体部への立ち上がりは丸みを帯びており、やや深めの可能性がある。底部外面には回転糸切痕が見られるが、回転方向は不明である。6 は陶器鉄釉の緑釉皿で、口縁部。胴部以下の形状は不明である。11 は陶器の灰釉折縁深皿である。胴部破片だが、わずかに残っている折縁部分縁辺のエッジは角張ってしっかり立っている。12 は陶器灰釉小壺で完形である。口縁端部の釉は摩滅によってかなり剥落しているが、元々は外面から内面にかけて施釉されていることから小壺とした。底部外面は無釉で、右方向の回転糸切痕が見られる。これら 4 点は、いずれも古瀬戸後期、14 世紀後葉から 15 世紀後葉のものと考えられる。

7 は陶器鉄釉の稜皿で、口縁から底部にかけてである。底部は碁掛底状に高台内のみを浅く削り出しており、外面には厚めの鉄釉が畳付けの際まで施釉される。瀬戸・美濃の大窯 3 期、16 世紀後葉の製品である。

9、8、10 は陶器の灰釉皿である。9 は底部。釉は緑がかかった色調で、浅い削り出し高台の内側は拭き取られている。残存部位が小さく、細かい時期は不明であるが、瀬戸・美濃の大窯製品で、15 世紀末から 17 世紀初頭のものである。8 は口縁部から底部にかけての破片である。口縁部が大きく外側に開く折縁の緑釉皿だが、見込み部分にも薄い施釉が見られる。付け高台で、全体にスス様の炭化物が付着している。瀬戸・美濃の大窯 3 期、16 世紀後葉の製品であろう。10 は底部。見込から体部に立ち上がる際に沈線が施され、体部に向かって縦の稜が見られることから、内面に丸ノミ状工具によるソギの施された折縁皿と考えられる。高台は削り出しで、螺旋状の削り出し痕が顕著である。瀬戸・美濃の大窯 4 期、16 世紀末から 17 世紀初頭の製品である。

13 は陶器鉄釉播鉢の口縁部である。器壁は薄く、口縁端部は内側に張り出している。瀬戸・美濃の大窯 3 期、16 世紀後葉の製品である。

3、4 は陶器天目碗である。3 は胴部で、高台周辺にやや薄い錆釉が施されている。瀬戸・美濃の

大窯2期、16世紀半ばの製品である。4は口縁部で、端部の括れが弱く、器壁は薄い。瀬戸・美濃の大窯4期、16世紀末から17世紀初頭の製品であろう。

14、15は陶器の甕である。14は口縁部。胎土は粗く、大粒の白色粒子が見られる。断面N字状に折り返された端部は、頸部に密着することなく、しっかり張り出している。常滑の6～7型式、13世紀後半～14世紀ごろの製品であろう。15は頸部から肩部にかけてである。胎土は粗く、大粒の白色粒子がかなり見られることから、常滑の製品と考えられる。破断面に2か所、顕著な摩耗が見られ、破片の反りを利用して、手持ちの転用砥としたと考えられる。頸から肩にかけて大きく弧を描く破断面の摩耗は砥面としての使用痕、頸部脇に小さく例られて摩耗している部分は親指の付け根がしっかりと取まるように加工されたものであろう。

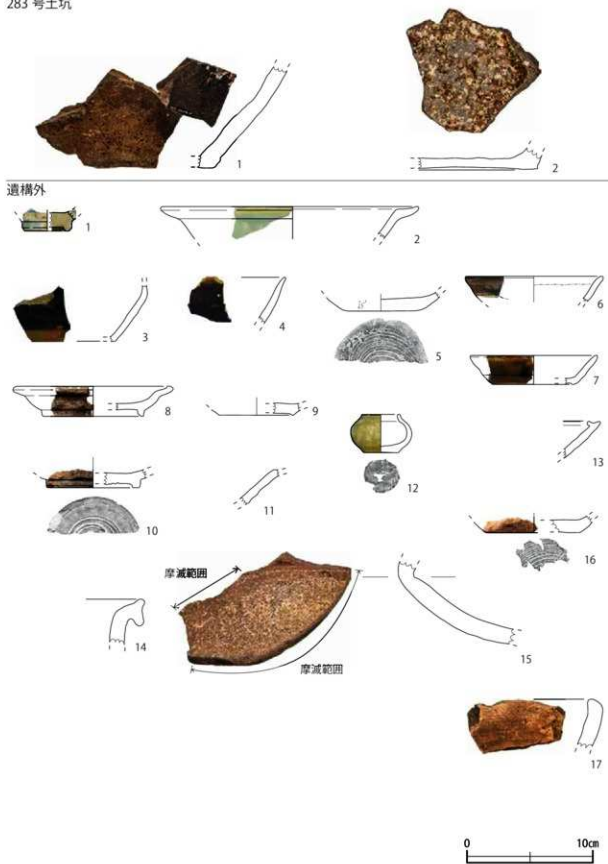
17は在地土器内耳鍋の口縁部である。胎土は白っぽい陶褐色。粗く、やや砂っぽく、径1mm以上の白色粒子、赤色粒子を含む。端部は外側が丸く、内側はエッジが立っている。内外両面とも横方向のナデ調整痕が顕著である。15世紀のものであろう。

16は在地土器カワラケの底部である。胎土は白っぽく、粗くて砂っぽい。径1mm以下の褐色粒子、黒色粒子を多く含む。外面に回転糸切痕が見られるが、回転方向は不明である。

掲載しなかったものの内訳は、常滑の陶器甕10点、古瀬戸の陶器灰釉緑釉皿2点、瀬戸・美濃の大窯陶器鉄釉緑釉皿1点、伊勢鍋1点、板碑破片2点、計16点である。

掲載しなかったものも含めて全体を見渡すと、中世前半（14世紀以前）にまで遡り得るものは、中国龍泉窯の青磁2点（1、2）、常滑の甕（口縁部、14）1点の計3点にとどまる一方、中世後半（15世紀以降）に属するものとしては、古瀬戸後期（14世紀後葉から15世紀後葉にかけて）の製品7点、瀬戸・美濃の大窯期（15世紀末から17世紀初頭）の製品7点が認められる。古瀬戸後期の製品は、15世紀のものが中心と考えられる。在地土器の内耳鍋2点（D283-5、外35）もほぼ同時期のものであろう。また、残存部分が小さいため、図を掲載しなかった283号土坑出土緑泥片岩も、縁辺や表裏の状態、厚みなどを考慮すると、この時期の所産の板碑破片の可能性があろう。瀬戸・美濃の大窯製品は、概ね後半の16世紀半ばから末ごろまでに生産されたものが中心と考えられる。

時期を明確にし得なかったものとしては、283号土坑-1も含む陶器甕の口縁部以外の破片13点、伊勢鍋1点、板碑の破片2点がある。283号土坑-1は胎土から常滑の製品ではないと考えられ、渥美の製品である可能性がある。そうであれば、時間的には12世紀にまで遡り得るが、現時点では保留としておく。また、伊勢鍋については、破片が小さく詳細不明であるが、当該期においては、少ないながらも一定量の出土が見られる遺物として注目していきたい。



第188図 道台遺跡・赤羽上ノ台遺跡 中世の磁器・陶器・土器 (1/3)

7 近世

1) 遺構

今回の調査で検出された近世の遺構には溝跡と畝跡2か所、土坑19基、ピット96基、焼土範囲1か所があった。溝跡はこれまでの調査地点において確認されたのと同様に、調査範囲のほぼ全域にわたって網目状に分布していた。畝跡はこれらの溝跡によって区画された範囲内に配列しているのがわずかに確認された。

溝跡（第190～196図、図版248～258）

調査区のほぼ全域にわたって確認された。北西側と南西隅には空白域が認められるが、この一帯は近代以降の削平が著しく、これによって煙滅した可能性が高い。調査の進捗にしたがって番号を付したため、一連の溝に複数の遺構番号が付されたものもある。溝の方向はおおむね東西軸に沿ったものと南北軸に沿ったものの2種類に分けられ、これらが交差ないし接続することで、方形～長方形の区画を形成しており、これまでの調査地点における様相と共通する。調査区南東側（309号溝・322号溝・324号溝）においてはやや北東-南西方向に振れるが、これは台地の南東側の縁辺の地形に沿ったかたちに配列したものであろう。

平面上の規模には幅があるが、上部を削平された結果、見かけ上は小規模になったものもあるため、本来はほとんど同程度の規模であったと推定される。断面形は鈍角に開くが、一部に垂直に近い立ち上がりをもつ箇所（324号溝・326号溝）も認められた。2条の溝が並列する箇所や、大規模なところでは断面がW字状を呈し、底部が轆状に硬化する箇所もある。

これらの溝のうち、調査区北東端から南に伸びる291号溝・292号溝・304号溝は2条の溝が並走し、この北西側には同規模の318号溝・338号溝が南北方向に伸びる。既往調査ではこれらの溝跡の北側にあたる位置から、近世の旧板橋街道とそれに付随する徒小路が発見されており、これらの溝跡も徒小路を構成する溝と推定される。

いずれの溝も黒褐色～暗褐色シルトを主体とし、底部付近を中心にローム粒～ブロックを混入する覆土からなる。底部付近の覆土は地山のロームが自然の営力によって巻き上げられており、それに続く中～上層の覆土はレンズ状～水平堆積を示す。覆土には溝どうしの切り合いは認められないことから、緩やかな自然堆積によってほぼ同時期に埋没したものと見られる。

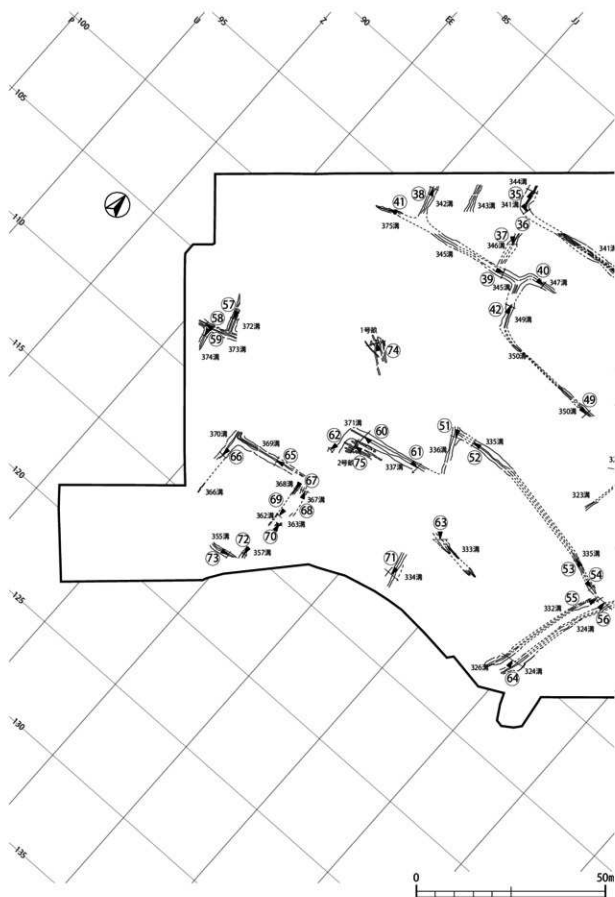
出土遺物は近世の陶磁器類が大半を占め、そのほとんどが小破片である。これらの遺物の所属年代は17世紀前半～幕末まで幅がある。

畝跡（第196図、図版258）

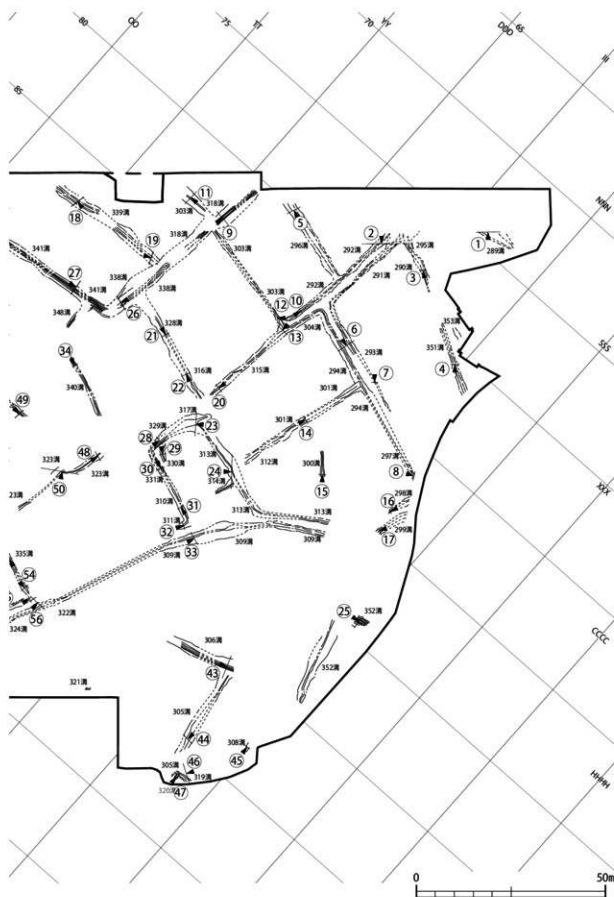
調査区西側中央で2箇所の畝跡が確認された。

1号畝跡は約10×10mの範囲に8条の掘り込みが北西-南東方向に入るもので、西端の1条は別の掘り込みを切って構築されていることから、これらの掘り込みには時期差があるものと見られる。上部は削平が著しく、確認された掘り込みはいずれもごく浅い。

2号畝跡は1号畝跡の南東側に位置し、東西方向に走る7条の掘り込みからなる。掘り込みは45～65cmの比較的一定したスパンで、深さはいずれも10cm程度である。覆土はいずれも均質な黒褐色シルトからなる。

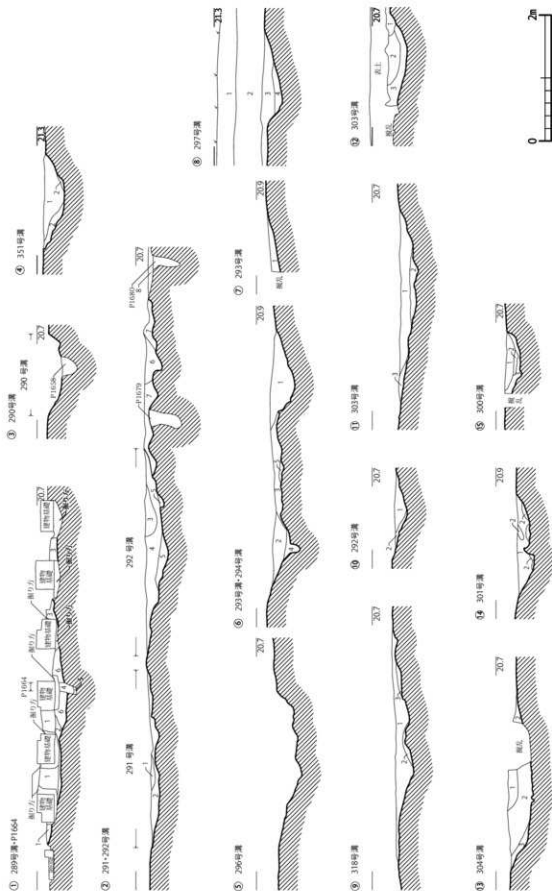


第 190 图 溝・畝全体图 (1) (1/1,000)

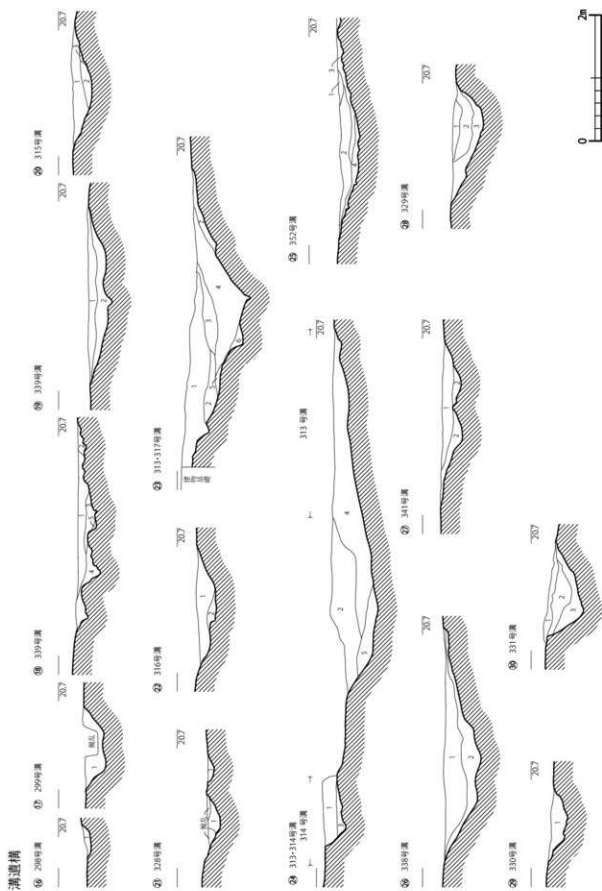


第 191 図 溝・畝全体図 (2) (1/1,000)

溝遺構

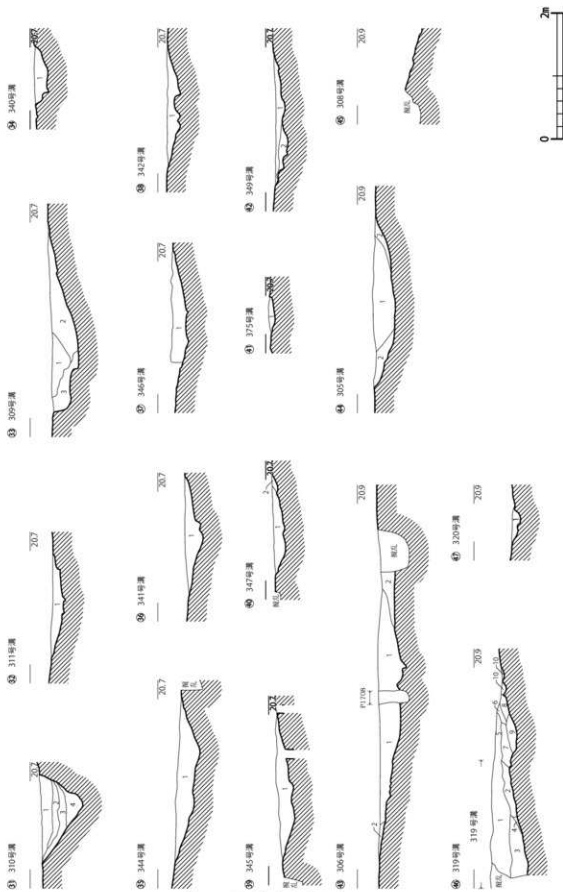


第192図 溝 (1) (1/60)



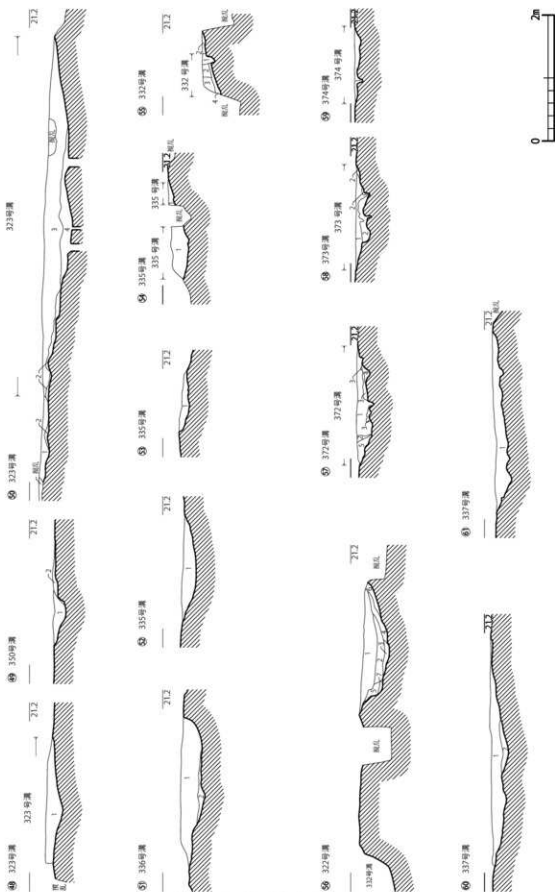
第193図 溝 (2) (1/60)

溝遺構



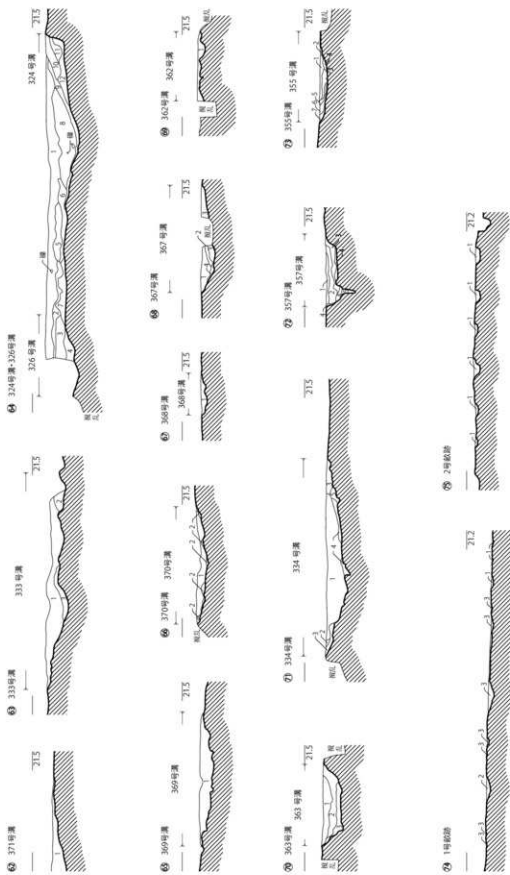
第194図 溝 (3) (1/60)

溝遺構



第195図 溝 (4) (1/60)

溝遺構



第196图 溝(5)・敷(1/60)

2) 遺物 (第 198・199 図、図版 259)

道合遺跡

磁器 76 点、陶器 149 点、土器 39 点、土製品 4 点、火打石 3 点、砥石 8 点、金属製品 16 点、瓦 1 点、計 296 点が出土した。うち、磁器 9 点、陶器 19 点、土器 3 点、土製品 2 点、火打石 3 点、砥石 8 点、金属製品 3 点、計 47 点を図化し掲載する。

[近世の遺構から出土したもの]

1 は磁器半球碗の口縁部。染付の梅花文であろうか。肥前産、17 世紀後半のものである。3 は磁器の筒形碗で、口縁部である。染付で、割菊と斜格子の組み合わせ文、口縁内側に二重圏線が施されている。肥前産、18 世紀後半のものである。2 は磁器くらわんか碗の底部である。染付だが、文様は不明。高台内残存部分にわずかに渦福の枠がかかっている。肥前産、17 世紀末から 18 世紀前半のものである。8 は磁器香炉の口縁部。染付の柳文で、肥前産、18 世紀後半のものである。

14、19、18、13 は陶器皿で、いずれも特徴的な分厚い長石軸が施されている。いわゆる志野皿で、18 には鉄絵が見られる。14 は胴部、19、18 は口縁部、13 は口縁部から底部にかけてで、17 世紀前半のものである。15、17、21 は陶器の灰軸皿である。15 は底部、17、21 は口縁部である。いずれも瀬戸・美濃産だが、前 2 者は 17 世紀前半、後者は光沢のあるいわゆるおふけ軸で、17 世紀後半から 18 世紀のものである。20 は陶器青緑釉輪壳皿の底部である。肥前産で 17 世紀後半のものである。10 は陶器の刷毛目碗で、腰の張った器形が特徴的である。肥前産で 17 世紀後半のもの。12 も陶器の碗である。灰釉で大ぶりの口縁部で、京・信楽産、18 世紀後半のものである。29 は陶器鉄軸香炉の底部。瀬戸・美濃産で 17 世紀前半から半ばごろのもの。32 は陶器の鉄軸挿鉢で、口縁部である。瀬戸・美濃産、17 世紀前半のものである。26 は陶器鉄軸の灯明皿で、内面に重ね焼きの痕が見られる。瀬戸・美濃産、18 世紀末から 19 世紀初頭のものである。23 は陶器片口鉢の口縁部である。灰釉、瀬戸・美濃産で、18 世紀後半から 19 世紀のものである。28 は陶器の鉄軸土瓶底部で、18 世紀末から 19 世紀前半のものである。22 は陶器の鉄絵長石軸大皿の口縁部である。いわゆる馬目皿で、瀬戸・美濃産、19 世紀前半のものである。

33、34、35 は土器の焙烙である。33 は口縁部である。胎土が砂っぽく粗いこと、器表が黒く瓦質のような焼きであることなどから、17 世紀前半、北武蔵の平底焙烙と考えられる。34、35 は口縁部で、18 世紀後半～19 世紀初頭、江戸で生産されたものである。[近世の遺構外から出土したもの]

4 は染付の磁器筒形碗。口縁部で笹文。肥前産で、18 世紀後半のもの。6 は磁器腰張碗の底部。毛彫りの木葉文に染付で色付けしており、腰と高台脇に圏線、見込には二重圏線と中央に文様が見られる。瀬戸・美濃産で、19 世紀前半のもの。7 は磁器の猪口底部。染付の牡丹唐草文か。底部の立ち上がり部に二重圏線。肥前産、17 世紀末から 18 世紀初頭のものである。24 は陶器鉄絵長石軸皿の底部で、瀬戸・美濃産、19 世紀前半のものである。11 は陶器刷毛目碗の底部で、肥前産、17 世紀後半のもの。27 は陶器色絵山水文土瓶の口縁部から胴部にかけてで、19 世紀前半から後半にかけてのものである。37 は管状土錘である。胎土は陶褐色で、内外面も端部も平滑で、端部の外面側縁辺部には指頭圧痕が巡っている。芯棒に板状の粘土を巻いて成形した後、端部を指先で圧着しながら形状を整えたのであろう。胎土の特徴から、江戸で生産されたものと考えておく。36 は土製の碁石で、江戸で生産されたものである。40 は銭貨。文久永寶である。「文」の字体が草書体の「文」となる草

文である。裏面は11波で、貨幣価値は4文、文久3（1863）年の鑄造開始である。38、39は金属製の煙管である。前者は雁首で、火皿の本体の連結部の形状や火皿の大きさなどから17世紀後半のものと考えられる。後者は吸口である。

掲載しなかったものも含めて全体を見渡すと、破片が小さすぎるなどの理由から、時期を明確にし得なかったものは、磁器32点、陶器19点、土器3点、土製品4点、瓦1点、石器3点、石製品2点、金属製品14点、計78点であった。時期を明確にし得た212点の中では、18世紀半ば以降のものが86点と多いが、18世紀前半以前のものも、79点と拮抗する量である。

特に、陶磁器・土器については、17世紀前半の一群として、いわゆる志野皿といわれるような長石釉、鉄絵長石釉皿が17点、瀬戸・美濃の鉄釉搦鉢が12点、北武蔵在地焙烙が7点と、一定量出土していることに注目しておきたい。また、17世紀末から18世紀前半にかけて、肥前磁器の、くらわんか碗が19点とまとまって出土している点などにも留意しておくべきであろう。

陶磁器・土器以外で掲載しなかったものは、人形2点、瓦1点、砥石2点、角釘9点、鋌1点、銭貨2点、環状金属製品1点である。いずれも、遺存状態が悪く、全体を明らかにし得なかったものである。

赤羽上ノ台遺跡

磁器16点、陶器32点、土器8点、金属製品3点、計59点が出土した。うち、磁器2点、陶器2点、土器2点、計6点を図化し掲載する。

[近世の遺構から出土したもの]

31は1号溝出土の土器である。鉛透明釉施釉の台付受付灯明皿で、胴部。18世紀後半から19世紀初頭の江戸で生産されたものである。30は4号溝出土で土器。鉛透明釉施釉の受付灯明皿で、口縁部から底部にかけてが残っている。18世紀後半から19世紀初頭の江戸で生産されたものである。

[近世の遺構外から出土したもの]

9は磁器くらわんか碗の底部である。染付で見込に二重圏線、高台内には一重圏線と「大」「年」の文字が見られる。「大明年製」銘の一部であろう。肥前産で18世紀前半のものである。5は磁器端反碗の口縁部で染付。肥前産、18世紀末から19世紀前半のものである。16は陶器鉄絵灰釉皿の底部で、瀬戸・美濃産、17世紀半ばごろのものである。25は陶器灰釉搦鉢の底部で、胎土目の痕がある。瀬戸・美濃産、19世紀前半のものである。

掲載しなかったものも含めて全体を見渡すと、破片が小さすぎるなどの理由から、時期を明確にし得なかったものは、磁器3点、陶器5点、金属製品3点で、計11点であった。時期を明確にし得た48点の中では、18世紀半ば以降のものが28点と多いが、18世紀前半以前のものも18点と一定量見られる。

特に、陶磁器・土器については、17世紀前半の一群として、いわゆる志野皿といわれるような長石釉、鉄絵長石釉の皿3点、瀬戸・美濃の鉄釉搦鉢4点、北武蔵在地焙烙1点が目に付く。また、

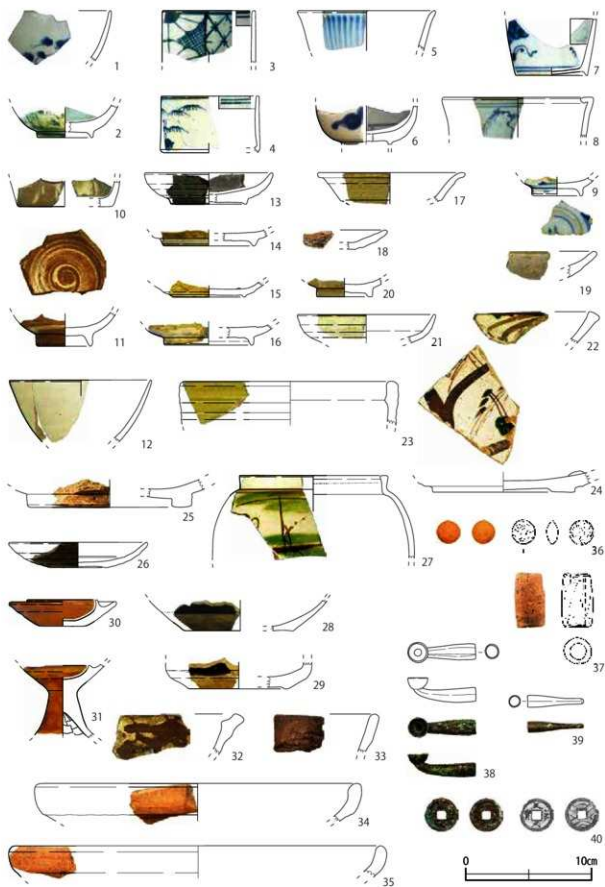
17世紀後半から18世紀前半にかけて、肥前磁器の丸碗3点、くらわんか碗3点などにも留意しておくべきであろう。

陶磁器・土器以外で掲載しなかったものは、角釘2点、銭貨1点である。いずれも遺存状態が悪く、全体を明らかにし得なかったものである。

[近世の石製品]

道合遺跡から出土した石製品には火打石3点と砥石・磨石8点が、赤羽上ノ台遺跡から出土した石製品には砥石1点が認められた。ここではこれらをまとめて報告する。

火打石9～11はいずれも近世の溝やピットから出土した。9は縁辺が鋭利で使用の痕跡が少ない一方、10・11は敲打による磨滅が顕著である。砥石類は近世の溝の他、中世の地下式横穴（280・283号土坑）からも出土している。これらも含めて近世以降としたが、中世までさかのぼる可能性もある。1は不整直方体を呈する凝灰岩製で、長軸側の3側面に磨滅が認められる。2は撚型の不整直方体で、長軸側の4側面に磨滅が認められ、被熱により暗色を呈する。3・4・12は断面が長方形の小片で、破断面を除く広い範囲に磨滅が認められる。5～7は断面が正方形～台形の小片で、長軸側の各側面に磨滅が認められ、6は被熱により暗色を呈する。8は扁平な不整形の小片で、縁辺が磨滅する。石材は1・2・4～8が凝灰岩製で、このうち1は丹波青砥、2・5～7が砥沢（現・群馬県南牧村）産と見られる。3・12は砂岩製で、3は紀州、12は五日市産の可能性が高い。



第197図 道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡 近世の磁器・陶器・土器・金属製品 (1/3)



第198図 道合遺跡 近世の石製品 (1/2)

赤羽上ノ台遺跡

今回の調査は、平成24年度に実施した第Ⅱ次調査部分を含む範囲で、その東西両側の調査を行った。前回の後3回の調査が行われ、今回は第Ⅵ次調査となる。各調査の年次等は以下のとおりである。

第Ⅰ次調査	平成元年	北区教育委員会（赤羽上ノ台遺跡 1990）
第Ⅱ次調査	平成24年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡 赤羽上ノ台遺跡 2015）
第Ⅲ次調査	平成27年	武蔵文化財研究所（赤羽上ノ台遺跡 2016）
第Ⅳ次調査	平成28年	東京都埋蔵文化財センター（道合遺跡 赤羽上ノ台遺跡 2017）
第Ⅴ次調査	令和2年	武蔵文化財研究所（赤羽上ノ台遺跡 2021）
第Ⅵ次調査	令和2～3年	東京都埋蔵文化財センター（今回報告）
第Ⅶ次調査	令和4年	武蔵文化財研究所（赤羽上ノ台遺跡 2023）

調査の経緯、層序などに関しては、Ⅰ～Ⅲ章に道合遺跡とともにまとめて掲載した。

検出遺構に関して、調査時に遺構として認定したものの、その後除外したものは欠番とした。

遺構番号は、本センターで実施したⅡ次調査で検出され付与した遺構番号を受けて通して付している。武蔵文化財研究所による調査では独自に遺構名・番号を付与しており、本センター調査の遺構番号とは相違する。

第Ⅰ～Ⅴ次調査の遺構全体図等は第199～204図にまとめて掲載した。

検出された遺構・遺物

《旧石器時代》

遺物 尖頭器、剥片

《縄文時代》

遺構 炉穴-38基 土坑-11基 ビット群-4 ビット-7基

遺物 土器 早期前葉・中葉・後葉・末葉、前期初頭・中葉・後葉、中期中葉・後葉
土製品 二次利用土器片
石器 石鏃・磨石・敲石・石皿・剥片

《弥生時代》

遺構 住居跡-4軒、土坑-1基

遺物 土器 壺・甕
土製品 管玉

《古墳時代後期～平安時代》

遺構 住居跡-16軒

遺物 土器 須恵器環・埴・甕、土師器環・甕・台付甕
土製品 二次利用土器片
石製品 勾玉

《近世》

遺構 溝-7条 道路跡-数本（溝と共用） ビット-多数
遺物 陶磁器、土器

1 旧石器時代

今回の調査で、旧石器時代の遺構は検出されていない。石器が2点出土したのみである。赤羽上ノ台遺跡も道合遺跡同様、被服本廠、赤羽台団地の建物などによる削平・攪乱が多く、ローム層の遺存度は良好とは言えない。本地区においてもIV層の上部は削平が著しく、部分的にはV層（第一黒色帯）に及ぶ箇所もあった。また、上記建物地中基礎が残存しており、本時代の調査（深堀など）は断念した次第である。以下、出土遺物の報告のみを行う。

1) 遺物（第262図1・2、図版18）

1はチャート製の尖頭器である。木葉形を呈す。片側縁部を欠失する。長軸が短い。2は剥片で同じくチャート製である。横長剥片素材を用いる。

2 縄文時代

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、炉穴38基、土坑11基、ピット群4、ピット7基である。II次調査で④区とした範囲は炉穴1基・土坑1基に止まったが、今回は、調査区中央部を中心に集中的に炉穴が構築されている。西側に隣接する第V次調査区（武蔵文化財研究所 令和2年）で炉穴が21基、北側の第VII次調査区（武蔵文化財研究所 令和4年）では炉穴12基、土坑15基が検出されている。本遺跡西側（第1次、第II次③・⑤区）での集中部とはまた別個に、東側でも集中部が検出されたことになる。時期的には西側炉穴群は概ね早期後葉・野島式期を中心としたもので、今回の一群は茅山上層式期を主体としており、構築時期は相違するが、それに関しては後述する。

1) 遺構

A 炉穴

38基が検出された。調査区中央部に集中して分布し、東端部にも比較的まとまる。単基で検出されるものと、数基が樹枝状に重複して検出されるものがある。後者例でも遺構番号は1基としており、実際に構築された基数（炉床数）は40基を大きく上回る。以下、個別に略述するが、重複している炉穴はa・b・c〜と枝番を付与している。

15号炉穴（第207図、図版264-1～6）

グリッド 9-5 B

平面形態 楕円形

規模 (130) × 120 × 35 / 105 × 100cm 炉規模 ?

検出状況 調査区北東側の一群である。本炉穴を含め6基が検出されている。陸軍被服本廠倉庫脇のトロッコ線路・排水管路による削平と東側の27号土坑の構築により、炉部を消失し、足場のみで遺存である。

遺物出土状態 土器8点（早期後葉4・末葉1、前期中葉3点）、礫が1点出土した。3・4は西側壁際で出土した。1・2は重複する27号土坑出土であるが、本来は本炉穴所産のものと考えられる。

時期 出土土器の1～3は早期後葉、4は前期中葉である。本炉穴を切っている27号土坑の出土土器は早期後葉・前期中葉であり、双方ともに時期比定が明確ではないが、本炉穴は概ね早期後葉の所産としたい。

16号炉穴（第207図、図版264-7～265-1）

グリッド 9-5 B 平面形態 長楕円形
規 模 125 × 38 × 10 / 105 × 15cm 炉 規 模 50 × 38 × 15 / 25 × 20cm
検出状況 調査区北東側の一群である。15号炉穴に近接する。陸軍被服本廠倉庫脇のトロッコ線路・排水管路による削平により、上半および中央部を消失する。平坦な足場から炉部へと緩やかに傾斜する。

遺物出土状態 南側足場で土器1点（早期後葉）が出土した。

時 期 早期後葉の所産と思われる。

17号炉穴（第207図、図版265-2～4）

グリッド 9-5 B 平面形態 長楕円形
規 模 125 × 38 × 10 / 105 × 15cm 炉 規 模 50 × 38 × 15 / 25 × 20cm
検出状況 調査区北東側の一群である。16号炉穴に近接する。陸軍被服本廠倉庫脇のトロッコ線路による削平により、上半および足場の大半を消失する。炉部底面の被熱・硬化が著しい。

遺物出土状態 礫1点が出土した。

時 期 出土土器はなく、時期比定は困難であるが、概ね15・16号と同時期と推定される。

18号炉穴（第208図、図版265-5～266-6）

グリッド 19・20-5 A 平面形態 楕円形
規 模 a : 135 × 80 × 23 / 90 × 30cm 炉 規 模 a : 50 × 38 × 15 / 25 × 20cm
b : 90 × 45 × 18 / (45) × 25cm b : 24 × 22 × 18 / 22 × 20cm
c : 170 × 63 × 10 / 110 × 39cm c : 50 × 40 × 20 / 30 × 20cm
d : 105 × 75 × 10 / (105) × 35cm d : 30 × (16) × 10 / 30 × (15)cm

検出状況 調査区中央・南東寄りに位置する。19号炉穴に隣接する。陸軍被服本廠倉庫と付随する排水管路による削平により、b・cの足場の一部、dの中央部を消失する。いずれの炉部も底面の被熱は顕著である。cの中央部から北東側にかけて焼土がみられるが、cの足場先端とした部分を含み、さらにもう1基が存在する可能性もある。新旧関係はa ← bが確認されたが他は不明である。

遺物出土状態 土器4点（早期後葉）、礫1点が出土した。いずれもa炉足場の出土である。

時 期 出土土器から早期後葉の所産と思われる。

19号炉穴（第208図、図版266-7～267-2）

グリッド 19-5 A 平面形態 不整楕円形
規 模 ? 炉 規 模 90 × 60 × 15 / 30 × 20cm

検出状況 調査区中央・南東寄りに位置する。18号炉穴に隣接する。炉部だけの検出であり、足場は消失している。おそらくは北側に伸びていたものと思われる。18号とは別個に番号を付与したが、d炉とは隣接しており、同号と一連のものとして同時期に構築・使用されたと考えられる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時 期 18号と同時期と思われる。

20号炉穴(第207図、図版267-3・4)

グリッド 19-4 Y 平面形態 長円形
 規 模 120 × (35) × 5 / 60 × (22)cm 炉 規 模 45 × 35 × 15 / 45 × (25)cm
 検出状況 調査区中央・南東寄りに位置する。団地造成に伴う攪乱で北西側1/2を消失する。炉部の被熱度は弱い。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時 期 周囲の炉穴と同様に早期後葉の所産と思われる。

22号炉穴(第209図、図版267-5~8)

グリッド 12・13-5 D 平面形態 不整楕円形
 規 模 215 × 130 × 15 / 125 × 95cm 炉 規 模 a : 45 × (25) × 20 / (30) × 20cm
 b : 35 × (20) × 20 / (15) × (5)cm

検出状況 調査区北東側の一群である。23・24号炉穴と近接する。陸軍被服本廠関連排水管路により中央部が分断されている。炉がニヶ所確認されており、南西側の円形状の足場がbに対応し、aの足場が南東側かとも思われる。

遺物出土状態 土器2点(早期後葉)が出土した。

時 期 出土土器から早期後葉-子母口式期の所産と思われる。

23号炉穴(第209図、図版268-1・2)

グリッド 12-5 C 平面形態 楕円形
 規 模 (65) × 40 × 15 / 40 × 15cm 炉 規 模 ?

検出状況 調査区北東側の一群である。22・24号炉穴と近接する。足場のみであり、炉部は北西側に走る排水管路により削平されたものと思われる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時 期 近接する22号と同時期と思われる。

24号炉穴(第209図、図版268-3~6)

グリッド 12-5 C 平面形態 楕円形
 規 模 80 × 35 × 5 / 35 × 22cm 炉 規 模 40 × 40 × 10 / 25 × 20cm

検出状況 調査区北東側の一群である。22・23号炉穴と近接する。北西側の足場はやや軸が西側に曲がる。炉部底面は被熱により硬化している。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時 期 近接する22号と同時期と思われる。

25号炉穴(第210図、図版268-7~269-2)

グリッド 14-5 C 平面形態 楕円形
 規 模 ? 炉 規 模 60 × 45 × 10 / 25 × 20cm

検出状況 調査区中央東寄りに位置する。単基で炉部のみが検出された。周囲は陸軍被服本廠関連の造成で平坦な削平面であり、大半が消失し、炉床がかるうじて遺存したものである。被熱度は高く、硬化は顕著である。

遺物出土状態 土器1点(早期末葉)が出土した。

時期 出土土器から早期末葉の所産と思われる。

26号炉穴（第210・211図、図版269-3～270-6）

グリッド	17・18-4 S	平面形態	楕円形
規模	$a_1 : (240) \times 100 \times 20 / (130) \times 70\text{cm}$	炉規模	$a_1 : 70 \times 50 \times 30 / 45 \times 33\text{cm}$
	$a_2 : (240) \times 100 \times 20 / (130) \times 70\text{cm}$		$a_2 : 40 \times 26 \times 30 / 25 \times 13\text{cm}$
	$b : (180) \times 80 \times 30 / (100) \times (70)\text{cm}$		$b : 70 \times 60 \times 45 / 40 \times 40\text{cm}$
	$c : (120) \times 100 \times 30 / 80 \times 60\text{cm}$		$c : 55 \times 44 \times 20 / 33 \times 25\text{cm}$

検出状況 調査区中央部の一群である。樹枝状に重複しており、炉・足場の数から3（4）基が構築されたものと判断した。aは炉が2基確認された。足場はbの炉部の上位に構築されている。a₁・a₂は小規模な造り替えかと思われる。炉部奥壁は煙道で急傾斜である。bは足場先端がaにより削平されている。炉奥壁の煙道はやや緩やかな傾斜である。cは西側の足場と思われる部分が不明瞭で、本来は幅が狭くなっているかと思われる。新旧関係は、a←bが確認できたが、cとの関係は不明瞭である。

遺物出土状態 土器28点（早期後葉）、礫3点が出土した。a炉から土器11点（1・7）・礫2点、b炉から土器8点（2・8）、c炉から土器9点（3～6）・礫1点である。いずれも茅山上層式に比定される。

時期 出土土器から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

27号炉穴（第212図、図版270-7～271-4）

グリッド	15・16-4 T・U	平面形態	長円形
規模	$a : 150 \times 65 \times 10 / 80 \times 50\text{cm}$	炉規模	$a : 55 \times 50 \times 20 / 35 \times 30\text{cm}$
	$b : (150) \times 70 \times 10 / (55) \times 50\text{cm}$		$b : 70 \times 58 \times 20 / 43 \times 32\text{cm}$
	$c : 165 \times 78 \times 10 / 100 \times 45\text{cm}$		$c : 50 \times 50 \times 10 / 40 \times 40\text{cm}$

検出状況 調査区中央部の一群である。2基の重複（a・b）と1基（c）の近接が確認された。cも一連のものとして判断し、本炉穴とした。3基とも長軸・単軸規模が同様で、南・西側に足場がある。炉部はいずれも底面の被熱度は高い。煙道傾斜は緩やかである。新旧関係は把握し得なかった。

遺物出土状態 土器3点（早期後葉）が出土した。a炉に1点、b炉に1点（2）、c炉に1点（1）である。いずれも茅山上層式に比定される。

時期 出土土器から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

29号炉穴（第213図、図版271-5～273-6）

グリッド	16・17-4 W・X	平面形態	長円形
規模	$a : 165 \times 65 \times 20 / 75 \times 35\text{cm}$	炉規模	$a : 55 \times 50 \times 20 / 35 \times 30\text{cm}$
	$b : 130 \times 75 \times 20 / 80 \times 70\text{cm}$		$b : 70 \times 58 \times 20 / 43 \times 32\text{cm}$
	$c : (150) \times 50 \times 10 / 80 \times 35\text{cm}$		$c : 50 \times 50 \times 10 / 40 \times 40\text{cm}$
	$d : (155) \times 55 \times 10 / (65) \times 40\text{cm}$		$d : 90 \times 55 \times 13 / 30 \times 30\text{cm}$
	$e : (150) \times 55 \times 15 / (70) \times (40)\text{cm}$		$e : 75 \times 50 \times 25 / 35 \times 25\text{cm}$
	$f : (150) \times 60 \times 10 / 90 \times 40\text{cm}$		$f : 50 \times 50 \times 20 / 35 \times 30\text{cm}$

が広く、足場の長軸が短い。

遺物出土状態 土器1点(早期後葉)が出土した。

時期 出土土器から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

32号炉穴(第216図、図版275-3・4)

グリッド 18-4 T 平面形態 長円形

規模 (105) × 70 × 10 / 90 × 50cm 炉規模 ?

検出状況 調査区中央部の一群である。単基で検出された。被服本廠関連の排水管路により北側の炉部を消失する。南側の足場はやや不整形である。

遺物出土状態 土器1点(早期後葉)が出土した。

時期 出土土器から早期後葉の所産と思われる。

33号炉穴(第215・216図、図版275-5~276-6)

グリッド 15・16-4 S・T 平面形態 長円形?

規模 200 × 180 × 20 / 180 × 160cm 炉規模 a : 95 × 55 × 25cm
b : 70 × (40) × 30cm
c : 70 × 57 × 30cm

検出状況 調査区中央部の一群である。検出された炉は3基だが、それに伴う掘り込みが明確に把握し得なかった。aは北側に炉部、南側に足場を有すが、南側はb・cの足場と思われる掘り込みで切られている。焼土範囲の規模からさらに1基が存在していたかとも思われる。bは北西側に突出する掘り込みが足場と考えられるが、東側に伸びる可能性もある。cは西側に炉部、東側に足場を有す。aの足場に切られている。煙道の傾斜は緩やかである。

遺物出土状態 土器8点(早期後葉)、土製品1点、礫6点が出土した。A炉足場に土器6点(2~4)・土製品1点(6)・礫3点、b炉に土器1点(1)、a・b炉の中間(いずれかの足場)に土器1点・礫1点、c炉に礫2点である。いずれも茅山上層式に比定される。

時期 出土土器から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

34号炉穴(第216図、図版276-7~277-2)

グリッド 16-4 U 平面形態 楕円形?

規模 140 × (30) × 18 / 80 × 20cm 炉規模 35 × 20 × 5 / 20 × 10cm

検出状況 調査区中央部の一群である。27・35号炉穴と近接する。西側は団地造成に伴う掘削穴により消失し、上部も削平により壁の大半を失う。北側の足場と南側の炉部底面の遺存に止まる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 隣接する35号炉穴と同時期と思われる。

35号炉穴(第217図、図版276-7・277-3・4)

グリッド 16-4 U 平面形態 楕円形

規模 110 × 50 × 10 / 45 × 30cm 炉規模 50 × 50 × 10 / 40 × 30cm

検出状況 調査区中央部の一群である。24・36・37号炉穴と近接する。被服本廠倉庫基礎により東側の一部は消失し、上部も削平により壁の大半を失う。南側に炉部、北側に足場を有す。

遺物出土状態 土器1点(早期後葉)が出土した。

時期 出土土器から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

36号炉穴(第217図、図版277-5)

グリッド 16-4U・V 平面形態 楕円形
 規模 94×60×5 / (40)×(40)cm 炉規模 (40)×(15)×5 / 30×(10)cm
 検出状況 調査区中央部の一群である。37号炉穴と隣接する。弥生時代の12号住居跡直下で検出された。同号柱穴、被服本廠倉庫基礎・攪乱穴により中央部は消失し、上部も削平により壁の大半を失う。北側に炉部、南側に足場を有す。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 周囲の炉穴群と同様、早期後葉の所産と思われる。

37号炉穴(第217図、図版277-6)

グリッド 16-4V 平面形態 楕円形
 規模 140×100×10 / (80)×(5)cm 炉規模 ?
 検出状況 調査区中央部の一群である。36号炉穴と隣接する。攪乱穴により大半は消失している。南西側が足場と思われる。本炉穴は36号炉穴と一体のものと考えられる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 周囲の炉穴群と同様、早期後葉の所産と思われる。

38号炉穴(第217・218図、図版277-7~279-4)

グリッド 20・21-4U 平面形態 長円形
 規模 a:推255×80×25 / 推200×60cm 炉規模 a:30×28×35 / 25×20cm
 b:(140)×70×35 / 105×55cm b:40×40×35 / 25×23cm
 c:? c:90×65×25 / 60×45cm
 d:? d:70×52×25 / 35×33cm
 e:? e:70×55×25 / 28×23cm

検出状況 調査区中央部の一群である。樹枝状に重複している。検出された炉・足場の数より5基が構築されたものと判断した。被服本廠倉庫直下に位置し、倉庫床下束柱などによる削平を部分的に受けている。aは東側に炉部、西側に足場を有す。土層観察では長軸が長くなるが、cの足場が西側に伸びる可能性もある。bは北側に炉部、南側に足場を有すと思われるが、上位に構築されたaにより足場が消失している。cは炉部がbと重複しており、全容は不明瞭である。足場は南側の建物基礎により削平された部分に存在したか、西側に伸びるかとも思われる。dは東側に炉部、西側に足場を有す。建物基礎により足場を消失する。eは西側に炉部、東側に足場を有す。aの構築により足場は消失している。aの足場とした範囲の一部はeの足場の再利用の可能性もある。新旧関係は、a←b・c・d・eが判明している。

遺物出土状態 土器29点(早期後葉28、前期中葉1)、礫6点が出土した。

時期 出土土器から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

39号炉穴(第219図、図版279-5~8)

グリッド 21-4R 平面形態 ?
 規模 ? 炉規模 (80) × 50) × 30 / (60) × 40)cm
 検出状況 調査区中央部の一群である。団地造成に伴う削平・攪乱並びに保育園解体撤去工事と思われる掘削により大半を消失し、炉部の一部が遺存したのみである。そのため単基の構築が重複していたのかは不明である。40・49号炉穴と近接する。炉床は被熱により赤化・硬化が顕著である。おそらくは北側に足場を有すものと思われる。

遺物出土状態 土器1点(早期後葉)が出土した。

時期 出土土器から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

40号炉穴(第219図、図版280-1~281-2)

グリッド	21-4R	平面形態	長円形
規模	a : (160) × (38) × 13 / (120) × (32)cm	炉規模	a : 41 × 35 × 15 / 18 × 16cm
	b : (130) × 70 × 25 / 80 × 45cm		b : 52 × 25 × 35 / 35 × 15cm
	c : (180) × 80 × 20 / (100) × 60cm		c : 52 × 42 × 15 / 40 × 35cm
	d : ?		d : (50) × 42 × 10 / 45 × 35cm
	e : (100) × 65 × 10 / (60) × 40cm		e : ?
	f : ?		f : 48 × 39 × 10 / 35 × 30cm

検出状況 調査区中央部の一群である。樹枝状に重複している。検出された炉・足場の数より6基が構築されたものと判断した。団地造成に伴う削平・攪乱並びに保育園解体撤去工事と思われる掘削により西側が消失しており、本来はさらに何基かは存在していたと思われる。39・49・54号炉穴と近接する。aは南側に炉部、北側に足場を有すが、西側を消失する。bは西側に炉部、東側に足場を有す。炉部の一部はeに属する可能性もある。cは北西側に炉部、南東側に足場を有す。炉部から南側に焼土が広がっている。dは炉部のみで、足場は西側の攪乱範囲に伸びるか、a~cと共用となるか明確ではない。eは足場のみの検出である。炉部は北側攪乱部分と思われるが、bの炉部と重複している可能性もある。fはc・d炉部の中間にあり、cの下部に確認された。炉部のみで、足場は明確ではない。新旧関係は、c←f→dが判明している。

遺物出土状態 土器1点(早期後葉)、礫6点が出土した。土器はb炉足場からの出土である。

時期 出土遺物から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

41号炉穴(第220・221図、図版281-3~283-2)

グリッド	17・18-4Q	平面形態	楕円形
規模	a : (210) × 110 × 30 / (110) × 75cm	炉規模	a : 60 × 60 × 30 / 35 × 25cm
	b : (180)115 × 15 / (70) × 75cm		b : 43 × 42 × 20 / 32 × 32cm
	c : (180)115 × 15 / (70) × 75cm		c : 38 × 32 × 25 / 25 × 25cm
	d : (160) × 110 × 20 / (80) × 100)cm		d : 60 × 34 × 35 / 40 × 25cm
	e : (160) × 110 × 20 / (80) × 100)cm		e : 53 × 47 × 30 / 36 × 36cm
	f : 185 × 83 × 20 / 110 × 60cm		f : 55 × 40 × 30 / 35 × 30cm
	g : ?		g : 70 × 35 × 10 / 60 × 20cm

検出状況 調査区中央部の一群である。樹枝状に重複している。検出された炉・足場の数より7基が構築されたものと判断した。被服本廠倉庫基礎柱穴および排水管路などにより部分的に削平されている。また北西側は調査範囲外となる。53号炉穴と近接する。aは南側に炉部、北側に足場を有す。煙道はやや急傾斜である。b・cは炉部が隣り合っている。足場が明確ではないが、両者とも南東側に伸びる掘り込みを足場としたと思われる。d・eも炉部が隣接している。足場は西側に伸びるものと思われる。土層断面でみるとa・fの上位に足場と同様な土層が続いている。eとしての西側立ち上がりは図上の壁よりも内側になるものと思われるが、明確ではない。dの足場などは不明瞭である。fは東側に炉部、西側に足場を有す。上位にa・eが構築されている。gは炉部のみでaの下部で確認された。全体の形状は不明である。新旧関係は、e←a←fが判明している。

遺物出土状態 土器30点（早期後葉）、石器1点、礫2点が出土した。f炉に土器3点（6）、d・e炉西側足場に土器1点（5）・礫2点以外はa炉覆土からの出土である。3はa・f炉で接合する。他の接合例はa炉内である。土器はいずれも茅山上層式に比定される。

時期 出土遺物から早期後葉—茅山上層式期の所産と思われる。

42号炉穴（第222～227図、図版283-3～284）

グリッド	27-4T	平面形態	楕円形・長円形
規模	a：？	炉規模	a：150×120×50／55×40cm
	b：(180)115×15／(70)×75cm		b：43×42×20／32×32cm
	c：(180)115×15／(70)×75cm		c：38×32×25／25×25cm
	d：(160)×110×20／(80)×100cm		d：60×34×35／40×25cm
	e：(160)×110×20／(80)×100cm		e：53×47×30／36×36cm
	f：185×83×20／110×60cm		f：55×40×30／35×30cm
	g：？		g：70×35×10／60×20cm

検出状況 調査区南西側に位置する。樹枝状に重複している。検出された炉・足場の数より7基が構築されたものと判断した。保育園解体撤去工事と思われる掘削により部分的に削平を受ける。南西側は調査範囲外となる。周囲は団地造成・解体、被服本廠関連の攪乱が著しい。本炉穴の周辺にも炉穴が存在していた蓋然性は高い。aは北側に炉部、南側に足場を有す。bの焼土面の上位に足場が伸びるものと思われる。bは広範囲に焼土が分布し最大20cmの厚さを測る。炉部火床は明確ではない。南側端部に煙道天井の崩落と思われる土層が確認されたが、明確な煙道は検出し得ず、b炉に帰属するものかも不明である。cは東側に炉部、西側に足場を有すと思われる。炉部の西側には天井部と思われる崩落土が確認されたが、南側は攪乱のためその形状は不明であった。cとは別の炉・煙道かと思われる。dは南西側が攪乱により消失しており、全体の形状は不明である。北東端に焼土が分布するが、明確な炉床と確認し得なかった。南東側にかけて傾斜しており、攪乱で消失した部分は炉部かと思われ、検出された焼土は別の炉の可能性もある。eは上部が削平され、炉部のみが検出された。足場は攪乱で消失している南東側であろうか。fは掘り込みのみが確

認められたもので、おそらくは足場の一部と思われる。炉部は南東側調査範囲外になるのか。煙道天井部崩落土が近接しているが、本炉との関係は不明瞭である。新旧関係は、a←bが判明している。

遺物出土状態 土器149点(早期後葉)、石器4点、石製品1点が出土した。平面的にはa炉→炉部、b炉に集中するが、層的にはa炉覆土上層(1・2層)に纏まっている。

時期 出土遺物から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

43号炉穴(第228～230図、図版285～286-2)

グリッド 24-40・P 平面形態 楕円形

規模 (245)×140×45/190×80cm 炉規模 焼土範囲:40×40cm

検出状況 調査区西側の一群である。保育圏解体撤去工事と思われる掘削により南側を消失する。単基での検出であるが、複数基の重複の可能性もある。明確な炉部掘り込みは確認されず、焼土の堆積が検出された。基本的に足場は南東側消失範囲にかかるものと思われる。

遺物出土状態 土器10点(早期後葉)が出土した。北側壁に近い位置、覆土2層内に土器1個体の破片(口縁~胴下部1/5)が纏まっている。この土器は搬入品で、在地の土器は細片が2点出土したのみであった。

時期 出土した土器(搬入品)は概ね茅山上層式と並行するものと思われ、本炉穴の時期もそれに当たると考えられる。

44号炉穴(第231図、図版286-3～5)

グリッド 26-40 平面形態 楕円形

規模 a:(135)×65×25/(125)×90cm 炉規模 a:38×32×30/25×20cm
b:? b:30×30×20/20×20cm

検出状況 調査区西側の一群である。保育圏解体撤去工事と思われる掘削により周囲を消失する。南東側は調査範囲外となる。単基での検出であるが、本来の様相は不明である。Aは南東側に炉部、北西側に足場を有す。bの炉部の上位に足場を構築している。bは北西側に炉部、南東側に足場を有すがaにより足場の大半を消失している。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 周囲の炉穴と同様の時期-早期後葉の所産と思われる。

45号炉穴(第231図、図版286-6～8)

グリッド 22-4M・N 平面形態 不整楕円形

規模 202×115×45/150×80cm 炉規模 97×73×50/50×37cm

検出状況 調査区西側の一群である。保育圏解体撤去工事と思われる掘削により周囲を消失する。単基での検出であるが、本来の様相は不明である。南西側に炉部、北東側に足場を有す。焼土分布をみると南東壁際まで伸びており、もう1基、その部分を煙道とした東西に主軸をもつ炉も想定できる。

遺物出土状態 土器1点(早期後葉)が出土した。

時期 出土遺物から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

46号炉穴(第232図、図版287-1～6)

グリッド 19-4Q・R 平面形態 不整形（長円形）
 規 模 280×推120×18 / 150×70cm 炉 規 模 85×45×40 / 35×20cm
 検出状況 調査区中央部の一群である。被服本廠倉庫基礎により部分的に削平を受けている。50・52号炉穴と近接する。掘り込みが西側で膨らんでいるが、本来の形状は点線ラインで長円形を呈すると思われる。南側に炉部、北側に足場を有す。煙道の傾斜は緩やかである。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時 期 周囲の炉穴と同様の時期—早期後葉の所産と思われる。

47号炉穴（第233図、図版287-7・8）

グリッド 20-4R 平面形態 不整形
 規 模 a : 140×140×40 / 85×80cm 炉 規 模 a : ?
 b : 130×130×40 / 75×65cm b : ?
 検出状況 調査区中央部の一群である。被服本廠倉庫基礎により部分的に削平を受けている。49・52号炉穴と近接する。略円形の掘り込みが連接して検出された。焼土粒を含有しており、炉穴と判断したが、明確な炉部は確認されなかった。2基の重複で、aの炉部が北側基礎部分、bの炉部はaにより削平されたと推測する。

遺物出土状態 土器5点（早期後葉）が出土した。b炉覆土上位である。いずれも茅山上層式に比定される。

時 期 出土遺物から早期後葉—茅山上層式期の所産と思われる。

48号炉穴（第234図、図版288-1~6）

グリッド 20-4Q・R 平面形態 楕円形
 規 模 a : 230×90×20 / 160×50cm 炉 規 模 a : 70×70×30 / 55×55cm
 b : (120)×80×10 / 45×60cm b : 75×70×25 / 45×40cm
 検出状況 調査区中央部の一群である。17号住居跡の床面下より検出された。50・52号炉穴と近接する。2基の重複である。aは西側に炉部、東側に足場を有す。足場は長く二段になっている。bは北東側に炉部、南西側に足場を有す。足場先端部はaにより切られている。
 遺物出土状態 土器2点（早期前葉1、早期後葉1）が出土した。早期前葉の1はa炉、早期後葉の2はb炉出土である。

時 期 新しいa炉から早期前葉の土器が出土しているが、本地区の炉穴群全体からみると、概ね早期後葉期の所産と思われ、本炉穴もその時期と考えられる。

49号炉穴（第235・236図、図版288-7~290-6）

グリッド 20・21-4R・S 平面形態 楕円形・長円形
 規 模 a : ? 炉 規 模 a : 120×(60)×35 / 97×(48)cm
 b : ? b : 82×53×30 / 40×30cm
 c : ? c : 132×80×50 / 108×60cm
 d : ? d : (50)×(55)×50 / (40)×(35)cm
 e : ? e : 50×45×40 / 40×30cm
 f : ? f : (35)×40×35 / (18)×24cm

検出状況 調査区中央部の一群である。樹枝状に重複している。490×140cmの掘り込みの範囲内に検出された炉の数より6基が構築されたものと判断した。被服本廠倉庫の建築により南側は削平され、全体像が把握し得ない。倉庫建物の北側の47・48・51号、南側の39・40・54号炉穴が近接する。aは西側に炉部、東側に足場を有すが、足場の先端は不明確である。煙道は約60°の傾斜で立ち上がる。bは北側に炉部、南側に足場を有す。煙道は約45°の傾斜で立ち上がる。cは焼土範囲が広く、重複している可能性がある。軸方向は不明である。dは炉部の南側1/2が削平されており、軸方向が不明である。eは北側に炉部、南側に足場を有すが、軸方向は不明である。fもd同様に炉部南側1/2を消失しており、形状は不明である。いずれの炉部も火床面は被熱が著しく、使用頻度の高さが窺えるが、各炉のプランが明確に把握し得なかった。覆土1・2層は各炉共通の埋没土であり、立ち上がり・新旧関係の確認はできなかった。

遺物出土状態 土器25点(早期後葉)、礫1点が出土した。平面的にはa炉からc炉にかけて分布しているが、層位的には共通埋没土の1・2層の範疇であり、帰属は不明である。

時期 出土遺物から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

50号炉穴(第237図、図版290-7~291-4)

グリッド 19・20-4Q **平面形態** 不整楕円形
規模 (190)×140×30 / (55)×30cm **炉規模** 80×70×45 / 40×35cm

検出状況 調査区中央部の一群である。南側は17号住居跡の床面下より検出された。46・52号炉穴と近接する。北側に炉部、南側に足場を有す。炉部は中軸上よりやや西側に寄った位置にある。煙道は段を有し、平坦部から急傾斜で立ち上がる。北側は幅が広がっているが、壁の崩落かと思われる。

遺物出土状態 土器2点(早期後葉)、礫1点が覆土上層から出土した。

時期 出土遺物から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

51号炉穴(第238図、図版291-5・6)

グリッド 21-4S **平面形態** ?
規模 ? **炉規模** (170)×(90)×20 / 30×25cm

検出状況 調査区中央部の一群である。南側は被服本廠倉庫により削平されている。49・54号炉穴と近接する。北側に炉部、南側に足場を有すと思われるが、南側は消失しており明確ではない。炉部煙道側の掘り込みが広いが、本来の立ち上がりではなく、壁の崩落などによるものと思われる。倉庫建物を挟んだ54号炉穴と接続した一連の炉穴の可能性はある。

遺物出土状態 土器7点(早期後葉)、礫1点が出土した。土器はいずれも茅山上層式に比定される。

時期 出土遺物から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

52号炉穴(第238図、図版291-7~292-2)

グリッド 21-4R **平面形態** 長円形?
規模 ? **炉規模** (95)×(50)×23 / (80)×(35)cm

検出状況 調査区中央部の一群である。南側は17号住居跡により削平されている。46・50号炉穴と近接する。北側に炉部、南側に足場を有すと思われる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 周囲の炉穴と同様、早期後葉の所産と思われる。

53号炉穴（第238図、図版292-3・4）

グリッド 17-4Q

平面形態 ?

規模 ?

炉規模 64×53×15/25×22cm

検出状況 調査区中央部の一群である。41号炉穴と近接する。上部の削平により足場などを消失し、炉部のみを検出である。北側に炉部、南側に足場を有すと思われる。煙道は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 周囲の炉穴と同様、早期後葉の所産と思われる。

54号炉穴（第238図、図版292-5～293-4）

グリッド 21-4S

平面形態 楕円形?

規模 a : (70) × 70 × 10 / (25) × 45cm

炉規模 a : 35 × 34 × 15 / 18 × 17cm

b : (170) × 70 × 10 / (115) × 45cm

b : 62 × 56 × 25 / 36 × 25cm

c :

c : (50) × (102) × 15 / (30) × 72cm

検出状況 調査区中央部の一群である。40・51号炉穴と近接する。被服本廠倉庫により北側を消失する。樹枝状に重複しており、炉・足場の数から3基が構築されたと判断した。aは北東側に炉部、南西側に足場を有すが、その大半を建物基礎により削平されている。bの上位に足場を構築している。bは南東側に炉部、北西側に足場を有すと思われるが、建物基礎により足場の大半を消失する。煙道が緩やかに立ち上がる。cは南側に炉部、北側に足場を有すと思われるが、倉庫基礎により消失している。南側には煙道部と思われる段状の掘り込みがみられる。傾斜は緩やかである。調査段階では北側の51号とは別個の炉穴としていたが、連接した一連の構築の可能性も想定し得る。

遺物出土状態 土器1点（早期後葉）が出土した。

時期 出土遺物から早期後葉-茅山上層式期の所産と思われる。

B 土坑

今回の調査で検出された縄文時代の土坑は11基である。この中で、陥穴土坑が4基、その他が7基である。以下、形態別に概観する。

《陥穴土坑》

26号土坑（第239図、図版293-5～8）

グリッド 16・17-5F

平面形態 略円形

規模 144 × 130 × 55 / 80 × 73cm

検出状況 調査区南東端に位置する。被服本廠関連の廃棄穴が密集しており、一部の壁を消失する。第Ⅱ次調査17号土坑が近接しており、形態も同様である。

底部施設 打ち込みタイプ。小ピット7本が確認された。底面全体に穴を穿つ。

遺物出土状態 土器52点（早期後葉46、早期末葉1、前期中葉5）、石器1点、礫4点が出土した。

層位的には概ね3段階に分かれる。覆土1・2層（土器40点-3～7・9～12・

21・22)、3～5層(土器7点-1・14・20)、7層(8・13・17)である。土器の時期は、1・2層に前期中葉が5点の他はほぼ早期後葉である。

時期 出土土器などから早期後葉期の構築と思われる。

29号土坑(第241図、図版294-6・7)

グリッド 18-4 Z 平面形態 長楕円形

規模 143×66×35 / 125×50cm

検出状況 調査区南中央東寄りに位置する。被服本廠関連の造成により上部壁を消失する。

底部施設 中央部大ピットタイプ。円形(30×27×20cm)で、内部に小ピット4本を確認した。

遺物出土状態 土器11点(早期後葉)、礫61点が出土した。覆土中層を中心に小形の礫が多数出土している。土器は礫の集中範囲の中に散見される。

時期 出土土器などから早期後葉期の構築と思われる。

30号土坑(第240図、図版295-1・2)

グリッド 14・15-4 U 平面形態 隅丸長方形

規模 105×40×30 / 95×27cm

検出状況 調査区南中央北寄りに位置する。被服本廠関連の造成により上部壁を消失する。

底部施設 中央部大ピットタイプ。長方形(40×20cm)で、内部に棒状痕を有すが、調査過程において精査し得なかった。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から早期後葉期の構築と思われる。

36号土坑(第242図、図版296-1・2)

グリッド 23-4 M 平面形態 隅丸長方形

規模 155×78×50 / 140×52cm

検出状況 調査区西側に位置する。保育園解体撤去工事と思われる掘削により北側1/2の上部壁を消失する。

底部施設 検出されなかった。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から早期後葉期の構築と思われる。

《その他の土坑》

機能・用途が不明な土坑を一括した。総じて円形・楕円形を呈し、掘り込みは深くない。墓塚の可能性もあるが確証はない。

27号土坑(第240図、図版294-1~3)

グリッド 9-5 B・C 平面形態 楕円形?

規模 (200)×(200)×125 / 110×70cm

検出状況 調査区北東側に位置する。15号炉穴を切って構築されている。東側は攪乱により削平されている。

遺物出土状態 覆土上および下層から早期後葉の土器が4点出土した。

時期 出土土器から早期後葉の構築と思われる。

28号土坑(第240図、図版294-4・5)

グリッド 23-4 Z 平面形態 楕円形

規模 (103) × 90 × 20 / (80) × 71cm

検出状況 調査区中央南側に位置する。被服本廠並びに団地関連の造成工事により南東側の一部を消失する。浅い皿状を呈す。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から早期後葉～前期初頭期の所産と思われる。

32号土坑(第241図、図版295-3・4)

グリッド 23-4 U・V 平面形態 楕円形

規模 120 × 80 × 20 / 85 × 56cm

検出状況 調査区中央に位置する。被服本廠並びに団地関連の造成工事により上部を削平されている。本来の深度は不明であるが、陥穴土坑のような深さはないものと思われる。

遺物出土状態 土器2点(早期後葉)が出土した。

時期 出土土器から早期後葉期の所産と考える。

34号土坑(第241図、図版295-5・6)

グリッド 23-4 T 平面形態 略円形

規模 120 × 80 × 20 / 85 × 56cm

検出状況 調査区中央に位置する。近世の溝(道)の中央にあり、一部を削平されている。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から早期後葉～前期初頭期の所産かと考える。

35号土坑(第242図、図版295-7・8)

グリッド 22-4 P 平面形態 楕円形

規模 (90) × 70 × 32 / 52 × 38cm

検出状況 調査区西側に位置する。保育園解体撤去工事と思われる掘削により南西側が削平される。

遺物出土状態 土器7点(早期後葉)、礫1点が出土した。

時期 出土土器から早期後葉～茅山上層式期の所産と思われる。

37号土坑(第242図、図版296-3・4)

グリッド 22・23-4 N 平面形態 円形?

規模 133 × (62) × 28 / 56 × (30)cm

検出状況 調査区西側に位置する。7号防空避難壕により南西側1/2が削平される。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から早期後葉期の所産と考える。

38号土坑(第242図、図版296-5・6)

グリッド 21-4 T 平面形態 楕円形

規模 (100) × 90 × 30 / (50) × 43cm

検出状況 調査区中央に位置する。被服本廠倉庫基礎により北西側が削平される。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から早期後葉～前期初頭期の所産かと考える。

39号土坑（第242図、図版296-7・8）

グリッド 18-4Q

平面形態 楕円形

規模 114×62×20/90×40cm

検出状況 調査区中央北側に位置する。被服本廠倉庫基礎により南西側の一部が削平される。

遺物出土状態 出土遺物なし。

時期 覆土の様相から早期後葉～前期初頭期の所産かと考える。

C ビット群・ビット

今回の調査で検出された縄文時代のビットは総計27基である。被服本廠倉庫・団地造成などによる削平のため、上部が削られ、遺存状態が不良のものが多く、ある程度の纏まり・配列が確認されたものは群として報告する。

1号ビット群（第243図、図版297）

調査区中央、17・18-4U・V区に7基が検出された。P1～3は楕円形に並び、P4～7は直線状に並んでいる。ビットの規模は以下のとおりである。

P1-23×22×30/16×13cm、P2-28×19×25/18×17cm、P3-27×22×20/20×14cm、P4-22×20×15/15×13cm、P5-20×16×15/10×7cm、P6-22×20×30/14×9cm、P7-43×30×30/10×10cm。

P7がやや大振りであるが、他はほぼ同規模である。深度に関しては、被服本廠倉庫・団地造成などの削平を受けて、上部を消失していると思われ、本来の深さではない。

ビットの配列をみるに、P1～3ないしはP5・6を含め、北西-南東方向の長軸550cmの楕円形プランとなる。また、P4・5はP6・7との配列からみるに、北北東-南南西方向の長軸450cmの楕円形プランとなる。この事から想定され得るのは、炉穴の集中部の間隙にあり、炉穴の上屋関連の柱穴とは想定し難く、住居跡の壁柱穴の残存が考えられる。主柱穴を持たず、壁柱穴のみで構築されたタイプの住居と思われる。削平が床面以下にまでおよび、柱穴の一部のみが遺存した状態であろうか。P1～3（ないしは+P5・6）とP4～7の2軒の住居跡の可能性が推測される。南側は被服本廠倉庫関連の排水管路により削平され、全体像は明確ではない。出土遺物は、P5より早期後葉期の土器が2点出土しており、その時期の所産と思われる。

2号ビット群（第244図、図版298-1～4）

1号ビット群の西側、17-4S・T区で5基が検出された。1号と同様に南側は被服本廠倉庫関連の排水管路により削平されている。P1～3は直線状に並び、P5は西側に250cmほど離れて存在する。ビットの規模は以下のとおりである。

P1-24×20×10/17×13cm、P2-30×27×30/15×13cm、P3-30×23×20/18×14cm、P4-(30)×35×20/(25)×20cm、P5-28×22×30/13×10cm。

検出・配列状況からみるに、炉穴の上屋関連柱穴ではなく、1号ビット群P1～3と軸方向をほぼ同じくする住居跡の可能性が考えられる。P1～3は長軸東側の壁柱穴、P5は北西側柱穴と推定される。これらからやや北側に離れてビットが1基（P6）検出されているが、単独であり、その性格は不明である。出土遺物はないが、覆土の様相は1号ビット群と同様のものであり、所属時期も同様

に早期後葉期と思われる。

3号ピット群 (第245図、図版298-5～299-2)

調査区中央西寄り、18-4Q・R区で5基が検出された。南側は被服本廠倉庫により削平されている。P1を頂点にP2・3が東側、P4・5が西側に並ぶ。規模は以下のとおりである。

P1-40×33×40/20×15cm(造り替え)、P2-37×27×30/15×15cm(造り替え)、
P3-25×22×15/15×13cm、P4-25×22×30/5×5cm、P5-43×32×30/25×10cm(造り替え)。

P1・2・5は柱の造り替えて2本が重複している。配列の規模はP1～3が500cm、P2-4が450cmを測る。1・2号ピット群同様、住居跡の壁柱穴の可能性が考えられ、ほぼ南北方向を主軸とした楕円形プランを呈するものと思われる。出土遺物はないが、1・2号ピット群と同様の時期の所産と思われる。

4号ピット群 (第246図、図版299-3～300)

調査区南側、23-5B区で4基が検出された。周囲は被服本廠倉庫および団地造成により削平され、台状に遺存した部分で確認されたものである。規模は以下のとおりである。

P1-30×24×30/18×14cm、P2-18×18×15/11×10cm、P3-25×21×15/15×14cm、P4-19×15×20/12×11cm。

P2～4が直線状に並び、P1はP2の北東側に寄る。配列からみるに、主軸をほぼ南北に向けた住居跡の西側壁柱穴(P2～4)で、P1は北側壁柱穴であろうかと思われる。周囲には炉穴は検出されておらず、その関連施設の可能性は少ない。出土遺物はないが、覆土の様相から、1・2号ピット群と同様の時期の所産と思われる。

ピット

その他のピットとして、2基が並ぶもの、単独で検出されたものを一括した。

P20・21 (第246図)

調査区南側、26・27-4Xで検出された。周囲が団地住棟建設により削平された中で、遺存していた地山部分で、220cm離れて2基が確認された。規模はP20-30×23×55/18×15cm、P21-23×20×45/12×11cmを測る。掘り込みは深く、柱穴として捉えられようが、上記ピット群のように纏まりは確認できず、住居跡等の可能性を示唆する材料に乏しい。

P26・27 (第246図)

調査区南側、26-4V区で2基が近接して検出された。北側は18号住居跡、南側は攪乱で削平されており、確認し得たのはこの2基のみである。規模はP26-33×33×45/15×15cm、P27-35×32×25/20×18cmを測る。55cmの間隔で並ぶ。柱穴として捉えられようが、施設の断定までには至らない。

その他のピット (第246図)

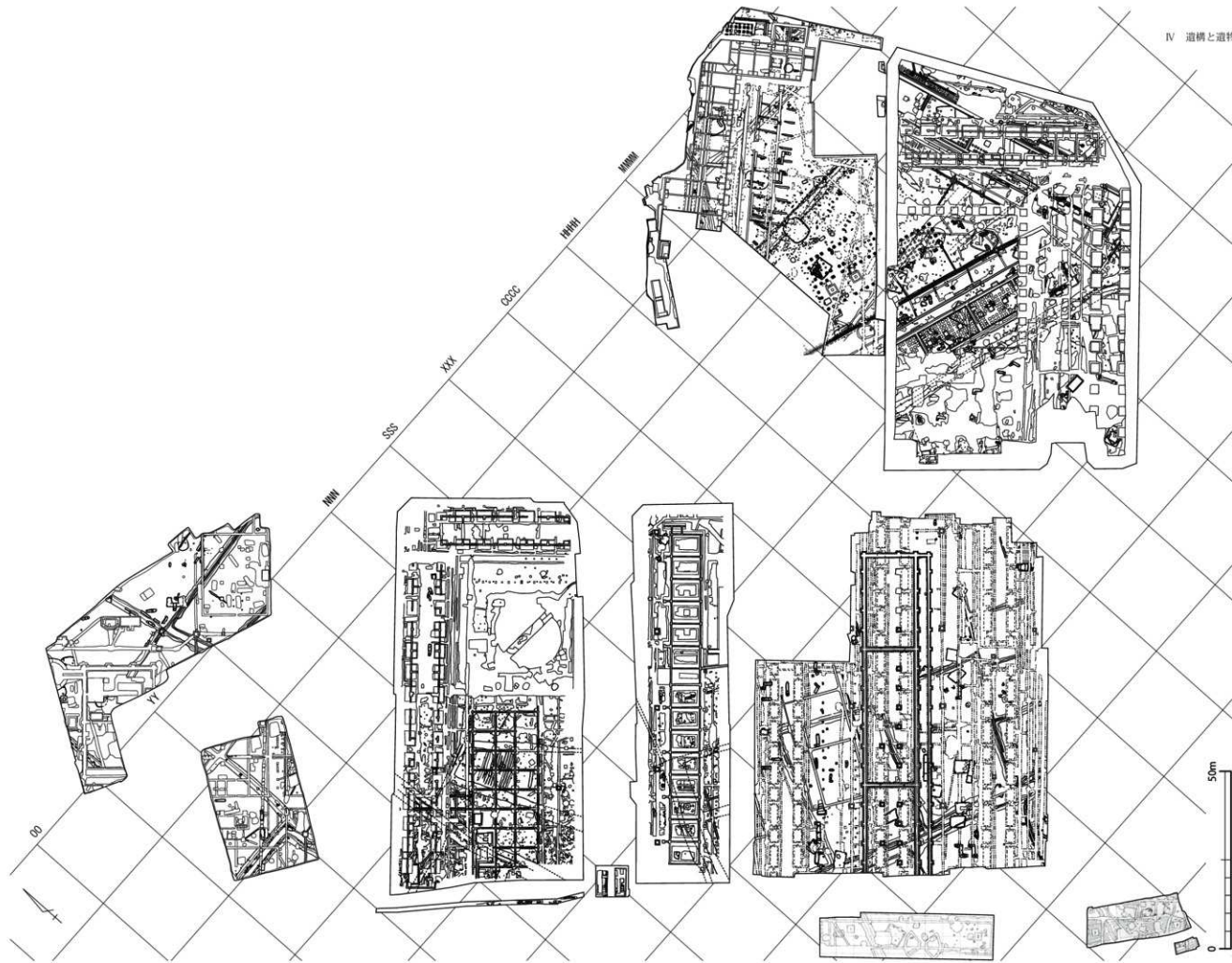
単独で検出されたピットを一括する。柱穴ではあるが、施設の特定には至らない。

P1:18-4X区 27×27×30/14×14cm

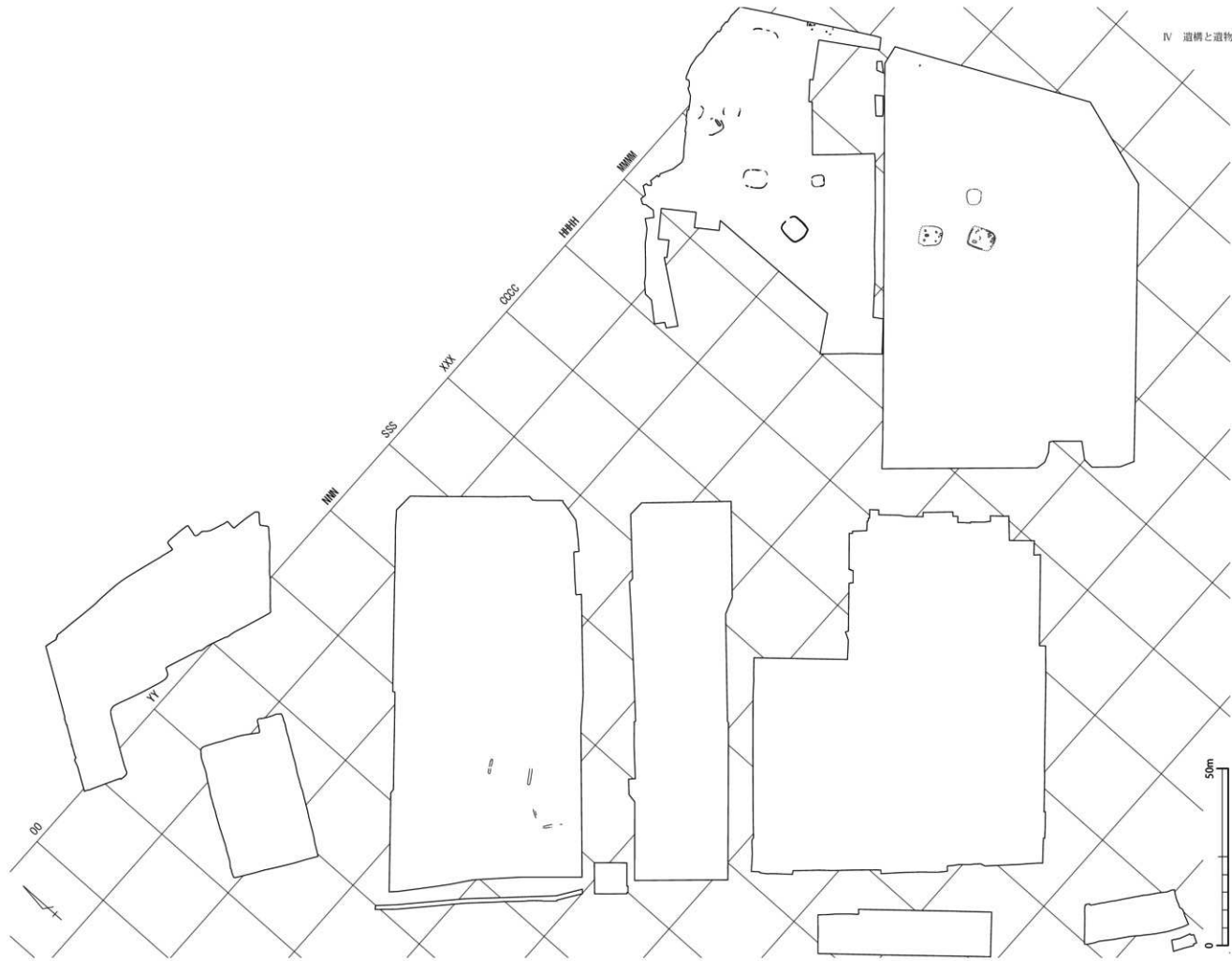
P23:22-4U区 32×31×40/13×11cm

P24:22-4T区 32×26×30/24×18cm

P25 : 31 - 4 S 区 $40 \times 32 \times 45 / 20 \times 16\text{cm}$

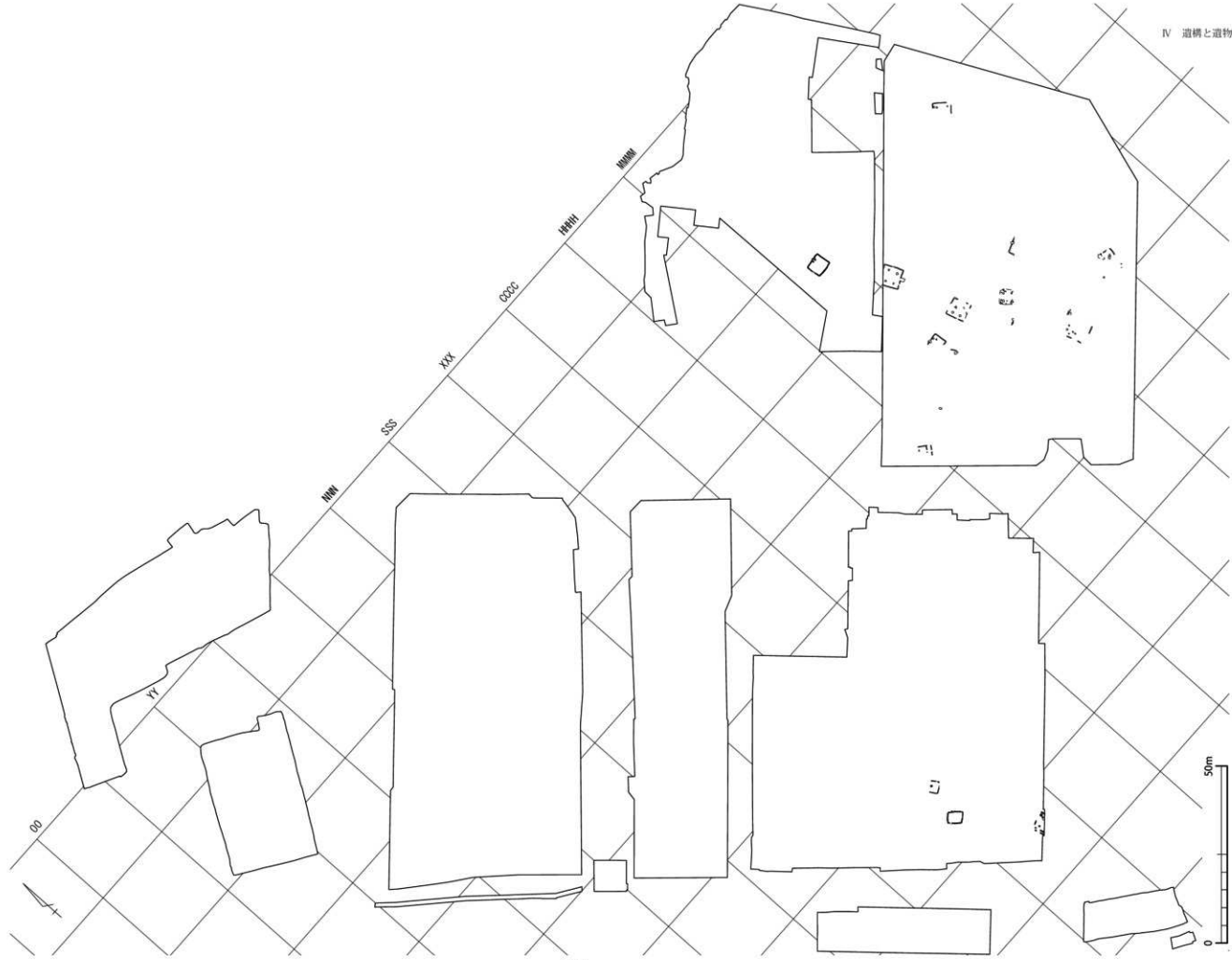


第 199 図 赤羽上/台遺跡 全体図 (1/1,000)

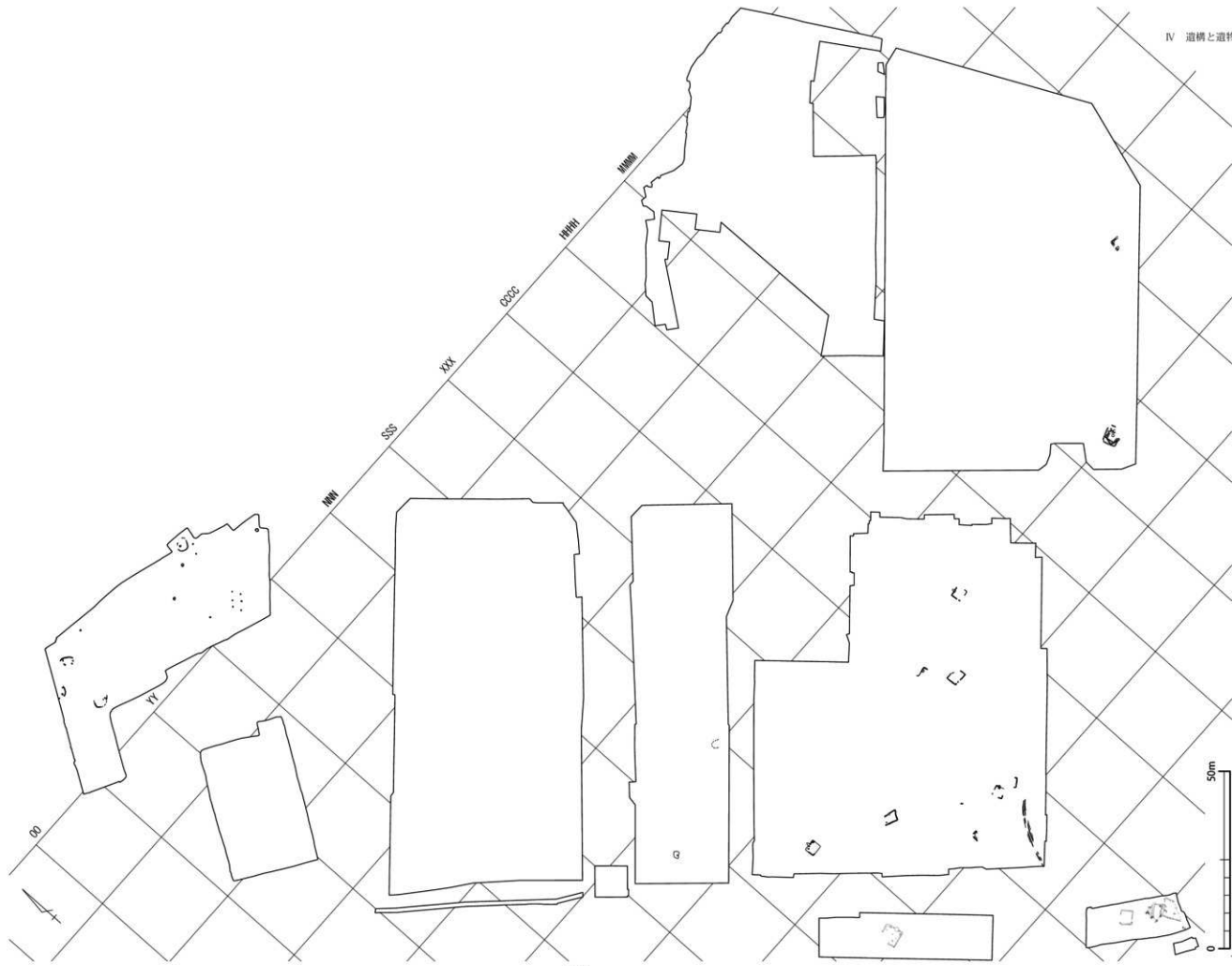


IV 遺構と遺物

第 201 図 赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図 (2) 弥生時代 (1/1,000)

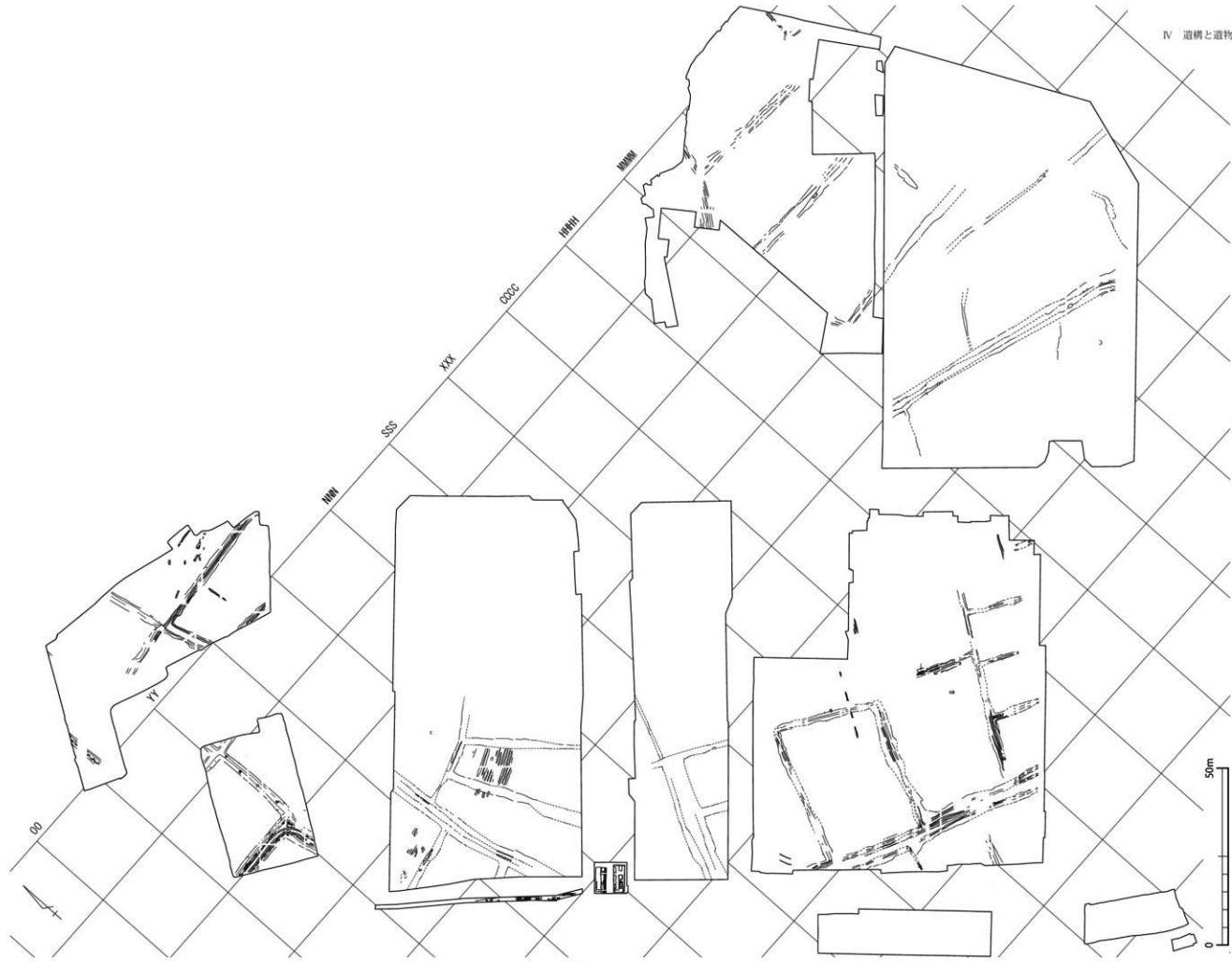


第202図 赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図(3) 古銅時代前~後期 (1/1,000)

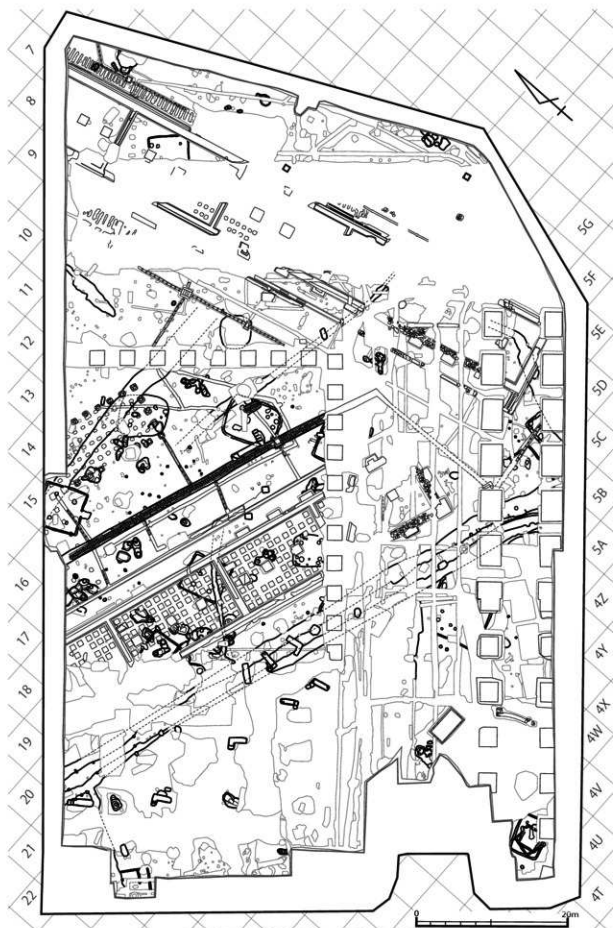


IV 遺構と遺物

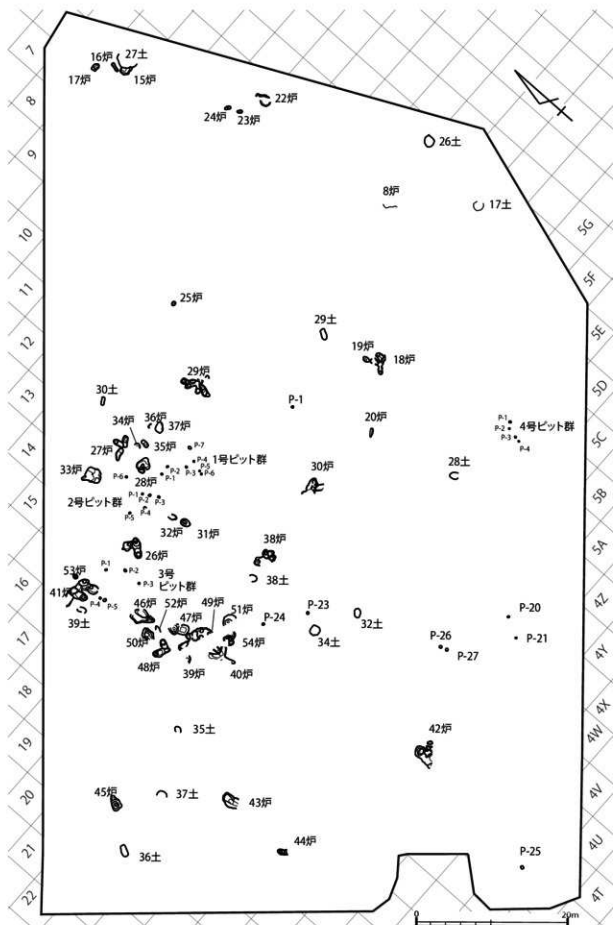
第 203 図 赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図 (4) 奈良・平安時代 (1/1,000)



第 204 図 赤羽上ノ台遺跡 時代別遺構配置図(5) 近世 (1/1,000)

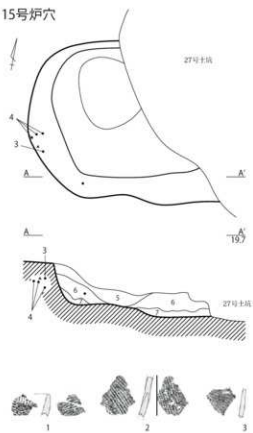


第 205 図 赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 全体図 (1/500)

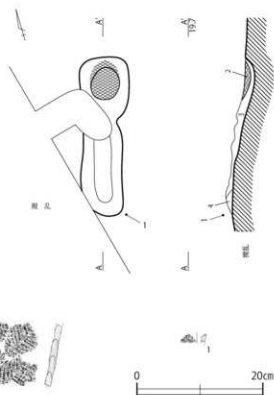


第206図 赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 時代別遺構配置図 (1) 縄文時代 (1/500)

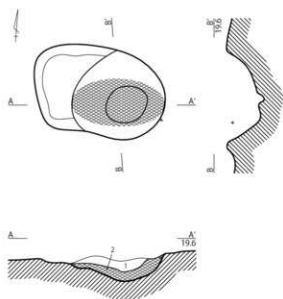
15号炉穴



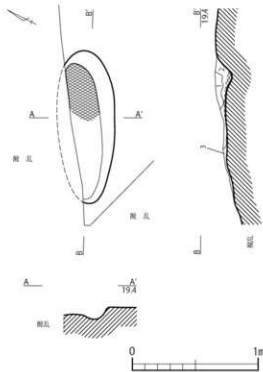
16号炉穴



17号炉穴

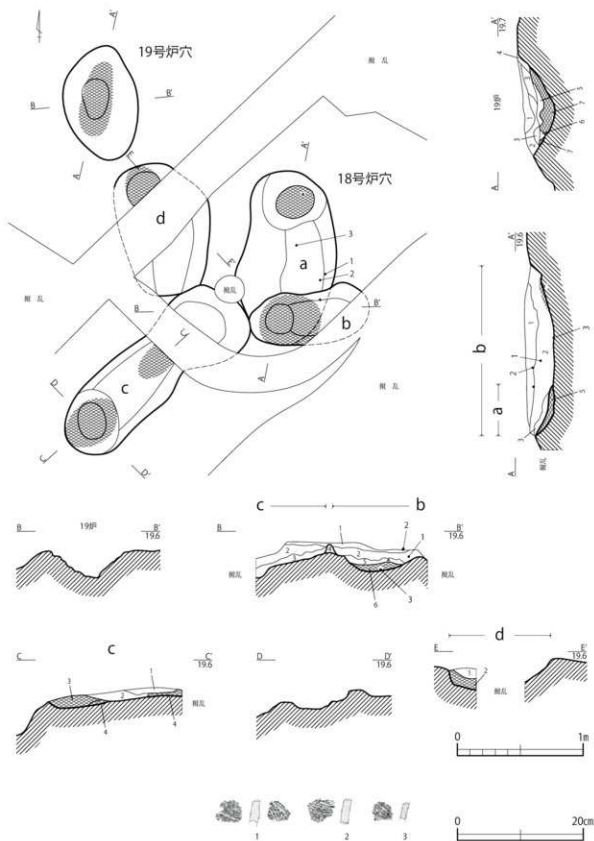


20号炉穴

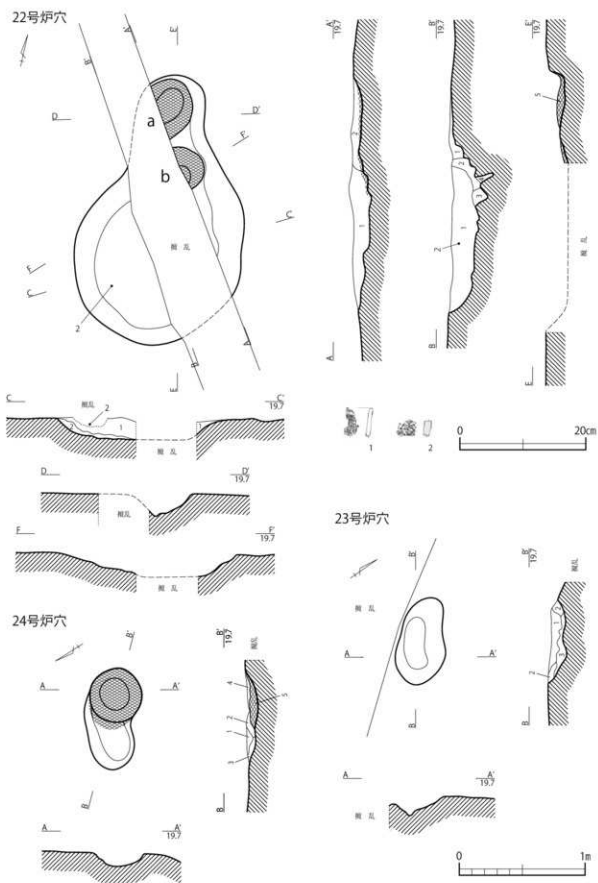


第207图 炉穴(1) (1/30)

18·19号炉穴

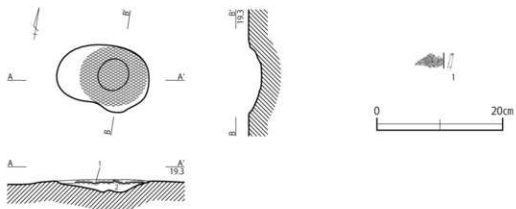


第208图 炉穴(2)(1/30)

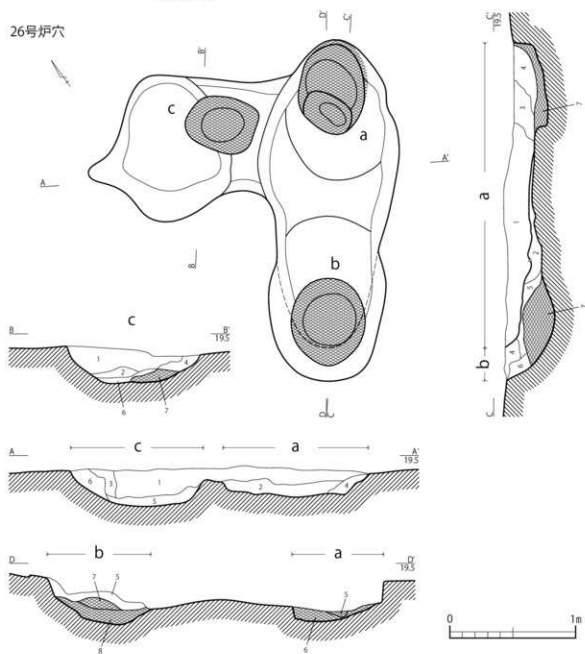


第209图 炉穴(3)(1/30)

25号炉穴

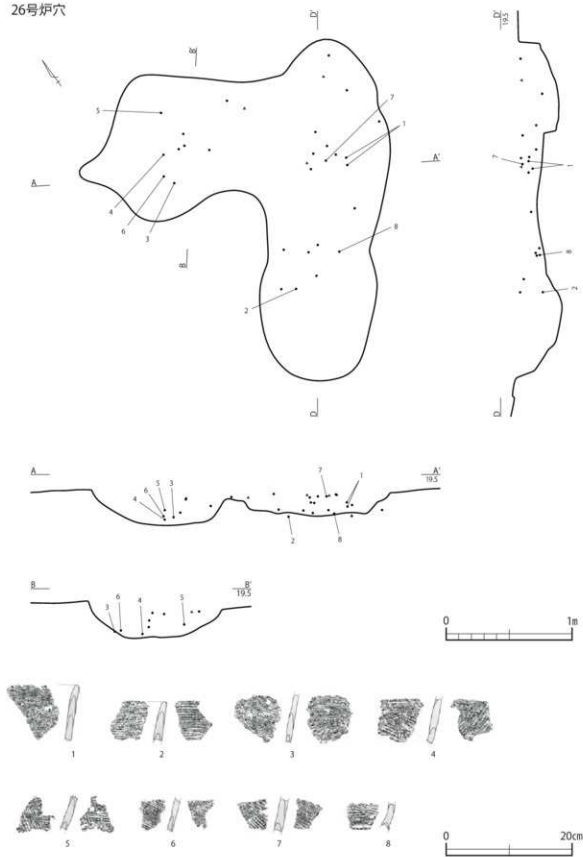


26号炉穴



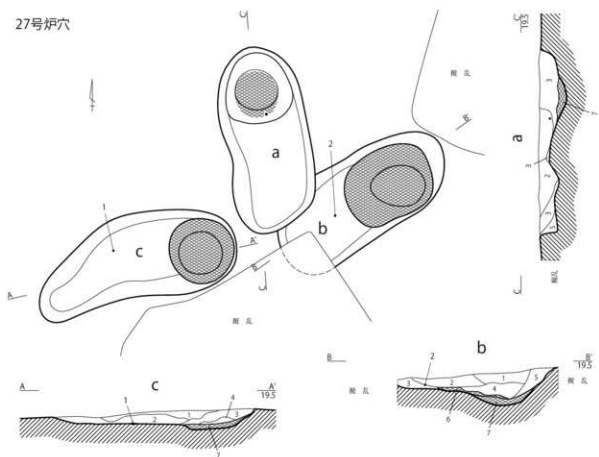
第 210 图 炉穴 (4) (1/30)

26号炉穴

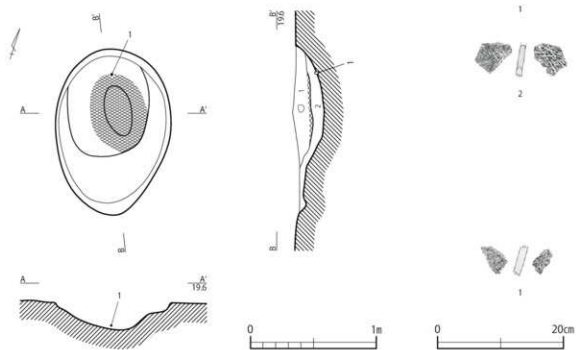


第211图 炉穴(5) (1/30)

27号炉穴

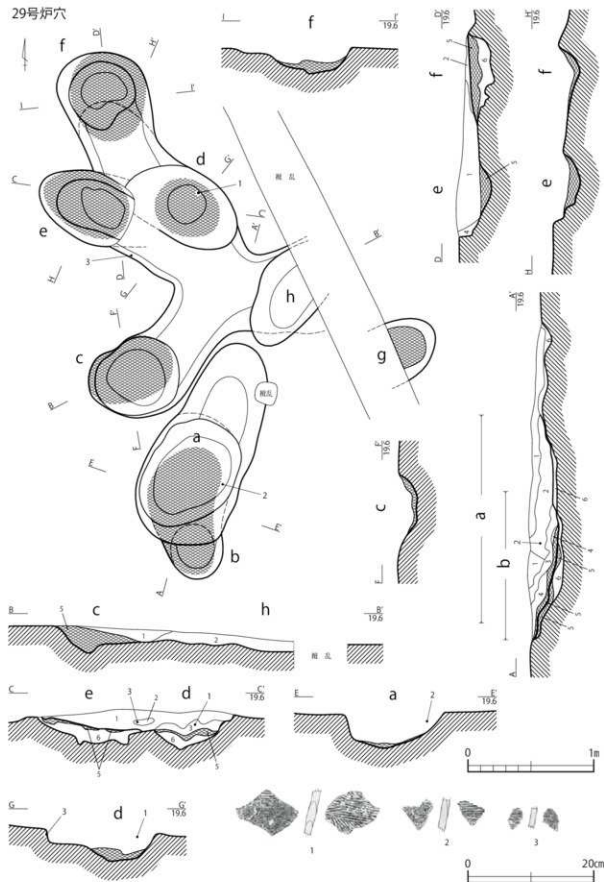


31号炉穴



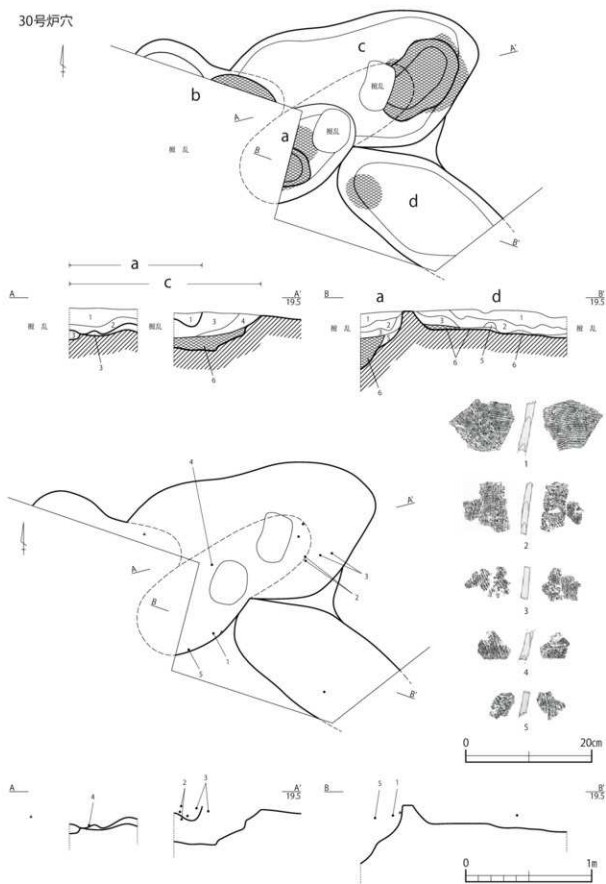
第212图 炉穴(6) (1/30)

29号炉穴



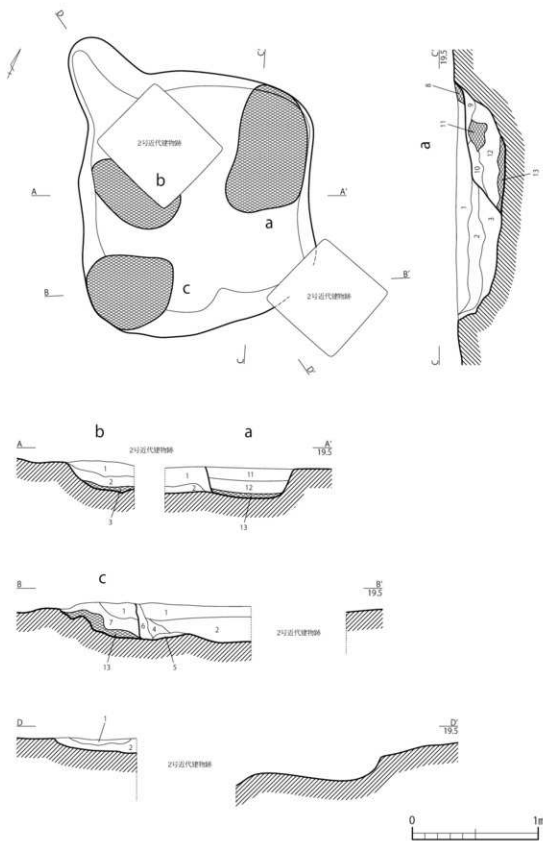
第213图 炉穴(7) (1/30)

30号炉穴



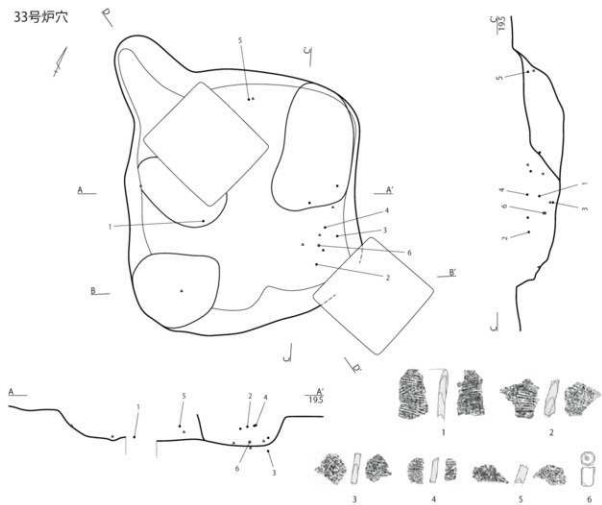
第214图 炉穴(8) (1/30)

33号炉穴

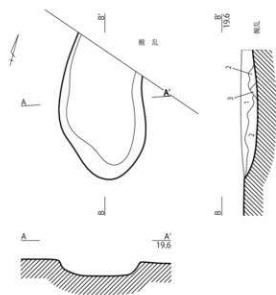


第215图 炉穴(9)(1/30)

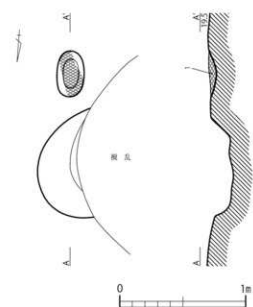
33号炉穴



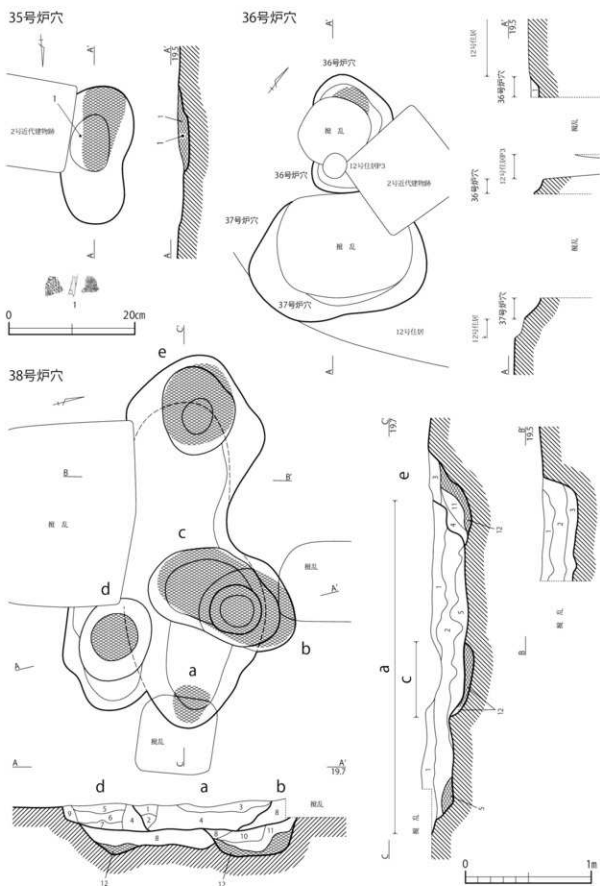
32号炉穴



34号炉穴

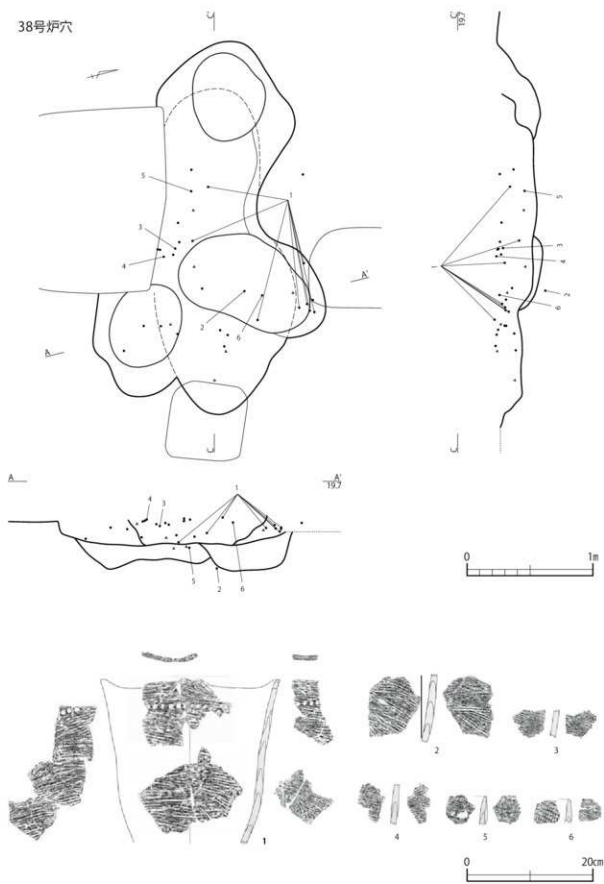


第216图 炉穴 (10) (1/30)



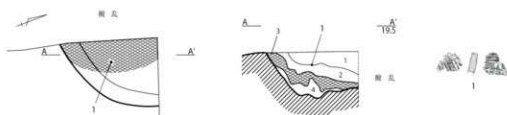
第217図 炉穴 (11) (1/30)

38号炉穴

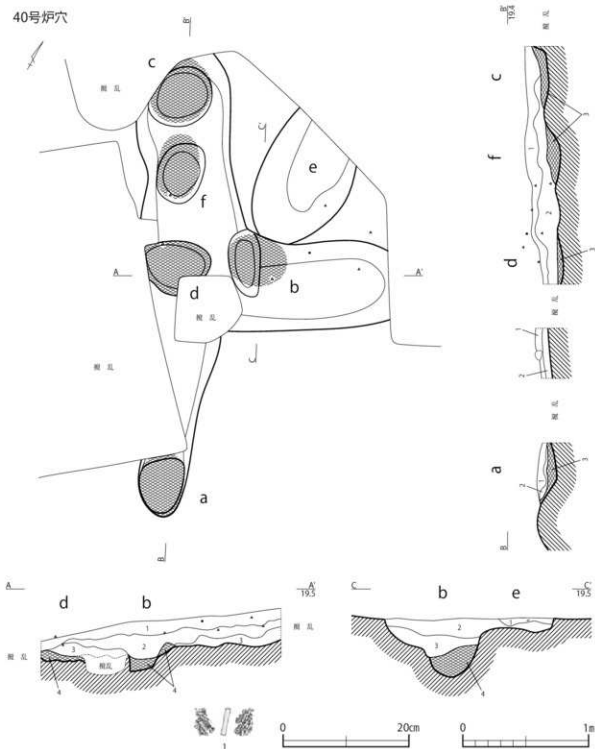


第218图 炉穴 (12) (1/30)

39号炉穴

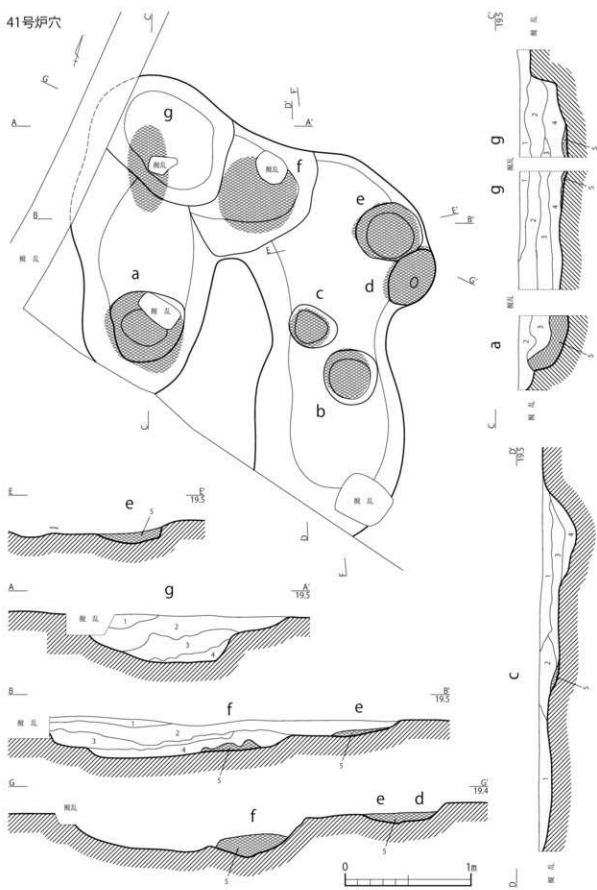


40号炉穴



第219图 炉穴 (13) (1/30)

41号炉穴



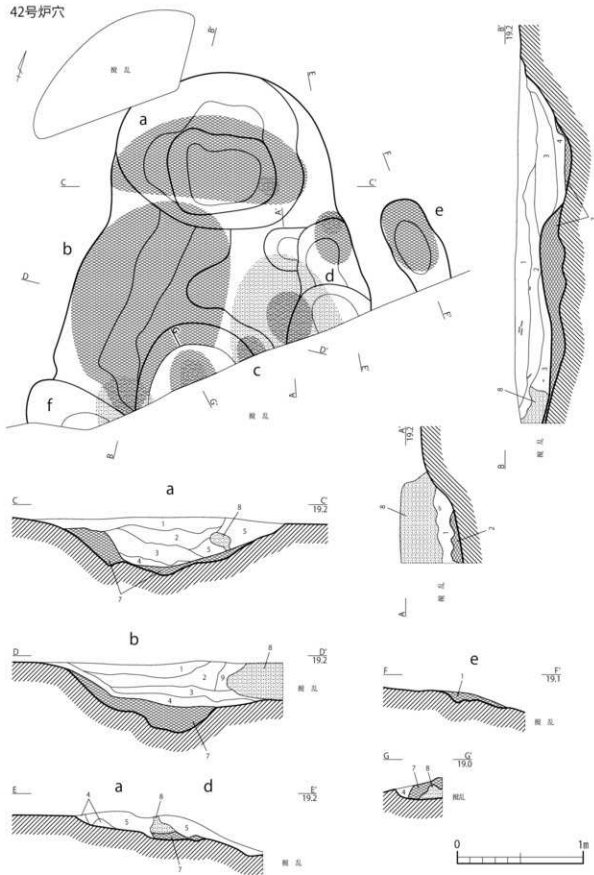
第220图 炉穴 (14) (1/30)

41号炉穴



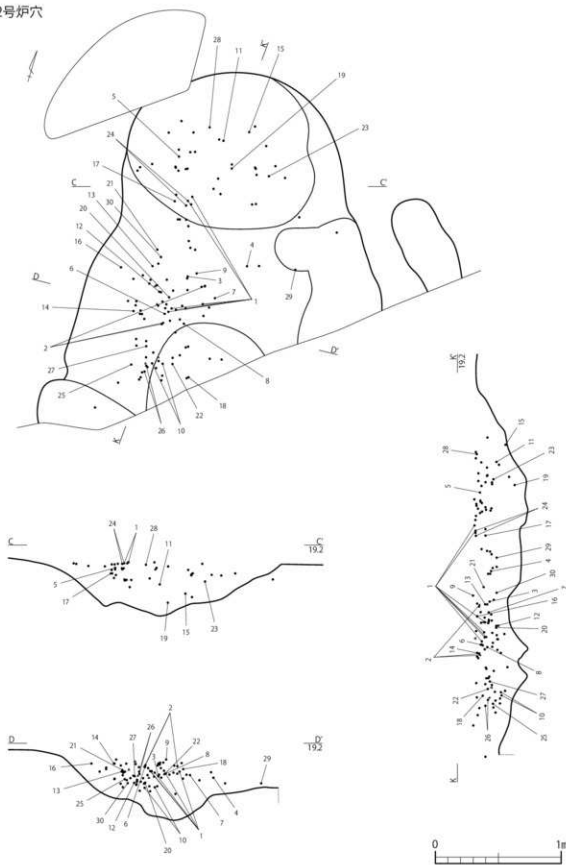
第221图 炉穴 (15) (1/30)

42号炉穴



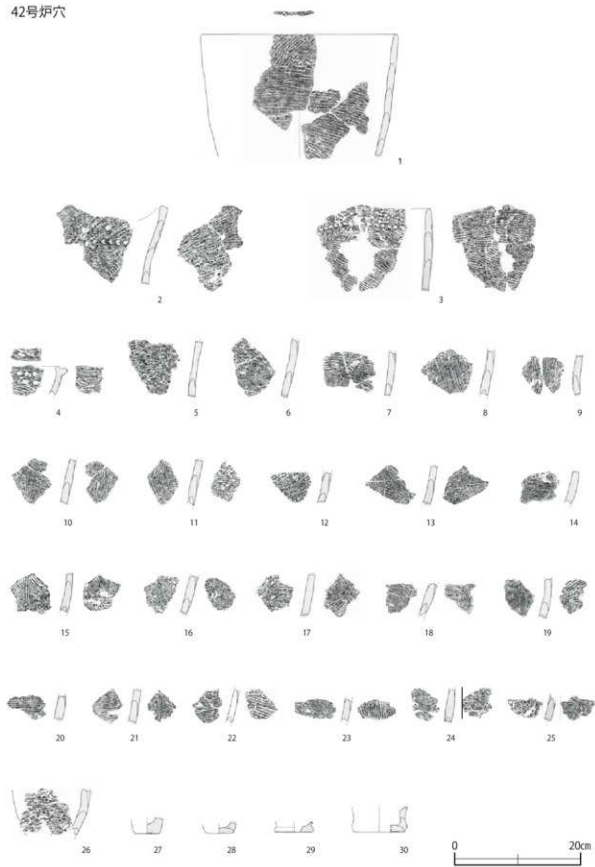
第222图 炉穴 (16) (1/30)

42号炉穴



第223図 炉穴(17) (1/30)

42号炉穴



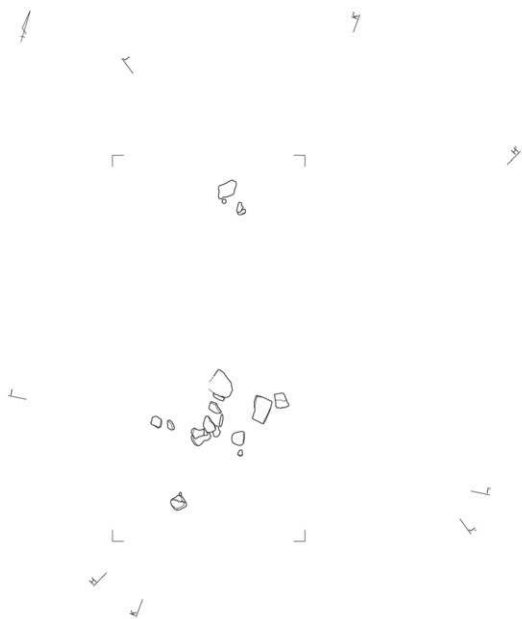
第 224 图 炉穴 (18) (1/6)

42号炉穴



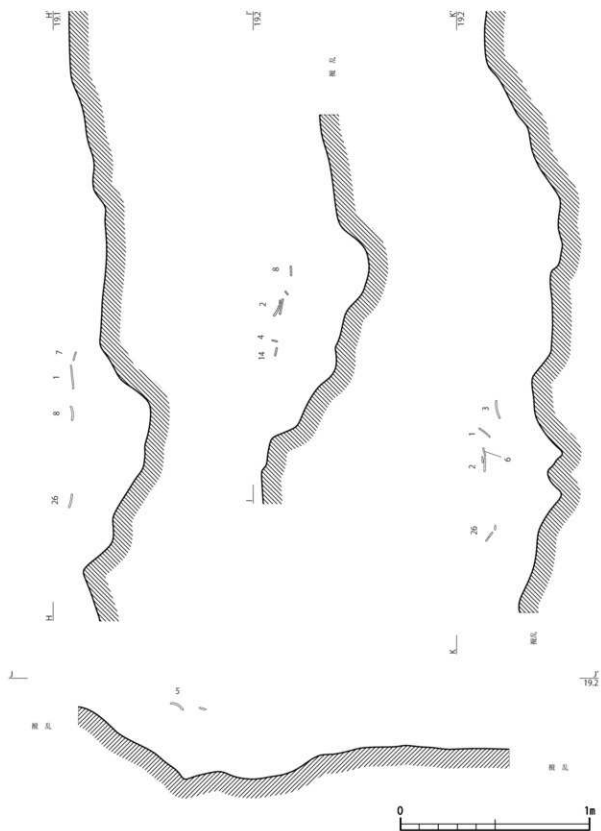
第225図 炉穴(19) (1/30)

42号炉穴



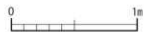
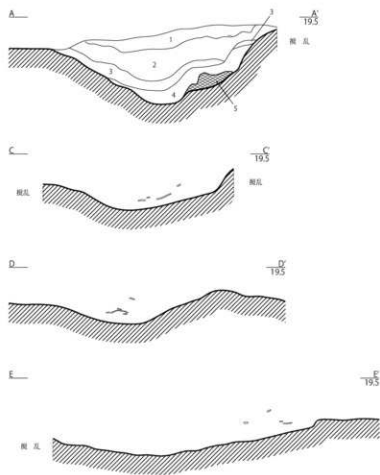
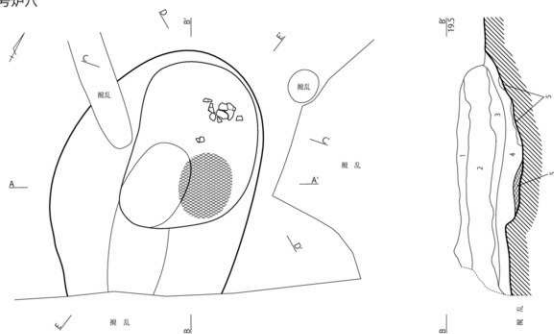
第 226 图 炉穴 (20) (1/30)

42号炉穴

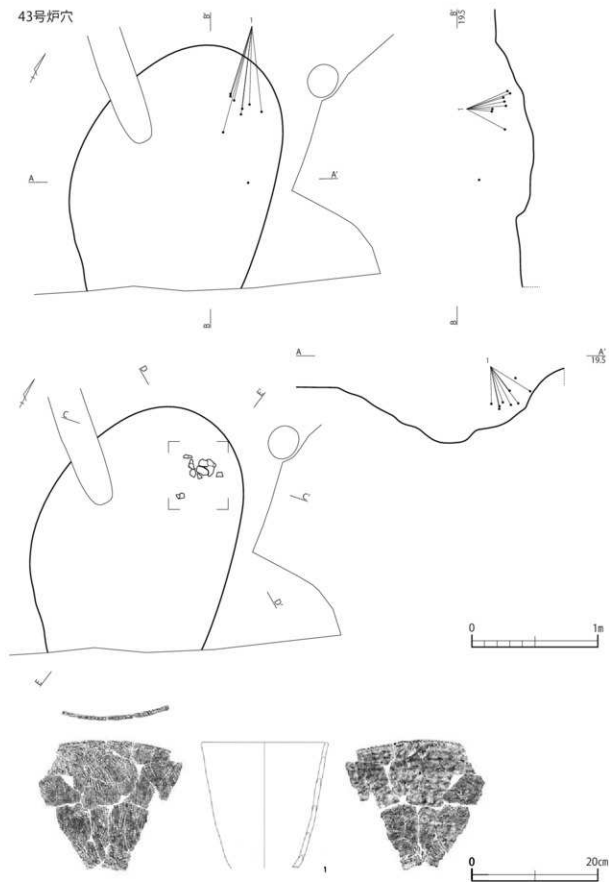


第227図 炉穴 (21) (1/30)

43号炉穴

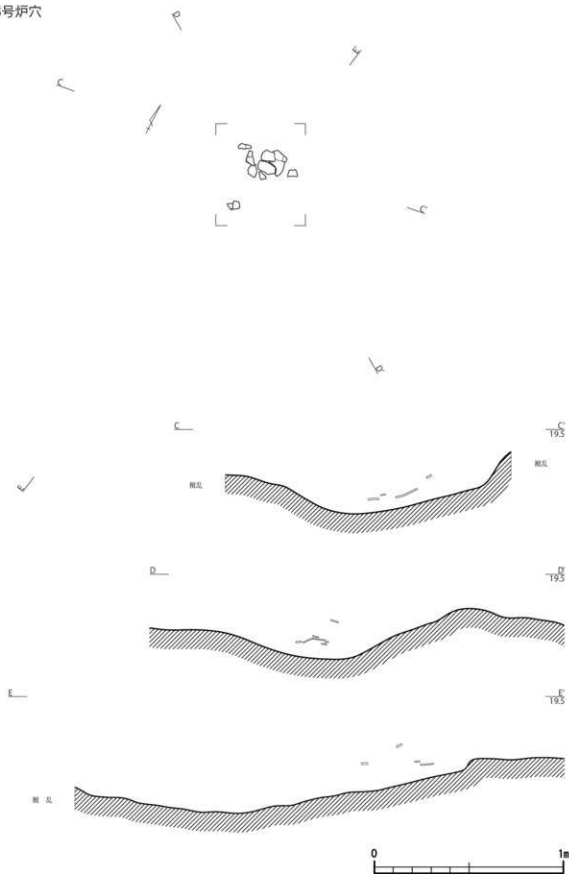


第228图 炉穴 (22) (1/30)

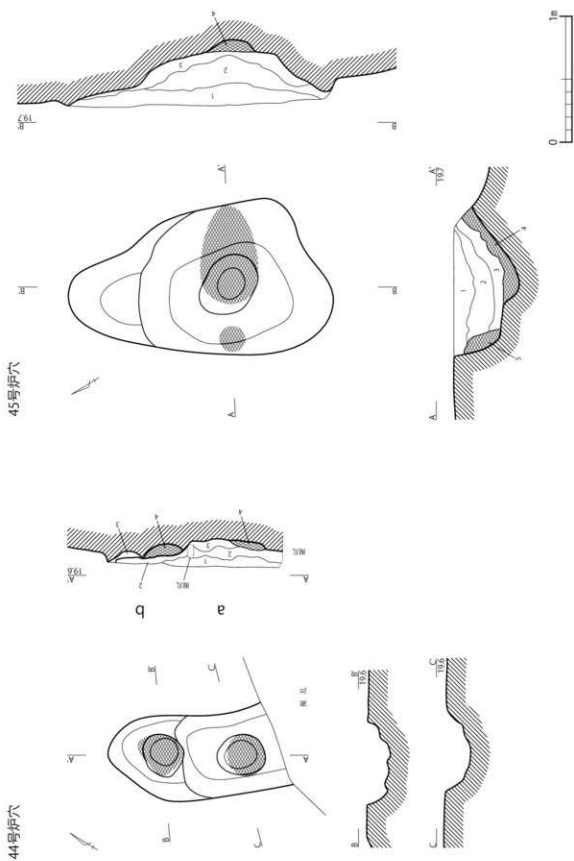


第229図 炉穴 (23) (1/30)

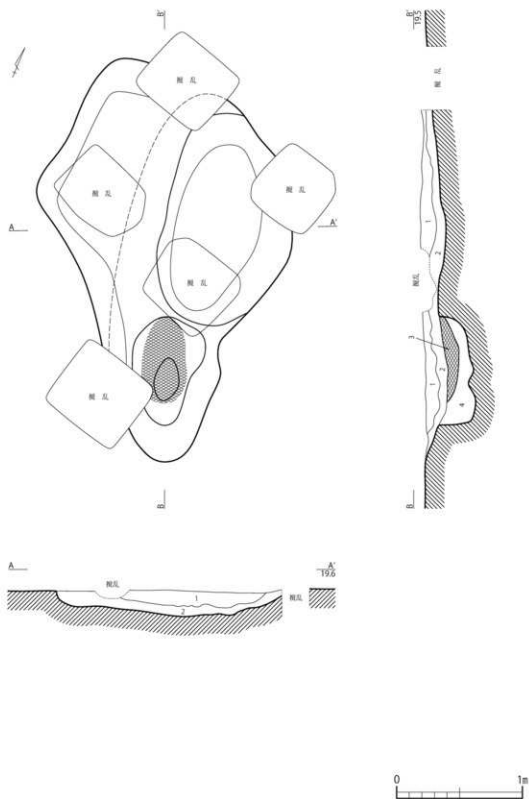
43号炉穴



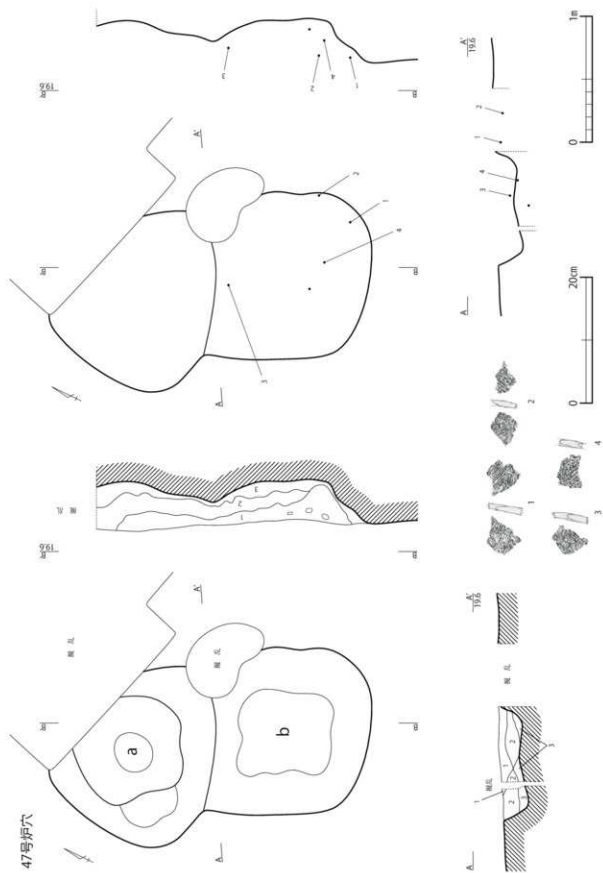
第230图 炉穴(24) (1/30)



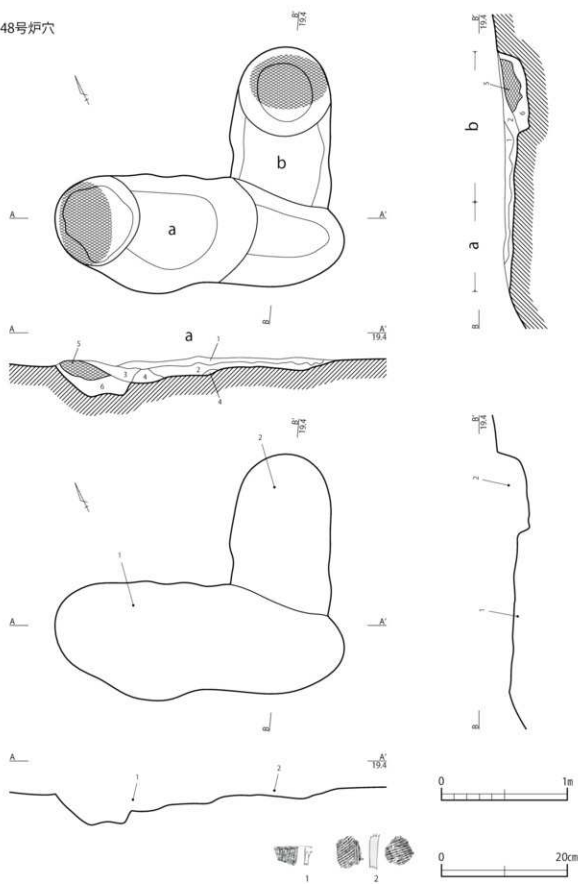
46号炉穴



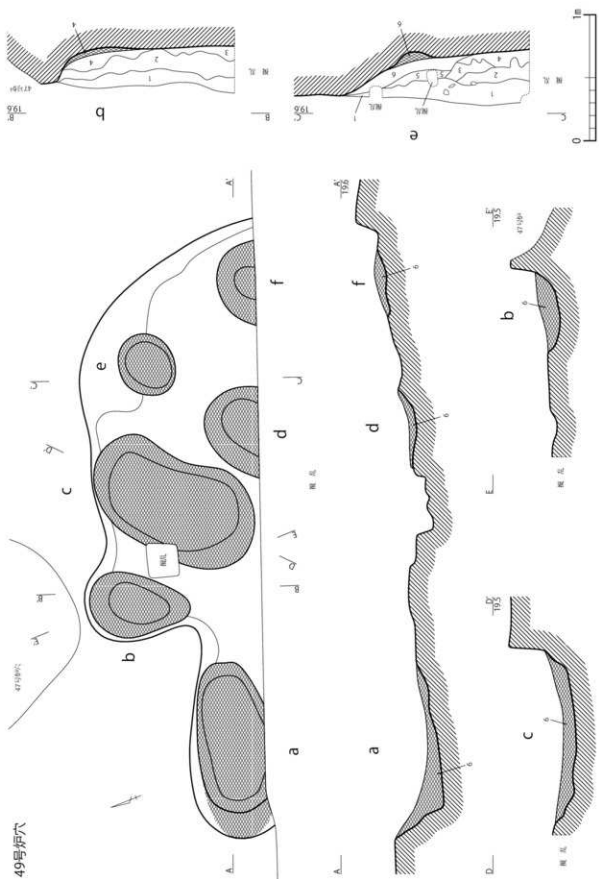
第232图 炉穴(26) (1/30)



48号炉穴

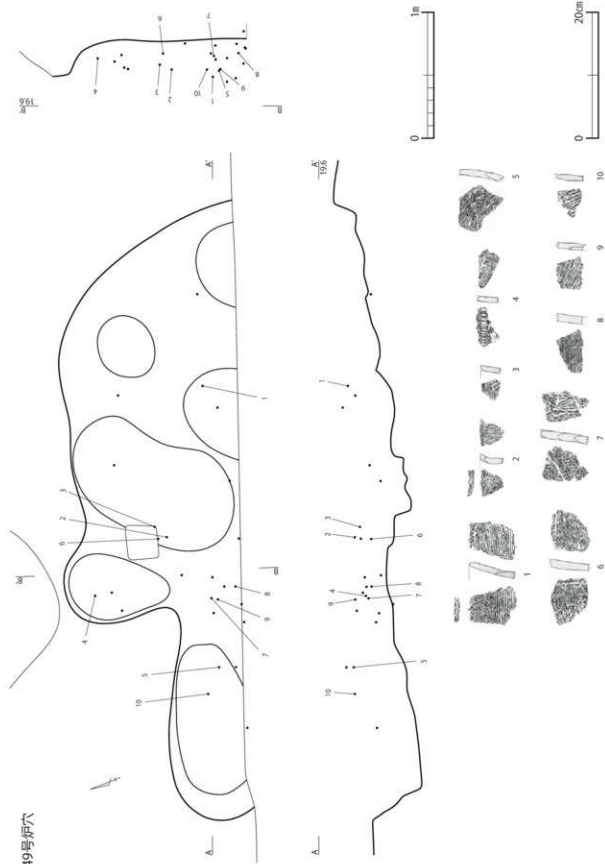


第 234 图 炉穴 (28) (1/30)



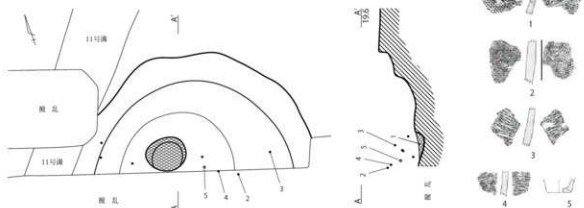
第235図 炉穴 (29) (1/30)

49号炉穴

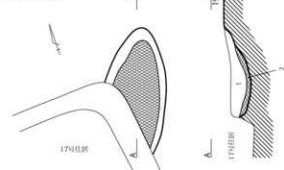


第236图 炉穴 (30) (1/30)

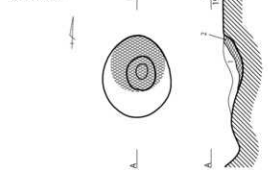
51号炉穴



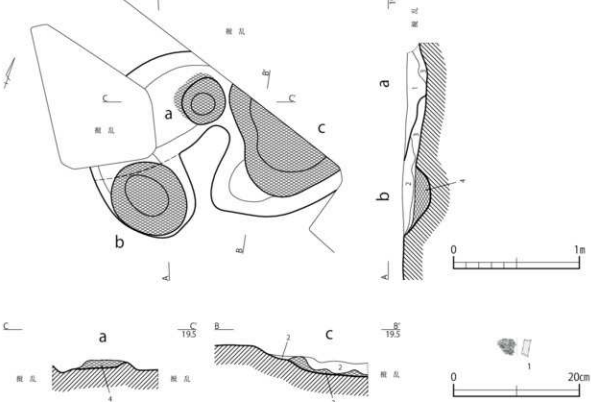
52号炉穴



53号炉穴

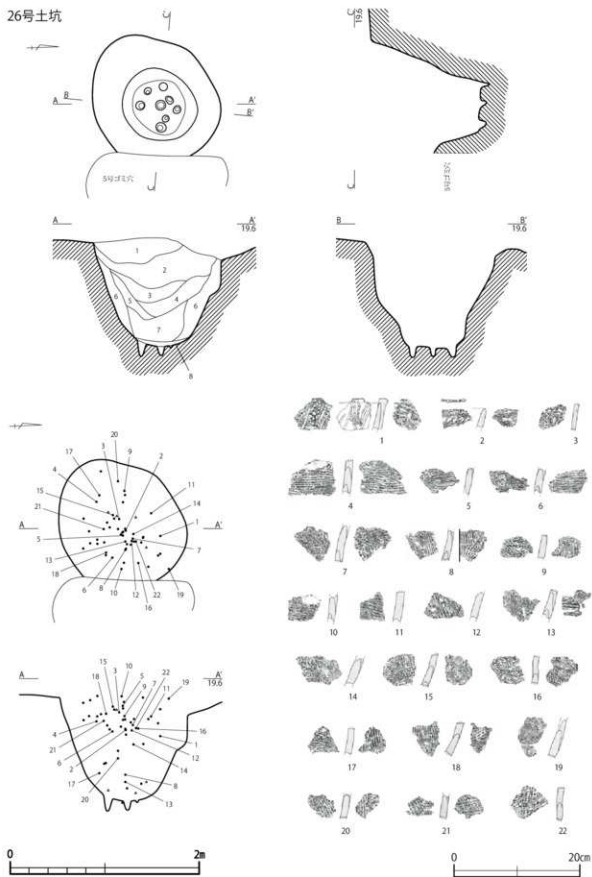


54号炉穴



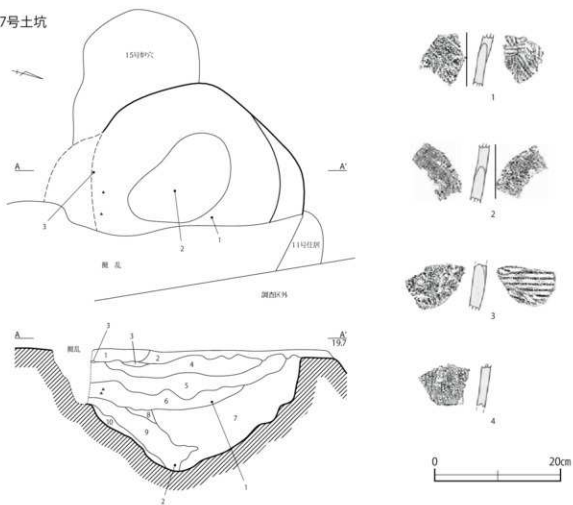
第238图 炉穴 (32) (1/30)

26号土坑

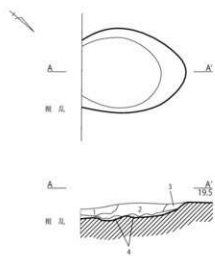


第239図 土坑(1) (1/40)

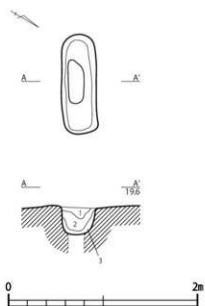
27号土坑



28号土坑

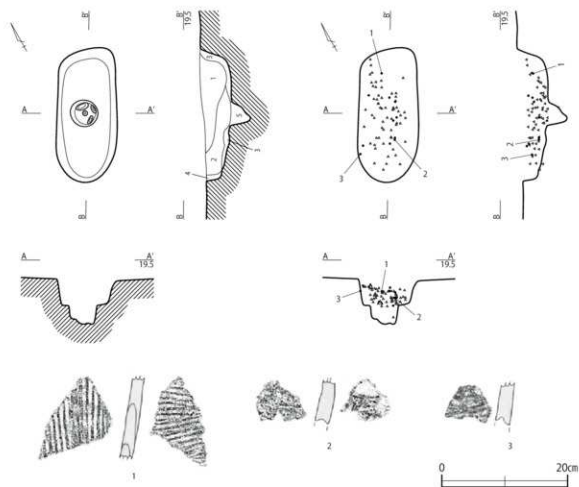


30号土坑

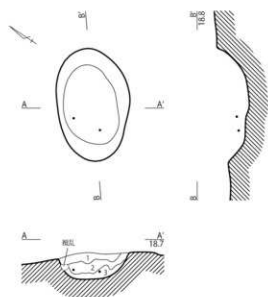


第240图 土坑(2) (1/40)

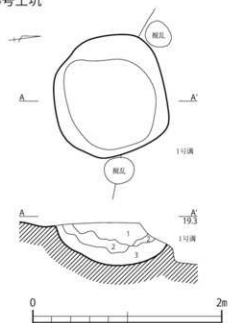
29号土坑



32号土坑

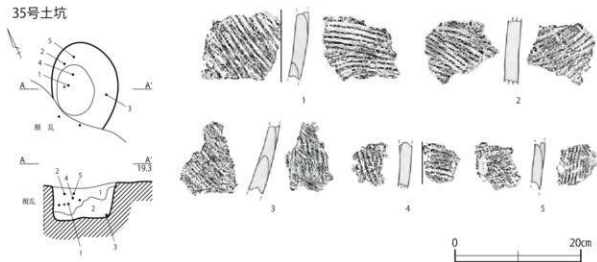


34号土坑

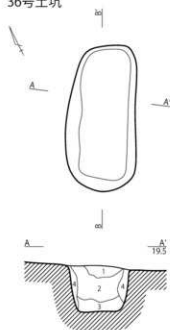


第241图 土坑(3) (1/40)

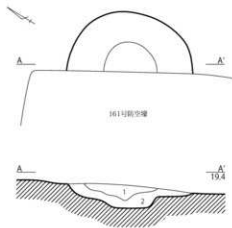
35号土坑



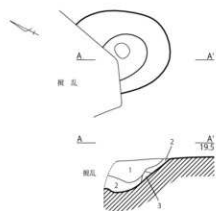
36号土坑



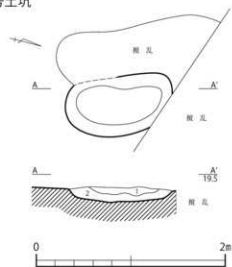
37号土坑



38号土坑

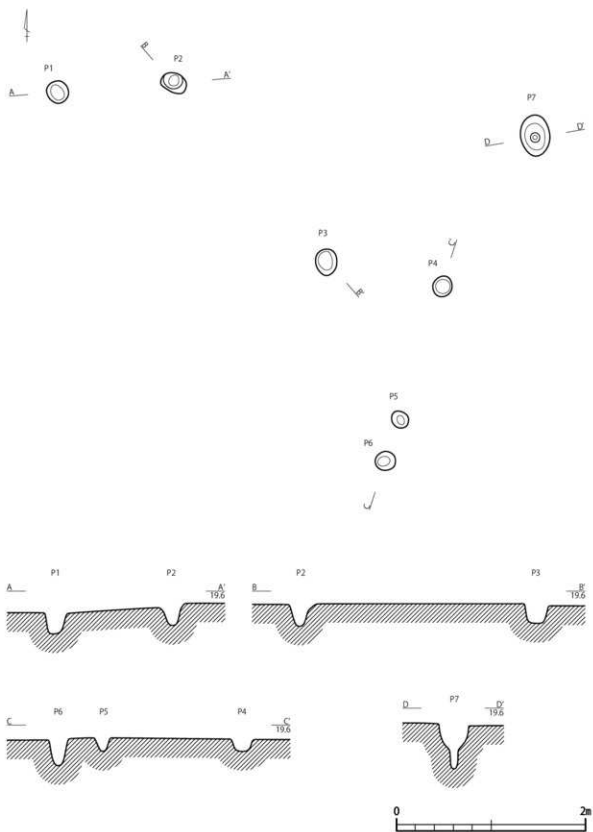


39号土坑



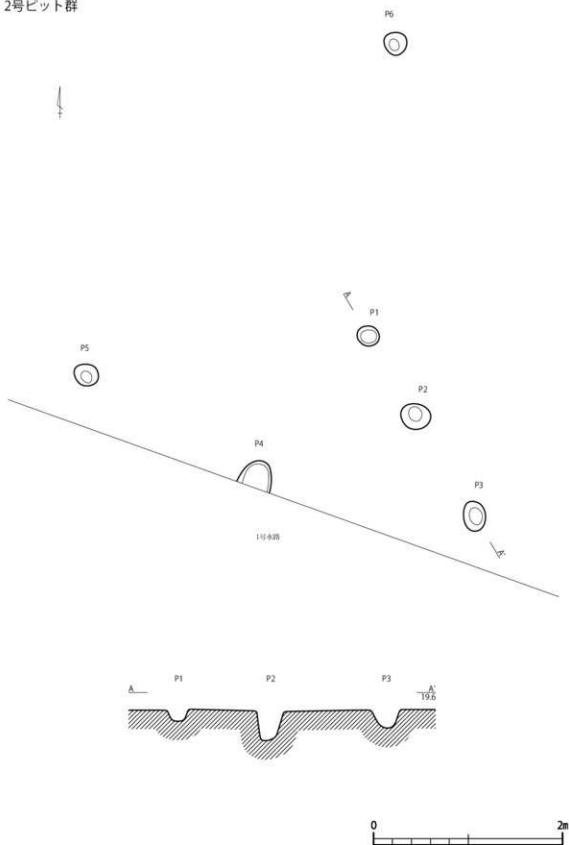
第242图 土坑(4) (1/40)

1号ビット群



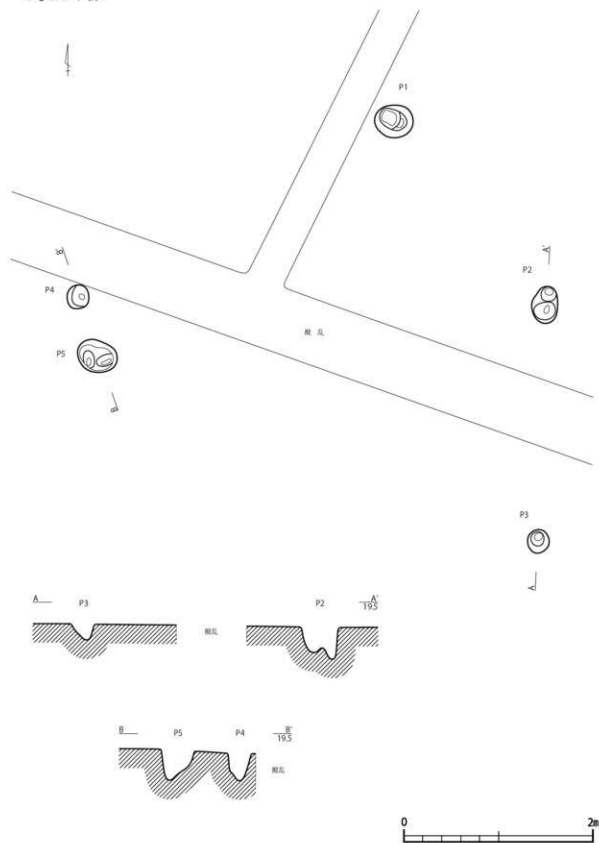
第243図 ビット(1) (1/40)

2号ビット群



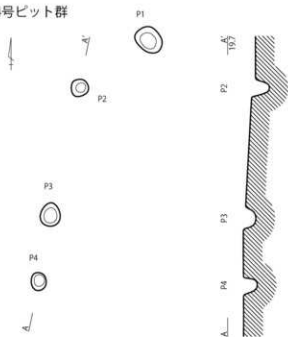
第244図 ビット(2)(1/40)

3号ピット群

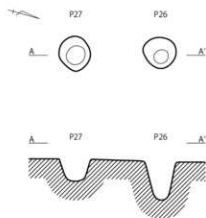


第245図 ピット(3) (1/40)

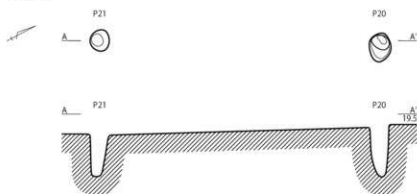
4号ビット群



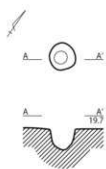
P26・27



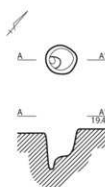
P20・21



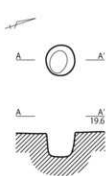
P1



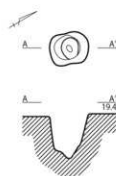
P23



P24



P25



第246図 ビット (4) (1/40)

2) 遺物

今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、土器 1,539 点（遺構内 409 点、遺構外 1,130 点）、土製品 36 点（二次利用土器片 34 点、土錘 1 点、ミニチュア土器 1 点）、石器 12 点（石核 1 点、剥片 11 点）である。土器の時期的内訳は、早期前葉 5 点、早期中葉 1 点、早期後葉 965 点、早期末葉 41 点、前期初頭 47 点、前期中葉 8 点、前期後葉 20 点、前期初頭～中葉と思われるもの 470 点、中期初頭 2 点、中期中葉 1 点、中期後葉 16 点、後期前葉 2 点である。礫は総計 576 点出土しているが、時代の特定・分別は困難であり、全体の総数のみ掲載した。

調査区内は縄文時代の包含層は極めて少なく、出土した遺物の大半は当該時代の遺構内および弥生時代・古墳時代～平安時代の住居跡など後代の遺構から出土している。前者に対し、後者からの出土量が多いが、今回の調査区内で炉穴が集中している範囲内に検出された後代の住居跡からの出土が目立っている。住居構築により炉穴などを削平した際に縄文時代の遺物が攪乱され、当該住居の廃絶後の覆土形成過程で二次的に流入したものと思われる。また、全面的に明治期の被服本廠倉庫建設にともなう造成・削平、団地建物による削平など、上部の削平、掘削による攪乱が著しく、遺構上面、東側・南側崖線に向かうなどらかな勾配に遺存していたと思われる包含層がほぼ消失しており、遺物の分布状況を把握する材料に欠ける。以下、各遺構・遺構外の遺物を概観する。個別の詳細は観察表（第 2 分冊 第 22～24 表）を参照されたい。

A 土器

・遺構内出土土器

炉穴

15 号炉穴（第 247 図 1～4、図版 301）

出土土器総数 9 点の内訳は、早期後葉 4 点、早期末葉 1 点、前期中葉 3 点を数える。破片資料 4 点を掲載した。1 は口縁部に縦列沈線を充填する区画文を有す。2 は表裏条痕文である。3 は擦痕文である。4 は縄文 RL を施文方向を変えて羽状にしている。

1 は早期後葉—鶴ヶ島台式、2 は早期後葉、3 は早期末葉、4 は前期中葉—黒浜式である。

16 号炉穴（第 247 図 1、図版 301）

出土土器は掲載の 1 点のみである。施文は不明であるが、繊維を含む胎土・焼成などから早期後葉の所産であろう。

18 号炉穴（第 247 図 1～3、図版 301）

出土土器 4 点はいずれも早期後葉の所産である。表裏とも条痕・擦痕を施す。

22 号炉穴（第 247 図 1・2、図版 301）

出土土器 2 点とも早期後葉の所産である。1 は絡条体圧痕が施される。子母口式に比定される。2 は器面が粗く、施文は不明であるが、早期後葉であろう。

25 号炉穴（第 247 図 1、図版 301）

出土土器は掲載の 1 点のみである。擦痕文で、早期末葉であろう。

26 号炉穴（第 247 図 1～8、図版 301）

出土土器 28 点はいずれも早期後葉の所産である。破片資料 8 点を掲載した。1・2 は口縁部で直線的に立ち上がる。1 は外削ぎ、2 は面取りである。3～8 は胴部である。いずれも横・斜方向の条

痕が施される。

1～8は早期後葉一茅山上層式に比定される。

27号炉穴（第247図1・2、図版301）

出土土器3点はいずれも早期後葉の所産である。2点を掲載した。1は口縁端部を肥厚させ、文様帯を造出する。微隆起で区画し、斜位の格子目文を施す。2は半截竹管による鋸歯状文かと思われる。

1・2とも早期後葉一茅山上層式に比定される。

28号炉穴（第247図1～3、図版301）

出土土器3点はいずれも早期後葉の所産で、すべて掲載した。1は口縁部横条痕である。2・3は胴部で、縦条痕である。

1～3は早期後葉一茅山上層式に比定される。

29号炉穴（第247図1～3、図版301）

出土土器3点はいずれも早期後葉の所産で、すべて掲載した。いずれも横条痕を施す。

1～3は早期後葉一茅山上層式に比定される。

30号炉穴（第248図1～5、図版302）

出土土器10点はいずれも早期後葉の所産である。5点を掲載した。1・2は条痕施文後、ナデにより磨り消している。

1～5は早期後葉一茅山上層式に比定される。

31号炉穴（第248図1、図版302）

出土土器は掲載の1点のみである。表裏条痕が施される。早期後葉一茅山上層式に比定される。

33号炉穴（第248図1～6、図版302）

出土土器15点はいずれも早期後葉の所産である。土器5点、土製品1点を掲載した。1は端部が尖る。横方向の条痕である。2は横位隆帯が巡る。3～5は胴部で、条痕施文後ナデにより磨り消されている。6は土製品と思われ、円柱状を呈す。先端部に窪みがみられる。

1～5は早期後葉一茅山上層式に比定される。

35号炉穴（第248図1、図版302）

出土土器は掲載の1点のみである。表裏条痕で、早期後葉一茅山上層式に比定される。

38号炉穴（第248図1～6・249図1、図版302・303）

出土土器30点はいずれも早期後葉の所産である。個体資料1点、破片資料5点を掲載した。1は口縁部～胴下部の破片資料を図上復元したものである。直線的に開き、胴中位で若干くびれる。波状口縁で、頂部中央は窪む。口縁下部にコの字状刺突文を巡らせ、波頂部からは貝殻復縁文を縦位に並べる。条痕は基本的に横方向である。2～4は胴部で、1の個体と同一の可能性が有る。5・6は口縁部で、5は貝殻背圧痕文が施される。6は縄文RLが施文される。

1～6は早期後葉一茅山上層式に比定される。

39号炉穴（第249図1、図版303）

出土土器は掲載の1点のみである。表裏条痕で、早期後葉一茅山上層式に比定される。

40号炉穴（第249図1、図版303）

出土土器は3点で、早期後葉1点、前期中葉2点である。1点を掲載した。表裏条痕で、茅山上層

式に比定される。

41号炉穴（第249・250図1～9、図版303・304）

出土土器総数30点で、土師器の1点を除き、早期後葉の所産である。9点を掲載した。1は口縁部で直立する。口縁部は横方向、以下斜方向の条痕を施す。2～4は同一個体で、口縁端部は丸頭状になる。口縁部は斜方向、以下縦方向の条痕を施す。胴部には半截竹管かと思われる平行沈線がみられる。5～9は胴部で、表裏とも条痕が施される。

1～9は茅山上層式に比定される。

42号炉穴（第250・251図1～30、図版304・305）

出土土器総数149点で、前期2点以外は早期後葉の所産である。個体資料1点、破片資料29点を掲載した。1は口縁部～胴下部の破片資料を図上復元したものである。直線的に開く器形で、端部上面・口縁部に縄文LRを施す。口縁部は横位2段施文である。以下は横方向条痕である。2は口縁部が外反し、波状となる。頂部は円環状の窪みを形成する。口縁下部に竹管状工具による刺突列を巡らせて区画する。区画内には縄文LR・刺突が施される。以下は斜方向の条痕が施される。3は直立する口縁部で、小波状を呈す。口縁下部に竹管状工具による刺突列を巡らせるが、その区画帯はやや狭い。波頂部下にU字状刺突・縦3列刺突を配す。条痕は口縁部は横、以下斜方向施文である。口縁部はナデによる磨消がみられる。4は口縁端部外面に粘土を貼り付けY字状に肥厚させる。その上部と口縁部には竹管状工具による刺突を巡らせている。5～26は胴部で、条痕施文後にナデを施すものが多い。26は胴下部資料を図上復元した。平底になるものと思われる。27～30は底部資料でいずれも平底である。29・30は底部が張り出す。

1～30は茅山上層式に比定される。条痕文のみの胴部破片資料が多いが、文様帯を有す資料と同様の時期と判断した。

43号炉穴（第252図1、図版306）

出土土器総数10点はいずれも早期後葉の所産である。個体資料1点を掲載した。1は口縁～胴下部の破片資料を図上復元したものである。胴部から口縁部は直線的に開く器形で、器厚0.7cmと薄手の造りで、内面には指頭押捺痕が残る。端部上面には縄文原体押捺、口縁～胴部に縄文RLを横位施文する。施文単位は短く、間隔を空ける。胴下部はへら状工具によるケズリがなされている。内面もへら状工具によるナデが施される。胎土中に繊維の混入は認められない。

この資料は、本地域の土器群とは様相を異にするもので、搬入品と考えられる。縄文施文、薄手、内面指頭押捺痕、無繊維などの特徴から、東北地方の所産である可能性が高い。

45号炉穴（第252図1、図版306）

出土土器は掲載の1点のみである。胴部の条痕文のみであるが、茅山上層式に比定されよう。

47号炉穴（第252図1、図版306）

出土土器5点は4点が早期後葉、1点が前期中葉の所産である。4点を掲載した。1～3は斜方向の条痕を施す。4は縄文RLを施文する。

1～4は早期後葉—茅山上層式に比定される。

48号炉穴（第252図1・2、図版306）

出土土器は掲載の2点のみである。1は早期前葉—燃糸文系土器である。口縁部は肥厚し、燃糸L

が縦位施文される。2は縦方向の条痕で区画し、斜方向条痕文を充填する。

1は稲荷台式、2は鶴ヶ島台式に比定される。

49号炉穴（第252図1～10、図版306）

出土土器25点はいずれも早期後葉の所産である。10点を掲載した。1～3は口縁部である。1は口縁部がわずかに外反する。端部上面・口縁部に縄文RLを施す。口縁部は横位2段施文である。以下は横方向の条痕文である。2は端部が外反する。3は端部に横方向条痕、口縁部に縄文RLを施文する。4～10は胴部である。4は幅広の竹管状工具によるC字・D字押捺列が巡る。搬入品と思われる。5～10は条痕文で施文後のナデが目立つ。

1～3・5～10は茅山上層式、4は東海地方の粕畑式に比定される。

50号炉穴（第253図1、図版307）

出土土器2点は早期後葉の所産である。1点を掲載した。1は条痕施文後、ナデがなされる。茅山上層式に比定される。

51号炉穴（第253図1～5、図版307）

出土土器9点は土師器の1点を除き、早期後葉の所産である。5点を掲載した。1は端部に円孔文が巡る。貫通孔と未貫通孔（内面押し膨れ）とがある。2～4は胴部で条痕文である。5は底部で、平底である。

1～5は茅山上層式に比定される。

54号炉穴（第253図1、図版307）

出土土器は掲載の1点のみである。擦痕文が施される。茅山上層式に比定される。

土坑

26号土坑（第253・254図1～22、図版307・308）

出土土器総数52点の内訳は、早期前葉1点、早期後葉44点、早期末葉1点、前期5点である。破片資料22点を掲載した。1・2は口縁部である。1は端部の円環状突起から隆帯を垂下させる。隆帯上には刺突列が並び、両側に縦位の平行沈線が施される。刺突と沈線は同一の半截竹管状工具と思われる。2は端部上面・口縁部に刻目が施される。3～22は胴部である。3は胴上部で刻目が巡る。やや薄手である。4～21は条痕文で、施文後のナデが多くに認められる。22は縄文RLを施文する。

1～21は条痕文系で、3が子母口式、他は茅山上層式、22は前期中葉一黒浜式である。

27号土坑（第254図1～4、図版308）

出土土器5点の内訳は、早期後葉4点、前期後葉1点である。4点を掲載した。1～3は条痕施文後ナデが施される。4は縄文LRが施文される。

1～3は茅山上層式、4は諸磯式に比定される。

29号土坑（第254図1～3、図版308）

出土土器11点はいずれも早期後葉の所産である。3点を掲載した。1～3は表裏に条痕を施す。2・3は施文後にナデがなされている。

1～3は茅山上層式に比定される。

35号土坑（第254図1～5、図版308）

出土土器7点はいずれも早期後葉の所産である。5点を掲載した。1～5はいずれも表裏に条痕を

施したもので、茅山上層式に比定される。

ピット

1号ピット群P 6（第254図1、図版308）

出土土器2点は早期後葉の所産である。1点を掲載した。表裏とも条痕施文後ナデがなされる。茅山上層式に比定される。

3号ピット群P 3（第254図1、図版308）

出土土器は掲載の1点のみである。表裏とも条痕施文後ナデがなされる。茅山上層式に比定される。

P24（第254図1、図版308）

出土土器は掲載の1点のみである。表裏とも条痕施文後ナデがなされる。茅山上層式に比定される。

・遺構外出土土器

遺構外出土土器総数1,130点の内訳は、早期前葉（撫糸文系一稲荷台式）2点、早期中葉（沈線文系一田戸下層・上層式）2点、早期後葉（条痕文系一子母口式～茅山上層式）562点、早期末葉（茅山上層式以降一下吉井式）39点、前期初頭6点（下吉井式・花積下層式）、前期中葉（黒浜式）8点、前期中半（花積下層式～黒浜式）458点、前期後葉（諸磯式）17点、中期初頭（五領ヶ台式）2点、中期中葉（勝坂式）1点、中期後葉（加曾利E式）14点、後期前葉（堀ノ内式）2点となっている。なお、早期前葉・中期初頭・後期前葉の土器は細片のため、掲載は割愛した。

早期中葉（第255図1・2、第22表、図版309）

2点を掲載した。1は太い沈線による斜行文である。2の口縁端部は外削ぎでやや丸味を帯びる。条痕施文後、ナデにより磨り消されている。両者とも堅緻な土器である。

1は田戸下層式、2は田戸上層式に比定される。

早期後葉（第255～259図3～107、第22表、図版309～313）

105点を掲載した。3～34は口縁部資料である。3は微隆起線による区画文で、太い沈線を充填する。4は端部が尖り、細沈線による格子目文が内外面に施文される。5は端部に袋状突起が付く。6は胴上部に隆帯が巡り、口縁部にかけて屈曲・外傾する。端部上面は刻目、口縁部は刺突列が2段巡る。7は端部上面に刻目を入れ、口縁部に幅広の隆帯を巡らせる。隆帯上にはコの字状刺突を施す。8は小波状口縁で、上面には刻目が入る。コの字状刺突でI文様帯を区画し、半截竹管状工具による格子目文を施文する。9は端部にコの字状刺突を巡らせる。10は小波状口縁で、端部上面に刻目が入る。低い隆帯でI文様帯を区画し、斜行沈線を施文する。11は端部上面に刻目、口縁部に刺突・穿孔がみられる。14は端部上面に条痕と刻目を施す。15は端部上面に刻目、口縁部に刺突を施す。32も刺突がみられる。18・19・27・29の端部上面には刻目が入る。23は端部肥厚部に縄文RLを施文している。器形的には、端部が直立ないしは外傾するものが多く、外反するものはほぼみられない。また、12・21・22・24・26は波状・小波状口縁である。いずれの土器も基本的に条痕を施文する。

35～104は胴部資料である。35～39は刺突文が施されたもので、概ね竹管状工具によるコの字状刺突である。39はU字状に刺突を配す。40～43はI文様帯を区画する隆帯・微隆起を巡らせたもので、41は隆帯上に刻目を施す。44～103は条痕文のみの資料である。横・斜・縦方向の条痕を表裏に施す。施文後ナデがなされるものが多い。104～107は底部資料である。いずれも平底を呈す。

3は鶴ヶ島台式、4は野島式、その他は茅山上層式に比定されよう。条痕文のみの胴部資料も概ねその範疇に入るものと思われる。

早期末葉～前期初頭（第259図108～113、第22表、図版313）

6点を掲載した。108はカマボコ状隆帯脇に平行沈線を施す。胎土中に海綿体骨針を含む。109・110は擦痕文である。111は燃系側面圧痕文が施される。112・113は底部資料で、胴下部には貝殻圧痕文がみられる。

108～110は下吉井式に比定されよう。同型式は、前半が早期末葉、後半が前期初頭とされる。道合遺跡第Ⅱ次調査においては、後半期～前期初頭期（花積下層式を伴う）の集落が確認され、第Ⅳ次調査地区でも同様の時期と思われる集落が検出された。本赤羽台地においては前期初頭段階での土地利用が活発であり、早期末葉段階における様相は明確ではない。今回出土した土器も細片のため明確ではないが、概ね下吉井式後半段階～前期初頭期の所産かと思われる。111～113は花積下層式である。道合遺跡第Ⅱ・Ⅳ次調査と同様であり、下吉井式に伴うものであろう。

前期中葉（第259図114～115、第22表、図版313）

2点を掲載した。縄文のみの資料である。黒浜式に比定される。

前期後葉（第259図116～122、第22表、図版313）

7点を掲載した。何れも地文の縄文のみの資料である。116は胎土中に繊維を含む。諸磯a式初頭で、黒浜式と共存する段階の所産と思われる。117～122はa～b式の所産であろう。

中期中葉（第259図123、第22表、図版313）

1点を掲載した。口縁部の三角区画文で三角押文を施文する。勝坂1式に比定される。

中期後葉（第259図、124～129、第22表、図版313）

6点を掲載した。124は口縁部の渦巻楕円区画文である。125は端部は無文で口縁部に沈線を巡らせる。126は沈線懸垂文、127・128は磨消懸垂帯である。129はクシ状工具による条線である。

124・126は加曾利E2式、125・127～129は加曾利E3式に比定される。

B 土製品（第260・261図1～35、第23表、図版314・315）

今回の調査で出土した縄文時代の土製品は36点で、内訳は、二次利用土器片35点（A—土錘1点、B—土製円板34点）、不明1点である。後者は33号が穴出土で、同項にて記載した。二次利用土器片の名称・分類などに関しては従前に報告・論考などで使用しており（丹野 2004・2008・2009）、それらを踏襲する。A・Bの分類基準は凡例図に示しており、参照されたい。

・二次利用土器片A（35）

いわゆる土錘である。1点のみの出土である。欠損しており、挟りの部分を含め1/4程度の遺存度と思われる。形態的には、楕円形で、長軸両側に挟りを有し、側縁が研磨されたものと推定される。分類（凡例図下）のBⅡaとなろう。使用された土器片は深鉢胴部で、前期後葉—諸磯式と思われるが、土錘としての使用時期を直ちに指し示すものではない。

・二次利用土器片B（1～34）

いわゆる土製円板である。出土した34点を掲載した。個別の分類などに関しては第23表に示しており、本項ではその分類項目に沿って概観したい。

時期

加工に利用した土器片の時期である。早期後葉—6点、前期中葉—24点、前期後葉—4点である。出土した土器の時期別割合では、早期後葉が炉穴群を背景に群を抜くが、使用された土器片は前期中葉が大半である。この土器片の時期が、二次利用の時期と同一という確証はないが、少なくとも炉穴群形成時期—早期後葉段階では数は少ない。土器片の時期が前期中葉以降のものが多くを占めており、使用時期もその範疇に入ると思われる。

器種・部位

使用する土器の器種は、深鉢・浅鉢・壺・鉢など多岐に渡るが、今回検出されたものはすべて深鉢である。部位については、いずれも胴部であった。口縁部を利用する場合、端部直線部分は使用せず、半円・半楕円形を呈すD類となる。また、底部の場合は、円板をそのまま利用する円形のA類が多い。

平面形態

基本的にA～Hに分類している。欠損品の場合、その判断は微妙になるが、遺存部が円弧を呈しているものはA類（円形）として復元している。以下、形態ごとの数量である。

A（円形）—17点（1～17）、B（楕円形）—6点（18～23）、C（木葉形）—4点（24～27）、E（正方形）—6点（28～33）、G（多角形）—1点（34）。D（半円形）、F（長方形）は今回は確認されなかった。

円系統（A・B）が多くを占め、主体的存在となっている。通常のあり方の傾向である。直線系統（E・F）は少数派であるが、確実に存在し、その使用方法なども関連し、重要な要素をもつ。Gの多角形は、直線の使用が継続される場合と、土器片の加工（剥離）から使用初期段階の形態で、使用頻度が増すにつれ、稜が摩耗し円形（A）へと変化していくものがあるかと想定される。34はG形態としたが、そのどちらになるかは明確ではない。

研磨状態

側縁部に認められる研磨痕を使用痕と捉え、4種に分類した。1は研磨痕がなく、敲打・剥離のみのもので、使用前状態といえよう。2～4は研磨痕が認められるものである。2は研磨範囲によって便宜的に細別している。3・4は使用頻度が増した段階といえよう。以下、内訳である。

1—なし 2—29点 3—4点 4—1点となっている。

研磨度

研磨状態と相似するが、いわゆる使用頻度の相違として分類した。使用が進むにつれ、I～Ⅲの状態へと変化していくものと思われる。この研磨度と研磨状態との関係を見るに、研磨状態Ⅰでは研磨度はない。2ではa・bとも研磨度Ⅱが主体となるが、bにおいてⅢの割合が増してくる。3でもⅡが主体であるが、Ⅲが増加する。4になるとⅢとⅡの割合がほぼ拮抗する。研磨度のI～Ⅲは使用頻度と考えられるので、研磨状態の2 a→2 b→3→4→と次第にⅢの増加が認められるのは、一つの流れとして、研磨状態の2～4へと使用頻度により移行する状況が読み取れる。今回の資料はⅢが1点の他はいずれもⅡである。

遺存度

完形品をA、欠損品で1/2以上をB、1/2以下をCとした。平面形態と同様、推定によるところが大きく、欠損品としたものでも実はそれで完結している場合もあろう。又、推定形態の誤認により遺存度が左右される事もあり得る。A—3点、B—29点、C—2点である。

規模

第23表において、径の場合、完形品は表中の完欄、欠損品は残存欄に標記し、推定し得る資料は()で標記した。今回は資料数・完形品が僅少であり、特に重量に関しては未知数ではある。

C 石器 (第262～264図、第24表、図版316～318)

・遺構内出土石器 (第262図1～6)

1は石鏃で42号炉穴出土である。凹基無茎鏃で、先端部を欠損する。基部の挟りは弱い。黒曜石製である。

2・3は剥片で、打製石斧の制作過程で生じたものと思われる。石材は2が砂岩、3が頁岩である。42号炉穴出土である。

4は石皿で、両面使用が認められる。石材は砂岩である。30号炉穴出土である。

5は石匙で、自然面を多く残す。刃部に細かい調整剥離を施す。挟り部分は片側に多く剥離を残す。石材は砂岩である。摩耗が著しい。41号炉穴出土である。

6は磨石で磨面はやや窪む。石材は凝灰岩である。54号炉穴出土である。

・遺構外出土石器 (第263・264図1～28)

石鏃 (1～10)

長軸2cm前後のやや小形のものが多い。形態的には、1・2が平基鏃、3～10が凹基無茎鏃となる。後者でも基部の挟りは弱い。多くは基部からやや膨らみ気味に先端部に至るが、7は逆にすばまりつつ移行する。石材は1～4・6・7がチャート、5・8～10が黒曜石製である。

石鏃未製品 (11)

側縁部に調整剥離がみられるが、基部などの状況から製作途上と判断した。チャート製である。

石錐 (12・13)

12は三角形の板状素材の一端を加工して錐部としている。一辺のつまみ部から錐部にかけて調整剥離がみられる。13はつまみ部の一部と錐部先端を欠損する。残存部には細かい調整剥離がみられる。2点ともチャート製である。同一母岩の可能性もある。

剥片 (14～21)

8点を掲載した。18は側縁部に調整剥離がみられる。スクレイパーの可能性もある。20はつまみ様の突出部に調整剥離がみられ、石匙の未製品かとも思われる。石材は14・20が黒曜石、15・16・18・19・21がチャート、17が頁岩である。

磨石 (22・24・25)

22は卵形を呈す。両面に磨面を有す。24は扁平な素材を用いている。25は長円形で、両面使用である。石材は22・24が砂岩、25が凝灰岩である。

敲石 (23・26)

23は頂部に敲打痕が顕著にみられる。26は側縁部に敲打痕がみられる。打製石斧の製作に用いられるものと思われる。石材は23が砂岩、26が凝灰岩である。

石皿 (27・28)

2点とも破砕した破片である。両面使用が認められる。石材は27が凝灰岩、28が安山岩である。

15号炉穴



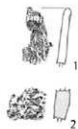
16号炉穴



18号炉穴



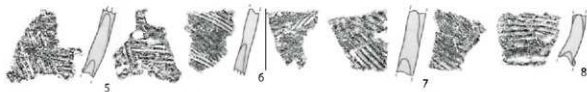
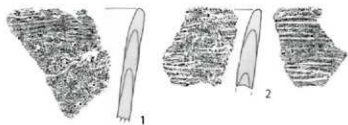
22号炉穴



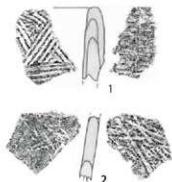
25号炉穴



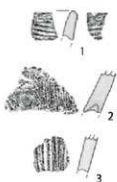
26号炉穴



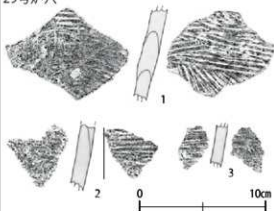
27号炉穴



28号炉穴



29号炉穴



第 247 图 炉穴出土土器 (1) (1/3)

30号炉穴



31号炉穴



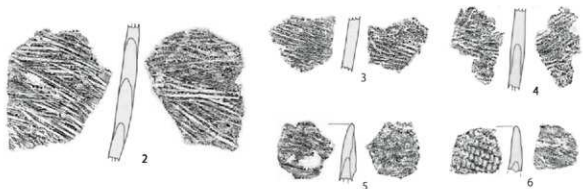
33号炉穴



35号炉穴

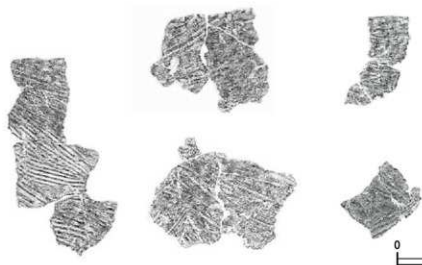
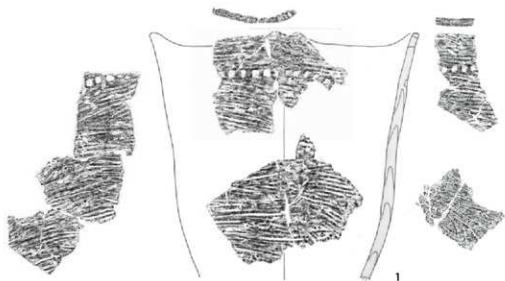


38号炉穴



第 248 图 炉穴出土土器 (2) (1/3)

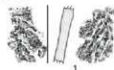
38号炉穴



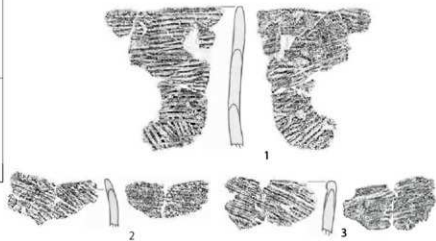
39号炉穴



40号炉穴

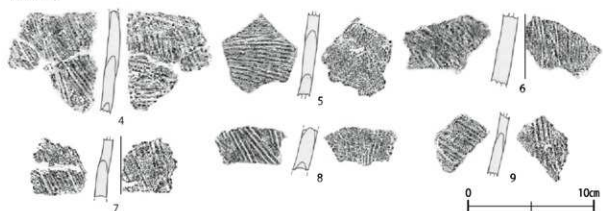


41号炉穴

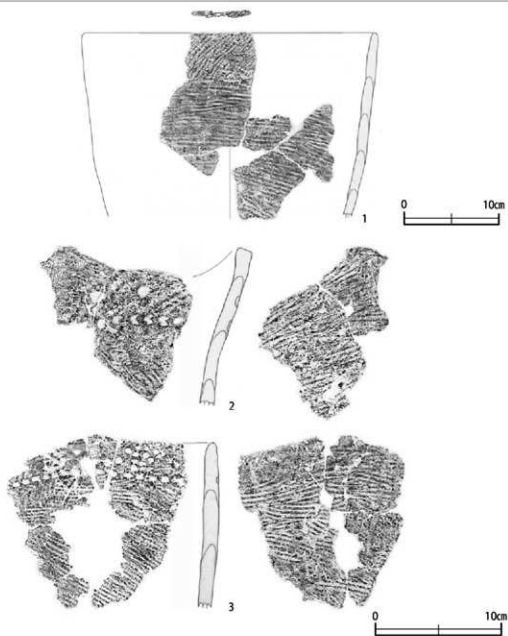


第 249 図 炉穴出土土器 (3) (1/3)

41号炉穴

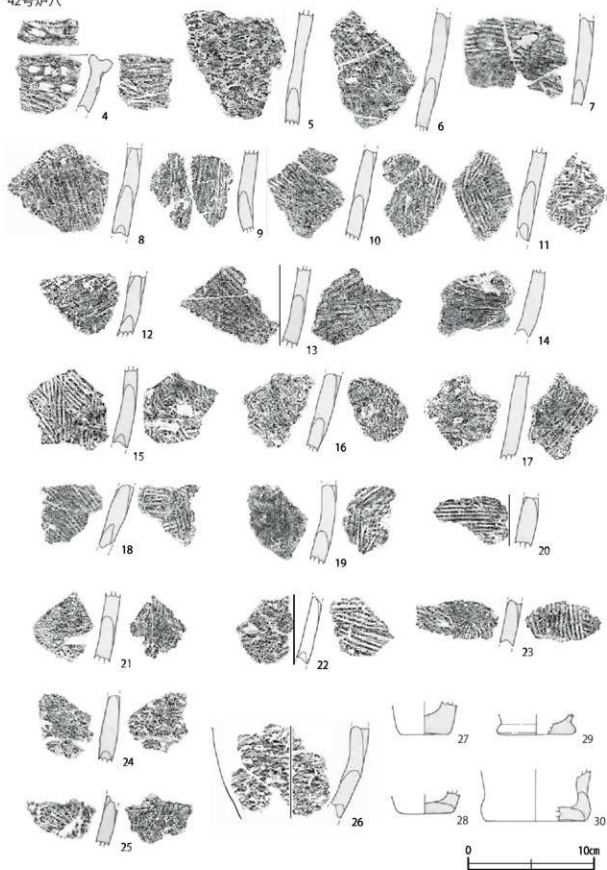


42号炉穴



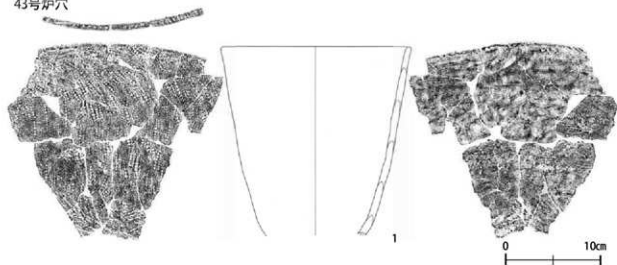
第250图 炉穴出土土器(4) (1/3·1/4)

42号炉穴



第 251 図 炉穴出土土器 (5) (1/3)

43号炉穴



45号炉穴



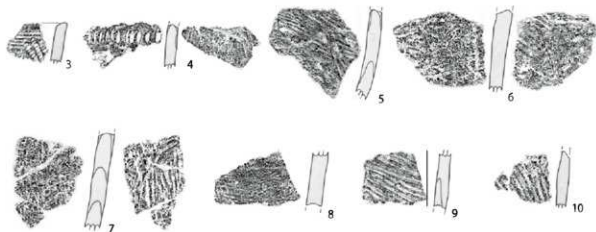
47号炉穴



48号炉穴



49号炉穴



第252图 炉穴出土土器(6) (1/3·1/4)

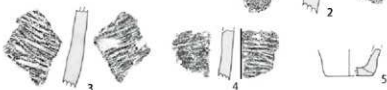
50号炉穴



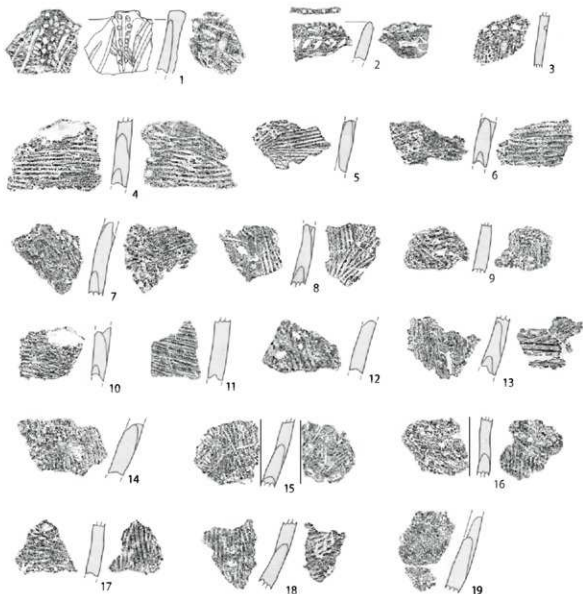
51号炉穴



54号炉穴

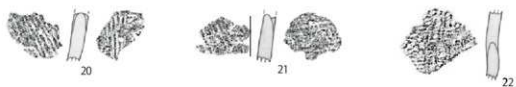


26号土坑



第253图 炉穴出土土器(7) 土坑出土土器(1)(1/3)

26号土坑



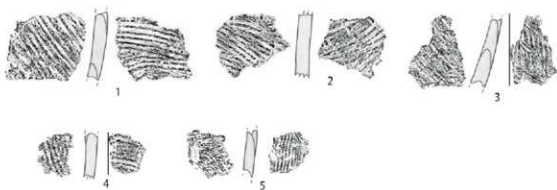
27号土坑



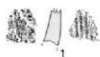
29号土坑



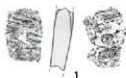
35号土坑



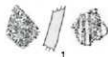
1号ビット群P6



3号ビット群P3

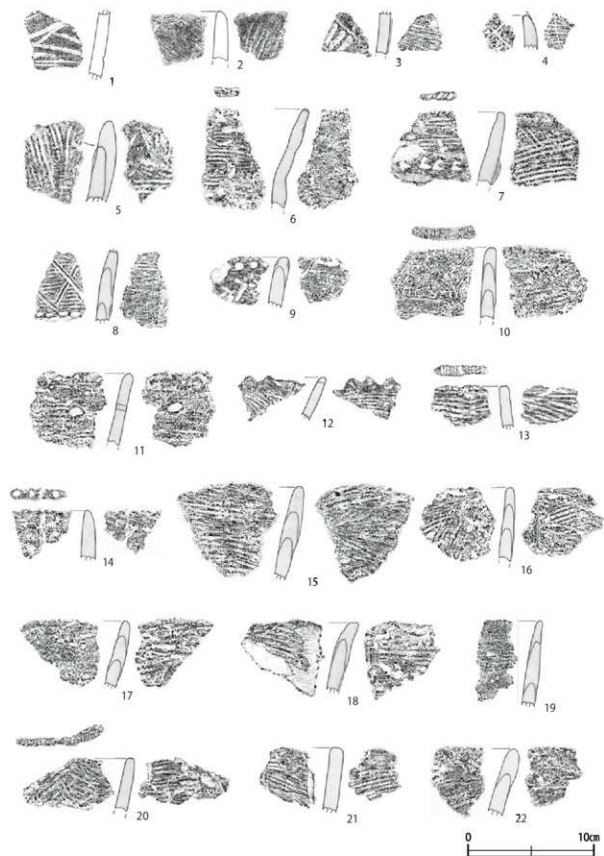


24号ビット

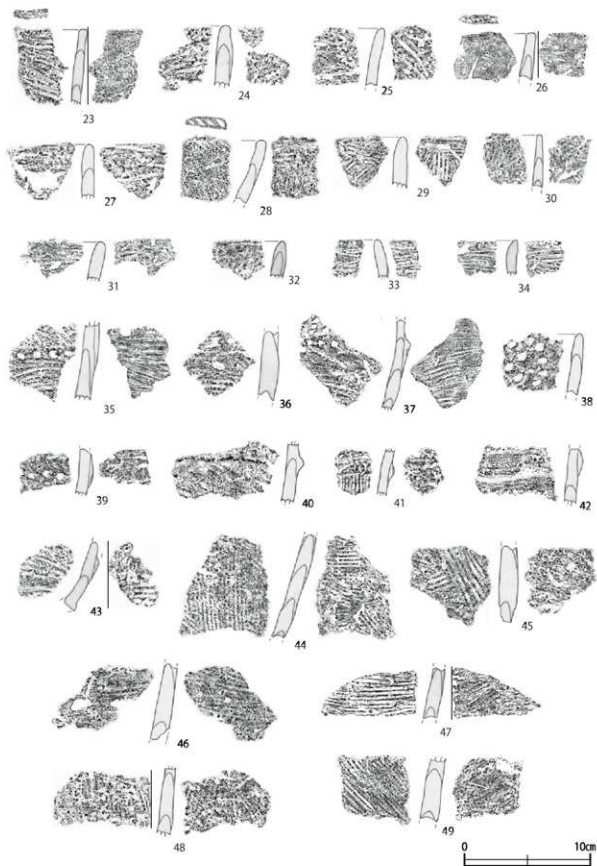


第254図 土坑出土土器(2) ビット出土土器(1/3)

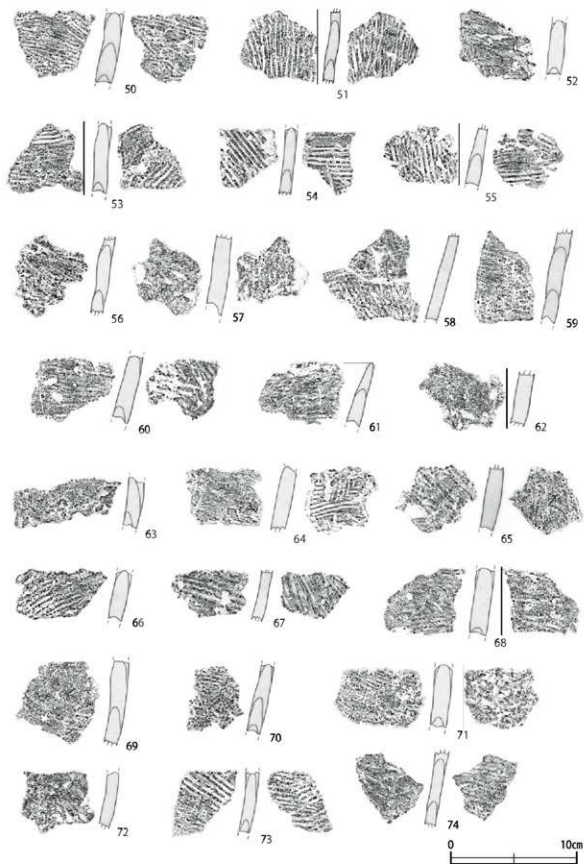
遺構外



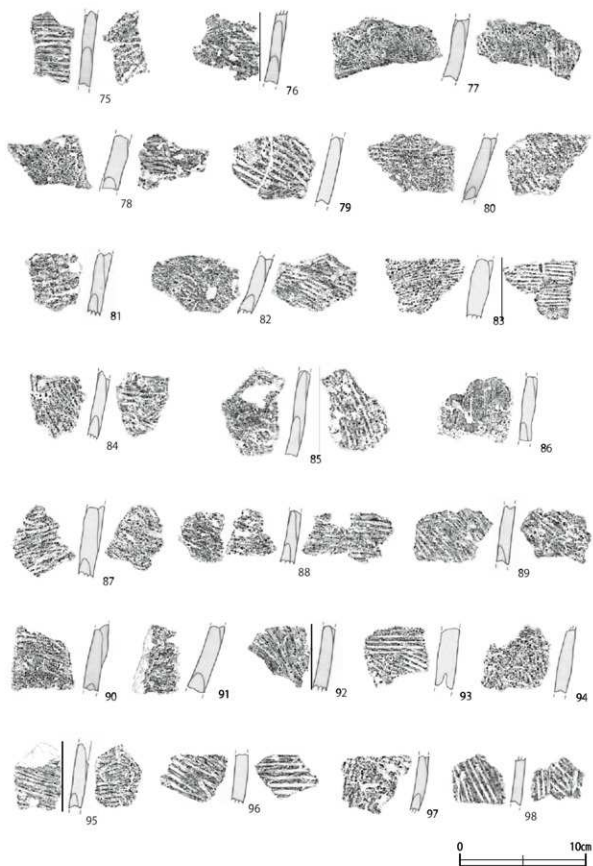
第 255 図 遺構外出土土器 (1) (1/3)



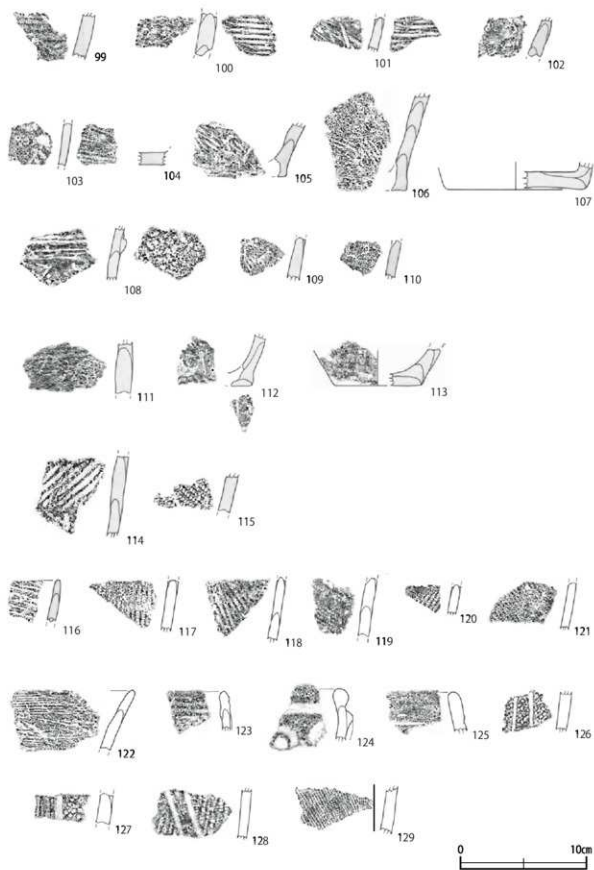
第 256 圖 遺構外出土土器 (2) (1/3)



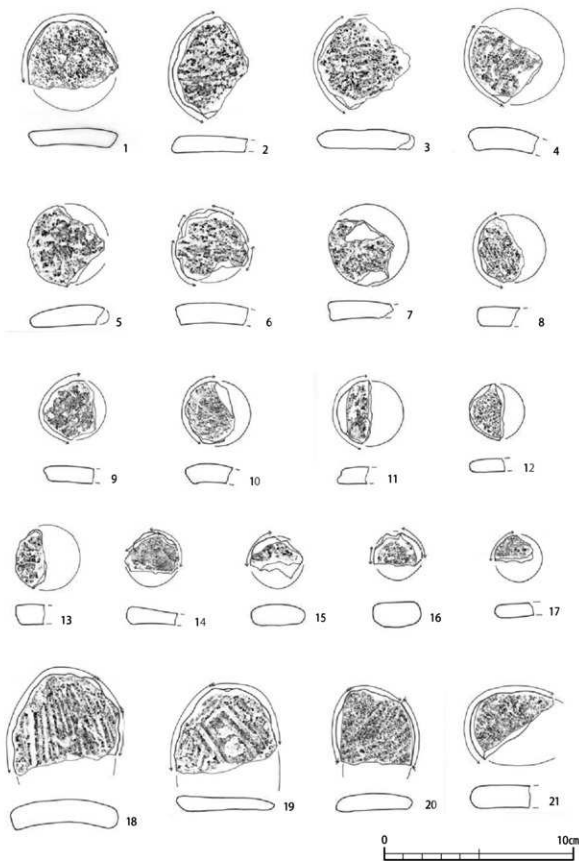
第 257 図 遺構外出土土器 (3) (1/3)



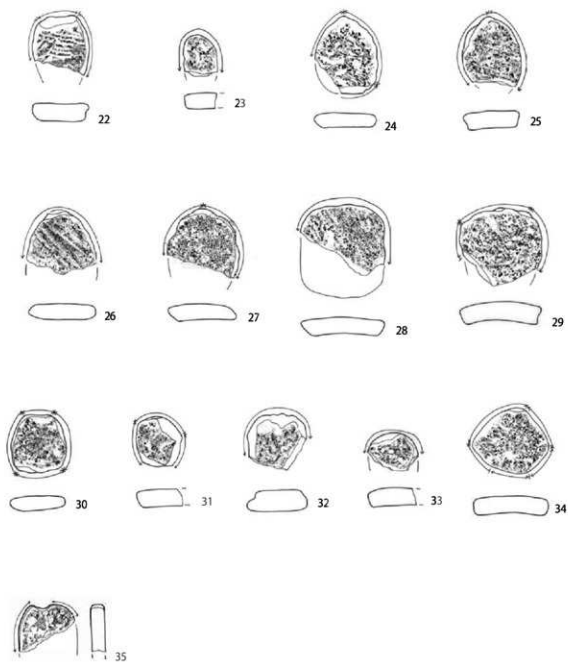
第 258 圖 遺構外出土土器 (4) (1/3)



第 259 図 遺構外出土土器 (5) (1/3)

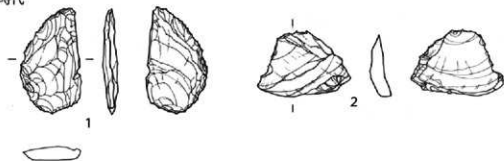


第 260 図 土製品 (1) (1/2)

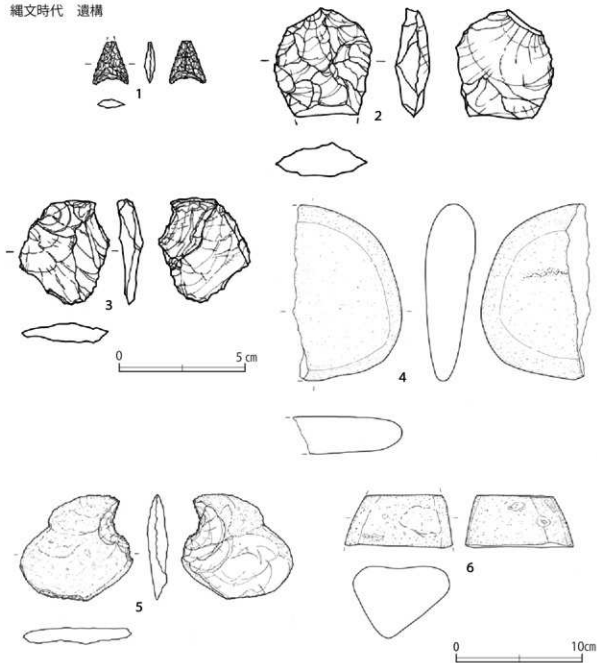


第261図 土製品(2)(1/2)

旧石器時代

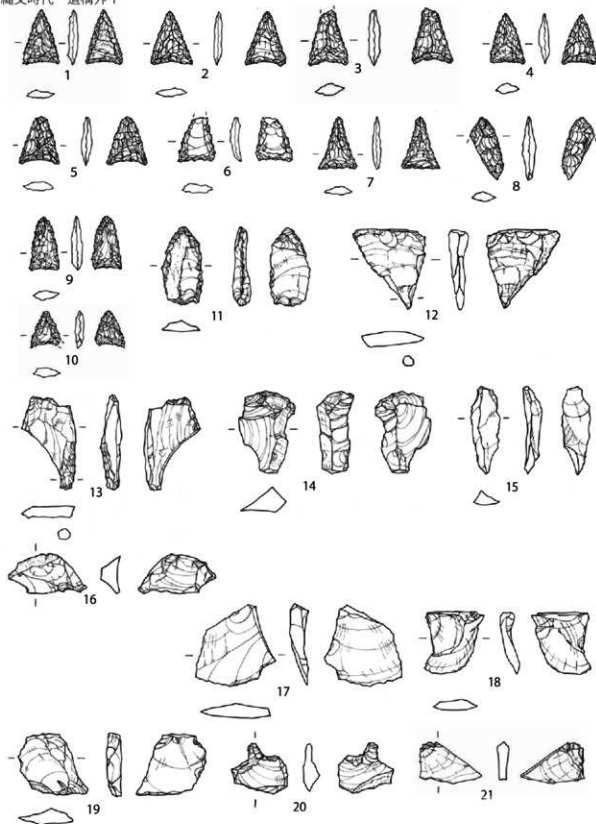


縄文時代 遺構

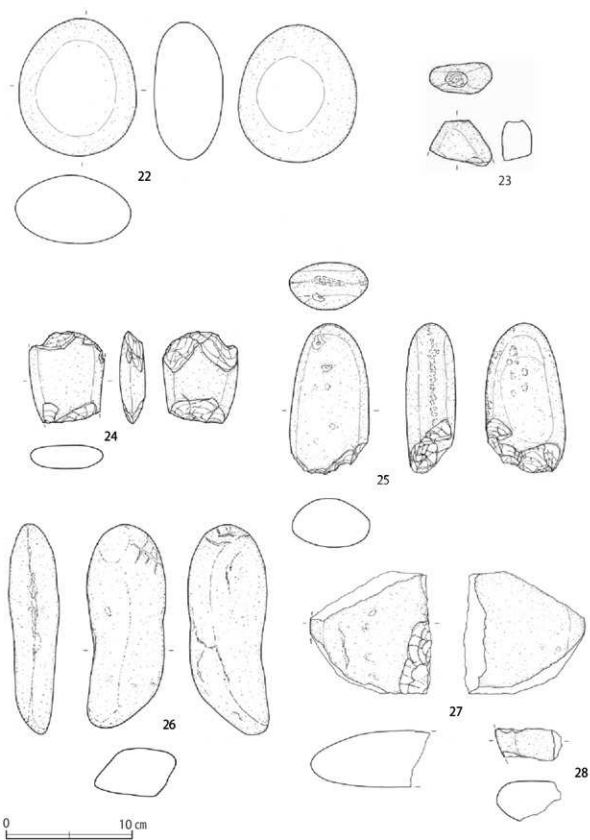


第 262 図 旧石器時代の石器、縄文時代の石器 (1) (2/3) (1/3)

縄文時代 遺構外 1



第 263 図 縄文時代の石器 (2) (2/3)



第 264 図 縄文時代の石器 (3) (1/3)

3 弥生時代

今回の調査で検出された弥生時代の遺構は、住居跡が4軒、土坑が1基である。陸軍被服本廠および団地造成に伴う攪乱により削平された部分も多い。时期的には、中期後半期1軒、後期後葉期2軒、不明1軒である。道合遺跡では、後期後葉期の集落が主体で、中期後半の住居跡は1軒である。後葉期の住居跡が台地東側縁辺にも分布している事が判明したが、道合遺跡の集落との関係は明確ではない。中期後半期の住居跡は道合で1軒、赤羽上ノ台で1軒の検出であり、この時期の集落の様相も明らかではないが、後代の攪乱・削平が著しい事も含め、存在の可能性は考えられる。

1) 遺構

A 住居跡

8号住居跡 (第266～270図、図版320～325-2)

グリッド	17～19-4W・X	平面形態	隅丸長方形
規模	740×580×30cm	床面積	?
主軸方向	N27°W	構築回数	1回?
検出状況	調査区中央に位置する。被服本廠倉庫間連の排水管路、防空避難壕などにより各所を寸断されている。主柱穴の1本、炉北半、南西隅壁を消失する。北東側壁際には31号土坑が本炉穴を切って構築されている。焼失家屋と考えられ、炭化材が南側に散在する。しかしながら床面の被熱は部分的で、失火による全焼とは思わず、住居廃棄に伴う儀礼行為の所産とも考えられる。		
覆土	西壁側には三角堆積土が認められる。床面直上には硬質の黒褐色土が部分的に堆積する。住居使用時の堆積かと思われる。		
柱穴	主柱穴は4本と判断するが、南西側の1本は防空避難壕により消失したものとされる。残存する3本(P1～3)からみるに、主軸方向柱間310×200cmの長方形プランである。P1は南側に浅い掘り込みがみられるが、柱の引き抜き時における掘削痕と思われる。P1-80×70×50cm P2-70×(50)×80cm P3-45×45×60cm その他、P3の南東側に小ピット(P6)が確認された。25×25×15cmを測る。		
炉	形態 地床炉	規模	95×(50)×10cm
	中央奥壁(北側)寄りに位置する。北側1/2を攪乱により消失する。円形ないしは楕円形プランと思われる。底面は被熱硬化が顕著である。		
焼土	南東側壁際に検出された。楕円形に堆積が認められる。明確な掘り込みはない。68×44×5cmを測る。		
床	厚さ10～15cmほどの貼床が施される。住居中央部(主柱穴の内側)は硬化が顕著で壁寄りになるに従って軟化する。出入口部から炉周辺の硬化は、生活痕跡であろう。掘方はほぼ均一な深度である。		
周溝	北東・南西側攪乱範囲以外の残存部ではほぼ全周する。東側で立ち上がって途切れる部分がみられる。幅25×深さ10～15cmを測る。南側では住居床面側に埋め戻し土が確認されている。土壁補強材設置に伴う裏込め・抑え土と思われる。		

貯蔵穴 南壁東寄りに位置する。周溝からやや離れて掘り込んでいる。略円形で60×60×45cmを測る。個体土器などはみられなかった。

梯子穴 南壁のほぼ中央、住居中軸線上に位置する。周溝から35cm内部に寄って掘り込んでいる。55×50×30cmを測る。立ち上がりは、住居内側は急傾斜で、外側は緩やかになる。住居外側に斜めに梯子を設置するための構造と思われる。

遺物出土状態 総点数は1,486点で、内訳は土器1,250点(縄文366点・弥生879点・古墳～古代5点)、土製品11点(二次利用土器片-縄文9・弥生1点)、石器35点、礫181点、炭化物5点である。弥生土器の内訳は、壺84点、高坏4点、鉢9点、甕778点、台付甕2点である。遺物は覆土上～下層までほぼ満遍なく分布するが、住居中央部により多く集中し、壁際は若干分布は薄くなる。一定程度埋没が進行して壁際の三角堆積土が形成された後、埋没土がレンズ状堆積していく過程で多くの遺物が廃棄・流入していった結果であろう。3・5・6の土器がこれに相当する。覆土から出土した土器の大半は小破片であるが、床面には個体土器が潰れた状態ないしは纏まって検出されている。4の甕は南東隅の床面に纏まっている。1の壺は主柱穴2の北側際に細片ながら纏まる。同一個体片が1点、主柱穴1から出土している。

所属時期 出土土器から、中期後半～宮ノ台式期の所産と思われる。1の壺は宮ノ台式中葉段階に比定される。

9号住居跡(第271・272図、図版325-3～328)

グリッド 15・16-4X・Y 平面形態 隅丸方形
規模 400×(390)×20cm 床面積
主軸方向 N45°W 構築回数 1回?

検出状況 調査区中央東寄りに位置する。団地造成に伴う、グラウンドのフェンス基礎により西側壁・床面を消失し、被服本廠倉庫関連の排水管路により東側壁・床を寸断されている。北側には樺が植えられていたが、辛うじて壁は検出し得た。

覆土 壁際には三角堆積土が認められる。全体的にレンズ状堆積が認められる。

柱穴 主柱穴は検出されなかった。南隅にピットが1基検出されている。25×25×15cmを測る。柱は掘り込みを持たず、床面に据え置いて組み上げたと推測されるが、通常、この場合にみられる窪み・硬化面は確認し得なかった。

炉 形態 a: 地床炉 規模 a: 55×35×10cm
b: 地床炉 b: 75×40×10cm

2基が検出された。aは中央奥壁(北側)寄りに位置し、不整楕円形を呈す。bは中央南寄りに位置し、不整楕円形を呈す。両者とも焼土の堆積は少なく、底面の被熱硬化もみられない。使用頻度の低さが窺われる。

床 厚さ10～20cmほどの貼床が施される。住居中央部(主柱穴の内側)は硬化が顕著で壁寄りになるに従って軟化する。住居使用時の生活痕跡であろう。掘方はほぼ均一な深度である。

周溝 認められない。

その他 住居中央北東壁寄りの床面に、壺の口縁部（頸部以下切断）が伏せた状態で出土した。検出状況から、意図的に据え置いたものと思われ、住居廃絶に伴う儀礼行為の所産と考える。土器の外面は二次的被熱が認められ、周囲に焼土も検出されている。同じく儀礼時の所産と判断したい。

遺物出土状態 総点数は198点で、内訳は土器150点（縄文60点・弥生90点）、土製品1点（二次利用土器片—縄文1点）、石器3点、礫39点、炭化物2点である。弥生土器の内訳は、壺8点、台付甕82点である。1の壺を除き、覆土内からの出土である。A—A'をみると覆土上層～中層の一群と中～下層の一群がある。前者は住居中央やや北東側（上層）から南西側（上～中層）にかけて流れたように分布する（2～4・6）。後者は北東壁際から住居中央部にかけて同じく流れたように分布する。いずれも土砂の埋没過程による作用と思われる。これらの状況から住居の埋没—土砂の流入は主に北東側からが主体となったと想定されよう。1の壺は住居中央と北東壁の中間位置の床面（若干掘り窪んでいるか）に逆位で置かれていた。口縁部～頸部のみで、以下は切断されたものと思われる。住居の廃絶に伴う儀礼行為の所産と考えられるが、同時期の道合遺跡でみられる「赤砂」の存在は確認されなかった。また、3の台付甕の同一個体片が西側の12号住居跡から2点出土している。本住居跡3、12号1・2の土器ともに床面直上からであり、同時期の分割廃棄の可能性がある。

所属時期 1の壺は後期後葉、道合遺跡新段階に比定される。本住居跡の廃絶時期もこれに相当しよう。

11号住居跡（第272図、図版329）

グリッド	9-5 B	平面形態	？
規模	？	床面積	？
主軸方向	？	構築回数	？

検出状況 調査区北東端に位置する。周溝の一部が検出されたのみである。東側は調査区境界線で崖線となる。南側は攪乱穴により削平されている。周溝は湾曲しており、他の住居跡などの主軸方向から類推して北西隅に当たるものと思われる。検出状況から推定される住居全体像は現況の崖線より東側に伸びるものと思われ、本住居跡の時期以降に本台地東側縁辺は崩落ないしは削平されたと考えられる。

覆土 周溝覆土のみである。裏込めの埋め戻し土がみられる。

柱穴 検出されず。

炉 検出されず。

床 検出されず。

周溝 幅25×深さ25～30cmを測る。検出されたのは全長50cmほどである。

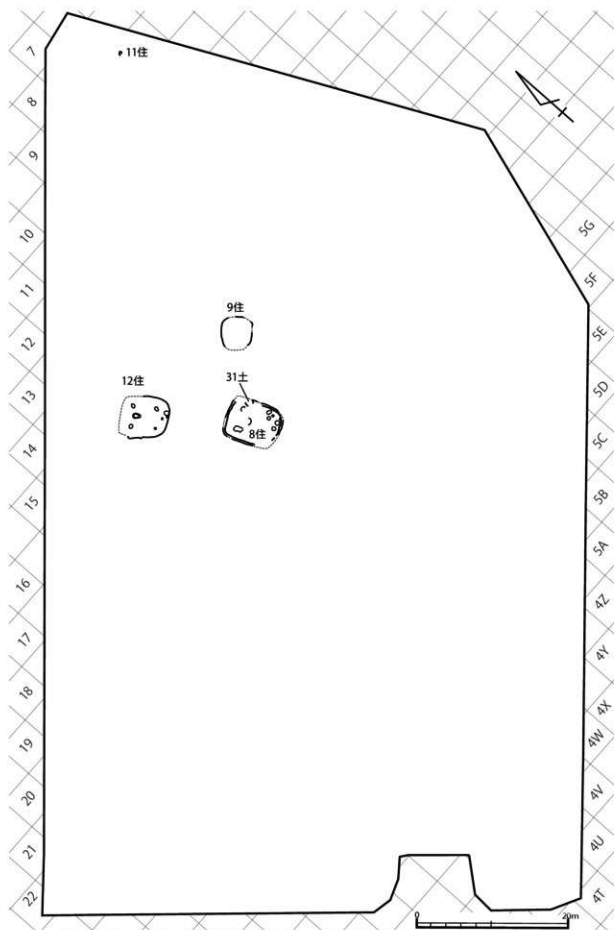
遺物出土状態 出土遺物なし。

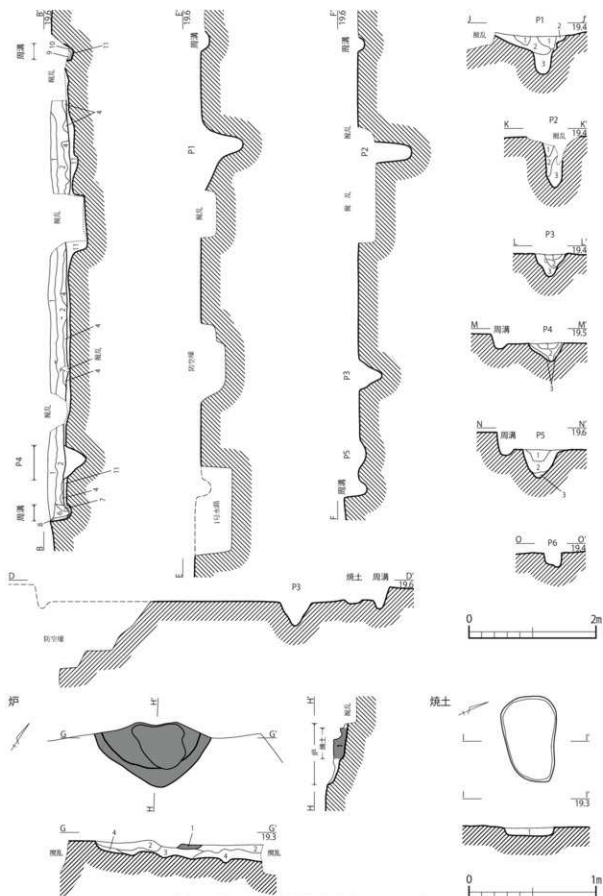
所属時期 周溝覆土の様相から弥生時代の所産と考える。

12号住居跡（第273・274図、図版330～333）

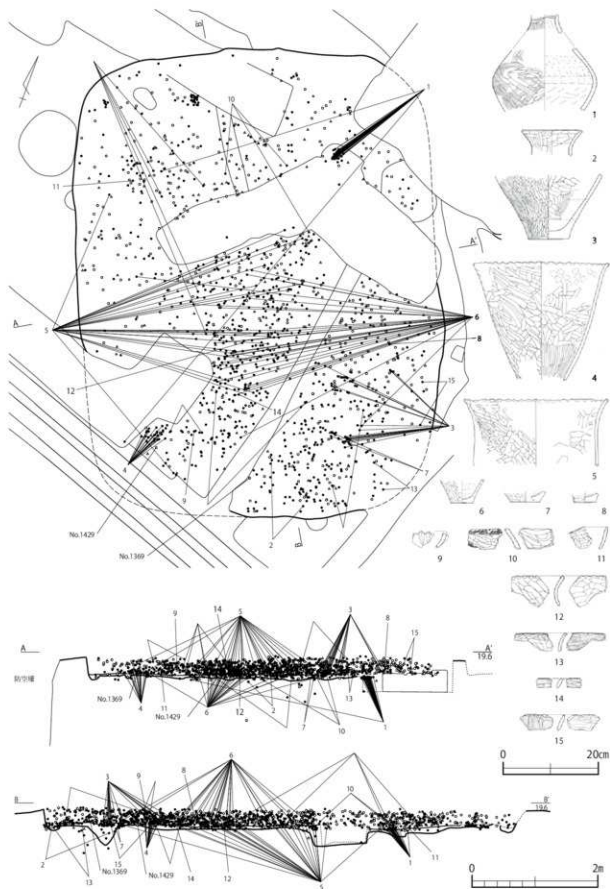
グリッド	15・16-4 U・V	平面形態	隅丸方形
------	-------------	------	------

規 模	(595) × 550 × 15cm	床 面 積	
主軸方向	N33° W	構築回数	1回?
検出状況	調査区中央、9号住居跡の西側8mほどの位置に立地する。上面は被服本廠倉庫建設に伴う造成、排水管路などによる攪乱、北側は近世の溝の削平を受ける。住居の各所で倉庫基礎による攪乱が認められる。		
覆 土	上部を削平されているため、遺存する覆土は薄く、ほぼ単層である。床面直上層に当たる。埋没過程を推測する材料に欠ける。		
柱 穴	主柱穴は4本である。北側のP2は近世の溝に、南側のP3は被服本廠倉庫基礎に攪乱され、一部を消失する。柱間は300 × 240cmの主軸方向が長い長方形プランである。 P1 - 55 × 45 × 65cm、P2 - 60 × 45 × 65cm、P3 - (20) × (20) × 70cm、P4 - 40 × 40 × 55cmを測る。		
炉	形態 地床炉	規模	95 × 65 × 20cm
	中央奥壁（北側）寄りに位置する。卵形を呈し、奥壁側の幅が広く、出入口側は幅狭で浅くなる。被熱硬化が顕著な面は奥側であり、手前が焚口となろう。		
床	厚さ10～15cmほどの貼床が施される。住居中央部（主柱穴の内側）は硬化が顕著で壁寄りになるに従って軟化する。掘方はほぼ均一な深度である。硬化面は住居使用時の生活痕跡となろう。		
周 溝	認められない。		
貯 蔵 穴	南壁東寄りに位置する。壁にはぼ接して掘り込んでいる。略円形で65 × 60 × 45cmを測る。個体土器などはみられなかった。		
遺物出土状態	総点数は107点で、内訳は土器89点（縄文65点・弥生24点）、石器1点（剥片—縄文）、礫3点である。弥生土器の内訳は、壺2点、甕22点である。上部の削平が著しく、覆土の遺存も薄いため、本来的な出土遺物の分布状況は不明である。基本的に出土遺物の少ない覆土下層のみであり、住居中央部を中心に散在する。1・2は9号住居跡3と同一個体で、同時期の廃棄の可能性がある。		
所属時期	細別時期を比定し得る資料に乏しいが、9号住居跡出土の台付甕と同一個体破片が出土していることから、9号住居跡と同様、後期後葉期の所産と思われる。		

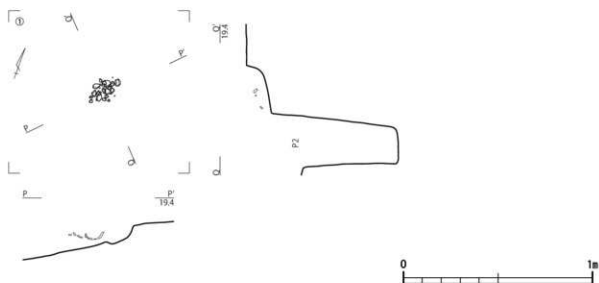
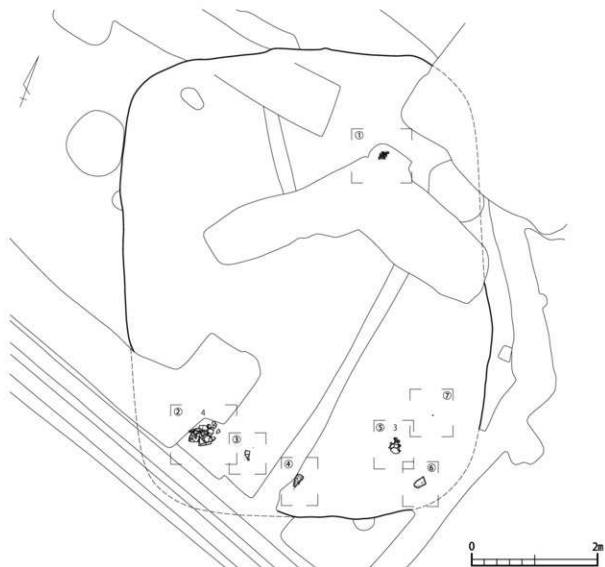




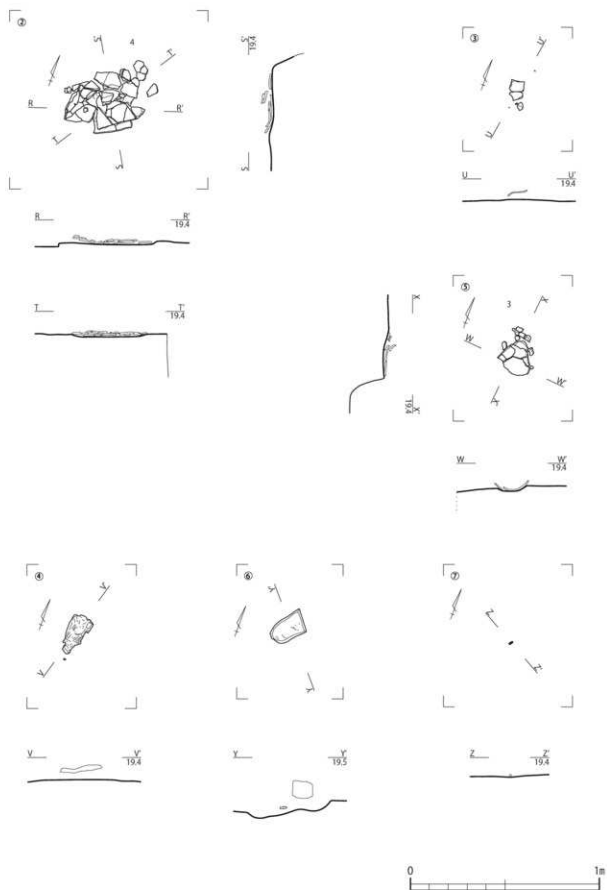
第 267 图 8号住居跡 (2) (1/60 · 1/30)



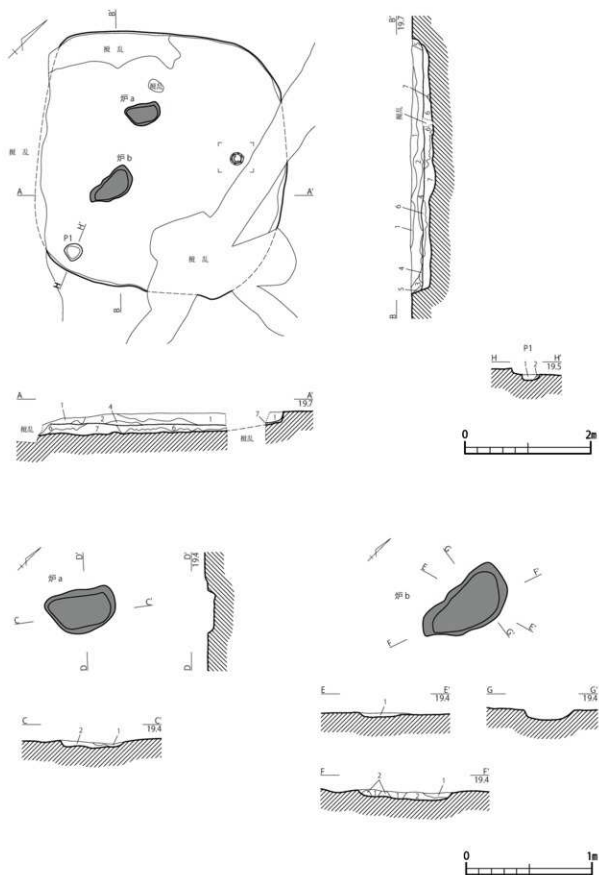
第 268 图 8 号住居跡 (3) (1/60)



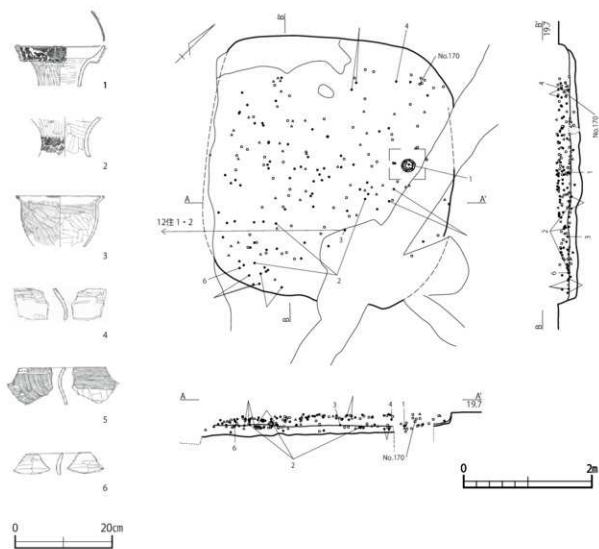
第269図 8号住居跡(4) (1/60・1/20)



第 270 图 8号住居跡 (5) (1/20)



第271図 9号住居跡(1) (1/60・1/30)



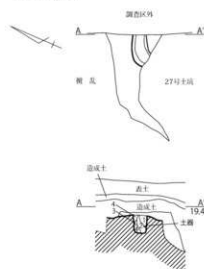
0 20cm

0 2m



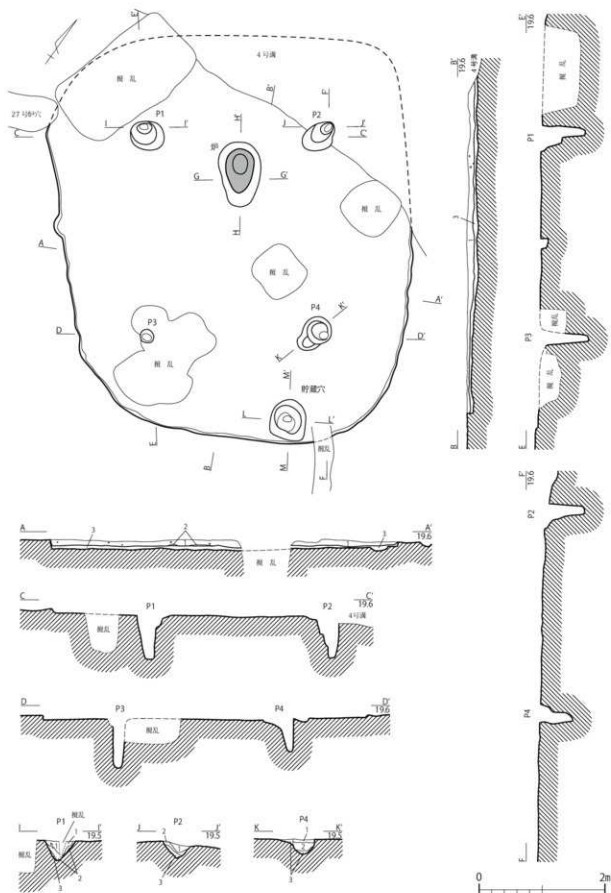
0 1m

11号住居跡

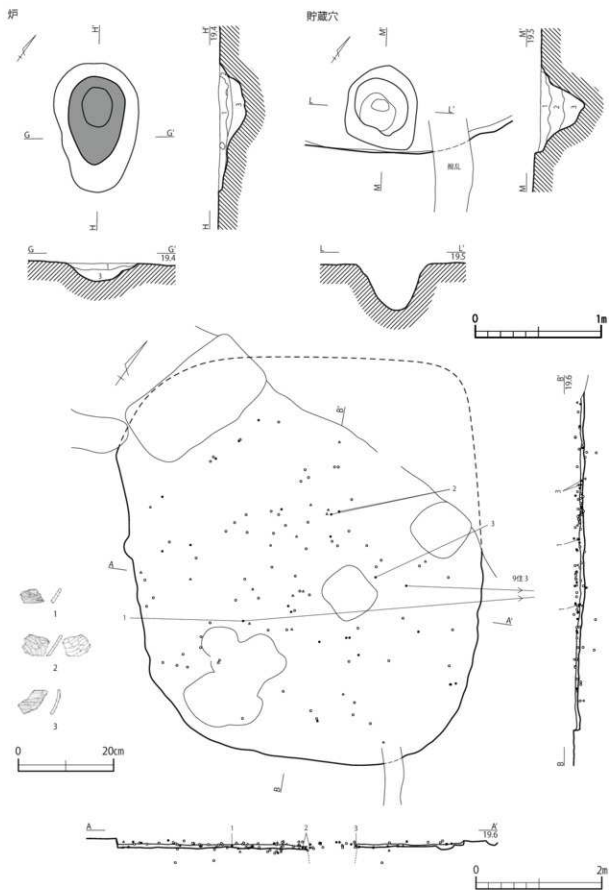


0 1m

第 272 图 9号住居跡 (2)・11号住居跡 (1/60・1/20)



第273図 12号住居跡(1) (1/60)



第 274 图 12 号住居跡 (2) (1/30 · 1/60)

2) 遺物

今回の調査で出土した弥生時代の遺物は、土器1,005点(遺構内993点、遺構外12点)、土製品3点(管玉、二次利用土器片2)、石器2点(砥石、石皿)である。土器の時的期的内訳は、中期後半871点、後期後葉134点である。

調査区内には弥生時代の包含層はなく、大半は中央～北東側に検出された住居跡内出土であり、遺構外出土は僅少である。個別の詳細は観察表(第2分冊 第26表)を参照されたい。

A 土器

・遺構内出土土器

8号住居跡(第275・276図1～15、第26表、図版334・335)

出土土器総数879点で、機種別内訳は、壺84点、高環4点、鉢9点、甕778点、台付甕2点である。個体資料8点、破片資料7点を掲載した。

1～3・7～10は壺である。1は図上復元したものである。頸部は細く長い。胴部は算盤玉状を呈す。ハケ目を施した後にミガキをかけている。2は口縁部で、端面外面は面取りしている。3は胴部～底部資料で、丁寧なミガキが施される。7・8は底部である。8は厚い底部で黄褐色を呈す。他の土器と胎土が相違し、搬入品の可能性がある。9は端部に棒状浮文を貼付し、赤彩が施される。10は頸部から肩部にかけて縄文を施文し、中間をミガキで磨り消している。ミガキ部分は赤彩が施す。

4～6・12～15は甕である。4は直線的に開く器形で、口縁端部は親指+人差指による押捺(扶み込み+振り)が丁寧になされている。器面はナデ調整である。5は胴部は直立し、口縁部が外反する。端部は同様の押捺が施される。ナデ甕である。6はナデ甕の胴下部～底部である。12もナデ甕で、口縁端部は4と同様の指による押捺が施される。13～15はハケ目調整のいわゆるハケ甕である。口縁端部には13がへら、14がハケを用いて刻目を入れている。

11は鉢と思われる。波状口縁で、ナデ調整である。

1・2の壺、4・5の甕などは、中期後半～宮ノ台式に比定されよう。同式の中でも中葉段階の所産と思われる。他の資料も同様の範疇であろう。

9号住居跡(第275・276図1～6、第26表、図版334-1・335)

出土土器総数90点で、機種別内訳は、壺8点、台付甕82点である。個体資料3点、破片資料3点を掲載した。

1・2・4は壺である。1は床面に逆位で設置されていたもので、頸部下半から下は欠失している。複合口縁で、棒状浮文と縄文が施される。内外面赤彩されている。2は頸部資料で、縄文が施文される。4は肩部上端に突帯が貼付される。胎土中に海綿体骨針を含む。

3・5・6は台付甕である。3はハケ甕である。端部は棒状工具による押捺が巡る。5もハケ甕で、端部はハケによる刻目である。6はナデ甕で、端部は押捺が巡る。

上記の土器は、後期後葉の所産と思われる。道合遺跡第Ⅱ次調査成果における新段階に相当しよう。

12号住居跡(第276図1～3、第26表、図版335)

出土土器は24点で、機種別内訳は、壺2点、台付甕22点である。破片資料3点を掲載した。1・2は9号住居跡3点と同一個体資料の台付甕である。2は胴下部で脚部との接合部に近い。3もハケ甕である。いずれも後期後葉、道合新段階に相当しよう。

B 土製品（第 277 図 1～3、第 27 表、図版 336）

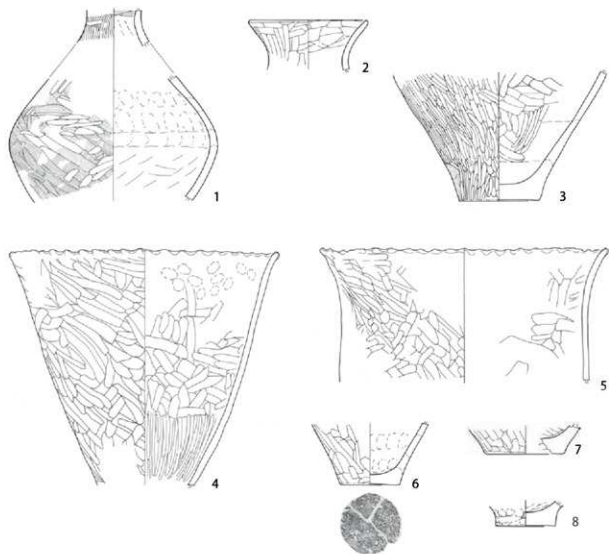
管玉 1 点、二次利用土器片 2 点が出土した。1 は管玉で、8 号住居跡床面出土である。約 1/2 の残存である。現存長 2.1cm、最大径 0.9cm、重量 1.9 g を測る。中央部がやや膨らみ、端部は径 0.8 cm となる。孔は径 0.3cm を測る。焼成は良好で暗褐色を呈す。2・3 は二次利用土器片で、2 は 8 号住居跡出土で、3.0 × 2.6cm の楕円形、研磨は側縁全周する。甕の胴部である。3 は一部を欠損する。2.1 × 2.0cm の長方形を呈す。研磨は全周する。ハケ甕の胴部である。15 号住居跡出土である。

C 石器（第 277 図 4・5、図版 336）

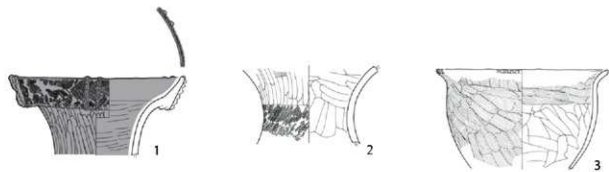
2 点が 8 号住居跡より出土した。4 は砥石と思われる。長さ 8.2cm、幅 3.0cm、厚さ 2.0cm、重量 88.3 g を測る。角柱状を呈し、各面に研磨痕を有す。砂岩である。

5 は石皿で、8 号住居跡南壁際の床面より検出された。破片であり、19.4 × 11.0 × 11.5cm、重量 3.5kg を測る。両面を使用している。凝灰岩である。

8号住

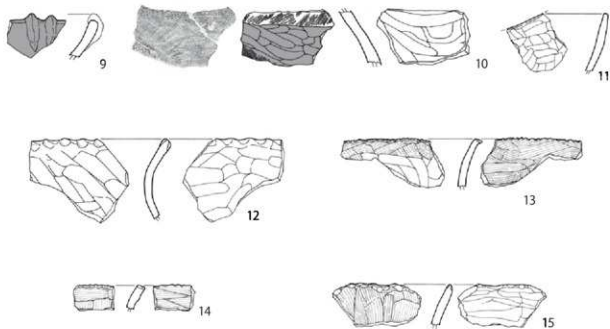


9号住

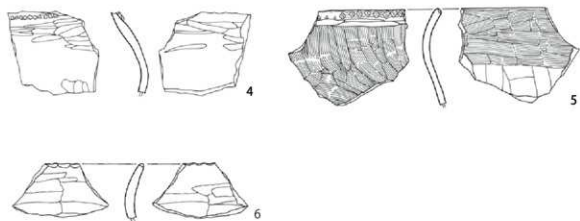


第 275 図 8・9号住居跡出土土器 (1/4)

8号住



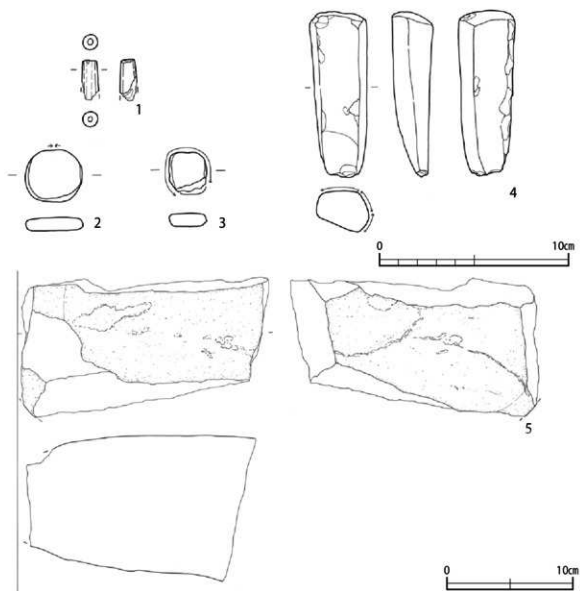
9号住



12号住



第 276 图 8·9·12 号住居跡出土土器 (1/3)



第 277 図 弥生時代の土製品、石器 (1/2・1/3)

4 古墳時代前期～中期

今回の調査で検出された古墳時代前期～中期の遺構は、土坑1基である。遺物は土坑出土を主体として近世の溝から若干の土器が出土している。

1) 遺構

40号土坑(第279図、図版338)

グリッド 23-40

平面形態 隅丸長方形

規模 80×45×25/67×34cm

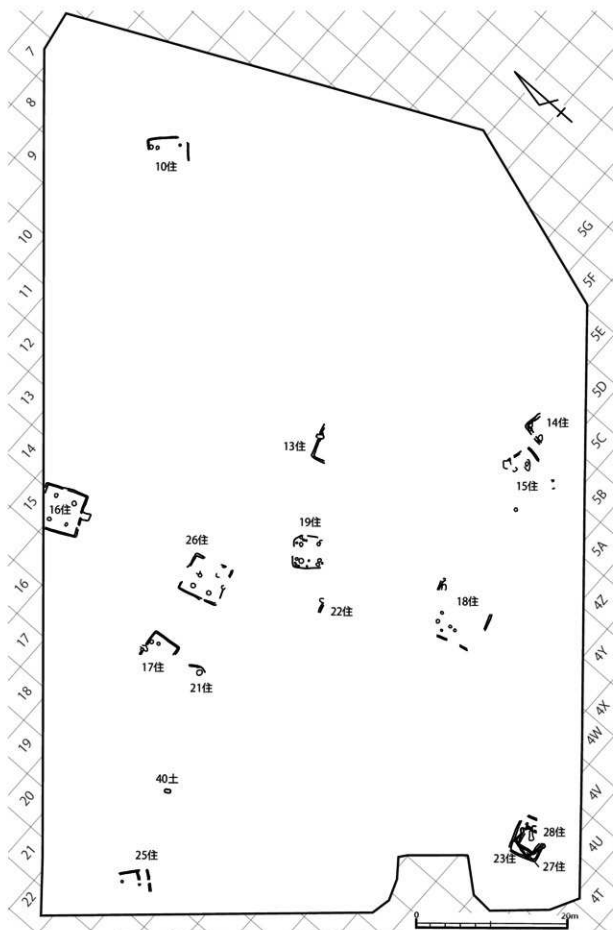
検出状況 調査区西側に位置する。周囲は保育園解体工事に伴う削平・攪乱で地山が削り取られ、辛うじて鳥状に残存していた地山部分で検出された。長方形プランの掘り込みの上部に土師器台付甕が出土した。検出当初は掘り込みの規模・長軸方向など、16号住居跡(古墳時代後期)の張り出し貯蔵穴と類似しており、住居南側の貯蔵穴と判断して調査を行ったが、住居壁、床など他の施設は周囲を精査したが確認できなかった。さらに出土土器は古墳時代前期の所産であり、当該時期の一般的な住居内貯蔵穴とは形態に相違がある事から、一応、土坑として報告する事とした。しかしながら住居内貯蔵穴としての可能性も無いとは言えず、その判断は保留としたい。

遺物出土状態 総点数は38点で、内訳は土器37点(縄文1点・土師器36点)、礫1点である。土師器の内訳は、小壺1点、高坏12点、台付甕23点である。確認面において台付甕および高坏が検出されている。土坑外、南の方向に遺物が点在するが、これは削平段階および表土掘削段階における重機による引きずりであると判断し、それらも本土坑所産の遺物とした。

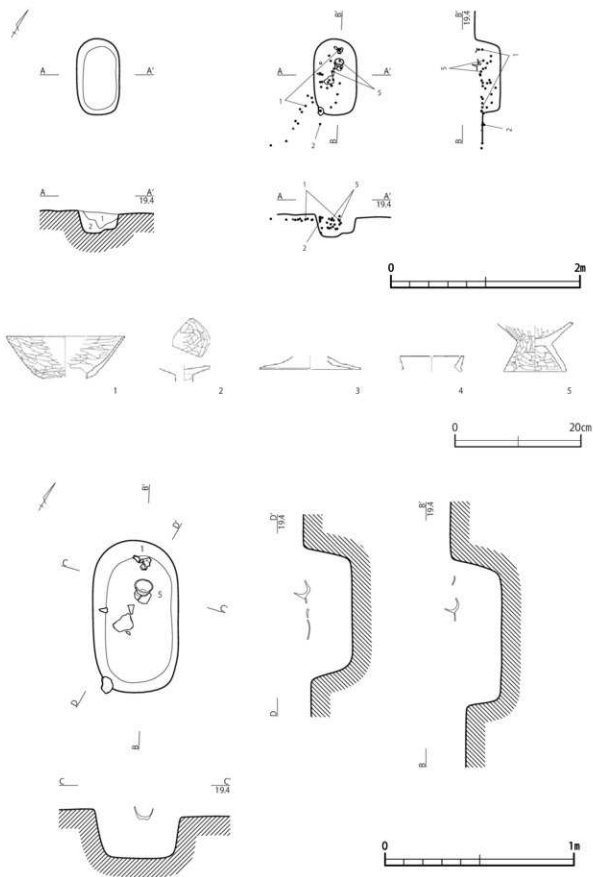
時期 出土土器から古墳時代前期-4世紀後葉の所産と思われる。

今回の調査区の西側隣接地区(第V次調査-武蔵文化財研究所)には、古墳時代中期以前とされた住居跡が2軒検出されている(当該報告-6・7号住居跡)。両者とも出土土器はないが、検出炭化材の年代測定により、古墳時代中期と判断されている。カマドは無く、7号住居跡は炉を有する。

両者とも土器からの時期比定が出来ない状況であり、本土坑(古墳時代前期後葉)との関連は不明と言わざるを得ないが、今回の調査において、5世紀代の土器も僅かながら出土しており、従来まで空白時期であった古墳時代前期～中期にも本地区での土地利用が認められた事が明らかになった。当地区での本格的な集落形成は6世紀からであるが、それ以前の4・5世紀代における周辺地区を含む動静は、本台地の西側の沖積低地に求められる。宮堀北、豊島番場、都民ゴルフ場遺跡などで祭祀遺構が検出されており、台地上から低地に生活領域が移行した事が窺える。台地上では、赤羽台、稲付公園、南橋、田端不動坂などに若干の住居跡が認められる程度である。弥生時代後期～古墳時代初頭期で隆盛した台地上での集落は、この時期は衰微し、再び生活領域として台地に戻ってくるのは、古墳築造(赤羽台、十条台、飛鳥山など)が活発になる6世紀代に入ってからである。



第 278 図 赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 時代別遺構配置図 (3) 古墳～平安時代 (1/500)



第 279 图 40 号土坑 (1/40 · 1/20)

2) 遺物

今回の調査で出土した古墳時代前期～中期の遺物は38点（遺構内36点、遺構外2点）でいずれも土器である。遺構が土坑1基であり、自ずと出土量は限られている。

A 遺構出土土器

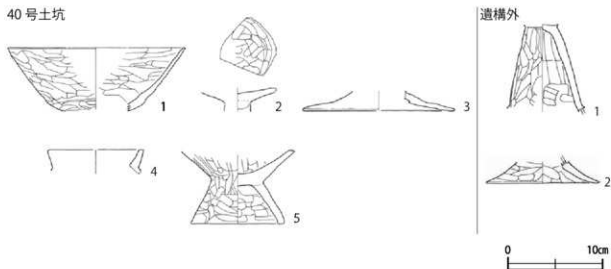
40号土坑（第280図1～5、第28表、図版388-1）

出土土器総数36点の機種別内訳は、小壺1点、高坏12点、台付甕23点である。個体資料5点を掲載した。1～3は高坏である。1は坏部で、大きく開く器形で、下部に段を有す。2は坏部・脚部との接合に臍繋ぎがみられる。脚部は柱状に近い。3は脚部の裾部でラッパ状に開く。4は小形壺と思われる。口縁部は短く外傾する。5は台付甕で、胴部は外傾して立ち上がり、脚部はやや短くハの字状に開き、端部は若干内傾する。ヘラナデが施される。5の台付甕は古墳時代前期～五領式後葉段階に比定されよう。1～3の高坏もその範疇か和泉式初頭段階かと思われる。

B 遺構外出土土器（第280図1・2、第28表、図版388-1）

2点を掲載した。1・2とも高坏の脚部である。1は長脚でハの字状を呈す。裾部は欠失しているが屈折して開くものと思われる。内面上部に絞りが顕著にみられる。2は裾部で、屈折して大きく開いている。

1・2とも古墳時代中期～和泉式に比定され、5世紀中葉段階と思われる。



第280図 古墳時代前～中期の土器（40号土坑・遺構外）（1/4）

5 古墳時代後期～平安時代

今回の調査で検出された古墳時代後期～平安時代の遺構は、住居跡 15 軒である。分布はほぼ調査区全域に及んでおり、北・西側にその分布が広がる様相を見せている。今回の調査区の道路を挟んで西側は第V次調査区で、古墳時代中期以前が2軒、奈良～平安時代が8軒、不明2軒の住居跡が検出されている。第1次調査（遺跡西端部）から東端部の本調査区まで、住居跡の分布は続いており、本遺跡はほぼ全面が生活領域であったと思われる。

1) 遺構

A 住居跡

10号住居跡（第281図、図版339）

- | | | | |
|------|--------------------|------|-----|
| グリッド | 11・12-5A・B | 平面形態 | 方形 |
| 規模 | 535 × (330) × 0 cm | 床面積 | |
| 主軸方向 | N45° W | 構築回数 | 1回? |
- 検出状況** 調査区西側に位置する。団地住棟建設により西側約1/2が削平され、上部は被服本廠倉庫内部ということもあり、床面下まで削平が及んでいた。検出されたのは周溝と柱穴の下底部のみである。また、カマドの位置と推定される部分は倉庫床下の束柱基礎により攪乱されている。
- 覆土** 住居覆土は削平のため遺存していない。ピット覆土も底面直上層の堆積のみである。
- 柱穴** 主柱穴と思われる位置に2基が検出された。P1・2が東側壁と並行している。柱間260 cmで、消失した西側を含め、方形プランで設置されたと思われる。
P1-40 × 35 × 5 cm P2-30 × 25 × 5 cm
- カマド** 検出されず。残存している北東壁には認められない事から北西壁の基礎から西側の削平部分に設置されたものと考えられる。
- 床** 削平により、床面は遺存していない。周溝底面が遺存している事からほぼ検出面が掘方底面と思われる。平坦に削平されており、掘削痕は遺存していない。
- 周溝** 残存部ではほぼ全周する。北西側貯蔵穴部分で途切れているが、削平深度の関係で、本来は続いていたものと思われる。幅10～15 × 5 cmを測る。
- 貯蔵穴** 北側隅、P1-2のライン上に位置する。楕円形を呈し、55 × 40 × 25 cmを測る。埋め戻し土が認められる。

遺物出土状態 土器（弥生）1点が出土した。

所属時期 住居跡の形態などから古墳時代後期の所産と思われる。

13号住居跡（第282～285図、図版340～345-4）

- | | | | |
|------|-----------------------|------|-----|
| グリッド | 19・20-4X・Y | 平面形態 | 方形? |
| 規模 | (180) × (460) × 20 cm | 床面積 | |
| 主軸方向 | N22° W | 構築回数 | 1回? |
- 検出状況** 調査区中央に位置する。団地造成に伴うグラウンドのフェンス基礎構築により南側が削平され、北側のカマドから西側コーナー部分（約1/8）が遺存しているのみである。

覆 土 住居跡壁際の堆積土であり、埋没過程を読み込む事は困難である。遺存部分の東側はカマド構築材の混入が多い。

柱 穴 検出されず。削平部分にあったものと思われる。

カマド 北壁中央と思われる位置に構築している。東側袖の先端部と西側煙道部の一部を攪乱されているが、概ね良好に遺存している。構築の際、地山のローム土を掘り残して袖部の芯（長さ50×幅30cm）とし、その周囲に粘土を貼り付けて造作している。壁から70cm、幅50～60cmを測る。焚口から燃焼部は明確な掘方はみられず、一体化している。50×50×10cmを測る。燃焼部には土製支脚が立つ。煙道は住居壁外側に40cm張り出す。急傾斜に立ち上がる。支脚上部には土師器甕が出土しており、廃絶時に掛け口に残置したものとと思われる。

床 厚さ5～10cmほどの貼床が施される。検出されたのが床面の一部であり、明確ではないが、西側周溝際は掘り込みは深い。

周 溝 残存部ではカマドを除き全周する。幅25×10cmを測る。

遺物出土状態 総点数は310点で、内訳は土器269点（縄文12点・弥生2点・土師器255点）、土製品26点（支脚4点、焼成粘土塊22点）、礫15点である。土師器の内訳は、坏11点、高坏1点、甕234点、甎9点である。本住居跡は削平により大半を消失し、カマドと北西隅隅が遺存するのみであったが、その遺存部分から個体を中心に土器が集中していた。5の甕はカマド天井部の掛け口に置いたものと思われ、倒れこんだ状態で検出された。他にカマドからは1～4・9が出土している。カマド脇からは6・8が出土し、7の甎はカマド内とともに住居北東隅に接合個体が検出された。10の甎は7の東側に隣接して出土している。カマド外出土のものは床面との間に埋没土が若干堆積しており、住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。カマド掛け口に置かれた甕は、使用状態のまま廃絶されたのか、住居―カマド廃絶に伴う儀礼行為であるか判別は出来なかった。この甕と周囲から出土した甕・甎などが生活什器のセットであったかは不明であるが、同様の時期の所産ではある。

所属時期 出土土器は6世紀後半頃の所産である。本住居跡の時期もその範疇と思われる。

14号住居跡（第286・287図、図版345～5～347～4）

グリッド 23・24－5 B・C 平面形態 方形？

規 模 (460)×(270)×40cm 床 面 積

主軸方向 N10° W 構築回数 1回？

検出状況 調査区南側に位置する。団地住棟内部で検出されたため、基礎により大半を削平されている。遺存していたのは北西隅を中心とした1/4程度であろうか。西側に15号住居跡が隣接する。

覆 土 残存していた住居跡壁際は三角堆積土がみられる。北側壁際はカマド構築材と思われる粘土粒を含む土層が堆積していた。

柱 穴 主柱穴と思われるピットが1基のみ検出された。50×50×60cmを測る。

カマド 北側壁際に構築材の粘土を含む土が厚く堆積していたが、カマド本体は検出されなかった。

団地住棟基礎によって削平された部分（遺存部分の東側）に構築されたものと思われる。

床 厚さ 10～15cmほどの貼床が施される。検出されたのが床面の一部であり、明確ではないが、西側周溝際は掘り込みは深い。北西隅西壁中央部には不整形の掘り込みがある。

周 溝 残存部では全周する。幅 20～30×15cmを測る。

遺物出土状態 総点数は 236 点で、内訳は土器 221 点（縄文 14 点・土師器 207 点）、土製品 2 点（二次利用土器片—縄文 1・当該時期 1）、礫 13 点である。土師器の内訳は、坏 4 点、甕 203 点である。住居南側は覆土の遺存が悪く、遺物も希薄である。比較的遺存状態の良い北側壁際に遺物が集中している。接合例は無く、細片を主体とする。

所属時期 出土土器は平安時代 9 世紀代を主体とする。本住居跡の時期もその範疇と思われる。

15 号住居跡（第 288～291 図、図版 347-5～351-4）

グリッド 24・25-4 Z～5 B
平面形態 方形
規 模 (550)×(705)×45cm
床 面 積
主軸方向 N10° E
構築回数 1 回？

検出状況 調査区南側に位置する。団地住棟内部で検出されたため、基礎により多くの施設を削平されている。遺存していたのはカマドおよび東側コーナー部、カマド側床面（約 1/2）であり、南側は近世の溝により削平されているため、全体の規模が不明である。カマド・柱穴の配置などから方形プランの住居を想定した。東側に 14 号住居跡が隣接する。

覆 土 カマドから北東コーナーにかけて残存する。西～南側は表土下に床面が露出していた。住居中央部にレンズ状に 1・2 層が堆積し、壁際に三角堆積土（5 層）がみられる。

柱 穴 主柱穴と思われるピットが 2 基検出された。P 1 は北東隅にあり、60×60×90cmを測る。柱抜き取り時と思われる掘り込みが南西側にみられた。P2 は南西隅と思われる位置にある。北東隅—P 1 ラインの延長線上にあることから、主柱穴と判断した。溝の削平により、下底部のみの遺存である。40×30×15cmを測る。底面標高値は P1 と同様である。2 本の柱穴の存在から主柱穴は 4 本と思われ、ほぼ方形の住居平面プランの配置と考えられる。

カ マ ド 北壁中央と思われる位置にある。袖・天井は遺存しておらず、構築材を含む土層が堆積していた。焚口・燃焼部はやや横長の楕円形で、110×80×20cmを測る。煙道は住居壁外側に 40cm張り出す。緩やかに立ち上がる。

床 厚さ 5～20cmほどの貼床が施される。東側周溝際の掘り込みは深く、中央部は極く浅い。主柱穴内部と思われる空間は非常に硬く締まり、壁際はやや軟弱となる。

周 溝 残存部では全周する。幅 15～20×15cmを測る。

遺物出土状態 総点数は 783 点で、内訳は土器 759 点（縄文 61 点・弥生 2 点・土師器 684 点・須恵器 12 点）、土製品 3 点（二次利用土器片—縄文 2・当該時期 1）石器 1 点（剥片—縄文）、礫 15 点、鉄製品 1 点（鉄銚）、陶磁器 2 点である。土師器の内訳は坏 22 点、皿 1 点、高坏 2 点、甕 659 点、須恵器の内訳は蓋 5 点、坏 6 点、甕 1 点である。住居南側は削平の影響で覆土の遺存が悪く、遺物も希薄となる。覆土が良好に遺存していた北側に遺物は集中する。1 の須恵器蓋は主柱穴 P 1 からの出土である。5 の甕

規 模	395 × (370) × 30cm	床 面 積	
主軸方向	N 5° W	構築回数	1 回?
検出状況	調査区中央西寄りに位置する。被服本廠 18 号倉庫の床下にあたり、倉庫外壁の基礎により南西側 1/4 ほどを、床下束柱により北側カマド・壁などの一部を消失する。本住居跡は北壁に沿って床面に個体土器（土師器甕・坏・鉢など）が置かれた状態で出土したが、上部は削平により失われている。カマド検出位置・柱穴位置などから推測するに住居プランは横長（主軸方向が短い）の長方形となろうか。		
覆 土	概ね単一土層で占められる。		
柱 穴	北東側に 1 基が検出された。40 × 35 × 60cm を測る。位置的には 4 本主柱穴の 1 本かと思われるが明確ではない。この柱穴と住居コーナーとの位置関係から想定し得る他の柱穴の推定位置をみるに、南東側は縄文時代の柱穴と重複している関係で、把握し得なかった。西側は削平されており、検出されていない。		
カ マ ド	北壁に位置する。上記のように、カマド設置位置は北壁中央と推測する。被服本廠倉庫基礎床下束基礎による攪乱で天井・袖などを消失し、掘方が検出されたのみである。構築材を含む土層が堆積している。焚口部は不整形で 40 × 40 × 10cm を測る。掘り込みは浅い。燃烧部は 50 × 40 × 30cm を測り、やや深く掘り込んでいる。煙道部は住居壁外側に 30cm 張り出す。先端部は攪乱され消失している。西側にビット状の掘り込みがあるが、性格は不明である。		
床	厚さ 10 ~ 20cm ほどの貼床が施される。上面は硬化がみられるが顕著ではなく、壁際は特に硬化面はみられない。		
周 溝	残存部では全周する。幅 15 ~ 20 × 10cm を測る。		
遺物出土状態	総点数は 105 点で、内訳は土器 93 点（縄文 33 点・土師器 60 点）、石器 1 点（剥片一縄文）、礫 4 点、炭化物 1 点である。土師器の内訳は坏 21 点、高坏 5 点、甕 31 点、甗 2 点、鉢 1 点である。南西側および上部の削平により覆土の遺存状態は悪く、出土遺物総数も少ないが、北側壁・カマドの両側に甕・坏・鉢などの個体資料が床面上から検出された。甕などは上面削平の影響で破壊されているものもあるが、各々原位置は保たれているものと思われる。カマド西側には 1・3・5・9 の坏、20 の甗が纏まる。1・2 は重なっている。20 の甗は横倒し状態で、上面 1/2 は消失している。やや離れたカマド前面には 4 の坏が単独で出土した。カマドには横倒し状態で 18・19 の長胴甗が東側に口縁部を向けて縦並びで出土した。その東側、カマド脇の北壁沿いに 17 の小形甗と 21 の甗が北壁向きに縦並びで出土している。北壁東寄りには 13・15 の球胴甗とその間に 16 の小形甗がある。13・15 は横倒し状態で上面 1/2 は削平のため消失している。16 は住居中央に口縁部を向けている。それらの南側に 14 の球胴甗、さらに南東側に 12 の鉢がある。14 は上面を消失するが、12 は完形で遺存していた。		
所属時期	出土土器は 6 世紀末～7 世紀前半の範疇に入る。本住居跡もその時期の所産と思われる。		

18号住居跡(第300～303図、図版364～366)

- グリッド 25・26-4V-X 平面形態 方形
- 規模 790×745×15cm 床面積
- 主軸方向 N20°W 構築回数 1回?
- 検出状況 調査区南側中央に位置する。団地住棟および前面の道路下にあたり、施設の多くを削平されている。遺存していたのは、南・西側の壁・床の一部、北東隅の壁・床の一部、中央部床の一部でそれぞれが住棟基礎・埋設管などにより分断されている。調査開始時には数軒の重複かとも思われたが、残存壁からの想定ライン復元などから、一辺8m弱の方形プランの住居と認定した。カマドは北壁ないしは東壁(消失範囲)に配されたものと思われる。
- 覆土 上部の削平により、覆土の遺存状態は不良である。中央部は10cmほどが遺存しているのみで、南側壁際で15cmほどが遺存していた。三角堆積が認められる。
- 柱穴 主柱穴と思われるものは1基(P2)のみである。50×(45)×60cmを測る。住居北西隅の位置にあり、壁(コーナー)との位置関係から4本柱のうちの1本と推定される。他の3本はその想定位置は削平されており検出されていない。主柱穴以外に3基のピットがあるが、その性格は不明である。20～40×10～20cmを測る。
- カマド 検出されていない。削平・攪乱された北壁もしくは東壁に設けられたと思われるが、後述の貯蔵穴との関係から、北壁の可能性が高い。
- 床 厚さ10～20cmほどの貼床が施される。上面は硬化がみられるが顕著ではなく、壁際は特に硬化面はみられない。
- 周溝 残存部では全周する。幅15～20×10cmを測る。
- 貯蔵穴 北東隅に位置する。カマド脇の貯蔵穴と考えられる。東西に長い長楕円形を呈し、(70)×50×35cmを測る。
- 遺物出土状態 総点数は306点で、内訳は土器284点(縄文27点・弥生1点・土師器255点・須恵器1点)、土製品3点(二次利用土器片-縄文3)石器2点(剥片-縄文)、石製品1点(勾玉)、礫13点、炭化物3点である。土師器の内訳は坏11点、高坏1点、甕243点、須恵器は坏である。攪乱・削平部分が多く、残存部も覆土の遺存は浅いため、住居規模に比較して出土遺物は少ない。1の坏、4の甕は北壁(想定)際からの出土である。
- 所属時期 出土土器は6世紀後半～末葉の範疇である。本住居跡もその時期の所産と思われる。

19号住居跡(第304・305図、図版367～370)

- グリッド 21・22-4U・V 平面形態 隅丸方形
- 規模 (400)×415×20cm 床面積
- 主軸方向 N43°W 構築回数 1回?
- 検出状況 調査区中央部に位置する。被服本廠18号倉庫の床下にあたり、東基礎によって部分的に攪乱を受けている。また、南東側は、団地内グランドフェンス基礎により壁・床などを消失する。倉庫建設に伴う造成面均し・締めの影響で覆土・壁上部は削平を受け、下半部の

遺存に止まる。

覆土 上部の削平により、覆土の遺存状態は不良である。西側で20cmほどが遺存していたが、北・東側は10cm程度である。

柱穴 主柱穴は4本（P1・2・8・9）で、略方形プランを呈す。柱間は、P1-2間が150cm、P8-9間が170cm、P1-8間が185cm、P2-9間が190cmを測る。P8・9のそれぞれ外側には同規模の柱穴（P7・10）があり、柱の付け替えが行われたものと思われる。規模は以下のとおりである。

P1：65×60×40cm P2：50×40×45cm

P8：50×40×25cm P9：50×40×20cm

P7：50×40×40cm P10：(35)×35×35cm

また、各主柱穴とコーナー部との範囲に小ピットが検出された。P1周囲にはP4・6・11・12、P2周囲にはP3・5・16・17、P8周囲にはP15がある。南側両コーナー・壁は削平により消失しているため確認し得ないが、北側同様に数基のピットが設けられたものと思われる。補助柱であろうか。

カマド 検出されていない。北西壁中央部は基礎により削平されており、また東西壁には存在していないことから、この削平部分に設置されていた可能性が高い。

床 厚さ5～15cmほどの貼床が施される。掘方深度は概ね同様で、壁際が深くなる事はない。

周溝 残存部では設けられていない。

遺物出土状態 総点数は124点で、内訳は土器115点（縄文28点・弥生3点・土師器83点・須恵器1点）、土製品2点（二次利用土器片-縄文）、礫7点である。土師器の内訳は坏9点、高坏7点、小壺3点、甕63点、須恵器は蓋である。上部削平により遺物量は少ない。覆土上～中層に多く分布する。平面的には住居中央部に多くみられる。接合例はほとんどみられない。

所属時期 出土土器は7世紀前半に比定される。本住居跡もその範疇の所産と思われる。

21号住居跡（第306図、図版371～372-4）

グリッド 21-4 Q・R 平面形態 隅丸方形？

規模 (200)×(120)×10cm 床面積

主軸方向？ 構築回数？

検出状況 調査区中央部に位置する。17号住居跡に隣接する。団地保育園解体工事に伴うと思われる掘削により施設の大半を消失する。わずかに南東側コーナー部（壁・床・貯蔵穴）が遺存していたのみである。プラン確認時には土坑かとも思われたが、掘削段階で周溝が検出され、円形の掘り込みには土師器甕が出土した事により、住居のコーナー部分であると判断した。隅は緩くカーブしており、住居プランは隅丸方形かと推測される。

覆土 遺存範囲で厚さ10cmほどがみられる。

柱穴 検出されず。住居主体は削平で消失しており、柱穴の有無は不明である。

カマド 検出されず。削平部分に存在したものと思われる。

床 厚さ5～15cmほどの貼床が施される。遺存している床面は壁際という事もあり、顕著な

硬化面は検出されていない。

周 溝 東側壁にあるが、南東側コーナー部では途切れる。貯蔵穴の存在との関連が窺われる。
15 × 10cmを測る。

貯 蔵 穴 南東コーナー部際に位置する。円形の盞状を呈し、75 × 65 × 20cmを測る。土師器甕が
横倒しの状態で出土したため、貯蔵穴と判断した。

遺物出土状態 総点数は61点で、内訳は土器48点（縄文7点・土師器41点）、礫12点、鉄製品
1点である。土師器はすべて甕である。本住居跡は南東隅の貯蔵穴周辺のみであり、
遺物も大半がその貯蔵穴からの出土である。1の甕は横倒しの状態で検出された。

所属時期 出土土器は6世紀後半～7世紀前半の範疇であり、本住居跡もその範疇の所産と思われる。

22号住居跡（第307図、図版372-5～373）

グリッド 22-4 U 平面形態 ?

規 模 (200) × (120) × 10cm 床 面 積

主軸方向 ? 構築回数 ?

検出状況 調査区中央部に位置する。東側に19号住居跡が隣接する。団地内グランドフェンス基礎
により大半の施設を消失し、北側のかまど煙道部と西側に伸びる壁・周溝の一部が遺存す
るのみである。壁は近世の溝により削平されて途切れる。

覆 土 溝の調査段階で、一部遺存していたであろう本住居跡覆土も溝に付帯する施設と捉えて同
時に掘削したため観察し得なかった。完掘後に周溝を確認した。

柱 穴 検出されず。住居主体は削平で消失しており、柱穴の有無は不明である。

カ マ ド 北壁に構築されているが、住居壁の遺存が部分的であり、壁中央であるか否かは判断でき
ない。検出されたのは煙道部のみである。住居外側に55cm張り出す。幅50cm、傾斜は約
60°である。

床 西側の周溝際にわずかに残るが、硬化面はない。5～10cmの厚さの貼床である。

周 溝 25 × 10cmを測る。

遺物出土状態 カマドより土師器甕が4点出土したのみである。

所属時期 出土土器は6世紀後半と思われる。本住居跡もその範疇の所産であろう。

23・27・28号住居跡（第308～312図、図版374～380）

調査区南西隅で検出された。プラン確認段階では長方形プランの住居跡が1軒と判断して調査を開
始したが、途上で当初プランの内側に小形の住居跡が2軒確認された。各々主軸方向を若干違えたも
ので、南側で一部、23号のプラン外に出るが、ほぼ内部に位置する。最も規模の小さい28号が古く、
次にやや軸が振れる27号、当初プラン確認した23号が最新となる。竪穴の深度は28号が最も深く、
その上部に27号、更に上部に23号が構築されている。団地住棟内部にあたり、南東側を地中基礎
により消失する。

遺物出土状態に関しては、調査段階では明確に各住居跡所属遺物の把握が困難であった。平面・断
面図の作成において判明したものについては各々の住居跡において、全体的な様相はここで記載する。

総点数は327点で、内訳は土器297点（縄文80点・弥生1点・須恵器35点・土師器181点）、
土製品2点（二次利用土器片—縄文1・当該時期1）、石器9点（石核1・剥片8—縄文）、礫18点

である。須恵器の内訳は蓋3点、坏12点、長頸瓶1点、甕19点で、土師器の内訳は坏44点、皿1点、高坏1点、甕126点、台付甕8点、甕1点である。分布状況としては、23号中央部に比較的集中し、同号壁際は分布が薄い。27号も同様に分布は中央に寄る。28号は残存覆土が少なく分布傾向は明確ではない。28→27→23号の構築の流れの中で、27号掘削の際に28号の大半を削平し、その掘削土は周堤帯に使用される。さらに23号掘削に際し、27号覆土・周堤帯の除去・掘削が行われ、23号廃絶後、周堤帯を含む土砂の埋没という過程を踏むと思われる。これらの中で、最古の28号に帰属する遺物の過半は二次的な移動が繰り返され、27号帰属遺物も同様な事が起こっていたと考えられる。従って、以下で各々に帰属する遺物も本来の位置とは限らず、時期的な混在が認められる。各住居跡の構築・廃絶時期の決定も確実な証左の基ではなく、出土土器総体からの個別時期比定→住居時期比定とならざるを得なかった。出土土器は大きく3段階の時期が想定される。8世紀前半、9世紀前半、9世紀中葉～後葉である。

23号住居跡

グリッド	30・31-4 S・T	平面形態	長方形
規模	540×410×20cm	床面積	
主軸方向	N18°W or N72°E	構築回数	1回
検出状況	調査区南西隅に位置する。重複する3軒の住居跡の中で最も新しく、2軒の上部に構築されている。南東側・北東隅を消失する。		
覆土	軟質の黒褐色土を主体とする。東西壁際には三角堆積土がみられる。		
柱穴	主柱穴と判断し得るものは検出されなかった。住居中央部は27・28号の覆土であり、その範囲内では本住居跡の柱穴の存在は把握し得なかった。北東隅には30×20×50cmを測るピットがあるが、4本主柱穴を前提として、これに対応する他の位置には検出されていない。		
カマド	検出されていない。短軸の東壁（住棟地中基礎部分）に存在するか、カマドを設けない住居であるかは明確ではない。		
床	厚さ5～15cmほどの貼床が施される。27・28号と重複していない範囲では貼床と掘方が検出し得た。重複範囲では27・28号覆土中に床面を造出しているため、硬化面および掘方下底面の確認は困難であった。ロームブロックを部分的に貼って床面としているが、顕著な硬化面は検出されなかった。		
周溝	残存部は全周する。25×10cmを測る。		
遺物出土状態	平面・断面図上での本住居跡帰属と想定できるものは、5・7・14・16・19・21などである。5・7・16は27・28号プラン外側での出土であるが、覆土中であり、古い時期の土器が混在しているであろう周堤帯に含まれていたものの二次流入であるとした場合も想定しうる。		
所属時期	出土土器総体での3時期区分において最新の9世紀中～後葉段階の所産であろうか。		

27号住居跡

グリッド	30・31-4 S・T	平面形態	方形
規模	300×290×25cm	床面積	

- 主軸方向 N10° E 構築回数 1回
- 検出状況 調査区南西隅に位置する。重複する3軒の住居跡の中では中間の時期である。東側壁・床を団地住棟基礎により消失する。23号床面精査時にプランを確認した。断面観察において壁の立ち上がりが上部の23号に及んでいない事、散在するロームブロックが23号床面レベルにみられる事から23←27号の新旧関係と判断した。
- 覆 土 軟質の黒褐色土を主体とする。上部の1層とした層の一部は23号の掘方を含むと思われるが、明確な相違は把握し得なかった。
- 柱 穴 主柱穴と判断し得るものは検出されなかった。
- カ マ ド 北壁中央に位置する。天井・袖などは遺存しておらず、掘方のみであった。焚口・燃焼部は円形を呈し、60×40×10cmを測る。煙道部は住居壁外側に40cm張り出す。急傾斜を呈する。
- 床 厚さ5～10cmほどの貼床が施される。掘方は下部の28号の床面レベルから一部はその下部に達している。住居中央部は硬化が著しい。
- 周 溝 残存部は全周する。20×10cmを測る。
- 遺物出土状態 平面・断面図上での本住居跡帰属と想定できるものは、4・8・13・23などである。本住居跡も新旧時期の土器が混在している。
- 所属時期 出土土器総体での3時期区分において中間の9世紀前半段階の所産であろうか。
- 28号住居跡
- グリッド 30・31-4 S・T 平面形態 不整形
- 規 模 285×280×5cm 床 面 積
- 主軸方向 N10° E 構築回数 1回
- 検出状況 調査区南西隅に位置する。重複する3軒の住居跡の中では最も古い時期である。南東側壁・床を団地住棟基礎により消失する。27号と同様に23号床面精査時にプランを確認した。断面観察により、27←28号の新旧関係と判断した。
- 覆 土 大半は27号の掘削により消失している。掘方の埋め戻し土が一部残存する程度である。
- 柱 穴 主柱穴と判断し得るものは検出されなかった。
- カ マ ド 北壁東寄りに位置する。天井・袖などは遺存しておらず、掘方のみであった。焚口・燃焼部は円形を呈し、45×35×5cmを測る。煙道部は住居壁外側に20cm張り出す。急傾斜を呈する。
- 床 残存部では厚さ5～10cmほどの貼床が施される。27号掘方掘削により、本住居跡床面も多くを削平され、部分的に遺存している程度である。
- 周 溝 残存部は全周する。20×5cmを測る。
- 遺物出土状態 平面・断面図上での本住居跡帰属と想定できるものは、1～3・9～12・15・17・18・22などである。断面図上では本住居跡の範囲内ではあるが、27号の掘方に当たる部分もあり、一概にすべてが本住居跡帰属とは言い切れない。
- 所属時期 出土土器総体での3時期区分において最古の8世紀前半段階の所産であろうか。

25号住居跡(第313図、図版381～384-2)

- グリッド 23・24-4 L・M 平面形態 方形?
 規模 (370) × (270) × 10cm 床面積
 主軸方向 N46° W 構築回数 1回
 検出状況 調査区北西隅に位置する。北・西側は調査区外周の土砂流出防止土堤である。プラン確認の精査により住居跡が検出されたため、西側を土堤幅の残存限度まで拡張したが、西半は埋設管による攪乱で、拡張部東半に床面・周溝の一部が検出されたに止まった。住居跡東側も埋設管に分断され、北西側は近世の溝により削平され、遺存状態は不良である。東側コーナー部を主体に1/4程が残存していた。
- 覆土 黒褐色土を主体とする。床面直上土にはロームブロックが若干含まれる。
- 柱穴 主柱穴と思われるピットが1基検出された。北側(コーナー寄り?)に位置し、その配置から4本主柱穴と思われる。径30×深さ55cmを測る。他の3本はその想定位置が攪乱のため深く削平されており検出されなかった。この柱穴を主柱穴と判断した場合に、住居のプランは、遺存する北東壁が北側で程なく屈曲してコーナー部になるものと思われる。
- カマド 検出されていない。おそらくは北西側調査範囲外に位置するものと思われる。
- 床 厚さ5～10cmほどの貼床が施される。住居中央部と思われる埋設管攪乱部に挟まれた範囲は顕著な硬化面が認められる。出入口からカマドに向かうラインとなろう。北東側壁沿いはやや軟弱となる。掘方深度はほぼ均等である。
- 周溝 残存部は全周する。15×10cmを測る。また、南東辺から110cmの位置に北東壁から180cmの長さで溝が配されている。間仕切り溝と称されるもので、住居周溝に接し、内側は住居中央付近で途切れる。この間仕切りが1か所であるかどうかは、遺存範囲が限られており明確ではない。
- 遺物出土状態 総点数は81点で、内訳は土器75点(縄文14点・須恵器2点・土師器59点)、土製品1点(二次利用土器片)、石器1点(剥片-縄文)、炭化物1点である。須恵器の内訳は坏・甕各1点で、土師器の内訳は坏10点、甕49点である。遺存範囲が少なく、特に遺物が集中する住居中央部が削平されているため、ごく疎らに分布するのみである。1の甕は南側に纏まる。
- 所属時期 1の甕は6世紀末～7世紀前半に比定される。本住居跡の時期もその範疇の所産と思われる。

26号住居跡(第314～317図、図版384-3～387)

- グリッド 19・20-4 S・T 平面形態 方形
 規模 540 × 530 × 25cm 床面積
 主軸方向 N16° W 構築回数 1回
 検出状況 調査区中央に位置する。被服本廠18号倉庫の床下にあたり、外壁・内部仕切り壁基礎・床下東基礎などにより削平を受け、各所で寸断されている。また、南西コーナー部から東壁中央にかけては近世の溝が走る。全体的には1/2程が失われている。
- 覆土 黒褐色土を主体とする。倉庫建設時と思われる転圧により全般的に硬く締まる。西側壁際

にはロームブロックを含む三角堆積土がみられる。

柱 穴 4本主柱穴で、北東側1本は基礎により消失したと思われる。またP4も基礎により東半を失う。規模は、P1:60×55×80cm、P3:50×50×45cm、P4:(55)×(25)×45cmをそれぞれ測る。柱間は、P1-3間:170cm、P3-4間:210cmを測り、南北方向を主軸として、縦長の長方形プランを呈すものと思われる。

その他に底面に白色粘土ブロックが検出されたビット(P6)がある。径45×10cmと浅く、粘土は厚さ5cm程で底面全体に認められた。焼土などは認められない。また、P6の北側にP3が隣接している。北半は基礎により消失する。これらビットの性格は不明である。

カ マ ド 検出されていない。北壁中央部は倉庫基礎により削平されており、この部分に設置されたものと思われる。後述のP5(貯蔵穴)との位置関係からもそれが窺える。

床 厚さ10~20cmほどの貼床が施される。主柱穴の内側は顕著な硬化面が認められる。掘方深度はほぼ均等である。

周 溝 残存部は全周する。15~20×15cmを測る。見かけ上、北東隅は幅が広いが、この部分は床面下、掘方面での検出であったためである。

貯 蔵 穴 南壁中央際位置する。円形ないしは楕円形を呈すと思われる。断面観察からは、基礎により削平された住居壁外側に広がる可能性がある。50×50×45cmを測る。南壁はその大半が消失しているが、想定ラインに接するかないしはやや張り出して構築したものと思われる。

その 他 北西隅および西壁中央付近で炭化材・焼土が検出されている。住居全域には認められず、火災ではなく、廃棄時の儀礼行為の所産かと思われる。

遺物出土状態 総点数は224点で、内訳は土器194点(縄文82点・土師器113点)、土製品6点(二次利用土器片5点・縄文4・当該時期1、焼成粘土下塊1点)、礫21点、炭化物2点である。土師器の内訳は坏19点、高坏5点、甕89点である。分布は主柱穴の内区を中心に覆土上~下層に多くがみられる。2・3はその範囲内に出土した。1の甕は北東隅床面に頸部~胴下部の1/4程が内面を上にした状態で出土した。

所属時期 出土土器は6世紀後半頃に比定される。本住居跡の時期もその範疇と思われる。

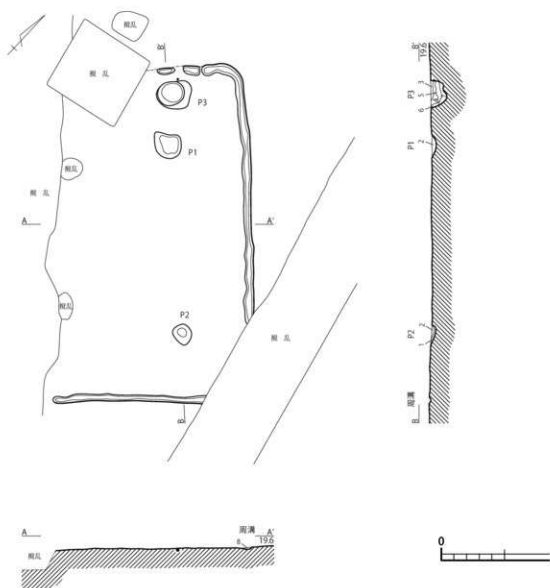
以上の住居跡の時期を整理すると以下のとおりになる。

6世紀前半	16号
6世紀後半	13・22・26号
6世紀後半~末葉	18号
6世紀後半~7世紀前半	17・21・25号
7世紀前半	19号
7世紀末葉~8世紀初頭	15号
古墳時代後期	10号
8世紀前半	28号
9世紀前半	27号

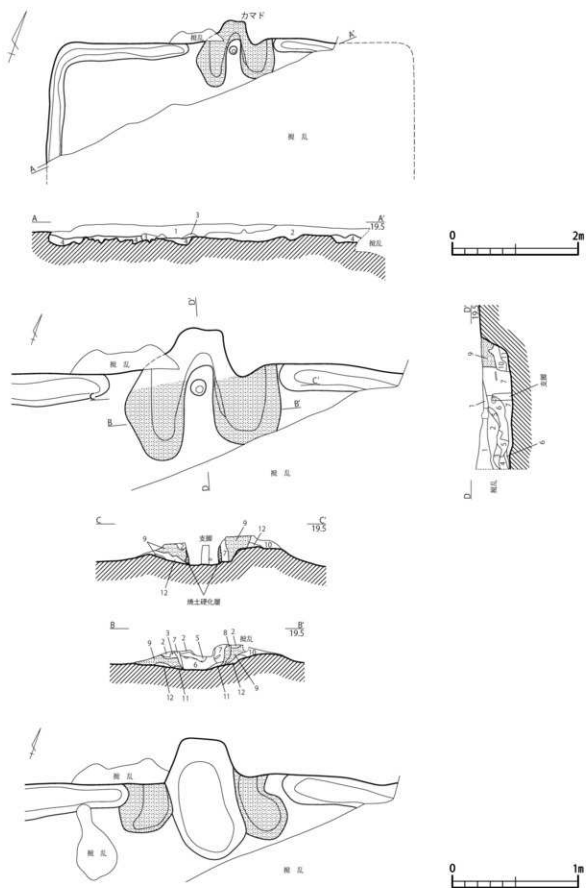
9世紀中葉～後半 23号

9世紀 14号

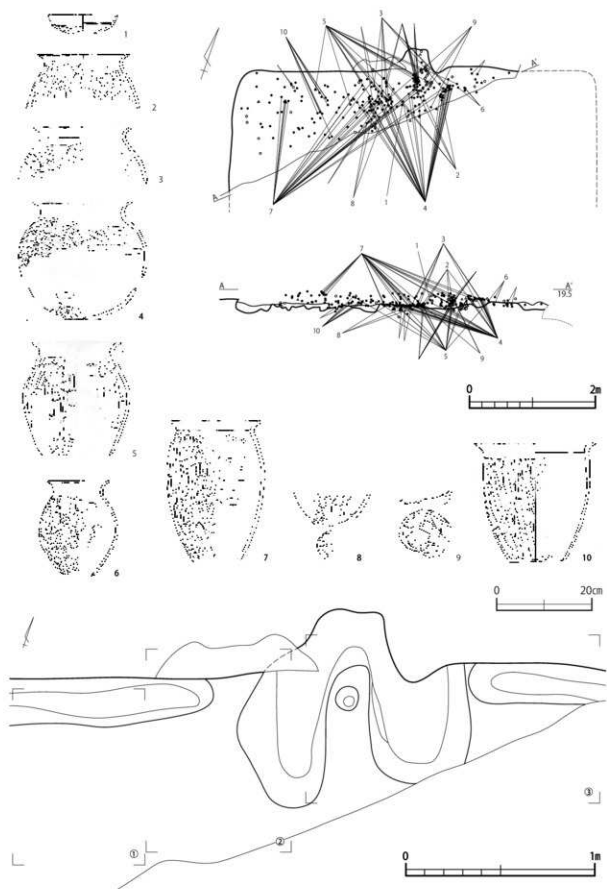
6世紀前半から9世紀にかけて、7世紀後半、8世紀後半期が空白になるが概ね1～数軒が確認される。中では6世紀後半から7世紀前半にかけては8軒が認められ、おおよそ数軒が分布していたと思われる。各時期の軒数は少ないが、本遺跡西側および道合遺跡を含め、ほぼ連続と集落が継続していたものと考えられる。



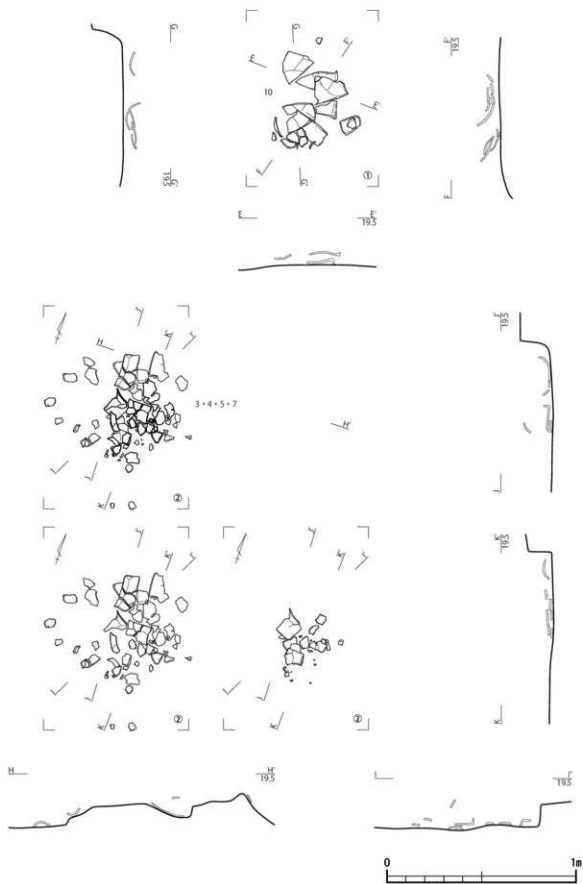
第 281 図 10号住居跡 (1/60)



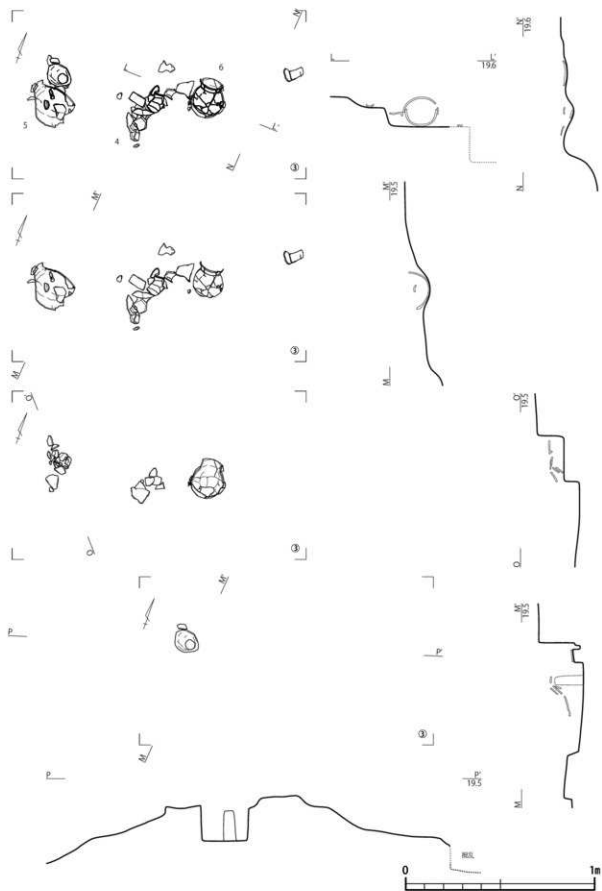
第 282 図 13 号住居跡 (1) (1/60・1/30)



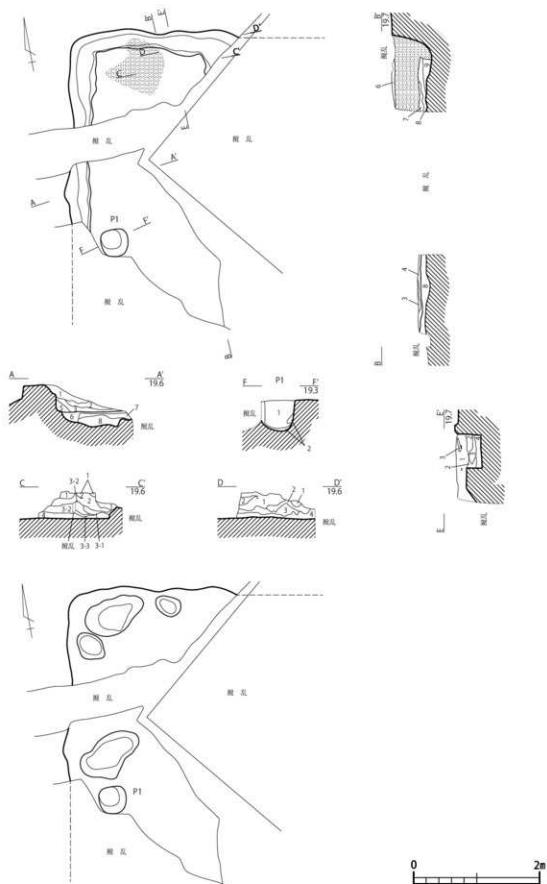
第 283 图 13 号住居跡 (2) (1/60 · 1/20)



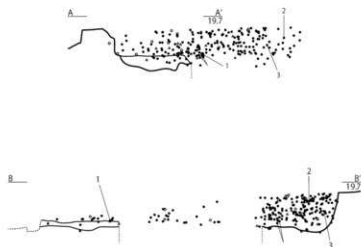
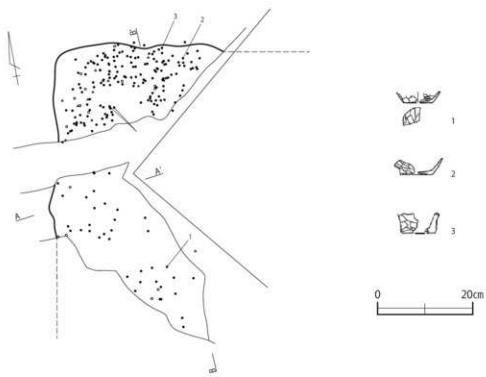
第 284 図 13 号住居跡 (3) (1/20)



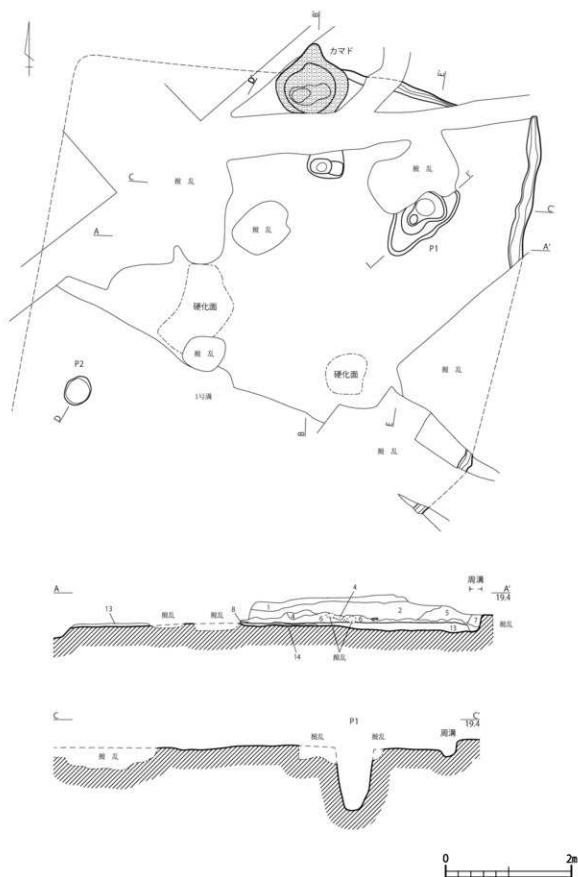
第 285 图 13 号住居跡 (4) (1/20)



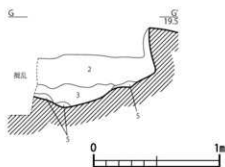
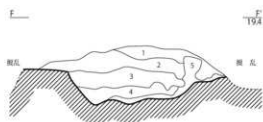
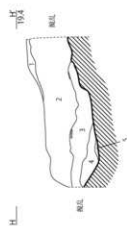
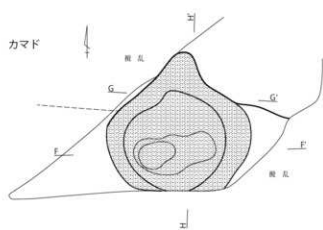
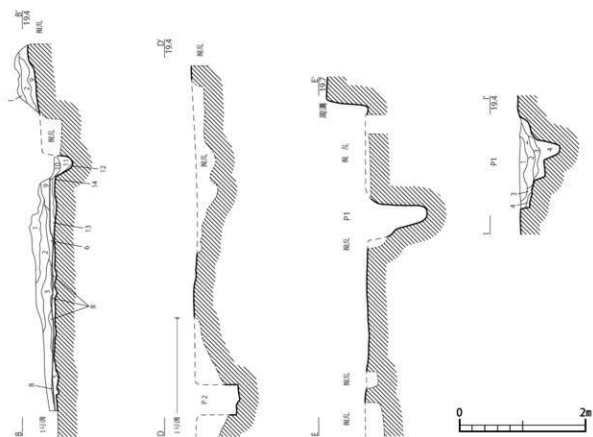
第 286 图 14号住居跡 (1) (1/60)



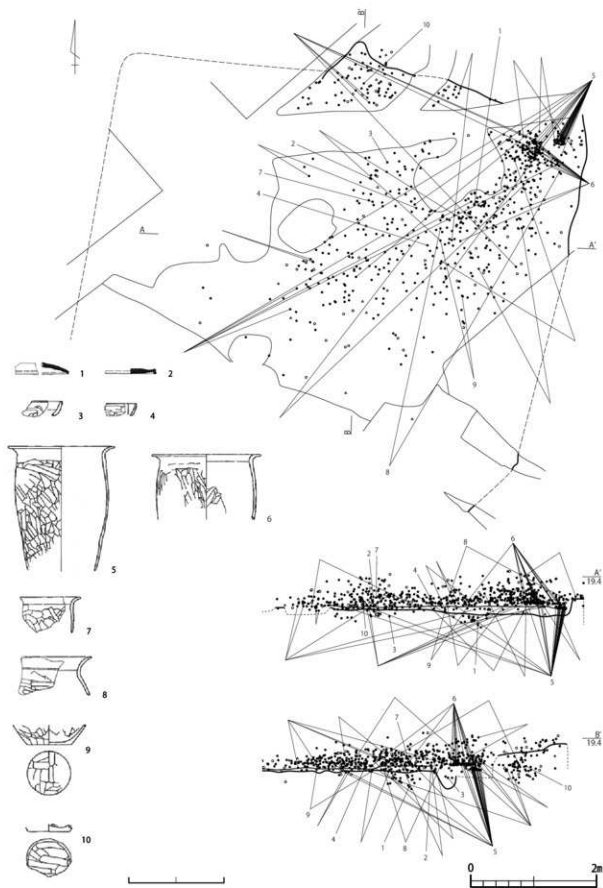
第 287 图 14 号住居跡 (2) (1/60)



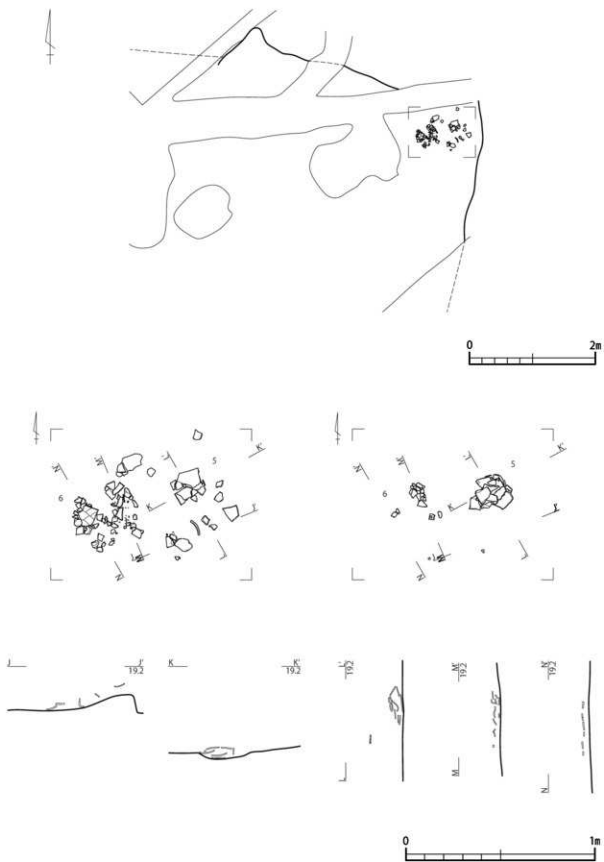
第 288 図 15 号住居跡 (1) (1/60)



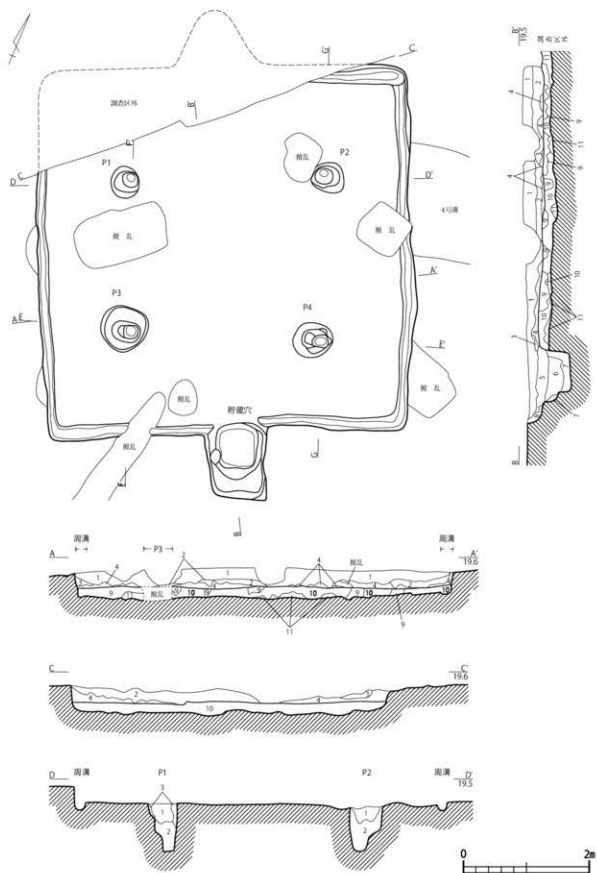
第 289 図 15 号住居跡 (2) (1/60・1/30)



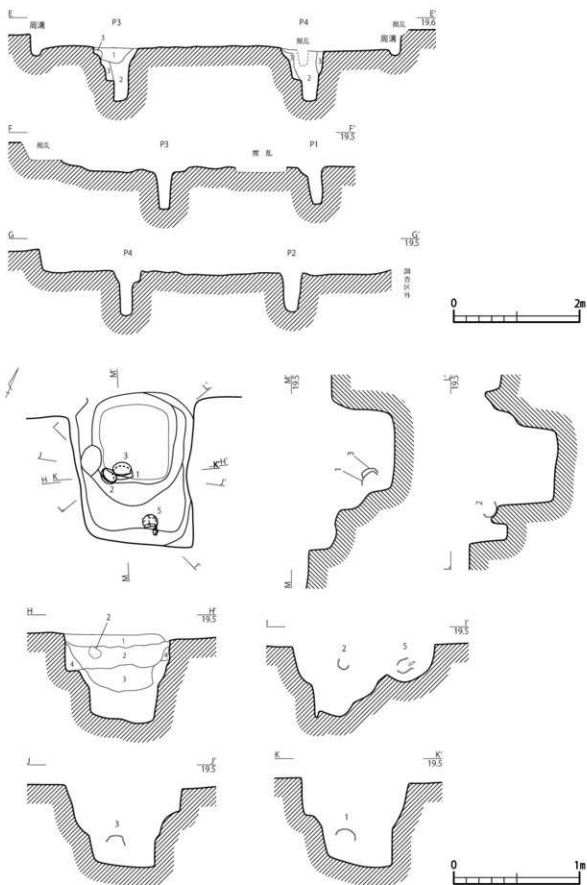
第 290 図 15号住居跡 (3) (1/60)



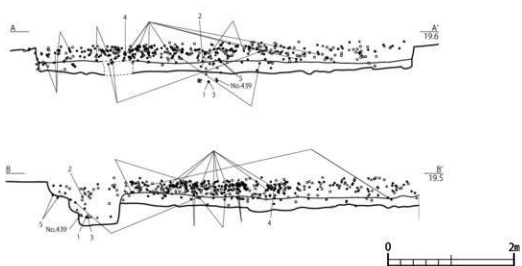
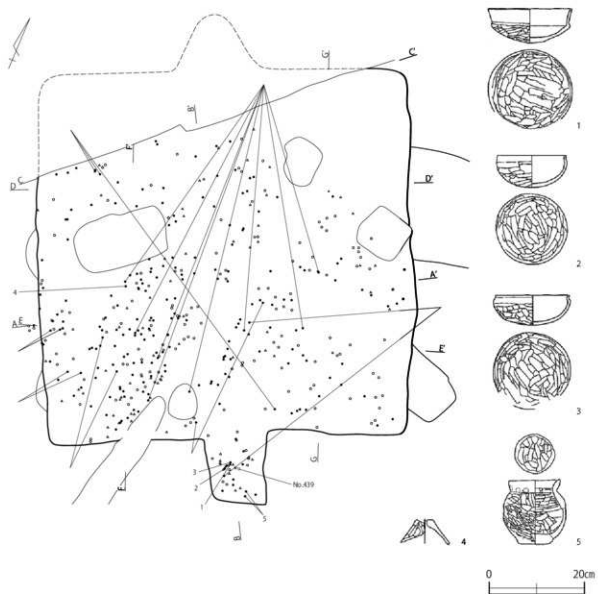
第 291 图 15 号住居跡 (4) (1/60 · 1/20)



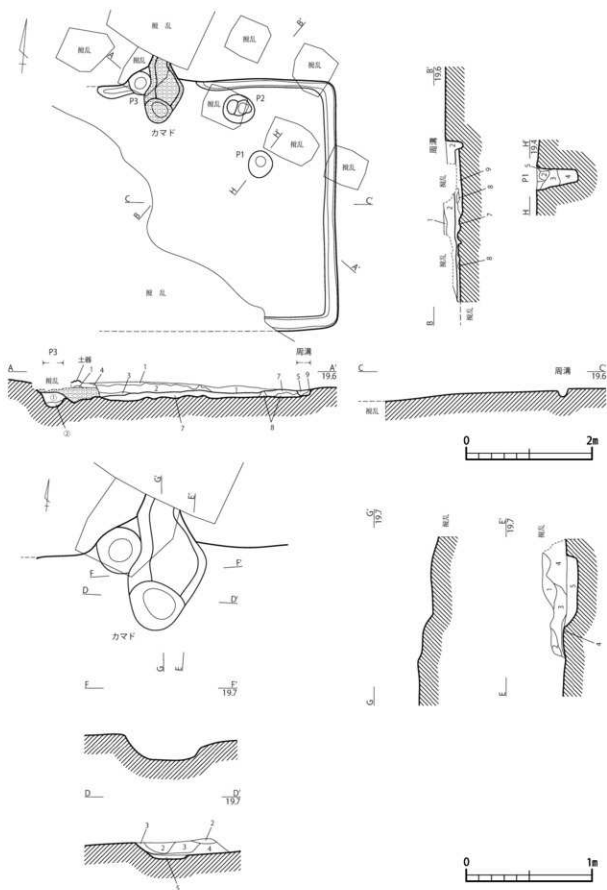
第 292 図 16号住居跡 (1) (1/60)



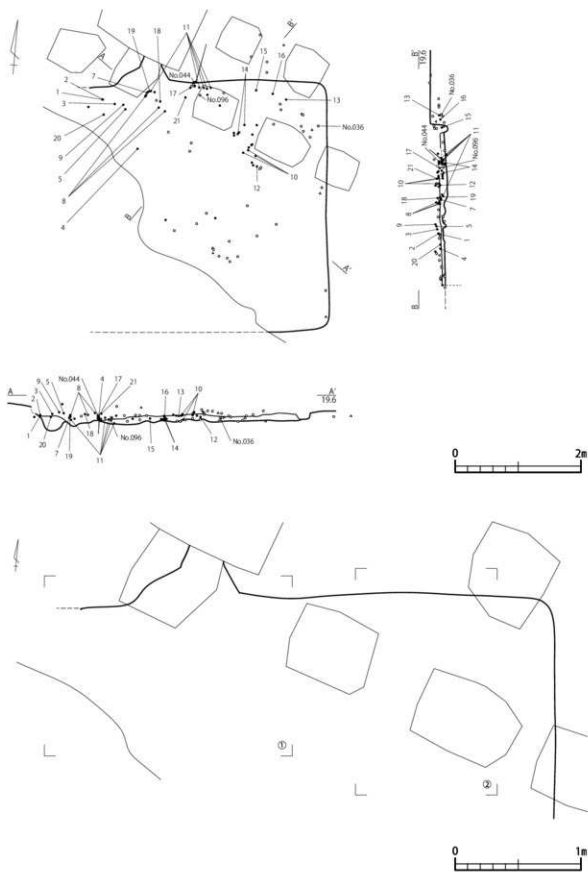
第 293 图 16 号住居跡 (2) (1/60 · 1/30)



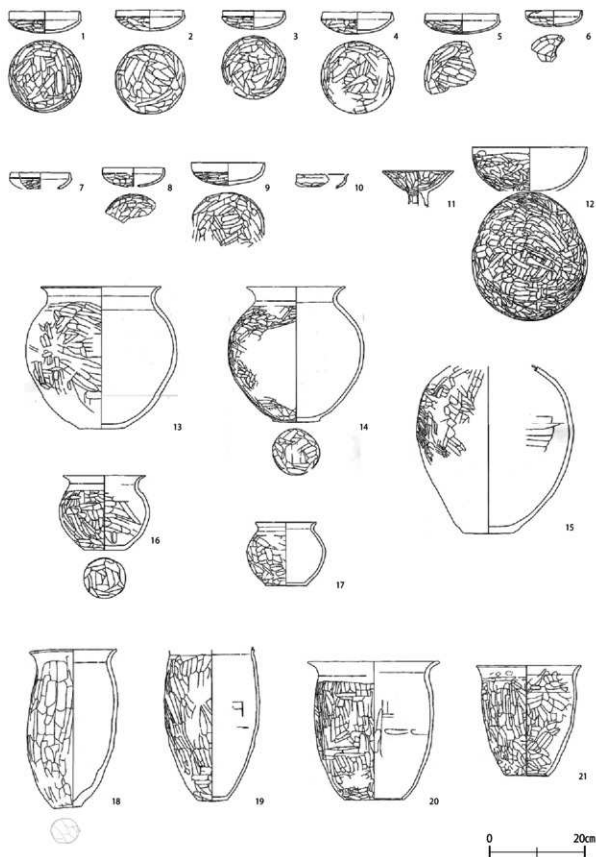
第 294 図 16 号住居跡 (3) (1/60)



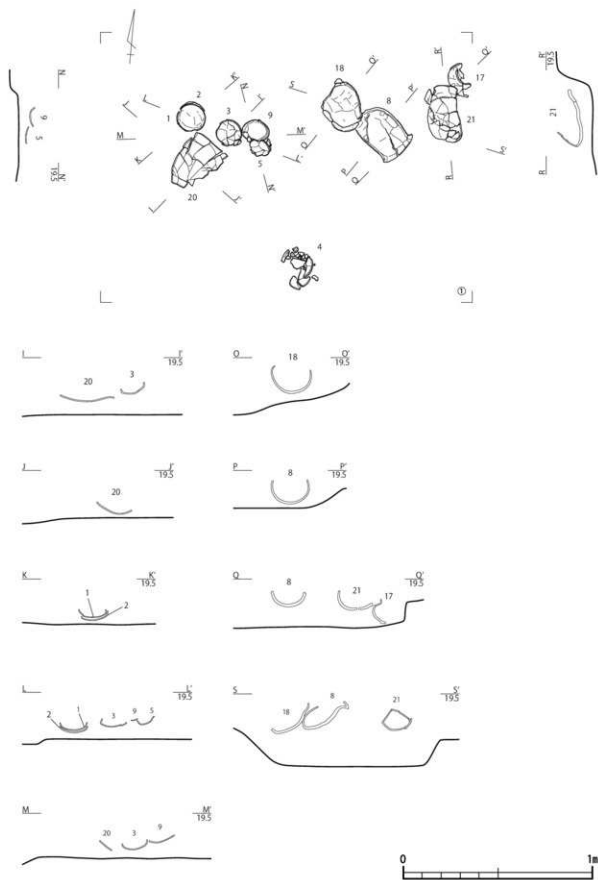
第 295 図 17 号住居跡 (1) (1/60・1/30)



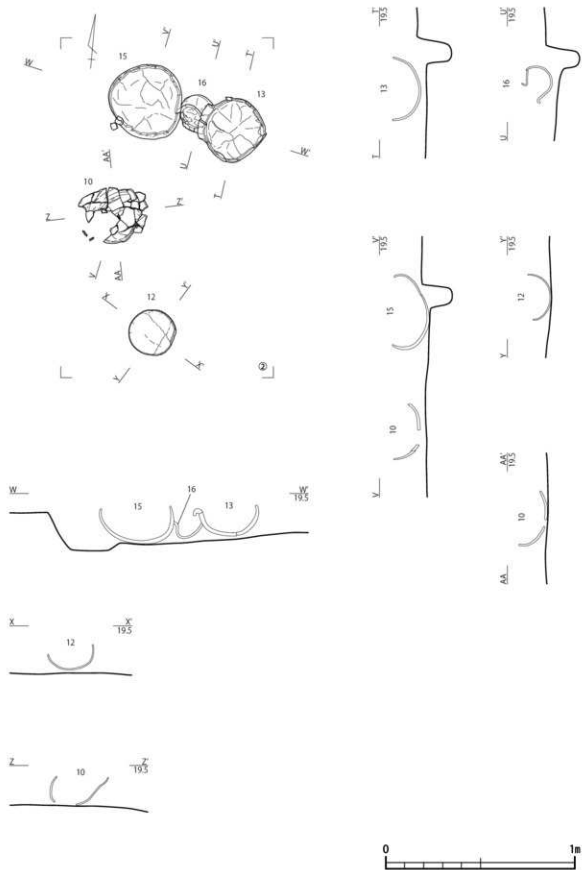
第 296 図 17 号住居跡 (2) (1/60・1/30)



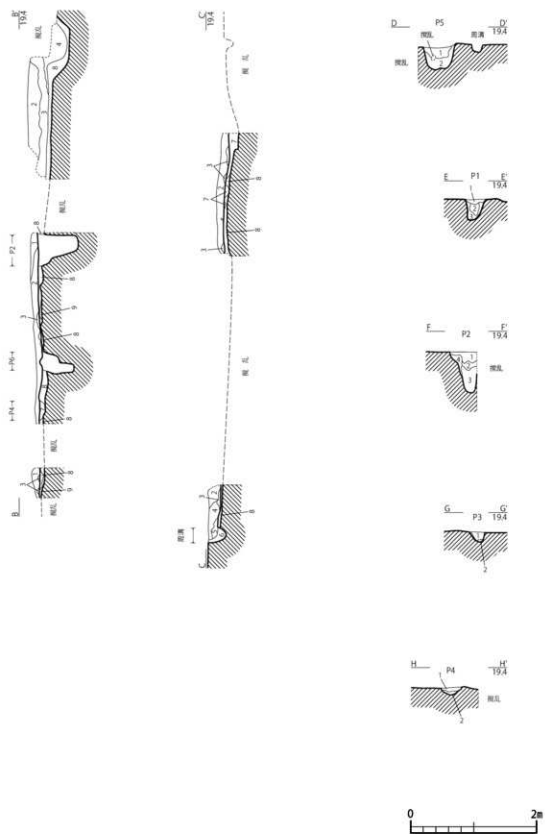
第 297 图 17 号住居跡 (3) (1/8)



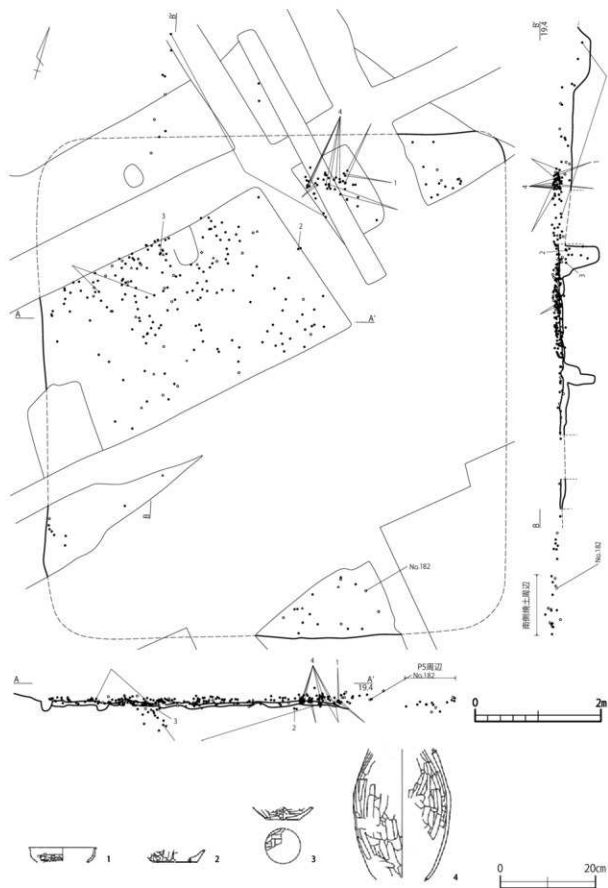
第 298 図 17 号住居跡 (4) (1/20)



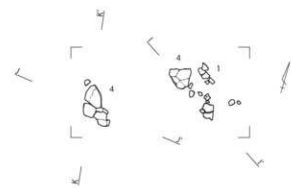
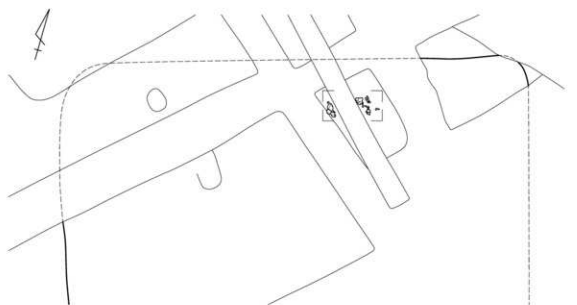
第 299 图 17 号住居跡 (5) (1/20)



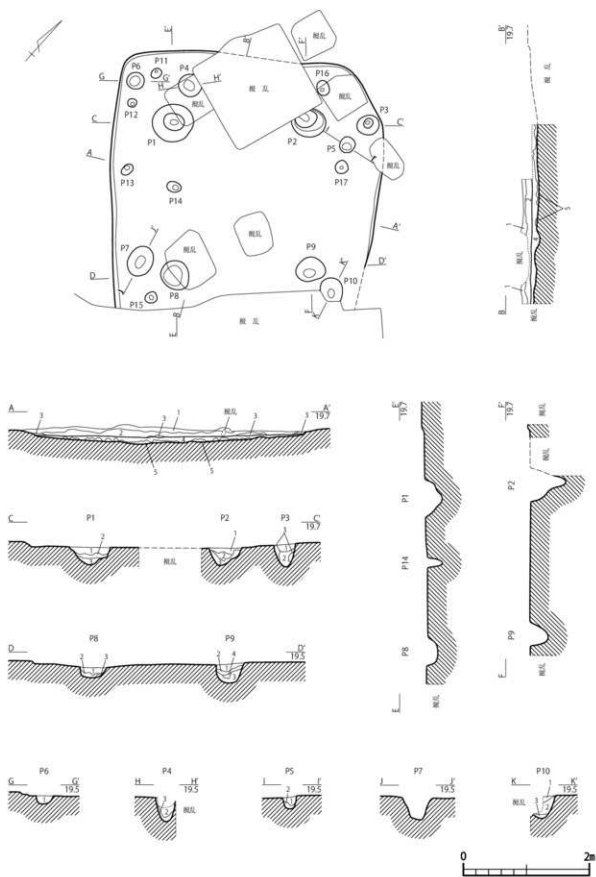
第 301 图 18 号住居迹 (2) (1/60)



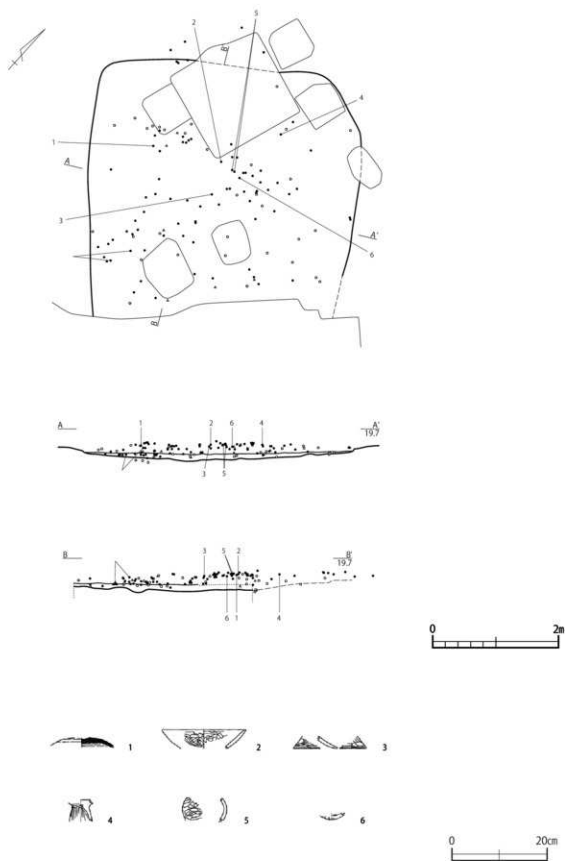
第 302 図 18 号住居跡 (3) (1/60)



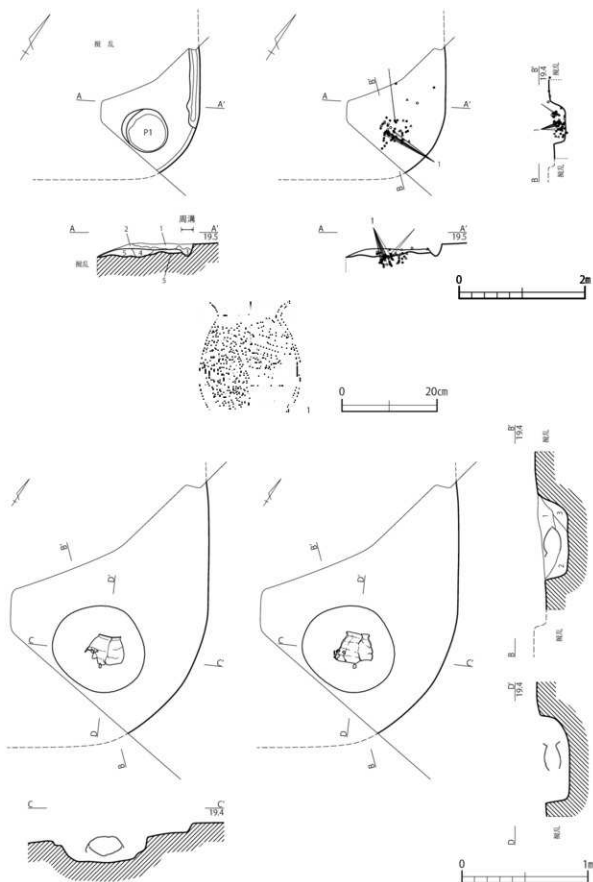
第 303 图 18 号住居跡 (4) (1/60 · 1/20)



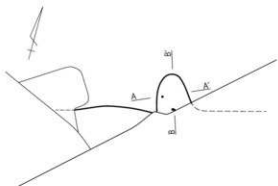
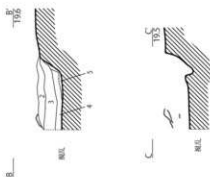
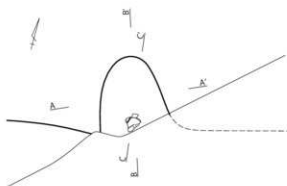
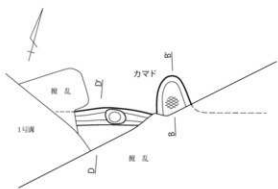
第 304 図 19号住居跡 (1) (1/60)



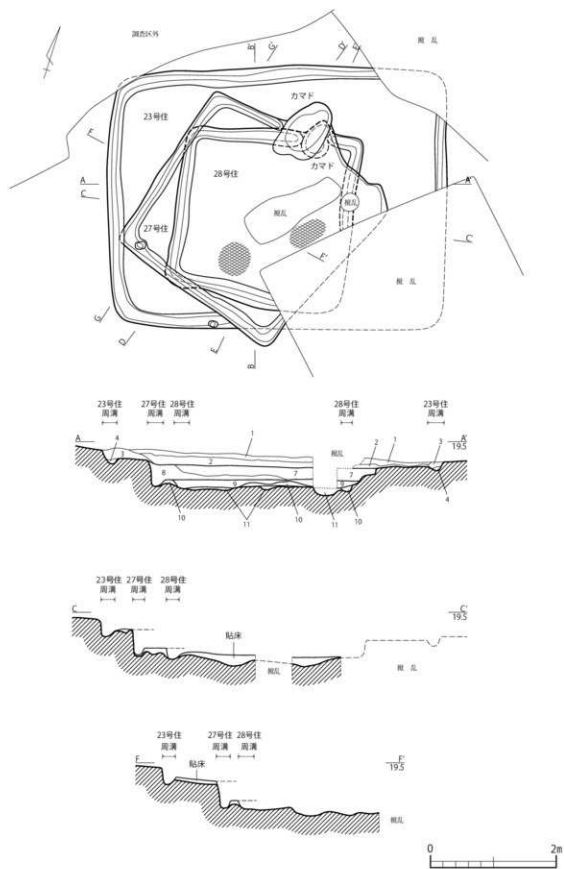
第 305 图 19 号住居跡 (2) (1/60)



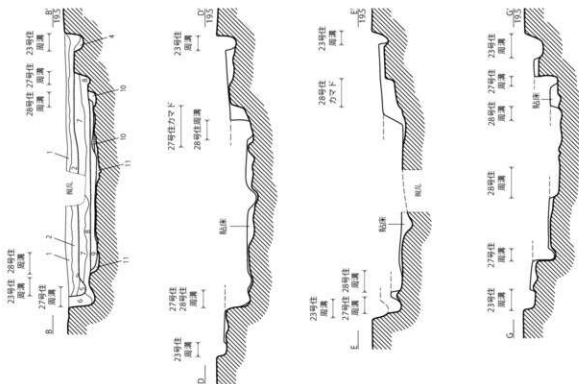
第306図 21号住居跡 (1/60・1/30)



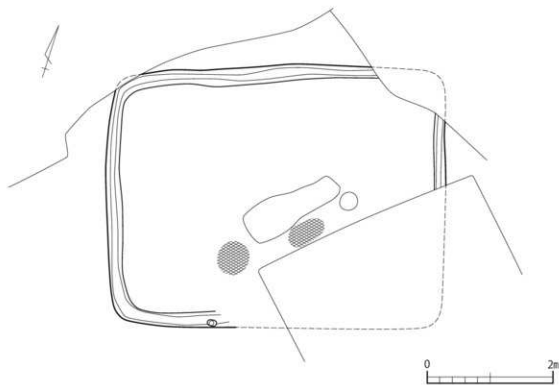
第 307 図 22 号住居跡 (1/60・1/30)



第308図 23・27・28号住居跡(1) (1/60)

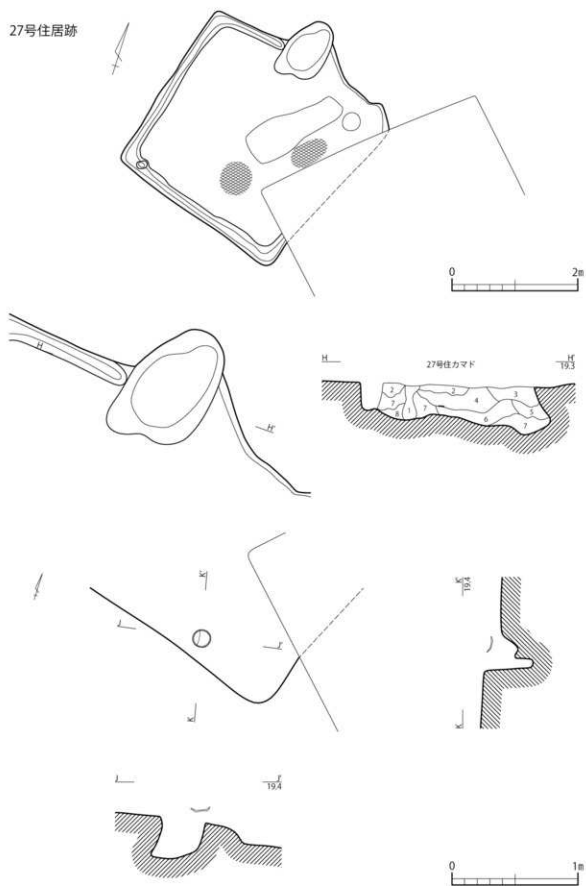


23号住居跡



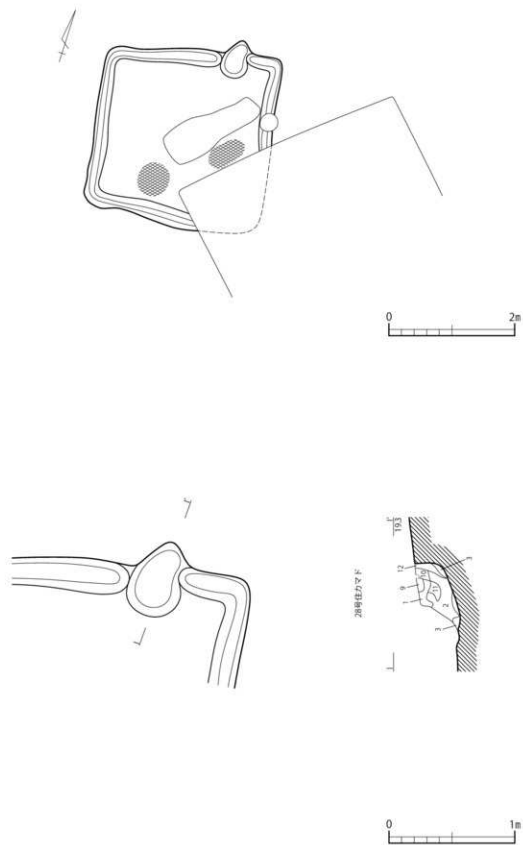
第309図 23・27・28号住居跡(2)(1/60)

27号住居跡

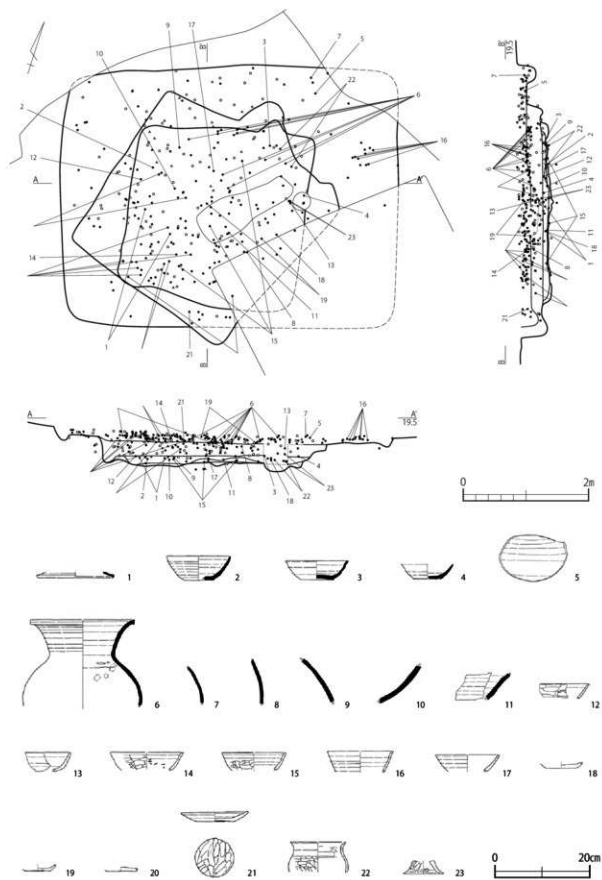


第310図 27号住居跡 (1/60・1/30)

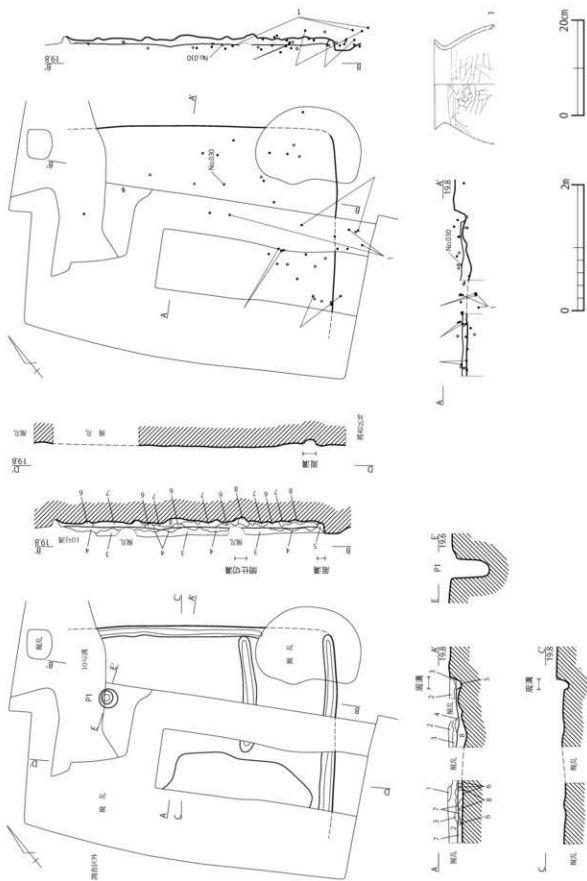
28号住居跡



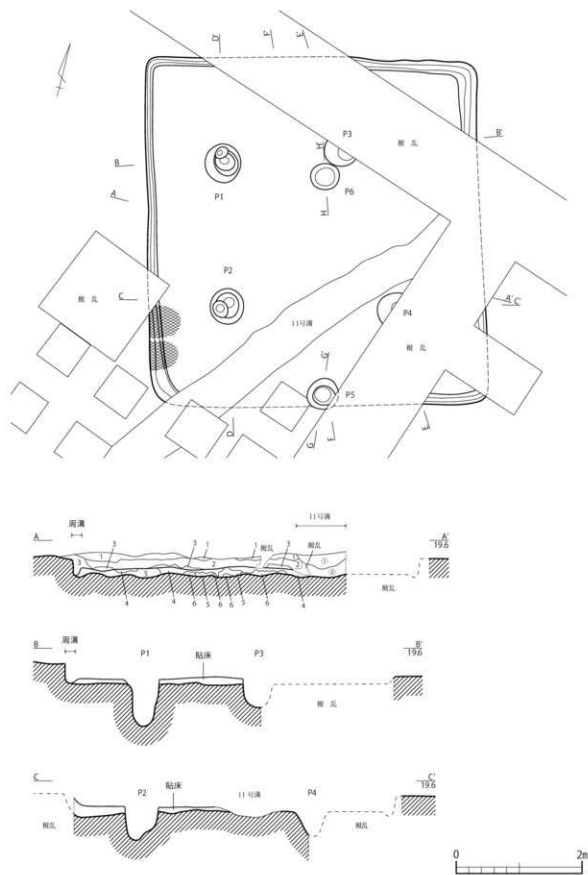
第 311 図 28 号住居跡 (1/60・1/30)



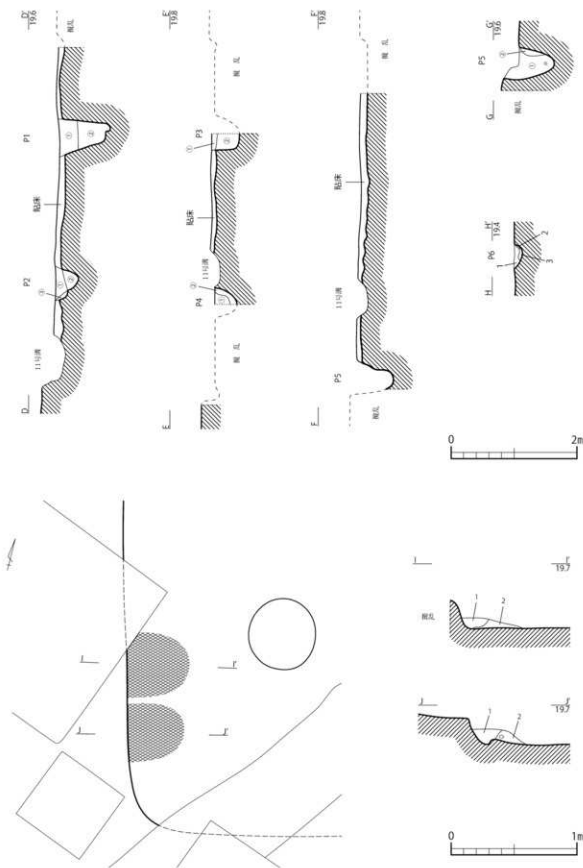
第 312 図 23・27・28 号住居跡 (3) (1/60)



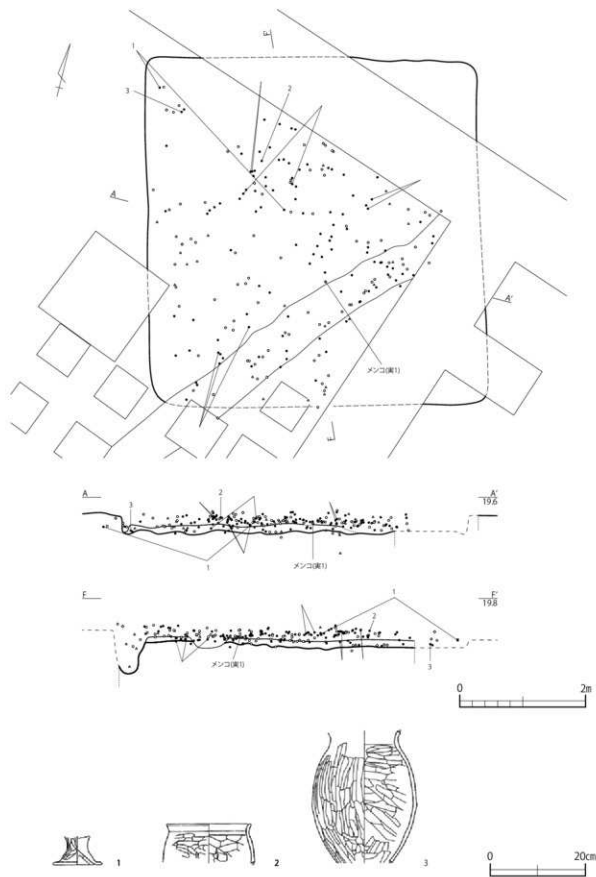
第 313 图 25号住居跡 (1/60)



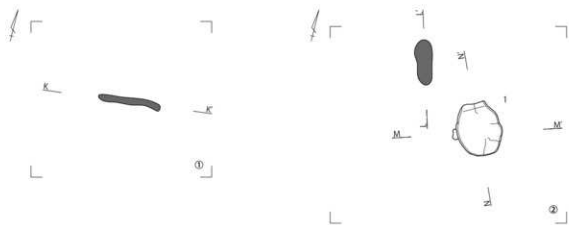
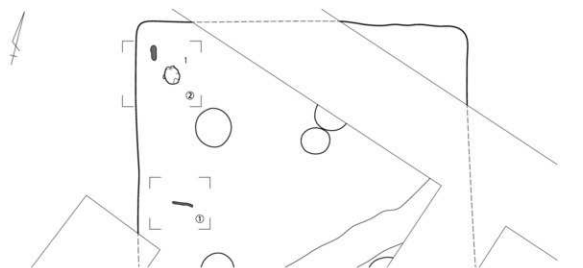
第 314 図 26 号住居跡 (1) (1/60)



第 315 图 26 号住居跡 (2) (1/60 · 1/30)



第 316 図 26 号住居跡 (3) (1/60)



第 317 图 26 号住居跡 (4) (1/60 · 1/20)

2) 遺物

今回の調査で出土した古墳時代後期～平安時代の遺物は、土器 2,409 点（須恵器 61 点、土師器 2,348 点）、土製品 38 点（支脚 4 点、二次利用土器片 11 点、焼成粘土塊 23 点）、石製品 2 点（研磨具 1 点、勾玉 1 点）である。土器の器種別内訳は、須恵器は蓋 11 点、坏 24 点、瓶 1 点、甕 25 点となる。土師器では坏 177 点、埴 1 点、皿 2 点、高坏 45 点、小壺 4 点、鉢 1 点、甕 2,090 点、台付甕 11 点、甕 13 点となる。

弥生時代・古墳時代前～中期と同様、遺構内（住居跡）からの出土が大半であった（遺構内 2,214 点、遺構外 195 点）。以下、各遺構・遺構外の遺物を概観する。個別の詳細は観察表（第 2 分冊 第 31・32 表）を参照されたい。

A 土器

・遺構内出土土器

住居跡

13 号住居跡（第 318 図 1～10、第 31 表、図版 388－2・390）

出土した当該時代の土器は 255 点で、いずれも土師器である。器種別内訳は、坏 11 点、高坏 1 点、甕 234 点、甕 9 点となる。10 点を掲載した。

1 は土師器坏である。有段口縁の須恵器模倣坏で口縁部はヨコナデ、体部以下はヘラケズリが施されるものである。口縁部は外傾する。

2～9 は土師器甕である。2・5・7・8 は長胴形態、3・4 は球胴形態、6 は小形の長胴形態である。基本的な口縁部形態は短く、くの字に外反するが、球胴形態の甕は屈曲が強い。長胴形態のものには 7 のような胴部の張りが弱いものと、2・5 のような胴上位が張るものがある。器面調整において、長胴形態のものは肩部から胴下部までタテ方向のヘラケズリがなされるが、球胴形態のものは肩部はヨコ方向で以下タテ方向のケズリとなる。2・6 は長胴形態としたが、器面調整においては肩部にヨコ方向をヘラケズリを施している。

10 は土師器甕である。口縁部の屈曲は強く、胴部は張りが弱い。底部は筒状に抜ける。

これらの土器は概ね 6 世紀後半の所産と思われる。

14 号住居跡（第 319 図 1～3、第 31 表、図版 391）

出土した当該時代の土器は 207 点で、いずれも土師器である。器種別内訳は、坏 4 点、甕 203 点である。3 点を掲載した。1～3 は甕の底部資料である。3 はやや厚手の造りである。

9 世紀代の所産と思われる。

15 号住居跡（第 319 図 1～10、第 31 表、図版 391）

出土した当該時代の土器は 696 点（須恵器 12 点、土師器 684 点）である。器種別内訳は、須恵器は蓋 5 点、坏 6 点、甕 1 点である。土師器は坏 22 点、皿 1 点、高坏 1 点、甕 659 点を数える。10 点を掲載した。

1・2 は須恵器である。1 は蓋で端部は短く、身受けのかえりはない。2 は高台付坏で、高台は低く、底部中央は膨らみ接地している。回転ヘラケズリの後、高台を貼付する。

3～10 は土師器である。3 は落合型坏で、丸味を帯びた体部から緩やかに立ち上がる。口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリがなされる。内面と外面口縁部に赤彩を施す。北区の豊島郡衛周辺にお

ける土器編年(埴田 2000)で、4期の皿Cとされるものである。4も同様であるが、やや薄手の造りである。内面に黒色塗彩がみられる。漆の可能性がある。5～10は甕である。口縁部は大きく屈曲して外反し、胴部は筒形を呈す。胴部上端はヨコ、以下斜・タテ方向のヘラケズリを施す。

1・2の須恵器は湖西窯産で、第IV期第1小期に相当しよう。8世紀初頭の所産と思われる。3・4の落合型環(皿)は7世紀末葉、甕も同じく7世紀末葉の所産と思われる。

16号住居跡(第319図1～5、第31表、図版389-2・3、391)

出土した当該時代の土器は224点(須恵器1点、土師器223点)である。器種別内訳は、須恵器は甕1点、土師器は坏9点、高坏1点、甕211点、甕1点を数える。5点を掲載した。

1～3は土師器坏である。1は須恵器模倣坏で、口縁部はやや外傾する。丸底で中央がやや突出している。器高に対する口縁部高の割合が高い。2・3は比企型坏である。2は半球状を呈し、口縁端部は緩いS字状を呈す。口縁部ヨコナデ、体部～底部はヘラケズリを施す。内面～外面口縁部に赤彩が施される。3は2に比較してやや器高が浅い。口縁端部は短くS字状に屈曲する。内外面に赤彩を施す。両者とも口縁部下、稜の部分に最大径を有し、口縁端部径はその内側になる。

4は土師器高坏の脚部である。直線的にハの字状に開く。

5は手づくねの小形土師器甕である。口縁部はくの字状に外反し、胴部は球形となる。器面は凹凸が残り、器厚は一定しない。底部は厚く台状に近い。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデがなされるが、整形時の指頭押捺痕が随所に残る。底面にはモミと思われる圧痕が認められる。なお検出時に底部が分離しており、口縁部に蓋のように被せていたとみられる状態であった。何らかの儀礼行為に伴い、底部を外したものと思われる。

以上の土器は概ね6世紀前半～第2四半期を中心とした時期に比定されると思われるが、1の模倣坏はやや古い様相を呈している。第1四半期にならうか。道合遺跡第IV次調査P-678出土の模倣坏に類似する。

17号住居跡(第320～322図1～21、第31表、図版389-1・392～394)

出土した当該時代の土器は60点でいずれも土師器であった。器種別内訳は、坏21点、高坏5点、鉢1点、甕31点、甕2点である。21点を掲載した。

1～10は土師器坏である。1～9がいわゆる須恵器模倣坏である。口縁に段をもち丸底となる。口縁部は直立するもの(1・3・6・8)、内傾するもの(2・4・5・7)、外傾気味のもの(9)などがある。概ね短い作りであるが、9はやや幅広である。体部との境の稜は1～6は明瞭で、7～9は緩い。特に9はごく低い稜でほぼ沈線化する。1・5は内面から外面口縁部に赤彩が施される。口径では14cm前後が1・2・4・5・9、13cm前後が3、12cm前後が6～8となっている。10は比企型坏である。口縁部は外傾し、S字状に屈曲する。口縁部に最大径を有す。内面～外面口縁部に赤彩を施す。

11は土師器高坏である。坏部は内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は外反する。脚部は直立する。内外面ともヘラナデ調整を施す。

12は土師器鉢で、いわゆるヘルメット型と称されるものである。口縁部は直立し、体部～底部は球形を呈す。底面は平底に近い。器面調整は坏と同様であり、口縁部ヨコナデ、体部は同心円状のヘラケズリを施す。底面は十字方向の施文である。

13～19は土師器甕である。13・14は器高≤最大径を呈す球胴形態、15が器高>最大径で胴が張る胴張形態、16・17は小形の球胴形態、18・19が器高>最大径で胴の張りが無い長胴形態となる。口縁部形態はいずれもくの字状に外反するが、球胴・胴張形態のものは屈折が強く、長胴形態のものは屈折が緩い。器面調整では、球胴・胴張形態のものは胴上部がヨコ、肩部～胴中位にかけては斜位、以下は斜・タテ方向のヘラケズリを施す。長胴形態のものは胴部全体がタテ方向のヘラケズリとなる。18は器面の凹凸が激しく、器厚も一定していない。

20・21は土師器甕である。20は口縁部が強く外反するが、21は緩い。胴部は筒状で、底部にかけてすばまる。底部は筒状に抜け、端部は面取りがなされる。器面調整は概ねタテ方向のヘラケズリである。21は内面のヘラナデが明瞭である。

以上の土器群は概ね7世紀初頭～前半に比定されると思われる。

18号住居跡(第323図1～4、第31表、図版389-4・395)

出土した当該時代の土器は256点(須恵器1点、土師器255点)である。器種別内訳は、須恵器が環で、土師器は坏11点、高坏1点、甕243点である。4点を掲載した。

1は土師器環である。比企型環で、口縁部はS字状を呈すが屈曲は緩い。底部は比較的緩い丸底となろう。内面～外面口縁部に赤彩を施す。

2～4は土師器甕である。2・3は底部資料で、立ち上がりの形状から2は長胴形態、3は胴張形態になろうか。4は胴部資料で長胴形態である。胴中位が張り、最大径を有す。タテ方向のヘラケズリが施される。

以上の土器群は概ね6世紀後半～末葉の所産と思われる。

19号住居跡(第323図1～6、第31表、図版395)

出土した当該時代の土器は84点(須恵器1点、土師器83点)である。器種別内訳は、須恵器は蓋、土師器は坏9点、高坏7点、甕66点である。6点を掲載した。

1は須恵器である。蓋の体部資料で、つまみ(擬宝珠)・端部を欠く。つまみ周縁はヘラケズリがなされる。

2～4は土師器高坏である。2は坏部資料で、開いて立ち上がる。体部はヘラミガキがなされる。3は脚部資料で、大きく開く。4は脚部資料で、ほぼ直立する。内面上端には絞りがみられる。

5・6は土師器小形甕である。5は胴部で球形を呈す。6は底部で、径は小さく上げ底状に窪む。両者とも内面に黒色付着物が認められる。

以上の土器は、須恵器が7世紀後半、土師器高坏が6世紀後半、土師器甕は7世紀前半の所産と思われる。

21号住居跡(第323図1、第31表、図版389-4・395)

出土した当該時代の土器は41点でいずれも土師器甕である。1点を掲載した。

1は口縁部がくの字状に外反し、胴部が張り、最大径が中位よりやや下位にくる下膨れに近い。タテ方向のヘラケズリがなされる。6世紀後半～7世紀前半の所産と思われる。

23・27・28号住居跡(第324図1～23、第31表、図版396)

出土した当該時代の土器は216点(須恵器35点、土師器181点)である。器種別内訳は、須恵器は蓋3点、坏12点、長頸瓶1点、甕19点で、土師器は坏44点、皿1点、高坏1点、甕126点、

台付甕8点、甕1点である。23点を掲載した。

1～11は須恵器である。1は蓋で、端部はやや内傾する。2～4は坏である。2は体部が内湾しつつ立ち上がる。黒漆と思われる顔料を塗り付けている。3も同様に塗り付けがなされている。体部が膨らみ、口縁部は外反する。4は体部が内湾しつつ立ち上がる。2～4の胎土中には海綿体骨針が含まれる。5はフラスコ形長頸瓶の胴部～胴部資料で、肩部に自然釉が掛かる。6～11は甕である。6は口縁部～胴部資料で、口縁部は外反し、端部は肥厚する。胴部径がやや小さい小ぶりの甕である。7～11は肩部・胴部資料である。9・10は外面平行叩き、内面指頭押さえが認められる。7・8・11には灰かぶりが見られる。5が湖西窯産、その他は南比企窯産と思われる。

12～20は土師器坏である。12～15は落合型坏である。口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリがなされるものである。12は体部から緩く屈曲して立ち上がる。内面～外面口縁部に赤彩を施す。13は外反して立ち上がる口縁部で、やや薄手の作りである。14・15は体部と口縁部の境はごく緩い屈曲である。16～20はいわゆるロクロ土師である。16は直線的な体部で、深い器形である。17は浅く体部はやや湾曲する。18～20は底部資料で、回転糸切りである。

21は土師器皿である。ロクロ整形で体部は直線的に開く。

22・23は土師器台付甕である。22は口縁部～胴部資料で、口縁部はコの字状を呈す。胴部は張り、肩部に最大径を有す。23は脚部資料で、八の字状に開き、端部は外反する。

以上の土器群は、12の落合型坏が8世紀前半、3の須恵器坏、ロクロ土師の坏は9世紀前葉、3より底径が小さくなる坏、21の皿は9世紀中葉～後葉の所産と思われる。

25号住居跡(第324図1、第31表、図版389-4・396)

出土した当該時代の土器は61点(須恵器2点、土師器59点)である。器種別内訳は、須恵器は坏1点、甕1点で、土師器は坏10点、甕49点である。1点を掲載した。

1は土師器甕である。胴張形態で、口縁部は短く外反し、胴中位が張る。胴上位はヨコ、以下タテ方向のヘラケズリがなされる。

6世紀末～7世紀前半の所産と思われる。

26号住居跡(第324図1～3、第31表、図版389-4・396)

出土した当該時代の土器は113点でいずれも土師器である。器種別内訳は、坏19点、高坏5点、甕89点を数える。3点を掲載した。

1は高坏である。短い脚部は中実で、八字状に開く。端部は屈折して接地面となる。

2・3は甕である。2は短い口縁部で緩く外反する。胴部の張りは弱い。胴上部はヨコ方向のヘラケズリがなされる。3は長胴形態で、胴中位が張る。胴全面タテ方向のヘラケズリがなされる。

以上の土器は6世紀後半の所産と思われる。

・遺構外出土土器(第324図、第31表、図版396)

遺構外から出土した当該時代の土器は少なく、195点(須恵器9点、土師器186点)である。器種別内訳は、須恵器は蓋2点、坏4点、甕3点で、土師器は坏17点、高坏9点、甕160点を数える。3点を掲載した。

1は須恵器坏の底部資料で、体部は直線的に立ち上がる。2は小形の土師器甕で、胴部は球形を呈し、小さい底部は上げ底気味に窪む。19号住居跡5・6と近似する。3は土師器甕で、口縁部はく

の字状に外反し、胴部は球形を呈す。

1は東金子窯産で9世紀前半～中葉、2・3は7世紀前半の所産と思われる。

B 土製品（第325図1～10、第-32表、図版397）

今回の調査で出土した当該時代の土製品は、支脚4点、焼成粘土塊25点、二次利用土器片9点である。支脚と焼成粘土塊は13号住居跡から、二次利用土器片は主に16号住居跡から出土している。

・支脚（1）

13号住居跡カマド内より出土した。使用時の状態のまま遺棄されたものと思われる。高さ16cmを測り、角柱状を呈す。ヘラ状工具による整形痕が残る。被熱による剥落がみられる。

・焼成粘土塊（2・3）

13号住居跡から24点、26号住居跡から1点が出土した。2点を掲載した。その他は細片である。

2・3とも3～4cmの大きさと、粘土を捏ねて丸めた状態のものと思われる。

・二次利用土器片（4～10）

本製品は16号住居跡から纏まって出土している。7点を掲載した。二次利用土器片の名称・分類などは、縄文時代の土製品の項で概説しており、本項では省略したい。使用された土器片はいずれも古墳時代後期の甕の胴部である。平面形態は、円形（A）が3点（4・8・9）、楕円形（B）が4点（5～7・10）である。研磨状態・研磨度では、7は整形剥離のみで、それ以外は研磨が進捗した状態を示している。

C 石製品（第325図11・12、図版397）

今回の調査で出土した当該時代の石製品は2点（勾玉、研磨具）である。

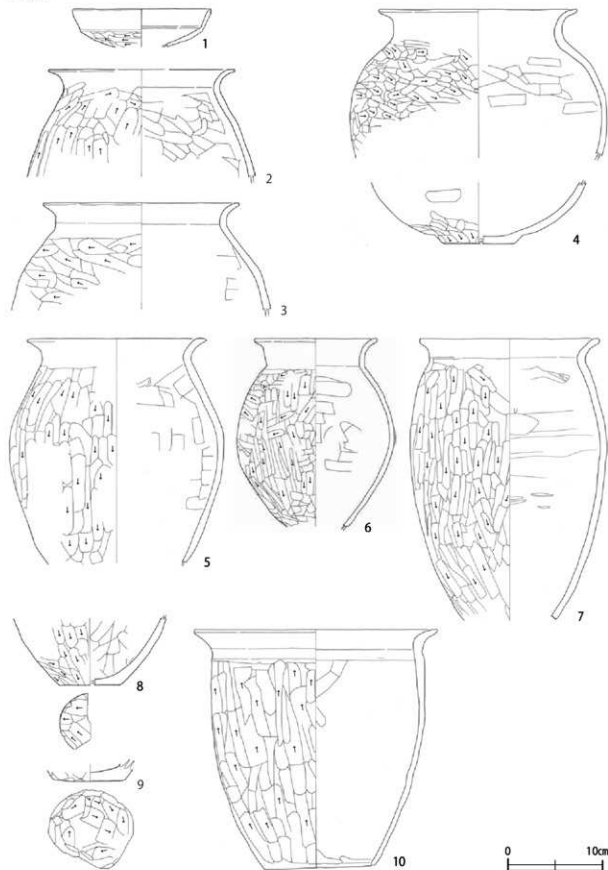
・勾玉（11）

18号住居跡床面から出土した。滑石製で小形である。全長1.35cm、厚さ0.3cm、重量0.4gを測る。頭部に0.18cmの孔を穿つ。頭～尾部にかけての湾曲は緩く、ほぼ正円周に近い。研磨は丁寧な仕上げである。

・研磨具（12）

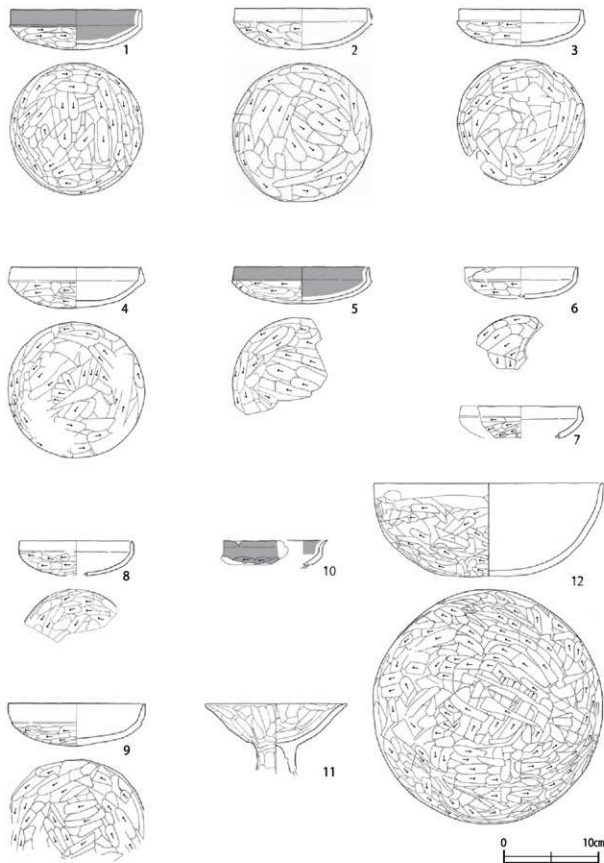
16号住居跡から出土した。三角形を呈し、薄い板状の素材を利用している。4.0×3.7×0.8cm、重量14.3gを測る。各辺に研磨痕を有す。

13号住



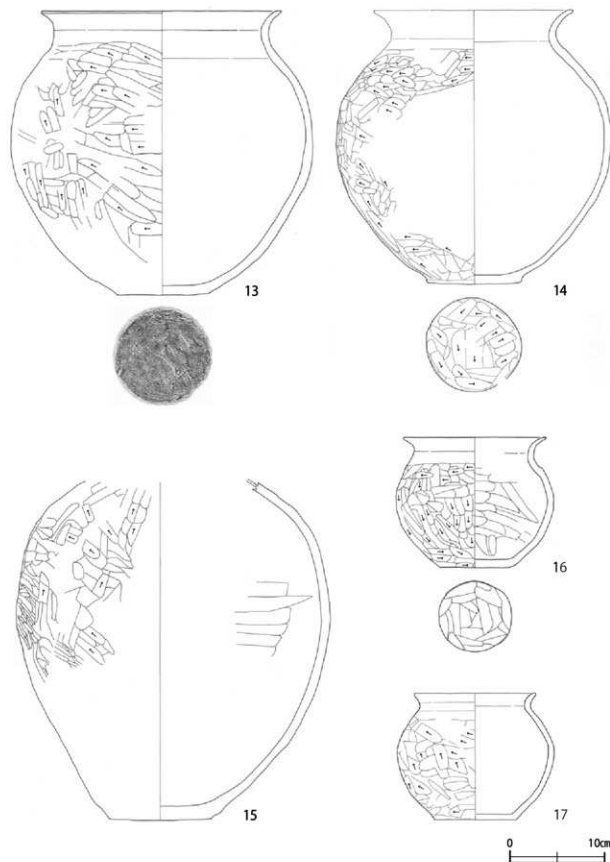
第 318 图 13 号住居跡出土土器 (1/4)

17号住

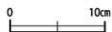
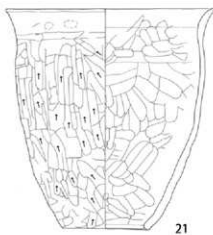
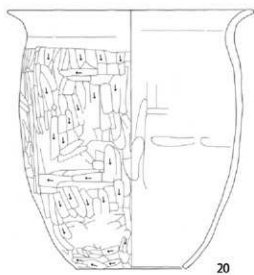
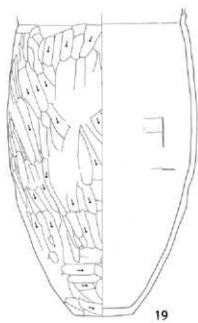
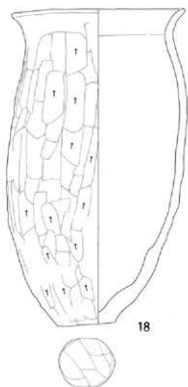


第 320 图 17 号住居跡出土土器 (1) (1/4)

17号住

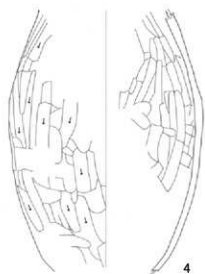
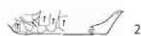


第 321 図 17号住居跡出土土器(2)(1/4)



第 322 图 17号住居跡出土土器(3)(1/4)

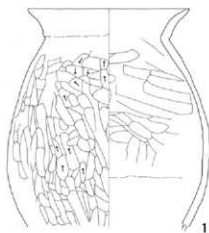
18号住



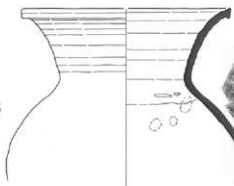
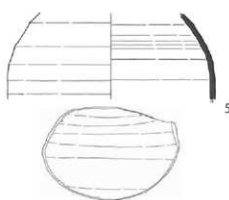
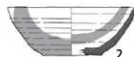
19号住



21号住

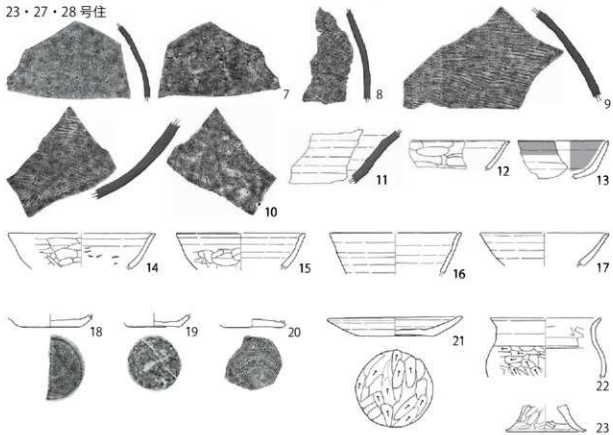


23・27・28号住

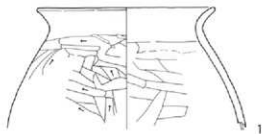


第 323 图 18・19・21・23号住居跡出土土器 (1/4)

23・27・28号住



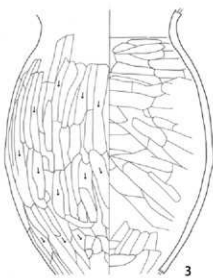
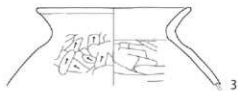
25号住



26号住

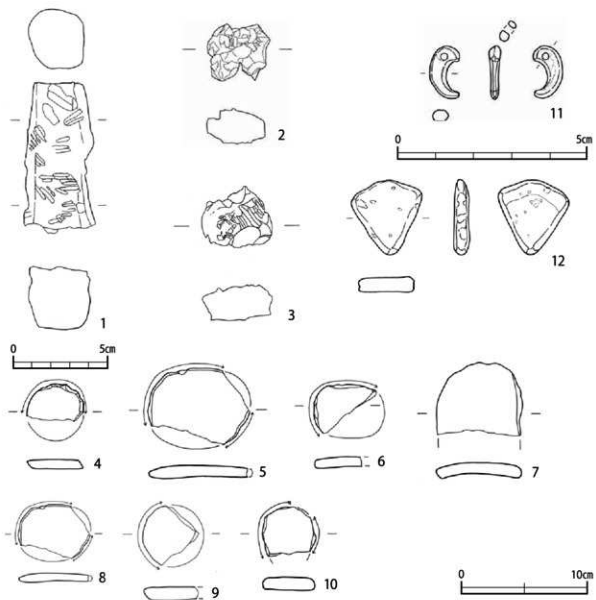


遺構外



0 10cm

第 324 图 23・25・26 号住居跡出土、遺構外出土土器 (1/4)



第 325 図 古墳～平安時代土製品・石製品 (1/4・1/2・1/1)

6 近世

今回の調査で検出された近世の遺構は、溝・道路、ピットなどである。本遺跡第Ⅱ次調査で検出された溝1条（J J J）も含めて報告したい。ピットに関しては、溝に伴うものと思われるものが大半である。なお、溝番号は「VI-1」（赤羽上ノ台遺跡第Ⅵ次調査1号溝）〜とした。第326図中の「J J J溝」は第Ⅱ次調査検出で、道合遺跡からの通し番号である。なお、遺物は道合遺跡の項で一括する。

1) 遺構

A 溝（第326・327図、図版398～400）

大小9条が検出された。1号溝は21-4M～25-5Aにかけてほぼ東西に延びる。団地建物・被服本廠建物などによる削平・攪乱が入り断続的になっているが、全長で75mが確認された。構造としては、2条の溝が両脇に配され、その間は硬質面が形成される。規模は全幅400～450cm、溝は幅100～200cm、深さ30～60cm、中央幅150～200cmを測る。中央部の硬質面は顕著で、調査区南側では幅20～25・深さ5～10cmの細い溝が確認されている。この溝は轍痕と思われる、硬質面は道路として利用された痕跡と考えられる。細い溝は大八車などの車輪の痕跡であろう。この構造を持つ溝は、道合・赤羽上ノ台遺跡全面に広がる区画溝の中でも基幹となるもので、旧板橋街道・徒小径（丹野 2015 第245図）から南北に延び、南側の台地下、北側の斜面下に続く幹線となっている。本遺構は、道合から赤羽上ノ台遺跡にかけて南北に走る基幹溝Mにほぼ直行する方向で、本調査区西側の第Ⅴ次調査（武蔵文化財研究所 2021）で検出されたSD-01・02号溝と並行している。距離にして約120mの間隔があるが、この両者によって区画された中にさらに縦横に溝を配し、小区画（畑）を形成している。本遺構は台地東端の基幹・大区画溝となっている。

2・5号溝は1号溝の東側30mにそれとほぼ並行して検出された。削平・攪乱が多く断続的である。東側延長線上には第Ⅱ次調査「J J J」があり、同一溝の可能性が高い。幅110×深さ20cmを測る。

4号溝は15ラインを東西に走る。東側は削平により確認し得なかった。幅250×深さ20cmを測り、1号溝に次ぐ規模を有す。

3号溝は4号溝に直行する方向で4Wラインを南北に走る。削平により溝底部分が検出されたのみであり、当初の規模は4号を上回るものと推測される。

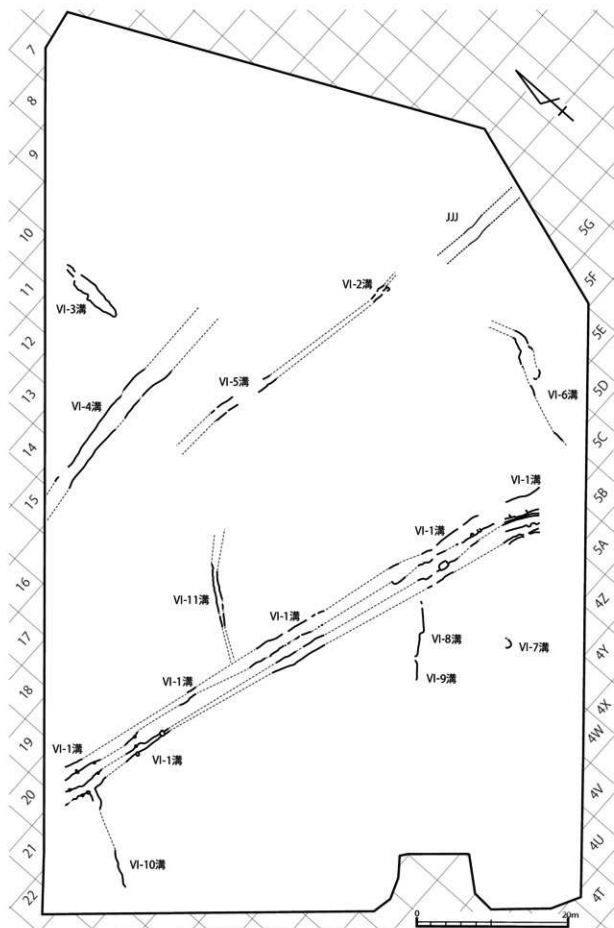
11号溝は1・5号の間を直行する方向で延びる。1号溝に接続する小区画溝と思われる。

6号溝は調査区南東側、1号溝東側で直行するものである。

8・9号溝も1号溝西側に伸びる小区画溝であろう。

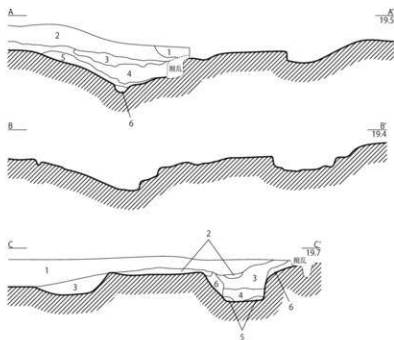
10号溝は1号溝に接続し、南西側に延びるものである。攪乱により寸断される。西側延長線上には第Ⅴ次調査（前掲）SD-10号溝がある。1号・SD-01・02号溝と直行する大区画に次ぐ中区画溝と考えられる。

以上、今回検出された溝を概観したが、道合・赤羽上ノ台遺跡全域に広がる溝は中央を走る旧板橋街道を基軸に、南北に側溝を有す道路が配され、その間を区画溝が配されている。全体的には同方向の区画にはなっておらず、地形的制約が所以と思われるが、今回の調査区においても正方形・長方形区画になろうかと思われる溝の配置はみられない。北東側の未調査区の様相が不明であり、明確ではないが、台地に広がる耕作面の区画配置に基づいた溝の掘削であろうと思われる。

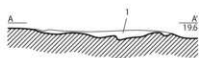


第 326 図 赤羽上ノ台遺跡第VI次調査 時代別遺構配置図(4) 近世 (1/500)

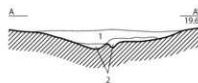
1号沟



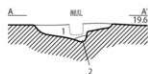
3号沟



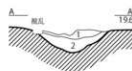
4号沟



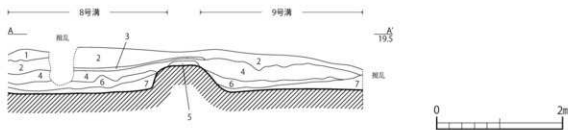
5号沟



7号沟



8·9号沟



第 327 图 近世沟 土层断面图 (1/60)

V 自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也・黒沼保子・米田恭子

1. はじめに

東京都北区の道台遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、77 号炉穴から出土した炭化材 (試料 No.1) と、298 号住居跡から出土した炭化材 (試料 No.663) と土器の内面付着炭化物 (298 号住居 24)、312 号住居跡 (No.158) と 315 号住居跡 (No.42)、324 号住居跡から出土した炭化材 (No.49) の、合わせて 6 点である。試料 No.1 および 663、298 号住居 24 については単体で放射性炭素年代測定を、312 号住居 No.158 および 315 号住居 No.42、324 号住居 No.49 についてはウィグルマッチング法を用いた放射性炭素年代測定を行なった。

77 号炉穴の炭化材 (試料 No.1: PLD-45899) は、最終形成年輪が残っていなかった。

298 号住居跡の炭化材 (遺物 No.663: PLD-48484) は、最終形成年輪が残っていなかった。

312 号住居跡の炭化材 (No.158) は、年輪数が 19 年で、最終形成年輪は残っていなかったが辺材部が残っていた。試料の採取位置は、外側から 1 年輪目 (PLD-45900)、10 年輪目 (PLD-45901)、19 年輪目 (PLD-45902) の 3 か所である。

315 号住居跡の炭化材 (No.42) は、年輪数が 15 年で、最終形成年輪は残っていなかったが辺材部が残っていた。試料の採取位置は、外側から 1 年輪目 (PLD-45903)、7 年輪目 (PLD-45904)、15 年輪目 (PLD-45905) の 3 か所である。

324 号住居跡の炭化材 (No.49) は、年輪数が 18 年で、最終形成年輪は残っていなかった。試料の採取位置は、外側から 1～2 年輪目 (PLD-48485)、10 年輪目 (PLD-48486)、18 年輪目 (PLD-48487) の 3 か所である。

測定試料の情報、調製データは第 34・35 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第 36・37 表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$) と、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示した。第 37 表にはウィグルマッチング結果を示した。第 38 表に化学処理取率を、第 328 図に単体測定試料の暦年較正結果を、第 329・330 図にウィグルマッチング結果をそれぞれ示した。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線

が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせるにより、最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して、暦年代の古い順に結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については藤尾(2013)を参照した。

77号炉穴の試料No.1 (PLD-45899) は、 ^{14}C 年代が 7435 ± 25 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が 6385-6236 cal BC (95.45%) の暦年代を示した。これは、小林(2017)を参照すると、縄文時代早期後葉に相当する。

298号住居跡から出土した炭化材(PLD-48484) は、86-93 cal AD (1.62%)、119-226 cal AD (93.62%)、227-228 cal AD (0.21%) の暦年代範囲を示した。また、同じく298号住居跡から出土した土器の内面付着炭化物は、80-99 cal AD (9.41%) および108-213 cal AD (86.04%) の暦年代範囲を示した。いずれも1世紀後半～3世紀前半で、弥生時代後期前半～末に相当する。298号住居跡から出土した土器の付着炭化物は、炭素空素安定同位体比測定の結果、概ね堅果類を含む C_3 植物由来する炭化物と推定されており、海洋リザーバー効果の影響はないと考えられる。

312号住居跡の試料No.158の最外年輪の年代は、142-223 cal AD (95.45%) で、2世紀中頃～3世紀前半の暦年代を示した。315号住居跡の試料No.42の最外年輪の年代は、138-220 cal AD (95.45%) で、2世紀前半～3世紀前半の暦年代を示した。324号住居跡から出土した炭化材(PLD-

第 34 表 単体測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-45899	遺構：77号炉穴 試料 No.1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48484	遺構：298住 遺物 No.663	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48488	遺構：298住 遺物 No.24（台付費）	種類：土器付着物（内面・おこげ） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

第 35 表 ウィグルマッチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理
PLD-45900	遺構：312号住居跡 遺物 No.158 種類：炭化材 試料の性状：辺材部 年輪数：19年 状態：dry	採取位置：外側から1年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45901		採取位置：外側から10年輪	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45902	遺構：315号住居跡 遺物 No.42 種類：炭化材 試料の性状：辺材部 年輪数：15年 状態：dry	採取位置：外側から19年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45903		採取位置：外側から1年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45904		採取位置：外側から7年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-45905	遺構：324号住居跡 遺物 No.49 種類：炭化材 年輪数：18年輪 状態：dry	採取位置：外側から15年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48485		外側から1-2年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48486		外側から10年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48487	遺構：324号住居跡 遺物 No.49 種類：炭化材 年輪数：18年輪 状態：dry	外側から18年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48487		外側から18年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

第36表 単体測定試料の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年年代範囲	2σ暦年年代範囲
				PLD-45899 77号穴 No.1	-23.58 \pm 0.26
PLD-48484 298住 No.663	-26.63 \pm 0.11	1880 \pm 21	1880 \pm 20	128-195 cal AD (62.09%) 198-205 cal AD (6.18%)	86-93 cal AD (1.62%) 119-226 cal AD (93.62%) 227-228 cal AD (0.21%)
PLD-48488 298住 No.24	-24.99 \pm 0.11	1898 \pm 20	1900 \pm 20	121-204 cal AD (68.27%)	80-99 cal AD (9.41%) 108-213 cal AD (86.04%)

第37表 312号・315号・324号住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定、
暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年年代範囲	2σ暦年年代範囲
				PLD-45900 312住 No.158 外側から1年輪目	-23.89 \pm 0.29
PLD-45901 312住 No.158 外側から10年輪	-26.01 \pm 0.28	1893 \pm 20	1895 \pm 20	123-204 cal AD (68.27%)	82-97 cal AD (4.28%) 112-214 cal AD (89.17%)
PLD-45902 312住 No.158 外側から19年輪目	-24.12 \pm 0.31	1878 \pm 20	1880 \pm 20	129-146 cal AD (17.98%) 153-195 cal AD (43.03%) 199-206 cal AD (7.25%)	89-91 cal AD (0.49%) 121-226 cal AD (94.82%) 227-228 cal AD (0.13%)
			最外年輪の年代	158-187 cal AD (35.11%) 201-219 cal AD (33.16%)	142-223 cal AD (95.45%)
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年年代範囲	2σ暦年年代範囲
				PLD-45903 315住 No.42 外側から1年輪目	-23.59 \pm 0.35
PLD-45904 315住 No.42 外側から7年輪目	-25.60 \pm 0.40	1889 \pm 21	1890 \pm 20	125-204 cal AD (68.27%)	82-97 cal AD (4.96%) 113-218 cal AD (90.49%)
PLD-45905 315住 No.42 外側から15年輪目	-24.68 \pm 0.39	1876 \pm 19	1875 \pm 20	129-144 cal AD (1.661%) 154-194 cal AD (43.27%) 199-207 cal AD (8.39%)	122-226 cal AD (95.24%) 227-228 cal AD (0.21%)
			最外年輪の年代	157-191 cal AD (41.48%) 199-217 cal AD (26.79%)	138-220 cal AD (95.45%)
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年年代範囲	2σ暦年年代範囲
				PLD-48485 324住 No.49 外側から1～2年輪目	-27.69 \pm 0.16
PLD-48486 324住 No.49 外側から10年輪目	-25.60 \pm 0.15	1879 \pm 20	1880 \pm 20	129-146 cal AD (18.51%) 153-195 cal AD (43.53%) 199-205 cal AD (6.23%)	88-92 cal AD (1.04%) 120-226 cal AD (94.41%)
PLD-48487 324住 No.49 外側から18年輪目	-27.12 \pm 0.15	1884 \pm 21	1885 \pm 20	127-204 cal AD (68.27%)	84-95 cal AD (3.08%) 117-222 cal AD (92.37%)
			最外年輪の年代	159-189 cal AD (34.68%) 201-222 cal AD (33.59%)	139-225 cal AD (95.45%)

48485 ~ 48487) の最外年輪の年代は、139-225 cal AD (95.45%) で、2 世紀前半 ~ 3 世紀前半の暦年代を示した。これらはいずれも弥生時代後期後半 ~ 末に相当する。

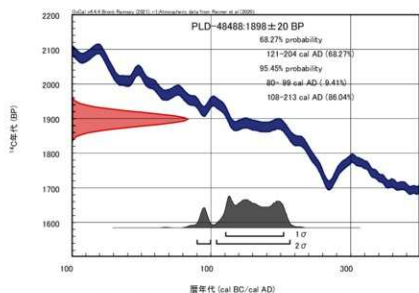
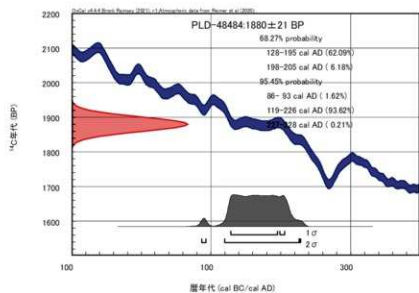
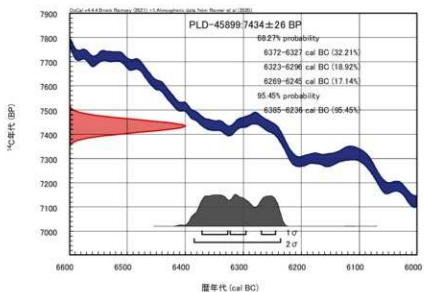
なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回、年代測定を行なった木材は最終形成年輪が残っていないため、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、実際に木が枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43(2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 藤尾慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—. 263p, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第 38 表 化学処理収率

	AAA 処理前重量	AAA 処理後重量	回収率	CO ₂ ガス化重量	炭素含有量	炭素含有率	分取炭素量
PLD-45899	38.92mg	20.28mg	52.11%	5.28mg	3.27mg	61.93%	1.10mg
PLD-45900	49.04mg	30.81mg	62.83%	5.88mg	3.79mg	64.46%	1.10mg
PLD-45901	15.05mg	10.09mg	67.04%	5.63mg	3.65mg	64.83%	1.10mg
PLD-45902	29.24mg	19.42mg	66.42%	5.41mg	3.49mg	64.51%	1.10mg
PLD-45903	41.07mg	3.77mg	9.18%	3.77mg	2.33mg	61.80%	1.10mg
PLD-45904	12.44mg	5.43mg	43.65%	5.43mg	3.42mg	62.98%	1.10mg
PLD-45905	17.15mg	12.16mg	70.90%	5.47mg	3.55mg	64.90%	1.10mg
PLD-48485	39.45mg	18.16mg	46.03%	5.41mg	3.45mg	63.78%	1.10mg
PLD-48486	13.34mg	8.18mg	61.32%	5.30mg	3.36mg	63.43%	1.10mg
PLD-48487	19.93mg	13.06mg	65.53%	5.31mg	3.39mg	63.76%	1.10mg
PLD-48484	15.88mg	10.24mg	64.48%	5.36mg	3.42mg	63.75%	1.10mg
PLD-48488	226.83mg	59.16mg	26.08%	5.71mg	3.52mg	61.60%	1.10mg

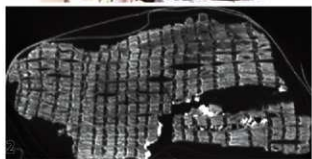


第 328 図 単体測定試料の暦年較正結果



1

1. 312号住居 No.158 試料採取位置
(PLD-45900～PLD-45902) (ピンは5年間隔)

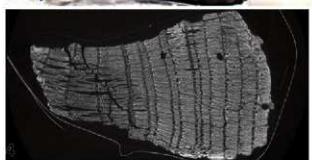


2. 312号住居 No.158 X線CT画像
(PLD-45900～PLD-45902)



3

3. 315号住居 No.42 試料採取位置
(PLD-45903～PLD-45905) (ピンは5年間隔)

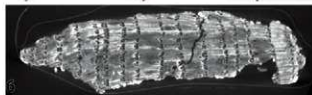


4. 315号住居 No.42 X線CT画像
(PLD-45903～PLD-45905)



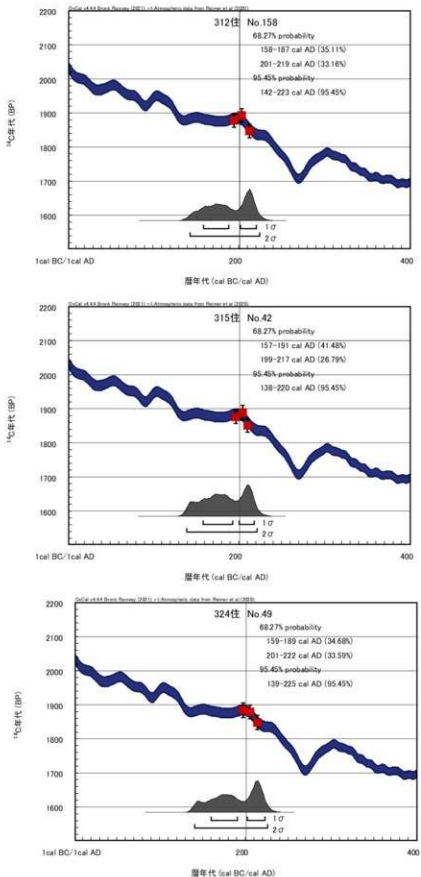
5

5. 324号住居 No.49 試料採取位置
(PLD-48485～PLD-48487) (ピンは5年間隔)



6. 324号住居 No.49 X線CT画像
(PLD-48485～PLD-48487)

第329図 ウィグルマッチングを行なった試料



第 330 図 ウィグルマッチングの結果

2. 北区道合遺跡出土土器の残存脂質分析

宮内佳樹・宮内信雄（東京大学総合研究博物館）・堀内晶子（国際基督教大学）

1. はじめに

過去の環境を推定する方法として、土壌に残存した有機物質、特に脂質を分析する手法が知られている。古代人の食材は、土壌中の微生物や酸性土壌によって分解されるため、貝塚のように動物遺体が大量に集積された遺構、焼骨や炭化種子といった安定な状態の遺物から推定されてきた。近年、土器で調理した食材中の有機物が土器胎土に浸透し、雨水などに洗い流されることなく残存していることがわかってきた。不飽和脂肪酸やグリセリドなどは不安定で分解されやすいが、残存する脂質には、バイオマーカーとして利用できる物質も多く含まれる。

ここでは、北区道合遺跡から出土した土器胎土と付着炭化物を試料として用いた。本稿では、これらに残存する脂質組成をガスクロマトグラフ質量分析法（GC-MS）で測定し、バイオマーカー分析を行い、同時に、主要な脂肪酸であるパルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成（ $\delta^{13}\text{C}_{16:0}$ 、 $\delta^{13}\text{C}_{18:0}$ ）を燃焼炉付ガスクロマトグラフ質量分析法（GC-IRMS）で分析し、炭化物の起源推定を行った。

2. 試料と分析方法

分析対象は、東京都北区道合遺跡から出土した弥生時代後期の土器（298号住居24）及び、この土器の内面底部に付着した炭化物である（第39表）。

第39表 分析試料一覧

遺跡・遺構名	試料ID	種別	部位	時期
道合遺跡・298住	TKMC-225	土器24胎土	内面底部	弥生時代後期
道合遺跡・298住	TKMC-225a	土器24付着炭化物	内面底部	弥生時代後期

土器付着炭化物の精製にあたっては、伝統的なAAA処理（Acid—Alkali—Acid）法を用いた。脂質の抽出にあたっては、Correa-Ascencio and Evershed (2014) と Papakosta et al. (2015) を参考に改良した直接メチル化脂質抽出分析法と Evershed et al. (1990)、Evershed et al. (1994) などを参考に、すでに確立している全脂質抽出（Total Lipid Extraction; TLE）法を用いた。手順は以下のとおりである。

【AAA処理法】

1. 土器付着炭化物を試験管に入れ、アセトンを加え、超音波洗浄機で5分間振とう。
2. 土壌などの不純物とともに、上澄みをピペットで採取して取り除く。
3. 再度、アセトンを加えて、超音波洗浄機で5分間振とう。上澄みが透明になるまで、この操作を繰り返す。
4. アセトン洗浄が終了した後に、試験管に、1N HClを加えて、80℃で1時間加温する。同位体組成の異なる炭酸塩などの不純物を溶解させて、試料から除去する。鉄を含む場合には、薄い黄色に着色するので、加温後の上澄みが無色になるまで、80℃ 1N HClでの加温処理を繰り返す。

- HCl 処理が終了した後に、試験管に、1N NaOH を加えて、80℃で1時間加温する。土壌起源のフミン酸などの腐植物質を溶解させて、試料から除去する。加温後の上澄みが無色になるまで、80℃ 1N NaOH での加温処理を繰り返す。
- NaOH 処理が終了した後に、試験管に、1N HCl を加えて、80℃で1時間加温する。この操作を3回繰り返し、塩基成分を中和する。
- HCl 処理が終了した後に、試験管に、超純水を加えて、80℃で1時間加温する。pH 試験紙で試験管内の水溶液の pH を確認しつつ、この操作を5回繰り返し、土器付着炭化物から HCl を取り除く。
- AAA (Acid - Alkali-Acid) 処理終了した試料を乾燥させる。
- AAA 処理済みの試料を錫箔に詰めて、電気炉加熱式安定同位体比質量分析装置 (EA-IRMS) で、炭素・窒素安定同位体分析組成を測定。
測定は東京大学総合研究博物館タンデム加速器分析室 (MALT) に設置した分析装置を用いた。

【直接メチル化脂質抽出分析法】

- 土器胎土、及び、内面土器付着物試料を試験管に入れ、メタノール 2mL を加え、超音波洗浄機で15分間振とう後、さらに 200 μ L の硫酸を加え、70℃で4時間加温する。
- メタノール溶液中の脂質を n-ヘキサン溶液で抽出し、ヘキサン層を新たな試験管に分離する。この操作を3回繰り返す。
- ヘキサン溶液に固体炭酸カリウムを加え、中和する。
- 中和したヘキサン溶液を、窒素気流中でおだやかに蒸発乾固させ、残存脂質を得る。
- 抽出した脂質に、内部標準として C₃₄ アルカンを加え、測定前に N,O-Bis (trimethylsilyl) trifluoroacetamide (BSTFA) 溶液でトリメチルシリル化 (TMS) 化し、試料溶液とする。
- 水素炎イオン化型検出器 (FID) 付ガスクロマトグラフ分析装置で脂質組成と含有量を確認する。
- GC-MS で、脂質組成を測定する。
- GC-C-IRMS で、パルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成 ($\delta^{13}\text{C}_{160}$ (‰)、 $\delta^{13}\text{C}_{180}$ (‰)) を測定する。
測定は東京大学総合研究博物館タンデム加速器分析室 (MALT) に設置した分析装置を用いた。

【全脂質抽出分析法】

- 土器胎土、及び、内面土器付着物試料を試験管に入れ、クロロホルム / メタノール溶液 (2:1 v/v) 10mL を加え、超音波洗浄機で20分間振とう。
- 溶液を別の試験管に移し替えて遠心分離を行う。抽出操作1、2を3回繰り返す。
- 2.の上澄み溶液を別のバイアルに移し替えて蒸発乾固させる。
- 蒸発乾固させたバイアルにクロロホルム / メタノール溶液を加え、シリカカラムで濾過し極性を吸着させる。
- 溶液を蒸発乾固させ、全脂質を得る。抽出した全脂質に、内部標準として C₃₄ アルカンを加え、さらに N,O-Bis (trimethylsilyl) trifluoroacetamide (BSTFA) 溶液でトリメチルシリル化 (TMS)

化し、試料溶液とする。

- 水素炎イオン化型検出器 (FID) 付ガスクロマトグラフ分析装置で脂質組成を確認。
- ガスクロマトグラフ質量分析装置 (GC-MS) で、脂質組成を測定。

測定は東京大学総合研究博物館タンデム加速器分析室 (MALT) に設置した分析装置を用いた。使用した分析装置と標準試料を第 40 表に示す。

第 40 表 分析装置と標準試料

分析装置	
元素分析計付安定同位体比質量分析装置 (EA-IRMS)	vario ISOTOPE select (Elementar 社)
元素分析計	Isoprime VisION (Elementar 社)
質量分析計	GC-2014 (島津製作所)
FID 付ガスクロマトグラフ分析装置 (GC)	GC-2014 (島津製作所)
ガスクロマトグラフ質量分析装置 (GC-MS)	Thermo ISQ LT GC-MS (Thermo Fisher Scientific 社)
燃焼炉付ガスクロマトグラフ / 安定同位体比質量分析装置 (GC-C-IRMS)	
ガスクロマトグラフ	Agilent 7890B (Agilent Technologies 社)
燃焼炉	GC5 (Elementar UK 社)
質量分析計	Isoprime VisION (Elementar 社)

標準試料

脂肪酸エステル 8 種混合ヘキサン溶液 FB-2 (Indiana 大学)

3. 結果と考察

土器付着炭化物 TKMC-225a の炭素・窒素安定同位体組成と炭素・窒素含有量から、C/N 比を測定した (第 41 表)。

第 41 表 炭素・窒素安定同位体組成と炭素・窒素含有量、C/N 比

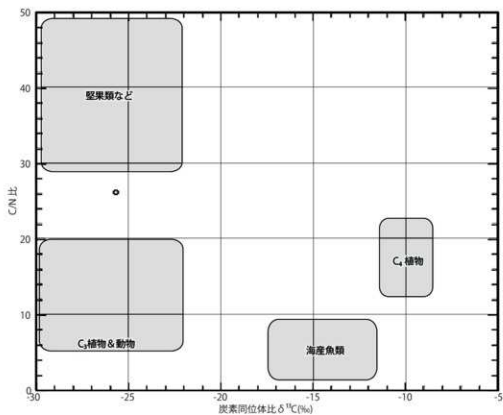
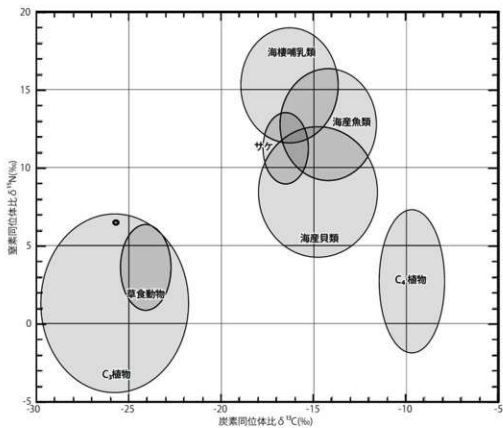
Sample ID	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	C	N	C/N
TKMC-#	‰	‰	%	%	ratio
225a	-25.7	6.5	63.5	2.8	26.3

炭素・窒素安定同位体組成と C/N 比を、現生日本産生物データと比較して図示した (第 331 図)。内土器付着炭化物である TKMC-225a は C / N 比が 26.3 と動物質の影響は小さいため、炭素・窒素安定同位体組成から、(米なども含む) C_3 植物 (草食動物) を主体とする炭化物と考えられる。次に、TKMC-225、225a に含まれる脂質組成から、バイオマーカー解析を行った (第 42 表)。

土器胎土である TKMC-225 から、植物性バイオマーカーであるワックス類や長鎖炭化水素類、長鎖アルコール、動物性バイオマーカーであるコレステロールなどが検出されているが、水棲動物のバイオマーカーであるイソプレノイド類は検出されていない。土器付着炭化物 TKMC-225a からは、上述した植物性バイオマーカーの一部と不飽和脂肪酸が、270℃ないし、300℃になると生成する環状有機物である APAA 類が検出されている。特に、炭素数 20 以上の APAA 類は陸棲ではなく、海棲を示唆する。

したがって、バイオマーカー解析の結果、何らかの植物と海棲動物のような動物質の影響が伺える。また、今回の主要脂肪酸であるパルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成 ($\delta^{13}\text{C}_{160}$ (‰)、 $\delta^{13}\text{C}_{180}$ (‰)) を第 43 表に記す。

第 332 図はその抽出したパルミチン酸・ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成を、日本産生



第 331 図 土器附着炭化物の炭素・窒素安定同位体組成と C/N 比を現生日本産生物データと比較

第 42 表 脂質組成

試料 TKMC-#	抽出法	脂質濃度 (μ g/g)	長鎖脂肪酸	飽和脂質	不飽和 脂肪酸	グリセ リド	長鎖アル コール	イソプレノ イド酸	水素基/ケ トン基 を含む脂質	二塩基酸	環構造を 含む脂質	ケトン	ステロール 類	テル ペン 類	その他の 脂質	
225	酸抽出	8	C ₁₆ , C ₁₈ , C ₂₀ , C ₂₂ , C ₂₄	C _{16:0} , C _{18:0} , C _{20:0} , C _{22:0} , C _{24:0} , C _{16:1n-7} , C _{18:1n-7} , C _{20:1n-7} , C _{22:1n-7} , C _{24:1n-7}	C _{16:1n-7} , C _{18:1n-7} , C _{18:2}	—	—	—	—	—	—	—	—	—	wax C ₃₀ (tr), C ₃₁ (tr), C ₃₂ (tr)	
225a	酸抽出	9	C ₁₆ , C ₁₈ , C ₂₀ , C ₂₂ , C ₂₄	C _{16:0} , C _{18:0} , C _{20:0} , C _{22:0} , C _{24:0} , C _{16:1n-7} , C _{18:1n-7} , C _{20:1n-7} , C _{22:1n-7} , C _{24:1n-7} , C _{16:2} , C _{18:2} , C _{20:2} , C _{22:2}	C _{16:1n-7} , C _{18:1n-7} , C _{18:1n-7} , C _{18:2}	—	—	—	—	C ₉	APAA, C ₁₁ (tr), C ₁₉ , C ₂₀ , C ₂₂ ?	—	—	—	—	
225	全脂質抽出	—	—	—	—	—	C _{12:0} , C _{14:0} , C _{16:0} , C _{18:0}	—	—	—	—	—	Cholesterol	—	—	—
225a	全脂質抽出	—	—	—	—	—	C _{14:0} , C _{16:0}	—	—	—	—	—	—	—	—	—

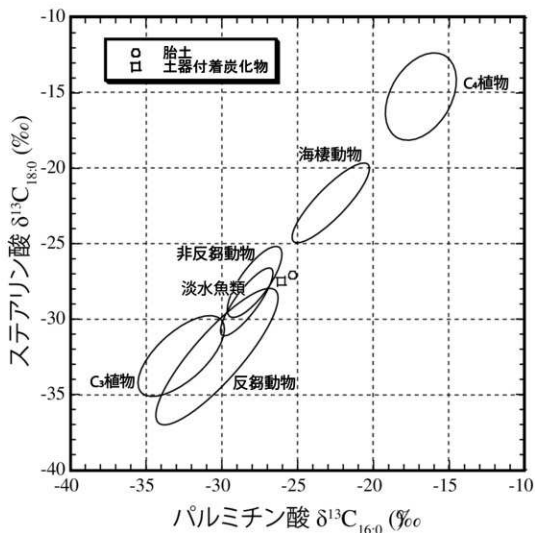
物データと比較して示したものである (Craig et al. 2013; 宮田ら, 2015; Horiuchi et al. 2015; Lucquin et al. 2016)。

抽出した脂質に含まれるパルミチン酸・ステアリン酸からなる脂肪酸の分子レベル炭素同位体組成は、反芻動物、淡水魚、非反芻動物、及び、海棲動物の周辺領域に分布した。

分子レベル炭素同位体組成からは、(反芻動物、淡水魚、非反芻動物などの)陸棲動物や海棲動物と(反芻動物などを含む)陸上生物などとの混合の影響が伺われる。

第 43 表 パルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成

Sample ID	$\delta^{13}\text{C}_{16:0}$	$\delta^{13}\text{C}_{18:0}$
TKMC-#	‰	‰
225	-25.3	-27.1
225a	-26.1	-27.5



第 332 図 パルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成と現生日本産生物データとの比較
現生生物から推定される各端成分の領域を楕円で示した

4. まとめ

北区道合遺跡から出土した土器胎土とその内面付着炭化物を脂質・安定同位体分析した結果、(米なども含む) C_3 植物を主体として、陸棲、海棲動物などを含む煮炊きの様相が推定された。

引用・参考文献

- Allen J. St. Angelo and Robert L. Ory (1983) Lipid degradation during seed deterioration. *Phytopathology* 73 (2) , 315-317.
- Bush RT. And McNerney FA. (2013) Leaf wax n-alkane dis-tributions in and across modern plants: implications for paleoecology and chemotaxonomy. *Geochimica et Cosmochimica Acta* 117, 161-79.
- Correa-Ascencio, M. and Evershed RP. (2014) High throughput screening of organic residues in archaeological potsherds using direct acidified methanol extraction. *Analytical Method* 6, 1330-1340.
- Dobson G., Christie WW. and Sebedio, JL. (1996) Monocyclic saturated fatty acids formed from oleic acid in heated sunflower oils. *Chemistry and Physics of Lipids* 82, 101-110.
- Evershed RP. (2008) Experimental approaches to the interpretation of absorbed organic residues in archaeological ceramics. *World Archaeology* 40 (1) , 26-47.
- Evershed RP., Copley MS., Dickson L. and Hansel FA. (2008) Experimental evidence for the processing of marine animal products and other commodities containing polyunsaturated fatty acids in pottery vessels. *Archaeometry* 50 (1) , 101-113.
- Hansel FA., Copley MS., Madureira LAS. and Evershed RP. (2004) Thermally produced ω - (o-alkylphenyl) alkanolic acids provide evidence for the processing of marine products in archaeological pottery vessels. *Tetrahedron Letters* 29, 2999-3002.
- Hansel FA. and Evershed RP. (2009) Formation of dihydroxy acids from Z-monounsaturated alkenolic acids and their use as biomarkers for the processing of marine commodities in archaeological pottery vessels. *Tetrahedron Letters* 50, 5562-5564.
- Heron C. and Evershed RP. (1993) The analysis of organic residues and the study of pottery use. *Archaeological Method and Theory* 5, 247-284.
- Horiuchi, A., Miyata, Y., Kamijo, N., Cramp, L. and Evershed RP. (2014) A dietary study of the Kamegaoka culture population during the final Jomon period, Japan, using stable isotope and lipid analyses of ceramic residues. *Radiocarbon* 57, 721-736.
- 堀内晶子・宮田佳樹・上條信彦 (2014) 脂質分析から観てきた青森県今津遺跡出土縄文土器の用途、日本文化財科学会第31回大会要旨集、奈良教育大学、pp. 348-349。
- Kevin Robards, Amanda F. Kerr and Emillios Patsalides (1988) Rancidity and its measurement in edible oils and snack foods. A review. *Analyst* 113, 213-224.
- Miyata, Y., Horiuchi, A. Paleo Labo AMS Dating Group and Nishimoto, T. (2009) Trace of sea mammals on pottery from the Hamanaka 2 archaeological site, Reibun Island, Japan: Implications

- from sterols, stable isotopes, and radiocarbon dating. *Researches in Organic Geochemistry* 25, 15-27.
- Miyata, Y., Horiuchi, A., Kondo, M., Onbe, S., Yoshida, K., Nagao, S., Paleo Labo AMS Dating Group and Nishimoto, T. (2016) Marine reservoir effects deduced from ^{14}C dates on pottery residues, bones, and molluscan shells from the Hamanaka 2 archaeological site, Rebun Island, Hokkaido, Japan. *Radiocarbon* 58, 755-770.
- 宮田佳樹・堀内晶子・Lucy Cramp・南雅代・中村俊夫・Richard Evershed (2013) 礼文島浜中 2 遺跡出土土器の脂質分析、日本文化財科学会第 30 回大会要旨集、京都大学、pp. 334-335。
- 宮田佳樹・堀内晶子・高田秀樹、中村俊夫 (2015) 土器胎土脂質分析による海獣資源利用の評価—礼文島浜中 2 遺跡、真脇遺跡出土土器など—、日本文化財科学会第 32 回大会要旨集、東京学芸大学、pp. 40-41。
- Papakosta, V., Smittenberg RH., Gibbs Kevin., Jordan P., Isaksson S. (2015) Extraction and derivatization of absorbed lipid residues from very small and very old samples of ceramic potsherds for molecular analysis by gas chromatography-mass spectrometry (GC-MS) and single compound stable carbon isotope analysis by gas chromatography-combustion-isotope ratio mass spectrometry (GC-C-IRMS) . *Microchemical Journal* 123, 196-200.
- 山本正伸 (2004) 有機分子による地球表層環境の解析と復元、石渡良志・山本正伸編、有機地球化学、培風館、pp.269-273。

3 道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材の樹種（概報）

北区道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の調査において、縄文時代早期の炉穴や弥生時代～奈良・平安時代の竪穴住居から炭化材が出土した。ここではこれらの樹種を同定した結果について報告する。なお、電子顕微鏡関連機器の不具合により木材の横断面のみの観察にとどまったため、分類群を絞り込めていないものもある。詳細については別稿を以て報告する予定である。

試料と方法

調査対象とした試料は道合遺跡から出土した炭化材 161 点と赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材 11 点である。それぞれの出土位置は各遺構図に、312 号住居跡は第 333 図に、324 号住居跡は 334 図に示した。

炭化材の横断面を徒手または片刃剃刀を用いて割り出し、これらを走査型電子顕微鏡 (JEOL JSM-IT500:東京都立埋蔵文化財調査センター) 下で観察して樹種を同定した。管電圧は 1.0～3.0kV である。未蒸着の状態を観察と撮像をおこなったため、試料の接線断面・放射断面は観察できなかった。

結果

道合遺跡から出土した炭化材 161 点には単子葉類 1 分類群と広葉樹 6 分類群が、赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材 11 点には広葉樹 4 分類群が認められた。個別の試料ごとの同定結果を第 44・45 表に、遺構ごとの樹種組成を第 46・47 表に示した。以下にそれぞれの分類群の木材解剖学的な記載と各標本の電子顕微鏡画像を示し、同定の根拠を明らかにする。

イネ科 *Poaceae* (写真: 道合 315 住 No.17)

直径 5mm 程度の単子葉類の程で、外周には厚い厚壁細胞層に包まれた維管束が 1～2 列あり、それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 (写真: 道合 322 住 No.168)

やや大型で丸い単独道管が年輪のはじめに数個ずつ断続的に集合し、晩材では薄壁の小道管が火炎状に配列する環孔材。放射組織は単列。

コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 (写真: 道合 315 住 No.42)

ごく大型で丸い道管が年輪のはじめに単独で 1～2 列並び、晩材では小型で丸い厚壁の道管が単独で放射方向に配列する環孔材。放射組織は小型のものと大型で複合状のものとは異なる。

環孔材 A (クワ型) (写真: 赤羽上ノ台 08 住 No.1429)

やや大型で丸い道管が単独あるいは数個複合して年輪のはじめに 1～2 列並んで孔圏をなし、晩材では徐々に径を減じた道管が塊をなして散在する環孔材。放射組織は 4～10 列程度。

環孔材 B (シオジ型) (写真: 道合 320 住カマド No.44)

大型で丸い厚壁の道管が年輪のはじめに 1～2 列ほど並んで孔圏をなし、晩材では小型で厚壁の道管が単独あるいは放射方向に 2～3 個複合してまばらに散在する環孔材。放射組織は 1～2 細胞幅。

散孔材 A (ハンノキ型) (写真: 赤羽上ノ台 17 住 No.36)

中型～小型の道管が単独あるいは放射方向に数個複合して散在する散孔材。放射組織は単列のもの

と集合状のものがあり、集合放射組織の出現は多い。

散孔材 B (シデ型) (写真: 赤羽上ノ台 17 住 No.44)

やや小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に複数個複合して密に散在し、幅広い帯をなして配列する散孔材 (放射孔材)。放射組織は 1 ~ 3 細胞幅、ときに集合状となる。

散孔材 C (写真: 道合 77 坪穴 No.142)

中型~小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に複数個複合して散在する散孔材。放射組織は 1 ~ 2 細胞幅程度。

考察

弥生時代後期の竪穴住居ではクヌギ節が多くを占め、こうした傾向は古墳時代後期まで認められた。一方、299 号住居跡のように、コナラ亜属以外の環孔材が多く認められたものもある。また、312 号住居跡ではクヌギ節が主体となるとともに、散孔材も一定数が使われていた。

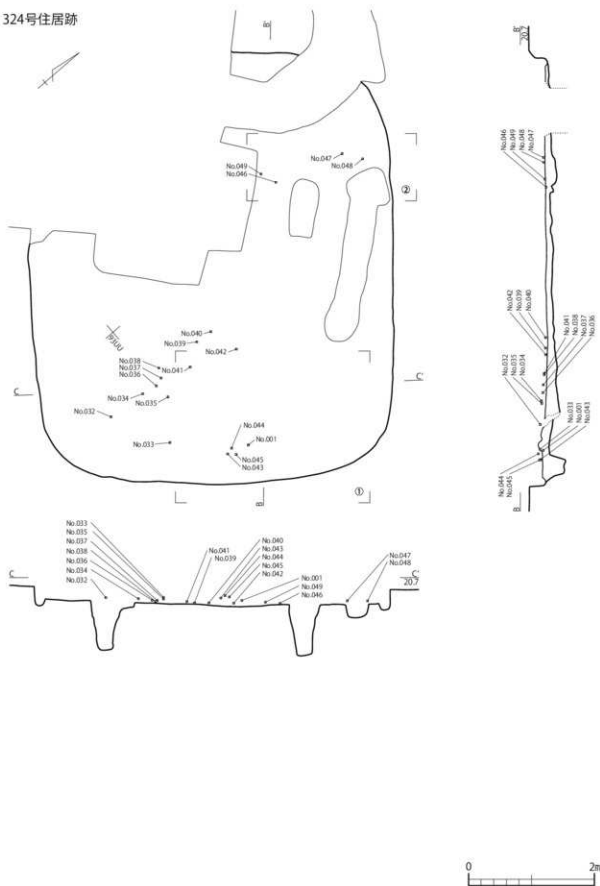
奈良・平安時代の竪穴住居跡では、クヌギ節も一定数認められる一方、スダジイも多く認められた。南関東の弥生時代には竪穴住居の用材にコナラ亜属 (コナラ節・クヌギ節が含まれる) が多用されていたのが、奈良・平安時代にはその比率が下がり、クリなどの占める割合が増加する傾向が知られている (高橋・植木 1994, 伊東・山田編 2012)。本遺跡における傾向もこれに調和的である。

本報告では木材の横断面観察に基づく結果のみを示しており、本来おこなうべき接線断面・放射断面の観察はおこなえなかった。そのため散孔材・環孔材の区分までしか至らなかったものも多く残されており、本報告で示し得たのはこれらの結果に基づく概要にとどまる。今後、これらの観察をもとに樹種同定結果を改めて報告するとともに、CT 撮像で得た年輪数や年輪幅を加えて、当時の用材について検討した結果を報告したい。

引用文献

- 高橋 敦・植木真吾 1994 「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYNO』2
伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社

324号住居跡



第 334 図 道合遺跡 324 号住居跡から出土した炭化材の位置

第 44 表 道合遺跡から出土した炭化材の樹種 (1)

時代	遺構	No.	樹種	時代	遺構	No.	樹種
縄文早期	77 坪	142	散孔材 C	弥生後期	312 住	224	クスギ節
弥生後期	298 住	296	クスギ節	弥生後期	312 住	224	クスギ節
弥生後期	298 住	298	クスギ節	弥生後期	312 住	262	クスギ節
弥生後期	298 住	663	クスギ節	弥生後期	312 住	263	×
弥生後期	298 住	663	クスギ節	弥生後期	312 住	271	クスギ節
弥生後期	299 住	12	環孔材 B	弥生後期	312 住	272	散孔材 A
弥生後期	299 住	15	環孔材 B	弥生後期	312 住	273	クスギ節
弥生後期	299 住	16	環孔材 B	弥生後期	312 住	274	クスギ節
弥生後期	299 住	21	クスギ節	弥生後期	312 住 P6	4	クスギ節
弥生後期	299 住	24	環孔材 B	弥生後期	312 住 ^坪	1	クスギ節
弥生後期	299 住	25	環孔材 B	弥生後期	312 住 ^坪	11	クスギ節
弥生後期	299 住	32	環孔材 B	弥生後期	312 住 ^坪	12	クスギ節
弥生後期	299 住	33	クスギ節	弥生後期	315 住	10	クスギ節
弥生後期	299 住	35	環孔材 B	弥生後期	315 住	17	イネ科
弥生後期	299 住	36	環孔材 B	弥生後期	315 住	18	クスギ節
弥生後期	299 住	37	環孔材 B	弥生後期	315 住	19	クスギ節
弥生後期	299 住	38	環孔材 B	弥生後期	315 住	20	クスギ節
弥生後期	299 住	39	環孔材 B	弥生後期	315 住	21	クスギ節
弥生後期	312 住	16	散孔材	弥生後期	315 住	22	クスギ節
弥生後期	312 住	102	クスギ節	弥生後期	315 住	23	クスギ節
弥生後期	312 住	103	クスギ節	弥生後期	315 住	24	クスギ節
弥生後期	312 住	151	クスギ節	弥生後期	315 住	25	クスギ節
弥生後期	312 住	152	クスギ節	弥生後期	315 住	26	環孔材 A
弥生後期	312 住	153	クスギ節	弥生後期	315 住	27	クスギ節
弥生後期	312 住	154	クスギ節	弥生後期	315 住	28	クスギ節
弥生後期	312 住	155	クスギ節	弥生後期	315 住	29	クスギ節
弥生後期	312 住	156	クスギ節	弥生後期	315 住	30	クスギ節
弥生後期	312 住	157	クスギ節	弥生後期	315 住	31	クスギ節
弥生後期	312 住	158	クスギ節	弥生後期	315 住	32	クスギ節
弥生後期	312 住	159	クスギ節	弥生後期	315 住	33	クスギ節
弥生後期	312 住	160	クスギ節	弥生後期	315 住	34	クスギ節
弥生後期	312 住	161	クスギ節	弥生後期	315 住	35	クスギ節
弥生後期	312 住	162	散孔材 A	弥生後期	315 住	36	クスギ節
弥生後期	312 住	163	クスギ節	弥生後期	315 住	37	クスギ節
弥生後期	312 住	198	クスギ節	弥生後期	315 住	38	クスギ節
弥生後期	312 住	199	散孔材 A	弥生後期	315 住	39	クスギ節
弥生後期	312 住	200	散孔材 A	弥生後期	315 住	41	クスギ節
弥生後期	312 住	201	クスギ節	弥生後期	315 住	42	クスギ節
弥生後期	312 住	202	クスギ節	弥生後期	315 住	43	クスギ節
弥生後期	312 住	202	クスギ節	弥生後期	315 住	45	クスギ節
弥生後期	312 住	203	散孔材 A	弥生後期	315 住	46	クスギ節
弥生後期	312 住	219	クスギ節	弥生後期	315 住	47	クスギ節
弥生後期	312 住	220	クスギ節	弥生後期	315 住	48	クスギ節
弥生後期	312 住	221	クスギ節	弥生後期	315 住	49	クスギ節
弥生後期	312 住	222	クスギ節	弥生後期	315 住	50	クスギ節
弥生後期	312 住	223	クスギ節	弥生後期	315 住	51	クスギ節

第 44 表 道合遺跡から出土した炭化材の樹種 (2)

時代	遺構	No.	樹種	時代	遺構	No.	樹種
弥生後期	315 住	52	クスギ節	弥生後期	331 住	3	クスギ節
弥生後期	315 住	53	クスギ節	弥生後期	332 住	2	スダジイ
弥生後期	315 住	54	クスギ節	弥生後期	334 住	113	クスギ節
弥生後期	315 住	55	クスギ節	弥生後期	334 住貯蔵穴	1	クスギ節
弥生後期	315 住	85	クスギ節	弥生後期	334 住貯蔵穴	2	クスギ節
弥生後期	323 住	66	クスギ節	弥生後期	334 住貯蔵穴	3	クスギ節
弥生後期	323 住	67	クスギ節	弥生後期	334 住貯蔵穴	114	クスギ節
弥生後期	323 住	68	クスギ節	弥生後期	335 住	41	クスギ節
弥生後期	323 住	69	クスギ節	古墳後期	300 住	46	クスギ節
弥生後期	323 住	70	クスギ節	古墳後期	300 住 P1	1	クスギ節
弥生後期	323 住	71	クスギ節	古墳後期	302 住	180	クスギ節
弥生後期	323 住	72	クスギ節	古墳後期	302 住	405	散孔材
弥生後期	323 住	74	クスギ節	奈良・平安	296 住	107	クスギ節
弥生後期	323 住	75	クスギ節	奈良・平安	308 住	24	散孔材
弥生後期	324 住	32	クスギ節	奈良・平安	308 住	25	散孔材
弥生後期	324 住	33	クスギ節	奈良・平安	308 住	26	スダジイ
弥生後期	324 住	34	クスギ節	奈良・平安	308 住	28	スダジイ
弥生後期	324 住	35	クスギ節	奈良・平安	308 住	29	スダジイ
弥生後期	324 住	36	クスギ節	奈良・平安	317 住	11	スダジイ
弥生後期	324 住	37	クスギ節	奈良・平安	317 住	13	スダジイ
弥生後期	324 住	38	クスギ節	奈良・平安	320 住	76	環孔材
弥生後期	324 住	39	クスギ節	奈良・平安	320 住カマド	44	環孔材 B
弥生後期	324 住	40	クスギ節	奈良・平安	322 住	82	スダジイ
弥生後期	324 住	41	クスギ節	奈良・平安	322 住	168	スダジイ
弥生後期	324 住	42	クスギ節	奈良・平安	322 住	232	スダジイ
弥生後期	324 住	43	環孔材 A	奈良・平安	322 住	233	スダジイ
弥生後期	324 住	44	クスギ節	奈良・平安	322 住	322	スダジイ
弥生後期	324 住	44	クスギ節	奈良・平安	322 住 P1	6	スダジイ
弥生後期	324 住	45	クスギ節	奈良・平安	322 住 P7	14	スダジイ
弥生後期	324 住	46	クスギ節	奈良・平安	336 住カマド	48	クスギ節
弥生後期	324 住	47	クスギ節	奈良・平安	336 住カマド	70	環孔材
弥生後期	324 住	48	クスギ節	奈良・平安	345 住	32	スダジイ
弥生後期	324 住	49	クスギ節	奈良・平安	346 住カマド	61	クスギ節
弥生後期	324 住	49	クスギ節	奈良・平安	347 住掘方	59	クスギ節
弥生後期	324 住 P4	1	クスギ節				

第 45 表 赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材の樹種

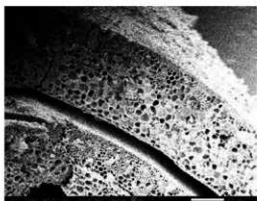
時代	遺構	No.	樹種	時代	遺構	No.	樹種
弥生中期	8 住	1369	クスギ節	古墳後期	17 住	36	散孔材 A
弥生中期	8 住	1429	環孔材 A	古墳後期	17 住	44	散孔材 B
弥生後期	9 住	170	クスギ節	古墳後期	17 住	96	クスギ節
古墳後期	16 住	439	クスギ節	古墳後期	18 住	182	クスギ節
古墳後期	16 住	444	クスギ節	古墳後期	25 住	36	クスギ節
古墳後期	16 住	445	クスギ節				

第 46 表 道合遺跡から出土した炭化材の樹種組成

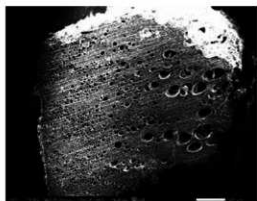
樹種	縄文 早期			弥生後期			古墳後期			奈良・平安													
	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住											
イネ科	77	298	299	312	315	323	324	331	332	334	335	300	302	296	308	317	320	322	336	345	346	347	
スタジイ																							
クスギ節		4	2	33	37	9	20	1	1	5	1	2	1	1	3	2	7	1	1	1	1	1	
環孔材 A							1																
環孔材 B			11																				
環孔材																							
散孔材 A																							
散孔材 B																							
散孔材 C	1																						
散孔材																							
同定不能																							
同定不能																							

第 47 表 赤羽上ノ台遺跡から出土した炭化材の樹種組成

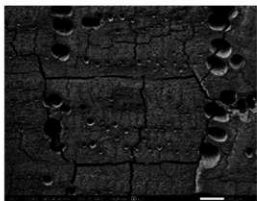
樹種	弥生中期			弥生後期			古墳後期		
	住	住	住	住	住	住	住	住	住
イネ科	8	9	16	17	18	25			
スタジイ									
クスギ節									
環孔材 A									
環孔材 B									
環孔材									
散孔材 A									
散孔材 B									
散孔材 C									
散孔材									
同定不能									



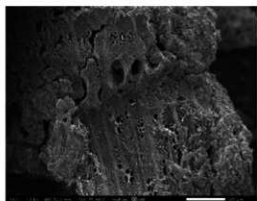
1 イネ科 (道合315住 No.17)



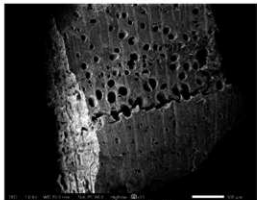
2 スダジイ (道合322住 No.168)



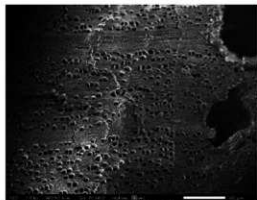
3 コナラ亜属クヌギ節 (道合315住 No.42)



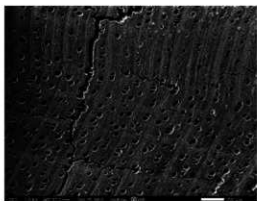
4 環孔材A (赤羽上ノ台08住 No.1429)



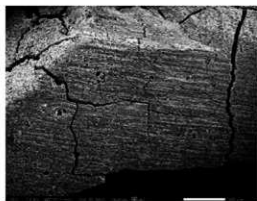
5 環孔材B (道合320住カマド No.44)



6 散孔材A (赤羽上ノ台17住 No.36)



7 散孔材B (赤羽上ノ台17住 No.44)



8 散孔材C (道合77炉穴 No.142)

第 335 図 道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡画像

4 道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡における植物珪酸体化石群

鬼崎 華・渡邊稜也・小野綾子・江口誠一

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の埋蔵文化財発掘調査にともなって実施した植物珪酸体分析の結果を報告する。本分析では、江戸時代の台地部において行われていた農地利用とその周辺の景観復原を試みた。

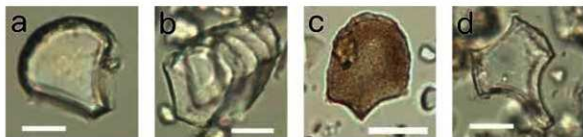
畑畝跡とみられる溝状の遺構のうち、道合遺跡では351溝1層、355溝1層、373溝1層の3箇所、赤羽上ノ台遺跡では1号溝3層の1箇所を対象として堆積物を採取した。層相はいずれも暗灰褐色細砂質シルトであった。試料は江口(1996)に準拠して次のように処理した。約0.7gの乾燥試料を秤量し、約20%の過酸化水素水(H₂O₂)約30mlとともに300mlのトルビーカーに投入し、ホットプレート上で加熱して有機物を分解させた。続けて、6Nの濃塩酸(HCl)を加えて脱鉄した後、超音波洗浄により粒子を分散させた。25μmふるいを通した水道水を加えて300mlにし、ストークスの法則に基づく沈降法で水面下10cmの上澄みをサイフォンで吸引除去し、10μm以上の画分試料を作製した。これを20mlに希釈して攪拌した後、ピペットで0.2mlをプレパラート上に展開し、乾燥させて封入した。検鏡は400倍の生物顕微鏡下で行った。イネ科植物の機動細胞を起源とする植物珪酸体のみを扱い、イネ型・ネザサ節型・ササ属型・シバ属型の四つに分類した。

植物珪酸体分析の結果を図1、表1に示す。イネ型・ネザサ節型・ササ属型・シバ属型は全試料から検出された。このうち、イネ型の検出頻度は道合遺跡よりも赤羽上ノ台遺跡でやや高かった。これらは、小野の卒業研究(小野2022)で指摘されたような台地上における陸稲としての稲作が、道合遺跡のみならず赤羽上ノ台遺跡の調査区内でも行われていたことを示している。また道合遺跡では、小野(2022)で分析された遺構(331溝・332溝・334溝・345溝・1号畝)よりもさらに外側の、台地縁辺部に相当する区域でもイネが栽培されていたと考えられる。ネザサ節型・ササ属型・シバ属型は地点ごとに明瞭な差が見受けられなかったが、全遺構で確認されたことから、人為的な耕作地のみならず、台地上に典型的なアズマネザサのようなネザサ節やササ類を含む植生が周囲に広がっていた可能性が示された。特にシバ属型が各地点で認められたことは、近辺にシバが生育するような、ある程度開けた土地が存在していたことを示唆している。以上より、道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の植物珪酸体化石群から、近世の台地上におけるイネ科植物を中心とした農地利用と景観を復原できることが予察された。さらなる調査として、水田雑草など他の母植物を給源とする植物珪酸体も用いた定量的な分析が求められる。

文献

江口誠一(1996)植物珪酸体の試料処理方法。関東平野, 第4号, 25-28.

小野綾子(2022)東京都北区赤羽台における近世の耕地景観の復原。令和3年度日本大学文理学部地理学科卒業論文, 1-49.



第336図 産出した植物珪酸体化石の写真

a: イネ型、b: ネザサ節型、c: ササ属型、d: シバ属型

スケールはすべて 20 μ m

第48表 各地点における植物珪酸体化石の産出量評価

遺跡名	試料 No.	地点名	イネ型	ネザサ節型	ササ属型	シバ属型
	MC1	351 溝	△	○	△	△
道合	MC2	355 溝	△	○	△	△
	MC5	373 溝	△	○	△	△
赤羽上ノ台	MC7	1号溝3層	△	○	△	△

○：400倍の視野内におおむね1個～複数個出現

△：プレバート内に1個以上確認

VI 調査の成果と課題

1 縄文時代

縄文時代における赤羽台地の土地利用

赤羽台団地内の遺跡発掘調査は、今回の調査（道合遺跡第IX次、赤羽上ノ台遺跡第VI次）でほぼ当初予定の範囲が終了した。赤羽上ノ台遺跡では赤羽台東小学校敷地内の調査・整理（武蔵文化財研究所）、道合遺跡では赤羽消防署赤羽台出張所前都道部分の調査・整理（本センター）が行われており、さらに赤羽台西小学校の建て替えに伴い、試掘調査が実施されている。本調査となれば、当該地区の最後の調査となる。これらをもって、道合・赤羽上ノ台遺跡の調査は完了するが、本報告段階において、概ね両遺跡の様相は把握し得たと言える。以下、縄文時代における本地区の土地利用の状況を時期ごとに概観してみたい。

検出された縄文時代の遺構は以下のとおりである。

住居跡 早期前葉 1（遺物集中地点） 早期末～前期初頭 20 前期中葉 9 前期後葉 1
後期前葉 3（ピット群 1を含む）

炉穴 早期後葉—子母口式期 8（12）基 野島式期— 86（155）基

茅山上層式期— 19（64）基

早期後葉期— 50（64）基 （ ）内は炉床の数

土坑 陥穴：15基

その他：186基 早期後葉 26 早期末～前期初頭 61 早期末～前期前葉 23

前期中葉 39 後期前葉 22 不明 15

集石 3基

ピット 多数

以上の中には、前期中葉の住居跡内、後期前葉の土坑内などに貝層が確認されたものを含む。

・早期前葉（第337図）

この時期の遺構は第IV次調査区のみで、遺物集中地点一ヶ所、集石2基である。南東側崖線に近い場所で、台地縁辺の緩傾斜が始まる部位である。この遺物集中地点は本文中で住居跡の可能性を指摘した。2基の集石を含め、この範囲に生活痕跡が認められた事は、少なくとも小人数—家族の居住・活動が行われていた証左である。遺物集中地点から北東側では後代の遺構から同時期の土器片が多く出土しており、さらなる遺構の存在が想定される。時間的には燃系文系土器群の後、無文土器系の所産であり、出土土器の主体を占めるのが平板式土器であった。この時期の土器・遺構の検出は本赤羽台地では初見であり、貴重な資料となる。調査区中央～北側に分布する炉穴などからも平板式土器片は出土しており、一定程度の範囲にその活動範囲を広げていたと思われる。この平板式の遺構は崖線付近に存在しており、北側や南側に続く未調査区にも存在する可能性はあり、小規模とはいえ、一つの集落が成立していたと想像するに難くない。

・早期後葉（第338図）

この時期の遺構としては、炉穴、陥穴土坑がある。さらには積極的な時期比定根拠には乏しいが、後述する皿・盥状の土坑の一部が本時期の所産となる可能性がある。

炉穴は、道合第Ⅲ次調査区で2基、第Ⅳ調査区で58基、第Ⅴ次調査区で2基、第Ⅵ次調査区で1基、今回のⅨ次調査区で16基、上ノ台第Ⅰ次調査区で5基、第Ⅱ次調査区9基、第Ⅲ次調査区で5基、第Ⅴ次調査区で21基、今回の調査（上ノ台Ⅵ次）で38基、総計157基が検出されている。この基数は報告書の記載数であるが、接続したのものなど、炉の火床面が複数あるものも1基としている。単純に火床面の数を数えると268基となる。また、道合遺跡西側に隣接する大六天遺跡では焼土跡（炉穴の火床面？）が4基検出されており、現在までに272基が本台地上にて確認されている（註1）。

細別時期では、主に3時期のものが確認できる。子母口式・野島式・茅山上層式期である。子母口式期は道合第Ⅵ次調査区、第Ⅸ次調査区、赤羽上ノ台第Ⅵ次調査区の3地点、野島式期は道合第Ⅳ次調査区から第Ⅸ次調査区にかけてと上ノ台Ⅱ次調査区に広がる。茅山上層式期は赤羽上ノ台Ⅵ次調査区に集中する。

子母口式期は、1～数基の規模で本台地の中央・北西端・北東端に位置する。

野島式期は、中央部の第Ⅳ次調査区から上ノ台遺跡にかけて接続炉穴を含んだ群在する炉穴群が分布する。北側から、上ノ台9・10・12号、同11・13・14号の各々3基が三角形に並ぶ。接続炉穴が主体である。6基は約50mの楕円形の範囲にまとまる（1群）。道合では31・34・35・37・36号が弧状に並び、その南側に8・6・51・43・7号も弧状になる。両者で長径約50mの楕円形となる（2群）。中央部では東側に33・38・39・40・52・5・41号が径約25mの円形に並ぶ。5・52、48・46・47・49号を含めると長径約40mの楕円形となる（3群）。西側では17・15・14・61・9・57号が長径約50mの楕円形に並ぶ（4群）。その南側には59・54・53・56・55号が径約30mの弧状に並ぶ。北東側の60・62号を含めれば約40mの楕円形である（5群）。南側中央では24・58・64・25・23号が長径約50mの楕円形に並ぶ（6群）。南西側では12・26～29号がまとまる（7群）。このように大きく7ブロックが認められ、その他にも数基が隣接するものがある。なお、団地建物・陸軍被服本廠建物による削平により部分的な遺存に止まるものも多い。さらには完全に消滅している炉穴の存在も考え得る事を付記する。以上の分布をみるに、弧状・楕円形に配置された状況が看取される。範囲としては約40～50mの楕円形で中央部が空間となるドーナツ状を呈す。あたかも前期～後期にみられる環状集落の住居跡群とその内側の中央広場と同様で、環状炉穴群といった様相を呈す。当然ながらそれらすべてが同時存在していたわけではなく、1～数基が稼動し、造り変えにより結果的な集合体になったものである。環状集落と同様に、その配置に意図的なものが存在するならば、集落―集団内の規制が働いていたものといえよう。環状集落の場合、住居跡群の内側は墓域・祭祀広場などの目的が与えられるが、炉穴群の場合はどのように利用していたのであろうか。可能性として考えられるのは、この空間が居住域であり、住居の周囲に調理施設である炉穴を構築したという事である。この時期の住居形態には掘方が深く柱穴も明瞭な竪穴住居跡や、掘方が浅く柱穴も不明瞭な竪穴住居跡などが知られる。さらに竪穴状遺構として報告される、内部施設が検出されない竪穴もみられる。この空間で検出された遺構は、住居跡・土坑・ピットがある。2群では254号住居跡と土坑・ピット、3群では193・194号住居跡と土坑・ピット、4群では223号住居跡と土坑・

ピット、5群では土坑・ピットがそれぞれ検出されている。この中で住居跡・土坑はそれぞれ前期初頭ないしは前葉の所産とした。住居跡はいずれもピットの配列から住居跡と認定したものである。土坑は覆土観察などから時期比定した。おそらくは本時期-早期後葉のものとはならないと考えるが、それ以外にもピットが散在しており、これらが住居の柱穴になり得る可能性は大きい。明確な遺構などの証左は得られていないが、この環状炉穴群の内区が居住域とすれば、1~数軒相当の居住施設があったものと想定される。炉穴の多くは炉部火床面の状態から使用頻度は高く、また連接炉穴のように造り変えにより使用を繰り返している事からも、一定期間の居住-生活が営まれていた事は明白である。群の全てが同時期存在とは言えないが、住居跡で換算すれば7~十数軒の規模の集落であった可能性は考えられる。時間的には条痕文系土器群の前半、野島式段階が主体を占める。

茅山上層式期は、台地北東先端部に集中する。17(54)基が概ね環状に並び、その周囲にも点在する。周囲に細別時期不詳の炉穴も点在しており、これらもこの時期の所産である可能性はある。

以上の分布をみるに、早期後葉の初段階の子母口式期では点在しているが、野島式期においては集中配置となり、いわゆる環状集落の如き様相を呈す。その後、鶴ヶ島台式・茅山下層式期に空白期があり(土器は出土している)、茅山上層式期に再び集中配置される。

土坑に関しては、覆土観察などから本時期の所産としたものがある。125・122・127・136・121号は炉穴6群内にあるが、この炉穴群との関係は明確ではない。その他の土坑も第IV次調査区南側に集中する。また、陥穴とされる土坑は15基が検出されているが、相対的に少なく、土地利用の観点からは、狩場ではなく、日常生活の場としての位置づけが考えられる。

早期後葉-条痕文系土器群の時期の集落としてのあり方は、各地での検出例から、住居跡、住居跡+炉穴、竪穴状遺構+炉穴、炉穴のみ、などが挙げられているが、未だ判然としない点も多い。道合・赤羽上ノ台遺跡の北側に展開する赤羽台遺跡では同時期の住居跡と炉穴が検出されているが、本遺跡では明確な住居跡は確認し得なかった。はたして炉穴群の使用者達がどこに居住域を設けたか、上記のように環状炉穴群の内区にそれを求められるのか、今後の課題である。

・前期初頭(第339図)

この時期の遺構としては、住居跡・土坑・集石が挙げられる。住居跡は道合遺跡第II次調査区で8軒、第IV次調査区で10軒、今回の第IX次調査区で2軒の計20軒である。本時期の所産としたのは第II次調査成果を踏まえ、前期初頭期の住居形態が基本的に楕円形で壁柱穴が巡るタイプで、前期前葉期の住居形態は長方形で周溝を有すタイプである事から、平面形態が楕円形のもの、小ピットが楕円形配置をなすものは本時期の所産とした。

第II次調査区西側には長軸80m、単軸50mの楕円形の範囲に、住居跡6軒(遺物集中地点含む)、土坑群が纏まる。中央部は空白部となり、帯状に遺構が並んでいる。その南側にやや離れて1軒の住居跡と土坑がみられる。その東側、100mほど離れた第IV次調査区北東側に3軒が並び、その南東側に5軒がまとまる。これに第II次調査の103号を加えると長軸120m、短軸80mの楕円形の範囲となる。削平部分も多く、明確ではないが、環状集落として捉えられると考える。

土坑は出土土器・覆土観察から所産時期を認定したが、本時期のものは32基となる。その分布傾向として、各住居跡の周辺に集中する事が挙げられる。西側環状住居跡群では東・西側にそれぞれ3・4基が纏まる。東側環状住居跡群では、195・200号住居跡の周囲に2基、254号住居跡の周囲に3基、

222号住居跡の周囲に7基、267号住居跡の周囲に3基、266・265・193・194号住居跡の周囲は11基である。さらに南側には263号住居跡と5基の土坑がまとまる。本時期の集落構成において、墓域とされるものは住居跡の近在にブロック状に群在する例が多い。副葬品と思われる遺物は出土していないが、形態・分布状況などから墓域と判断したい。

この住居と墓域のあり方は、例えば中期の環状集落にみられる環状内区に集中して構築された墓域などは、集落全体の規制の基に、集団祭祀として儀礼が行われたと考えられるが、住居跡周囲に付随するが如き墓域は、集落全体の共有空間というよりは、個々の世帯を中心とした単位で墓域を形成していったものと考えられる。

第Ⅱ次調査区と第Ⅳ次調査区において二ヶ所の環状集落を設定したが、前者は6軒～、後者は10軒～で構成される。さらに各々の南側にも住居跡+土坑の組み合わせがみられ、西側の大六天遺跡でも本時期の住居跡が検出されており、全体としての集落規模は20軒を凌駕するものと思われる。細別時期としては、両者とも前期初頭・下吉井Ⅱ～Ⅲ式（花積下層Ⅱ～Ⅲ式）を中心とした段階と考える。存続期間はさほど長くはないものと思われる。出土土器は僅少であるが、住居形態などから同時期の所産とした。両者の関係については明確ではないが、出自の異なる集団として両立していたと考えたい。

本地区を含む武蔵野台地北岸・東岸（板橋・北区）には前期初頭期の集落（住居跡）が一定間隔で分布する（丹野 2010）が、いずれの住居跡も楕円形タイプで、出土土器は花積下層式よりも下吉井式が主体となる。荒川を挟んだ北側の大宮台地での花積下層式を主体とする集落などでは企画性を持った矩形の住居跡が主体となるが、本地域ではほぼみられない。これは集落・住居・土器などを構築・製作する集団の相違として考えられ、本地区の集落は板橋区域（西側）に分布する同時期の集落との関係が強いものと思われる。

・前期中葉（第340図）

この時期の遺構としては、住居跡・土坑が挙げられる。住居跡は道合遺跡第Ⅱ次調査区で2軒、第Ⅳ次調査区で5軒、第Ⅴ次調査区で2軒の計9件、土坑は第Ⅲ次調査区で3基、第Ⅳ次調査区で39基の計42基が検出された。住居跡は長方形プランで周溝を有し、主柱穴（6本）が存在する。企画性を持った住居で、斉一性が窺えるものである。第Ⅱ次調査区北東端で検出された85・175号住居跡はその位置関係から第Ⅳ次調査区の本時期住居跡群と同一集落内であると思われる。この2軒を西端として長軸100m、短軸50mの楕円形の範囲に住居跡5軒、土坑11基が集中する。住居跡は199・198号、85・210号がほぼ長軸を同じくするもので、175・198号には貝層が検出された。土坑は前期初頭期と同様、出土土器・覆土観察から本時期とし、同じく墓域として捉えている。この楕円形範囲内の中央部に同じく楕円形の範囲で7基が集中し、北東側にもブロック状に分布する。この配置が環状集落の規制内においてなされたかは明確ではないが、前期初頭期の住居+墓域の組み合わせとは相違する配置とも捉えられる。この南側には楕円形に並ぶ9基の墓域群と単独住居跡、南東側にもブロック状の墓域群が分布する。また北側の第Ⅴ次調査区では住居跡2軒と土坑2基が検出されたが、楕円形の環状集落と同時期の所産と考えられる。

本時期の住居跡は検出数が少なく、集落全体の様相を把握し得ないが、初頭段階のブロック状墓域に加え、環状集落内区墓域が存在する事は、集落—集団内における儀礼行為の変容が起こったものと

いえよう。前期前葉段階（関山式期）の集落が本地区には現在まで確認されておらず、空白期間があるが、この中葉段階においては、集落の占地・住居プラン・墓域の在り方などの相違点がある。単純な検出数からみれば、集落構成員数の相違と考えられよう。初頭期の規模の約1/2となり、占地域も限られてくると言う事であろうか。細別時期としては黒浜式中葉段階となろう。

175・198号住居跡から検出された貝層は、両者とも床面直上からで、住居廃絶後一定期間を置いて投棄されたものである。貝種は175号がハマグリ84%、カキ13%で、198号はカキ44%、ハマグリ41%となっており、構成比に相違がみられる。地点貝塚の形成は、その主体者として近接する住居の住人と考えるのが自然ではあるが、検出された住居跡の中でそれを特定する事は困難ではある。

・前期後葉

この時期の遺構は、住居跡が1軒（今回の道台遺跡第IX次調査区）のみである。出土遺物も相対的に少ない。細別時期では諸磯a式～b式が多く、それ以降はほぼ遺物の出土も途絶える。

・中期

この時期の遺構は検出されていないが、土器は、五領ケ台式・勝坂式・加曾利E式が出土している。集落は形成されていないが、何らかの生活領域として利用していた事は伺える。

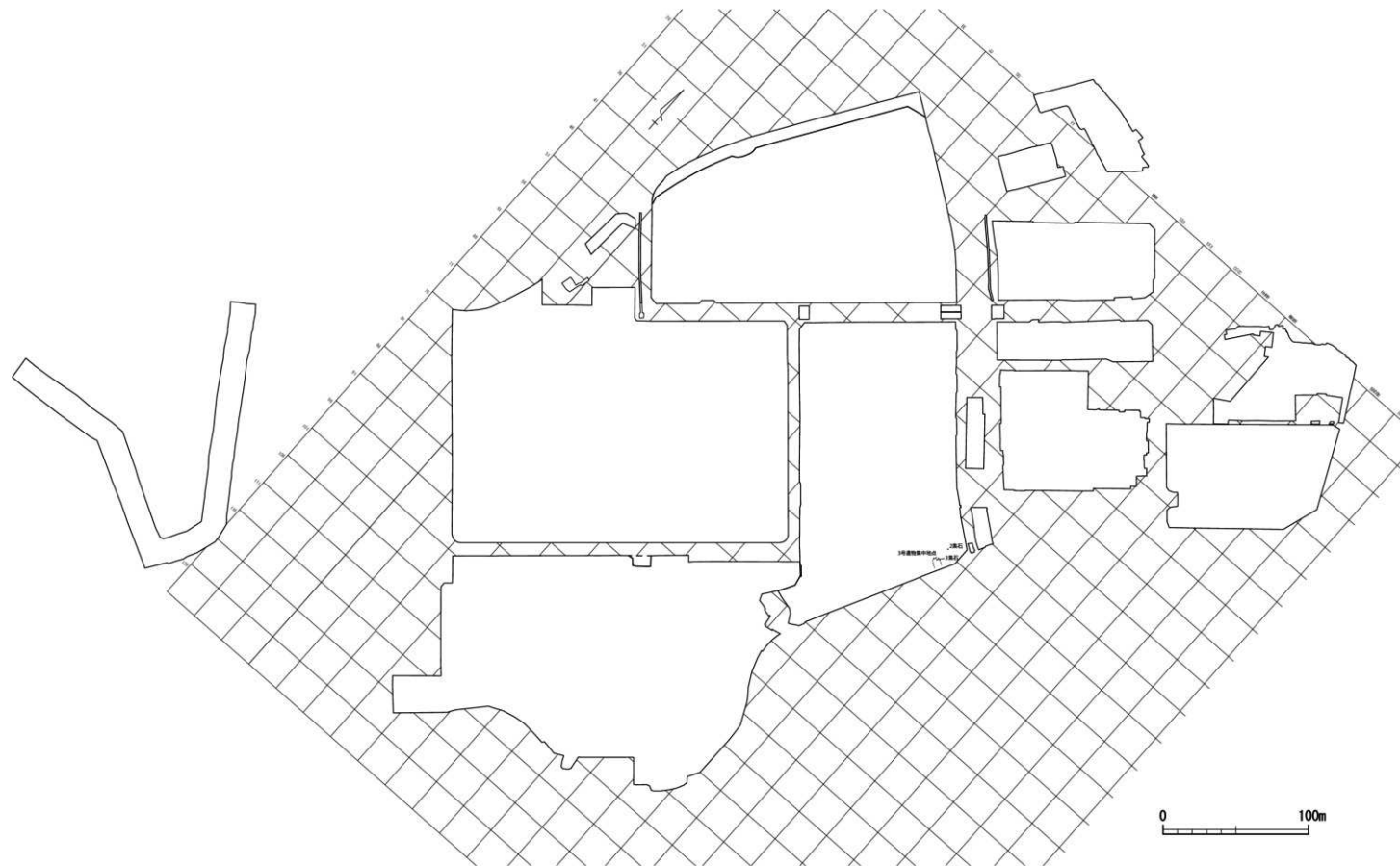
・後期前葉（第341図）

赤羽台団地北西部の赤羽消防署赤羽台出張所を中心とした範囲に集中して遺構が検出されている。道台遺跡第1次調査区でピット群（住居跡か？）、貝層を伴う土坑、第III次調査区で住居跡2軒、土坑15基、ピット群、貝層8か所、第VIII次調査区で土坑5基、ピットが検出されている（註2）。遺構は消防署周囲に集中しており、他の地点では皆無である。消防署地点は台地北西側の崖線に近く、東から延びる八幡谷が入り込んでいる。本時期は早期～前期の占地とは相違して、台地北側に集落・墓域を形成していたものである。谷を挟んで対岸の赤羽台遺跡では八幡神社付近に同時期の住居跡4軒が検出されているが、消防署の集落とは一定の距離がある。

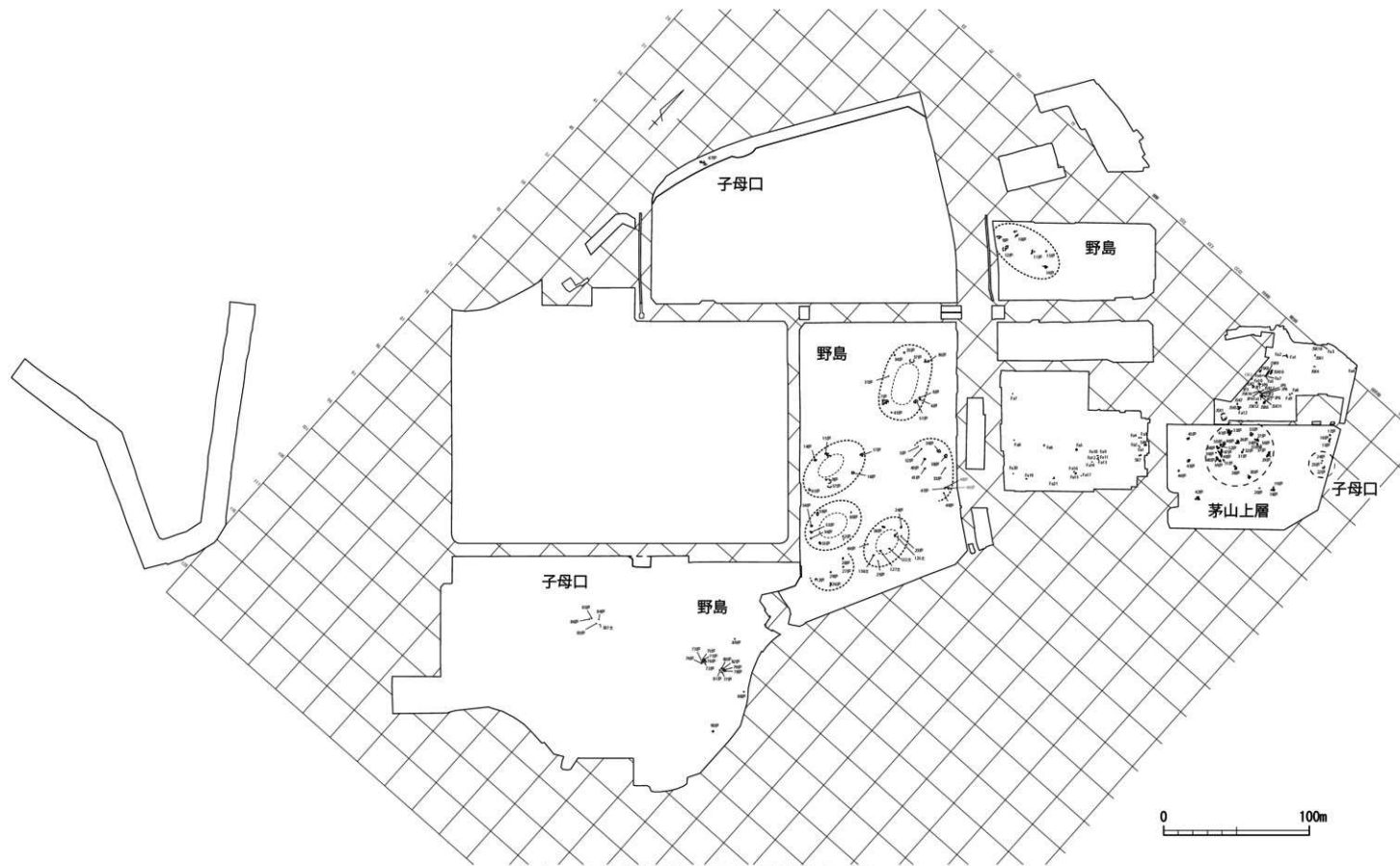
本時期以降、遺構の検出はなく、後期中葉・後葉、晩期前葉の土器片が出土するのみとなる。再び本台地に槌音が響いてくるのは弥生時代中期～宮ノ台式期になってからであり、それを経て、後期後葉期に大規模な集落形成が始まるのを待つことになる。

註

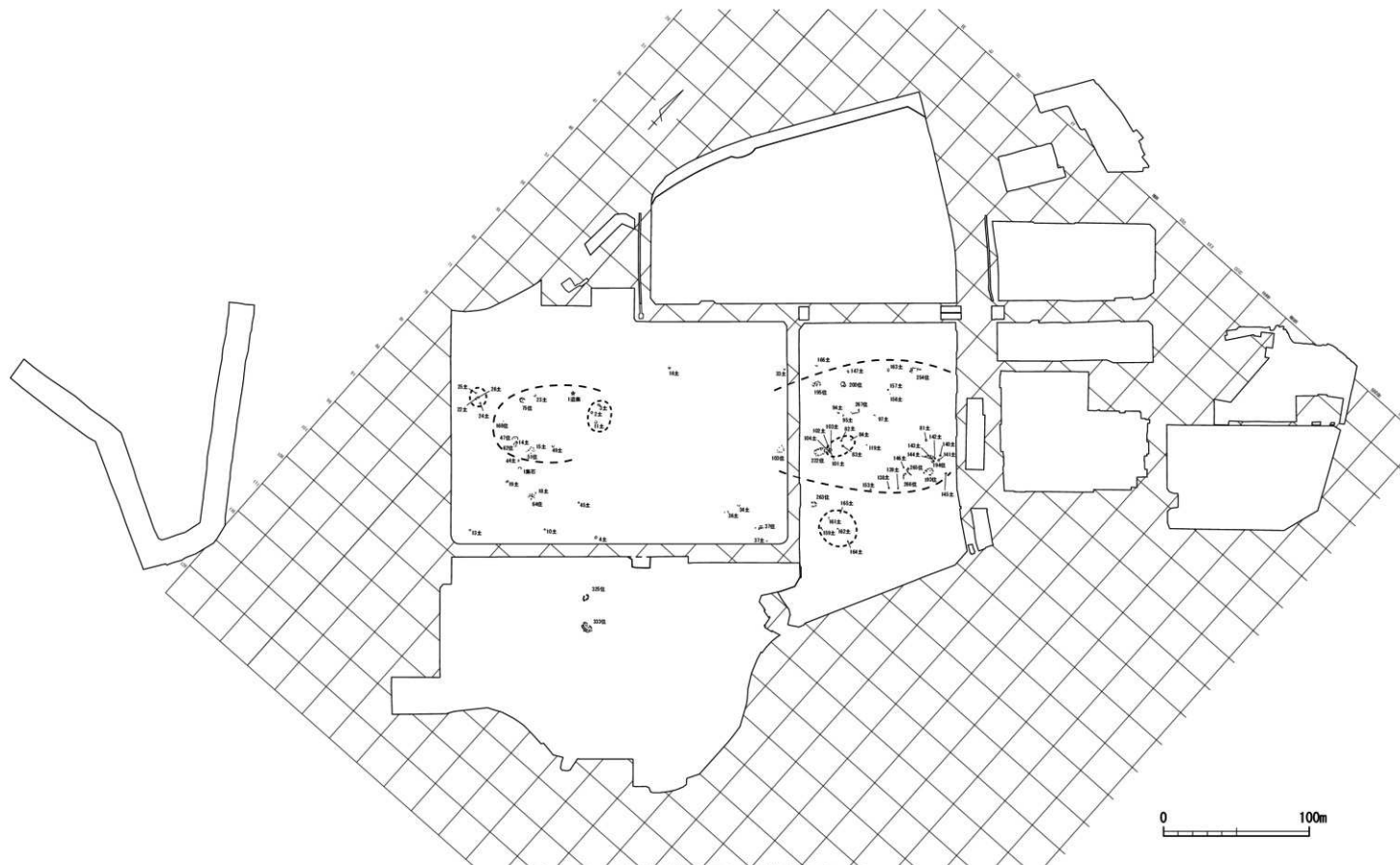
- 1 赤羽上ノ台遺跡の北東部分、旧赤羽台東小学校敷地内の調査（武蔵文化財研究所）においても炉穴が検出されており（同研究所・千葉女史のご教示による）、総数はさらに増える。
- 2 令和5年度に赤羽消防署赤羽台出張所北側都道部分の調査が行われており整理中である。縄文時代後期前葉を主体とした遺構（貝層・土坑・人骨など）が検出されている。



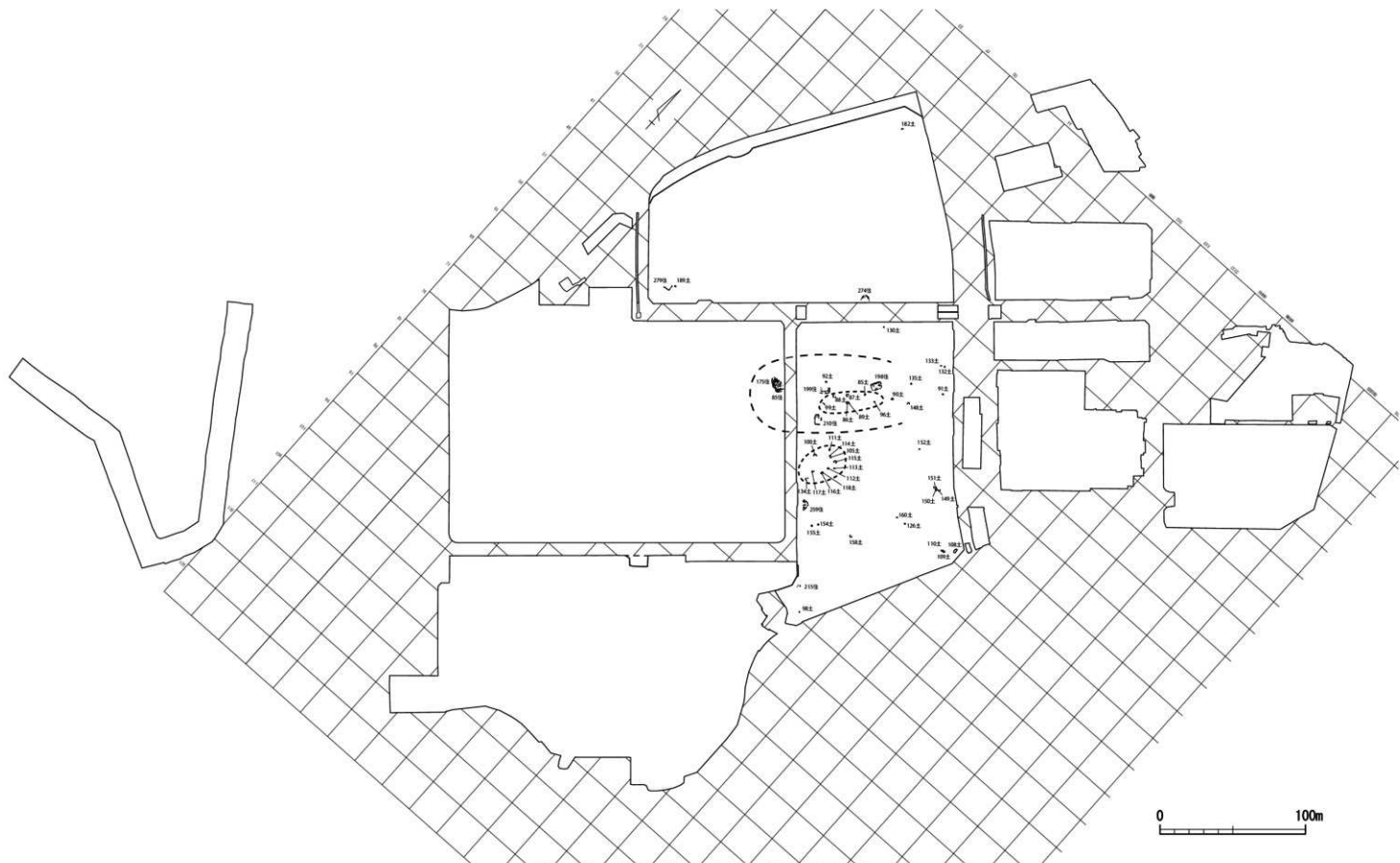
第337図 縄文時代遺構配置図(1) 早期前葉 (1/2500)



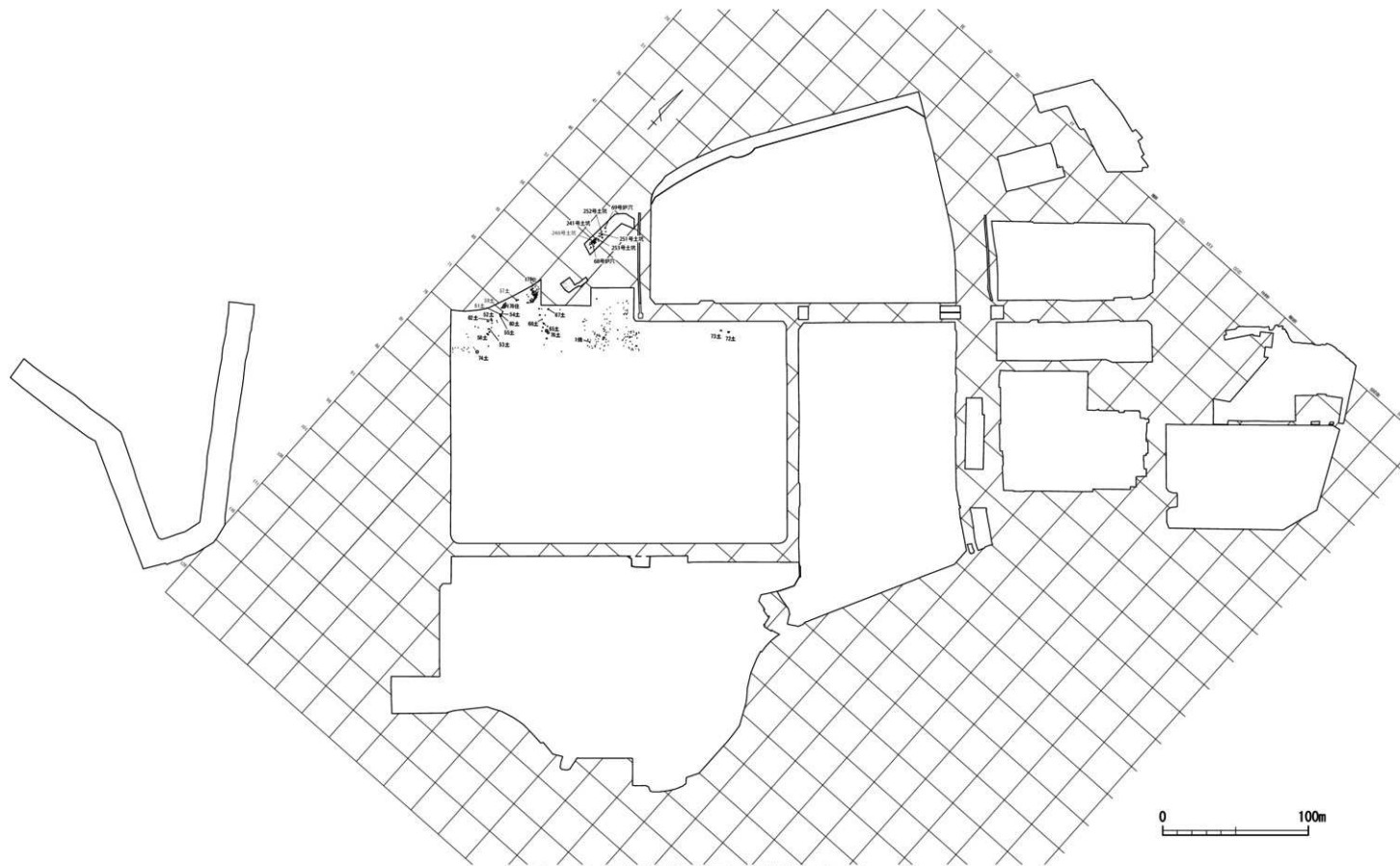
第338図 縄文時代遺構配置図(2) 早期後葉 (1/2500)



第 339 図 縄文時代遺構配置図 (3) 前期初頭 (1/2500)



第 340 図 縄文時代遺構配置図 (4) 前期中葉 (1/2500)



第 341 図 縄文時代選構配置図 (5) 後期中葉 (1/2500)

2 弥生時代

弥生時代中期後半の集落（第343図）

赤羽上ノ台遺跡の今回の調査では中期後半の竪穴住居跡1軒が確認された。道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡ではこの時期の住居跡の確実な例はこれまで1軒ずつが発見されたのにとどまっており、今回の例が加わることによって、わずかながら当該時期の様相が明らかとなった。いずれの住居跡も台地の南東側の縁辺に単独で立地しており、後代の削平等を考慮しても遺構の密度はきわめて低い。

弥生時代後期の集落

道合遺跡の今回の調査では竪穴住居跡17軒と掘立柱建物跡2軒をはじめとした遺構が検出され、道合遺跡でこれまでに発見されている弥生時代後期の集落の南端が明らかとなった。道合遺跡集落の主体となる第Ⅱ次・Ⅲ次調査では竪穴住居跡153軒、掘立柱建物跡8軒が検出されており、これらと合わせると竪穴住居跡170軒、掘立柱建物跡10軒に達する。削平等により煙滅したものを想定すると竪穴住居跡200軒を超える。

今回の調査地点を含めて道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の南東側の台地縁辺には方形周溝墓は認められなかった一方、台地北東側の、道合遺跡集落の北東側に墓域が広がっていた可能性が高まった。方形周溝墓は赤羽上ノ台遺跡第Ⅱ次調査地点で3基、道合遺跡第Ⅴ次調査地点で1基が認められており、今後の遺跡北東側の調査の進展によりさらに検出数が増える可能性がある。なお、道合遺跡の第Ⅴ次調査地点で検出された170号土坑は、縄文時代の陥穴土坑として報告したが（鈴木・飯塚・栗城2016）、ロームブロックに富む暗褐色・褐色シルトからなる覆土や堆積状況から、方形周溝墓の周溝の可能性が高いため、ここで遺構の位置付けを改める。いずれの調査地点も後代の削平等や建物基礎等による攪乱が著しく、本来はこの一帯にさらに複数基の方形周溝墓が存在して墓域を形成していた可能性が高い。

住居跡の構築年代（第328図）

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡においておこなわれた放射性炭素年代測定のうち、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて得られている年代値は次のとおりである。

道合遺跡 203号住居跡（中期後半—宮ノ台中葉）出土炭化材	
2σ 暦年代範囲	166BC-46BC (95.4%)
（武蔵文化財研究所 2016）	
赤羽上ノ台遺跡 SI3（後期～古墳前期）出土炭化材 1（IAAA-153422）	
2σ 暦年代範囲	cal AD69-AD178 (93.2%)
	cal AD189-212 (6.8%)
赤羽上ノ台遺跡 SI3（後期～古墳前期）出土炭化材 3（IAAA-153423）	
2σ 暦年代範囲	cal AD65-174 (96.0%)
	cal AD192-210 (4.0%)
赤羽上ノ台遺跡 SI3（後期～古墳前期）出土炭化材 9（IAAA-153424）	
2σ 暦年代範囲	cal AD125-237 (100%)
赤羽上ノ台遺跡 SI3（後期～古墳前期）出土炭化材 14（IAAA-153425）	

2 の 暦年代範囲 cal AD86-110 (12.7%)
cal AD115-223 (87.3%)
赤羽上ノ台遺跡 SI3 (後期～古墳前期) 出土炭化材 19 (IAAA-153426)

2 の 暦年代範囲 cal AD59-171 (97.1%)
cal AD193-209 (2.9%)

(武蔵文化財研究所 2023)

赤羽上ノ台遺跡 SI1 (中期末～後期初頭) 出土炭化材 No.178 (YU-17411)

2 の 暦年代範囲 cal BC47-cal AD63 (95.4%)

赤羽上ノ台遺跡 SI6 (後期) 出土炭化材 No.64 (YU-17409)

2 の 暦年代範囲 cal AD175-cal AD181 (0.6%)
cal AD203-cal AD257 (70.6%)
cal AD283-cal AD327 (24.3%)

赤羽上ノ台遺跡 SI6 (後期) 出土炭化材 No.72 (YU-17411)

2 の 暦年代範囲 cal AD121-cal AD231 (95.4%)

これらを見ると、弥生時代中期は紀元前 1 世紀 - 紀元前 2 世紀、中期末 - 後期初頭は紀元前 1 世紀～1 世紀、後期は 1 世紀 - 3 世紀前半の値が得られている。それぞれは従来考えられている各時期の年代観(赤塚 2009)の枠内に収まっており、大きく外れるものはない。しかしながら誤差範囲が広く、これらのみをもって土器や集落の変遷を追うに足るには至っていない。こうしたなか、今回の調査では、弥生時代後期後葉の 3 軒の住居跡から出土した炭化材を対象に、放射性炭素年代測定法に基づくウィグルマッチング(古城 1995)をおこない、次の値を得た。

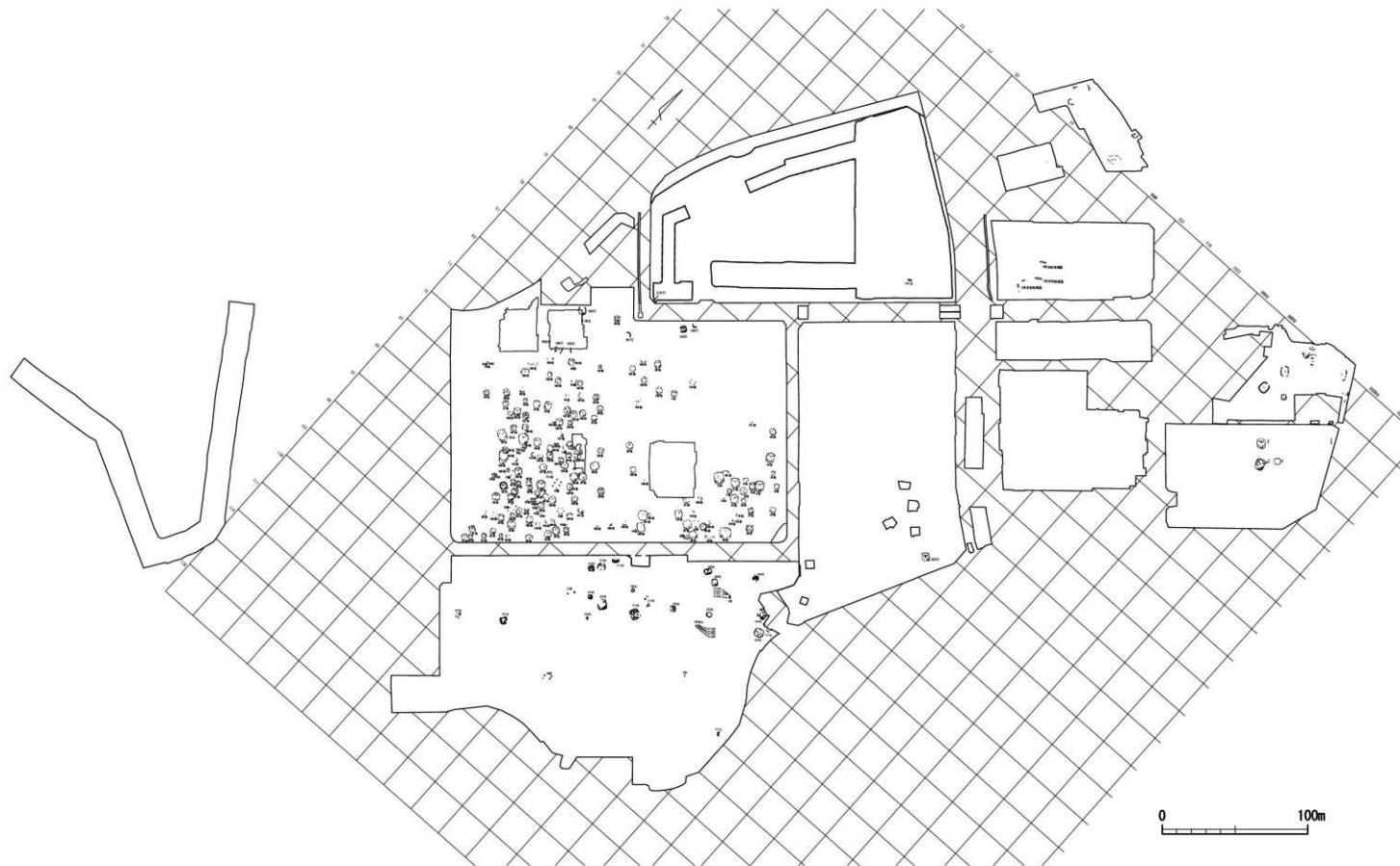
道合遺跡 312 号住居跡 炭化材 No.158
2 の 暦年代範囲 142-223 cal AD (95.45%)
道合遺跡 315 号住居跡 炭化材 No.42
2 の 暦年代範囲 138-220 cal AD (95.45%)
道合遺跡 324 号住居跡 炭化材 No.49
2 の 暦年代範囲 139-225 cal AD (95.45%)

それぞれ 2 世紀中頃から 3 世紀前葉と、よく揃った年代値である。校正曲線上の測定値の位置はほとんど同じ位置にあり、木材の転用の可能性の問題はあるものの、これらの住居が同時期に存在した可能性も指摘し得る。一方、道合遺跡の 298 号住居跡から出土した炭化材(PLD-48484)と、同じ住居から出土した台付甕の内面付着炭化物のそれぞれについて単独の放射性炭素年代測定をおこなったところ、炭化材は 86-93 cal AD (1.62%)、119-226 cal AD (93.62%)、227-228 cal AD (0.21%)、土器の内面付着炭化物は、80-99 cal AD (9.41%) および 108-213 cal AD (86.04%) の値が得られた。いずれも誤差範囲が大きく、同一遺構から出土したにも関わらず、遺構構築年代や廃絶年代を絞り込むには至っていない。今後、同時期を対象とした放射性炭素年代測定をおこなう際には、これまでに多く行われている土器付着炭化物に加え、出土炭化材のウィグルマッチングをおこなうことにより、より詳細な時間軸に基づいた議論が可能になるものと期待される。

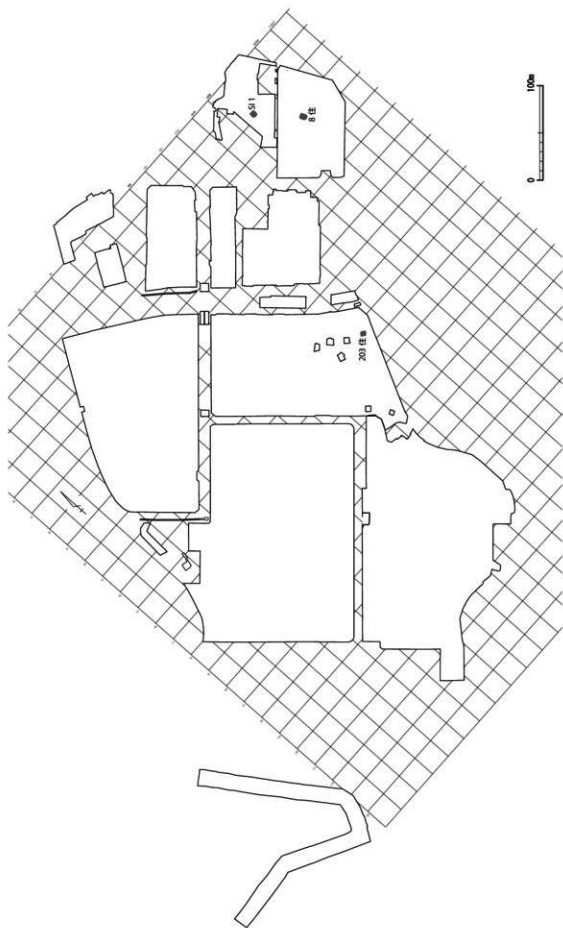
道台遺跡における弥生時代後期の食物

赤羽台地域の遺跡においてはこれまで、松谷（1992）によって赤羽台遺跡の土器付着圧痕の調査がおこなわれており、中期宮ノ台式の土器に靱の圧痕が認められたのをはじめ、弥生中期から古墳時代にかけてのイネの利用を裏付ける結果が得られている。しかしながら、この例以降、当時の食物について検討がおこなわれた例は乏しい。

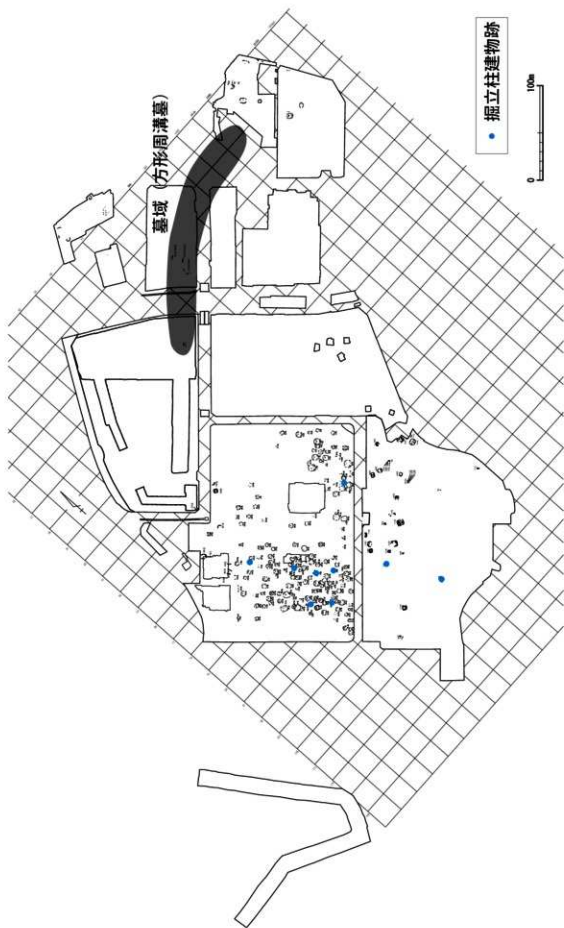
近年、過去の食物を推定する方法として、土器に残存した有機物質、とくに脂質を分析する手法がおこなわれるようになった。道台遺跡の弥生時代後期後葉の堅穴住居跡から出土した土器の胎土と付着炭化物を対象とし、そこに残存する脂質組成をガスクロマトグラフ質量分析法（GC-MS）で測定するとともに、主要な脂肪酸であるパルミチン酸、ステアリン酸の分子レベル炭素同位体組成を分析し、土器で調理された対象物の起源推定を実施した（第V章2 宮田他）。その結果、炭素空素安定同位体組成からは米なども含むC₃植物が調理されていた可能性が、バイオマーカー分析からは陸棲または海棲動物が調理されていた可能性が、それぞれ示された。当該時期の水田や畑は遺跡付近では検出されておらず、また動植物遺体も出土していないため、当時の遺跡居住者の食料についてはほとんど明らかでなかったが、今回の試みで新たな知見が得られた。今後、同種の調査や、土器の残存圧痕の調査なども含めて資料を増加させ、検討する余地がある。



第 342 図 弥生時代遺構配置図 (1) (1/2500)



第 343 図 弥生時代遺構配置図 (2) 中期後半 (1/4000)



第 344 図 弥生時代遺構配置図 (3) 後期後葉 (1/4000)

3 古墳時代

古墳時代前期～中期の遺構・遺物

今回の赤羽上ノ台遺跡の調査では、古墳時代前期～中期に比定される遺構や遺物が認められた。道合遺跡では同時期の土器がわずかに出土したのにとどまり、遺構は確認できなかった。

赤羽上ノ台遺跡 40 号土坑から、複数の高塚が出土した。これらは古墳時代前期（五領式）から和泉式初頭段階に位置付けられる。土坑の一角は削平が著しく、周辺に柱穴等の施設が認められなかったため報告では土坑としたが、住居内貯蔵穴の可能性も排除できない。これまでの赤羽上ノ台遺跡の調査では、今回の調査範囲の西側に隣接する第 V 次調査地点で検出された 2 軒の竪穴住居跡（カマドを伴わない）について、出土炭化材の放射性炭素年代測定に基づき古墳時代中期のものに比定されているが、土器などの遺物に乏しく、時期を絞り込むことは難しい。いずれにせよ古墳時代前期～中期は 2 つの遺跡のいずれにおいても生活痕跡に乏しい。一方、遺跡周辺では、台地西側の沖積低地に宮堀北や豊島馬場、都民ゴルフ場遺跡などで同時期の遺構や遺物が認められており、活動の舞台が沖積低地上に移った模様である。こうしたなか今回の例は遺跡東端の台地縁辺において生活の可能性を示すものとして重要である。

古墳時代後期の集落

古墳時代後期の竪穴住居跡は、道合遺跡では 15 軒、赤羽上ノ台遺跡では 9 軒が確認された。これらを時期別に見ると次のとおりである。

道合遺跡

6 世紀前半	306・309・314・337・338 号
6 世紀後半	294・305 号
6 世紀後半～7 世紀初頭	290 号
7 世紀前半～中葉	285・289・302・326 号
7 世紀中葉～後葉	300・301 号
古墳時代後期	304 号

赤羽上ノ台遺跡

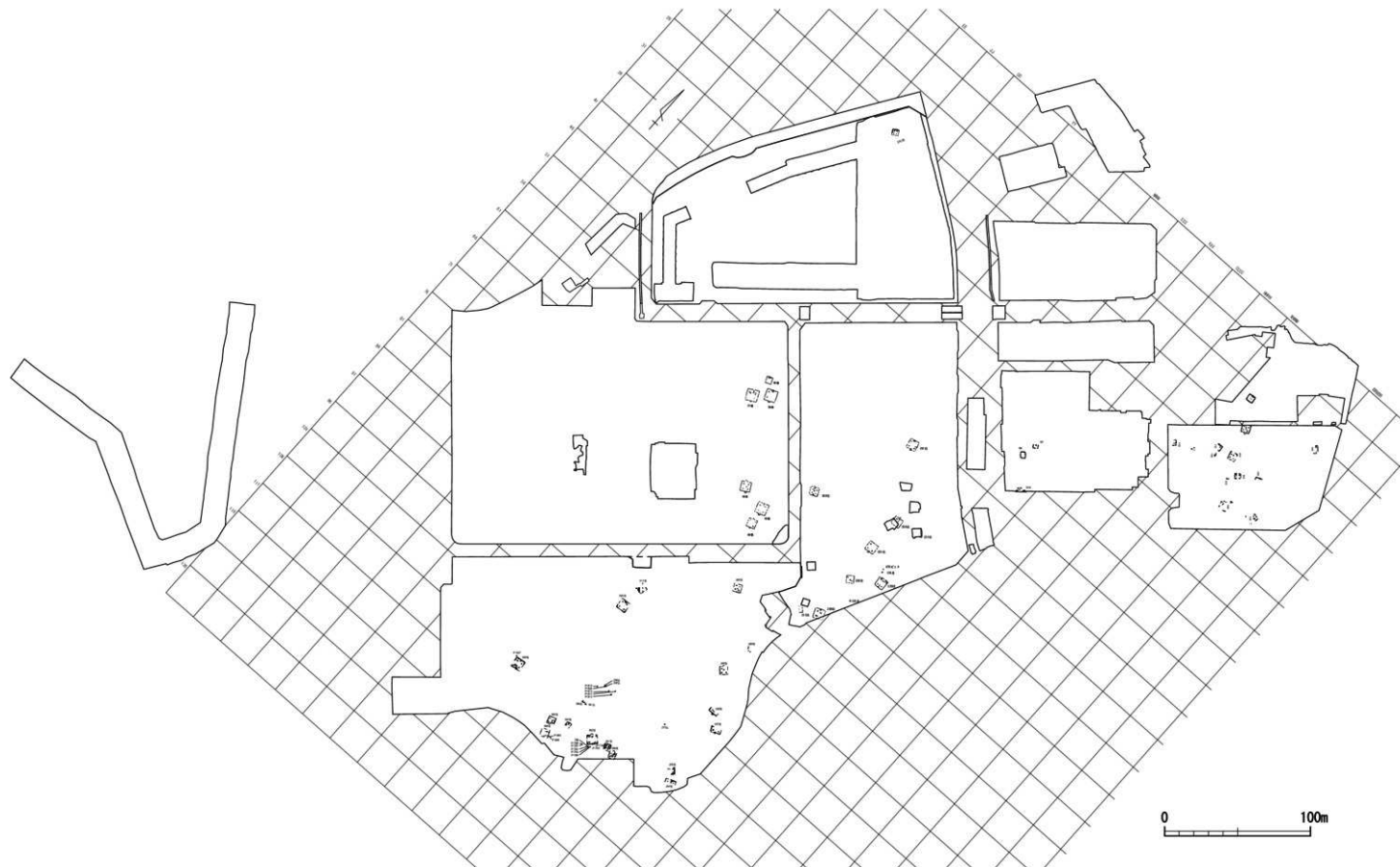
6 世紀前半	16 号
6 世紀後半	13・22・26 号
6 世紀後半～末葉	18 号
6 世紀後半～7 世紀前半	17・21・25 号
7 世紀前半	19 号
古墳時代後期	10 号

これらを含め、これまでの調査で確認されている同時期の竪穴住居跡の分布を第 346 図に示す。

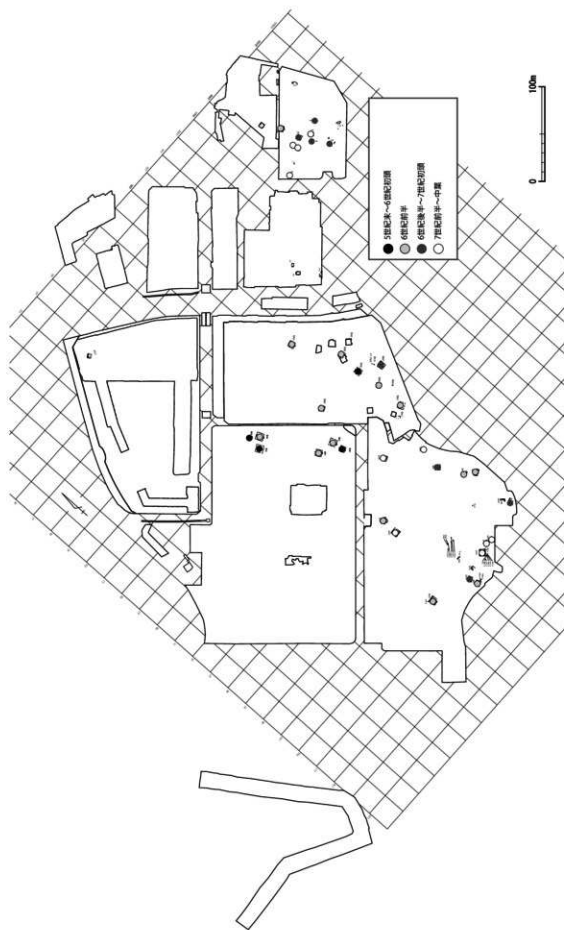
道合遺跡では 5 世紀末～6 世紀初頭から台地東部に集落の形成が認められる。6 世紀前半には赤羽上ノ台遺跡の範囲も含む台地南東側に分布が広がり、また住居軒数も増加する。その後、6 世紀後半から 7 世紀初頭には赤羽上ノ台遺跡の東端と道合遺跡の南端に分布の中心が分かれ、7 世紀中葉には、

台地南東側の縁辺の広範囲にわたって複数のまとまりをもった分布に移る様子が見てとれる。

赤羽台周辺は、古墳時代中期には台地上の遺跡分布も希薄で、規模も小さい。古墳時代後期に入り、赤羽台古墳群などの、小規模な円墳を主体とする古墳群が形成される一方、集落は道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡があるのみである。そのなかで、これら2つの遺跡では規模こそ数軒程度にとどまるものの、大きな断絶なく生活が営まれていたものと見られる。



第 345 図 古墳時代遺構配置図 (1) (1/2500)



第 346 図 古墳時代遺構配置圖 (2) (1/5000)

4 古代

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡を含む赤羽台と、その南側の十条台、上野台は、古代には武蔵国豊島郡の範囲に含まれる。豊島郡衙は7世紀後半の評制下から、上野台に立地する北区御殿前遺跡の一带に置かれ、10世紀前半まで存続する。この時期には郡衙と近い十条台・上野台で大規模な集落が営まれ、郡衙との関わりの深い遺構や遺物も発見されている。

赤羽台周辺では北側の赤羽台遺跡国立王子病院地区で奈良時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されており、平安時代には赤羽台遺跡で集落が継続するのをはじめ、西側の大六天遺跡でも住居跡が検出されている。道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡でもこれまでに同時期の竪穴住居跡が多数、検出されており、古代には継続的に居住域として利用されていた模様である。

今回検出された古代の竪穴住居跡は、道合遺跡で22軒、赤羽上ノ台遺跡で5軒を数える。これらを帰属時期別に見ると次のとおりである。

道合遺跡

8世紀中～後葉	284号
奈良・平安時代	296・303・307・311・317・318号
平安時代	287号
9世紀前半	328号
9世紀前～中葉	310・321・322・336・339・345・346・347号
9世紀中葉	308号
9世紀中～後葉	320号
9世紀後半	329・330号

赤羽上ノ台遺跡

7世紀末葉～8世紀初頭	15号
8世紀前半	28号
9世紀前半	27号
9世紀中葉～後半	23号
9世紀	14号

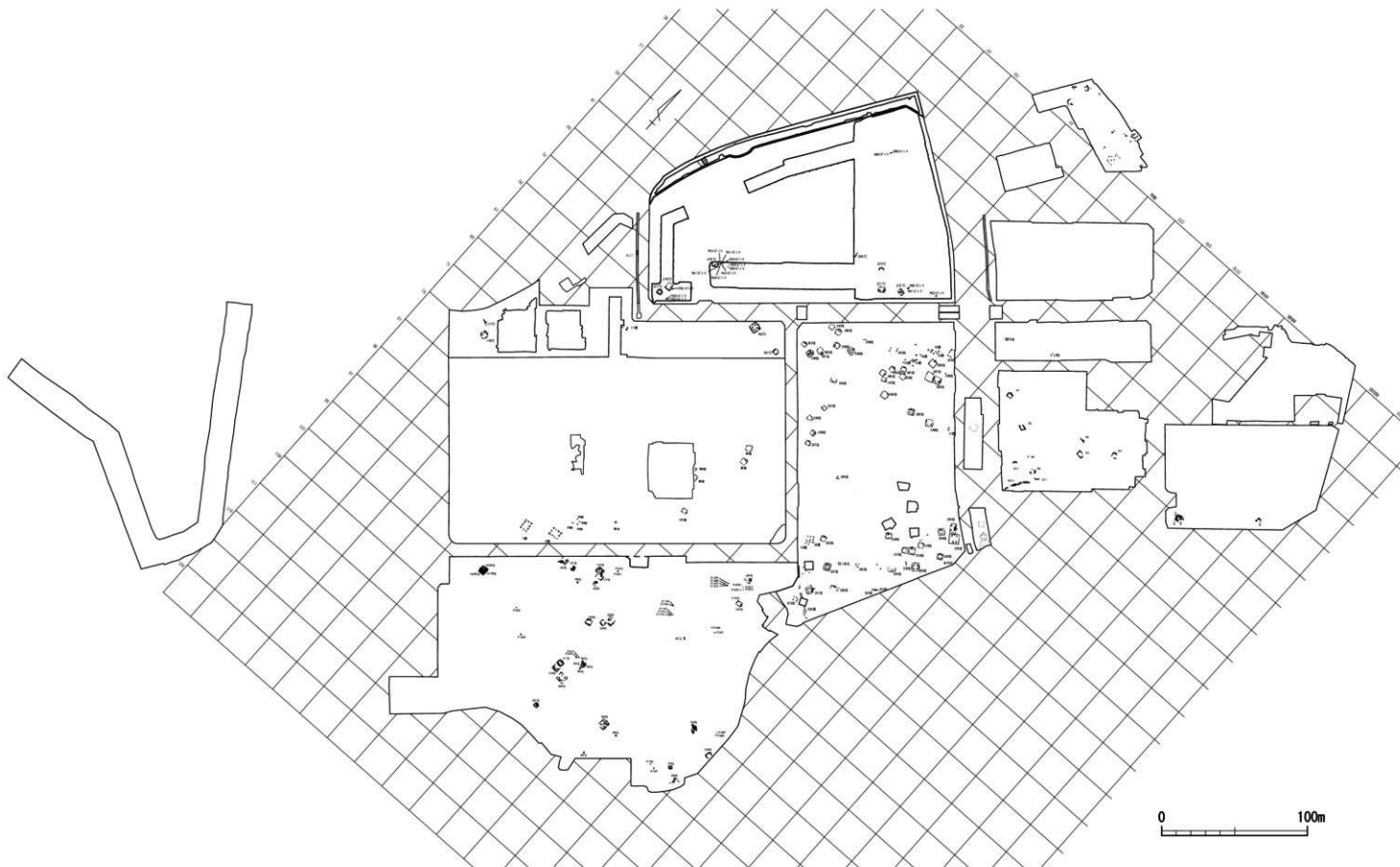
これらを鶴岡(2015「VI調査の成果と課題4古代」『道合遺跡 赤羽上ノ台遺跡』)の時期区分にしたがって次のとおり示した(第348図)。

I期	7世紀第4四半期—8世紀初頭
II期	8世紀第1四半期後半
III期	8世紀第2四半期前半
IV期	8世紀中葉—後半
V期	8世紀後半—末葉
VI期	8世紀末葉—9世紀前半
VII期	9世紀前半—中葉

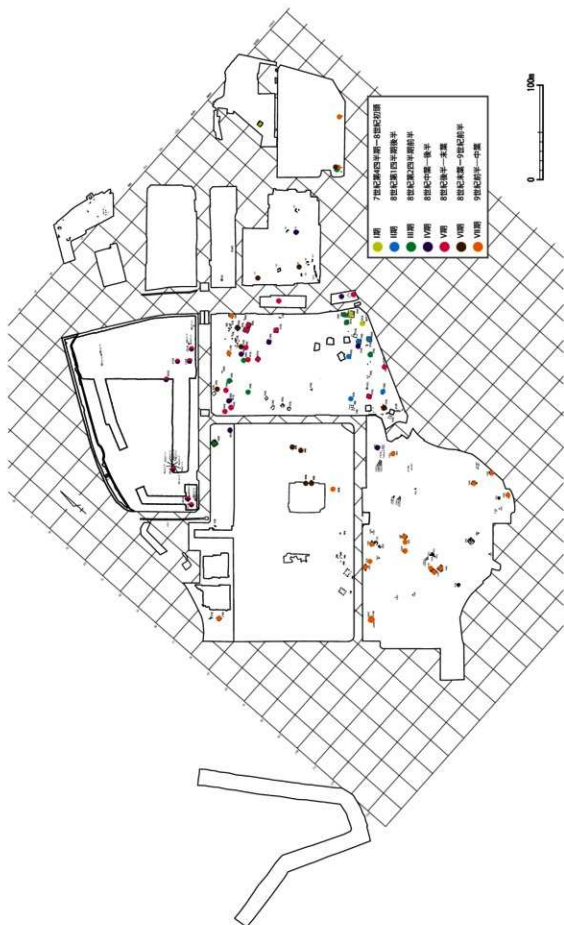
これを見ると、7世紀末～8世紀初頭には、古墳時代後期の傾向を受け継いで道合遺跡の南東側の

崖線付近に分布する。8世紀に入っても同様の分布を示すが、8世紀中葉から北東側に分布を広げ、道合遺跡東側が中心となる。さらに8世紀末から9世紀中・後葉にかけて、南西側の道合遺跡南寄りに分布が移る傾向が見てとれる。赤羽上ノ台遺跡の西側は、道合遺跡の東側と一連の集落の外縁部として位置づけられる。

出土遺物を見ると、須恵器には東金子窯、南比企窯の製品が多く見られ、湖西地域のものもわずかに認められた。この他、道合遺跡322号住居跡の柱穴内から、石帯の一部である巡方が単独で出土した。石帯は律令制下で官人が着装したもので、巡方は複数個が取り付けられるのが本来の姿である。今回は単独での出土で、その位置付けは難しいが、322号住居跡の帰属時期が9世紀前半～中葉と、郡衙の盛期からやや下ることも併せて考えると、当初の用途を離れ、装飾品などとして単独で用いられた可能性がある。



第 347 図 古代遺構配置図 (1) (1/2500)



第 348 図 古代遺構配置図 (2) (1/5000)

5 中世

今回の調査では、道合遺跡から4基の土坑(地下式横穴)が検出されたのが大きな成果である。一方、赤羽上ノ台遺跡では当該期の遺構は確認されず、遺物もごくわずかにとどまった。

地下式横穴の分布を見ると、最北端の283号土坑と中央部の282号土坑との間隔は25m、282号土坑とそのほぼ真東に位置する320号土坑との間隔は25m、282号土坑とその南西側に位置する280号土坑との間隔は7mとなる。地下室と竪坑の両者が調査された280・282・283号土坑のいずれも南東側に竪坑が位置する。地下室部の規模は

280号土坑—270×197cm 長方形

282号土坑—182×222cm 長方形

283号土坑—221×283cm 長方形

となり、やや規模に差がある。

地下式横穴から出土した遺物には次のようなものがあった。

280号土坑 常滑産の甕の肩部、砥石、板碑の破片の可能性ある片岩、垂円礫

282号土坑 漆塗膜片、垂円礫

283号土坑 遺構底部付近に集中する。常滑産の甕、焙烙、砥石、垂円礫多数(被熱したものの、煤が付着したものも若干)

320号土坑 他時代の混入のみ

いずれの遺構からも人骨やそれに類する骨類は出土しなかった。283号土坑の地下室底面付近の覆土は乾式の篩かけ(φ1mm)をおこなったが骨片などの微小遺物は確認されなかった。

これまでの道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の調査においても中世の遺構の検出例はほとんどなく、いずれの調査地点においても陶磁器類が散在している程度であり、当該期の遺跡一帯における人間活動は概して低調なものと見られた。これに対し、八幡谷を挟んで北側の台地北端部では、赤羽台遺跡から鎌倉～南北朝期のものに比定される骨蔵器が発見されたのをはじめとして、地下式横穴や板碑などの葬送・墓制に関わる遺構・遺物が多く認められている。地下式横穴は荒川(旧入間川)に面した北西側の崖線沿い(星美学園地点)と舌状台地の付け根部分(王子病院地点)に分布する。

今回の調査成果に基づくと、北側を八幡谷、南側を亀ヶ池の小支谷に画された舌状台地の南東の付け根付近もまた、葬送に関わる土地として利用されていたことがわかる。

6 近世

今回の道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の調査では、これまでの調査において検出されている溝が遺跡の南東部にも広がっており、また道合遺跡では畑の畝跡もわずかに遺存しているのが確認された。今回の調査地点はこれまでの調査で発見されている旧板橋街道とその南側の徒小径の南側から台地縁辺部にかけての範囲にあたる。溝は畑地の区画としても機能していたものと見られ、溝に区切られた方形～不整形の空間が畑地として利用されていたものと見られる。溝の方向は概ね東西～南北に従っているが、台地縁辺部の地形に沿って湾曲・屈折している。今回の調査では南東側に開けた台地の際まで調査が及び、ここまで溝によって区画されていることが明らかとなった。

遺物はこれらの遺構の内外から、おもに磁器や陶器、土器類が、ほとんどが破片の状態ではずかに出土した。溝跡から出土した遺物の帰属時期は17世紀前半から19世紀代まで広く、遺構の構築年代を絞り込むことは難しい。溝跡の堆積物(覆土)には客土の搬入を想定させる痕跡も認められないことから、当該地点が近世初頭から江戸時代をつうじて畑地として利用されたものと考えられる。

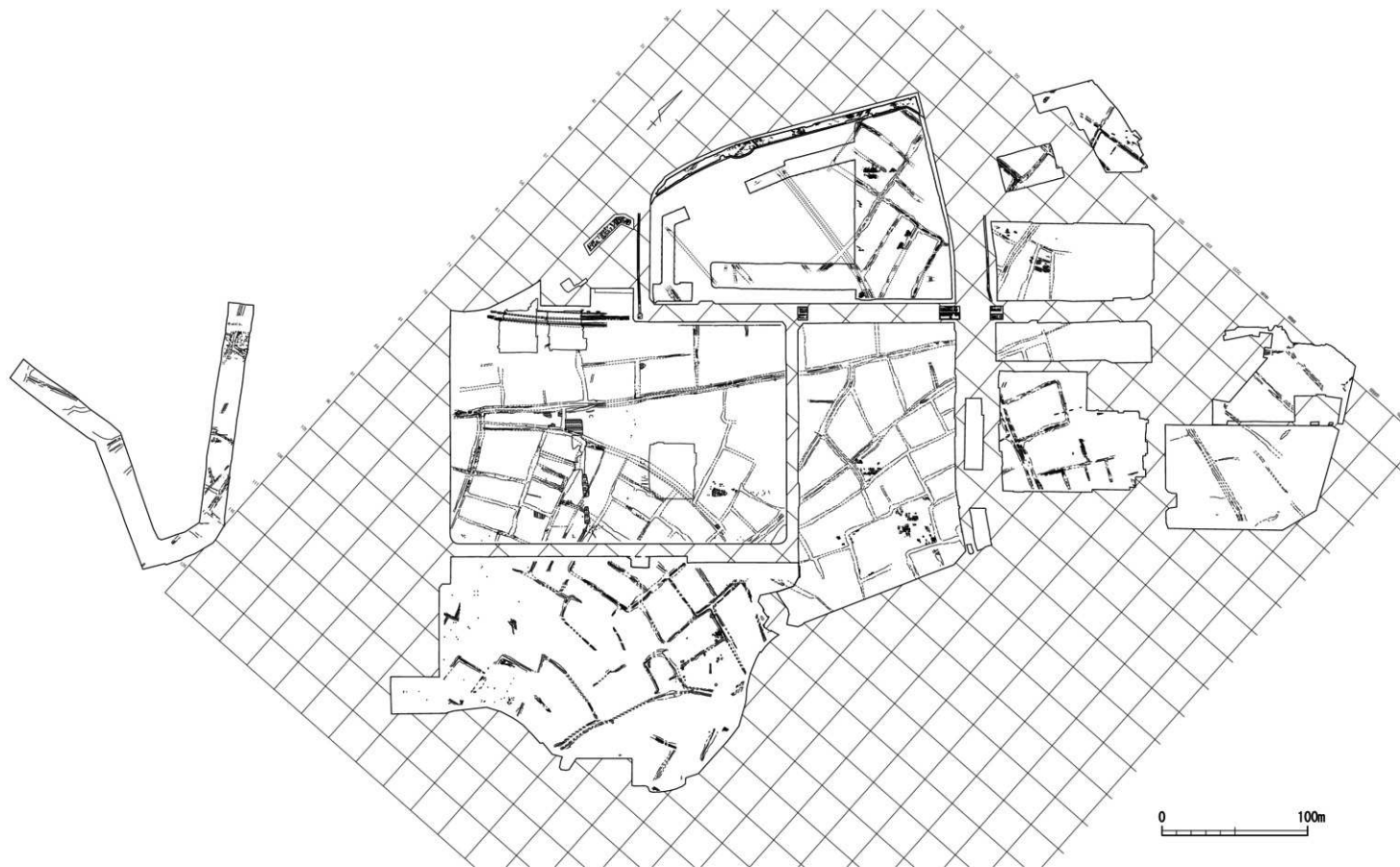
また、調査区西側中央で2箇所の畝跡が確認された。1号畝跡は約10×10mの範囲に8条の掘り込みが北西-南東方向に入るもので、2号畝跡は1号畝跡の南東側に位置し、東西方向に走る7条の掘り込みからなる。

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡の溝跡・畝跡の堆積物の植物珪酸体分析に基づき、近世の赤羽台の台地上における景観と農地利用の様相についての検討がおこなわれた(第V章第3節)。イネ型とネザサ節型、ササ属型、シバ属型の植物珪酸体が広範囲の試料から検出されたことから、台地上にアズマネザサのようなネザサ節やササ類を含む植生の、開けた景観が広がり、そのなかでイネの栽培もおこなわれていたことが推定された。

近世の赤羽台一帯は赤羽根村の範囲に含まれる。正保年間(1644-48)の武蔵田圃簿で17世紀中頃の村高(一村の田畑・屋敷などの総高数)を見ると(『北区史 通史編』表1-18)、赤羽根村は284石46合で、このうち田高が144石957合、畑高が139石89合を占める。畑地の生産高が49%近くに達し、隣接する袋村(124石655合:42%)や稲付村(103石190合:26%)と比較して高い割合を占めている。明治5年の調査に基づく『東京府志』に記載された田畑の反別(面積)を見ると、赤羽村は田方が1296畝11歩(18.07%)に対して畑方が5876畝1歩(81.93%)と大半を占める。同史料では「土性」についても記載があり、赤羽村については「大抵黒土ナリ、北方岩宿宿二接セシ地ハ黒土・真土相混交レリ、西方高地ハ赤黒相交レリ」として耕作適地であるとしている。こうした史料によれば、赤羽根村域の大半を占める台地一帯では17世紀から畑作が盛んにおこなわれていたものと見られる。

耕作された作物について、安政2年3月『武州足立郡川口・豊島郡岩淵両宿組合三十三ヶ村地頭姓名其外書上帳』には大根と瓜、茄子、牛蒡、三ツ葉、空豆、菜の7種類が挙げられており、赤羽根村は大根と瓜、茄子が挙げられている。この他にも北区内ではにんじん、葱、慈姑(くわい)、らっきょう、甘藷、菜種、蓮根、茶、藍、蕎麦、胡麻などの多くの商品作物が生産されていた(『北区史 資料編 近世2』)。当時の巨大消費地の江戸への近さから商品作物の生産が盛んであったことが、史料から推定される。

植物珪酸体分析の結果、これらの作物に由来する珪酸体は検出されなかった一方、道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡のいずれにおいても、イネがすべての試料で認められた。遺跡の立地や溝の覆土の堆積環境からは水田の存在した可能性は低く、畑地での陸稲の耕作の可能性が示唆される。遺構の存続・埋没した時期を限定することは難しいが、近世のある時期において、遺跡地の広い範囲で陸稲耕作がおこなわれていたことが判明した。商品作物以外の、おもに自家消費を目的としたイネの栽培がおこなわれていたものと推定される。



第 349 図 近世遺構配置図 (1/2500)

印刷仕様

表紙	レザック	215kg (四六判)
見返し	上質紙	135kg (四六判)
本文	マットコート紙	90kg (四六判)
写真図版	マットコート紙	90kg (四六判)
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準に適合	
製版線数	150線 (カラー175線)	

本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用

北区

道合遺跡・赤羽上ノ台遺跡

—赤羽台団地(第Ⅳ期)建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

東京都埋蔵文化財センター調査報告 第381集 第1分冊

2024年3月29日 発行

編集・発行 (公財)東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター
東京都多摩市落合一丁目14番2
TEL 042 - 374 - 8044

印刷 株式会社 外為印刷
東京都台東区浅草二丁目28番31号
